リリカルなのは異伝～Ｘ ＤＥＳＴＩＮＹ～第?部 輝光戦記

カガヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのは異伝～Ｘ　ＤＥＳＴＩＮＹ～第？部　輝光戦記

【Ｎコード】
Ｎ５８２２Ｋ

【作者名】
カガヤ

【あらすじ】
クロスロード・ナカジマとノア・ナカジマ

とある研究所にて出会った少年と少女は、数々の出会いや別れを経験する。
全てはかつて交わした約束…「生きる為」

リリカルなのは異伝～Ｘ（クロス）　ＤＥＳＴＩＮＹ（デスティニー）～【交わる運命】
第？部　輝光戦記

始まります。

※　オリジナル主人公、独自設定、キャラ崩壊多数ですが転生物ではなく再構成物ですのでご注意を…

6．22　『はじめに』を大幅修正

はじめに（前書き）

２０１１．６．２２　大幅修正

はじめに

はじめに

本作は魔法少女リリカルなのはシリーズを下地にしていますが
大幅な原作設定・キャラ性格改変を行っています。
下手すればなのは二次創作ではなく限りなくオリジナルに近い
設定とキャラなどを借りた一次創作かも。
オリキャラ名称は自動車や戦闘機のかっこよさそうな名前をつけて
いるだけで
特に意味はありません。

小学生編、中学生＋α編、Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編、ＶｉＶｉｄ＋α編、
Ｆｏｒｃｅ（完結）編の5部作を予定しています。
それぞれにクロスオーバー作品をいれる予定です。

?部でのクロスオーバー予定

平成ガメラシリーズ（怪獣のみ）、地獄先生ぬ～べ～、バイオハザ
ード（設定と一部クリーチャー）

＊最終注意＊
この作品は作者の自己満足やご都合主義展開が満載、以下の事柄を
我慢できない人は廻れ右の方が良いです。

１つ、オリキャラ主人公が途中で最強（3部Ｓｔｓ編でなる予定）
１つ、フラグ多数、ハーレム?状態（鈍感系ではない）
１つ、個別ＥＤ複数予定あり

1つ、基本的にシリアスで所々にギャグやほのぼの、一部にダーク、グロ描写もあり。
1つ、他者様の小説を真似てはいませんが、設定などが同じのがあるかもしれませんがご了承ください。

以上！大まかにはこのようなものです。
あと作者は社会人なので更新は遅めですがご了承ください。

はじめに（後書き）

カガヤ
「うん、これで少しは見やすくなったかな？」

クロス
「あんまり変わらないと思うけどねー」

ノア
「クロスオーバー予定作品減りましたね」

カガヤ
「いやぁ…前書いてた予定作品って？部や？部とかに出るのがほとんどだから紛らわしいと思って（笑）」

クロス、ノア
「「（ノ―＿―；）ハア…」」

魔法・技紹介　†　技　†（前書き）

ここはオリジナルの技を本編登場時に随時紹介していきます。
剣や槍などに魔力や仙気を纏わせて放つものを『技』と分類していきます。
魔法や古代魔法は別項目にしました。
原作と同名の魔法や技はほぼ同じ効果です。
独自解釈がある場合紹介します。

注意：本編ネタバレを含む可能性があるので出来れば本編を読んでからお読みください。

魔法・技紹介 †技†

【クロス・騎士】

※　鏡面剣（きょうめんけん）

ゼストから教わった槍術を武器の違うクロスが剣に応用した剣術の1つ。

エクスカリバー表面に反射魔法を張り相手に向けて撃ち返す。自分以上の魔力が籠った弾や砲撃は撃ち返せないがそらす事は可能。

その際軌道は直線にしかならないが別の魔法を上乗せして誘導や属性付加可能。

※　鏡面乱舞（きょうめんらんぶ）

鏡面剣の連続版、一撃ずつに魔力を剣にそそぎ直すため消費が激しい。

※　閃光裂破（れんこうれっぱ）

剣に光の魔力を集中し相手の魔力を切り裂く技、鏡面剣とは違い魔力弾や魔力効果を消滅させるのが特徴。

上位の魔力には効果はないが、それでも剣撃を強化されている為物理的にも鋭い一撃。

1話ではバルディッシュ・サイズフォームの魔力刃を切り裂き一時的に強制無力化するために使用。

※　光刃斬（こうはざん）

エクスカリバーに高密度の魔力を纏い、すべての物を断つ斬撃

クロスの持つ剣技のうち2番目に威力がある一撃。

しかし、他の剣技と違い、非殺傷設定が出来ない技なので使用には注意が必要。

※　雷天剣（らいてんざん）
エクスカリバーに雷を落とし同時に斬り付ける斬撃
自然の落雷の威力をそのまま斬撃の威力にしているため強力だが狙いを定めるのが難点な為防御やカウンターとして使う事が多い。
光刃斬よりは使い勝手がいいので剣士の必殺技ポジション。
掛け声は『光刃一閃・雷天斬（こうじんいっせん・らいてんざん）』

※　飛翔双翼斬（ひしょうそうよくざん）
飛ぶ斬撃を2発放つ技。
飛距離は短いがエクスカリバーを使わなくても生身で使用可能。
また、炎や雷を纏う事で威力を上げる事が出来る。

※　炎天剣（えんてんけん）
エクスカリバーに炎を圧縮させ斬りつける斬撃
雷天剣と似ているが、こっちは斬撃そのものの威力より
炎属性の斬撃という点に重点を置いているため威力は雷天剣の方が上。

【クロス・闘士】

※　エアブリット
クイントから学んだシューティングアーツの1つ、素手で戦う時の技。
当然クイントも使用可能。
魔力で強化・加速させた拳を直接当てるのではなく
加速された拳圧によって圧縮された空気の塊をぶつける空拳
怪我をさせずに気絶させるのが目的だが

クイントが放つとコンクリートすら穴を開けるほどになる…

※　クロス・ナックル　●クイントとの合体技
敵を挟むように立ち、同時に拳を叩きこむ合体技。
本編では不発に終わったが拳を上下もしくは左右から同じ箇所にぶつける事で
敵の内部で2発分の衝撃が増幅しながらかけめぐり、威力を倍増させる。
2人の息と威力が合っていれば打撃技ならなんでも使用可能。
なお、クロスはこの技名に強く抗議したが…クイントは面白がって名前を変えなかった。

※　サイクロンアッパー
拳に風の渦を纏い、アッパーを繰り出す技。
シューティングアーツの一種でリボルバーナックルのスピナーを高速回転させて
威力を高めた拳を出すのが本来の技だが、クロスは風の渦を纏う事で代用した。

※　シェルブリット
両手に付いたジェットノズルで拳を銃弾並の速さに加速させた正拳突き。
クロス流シューティングアーツの基本となる技。

※　シェルブリットバースト
中・遠距離タイプのシェルブリット。
拳型の仙気弾もしくは魔力弾を放つ、着弾すると大爆発する。
発射された拳弾はある程度形や軌道を操作可能。

※　ストライク・カウンター

相手の攻撃の流れに身を任せ攻撃が止んだ瞬間に斬撃や打撃を放つカウンター。

※　ラディアンスブリット
闘士最強の技。
両手に仙気を集中させ、相手の内部に叩きこむ。
相手は内側から光の奔流を浴び、悪霊など光に弱い敵は内部崩壊する。
他の技と違い、非殺傷設定が出来ないのが弱み。
掛け声は『天駆一撃（てんくいちげき）・ラディアンスブリット』

【クロス・銃士】

※　メテオザッパー
ショットガンモード『ヒュドラ』で放つ射撃技。
高威力高密度の仙気弾を十数発同時散弾状に放つ。
通常のショットガンと違い、距離が離れると威力が落ちる事はない。
ある程度コントロール可能、銃士最大の威力を持つ必殺技。
掛け声は『破邪天昇（はじゃてんしょう）・メテオザッパー』

※　デルタファングシュート
３つの標的を一度に撃つ射撃魔法、通常弾よりも威力や弾速が上で現在のクロスが撃てる射撃魔法では最速の射撃。
１つの標的にも狙えて、その場合は三方向からの同時攻撃となる。
射撃魔法だが、スナイパーライフルモード『ユニコーン』でしか使えない為、技に分類。

【ゼスト】

※　疾空突覇（しっくうとっぱ）
閃光裂破と同じく相手の魔力を突き崩す技
結界にも有効、技としては閃光裂破と同程度だが
経験などの違いからクロスの閃光裂破よりも数段威力が上。

※　絶炎衝（ぜつえんしょう）
圧縮した炎を槍に纏い放つ技。
近距離と遠距離に使い分ける事が出来る。

※　猛火絶炎衝（もうかぜつえんしょう）
フルドライブで使用可能になる、絶炎衝の強化版。
炎を纏い巨大化した槍ではなつ一撃。

※　鳳炎爆火斬（ほうえんばっかざん）
ゼストのフルドライブ最強の攻撃。
全身を炎で包み、火の鳥となって相手に突撃し焼き尽くす。
掛け声は『翔破蓮獄（しょうはれんごく）・鳳炎爆火斬』

【クイント】
※　ツインナックルバンカー
原作でギンガが使用したナックルバンカーを両手で放った技。
当然、威力も増加する。

※　リボルバー・ゲイル・キャノン
フルドライブで使用出来るシューティングアーツの派生技。
リボルバーキャノンに風陣によって風を纏う事で相手の防御を貫く
追加効果が付与する。
その効果は高い防御性能を誇るEクロスの仙気の衣すら貫くほど。

※　ハリケーンダンサー
※　ラストクラッシュ
フルドライブで使用できるシューティングアーツの派生技。
風陣とデュエルキャリバーのノズルとリボルバーナックルのスピナーを最大出力にする事で
まるで嵐のような連撃を行う事が出来る。
ノアの補助魔法の効果もあり、小型の台風のような襲撃となった。
そして、とどめの一撃として全魔力を籠めた一撃がラストクラッシュ。

※　リボルバーマキシマムバースト
フルドライブで使用できる、クイントの最強攻撃。
両手のリボルバーをそれぞれ逆回転させ２つの渦を発生させ
両手を合わせた時に１つの巨大な竜巻となり、あらゆるものを引き裂く。

【フェイト】

※　ソニックレイダー
※　フィニッシュブレイク　使用者：フェイト
ソニックフォームとザンバーフォームの合わせ技。
相手の周囲を飛び回りすれ違いざまに連続で斬りつける。
ノアの補助魔法の効果もあり、眼にも止まらぬ音速に近い斬撃になった。
速度が最高速となり音速をも超えた速さで斬りつけるのがフィニッシュブレイク。

【レギナス】

※　牙狼一進（がろういっしん）

レギナスの槍の柄にあるノズルから魔力をロケットのように最大噴射させ敵に向けて突進する技。

ラケーテンハンマーの槍版のようなもの。

※　牙狼百進（がろうひゃくしん）

牙狼一進の強化版で、文字通り連続して突き出す。

※　飛空突閃（ひくうとっせん）

槍を高速で振り回し勢いを乗せた突きで発生する衝撃波を相手にぶつける技。

魔力を上乗せしているので威力を維持したまま飛距離を伸ばす事が出来る。

※　幻槍演武（げんそうえんぶ）

幻術と高速移動の残像を使い分身しているように見せる技。

幻術と残像の両方を使っている為見分けがつきにくい。

【シグナム】

※　飛龍翔刃陣（ひりゅうしょうはじん）

シュランゲフォームで放つ防御技。

連結刃を自分の周りに高速で回転させることで近付く相手を弾き飛ばしたり

相手の射撃や砲撃を防ぐ事が出来る。シュランゲバイセンとは対の技。

【その他・敵】

※　ファントムブレード　使用者：アジーン
アジーンの両手から伸びた2本のブレードを交差させ斬る技
2本のブレードは重なる事で互いに共鳴し威力があがる。
エクスカリバーが完全に直っていない事もあり、光刃斬を剣ごと粉々に砕いた。

※　クラッシュヒート　使用者：ドヴァー
燃える手甲で相手を殴る打撃技。
殴ると同時に爆発もする為、リボルバーナックルがボロボロになった。

魔法・技紹介　†　魔法　†（前書き）

ここはオリジナルの魔法を紹介します。
剣などに魔力を纏わせて発動する魔法などは別項目にしました。
なお、ミッド式やベルカ式など分類は抜きとしました。
ミッド、ベルカ混合と思っていただければと・・・
手抜きで済みません・・・

原作と同名の魔法や技はほぼ同じ効果です。
独自解釈がある場合紹介します。

注意：本編ネタバレを含む可能性があるので出来れば本編を読んでからお読みください。

魔法・技紹介　†　魔法　†

【クロス、ノア使用】

以下の魔法は仙気でも発動可能だがアルガス魔法ではない。
仙気で発動すると効果が倍増する。

※　エクスプロージョン・シェル
ホーミング・シェルと同様の魔法だがこちらは誘導属性を付加させるのではなく
任意のタイミングで爆発させる特性を付加する魔法。
「ブレイク」の一言でどれほど離れていようともシェルが覆っている限り爆発する。

※　ホーミング・シェル
魔力弾をさらに自身の魔力で覆い誘導弾へと変化させる魔法。
ただし砲撃へは効かない。
用途としては味方が放った威力だけに特化した魔力弾に誘導属性を付加させたり
鏡面剣で跳ね返した魔力弾を操るなどサポート魔法である。

※　シャイン・ホイール
車輪状の魔力弾で今のクロスでは1度に6つまで生成可能
相手のバリアなどの防御魔法を削り取る防御破壊魔法
バリアジャケットなど防護服も切り裂けるが
デバイスや人体など物理攻撃力は調整可能である

※　ソニック・パースト
対象へ瞬間移動にも近い速度で接近する魔法。

1話ではフェイトがバリア維持に意識を集中した瞬間に
上空から一気に背後へと移動した。

※　ジェット・ウォーター
攻撃力はない消火用の水属性魔法。掌から水流を出し、炎を消すのに使用する。
ただ魔力次第では水圧の高い水流を生み出せる為攻撃にも転用できる。
本来は救助隊の初級用。

・以下の2つの魔法は本来アルガス魔法だが第3覚醒までは仙気ではなく魔力を使って
　無理やり発動させたのでこちらに分類。

※　スパイラル・キャノン
クロスとノアの魔力を合わせて同時に放つ強力な螺旋状の魔力弾
貫通力と発動時間に優れた「スパイラル・レーザー」もある。
ただ魔力を放っただけなので効率は非常に悪い。

※　ハイブリットシャインブレイカー
クロスとノアの魔力を圧縮し融合させ解き放つ「未完成の」集束砲撃魔法。
スパイラルレーザーとの違いは「2つ同時に螺旋状に放つ」か
「2つの魔力を1つに合わせて放つ」かの違い。

【プレシア】

※　サンダーウィップ
その名の通り雷の鞭、相手に当たるまで何度でも攻撃してくる。

本来は一度発動したら自動で追尾するのがだが
ジュエルシードの後押しがあったとはいえプレシアは数本もの鞭を
全て手動で操作した。

※　ライジング・ランサー
※　ライジング・ランサー　ブレイクシュート
フェイトのフォトンランサーに電撃の属性を追加し強化したプレシア専用魔法
と言うより元々フォトンランサーがこの魔法を元に作られたもの。
対象に当たると拡散し高出力の電撃を浴びせるのが「ブレイクシュート」になる。
クロスを殺すのが目的ではないため、本編では多少手加減をしてあの威力。

※　ラストスペルブレイカー
プレシアの最後の切り札、全ての魔力を限界以上自分の杖に集めて解き放つ、自爆技とも言える集束砲撃魔法。
使用後は魔力がなくなり飛行も出来なくなる「最後の手段」
１章なのはのスターライトブレイカーよりも数段威力は上。
ただし、威力に上限があるこちらより、周囲の魔力を集束するＳＬＢの方が
状況によっては上。

※　サンダーレイジ・スフィアブレイク
３章以降で使用可能になった魔法。
雷の球体で相手を包み、周囲３６０。から雷を撃ちつけ
最後に球体ごと爆発させる魔法。

※　バイパーウィップ

ケラウノスから3本の雷の鞭を蛇のように相手に放ち拘束する魔法。
闇の管制人格もすぐには脱出出来ないほど頑丈。

※　サンダープレッシャー
特大の雷をレーザー状にして相手の上空から放つ魔法。
持続性があり、相手の動きを封じる効果もある。

※　真・ラストスペルブレイカー
3章以降で使用可能になった魔法。
新デバイスのおかげで以前のブレイカーよりも魔力効率と威力が上がり
代わりに自らの魔力を最低限残す事が出来るようになった。

【メガーヌ】

※　クイック・ダガー
原作でルーテシアが使っていた「トーデス・ドルヒ」と基本的には同じ
こちらの方が弾数、弾速は上。ただし威力は若干下。

※　シュートバレット・スクエア
目的の四方八方から弾幕を浴びせる射撃魔法。
威力よりも弾速と弾幕の密度を優先させている為
標的の撃墜ではなく足止めに使用する。

※　リバースアンカー
相手の足元に魔法陣を出現させ、いくつもの錨を召喚し束縛する無機物召喚魔法。
一度召喚されるとどこまでも標的を追いかけ捕縛する。

特定の位置に近付いた標的に自動発動するタイプと
任意の場所に召喚するタイプがある。

※　ミラージュボルケーノ
相手の足元からマグマが噴出したかのような幻を見せる幻術魔法。
普通の幻術と違うのは相手の精神に本物のマグマを浴びせられたような錯覚を起こさせる。
また、氷山に閉じ込められた錯覚を起こさせるミラージュアイスバーグなど
ミラージュ○○という風に何種類か存在する。

※　牙狼召喚（がろうしょうかん）
※　天隼召喚（てんしゅんしょうかん）
どちらも召喚魔法で、牙狼は複数の銀色の狼を召喚する、陸戦召喚魔法。
天隼は巨大な隼を召喚し自分や仲間を乗せて運ぶ、空戦召喚魔法。

※　オーラチャージ
味方の魔力を増幅させるベルカ式のインクリースタイプの補助魔法。
メガーヌが既存の魔法を効率的にさせるために独自で編み出した。

※　フリーズスパイカー
フルドライブで使用可能になる召喚魔法。
相手の地面から巨大な氷の杭を召喚、突き刺す。
刺された部分から瞬時に凍りついていく。

※　水帝白天王
メガーヌの究極召喚『白天王』にフルドライブで「氷水」の属性を付与した白天王。
羽や外骨格の一部に水と氷を現す色へと変化している。

水系と氷系の砲撃と腹部の水晶体から放つ特大の魔力砲が武器。
詠唱は『白き者よ、煌めく氷水と共に我の声に応えよ、究極召喚・水帝白天王』

【ティーダ】

※　クロスファイアシュート・セカンドシフト
クロスファイアのバリエーション。
対象を中心に多数のスフィアが出現し、高速で回転しながら攻撃するタイプ。
多大な演算処理が必要な為、通常の魔導師では習得は難しい。
スフィアに触れても爆発を起こす為、回避よりも防御で対処するのが正しい。

※　ライジングコメット
ティーダがフルドライブで放つ最強の砲撃魔法。
頭上に巨大な雷雲を作り、自身の魔力弾を撃ち込む事でチャージし相手へと極大の砲弾を作り放つ雷の彗星。
掛け声は『雷砲爆撃（らいほうばくげき）・ライジングコメット』

【その他・味方】

※　ホワイトエリア　使用者：クロノ
デュランダルをリーゼ姉妹から譲り受けた事で使用可能になった空間魔法。
エターナルコフィンよりも凍結範囲を限定した空間凍結魔法

※　ディスペルスクリュー　使用者：クイント
フルドライブ専用魔法。リボルバーを高速で回転させ、尚且つ

風陣によって魔力弾や仙気弾を弾く渦を発生させる魔法。
ノアの補助があったとはいえ、Ｅクロスの仙気を具現化させた槍を簡単に貫くほどの威力。

※　マテリアルチャージ　使用者：複数
リーゼ姉妹以外にも使用可能で、自身の魔力を「無色」にして相手に与える事が出来る。
原作一期でレイジングハートがバルデッシュにパワーチャージで魔力を分けたが
ただ魔力を与えるのではなく「無色の魔力」にする事で魔力が効率よく相手に流れる。

※　リフレックス　使用者：レギナス
槍に付いた鏡の力であらゆる魔法を反射する防御魔法。
ＡＡＡレベルの魔法であれば完全に反射出来る。

【その他・敵】

※　パームバスター
※　スーパーバスター　使用者：トリー
トリーが掌から放つ射撃魔法がパームバスター（無言で使用）
両掌に魔力を合わせて放つ砲撃魔法がスーパーバスター。

魔法・技紹介　†　古代魔法（アルガス式魔法）　†（前書き）

ここではクロスのデバイス「太極の書」に書かれていた古代魔法を載せます。
正式名称が出てきたのでタイトル名変えました。

注意：本編ネタバレを含む可能性があるので出来れば本編を読んでからお読みください。。

魔法・技紹介　†　古代魔法（アルガス式魔法）　†

【使用者：クロス、ノア】
アルハザードで使用されていた魔法で、正式名称はまだ分からなかったが
2章で『アルガス式魔法』と判明。
太極の書にその全てが書かれているが最初は厳重な封印がされていてクロスはほんのわずかしか使用する事が出来なかったが
第3の封印が解かれた事で6割ほど使用可能になった。
な本来の魔法名は現在では表記出来ない名前だったが自動的に現代風に翻訳され発動する。
しかし、以前は不十分な知識の元での翻訳・発動だった為
本来の威力や効果が発揮されていなかった事が判明。
2章より真名での発動が可能となった。
また、初級魔法以外は使用者の体に紋章が浮かび上がるのが特徴。
使用する魔法によって紋章の浮かぶ部位も変わる

※　仙気
アルガス式魔法はミッドやベルカとは違い仙気と呼ばれる独特の魔力を使用する。
アルハザードでは仙気のみ持つ者と魔力を仙気へと変換させる者の両方がいた。
クロスの場合太極の書で普通の魔力から仙気へと変換されている。

※　ソウルチェンジユニゾン
本来ユニゾンデバイスであるノアにクロスがユニゾンする変則ユニゾン。
膨大な魔力を扱う身体になる為にノアの身体が大きくなるが、これはノアの未来の姿。

デバイスはグローブ型の『ミラノール』を引き続き使用する。
攻撃力、防御力、スピード、魔力、その他全ての能力がユニゾン中のクロスをも上回る。
砲撃や射撃魔法は威力以上に魔力消費が上がる為に実質使用不能だが広範囲魔法や儀式魔法は少ない魔力で発動可能になる。
背中に氷の魔力変換素質『氷結』で出来た妖精のような羽がはえ全身から氷結の銀粉を撒き散らしながら攻撃するので敵は近付いただけでじわじわと氷漬けになる。
もっとも、これはノアが意識して出している物ではなく自動で出てしまう為
近くにいる味方も氷漬けにしてしまうという難点もある。
魔力消費が激しく最大１０分しかこの姿になれない、１０分すぎるか魔力が切れると
強制的にユニゾンが解除され、以後しばらくはノアはユニゾンが出来ず、魔法も使用不可になる。

ただし、あくまで魔力が切れるのが１０分なため途中で魔力を補充すれば…

【攻撃系】
※　業火跳躍（真名：フレイム・ギア）
次元の離れた場所でも「視た場所」に炎を出す跳躍魔法。
体力と仙気を激しく消費するので連射は不可能。
１章時にクロスが使えるものとしては最上級である。
紋章の現れる場所は眼の周り。

※　プリズム・ノヴァ
２章で新たに使用可能になった砲撃魔法。
光の仙気を手に現れた紋章で高密度に圧縮して放つ。

威力としてはディバインバスターを上回り、消耗は激しくなるがある程度の連射も可能。

※　プリズム・クラッカー
2章で新たに使用可能になった射撃魔法。
ディバインシューターのように誘導制御も可能だが、ある程度の自動追尾能力があり
壁など無機物にあたると反射することで速度があがる。

※　ガイアストリーム
クロス、ノアどちらとも単体で使える魔法、ノアが使用した方が威力が上
地面を風の渦で巻き上げ周囲にいる敵を吹き飛ばす魔法。

※　F・B・A（ファイアー・ブースト・アタック）
全身を炎の球と化し体当たりする魔法。

※　プリズム・アロー
プリズムクラッカーとは違い誘導性能はない直線的な射撃魔法。
誘導がない分威力や弾数、弾速はこちらが上。

※　フレイムストーム
クロスの魔力変換資質『炎熱』とノアの魔力変換資質『風陣』を合わせた魔法。
周囲に炎の竜巻を発生させる。

※　アイスエッジ
※　アイスエッジ・フォーソード（ノアのみ）
手や足に氷の刃を発生させる魔法。手のみ、足のみだとクロスも使えるが

手足に合計４本発生させる、フォーソードはソウルユニゾンしたノアだけ使用可能。

※　アクアゲージ
水の檻に相手を閉じ込める魔法。
水を弾こうとも、どこまでも水が纏わりついて脱出を困難にする。

※　マーメイド・スプラッシュ（ノアのみ）
相手の足元から激流を昇るように発生させる魔法。
本来は水圧で相手を押しつぶすが、他の凍結系魔法の効果を倍増させるためにも使用する。
通常状態のノアでも効果範囲は狭いが使用可能。

※　真・ハイブリットシャインブレイカー
クロスとノア、２人の仙気を極限まで高め１つにして放つアルガス式集束魔法。
空気中の魔力をも仙気に変えて取りこみ威力を高める事が出来る。
スターライトのように周囲に意図的に魔力をばらまかなくても発動可能。
当然だが、ユニゾン中でなければ使う事は出来ない。
威力はスターライトブレイカーｅｘ以上でクロスとノアの最大最強魔法。
掛け声は『極光爆裂・ハイブリットシャインブレイカー』

余談：右手にクロスの仙気を集めた青い仙気弾、左手にノアの仙気を集めた青い仙気弾を作り
両手首を合わせて更に周囲の魔力を変換させた仙気も合わせて、右腰付近に構えて放つ。
超サ●ヤ人４●空の１０倍か●はめ波（笑）

【防御系】

※　防御結界魔法（真名なし）
オートアーマー数体による自爆攻撃からなのはを守るために使用。
オーバーSランク級の威力に耐え、自身だけでなく周囲にドーム状の結界を張る。
魔力や体力の消費量は耐えた威力による。
正確には魔法ではなく紋章の効果で防御しているので真名はない。
クロスはこの防御の為だけにといってもいいほど体力を日ごろ鍛えている。

※　アルガスアーマー
ミッドチルダはバリアジャケット、ベルカは甲冑、アルガスはアルガスアーマー。
今までクロスはバリアジャケットを着けていたが
本来ミットチルダ式の防御魔法であるバリアジャケットに
アルガス式の魔法で補助をしては効果が減少する。
例）
アルガスアーマーに紋章を浮かばせて防御力を上げた場合と
バリアジャケットに紋章を浮かばせて防御力を上げたのでは効果がかなり違う。

【補助・その他】

※　跳躍魔法（真名：ギア）
次元や空間の違う場所へと自身や物を転送したり他の魔法を飛ばす古代魔法。
転送ポートや他の転移魔法よりも正確にそして早く飛ばす事が出来る。
ただ、人や物を飛ばす時は「ギア」これは初級の部類なので体に紋

章は現れない。
魔法を飛ばすときは「〇〇ギア」などとなる。

※　パワードアーム
手に密度の高い仙気を纏う事で防御力と純粋な筋力をあげる補助魔法。

※　ソニックスピード
自身の飛行速度だけでなく反応速度などあらゆる速度をあげる補助魔法。
だが持続時間が短い。

※　精神同調（真名：メンタル・ダイバー）
他者の精神と同調し深層心理へと溶け込む魔法。
操られている人の精神を解放したり、呪いの正体を暴くときに使うものだが
使用中はクロスが無防備になるので戦闘中には向かない。
紋章は額を中心に現れる。

※　収納魔法
アルガス式では珍しく特に決まった名前がない。
自分だけの次元空間を作り出しそこへ物を出し入れるする魔法。
生物以外ではなんでも収納が出来、尚且つ空間内の時間は止まっているので
買い物などで重宝されている（笑）

※　スプレットシェル
味方の砲撃魔法を威力はそのままに分裂させる魔法。
ホーミングシェルなどと違い、こちらはアルガス魔法に分類。

※　スピリット・ブレス
味方1人の能力を上げる事が出来るノアの専用補助魔法。

※　デルタフォーメーション
味方3人の能力を上げる事が出来るノアの専用補助魔法。
3人を頂点として三角の陣形を取る事で能力を底上げする。
なお、補助魔法は重ねがけが出来ない。

※　治癒(ヒール)真名：ヒールライト
アルガス式の治癒魔法。1章までの時点では軽い怪我の治療のみだったが
2章での真名解放によって猛毒などの回復も可能になった。

【シンクロ魔法】

合体技や合体魔法は同時に放つ事で効果を倍増させているが
特定の相手と魔法の魔力を相互干渉させる事で増大させ、威力を何乗にもさせる魔法。
これには色々条件があり、互いに信頼関係を強く結んでいる程効果がありまたどんな魔法でもシンクロ出来ると言うわけではなくクロスはなのは、フェイトとそれぞれ1つずつ相性のいい魔法をシンクロ魔法にしている。
なお、ノアはシャマルと1つシンクロ魔法を持っている。

※　スターダストクラスター
なのは【エクセリオンバスター】＋　クロス【メテオザッパー】
エクセリオンバスターにメテオザッパーが合わさり数十個もの強力な光弾に拡散する。

拡散された光弾がまるで流星雨のように相手へと降り注ぐ。
光弾一発一発の威力は無印のスターライトブレイカー級。

※　雷帝十文斬
フェイト【ジェットザンバー】＋　クロス【雷天斬】

２つの雷を纏った斬撃を十文字型に交差させ斬り裂く事で威力が倍増される。
強力なバリア破壊効果も付いており、ＳＳクラスの防御魔法も斬る事が可能。

※　祝福の抱擁
ノア【ヒールライト】＋シャマル【静かなる癒し】

広範囲に渡って体力・魔力の回復やＢＪ、甲冑の修復を行う回復魔法。
体力はほぼ全回復させる。

オリキャラ紹介（第1章終了時点　ネタバレ注意）（前書き）

オリキャラを紹介します。
クロスとノアだけですが章ごとにオリキャラが出た場合は章終了後に紹介します。
第1章を読んでから見てください。

オリキャラ紹介（第1章終了時点　ネタバレ注意）

名前：クロスロード・ナカジマ
性別：男
年齢：９歳
出身：第９７管理外世界「地球」極東地区日本
役職：特別捜査官／執務官候補生
所属：時空管理局本局次元航行部隊アースラ隊
階級：空曹
【所持デバイス】
：インヴォールデバイス『太極の書』（１章では非登録）
：管制型アームドインヴォールデバイス『ラファール』
：ユニゾンデバイス『ノア』
魔術ランク：ＡＡＡ＋（１章時点）
レアスキル：次元跳躍
好きなもの：仲間、友達、家族
嫌いなもの：命を軽視する人、家族を大切にしない人
イメージＣＶ：保志総一朗（ガンダムＳＥＥＤシリーズ：キラ・ヤマト）
（スクライド：カズマ）（ひぐらしシリーズ：前原圭一）など

本編の主人公。薄い茶色の髪と黒い瞳を持つ見た目は普通の日本人だが
ノアとユニゾンした時には少し浮かび上がった紅色の髪と赤橙色の瞳を持つ。
４年前（５歳時）に日本富士の樹海に隠されたとある研究所からゼスト率いる部隊に保護されクイントの養子となる。
当初は感情表現に乏しかったが、明るいクイントやノアの影響を受け

本編（1章）頃には普通の人間「以上」に感情豊か。
子供ながらに時に大人顔負けな洞察力や雰囲気を出し
家族や仲間や守ると決めた人には優しさと厳しさを持って
命をかけてでも守ろうとするが、敵と決めた者…特に大切なものを
傷つけた者には残酷になる。
天然の女殺しの性質をもっており
主要人物ほぼ全員に関与し性格や生き様に影響を与えていく。
原作のはやて同様稀少技能持ちの特例措置をふんだんに利用し
捜査官や執務官その他たくさんの資格取得を目指している。
本局や地上本部上層部が自分を利用していると知りながらも逆に利用している悪狐（クロノ談）
出生やその能力については大部分が第一級隠匿処置となっている。
が、本人に隠匿する気があまりないのでバラす事もある。
『次元跳躍』は本来古代魔法だがレアスキルとして登録。
古代ベルカ、ミッド式を使うが本来の術式はまったく異質なもの。
魔導師としての戦い方は中・近距離戦を主体としている。
しかしノアがユニゾンしていなければ魔力が暴走する恐れがあるため
単独戦闘は訓練以外行えない。
魔法や戦闘力だけではなく戦闘全般においては天賦の才を持つがそれを最大限引き出すために
ゼストから剣術を、クイントから格闘術（シューティングアーツ）を
メガーヌからは魔力制御を、ティーダからは遠距離戦を学び
4人を命の恩人であり師匠として慕っている。
わずか5歳ながらも短期間の教育で管理局入りし
ゼスト隊の4人からの集中指導で潜在能力を発揮したが
地上局では理不尽な扱いで上層部の手駒にされる事を恐れ
ゼスト隊とリンディと本人の話し合いの結果
異例の早さで本局の捜査官の資格を持ちアースラに所属することになった。
捜査官の資格を優先したのは執務官としてクロノがいたから

本来のデバイスは『太極の書』で、あえて登録していないが
一部上層部からの特例で許可されている。

名前：ノア・ナカジマ
性別：女
年齢：９歳？
（封印される前は数年稼働していたらしいがクロスと同い年にした。）
役職：捜査官補佐
所属：時空管理局本局次元航行部隊アースラ隊
階級：一等空士
【所持デバイス】
：インヴァールデバイス『光天の書』（１章では非登録）
：管制型ブーストインヴァールデバイス『ミラノール』
魔術ランク：ＡＡＡ
好きなもの：クロス、両親、ゼスト隊のみんな
嫌いなもの：クロスが嫌いなもの、クロスを利用しようとするもの、研究所
イメージＣＶ：折笠富美子（ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ：メイリン・ホーク）
（鋼の錬金術師　第二期：リザ・ホークアイ）（銀魂：柳生九兵衛）など

本編のヒロインの一人。肩までかかる薄い緑色の髪と緑色の瞳をした３０ｃｍほどの少女
年齢相応の大きさにもなれるがクロスへの負担が大きくなるので滅多に使わない。
クロス同様研究所から実験素材とされていた所を保護される。

その為研究所というものが嫌いで当初管理局の研究員にすら拒絶反応を示すほど
今は慣れた。
ノアという名前はクロスに付けてもらった。
デバイスながらも家族同様に接してくれるクイント達に暖かさと懐かしさを感じている
研究所に厳重封印されていたが、クロスが『光天の書』ともども封印を解除した。
本来は単独での融合デバイスでありリインフォースのような管制人格ではないが
なぜか『太極の書』に封印されていた。
封印される前の記憶はかなり曖昧らしく時々思い出してはいるが
断片的に思い出すだけなので
自分には重大な使命があり何かを探さなければならないという思いだけが渦巻いている。
魔術師としての戦い方は氷や風系魔法での中・遠距離および空間魔法だが
まだクロスが十分に魔力を制御出来ないので戦闘中はほぼユニゾン状態の為
単独で魔力を行使することはほとんどない。
性格は明るく元気があり天然系ボケタイプだがたまにツッコミもする。
ずっと太極の書の中で一人だった自分を見つけ
名前を与えて研究所の所員から守ってくれたクロスには
恋愛感情を抱いているが幸せになって欲しいとも思っているので
クロスに近寄る女性陣には誰よりも積極的にくっつけようとする。
特に妹のように甘え、特に姉のように優しく見守る
クロスのちっさいお姉さん兼可愛い妹の純情可憐な乙女（自称）
光天の書はクロス同様登録していない。

オリキャラ紹介（第1章終了時点　ネタバレ注意）（後書き）

クロス「やっと俺やノアの紹介書いたと思ったら・・・なんか長文すぎないか？」

カガヤ「キノセイキノセイ…」

ノア「まぁ…何文字程度を長文と認識するかですよねぇ」

クロス「スクライドとはまた古いアニメをＣＶ紹介に載せてるな」

カガヤ「あ～……そりゃ、元ネタに敬意を表してるんで」

ノア「元ネタ？」

カガヤ「それは2章で明らかになります！」

クロス、ノア「うぉい！！！！」

主人公デバイス紹介（第1章終了時点　ネタバレ注意）（前書き）

クロスとノアのデバイス紹介です。

オリキャラ紹介同様に第1章を読んでから見てください。

主人公デバイス紹介（第1章終了時点　ネタバレ注意）

★　インヴォールデバイス（ｉｎｖｏｌｖｅ　Ｄｅｖｉｃｅ）システム

存在するインヴォールデバイスは『太極の書』『光天の書』のみ。
ベルカ式、ミッド式、そして見た事もない次元世界の術式など
様々な魔法が記録されていて『アルハザード』に関係した
「すべての魔法の原本」との説ともある。
融合型デバイスとの違いはリンカーコアをデバイスに内包し（ｉｎｖｏｌｖｅ）
マスターと一体化するという点
使用する際に夜天の書のように術式のページを開くという動作が存在せず
また魔術行使に詠唱を必要とせず起動呪文もない。
魔力素質（瞬間最大出力、制御能力、変換効率）は格段に進化する。
魔力行使用のデバイスはマスターがインヴォールデバイスから作り出さなければならない。
その際デバイスの種類はインテリジェントでもアームドでもいい。
しかし欠点も存在し、もしインヴォールデバイスや魔力行使用のデバイスなどが損傷した場合
マスターの魔力でしか修復ができず、外部からのデバイス改造もできない。
マスターの成長と共に進化しデバイスの形状も一つとは限らず
作成したデバイスに複数の形態を持たせる事も可能。
カートリッジシステムも導入されていないため最大出力はマスターの技量次第となる。
またスタンバイモードが存在しないた為待機時はマスターのリンカーコアと同化し待機している。

マスターになる条件は魔力保有量が通常魔導師の数十倍なければいけない為使い手が現れず
古代ベルカやミッドチルダですら制作不可能な半ば伝説と化したデバイス

≪クロスロード・ナカジマ　所有デバイス≫

●名称：太極の書

クロスのリンカーコアと同化した黄金色の書。
表面に描かれた紋章や文字は無限書庫でも解読不能だった。
製作者や制作時期は一切不明、とある研究所が本編開始約２０年前に日本の富士山麓に魔術的、物理的に富士の地脈の力を利用し厳重封印されていた書を発見。
研究所で保管しつつマスターを探していたが見つからないまま何年もすぎ
クロス誕生の日、突如起動するもすぐにまた封印状態に戻り
数年後にノアの声に導かれたクロスが発見・解除。
その時にクロスはノアと言う名をつけた事により太極の書共々契約を結んだ。
遥か昔に封印された際に魔力や形態を5段階で封印をされいるがクロスが
第1段階である「封印」を解除。本編開始までに第2段階まで封印を解除したが
それでもまだ書のすべてを使いこなせてはいない。
あらゆる魔法術式や技法と古代の知識などが刻み込まれていて
『古代文化関連に小さな無限書庫』とも言われている。
使い方や行使用デバイスの作成法はノアがクロスに教え2人で作成した。
しかし、ノアの記憶が完全ではなく

エイミィ曰く『書に関する伝承は無限書庫にもほとんど残っていない為解析は難しい』ので
すべての封印が早期に解除されることを上層部が望んでいる。

ちなみにクロスの感情が高ぶると目が紅くなるのは、太極の書や古代魔法とは関係はない。

●名称：ラファール

研究所内でノアと作り上げた管制型アームドデバイス。
融合型デバイス並に饒舌でクロス達とたまに漫才になりアースラ名物となってしまった。
スタンバイモードは存在せず、通常は太極の書と共にクロスのリンカーコア内に存在するが
クロスやノア以外の外部と話をする時にクロスの内部から声が聞こえてくるので
皆があまり落ち着いて話が出来ない為仮のスタンバイモードという事で
左腕に六角形のクリスタルがはまっている腕輪を作り、通常はその中で待機をしている。
このクリスタルは見た目他のデバイスのスタンバイモードだが。
実際はただの器な為割れたりしても影響は皆無。
まだ進化途中なので未知の形態がある模様。
カートリッジシステムはないが太極の書が代わりの役目もするので不要。

◎ラファール・ファイターフォーム
戦闘時に片手持ちの西洋剣（名称はエクスカリバー）になり
全身に赤と橙色が混ざり白のラインが入った服をまとう。
ゼストから教わった技で相手の防御や魔力属性を弾く剣術を得意と

する。

≪ノア　所有デバイス≫

●名称：光天の書

ノアが昔から所有している銀色の書、太極の書と似た紋章や文字が描かれている。
太極の書と同じく製作者などは不明、研究所でも太極の書とノアの存在は確認していたが
このデバイスの存在は分からなかったらしく
ゼスト隊に保護されるまでクロスとノア以外には存在を秘密にしていた。
また、数段階の封印が施されていたがこちらは４段階封印。
あらゆる要素の魔法術式が刻み込まれているが
ノアの特性を反映してか水や風の魔法がメインに使われている。
太極の書との関連は不明だから２つの書で１つの書だった説や太極の書のコピー
安全装置など様々な説が出ているが学者や研究者への情報制限がされている為
ゼスト隊やアースラ隊内部での仮説にしかならない。

●名称：ミラノール

ノアが身につけているグローブ型のブーストデバイス。
魔力制御や補助に特化した性能を付ける為にブースト型とした。
ノア単体での戦闘があまりなく、ユニゾン中でもノアだけでクロスの魔力制御が出来る為
出番がない事をラファールに愚痴ることもある。漫才では主にツッ

コミ役。
通常時はノアの左手に腕時計型になり時計やタイマーとして家庭的に大活躍中。
封印を解除することで形態が変わるかは不明。

主人公デバイス紹介（第1章終了時点　ネタバレ注意）（後書き）

クロス：「インヴァール・・言いづらいな」

カガヤ：「他の魔道書型と区別するために新しく作ったタイプなんだから仕方ないだろ」

ノア：「1章時点ってことはまだ追記があるってこと？」

カガヤ：「その章が終了した時に新しい能力や謎が解明した時に追記するよ」

クロス：「最終的にはデバイス紹介だけで本編並の文字数になりそうだな」

ノア：「あははは・・・」

第1章予告

クロスロード・ナカジマ、ノア・ナカジマ。

2人の魔導師が第97管理外世界『地球』で出会った2人の魔法少女。

高町なのは。

魔法も知らない普通の9歳の少女だった。

だけど、魔法と出会ってしまった事で大きく運命が変わる。

フェイト・テスタロッサ。

悲しみを秘めた魔法少女。

クロスとの出会いは偶然なのか、必然なのか…

自らの秘密を知った時、彼女の本当の戦いが幕を開ける。

ジュエルシードを巡る戦いとクロスロードの運命の戦いが始まる。

リリカルなのは異伝～X　DESTINY～第?部　輝光戦記

第1章　～2人の魔法少女～

始まります。

第1章予告（後書き）

カガヤ「予告にしてみました！」

クロス「章管理機能が追加されたから色々改変してたんだよな」

ノア「うーん…どうなんでしょうねこの予告」

カガヤ「1章としては無難じゃない？」

第1話　「出動！出会いは斬撃と共に」（前書き）

カガヤ「誤字、脱字、改行が変などなど、何かあれば言って下さい」

クロス「いや、それももっと最初に言うべき事だろ？」

第1話　「出動！出会いは斬撃と共に」

とある一室で紅い魔導師と黒い魔導師が闘っていた。
静かに…ただ静かに周りの気配を窺う。
すでに漂う魔力弾の数は３０を超えている…
その隙間を縫うように動く大きな魔力反応、速い。
でも、捕らえきれない速さじゃない。
１０の魔力弾が淡く輝きだし一斉に迫ってくる…
剣に魔力を込め、迎撃……否！
撃ち返す！！

「鏡面剣！」（きょうめんけん）
『ホーミング・シェル！』

紅いバリアジャケットを着た少年、クロスロード・ナカジマが光輝く剣で撃ち返した弾にユニゾン中のノアが唱えたホーミング・シェルの幕が覆う。
操られた魔力弾は上下左右四方八方に散りながら標的に高速で向かう。

＜Ｗｉｄｅ　Ａｒｅａ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ＞（ワイド・エリア・プロテクション）

しかし、標的のデバイスＳ２Ｕが張った球体のバリアに防がれ全て爆発。

「くっ、やはり実質２対１だな…」

Ｓ２Ｕを構えた黒衣の魔導師クロノ・ハラオウンは慎重にあたりの

様子を窺う。
自分が空間に巻いた残りの魔力弾の数と位置をもう一度確認し最後の攻撃に入る
魔力弾が一斉に動き出す……しかし、さっきのようにクロスを狙った動きではない。

「何をする気なんだ、クロノは」

無視して突破するか、それとも全て跳ね返すか。
隙を見せずに考えこむクロス。
しかし、クロノはそんな余裕を与えない。

「やぁ！」

掛声と共に魔力弾が全て爆発する。

＜Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ＞（プロテクション）

咄嗟にクロスのデバイス、ラファールがバリアを張るがすぐに目の前が光と爆音に包まれる。

「ちっ、攻撃用はさっきのだけで、残りは全部ただのめくらましか！」
『マスター…右です！』

視覚と聴覚を一時的に封じられたがユニゾンしているノアに影響はなく
すぐにクロノの狙いに気付く
魔力弾を一斉に炸裂させ閃光と爆音で眼をくらませ至近距離からの魔力砲撃。

しかし、黙ってくらうつもりはクロスにはない。

＜Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ＞（ブレイズ・キャノン）

「鏡面剣！」

目は見えずとも直感的に右に剣を立て、左手で上部を支えるように構える。

先ほどのように跳ね返す事は出来ないが、それでも炎の砲撃をそらす事には成功。

ブレイズキャノンはクロスをかすめ天井に当たった。

「うわっ、なんだ！？」

「トレーニングルーム…またクロノ執務官とクロス捜査官だな」

衝撃が艦内の一部に響くがすでに局員達は慣れっこなのかすぐに自分の仕事に戻った。

このような衝撃くらいここでは日常茶飯事である。

お互い無傷を確認し今日の模擬戦訓練は終了となった。

自分のデバイスを待機モードにした２人。

ノアもユニゾンを解除しクロスの肩に座っている。

「ふぅ、真正面からの攻撃じゃもう通じなくなってきたな」

「俺もだいぶ経験積んだしノアやラファールは優秀だからな、もうクロノには負けないぜ」

ノアの頭を優しく撫でながらニヤリと笑うクロス。

「そういうセリフはユニゾンしなくても戦闘出来るくらいになってから言ってください」

＜そうですそうです！そしてノア様が単独で戦えるようになって、私にも出番ください！＞

＜それだと俺の負担が増えて大変そうだなぁ…＞

「うっ…仕方ないだろ、慣れたと思ったら第2段階の封印も解除になって
また制御が難しくなったんだし」

文句を言いつつも撫でられ赤面し嬉しそうなノアと
ノアの左手の腕輪、ノアのデバイスであるミラノールからの抗議にクロスの左手の腕輪、ラファールは誰にも気付かれないようにそっと呟いた。

「しかし…こうまで饒舌なデバイスも本当に珍しいな。言葉は日本語だし」

4人（2人と2体?）の掛け合いを苦笑しつつクロノは訓練室を後にした。

ここは時空管理局・巡航L級8番艦。
次元空間航行艦船「アースラ」内部の訓練室。

特別捜査官であるクロスはとある任務を終え
次の任務に向けての航行中に執務官クロノに訓練に付き合ってもらっていた。

「今回はロストロギアの回収で特に戦闘もなくマスターやクロノ君達も皆無事に任務完了
　っと♪」

休憩室で飲み物を飲んでいる間にノアは
地上局で働いている母クイントにいつものように任務報告をメール

していた。

「おっ、いつもありがとなノア、母さんから何か来ていた？」
「はい、お母さんからとそれからお父さんからも…件名だけなら仕事のメールっぽいけど中身はいつものとーり♪」

お気に入りのホットココアの飲みつつ嬉しそうにメールをクロスとクロノに見せる。

「クイントさんは子供が産めない体だから、念願の息子と娘が出来て嬉しいのだろう」
「ゼストさん達に保護されて母さんと父さんの養子になって早くも４年か…
月日がたつのは早いなぁ」

見た目は歳相応ながらも緑茶を啜りながら言っているクロスの言葉は……とても９歳には聞こえない。

＜クロス様…感慨にふけるにはかーなり早いと思いますよ？＞
「緑茶好きの９歳…もう少し子供らしい飲み物は飲まないのか？このお茶は美味しいけど」

そう言いながらもクロノが頼むのはミルク…
好きで飲んでいるわけでもなく身長が欲しい為に渋々飲んでいるという感じだ。
その様子を影からこっそりと見て楽しむのは
幼馴染兼姉貴分でもあるエイミィの密かな趣味だが・・・今はブリッジである。

「これは和風趣向なリンディさんに感化されたからだ。別にいいだ

ろ、緑茶おいしいし…
　身長が欲しいってだけでミルク飲んでいるのとは違うよ」

ピキッ、という擬音が聞こえてきそうなくらい空間にヒビが…
いや実際に入ったかもしれない。
それほどの衝撃が休憩室を覆った。

＜マ、マスター……＞
「あっ……やばっ」

時すでに遅し

「・・・・・・・・」

無言でどす黒いオーラを立ち込め今にも特大砲撃をかましそうな漆黒の鬼１匹
次元転移してでも逃げようとする２人
しかし、そこに救いの手が

「クロノくん、クロスくん、ノアちゃん。目的地に近付いたよブリッジに来てもらえる？」

それぞれのデバイスを通じエイミィからの通信が入る。
舌打ちをするクロノを尻目に天の助けとばかりに
全力疾走でブリッジに向かうクロスとノアであった。

「艦長、現地の様子は今どうですか？」
「あ、３人とも休憩中にごめんね。ちょっと予定より早く着いちゃって早速飛んでもらえる？」

ブリッジの中央で3人を迎えながらアースラ艦長、リンディ・ハラオウンは
スクリーンを指さした。

「実はもう両者とも戦闘に入っているのよね」
「ジュエルシードはすでに封印処理がされています」
「ですが、戦闘中の両者の魔力が高レベルなため再度暴走の危険があり早急な回収が必要です」

次々に局員から来る情報を頭に込めながら
クロスの視線はモニター内の2人の少女に釘付けだった。
モニターに映る1人は栗色の髪をした白いバリアジャケットを纏い
辛そうにしながらも一生懸命戦う少女
もう1人は黒いマントと黒いバリアジャケットを着て
きつい表情の裏に強い決意を感じる金髪の少女
どちらもクロスと変わらない歳に見えた。
4年前に研究所から管理局に保護されてからは学校にも通わず訓練や任務ばかりの毎日
周りは大人だらけで比較的歳が近いクロノですら14歳
自分と同じ年代…ましてや女の子にまだあまり接した事のないクロス
そして、モニターには自分と変わらない歳。
自分と同じように魔法を使い激しく戦う少女達に不思議な感覚を抱いていた。

「じゃあ、早速現地に飛んで戦闘の中断とジュエルシードの回収
それから彼女達をアースラに招待、お願いね」
「はい、リンディ艦長…それにしても地球……それも日本か、懐かしいな」

（一応）日本出身であるクロスは

ロストロギア『ジュエルシード』の波動を観測した座標が地球の日本であると知り
今回進んで現地への出動を志願していた。

「感慨にふけるのは後回し、まずはお仕事お仕事♪」
「クロス、やっぱりどうみても発言が子供っぽくはないぞ」

溜息をつきながらも3人は転送ポーターに乗り

「S2U!」
＜Stand by ready.＞（スタンバイ・レディ）
「ラファール!ノア!」
＜Start up. Wearing!＞（起動、装着!）
「ユニゾン・イン!」

それぞれセットアップし現場へと飛んだ。

同時刻
海鳴市　海鳴臨海公園

構えた杖、レイジングハートに自然と力が込められる。
高町なのはは封印されたジュエルシード?を片目で見つつ
目の前の金髪の少女フェイト・テスタロッサと距離を取った。

「ジュエルシードに衝撃を与えたらダメだね、レイジングハートもバルディッシュもこの前酷い目に合わせちゃったから」
＜Don't worry＞（心配ありません）
「今度こそ持って帰る…でないと母さんをまた悲しませちゃうから

…」

＜Ｄｅｖｉｃｅ　Ｆｏｒｍ＞（デバイス・フォーム）

相対する2人の魔法少女…やがて同時に相手に向かって杖を振りかざす
しかし両者の間に光が現れ・・・

「そこまでだ！それ以上の戦闘行為は俺が相手になる」

レイジングハートを左手でつかみ
バルディッシュを右手の剣で受け止めた紅い少年の姿がそこにあった。
紅い少年…クロスが2人のデバイスを受け止めた手を離し
その脇にクロノが静かに降り立った。

「なっ！？」
「あ、あなた達は誰？」

突然現れた2人に驚きを隠せないなのはとフェイト

「時空管理局特別捜査官、クロスロード・ナカジマ」
「同じく執務官のクロノ・ハラオウンだ」

クロスの肩にうっすらとノアが現れ2人に向かい

「そして私はノアといいます、よろしくね♪」
「うわっ、よ、妖精さん？」

半透明で実体化したノアになのはは驚いた。

「じ、時空管理局…しかも融合デバイスに・・・あの人は…」
「まずいよ、フェイト…こいつら魔力が半端じゃない」

2人を見守っていたフェレット形態のユーノ・スクライアと
赤い狼の姿をしたアルフがそれぞれのパートナの傍に来た。

「この場での戦闘行為は危険すぎる、それは承知しているね？
まずは詳しい事情を聞かせてもらうよ」
「それと、あのジュエルシードは管理局が保管する。これは個人が
持つには危険だからな」

そう言ってジュエルシードに近づくクロスを見て
フェイトとアルフはとっさに飛びかかった。

「それは、渡せない！」
＜Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ＞（サイズ・フォーム）
「たあぁぁ！！」

飛びかかる2人に背を向けたまま、ジュエルシードをラファールで
回収すると体を反転させ

「閃光裂破！」（せんこうれっぱ）
「えっ…」

右手の光輝く剣、エクスカリバーでバルディッシュの魔力刃を砕き

「エアブリット！！」
「ぐっ」「わっ！」

そのままの勢いで回転し左拳から繰り出した衝撃波が2人を襲う。

なんとかアルフがフェイトを庇い持ちこたえようとするが2人とも
地面へと吹き飛ばされ
追加とばかりに2人ともバインドで両手足を拘束された

「あっ、フェイトちゃん、アルフさん!…一瞬で2人を」
「大丈夫だよ、なのは。この人達は敵じゃないから、それにはちゃんと手加減しているよ」
「君もしばらくはじっとしていてくれ、そうすれば僕らは何もしない」

なのはとユーノを守るように2人の前に立ち、ゆっくりとフェイト達にS2Uを構えるクロノ

「あまり無駄な戦闘はしたくない・・・まずは話を聞かせてほしい」
「ぐぅ…本当にまずいよフェイト。こいつ強すぎる…逃げるのも難しいかも」

ジュエルシードの回収を諦めじっとクロスを睨みながら
なんとかこの場を撤退する手段を考えていたフェイトの脳裏に声が響く

『フェイト…何をしているの?早く私にジュエルシードを…』
「っ!!?……はい、お母さん……」
＜Photon Lancer Multi shot＞（フォトン・ランサー・マルチショット）
「フェ、フェイト?」

突然、何かが憑いたようにフェイトは虚ろな目になり
あっと言う間にバインドを吹き飛ばし
魔方陣を展開…その周りにはフェイトの実力では多すぎる数

３０個以上の魔力弾を生成しはじめた。

「まだやる…ん？様子が変だな」

『マスター、あの子の魔力が外部干渉で増幅していきます！』

先ほどまでのとは明らかに桁違いの魔力が今のフェイトからは発せられていた。

「フェイトちゃん！？」

「ダメだ！僕の後ろに下がって…クロス！」

「おう、２人のガードと広域結界を頼む…それとこいつも」

クロスはＳ２Ｕヘジュエルシードを転送し魔方陣を展開…

目付きが鋭くなり左手とエクスカリバーに魔力が収束する。

先ほどまでの迎撃とは違う、クロスの…本気モード

両者の魔力が渦を巻く、先に動いたのは…フェイト！

「ファイア！！」

フェイトの掛け声と共に不規則な動きをしながら魔力弾が一斉にクロスに発射された。

「鏡面乱舞！！」（きょうめんらんぶ）

『エクスプローション・シェル！』（Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ　Ｓｈｅｌｌ）

まるで空中を舞うようにかわしつつ

反射の魔力を込めた連続斬りで魔力弾を跳ね返しノアが魔力膜で包む。

しかし、今回は誘導弾ではなく、しかも直撃コースでもない。

ただフェイトの周辺に向けて跳ね返された。
当たらないとわかると次なる砲撃の為に魔方陣を展開させる
だが弾がフェイトをかすめた瞬間。

『ブレイク！』

先ほど跳ね返された魔力弾が一斉に大爆発を起こした。

「フェイト！！」「フェイトちゃん！」

アルフとなのはの叫びは爆音にかき消され…
辺りには煙と衝撃が暴れまわる。

「ぐっ…い、今のは一体…」

煙が晴れた中から現れたフェイトは防御魔法でも使ったのか
ジャケットがボロボロになりながらも無傷だった。
しかし、先ほどのようなうつろな瞳ではなく
周囲に漏れるほどの魔力も消えていた。
フェイト自身にも母プレシア・テスタロッサの声が頭に響き
膨大な魔力が流れ込んできたくらいにしか記憶になかった。

「何があったの…あ、あの子がいない」
「フェイト、上！！」
「あっ！」

上を見上げたフェイトに映ったのは
左手を前にかざし自分に向って落ちてくるクロスの姿

「追い打ちごめん！…シャイン・ホイール！！（Ｓｈｅｌｌ　Ｗｈ

ｅｅｌ）」
＜Ｇｏ！＞

クロスの左手から放たれた車輪状の魔力弾が激しく回転しながら高速でフェイトに迫る。

＜Ｄｅｆｅｎｓｅｒ＞（ディフェンサー）

とっさにバルディッシュがバリアを張るが…

「け、削られていく？」

シャイン・ホイール…
名前の如く車輪状の魔力弾を放ち、相手のバリアなどの防御魔法を削り取る防御破壊魔法である。
フェイトがバリアの維持に魔力を込めなんとかやり過ごそうとした為クロスから意識をそらしてしまった。
しかし、それがクロスの狙い
バリアを削る事が目的ではなくバリアの維持に意識を集中させる事その一瞬の隙を狙いフェイトの背後に周りこみ…

＜Ｓｏｎｉｃ　ｐｕｒｓｕｉｔ＞（ソニック・パースト）
「光刃斬」（こうはざん）

何が起きたのかフェイトには分からなかった。
上空にいたはずのクロスがいつの間にか背後に現れ
次の瞬間には白い光が奔りバルディッシュが真っ二つにされていた。

「あっ…あぁ」
「本体は傷つけてないから修復は可能だ、でもそれにはまず一緒に

来てもらうよ」

そして、エクスカリバーを喉元に突きつけられ……完敗。
自分と同い歳くらいの男の子に負けたと知ったフェイトが見たものは…
剣を突き付けながらも驚きとそして哀しみに満ちた……
クロスの苦悶の表情だった。

続く

第1話　「出動！出会いは斬撃と共に」（後書き）

カガヤ「改行って難しいね…」

クロス「技や魔法名は出てきた時に更新します」

カガヤ「文字数多いかも…見えにくいかも…（ブツブツ」

ノア「グダグダうるさ～い！！！」

第2話　「そして運命は静かに動き出す」（前書き）

クロス「ところでタイトル名に何か意味はあるのか？」

カガヤ「他にしっくりくるのが浮かばなかったのはあるけど…ちょっとしたネタバレにはなってるよ」

ノア「それは～私と～マスターの～・・・」

カガヤ「わ～！！わ～！！！ネタバレ禁止！！」

第2話　「そして運命は静かに動き出す」

最初、モニターで見た時には感じなかった。
そして直接出会い剣を交えて感じた違和感。
目の前の少女、フェイトは何かが違う
根本的な部分で彼女は違っていた。
その正体に気付いた時……クロスは運命を感じた。

「名前は…君の名前は…？」
「フェイト…フェイト・テスタロッサ」
「ＦＡＴＥ・・・しかもテスタロッサ……そうか…もしかしてと思ったけど
なんでこんなに早く見つかるんだろうな…」

突きつけた剣が震える。
自分が感じた共鳴に近い違和感、フェイト・テスタロッサという名前…
２つが繋がりクロスはその名を口にする。

「プロジェクト…Ｆ」
「っ！！？」

聞いた事もないその名を聞いて
理由も分からずに衝撃を受けるフェイト…
まるで自分がそれを知っているかのように…
ダメだ…それを知ってはダメだ…私が壊れる…
お互い一歩も動けずに固まる２人
様子を見ていたクロノ達もどうしたのかと近づこうとした。
その時！

ズガンッ！！
鈍い音がしたかと思うとクロスは吹き飛ばされフェイトの前には漆黒の鎧を纏った…
いや、鎧そのものが彼女を守るようにフェイトの背丈ほどもある大剣を構ていた。

「クロス！…っ！？」
「……」

続けて鎧から魔力砲がクロノ達に発射される、すぐにクロノがバリアで防ぐ…
が、すぐにヒビが入り少しずつ後ろに押し出される。

「鏡面剣！」

バリアが貫かれる瞬間なのはの眼前に白く輝く剣が砲撃から守るようにかざされていた。
砲撃は反射され広域結界を砕き遥か上空へと消えた

「くっ…結構響く～・・・あの2人は！？」

気がつくとフェイトとアルフとあの鎧の姿はなく、いつも通りの静かな公園がそこにあった。

「艦長…すみません、逃がしてしまいました」

ひとまずの経過報告を空間モニターにてアースラにするクロノ

「追跡も振り切られちゃったし・・・まぁいいわ、戦闘は終了してジュエルシードも回収できたし」

「それより…クロス君大丈夫？結構もろにくらったでしょ？」

一部始終をモニターしていたリンディとエイミィが心配そうにクロスを見るが
特に怪我もなくピンピンしていた。
しかし……

「俺よりもノアの方が…あの鎧の攻撃、全部受け止めたから」

先ほどのフェイトとの戦闘で全力魔法連発直後の上に
黒い鎧から不意打ちを受けたあの時
ノアは魔力の籠った斬撃の防御と吹き飛ばされた衝撃の緩和に魔力の消耗が酷く
現在とある所で回復中…
その場所はクロス以外ではクロノやリンディ、エイミィのみしか今はまだ知らない

「あの～…」

自分がこれからどうなるかと不安げなのはとユーノ。

「あ、あぁごめん。お互い色々聞きたい事があるけど、まずは一緒に来てくれないかな？」

先ほどの本気モードの強く鋭い目ではなく
優しくやわらかな目で声をかけられ、思わず頬が赤くなるなのは。

「それと…数か月ぶりかな？ユーノ」
「もうそんなに経つんだね…久し振り、クロス」

久し振りの友人にでも会うかのように握手をする2人
そんな2人をなのはとクロノは目をパチクリさせる。

「クロノに言わなかったっけ?前に研修任務中に友達になった考古学者の」
「ユーノ・スクライアです。それと、学者じゃなくてまだ初心者の見習いですので」
「あっと、ごめんなさい…私の名前は高町なのはです」
「ユーノになのは…わかった。僕はさっき言ったね?好きに呼んでくれて構わない
艦長を待たせているので早速跳ぶよ」

クロノが杖をかざすと4人の周りに緑色の淡い光が包み込み
一瞬の間に姿が公園から消えていた。

その後、アースラ休憩室で時空管理局やロストロギアの簡単な説明を受けていたが
なのははまだ全部理解できず

「うぅ〜、なんだが頭が痛くなってきたかも・・・」

頭を抱えていた。

「あはは、魔法技術がない世界の出身者は最初みんなそうなるさ。
ところでユーノ…その姿気に入っているのか?」

クロスに言われ未だに変身魔法中なのを思い出したユーノは本来の姿である人型に戻った。
魔法を解き、ふと隣を見るとなのはが口に手を当て石化していた。

「??……あ！あの～なのは？…まさか僕が人間になった時、見てない？」

うんうん、と無言で頭を上下させるなのは。
しかし段々と赤くなり、ついには耳まで真っ赤になりしゃがみこんでしまった。

「あ、あれ？……どうしたのなのは？」
「…あの時も……あ、ひょっとして一緒に温泉入った時も！！…あぁ、どうしようぅ」
「「温泉？…一緒に入った？」」

クロスとクロノ、それに回復中のノアですら飛び出してきた。

「い、いやいや！あの時は仕方なく…というかなのはが僕をただの小動物としか見てなかったから…というか」
「へぇ……ユーノ、俺が教えた変身魔法を悪用してなのはにイタズラや覗き見なんかしたんだ…へぇ…」
「…マスターが小動物だと探索に便利だからと教えた変身魔法で…女の敵ですねぇ」
「……逮捕しようか」

三者三様で迫られ顔面蒼白のまま壁に後ずさりするユーノ
クロスに至ってはエクスカリバーを構え本気モードである

「ちょ、ちょっと待って！僕はイタズラも何もしてないよ！
……結果的に覗き見みたくはなった…けど」

なのははそれに気づかないのか
ブツブツと独り言をしているかと思えばすくっと立ち上がり

「ご、ごめんなさいユーノ君！私声だけでユーノ君が男の子だと気がつかなくて…
その・・・女の子かと」
「「「「・・・・・・・」」」」

いきなり謝ったと思えば微妙に的外れな事を言うなのは。
どうやらユーノを女の子（メス？）と思っていたようだ
流石水橋声。

「・・・・・・」
「あ、ほら…ユーノ、声が可愛いから間違えたんだよ」
「そ、そうだよ！あんな姿じゃ声以外じゃ判断できなかっただろうし」
「微妙に女の子っぽい話し方だしな」

声だけで女の子に見られていた事にショックを受けるユーノとさすがに可哀相だと慰めるクロス達。
しかし、クロスは半分わざとトドメを指している…鬼。

「あー…こほん、盛り上がっている所悪いけど、艦長が準備出来たからもう来ていいって」

いつからいたのかエイミィが困った顔をしながらこちらを眺めていた。

「エイミィ…いたなら声をかけてくれればいいのに・・・」
「あはは、ごめんねクロノ君。なんだか邪魔したらいけない空気だったから♪」

さてと、と艦内を歩きながらなのはとユーノに向きなおるエイミィ

「2人とも初めまして。私がアースラ通信主任兼執務官補佐のエイミィ・リミエッタ…
エイミィでいいわよ」

「はい、高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「うんうん、あの金髪の子もそうだけどなのはちゃんも可愛いね
・・・クロス君が気にかけていたのもわかるよ♪」

少し離れて歩くクロスには聞こえないような声でそっと呟くエイミィどう反応していいかわからずなのはは頬を染めながらあたふたした。
その様子を見て苦笑するクロノとユーノ
ニヤニヤと若干黒い笑みを浮かべるノア。

「??」

気がついていないのはクロスだけでだった。

なのは達が案内されたのは魔法世界の次元艦とはとても思えないような和室で
・・・なぜかこたつに蜜柑という日本の冬の定番セットが完備。
こたつに入りみかんの皮をむきながらぬくぬくしている…リンディ提督

「……リンディ艦長?炬燵は…冬の道具ですよ?」

「あらそうなの?ごめんなさいね、和風な部屋の方がなのはさん達が落ち着くと思って」

「あ、あははは・・・お気遣いありがとうございます」

アースラに来てから色々驚きすぎたため、なのはもう驚くことには慣れていた。
炬燵をどけて、普通の卓袱台に正坐する一同

「さてと、はじめまして。なのはさん、ユーノ君。
私はこの船アースラの艦長、リンディ・ハラオウンです。
あと、このクロノの母親もやっています、息子ともどもよろしくね♪」

隣でクロノが頭を抱えていた。

なのは達は今までのいきさつを語った。
なぜ一般人のなのはが魔法を使えるか
どうしてジュエルシードを集めているか
フェイトとの出会いと今までの戦いの全て
ジュエルシードの暴走で傷ついたユーノをなのはが学校の帰り道に助け
そして、海鳴市に散らばっていたジュエルシードの1つが暴走
偶然その場に居合わせたなのはがユーノよりレイジングハートを受け取り見事に封印
その後、次々と封印回収していったが同じくジュエルシードを狙うフェイトと出会い
時に激しく、時に一時協力しつつも奪い合いは続いた
その中でなのははどうにかしてフェイトと友達になろうとしたがフェイトはいつも悲しそうな瞳でそれを拒絶、あの戦闘へとつながる…

「じゃあフェイトがどこから来て誰からの命令で回収しているかまではわからない、か」
「はい、でもすごく必死で集めていました」

その話を聞いていたクロスは特にフェイトの話が出た時から注意して聞いていた。

「それにしても、無謀というか無鉄砲というか」

呆れたように2人を見るクロノ
それについて多少は自覚があるのか2人はお互いの顔を見合わせ苦笑した。

「あら、でも立派よ。自分でやれることに責任をもっているのですから
2人ともまだ9歳なのに偉いわ」
「だからこそだ、これ以上この件には関わらない方がいい。
特になのはは魔法とは縁のない普段の生活の方がずっと安全だ」

管理局の網をすり抜けジュエルシードを集め続けている高レベル魔導師フェイトと
フェイトの背後に潜む巨大な存在。
民間人である2人がこれ以上関われば危険がある。

「ともかく一度2人で今後の事を決めて、また改めて話をしましょう」

2人を元の場所へ戻した後、艦長室は重々しい空気が流れていた。
というのもクロスから
【フェイト・テスタロッサがプロジェクトFの産物である】
という報告がされたからだ。

プロジェクト　F．A．T．E…通称　プロジェクトF

それはとある計画から派生した記憶転写型クローンを作り出す研究。
基本理論の設計者は不明、すでに数人の逮捕者が出ているが…いずれも末端の人員
完成にはプレシア・テスタロッサと管理局の上層部の一部が深く関わっている。
上層部は雲隠れしたが現在地上本部のゼスト隊が中心となり捜索中である。
プロジェクトFによって生み出されたクローン体に特殊な魔力がやどると言われている。

「プロジェクトF……ゼスト隊長達からも話は聞いていたけど
まさかあのフェイトという子がそうだなんて」
「間違いありません、フェイトちゃんと交戦した際に感じました」

報告、それはフェイトと対峙した時に感じたもの…
そして交戦の傍らノアがフェイトの魔力を収集分析して分かった事
それはフェイトがプロジェクトFの産児という事実

「特異な誕生の仕方によってしか持ち得ない特別な魔力反応。
ノアの収集した魔力データを確認すればわかると思います
以前提出したプロジェクトFの魔力データ…
それと同じものがフェイトから確認できるはずです」

モニター上には先のクロスとフェイトの戦闘が映し出されていた。
虚ろな目で攻撃をしかけるフェイト、それをただじっと見つめ拳を握り締める。
そのクロスを黙って見つめていたリンディは息をつき、モニターの画面を切り替えた。

「わかりました。ゼスト隊長への連絡はクロス君が行うとして…今

の問題はあの2人よね」

映し出されたのはクロス達が到着する前のなのはとフェイトの戦闘
離れたところで見守るユーノとアルフの姿もあった。
クロノすら上回るほどの魔力を持つ2人がぶつかり合い
封印状態のジュエルシードが淡く輝き反応している。

「2人ともすごいね。特になのはちゃんはろくに訓練も受けてない
全くの素人のはずなのに」

モニターを見ながら呟くエイミィ。
さりげなく「妹にしたいな…」と少し危険なつぶやきも聞こえるが
あえてスルー。

「それに説明を受けて遠巻きな警告もしたのになのはもユーノも動揺はしても
決意に揺らぎはなかったよ」
「えぇ、おそらく2人とも協力したい…と言うでしょうね」

困ったわ、と全く困った素振りを見せずにお茶を啜りながら
実の息子同然と思っている男の子の表情を窺う。

「俺個人の意見としては危ない目に合ってほしくはないけど
捜査官としては協力の意志があるなら協力してほしいですね」
「おい、クロス…民間人の素人を巻き込ませる気か？」
「あの目を見たろ？変に首突っ込むなと言ってもあとでこっそり関わられるよりは
一緒に行動した方がいい」

それにうちは人手不足だし・・・と小声でつぶやくクロス。

そこを否定できずに言葉につまるクロノ。

「それにあそこまで強力な魔力をほっといたら変なのに利用されちゃうしね」

「あと危険に巻き込ませない、なのはは俺が守る！…ですよね？マスター♪

って痛い！ぐりぐりは痛いです！！」

「決まりね。もし向こうから申し出たら条件付きで協力してもらいましょう。

ただし、もし大人しく引き下がると言うのなら2人の関与を報告せず、いいですね？」

傍らの漫才（？）を無視しつつリンディが結論を下す。

クロス、エイミィ、ノア、おまけにリンディと立て続けに言われれば

「はぁ、分かった…確かにほおっておくには惜しい人材だし」

流石にＹＥＳとしか選択肢がなくなり、クロノ降参。

「じゃ、エイミィ。地上本部のゼスト隊長に資料纏めて送って

恐らく合同捜査になると思うから今後の方針を決めましょう」

その後、資料を地上本部のゼスト・グランガイツに送ると早速通信が入ってきた。

「資料は見させてもらった。こちらの事件と絡みそうだな」

ゼスト・グランガイツ…

４年前にクロスとノアをとある施設から保護した部隊の隊長であり

管理局地上本部が誇るストライカー級魔導師、深い優しさと誇りを持つ騎士。

「前にゼスト隊長の言った通りの展開です。地から海へと逃げる…正直うちの管轄になったのは運がいいと言えるのかもしれないですけれど」

「またお世話になります、リンディ艦長。それとクロス、間違いないのね…

彼女、フェイト・テスタロッサがプロジェクトFで生み出された子というのは？」

クイント・ナカジマ…

クロスの母親にしてシューティングアーツの師匠でもあり、ゼスト隊の切り込み隊長。

「間違いないよ…感じたんだ、あそこで感じた物と同じのを感じたよ……あの場所で俺が……」

「その先は言わなくていいわよ、クロス…大丈夫？」

「う、うん…大丈夫、ありがとうメガーヌさん」

メガーヌ・アルピーノ…

ゼストの恋人で、隊では後方支援とクイントの相棒的存在。

「それにしても数年間姿をくらましてここ数日地上で不穏な動きを思えば…

今度は海とは、何が目的だそのあたりは何か目星はつきましたか？」

「その目的に関してはまったくの不明だよクロノ執務官

ただ、ジュエルシードをそこまで集めているんだ…厄介な目的だろうね」

ティーダ・ランスター…
若くして地上本部でも5本の指に入ると言われる名射撃手で
近～中距離中心のゼスト隊の中で重要な遠距離タイプ魔導師。

これら4人がクロスとノアにとっての恩人であり師匠であり、かけ
がえのない存在でもあり
地上本部の切り札とも言える精鋭部隊、ゼスト隊・・・通称：フォ
ース・ストライカーズ。
そして話の中心に出てくる名前…プレシア・テスタロッサ
昔、ミッドチルダの中央都市で実験中に事故を起こして追放された
大魔導師。
最近になり、地上で複数の犯罪組織と繋がりがあるとある実験をし
ていると情報が入り
ゼスト隊が捜査していたが
ミッド付近での足取りを消した為、次元世界で新たに行動を起こす
可能性があり
次元航行艦隊に手配されていた。

「これが事故の時に亡くなったプレシアの一人娘、アリシア・テル
タロッサの写真だ」

モニターに映った写真には5歳くらいのフェイトにそっくりな小さ
な女の子
そして、その子を抱き抱えるプレシア。笑顔で微笑み合う2人は
どこからどうみても仲の良い母娘だった。

「それでは、合同捜査になるとは思うが、何分うちは…」
「えぇ、気長に御待ちしています、それまでに何か動きがあれば私
たちで対処しますよ」

「クロス……しっかり食べてしっかり寝てしっかり修練するのよ？じゃあ、またね」
「うん、父さんにもよろしくね」

そうして会議は終了し、アースラ隊は正式に新たな任務へと就いた。

時同じく、次元の狭間にある時の庭園…その一室
そこには体中ボロボロにされ鎖につながれたフェイトと
息を荒くし、何度もフェイトを鞭でうつプレシアがいた。

「はぁ・・はぁ・・・これでわかったかしら、フェイト？これ以上私を失望させないで」
「はい・・・ごめんなさい、お母さん」

鞭を杖に戻し息を整え、その場を後に去ろうとするプレシアにかかる言葉

「母さん・・・プロジェクトFって何ですか？」
「っ！！？」

プレシアはその言葉に目の色を変えフェイトに詰め寄った。

「どこで・・・どこで聞いたのその言葉！！」
「あ、あの管理局の男の子・・・クロスロードっていう子が私を見てそれで・・・」
「・・・そう、わかったわ。いいからもう行きなさい」

フェイトが出て行った後もプレシアは一人部屋に残り考えていた。

「管理局はもうそこまで追い詰めたとでもいうの・・・データも完璧に消して
痕跡すら残さなかったのに・・・っ！まさか・・・クロスロード・・・ひょっとして」

一方、扉の外では…

「クロスロード・ナカジマ・・・クロス・・」

名前を何回もかみしめるように呟くフェイトだが
自分がなぜそんな事をしているのかを理解できずにただ名前を呼んでいた。

続く

第2話　「そして運命は静かに動き出す」（後書き）

クロス「ゼスト隊やら色々とオリジナル要素増えてきてるなぁ」

カガヤ「ゼスト隊は原作よりも重要な役あるから、ティーダも入れたのには意味あるし」

ノア「作者がティアナ好きだから入れた・・・わけじゃないよね？」

カガヤ「それもあるけど別の意味もある、それと・・・
俺はティアナだけが好きじゃないぞ？
ギンガも含めた機動六課とナンバーズ全員を溺愛してるだけだ」

クロス、ノア「言い切りやがった！」

第3話　「特訓開始！」（前書き）

カガヤ「う～ん・・・困った」

クロス「何が困ったんだ？」

カガヤ「うーん・・・それはあとがきで」

クロス「うぉい！！」

第3話　「特訓開始！」

翌日、再びアースラへとやってきたなのはとユーノ。
昨日と同じように艦長室へと案内された2人は早速自分たちの答えを出した。

「昨日2人で話し合いました・・・と言っても僕もなのはも答えが決まっていたので」
「まだ私達に出来ることがあるなら、最後まで精いっぱいお手伝いさせてください」

それを聞いて何かを言おうとしたクロノだがノアに小突かれ渋々引き下がった。

「なのはの魔力はそち「いいでしょう、協力をお願いするわ」らにとって・・・え？」

反対されると思い、協力のメリットを言おうとしたユーノ。
だが、あっさりとしかも逆に協力を頼まれ2人の目が点になった。

「正直、こちとら万年人手不足だからね。
気は進まないけど協力する気がある人を拒む理由はないさ」
「クロス！何もそうはっきりと…」
「いいじゃないか？俺みたいな子供だって前線に出ているんだから
管理局の人手不足なんてすぐにばれるさ」

子供の部分に激しく突っ込みたいクロノであった。

「はいはい、話を進めますよ…さてとこちらからお願いして言うの

も変ですが
協力していただくにあたっていくつか条件があります。
1つ、こちらの指令には絶対に従ってもらいます。
2つ、決して危険な行動…特に単独行動は厳禁ですよ。
3つ、協力の間2人の身柄はアースラにて預かる事にします。大まかには以上ですね♪」

後ろでクロノが「もっと厳しい条件でもいいと思うが」と呟くが今度はエイミィに足を踏まれた。
対照的になのはやユーノはほっと一安心したように深く息をついた。

「では…まずはなのはさんのご両親にご挨拶に行きましょうか
しばらくの間なのはさんを預かるわけですから」

その後、なのはを連れリンディとなぜかクロスも引っ張られてなのはの家へと向かい
一家への説明をリンディの巧みな話術で済ませたが
同席していた恭也の視線にクロスが気づいた
「クロス君、と言ったね?君は何か武術でもやっているのかな?」
「あ、はい…剣術と格闘術を。なぜそれがわかったんですか?」

いつもと違い普通の小学生らしく振る舞うよう努めていたクロスだが
全てを見透かしたような恭也の目に
魔法の事がバレたかと思い軽く身構えてしまった。

「いや何、俺も少し剣術をやっていてね。直感というやつさ
どうだい?1本付き合って貰えないかな?」
「えっ、お兄ちゃん!?」「恭ちゃん!?」

なのはとなのはの姉であり、恭也の妹、美由希の2人の言葉を
軽く聞き流しながらも恭也の眼は真剣そのものだった。
まさかこんな所で剣の勝負を挑まれるとは思わなかったが
クロスはこの勝負を受けようと思った。

その頃アースラでは・・・

「なんでこんな事になっているんだ・・・」
「さぁ～？・・・男の子って勝負事が好きなんでしょ？」
「僕を一緒にされても困る」

モニターにて様子を窺っているクロノとエイミィはお茶を飲みつつ
完全に観客モード

そして、2人は胴着を着て（クロスは恭也のお古を借りる事にした）
木刀を片手に高町家そばにある道場に移った。
ちなみにクロスは木刀1本、恭也は短めのを1本帯に差して
クロスのよりも長めの1本を持っている。

「本気で掛かってきて構わないよ、クロス君」
「はい、遠慮なくいきます」

と、口ではいいつつ、魔力を一切使わず
しかも一般人相手に剣術の試合をするのは初めてなクロスは
恭也の剣の腕が並々ならないと感じつつも本気で向かう事に躊躇して
ていた。

「クロノ君、大丈夫…本気で行きなさい」
微笑みつつ声援を送るリンディ。同時に念話で

『いい機会だから一般人相手の戦い方というのも実践で覚えるといいわよ』

と、彼女なりのアドバイス。

「じゃあ2人ともいい？…試合始め！」

「「はっ！」」

美由希の合図でまずはクロスが一気に恭也へと詰め寄る。
体を沈ませ滑り込むように下段への斬り払い。
恭也は一歩下がりかろうじてかわす。
だが、そこから上段への切り上げ、恭也はなんとか体を逸らしかわしたが体勢が崩れてしまい
そこへクロスの追撃の薙ぎ払い。
なんとか木刀で受け止めたが、思いのほか重かったため膝をついて受け止めた。
必殺を狙った連撃をことごとく止められたクロスはすぐさま距離を取り
刀を構えここでようやく両者の口から息がもれた。

「す、すごい…恭ちゃんに反撃の隙を与えずに膝をつかせちゃった」

「クロス君、ここまで強かったんだ」

クロスの剣に驚く高町姉妹の横でリンディもまた恭也の腕前に驚いていた
（手加減なしで…とは言ったけどあそこまで本気を出させてそれでも掠りもしないなんて…魔力がないのが惜しいわ）

長く感じる・・・実際はほんの数分くらいだが。
ここで恭也は左片手下段、クロスは両手上段に構え同時に仕掛ける。

恭也は上段からの袈裟切りを受け止め、その勢いに乗せて体を回転させ横一閃。
対してクロスは身を沈め、腕を振り上げ、恭也の刀の腹を打ち上げ、軌道をずらしてかわす。
しかし、クロスの攻撃は止まらない、今度は恭也の右肩を狙い今までで一番鋭く速く…突く！
かろうじて恭也は身を屈めかわしたかに見えた、だがそれはただの回避行動ではなかった。
空いていた右手を背中に回し差していた小刀を逆手で掴む
そして右手を突き出しガラ空きのクロスの脇へと一気に斬り付けた。

「っ！・・・」
「遅い！」

クロスはなんとか直撃を避けようと身を捻るが一瞬遅く
刀を引く間もなく目にともならぬ速さで
恭也の小刀がクロスの脇を駆け抜けた。

「お兄ちゃんやりすぎだよ!!」「…大人げなさすぎ」
「わ、悪った…」「まぁまぁ・・・大丈夫？クロス君」
「・・・・・・・・」

恭也の一撃が鳩尾に綺麗に入りクロスは壁まで飛ばされ軽く目を回していた。
恭也は高町姉妹から集中口撃に晒される中
クロスを介抱しながらリンディは微笑ましく見守っていた。

「もう大丈夫か、クロス君？」
「たはは、負けました、完敗ですよ」

「…なんで僕まで…」
「まぁまぁ、この料理美味しいよ?食べさせてあげよっか?♪」

その後、高町家で夕食を御馳走になる事になり、どうせならと
エイミィとクロノも呼ばれ賑やかな夕食会となった。
最初は不服そうにしていたクロノも美味しい手料理を前にすっかり
機嫌を良くしたが
エイミィとの仲を美由希に追及されて、なぜか追及されるはずのエ
イミィまでも加わり
美少女2人に挟まれさっきまでとは別の意味で居心地の悪さを感じ
ていた。
一方エイミィはすっかり美由希と仲良くなり
今度来た時に町を案内する約束までするほどの親友となり
クロノの頭痛の種がまた1つ増えた…合掌。

その日は家族への今後の説明だけの予定だったので
翌日、改めてなのはとユーノをアースラへと招き入れた。

「は!はじめまして、高町なのはと言います、よろしくおねがいしま
す!!」
「ユーノ・スクライアです、ご迷惑をおかけすると思いますがよろ
しくお願いします」

たくさんの拍手に包まれてアースラに今2名の仲間が加わった。

それから数日は特に何事もなく過ぎていった。
ジュエルシードの捜索はエイミィ達探知スタッフに任せてクロスや
クロノ達実戦メンバーは待機
その間、なのははクロスやクロノから特訓を受けていた、それと言

うのも…

なのは達の紹介も終わり会議が終了したあとでなのはが意を決したように

「クロス君、お願いがあるんだけど…私に魔法の正しい使い方と近距離の戦い方を教えて！」

「い、いきなりどうした！？……フェイトの事か？」

「うん、私…フェイトちゃんとちゃんとお話したいの！

・・・でも今のままじゃきっとフェイトちゃんと向き合う事も出来ない

だから…正しい力を身につけたいの！」

そう語るなのはにリンディはかつてのクロスが重なった。

『……みんなの分まで精いっぱい生きたい、だからそのために強くならなきゃいけないんだ！』

「クロス君。まだジュエルシードの反応もない事ですし、なのはさんに怪我をさせないためにも

訓練はいいと思うの、ちょうどあなたはフェイトちゃんと同じ中・近距離型だから…ね？

私からもお願いできる？」

まだまだ未熟な自分にそんな事が出来ないと断ろうとしたクロスだがその前にリンディからもお願いされ断るに断れなくなってしまった。

「……はぁ、了解しました。でもなのは…俺も個人的にフェイトに用があるから

1人で突っ走る事だけはするなよ？」

「？？…うん、ありがとうクロス君♪」

満面の笑顔に思わず顔を真っ赤にしてそむけるクロスとそれを不思議そうにみるなのは。

「うんうん、録画してクイント達に送りたいわねぇ♪」
「きっと喜びますよ♪」

とほのぼのと見守る保護者2名
そして、複雑そうな顔と呆れた顔で眺める男子2名
段々とアースラに新たな名物が出来つつあった（笑）

「・・・・・・っ！ディバインシューター、シュート！」

正面から突っ込んでくるクロスに向けて5発の魔力弾が放たれる、しかし。

「発射速度を重視しすぎて魔力精度が甘い！」

剣技ではなく単純に魔力を籠めただけの剣で全て弾かれる…
そして、アッと言う間になのはの首元に剣が付きつけられる。

「フェイトはもっと速いんだ、無理に弾速を上げるよりも誘導性を重視しないとこうなるぞ？」
「はぁ～い…うぅ、やっぱり強いよクロス君」

特訓内容は至ってシンプル、高速で迫るクロスにいかにして魔法をあてるか、というもの。
クロスの攻撃方法は高速で接近しての近距離戦闘のみで防御や回避よりも攻撃に集中出来るが

先ほどからなのははクロスの速さに翻弄されてうまく魔力弾の精製と制御に集中出来ず
容易にかわされたり斬りおとされたりと掠りもしないほどだった。

「なのはは魔力値が高いんだから誘導制御に集中出来れば自然に魔力密度も上がっていくよ」

脇で見ていたクロノが助言する。

「フェイト・テスタロッサは高速移動しながら射撃魔法で牽制しつつ接近戦で一気に決める。
というのが基本戦術みたいだから逆にこっちは複数の誘導弾で相殺して
間合いを詰めさせないようにしないとダメだ」

スクリーンにレイジングハートが集めていたフェイトの戦闘データをクロスが解析していく。

「最後に…フェイトの魔力やスピード、その他諸々全てなのはの上回っている
そんな相手に有効なのは…」

「有効…なのは?」

「ズバリ、戦略と切り札!いかに自分の手札で相手の隙を作り
自分だけのとっておきをぶつけるか・・・これが大事だな」

「自分だけの・・・とっておき」

なのはの使用する魔法ディバインバスターやディバインシューターでは
防御力の高いフェイトに対して決定打にはならず
ここぞという時の高威力魔法がなのはには必要なのだ。

「ま、それは訓練しながら自分なりの効果的な魔法を
レイジングハートと一緒に編みだせばいいさ」
「おいおい、そんな簡単に編み出せるものじゃないだろう？」
「でもなのははは飲み込みが早いから結構早く編み出せるかもしれないよ。

魔術師は常に自分だけのとっておきの切り札を持っている。
しかし、それは時間をかけて自分の適性を知り初めて構築出来る。
魔術師として成り立てでしかも経験の浅いなのはには厳しい事でもあった。
ちなみにディバインバスターなどは最初からレイジングハートに登録されている魔法である。
クロスとクロノとユーノが議論しなのはがレイジングハートと相談しようとした…

その時。

「海鳴市沖合にてフェイト・テスタロッサとジュエルシードを発見！」

続く

第3話　「特訓開始！」（後書き）

カガヤ「書き溜めた小説のストックがなくなりました！」

クロス「あ～・・・作者はここの存在知る前から暇を見てちょくちょく小説を書いてました。」

ノア「全体の大まかな流れと3話分のストックを作っていたのですが・・・
今回でストックが切れてしました。」

カガヤ「なので次回からは更新が週1、2で1話あたりの長さも短くなると思います。」

クロス「見にくいや、長い！やらの苦情や感想もお待ちしておりますので。」

カガヤ・クロス・ノア「「「次回も宜しくお願いします♪」」」

第４話　「共同作戦！」（前書き）

遅くなりましたが４話です！

原作通りに進めつつオリ要素入れるのって難しい…

早くこの章終わらして自由に行きたい（笑）

第４話　「共同作戦！」

海鳴市沖合

現在その地域では通常ではありえない事が起こっていた。
嵐が起き、海が荒れるだけならば時化と変わりはない。
だが竜巻がいくつも発生し、しかも至る所に電撃が走っている。
その現象を起こした張本人のフェイト。
そして少し離れた場所で見守るアルフ。

「フェイト危険だよ！せめて傷を治さなきゃ！これ以上は体が持たないよ！」
「でも、もうこれしか…はあぁぁ！」

いつまでもジュエルシードが見つけられないフェイトにしびれを切らし
プレシアが拷問に近いお仕置きをした直後で
傷だらけの体にも関わらず、フェイトは魔法を使い続ける。
海中にあるジュエルシードを探しだし封印するために。

「こんなの無茶を通り越して無謀よ！」

その様子をアースラで眺めているリンディは思わず叫んでいた。
確認できるジュエルシードの数は６つ
しかも、位置を特定するために放ったフェイトの魔力に反応して暴走寸前。
とても１人で封印できるものではなかった。

「あの、すぐにいきます！」
「待った、あの子はいずれ自滅する。その時にジュエルシードごと捕獲すればいい」
「もう逃がすわけにはいきません。残酷に見えるかもしれないけど
これが管理局としての使命なんです」

今すぐに現地へ向かおうとするなのはを止めるクロノとリンディ
その様子をクロスとノアは黙って睨んでいた。

『なのは、僕がゲートを開くから行って！』
『ユーノ君！？・・・でも』
『言ったはずだよ、なのはが力を貸してくれる代わりに
僕はなのはを全力でサポートするって・・・だから行って！』

念話で話すなのはとユーノ、今にも飛びだしそうな2人の前に行動を起こす者がいた。

「はい、ストップ！俺も一緒に行けば文句はないでしょう？」
「「クロス？（君）」」
「確かにフェイトは自滅するだろうけど、暴走しているジュエルシードを放っておいたら
どんな被害が出るか分からないでしょ？事故を未然に防ぐのも管理局の仕事のはず」
「だが、常に最善の・・・」
「それに！傷ついた女の子を黙って見ている趣味は俺にはない
邪魔するなら・・・容赦しないぞ？」

微かな殺気を出してクロノとリンディを睨むクロス。
戸惑うなのはとユーノ。
ブリッジに不穏な空気が漂う。

しかし、折れたのはリンディだった。

「はぁ…確かに放っておく方が厄介な事になりそうですね」
「おか…っ、リンディ艦長!?」
「現場は今危険な状態です。協力者のなのはさんとユーノ君をしっかり守って下さいね」
「…はいっ!」

先ほどまでとうって代わって笑顔で返事をし
ノアとユニゾンをしたクロスは未だに困惑気味のなのはとユーノの手を握り

「準備はいいな?」
「クロス君!」
「言ったろ?抜け駆けはなしだってな♪フェイトを助けてジュエルシードも回収だ」
「うん…うん♪」
「時間がない…飛ぶぞ、ノア!」
『了解♪…跳躍!!』

次の瞬間にはブリッジからクロス達の姿が消えていた。

「全く…あれは滅多に使わないようにってクイントから言われているっていうのに」

言葉と裏腹にリンディは微笑んでいた。

再び海鳴市沖合上空

「・・・あ、あれ？いつの間に～！？」
「転移魔法！？でも一瞬でここまで！？」

転送ポートも魔法も使わずに海鳴市上空へといきなり飛んだので慌てる2人

「ほらほら、説明はあと、早く戦闘準備！」
「「は、はい！」」

そして3人はフェイトの元へ・・・
と、アルフが人型となり立ちふさがり激しく威嚇してきた。

「フェイトの邪魔はさせないよ！」
「悪人の邪魔するのが俺達の仕事なんだけど…まぁ、その件は置いといて」
「私たちはただフェイトちゃんを助けにきただけなんです！」
「！？フェイト・・を？」
「そういう事だ、というわけで…」

クロスはアルフの手を握り

「ちょっと手伝ってもらうぞ！」
「わわっ！離せ～！」
「私たちも行こう、ユーノ君」
「うん！」

フェイトの元へと急ぎ向かった。

その頃フェイトは暴走した竜巻が出す雷に身動きを封じられていた。

（くっ・・・うぅ、体がうまく動かない。傷が・・母さん）

薄れゆく意識の中でフェイトの目に映ったのは・・・

「ディバイン…バスター！！」

竜巻を撃つ桃色の閃光と

「閃光裂破！」

雷の縛めを斬る白金の斬撃だった。

「大丈夫か？今治すからな…ノア、頼む」

『了解！…治療（ヒール）！』

ノアが出てきてフェイトに両手を当てると

フェイトの体を七色の光が包み、次の瞬間には痛みが引いていた。

「これで大丈夫♪……誰にやられたのか想像つくけど

綺麗な肌に傷でもついたら大変だからな」

「あっ・・・ありがとう／／」

フェイトの頭を軽く撫でつつ、小声で囁くクロス。

それを見ていたなのはは少しむっとした顔になった。

「む～…」

「ん？どうしたなのは？」

「なんでもない！それよりも早くアレをなんとかしないと！」

「お・・おう、そうだったな」

「あはは・・・」

『マスター…』

クロスはなぜか不機嫌ななのはの迫力に押されつつも平静を保ち
未だに荒れ狂うジュエルシードに向き合う。
それを見ていたユーノとノアは溜息と苦笑を浮かべるしかなかった。

一方…

「はぁ、ダメねぇ…クロス君は」
「全くです。よりにもよって回復させるなんて！」
「なのはちゃんの前でいちゃいちゃしちゃダメじゃない」
「えぇ……ってそこですか艦長！？」
「女心が分かってないねぇ～うちのクロクロコンビは」
・
・
・
「コホン…それじゃ、作戦を説明するぞ。ユーノとアルフであれをくい止めてくれ
俺がその間にあの邪魔な竜巻を全部吹き飛ばす…
そしてむき出しになったジュエルシードをなのはとフェイトで封印…いいな？」

クロスの言葉に散開し、配置につく。

「フェイトちゃん、２人できっちり半分こ」
「・・・・・」

それぞれのデバイスを封印モードにして構えるなのはとフェイト

「あたしはあんたらを信用したわけじゃないからね！」
「分かってるよ、僕はなのはをサポートをしたい、ただそれだけだ

よ」

2人の足元に魔法陣が現れ、いくつもの鎖が竜巻を捕え、抑え込んだ。

「さてと、ノア。久々の砲撃魔法、いけるな」

『ばっちりです！…今回はアレを使わなくていいんですか？』

「多分、今この瞬間もプレシアが見ているはず。

この程度の事であっちに俺の正体を晒すわけにはいかないさ」

クロスは両手を掲げ精神を集中する。

体から赤と青の魔力が発せられ両手に集まり渦を巻いていた。

「はあぁぁぁ・・・一撃！」

『必殺！』

「『スパイラル…キャノン！』」

赤と青の2色の閃光弾が螺旋を描きながら、荒れ狂う海面へと撃ちだされ

大爆発！

直後にいくつもの光の柱が立ち、その中にジュエルシードが見えた。

「す、すごい・・・私やフェイトちゃんよりもずっとずっと強い魔法」

「・・・・・」

「なのは、フェイト！」

「「っ！？・・・ジュエルシード、封印！！」」

向かい合う、なのはとフェイト…2人の間にはジュエルシードが浮かんでいる。

クロス達はそれを黙って眺めていた。

「友達に・・・なりたいんだ」

「えっ？」

戸惑うフェイトに微笑みながらなのはが手を伸ばそうしたその時！

『マスター！』

「何！？」

「別次元から魔力攻撃！…それに戦闘空域へ何かが転送されていきます。数、多数！」

「いけない…クロノ、すぐに現場へ向かって！」

突如、アースラとクロス達へ向かってどこからともなく強大な雷が降り注いだ。

「なのは！クロス！！」

クロスはとっさになのはの元へ飛び防御魔法で何とかやり過ごした。

「大丈夫か、なのは？」

「あ、ありがとうクロス君」

「しかし、またしても邪魔してきやがったかプレ…

『マスター、フェイトちゃんが！』

…えっ！？」

フェイトへも雷、それもクロス達へ向けたよりも強いものが降り注いでいた。

「あああぁぁぁ～～！」
「フェイト！？」
「・・・か・・・かあさん？・・・・」

全身をボロボロにし、体から煙を立ち昇らせながら海へとまっさかさまに落ちるフェイト。
すぐに向かおうとしたクロスとなのはの周りを以前襲いかかってきた黒い鎧が取り囲んだ。

「くっ・・・こいつら」
「フェイトちゃん！」

フェイトの方は間一髪でアルフが救い出した。
そして、ジュエルシードを転送してきたクロノが回収しようとしたがすでに遅く

「ぐあっ！？」

鎧の一体が全て回収、クロノを一蹴にし、フェイトとアルフを抱え飛び去っていった。
全て一瞬の出来事であった。

「・・・すぐに追跡を！」
「ダメです、先ほどの攻撃でアースラ全体の機能が低下、修復にかかっています」
「くっ・・・プレシア」

クロスとなのはを囲んでいた鎧にも変化が現れた。
細かく震えたかと思うと一斉にクロス達へ黒く輝きながら向かってきた。

『まさか…自爆!?』
「くっ、跳躍は間に合わない…なのは!」
「えっ?」

直後
クロス達へ向かっていた鎧が自爆した。
その威力は竜巻を吹き飛ばしたクロスの魔法の数倍の威力がありユーノとクロノは余波を受け、海面へ叩き落とされた。

「クロス君!なのはさん!…すぐに現場を確認して!」
「は、はい!」

「ぷはっ・・・はぁはぁ、大丈夫かユーノ?」
「は・・はい、なんとか・・・2人は!?」

どうにか海から顔を出し当たりを見回すクロノとユーノ
上を見上げると所々で雷が出ている黒い煙が上空を覆っていた。
それは爆発の威力…
防御魔法を張ったとしても到底無事では済まされないほどの威力の結果。

「ま・・さか」
「・・・うそ、だよね。クロス!なのは!!」

煙の中から現れたのは…なのはを守るように両手で抱き締めバリアジャケットに少し埃が付いた程度で無傷で佇む、クロス。
しかし、クロスの体にはうっすらと何か紋章のようなものが浮かび上がっていた。

「また、助けてくれてありがとうね、クロ…っ！？」

恐る恐る目を開け、クロスの顔を見上げたなのははは思わず声を失った。

「俺達だけじゃなく…娘であるフェイトにまで、しかもずっと強力な…

拷問まがいの躾だけじゃ飽き足らないってか…

どれだけ…どれだけ自分の娘を…いたぶれば気が済む…

プレシア・テスタロッサ～～！！！」

なのはが見たものは本気モードのクロスよりも更に恐怖を感じる髪だけではなく、瞳すら紅く輝かせ怒りに燃えあがるクロスの顔だった。

続く

第４話　「共同作戦！」（後書き）

クロス「俺って…強いのか？」

カガヤ「まだまだ成長途中だね、現段階だとプレシアの方がまだ強いし」

ノア「私のセリフ～」

カガヤ「（無視）次回当たりからクロスの本当の力と隠された正体が空かれてきます、全部わかるのはか～なり先の話ですけど」

クロス「俺もチート全開で原作ブレイクしたいぞ～」

カガヤ「諦めろ、俺の次の作品予定でそういうのやるんだから」

ノア「何年先の事やら・・・」

カガヤ「（また無視）それでは叱咤激励などなどお待ちしております　ペコリ（ｏ―　―）ｏ）」

第5話　「つかの間の休息、そして…」（前書き）

休みの日は執筆が進む進む♪

クロスとノアの人物設定に関しては1章終了後にある程度まとめる予定です。

第5話　「つかの間の休息、そして…」

時の庭園

「ジュエルシード…まだ足りない、けどあの子じゃこの程度が限界ね。でも…」

プレシアが見ているモニターには先ほどの戦闘
そこにはうっすらと体に紋章を浮かべてなのはを庇うクロスの姿があった。

「この紋章、間違いないわね。管理局の手に渡ったのは知っていたけど
まさかこんな所で会えるとは、アレさえ手に入ればジュエルシードの数など問題ではないわ
必ず手に入れて見せる……プロジェクトA…『太極の書』を！」

そして、プレシアの目にはフェイトを看病するアルフを移したモニター

「そのために、あの子達にはもう少し頑張ってもらわないとね…
ふふふっ…あ～はっはっはっは～！」

アースラ　クロスの部屋

「そう、使ったのね。『時空転移』と…アレを」

今クロスとノアは自室でクイントと通信中

「はい、でもそうでもしないとなのは共々やられていたから」
「あのＡＡＡランク級の黒い鎧、オートアーマーと名付けましたが、あの自爆の威力は
ただの防御魔法じゃ耐えきれない威力です」
傍らにはオートアーマーの自爆とクロスの姿が映し出されている。

「おそらくプレシアはこの紋章の意味に気付いているわね。
こうしちゃいられないわ、私達の方も早く合流出来るようにするから
くれぐれも気をつけてね、今後はあなた達2人を狙ってくるわよ」
「「はい」」
「うん、よろしい♪それにしても…プレシア・テスタロッサ、非道にも程があるわね。
同じ母親として許せない！」
「俺は…母さん達に出会えて本当に幸せだった。血は繋がってなくても
本当の子として優しくしてくれたから…だからフェイトにだって幸せになって欲しい」

呟くクロスの瞳がまた紅く輝きだした。

「クロス」「マスター」
「あ、ごめん…また不安定になったみたいだ」
「全く…仕方のない息子だわ、そっちに合流したら覚悟しておきなさい♪
ううんと甘えさせてあげるから♪」
「い、いや…それはやめて！ホントやめて／／／クロノの目が痛いから！

リンディさんとエイミィさんの目が生暖かすぎてもっと痛いから！！

ってかなのはやユーノもいるんだから絶対やめて！！！／／」

「あ、そうよね～なのはちゃんに甘えた方がいいわよね～♪」

「フェイトちゃんもですよ、お母さん♪」

「それとも…男の子としてはやっぱり2人に甘えてくれた方が嬉しい？♪

ね～？♪とモニター越しにウインクしあうクイントとノア

「あぁ～もう！そんな事しに来るのなら来ないでくれえぇぇ～～！！／／／」

アースラ　ブリッジ

「ん？何か今悲鳴みたいなの聞こえたなかった？」

「はぁ、どうせまたクロスがクイントさんにからかわられているんだろう。

それよりも解析の方はどうだい、エイミィ」

2人は今アースラとクロス達への次元跳躍攻撃の発射元を割り出そうとしていた。

アースラへの攻撃は追跡機器へのダメージがひどく追跡は不可能だったが

クロス達への攻撃はノアのデバイス・ミラノールがしっかりと解析していた。

ミラノール曰く

＜これくらいしかホント出番ないですから、アハハハハ…＞

と少し病んでいた。

「解析は順調だよ。でも…3日くらいかかりそう、結構大がかりな魔法だから色々と
　追跡妨害とか手の込んだ事してて」
「そう、ジュエルシードも残り1つ……うん」

ブリッジに呼ばれたクロス、ノア、なのは、ユーノ。

「残るジュエルシードもあと1つとなりました。プレシアの本拠地の割り出しも
　3日ほどで終わります…ゼスト隊の皆さんも明日明後日には合流、決着の時は近いわ。
　そこで、なのはさん達は1度休息もかねて帰宅を許可します」

そこで意味ありげな笑顔をクロスに向ける、リンディ

「クロス君、護衛任務よ、よろしくね♪」
「はい！・・・ってリンディ艦長？なんだかすごく嫌な予感がするのですが？」

そして、高町家

「ホント、なのはさんのおかげで随分と助かっていますわ」
「まぁ、ご迷惑をおかけしてないかと心配していましたけど、何よりですよ」

口八丁でなのはの家族に今までの出来事を話すリンディ

すべて嘘…ではなく事実に多少脚色した程度で話しているので
桃子は何も疑問を持たずにただただ聞いていた。

『相変わらずの交渉術…というか誤魔化し？』
『ふふっ、クロス君もこういう事もしっかりと実に付けた方が色々役立つわよ♪』
『あははは・・・』

「さてと、それじゃあそろそろクロスのホテル探さないといけないので
なのはさんは明後日の朝にまた迎えに来ますね」
「ホテル…ですか？」

リンディと桃子の会話でクロスの中では嫌な予感がますます膨大していた。

「えぇ、私はちょっと戻らないといけないのですが、クロスも休みなので
せっかくならこの街を見て回りたいと言うものですから
クロスは1人でホテルに泊まる予定なんですよ」

ここまでは多少無理があるが事前に打ち合わせた通りの展開。

「でしたら、クロス君はうちに泊っていけばどうですか？幸い部屋も空いていますから」
「あらぁ、それは御迷惑になりますから悪いですよ」

といいつつ全然悪気のない笑顔のリンディ

「いえいえ、うちのなのはもお世話になったせめてもの御礼ですよ、

お前達もいいよな？」
「えぇ、ぜひ泊って行って下さい」
「うんうん、なのはの初めてのボーイフレンドだもん、大歓迎♪」

士郎や恭也達も続けて賛成し、あれよあれよという間にクロスの荷物が運ばれ
結局クロス（とノア）は高町家に一泊二日のお泊りが決定した。
どうやらここまでが本当のリンディとの事。

『わ～いわ～い、お泊りお泊り♪』
「ぼ、ボーイフレンド…／／／」
「……なんでさ」
『諦めなよ、クロス…』

陽気なノア
姉の言葉に顔を赤くするなのは
溜息も出ないクロス
そして、同情と憐れみの目を向けるユーノであった。

その夜、賑やかな夕食会を終え、リンディがアースラへと帰還しクロスとユーノ、なのはとノアがそれぞれ風呂に入りなのはの部屋で雑談…とは言えユーノやノアの話し声が漏れるとまずいので
部屋に防音結界を張っての雑談である。

「そういえばさ、なのははどうしてフェイトが気にかかるの？」
「えっ？」
「だって、最初は問答無用で襲われたんでしょ？普通怖がるよ」

ノアが前から気になっていた質問をなのはにした、するとなのはは

神妙な顔になり

「最初わね、すごく怖かった。けどなんだか、フェイトちゃんの目を見たら…
すごく悲しくなって。多分フェイトちゃん、1人ぼっちなのかもって」

なのはは静かに語る。
自分が少し前まで1人ぼっちだった事を
父親が大怪我をして家族総出で看病や店をしていて多忙で
学校に行けばクラスメートがいるけど、家では1人で留守番ばかりしていた事を

「なんだか、あの頃の私に見えて…フェイトちゃん、じっと何かに耐えているみたいで
だから、助けたくて！私は友達のアリサちゃんやすずかちゃんがいたから
今度は私がフェイトちゃんの友達になって、力になりたいの！」

ユーノは以前似た話を聞いていたが家族の話は初めてだった。

「ま、結局俺と同じような理由…ってわけか」

頭をかきながらクロスがなのはをまっすぐに見つめて言う。

「俺もなのはと同じ理由でフェイトを助けたいと思ってるよ。
もっとも俺の場合はそれが全部じゃないけど…大体半分ってとこかな」
「半分？」
「うん、後半分は秘密♪そういうわけだから一緒にフェイトを助け

よう。
　あ、俺よりなのはが先に出会っているんだから友達1号はなのはに譲るよ」
なのはの手を握りクロスは自分の決意を語った。
頬を染めつつも満面の笑みを浮かべるなのは、
「私もフェイトちゃんと友達になりたいです♪」
「僕も…だからみんなでがんばろう」
次々に重なる手、４人の絆はまた固まり、その思いをフェイトに届けと願う
次の日、クロスはなのはに連れられクラスメートで大親友であるアリサ・バニングスと月村すずかに紹介されたが
「へぇ～これがクロスロードくんかぁ～♪」
「うん、なのはちゃんのメールの通りかっこいいよねぇ♪」
自己紹介をするとジロジロと上から下までじっくりと見てきた。
『なのは…お前さ、２人に俺をどういう風に言ってんだよ?』
『え、えっと～……さぁ？（汗）』
念話で問い詰めるとなのはは明後日の方向を向いて苦笑するだけだった。
そうして、アリサの家でゲームをしつつ楽しい休日を過ごすなのは

とクロス

『マスター…私もアリサちゃんやすすがちゃんと遊びたいですよぉ～』

『ダメだ、今は名目上でも一応護衛任務中なんだから燃費の悪い事は避ける』

『その割には思いっきり楽しんでますよね、マスター…』

ノアは普段は手のりサイズだがその気になればクロスと変わらない身長になる事が出来る。

ただし、燃費が悪くクロスの消費魔力が大きい為よほどの事がなければ大きくはなれず、今はユニゾンではなくクロスの中で待機中である。

アースラ　ブリッジ

プリシアの居場所の解析がもうすぐで終わるかという矢先、警報が鳴り響く！

「最後のジュエルシードの反応確認！」

「ついに、見つかりましたか…場所は！」

「海鳴市とは離れた海上です！」

モニターに示された地点は海鳴市とは距離がありリンディは違和感を感じていた。

「変ね、今までは海鳴市近郊だったのに、今回は離れ過ぎているわ…」

「だから発見が遅かった…のではないでしょうか？」

「ともかく、なのはさん達にも連絡を。クロノ、行けるわね？」
「はい！」

海鳴市

なのは達は
アリサ達と別れ帰宅しようとした、その時

『マスター、何者かが近くに転移してきます！数２！』
＜私も感知しました＞

急いでノアとレイジングハートの感じた地点で向かう、するとそこには

「頼む！私はどうなってもいいからフェイトを…フェイトを助けてくれ！」

気を失ったフェイトを抱きかかえた人型のアルフの姿だった。

続く

第5話　「つかの間の休息、そして…」（後書き）

クロス「あれ？…アルフだけなのがフェイトも来ちゃったぞ？」

ノア「このまま保護されるの？」

カガヤ「あっはっはっはっ、そんなに甘く事は運ばないのだよ♪
あ、原作の決闘はちゃんとすることはするよ？」

クロス、ノア「（；「Д「）　アヤシイ」

カガヤ「ではでは順調になのはともフラグを育てていく回！でした
～感想やら批判やらなんでもお待ちしておりますのでよろしくペコリ（ｏ＿＿＿）ｏ）））」

第6話　「プロジェクトFとプロジェクトA…『太極の書』」（前書き）

3話連日投稿！！うん、俺がんばった！（笑）

第6話　「プロジェクトFとプロジェクトA…『太極の書』」

時の庭園　　数時間前

「フェイト、ジュエルシードはもういいわ、代わりにこの子をここへ連れてきて」

そう言ってプレシアはクロスの顔をモニターに映す。

「ちょっと待ちなよ、フェイトはあんたの魔法の怪我がまだ癒えきっていないんだ！
なのにこいつの捕獲なんて無謀…「お黙りなさい！」っ！」

アルフを一瞥しフェイト前に立ちしゃがみこむ。

「フェイト…私の計画にはあのクロスロードがどうしても必要なの…
だから、絶対に連れて来てね」

言葉は優しいが口調はいつもよりも冷たく言い放つ。

「はい…母さん」

フェイトはただ黙って頷くしかなかった…
しかし、言葉と裏腹にちくちくと胸の奥が痛んだ。

「フェイト…どうしてもやるの？」
「うん、母さんには必要だから…私が現ればきっとクロスが来るはずだよ」
「あの、なのはって子も一緒だと思うけど…どうするんだい？」

「・・・・」
（確か、高町なのは…だったよね。）
なのはとクロス、2人の事を思い浮かべると胸が苦しくなる。
何度落とされても私に必死に話しかけてくれた、高町なのは。
ただ魔力が高いだけの子だと思っていた、だけどあの子は最初からずっと真剣だった。
たった2回しか会っていないのにどうしても頭から離れない、クロスロード・ナカジマ。
なのはと違って管理局の人間なのに…私を捕まえる側なのに
犯罪者の私を気遣って傷まで治してくれた。
2人共同情なんかじゃない、もっと純粋な気持ちで自分に接してくれた。
だけど、母さんの望み…だから、私は迷わない！…迷わない・・・はず
「フェイト・・・フェイト！」
「あ・・・うん、あの子が来たら・・・どうしようか」
「フェイト、さっきからおかしいよ？」
「大丈夫、それよりもちょっと母さんにクロス君に何を手伝って欲しいのか聞いてくる」
「はぁ、答えるわけないと思うけどねぇ・・・」
「そんなことないよ。それに理由を言えばクロス君も協力してくれると思うから」
「それこそありえないと思うんだけど・・・」
玉座の間に戻ったがプレシアの姿がどこにも姿が見当たらない。

「こっち…かな？」

普段は近付く事も許されない玉座の後ろの扉が少し開いていて
プレシアの声が微かに聞こえてきた。

「アリシア…もうすぐ、もうすぐよぉ～・・・ふふふっ」
「・・・母さん？・・・あっ！！」
「フェイトっ！？」

扉の隙間からフェイトが見たものは…
フェイトそっくりの女の子が浮かんだ巨大なシリンダーがある実験
室のような部屋だった。

「か・・・かあさん・・・その子は・・・」
「そう・・・知ってしまったのね、でももういいわ、全て教えてあ
げる」

プレシアが語るフェイトとシリンダーの子…アリシアの真実
1人娘のアリシアを事故で亡くした事。
事故の責任を1人で負わされ、追われる身となり庭園ごと時空間へ
逃げた事。
以前関わっていたプロジェクトFの理論を使いアリシアを蘇らせよ
うとした事
しかし、生まれたのはアリシアの記憶のみを受け継いだ全くの別人、
フェイト。
2度目の絶望を味わったプレシアは特異な魔力を持つフェイトを使い
強大なエネルギーの結晶体であるジュエルシードを集め
失われた異世界、全ての始まりの場所とも言われる『アルハザード』
へ渡り
アルハザードの技術でアリシアを蘇生させる計画をたてた事。

「だけど、今あるジュエルシードじゃ全然足りない…だから
あの子を…クロスロードの太極の書を使い、私はアルハザードへ
と渡る！！」
「あっ・・あぁぁ・・・あぁあぁぁあ！！！」
「もう、あなたはダメね、壊れた人形は処分しないと・・・」

フェイトへと向けたプレシアの手元に魔力が集まる。

「さよなら、出来そこないのお人形さん」
「フェイト～～！！！！」

間一髪、アルフがフェイトを抱きかかえ転移魔法を使った。
しかし、短時間の詠唱と強制的に発動させた為、アルフは身動きが
取れなくなってしまった。

「ふふっ・・・良い使い魔を持ったわねフェイト、勿論・・・私に
とってもいい働きだけど
あはははははっ！！！！！」

誰もいない庭園にプレシアの不気味な笑い声が響く

海鳴市近郊　現在

「・・・・・・そんな」

今はアースラとモニター通信で事情を窺っていた所だった。
本来は一刻も早くアースラに帰還すべきだったが

アルフが、自分の体は限界なので口が聞ける今のうち間に
全てを話すと言ったので急きょ現場での事情聴取となった。
話を聞いたなのはの顔色は真っ青だった。
同じくユーノやモニター越しに話を聞いていたエイミィやリンディ
も顔色が悪い。
クロスとノアは、黙って聞いてたはいたがその顔は怒りに満ち満ち
ている。

「あいつ、とうとう自分からばらしやがった…くそっ、だから早く
助けたかったのに！」
「・・・マスター」
「クロス・・・ひょっとして全部知っていた、のかい？」

最初から知っていたかのようなクロスの口調から
ユーノはある疑問をぶつける。

「・・・あぁ、プレシアの狙いとか全部ってわけじゃないけど、少
なくとも
フェイトが人造魔道師って事は最初に会った時にすぐに気付いた」
「！！・・どうして・・・どうして黙っていたの！？」

思わずクロスに掴みかかるなのは。

「言ったからって…何か変わったか？フェイト自身が知らない大事
な事を
お前が知って、それでも普通に接する事が・・・
フェイトに悟られずに自然と接する事が出来たか！！？」
「なのはちゃん、マスターは最初に話そうか迷っていたの。
でもね、あの時話しても全部受け止めきれないから、だから時間
を置いていたの」

「あっ・・・ごめん、なさい」

それはある意味当然な話だった。
フェイトの出生の秘密を知ってもなのはは驚きはすれ普通に接するだろう。
ただし、それはフェイトがその事を知っていればと言う事。
対峙した時になのはが動揺すれば…最悪フェイトもそれに気付き
そして、何かの拍子で全部知ってしまえば…
現に、フェイトはクロスが以前プロジェクトFと呟いただけで異常な反応を示していた。
フェイト本人の知らないとても大事な事なのに本人が知ればどんなショックを受けるかは
今のフェイトを見れば容易に予想が付いた。

「なのは、お前は優しいし純粋だ。だからこの事は知ってほしくなかった。
少なくともフェイトより先には知ってほしくなかったんだ・・・」
「クロス君・・・」

今にも泣きそうな…いや、泣いているなのはの頭を優しく撫でるクロス。

「・・・ともかく、今は一刻も早くアースラへ帰還して下さい。
なのはさん、状況が状況なので1日早く休息を終えてもらいます、ごめんなさいね」
「いえ、今は早くフェイトちゃんを安静な所へ!」

『あらあら、随分と不用心ね…それとも、私が気付いていないと思っていたのかしら?』

「この声は!?」

突如、クロス達の頭上とアースラのモニターにシリンダーの前に立つプレシアの姿が映った。
そして、クロス達の周囲を黒い結界が覆ってしまった。
さらに空間モニターを囲むようにオートアーマーが数十体が現れた。

「っ!転移が出来ません。恐ろしく強力な結界です!」
「・・・プレシア・テスタロッサ」

『最後にようやく役に立ってくれたわね、フェイト。最初からあなたとクロスロードを
接触させるのが目的だったのよ。さもなきゃあの場で即座に消し炭にしていたわ』
「なん・・・だと」

プレシアを睨みつけるアルフだが、限界を超えて力尽きたのかゆっくりと倒れ込んだ

「なのは、ユーノ!フェイトとアルフを頼む!くそ、こんな結界、切り裂いて!」

『そんなに焦らなくても、今さら壊れた人形に興味はないわよ?
もっとゆっくりと運んでいいわよ、そうすれば2人とも楽になるのだから』

「プ・・レシア・テスタロッサぁぁ!!!」
『業火跳躍!』

我慢の限界を超えたクロスはノアとユニゾンをした
髪を赤く染め、瞳すら紅くし顔に紋章を浮かばせ
モニターのプレシアを鋭く睨みつける。

「!?あ・・っ、あぁぁ!!」

すると、プレシアが突如炎をに包まれ燃えあがってしまった。

「クロス君!ダメよ!その魔法は!!」
「いいえ、艦長、手遅れです。どうせもうバレています、だったら徹底的にやります!」
『すみません、私も…もう我慢できません!』
「でも、よりにもよってその魔法は激しく体力と魔力を消耗しちゃうんだよ!」

悲痛な顔でクロスとノアを止めようとするリンディとエイミィ
何が起こっているかわからないなのはとユーノ
そして、炎を消しゆっくりと起き上がるプレシア、その顔はまさに満面の笑みだった。

『いいわ…いいわよ。流石はプロジェクトA雄一の成功体!
流石はアルハザードの遺産、太極の書!!』

「プロジェクトA?…太極の書?」

聞きなれない単語に更に戸惑うなのは、ユーノ。
一方のクロスとノアはじっと俯いていた。

『あら、そちらのお嬢さんは知らないみたいね、せっかくだから教えてあげるわ』

「やめなさい、プレシア・テスタロッサ！やめて！！」

『そこのクロスロード・ナカジマもね、フェイトと同じ…
いえ、出来そこないでも元があるフェイトと違ってその子はゼロから生み出されたの。
アルハザードの遺産でもあり、はじまりの魔道書とも言われる太極の書に適合し
全てを破壊し、蹂躙し、支配するためだけに生み出された人造魔道師計画。
プロジェクトFや他の現存する人造魔道師計画の根本ともなった最初の計画
「プロジェクトA」その唯一の成功体、しかもその子は他の実験体の子供達や
研究所員を皆殺しにして生き残った。地獄から生み出された子なのよ！！
今私に使ったその次元跳躍魔法とその紋章が証拠よ！』

「・・・そこまで知っていたの、流石ね」
「否定はしないさ・・・全部本当の事だからな」

狂気に満ちた笑顔で話すプレシアに対し、淡々と事実を認めるクロスとノア

「あ・・・あぁ」
「クロス・・・君」

一方、アースラ内では動揺が走っていた。
天才魔道師の卵として配属された子にそんな秘密があろうとは知らされていなかったからだ。

全てを知るリンディとエイミィも深くうなだれていた。

「くっ、早くジュエルシードを封印してクロスの所へ向かわないと！」

遠く離れた場所で鮫を取り込んだジュエルシード相手に魔道師隊を指揮して苦戦しているクロノにもプレシアとクロス達の会話は届いていた。

しかし、それ以上に一番動揺しているのはなのはだった。

「え・・・ウソ？クロス君が…そんな事を？」

「本当だよ、なのは。俺はたくさんの命を奪って生き残った、呪われた子さ」

「そんな事はないわ！！」

その場にいる誰でもない声が響き、鋭い斬撃音がしたかと思うと周囲の結界が音を立てて崩れ去り、巨大な鳥が降り立ち、背から飛び降りる影４つ！

その進路を阻むように集まるオートアーマー数体を擦れ違い様に撃破した。

「遅くなってすまん、クロス」

大きな槍をオートアーマーに突き立てたまま地面に立つ。ゼスト・グランガイツ。

「自慢の息子を化け物みたいに言わないで頂戴！」

左右の拳で2体の鎧の頭を貫いた女性は、クイント・ナカジマ。

「親を名乗る資格はゼロですね、プレシアは」

両手から生み出すナイフ状の魔力弾で複数の鎧を撃破する、メガーヌ・アルピーノ

「全く、吐き気がしますよ」

降り立った4人を狙うように迫る鎧を正確無比に撃つ、ティーダ・ランスター

「我ら、フォース・ストライカーズ!プレシア、我らの子クロスに手は出させないぞ!!」

役者はそろった。

さぁ、まずは前哨戦と行こうか…

続く

第6話　「プロジェクトFとプロジェクトA…『太極の書』」（後書き）

カガヤ「ふぅ…俺がんばった！」

クロス「大切な事なので2回言いました…か？」

ノア「それだけ土日が暇だった…ってだけでしょ？」

カガヤ「いやぁ、ここから1章の決戦に向かうというんで、ちと張り切り過ぎたよ」

クロス「張り切り過ぎて中身が空っぽとか言われたりしてな？」

カガヤ「ドキッ！！」

ノア「そんな作者はほっといて、明日からはまた更新速度遅くなると思いますが、暖かい目で見守っていて下さい。

カガヤ「感想やら色々待ってまぁ～っすペコリ（ｏ＿＿＿）ｏ）」

第7話　「クロスとなのは、それぞれの死闘　前編」（前書き）

いやぁ～大体の流れ決まってると一度書き始めると止まらないですねｗｗ

第7話　「クロスとなのは、それぞれの死闘　前編」

クロスやなのは達を守るように降り立つゼスト隊。
その姿、まさに威風堂々！

「ゼスト隊…まさかこんなに早く来るとは…でもいいわ、まだ罠は終わってないもの」

1人玉座で微笑むプレシアの視線の先には、気絶したままのフェイト。

「はじめまして、なのはちゃん。色々とお話したいけど…
今はフェイトちゃん達とアースラに戻ってもらえる？」

襲いかかるオートアーマーを軽く倒し、ウインクしつつなのはに言うクイント。

「クロス、お前もだ。先ほどまでの通信は全部聞いていた。
プレシアの狙いがアルハザードならお前を狙ってくる、ここにいるのは危険だ！」

一突きで2体、一薙ぎで4体のオートアーマーを斬り倒す、ゼスト。

「…俺も戦う！」「私も！！」
「今はフェイトちゃんとアルフちゃんの手当が先よ、2人共付いていてあげて」
「こんなガラクタ、俺達だけですぐに片付けるから大丈夫だ」

それぞれ獲物を撃ち落としつつ、微笑むメガーヌとティーダに頷いたクロスはフェイトとアルフを抱え、なのはとユーノが傍に寄るとアースラへと跳躍した。

アースラ　医務室

「2人共外傷は特にありません、精神的ショックと疲労がたまっているだけですね」

アースラ医務スタッフ・リーナの言葉を聞き、ほっと胸を撫で下ろすクロス達。

「ただ、フェイトさんの方は…ショックが強すぎて、いつ目覚めるかは」

「そんな！」「なんとかならないんですか！？」

しかし、リーナは静かに首を振った。

「自分の殻に閉じこもってしまったようなものよ、無理に起こすとかえって危ないわ」

「…だったら俺が行く、俺がフェイトの精神と同化して起こします！　だってこのままだと…フェイトは今以上に後悔する事になりそうで」

それは胸騒ぎだった。

今フェイトが目覚めなければプレシアと2度と会う事が出来なくなるような…

リーナは、ユーノが付き添っているアルフの方を見てくると言って出て行った。
彼女はクロスやノアの事はリンディ達並に知っているので気を使ってくれた、とクロスは感じた。

「でも、そんな事出来るの？」
「俺の本当のデバイス『太極の書』はあらゆるアルハザードの魔法が記録されているんだ
もっとも、ほとんど封印されていて使えないけどな。
でも、今使える仲にあるんだよ、他者の精神と同調する魔法がね」
「な、なんだかすごいね…よくわからないけど」

と言われても魔法に関わって日が浅いなのはにはあまり分からない話だった。

「ともかく、はじめるよ。ノアは念のため外で待機、俺1人でいい」
「わかりました、マスター…精神同調はまだ慣れていないんですから、気をつけて」
「あぁ、分かっているさ」

そう言ってクロスは集中する。
頭の中に一冊の魔道書が浮かぶ…黄金色に輝く魔道書、『太極の書』
一般的…とはいえ、希少価値の高い他の魔道書と違い、契約するのではなく
完全にマスターのリンカーコアと一体化するのが
「インヴァールデバイス」と呼ばれる幻のデバイスである。
太極の書のページが捲られ、とある魔法の項目が開かれる。

「精神同調……シンクロ・マインド」

クロスの全身に紋章が浮かんだと思えば
ふっ、とフェイトが眠るベッドへ倒れ込んでしまった。

「クロス君！？」
「大丈夫、成功したよ。肉体が近くにないとダメだがら、このままにしておいてね」
「うん…クロス君、フェイトちゃんをお願い」

クロスに寄りかかられて眠るフェイトの瞼が少し動いたような気がした。

フェイトの精神の中

「なんとか成功したな…さて、フェイトを探すか」

そこは形容しがたい空間だった。

モニターがいくつも浮かぶ白い無重力空間。と、言えばいいのだろうか
映し出される映像はフェイトの記憶。
今よりも幼いころにプレシアの使い魔だったリニスに魔法を教わっている所
プレシアと仲良く食事をしている所…ただし、映像にノイズが走っている。

「これは…ノイズがある映像はフェイトじゃなくアリシアの記憶、か」

フェイトの記憶にもプレシアと仲良く暮らしているものがあるにはある。
しかし、それはごくわずかで、残りの映像に映るプレシアはどこか冷たい顔をしている。

「…フェイトだって、自分の娘だろうに、なんでそんな冷たい目で見ていやがる！」

歯ぎしりしながらもクロスはフェイトの心を奥底まで進んでいく。
そして、もっとも奥、真っ黒い空間の中にフェイトは佇んでいた。

「見つけた、フェイト！」
「・・・だ・・れ？」

虚ろな目でクロスを見るフェイト

「俺だ、クロスだ！助けに・・・なっ！？」

フェイトへ伸ばした手が黒い煙のようなものに阻まれる。

「これは…なんだ、魔法？深層心理の奥底にまるで隠すように入り込んでいる…」

その時、クロスの脳裏に初めてフェイトと出会った時の出来事が蘇る。
突然、フェイトが沈黙したかと思うと外部干渉により魔力が増大し襲いかかってきた。
あの時に感じたものにこの煙は似ていた。

「まさか、この魔法は！？……しまった！」

黒い煙はフェイトの心を包みこみ、クロスは外へと吹き飛ばされてしまった。

アースラ　医務室

「うわっ！」
「クロス君!?」「マスター！」

いきなりクロスの体が壁へと吹き飛ばされ、駆け寄るなのはとノア。

「っつ！…これは罠だ！フェイトをわざと逃がし、俺達に接触させ大量のオートアーマーで俺を捕獲する。でもそれだけじゃなかった！
万が一それが突破されたとしても必ず俺がフェイトを保護する。
そして、隙を窺い俺とフェイトだけになった時に精神操作魔法で…」

そこまで言ったクロスの目が大きく開く。

『この時を待っていたわ…さぁ、来てもらうわよ』

なのはとノアが後ろを振り向くと、異様な魔力を纏ったフェイトが浮かんでいた
そして、フェイトの口から出た声はまぎれもなくプレシアの声だった。

「なのは、逃げ『もう手遅れよ』…くっ！」
「きゃっ！」

次の瞬間、医務室は無人となった。

アースラ　ブリッジ

「医務室にて膨大な魔力反応！…あっ、消えました！！」
「なんですって！？あそこには…」
「生体反応もロスト！全員消えました！」
「しまった…やられたわ、すぐにゼスト隊とクロノ達を呼び戻して！」

時の庭園　玉座の間

「なのは…なのは！」
「うぅ…クロス君？ここは…」
『のんびり寝ている暇はないみたいだよ、なのはちゃん』

目を覚ましたなのはが周りを見渡すとみた事もない部屋。
次に目にとまったのは、玉座に座るプレシアと傍に立つフェイトの姿だった。

「フェイトちゃん！」
「ダメだ！…今のフェイトは普通じゃない。魔法で精神を操られているんだ。」

駆け出そうするなのはを抑えるクロス、ノアとユニゾンをし戦闘態勢に移る。

「あなたに保護されて隙を見せた時、精神操作魔法で操りここへと転送させる。
この子があなたを連れてくる事に躊躇ったりしなければこんな手間はいらなかったのに
まぁいいわ、出来そこないなりに役に立ってくれたし」
「まだ、言うかぁ！！」

顔に紋章を浮かべ紅の瞳でプレシアを睨む…≪業火跳躍≫
しかし、炎はプレシアを焼く前にすぐにかき消された。

「無駄よ、あなたはまだ太極の書を使いこなせていない…
封印も全然とけていないのでしょう？古代とはいえそんな低級魔法
一度見ただけでかき消せるわ」

太極の書には最初5段階の封印がされていた。
クロスが昔、覚醒させた時に1つ解けた。
そして、最近2つ目の封印が解除されたが、まだ扱える古代魔法は少なく
使い慣れていないため威力も低かった。

「本当に色々くわしいんだな、だから俺やゼスト隊のみんなもお前を探していたんだけど」
「私は直接関わっていないけど、プロジェクトFの研究の時に資料を少しね」
「その資料はどこにある！！」
「あら、ひょっとしてプロジェクトAの痕跡を全部消すつもりかしら
忌わしい過去は自分の手で消し去りたい？」
「貴様！！」「クロス君、落ちついて…ね？」

今にも跳びかかりそうなクロスに優しく語りかけるなのは

そんななのはを見ていくらか落ちついたのか
クロスの瞳は紅からユニゾン時のオレンジ色へと戻っていた。

「仲がいい事、うちの出来そこないも気にかけていたし、その女泣かせも
プロジェクトAの産物かしら？」
「そんな挑発にはもう乗らないよ。痕跡を消すのだって
俺みたいな殺戮兵器を生みださせない為だ！」
「母親だからって自分の子を玩具みたいに扱わないで！
フェイトちゃんを元に戻して！」

そう言ってクロスはプレシアに剣を突きだす。
隣でなのはもレイジングハートを構える。

「素直に力を貸すとは思っていないわ、力ずくでアルハザードへの門を開けてもらうわよ！」

玉座から降り、杖を出すプレシア。
そして、瞳を紫に染めたフェイトも無言でバルデッシュを構える。

「フェイト、私はクロスに用があるの…あの子は邪魔だから排除なさい」
「はい・・・母さん」

言うが早いかフェイトはなのはへと突進。
クロスが反応しようとするがプレシアからの雷撃に阻まれる。

「きゃっ！フェイトちゃん、目を覚まして！」
「・・・母さんの邪魔をするものは排除する」

バルデッシュの斬撃をレイジングハートで受け止めたが勢いは止まらず
2人は玉座の間から外の広場へと押し出される。

『なのは！』
『大丈夫、訓練を思い出してなんとかフェイトちゃんを元に戻して見せるよ！』
『…ごめん、俺はプレシアの相手に精いっぱいで助けにいけそうにない』
『なのはちゃん、フェイトちゃんの目を覚ますには強力な魔力ダメージを与えて！
目が醒めなかったのも精神操作魔法のせいだから！』

念話でフェイトを元に戻す方法を教えたクロスとノアはプレシアへと集中する。

「さぁ、失われた古代の…アルハザードの力を私に見せてちょうだい！！

その時、時の庭園は静かに振動し、どこかへと動き出していた。

続く

第7話　「クロスとなのは、それぞれの死闘　前編」（後書き）

クロス「おぉ～最終決戦らしくなってきたじゃないか」

ノア「やっと私とマスターの本格的な戦闘ですねぇ♪」

カガヤ「1話とかでも訓練やフェイト達をあしらう程度の戦闘だったからなぁ、本編での本格的な対人戦闘はこれが初！」

クロス「そういえば母さん達はいい所に出てきて出番おわってないか？」

カガヤ「まぁゼスト隊いるとプレシアの策見破られるかもしれないからまだ戦っててもらいました」

ノア「なんか消化不良？？」

カガヤ「ゼスト隊は本編でもゼスト以外の戦闘描写なかったからどんどん戦わせたい！だからこの1章でも次の2章でも大活躍するよ♪」

ノア「わ～い、早く母さん達と一緒に戦いたい♪」

カガヤ「そのためにもプレシアとの決着をつけないと…と言うわけで次回後編でのクロスVSプレシア、なのはVSフェイトにご期待下さい」

ノア「感想や質問やら贈り物やら郵便テロなどもお待ちしてますよ♪」

カガヤ「最後さらっと不吉な事言うな！！」

※魔法・技紹介、ちこっと書き加えました。

第8話　「クロスとなのは、それぞれの死闘　後編」（前書き）

相変わらずの駄文かと思いますが・・・どうぞ読んでください。
今回描写に苦労した～！
独自解釈まっしぐら～♪

第8話　「クロスとなのは、それぞれの死闘　後編」

アースラ　ブリッジ

「ダメです。庭園周辺に強力な結界が張られていて転送出来ません！」

クロス、なのは、フェイトが医務室から消えた後
ゼスト隊とクロノが帰還し、3人はプレシアの元へ転送された事がわかり
時の庭園の座標も解析完了したので急ぎ、向かおうとしたが
強力な結界に守られていてゼスト隊も誰も庭園へ転送出来ないでいた。

「くそっ、こうしてる間にもクロス達に危険が迫ってるというのに」
「落ちつけ、ティーダ。庭園に何も変化はない。ならまだクロス達は無事だろう。
　プレシアの目的がアルハザードに行く事ならば何かしら変化があるはずだ」

逸るティーダをたしなめゼストは無言で庭園をみつめるクイントに声をかけた。

「クロスなら大丈夫だ、俺達ゼスト隊の自慢の息子だからな…」
「はい、隊長…」
「あっ！庭園に変化が！！？」
「何！？」

庭園全体が細かく振動したかと思うとみるみるうちに形状が変わり。

岩づくりの不格好なモニュメントからまるで巨大な神殿のようになった。

「…何かの準備が整ったようだな…」

「……クロス」

時の庭園　玉座の間

「今…何をした？」

プレシアが杖を掲げたかと思うと地震と何かがうごめくような音が響き渡った。

「さぁ？私を倒せばわかるんじゃないかしら？」

「あぁ…最初からそのつもりだ！！」

『ソニック・パースト』

クロスは音速に近い速さでプレシアの左斜め後ろへと移動し剣を振りおろそうとした。

しかし…

「……サンダー…ウィップ」

プレシアが唱えた途端にクロスに雷が降り注いだ。

クロスは攻撃を止め、回避行動に入り間合いを開けたが

降り注いだ雷がまるで鞭のようにしなりクロスへと迫る。

「くっ…シャイン・ホイール！」

身をよじりながら上空を交わしつつ、プレシアへ向けて銀色の車輪を放つ。
雷の鞭を斬り裂き、プレシアの元へと走るが

「ライジング・ランサー、ブレイクシュート」

プレシアが杖をかざすと数個のスフィアが即座に作成され電撃の槍を射出され
シャイン・ホイールを簡単に貫通しそのままクロスへと向かった。

「鏡面剣！」

打ち返そうとしたが、剣が槍に触れた瞬間

「っ！ぐあああぁ～！！」
『きゃあぁ～！』

槍が弾け、クロスの全身を電撃が襲い、立て続けに残りの槍が直撃する。

「『～～！！！！』」

声にならない叫び声をあげ全身から煙を出しながら床に崩れ落ちるクロス。

＜マスター、プレシアの魔力は異常すぎます。外部からの供給があるようです＞

ラファールが玉座の間に何か仕掛けがあると言ってきた。

「だったら…そこの仕掛けをみつけ・・・っ！？」

なんとか起き上がろうとするクロス。

しかしプレシアはさらにいくつものスフィアを作り、魔力を溜める。

「こんな程度なの？早くアルハザードの古代魔法を私に見せなさい！！」

無慈悲に先ほどの何倍もの数の雷の槍がクロスへと・・・

一方、なのは。

「あ、ぐっ…フェイトちゃん！」

精神操作で強化されたフェイトの攻撃はかわすのがやっとだった。

なのはも何度か魔法を放つが高速で動くフェイトに全て避けられてしまう。

それでも諦めずに再度ディバインバスターを撃つ。

「当たって！」

「・・・・・」

しかし、またもや交わされ反対にサンダースマッシャーを直撃でくらってしまった。

＜Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ＞（ラウンド・シールド）

レイジングハートがシールドを張るが、シールドごと壁に叩きつけられる。

「うぅ…ありがとう、レイジングハート」

＜気にしないで下さい＞

なんとか体勢を立て直そうとしたなのはの目に移ったのは

「サンダー・レイジ」

「！！！」

巨大な雷を携えたフェイトの姿だった

アースラ

「構わない、俺を庭園上空へ転送してくれ。俺が結界を斬り裂くその裂け目へ
皆をとばしてくれ」

「無茶です、庭園の周りには魔力が消滅する虚数空間が広がっているんですよ！」

「このままでは手遅れになる！次元震まで発生したのだ、一刻の猶予もない！」

メガーヌが必死でゼストを止めようとする。

庭園内部に複数の魔力反応が現れたかと思うと小規模ながら次元震が起こったのだ。

そこでゼストは自分が結界を斬り裂くと言いだした。

しかし、庭園の周りには次元震によって魔力を全てかき消す虚数空間が発生し

万が一飲み込まれたら魔力の一切が消滅し二度と帰って来られなく

なる危険がある。

「確かに…迷っている時間はありませんね…エイミィ、転送を。ゼスト隊長御武運を！」

「ゼスト・・・」

恋人の心配をするメガーヌの肩をそっと抱くクイント。

そちらを一瞥し、ゼストは庭園上空へと跳んだ。

時の庭園　上空

「確かに、普通の結界ではないな…だが、これ以上好きにはさせない、疾空突覇！！」

全ての魔力を槍の矛先へと集中すると、ゼストは結界へと突撃した。

次の瞬間、結界に大きな亀裂が走り、巨大な割れ目が出来た。

玉座の間

「な、なんなのこの衝撃は！？」

膨大な魔力で張った結界に亀裂が入った事で庭園全体に衝撃が走った。

そして、プレシアが隙を見せたその時。

「スパイラル…レーザー！！」

赤と青のらせん状の光が一直線にプレシアへと向かう。

上空へとのがれたプレシアだが光はお構いなしに玉座周辺の壁を削る。
そして、玉座の後ろの壁が大きく崩れ、中に巨大な装置が見えた

「くっ・・・気付いたのね」
「やはりそうか…ジュエルシードの魔力を自身に上乗せしていたか…
そのまま上乗せしたのでは肉体が耐えきれないからその装置で調整をしていたな！」

クロスは両手に紋章を浮かべ、古代魔法の『魔力増強』を発動させる。

「魔力増強…シャイン・ホイー・「かかったわね！」な・・・にっ！？」

装置を破壊するために威力や射出数を増強したシャイン・ホイールを発射させようとした途端
クロスの足元に魔法陣が現れ、いくつもの鎖が体を捕縛し魔法陣へと縛り付けられてしまった。

「また罠にかかってくれたわね、あなたが古代魔法を使うのを待っていたのよ。
言ったでしょ？古代魔法を私に見せなさい。って、不用心でまだまだ子供ね」
「く・・・そっ！」
「それとあなたの読みは半分ハズレ、あの装置は私への魔力供給だけじゃないの…
ジュエルシードと古代魔法を使用した時のあなたの魔力「魔光力」を使って
アルハザードへの門を開ける、時空ゲートなのよ！！」

古代魔法を使用するにはただの魔力では使えない。
ゆえに『太極の書』を発見した科学者達は、プロジェクトAを立ち上げ
今とは違う古代の魔道師達が持っていた特別な魔力「魔光力」を復活させようとしたのである。
もっともそんな事しなくても太極の書には持ち主の魔力を魔光力に変換する機能があるが
プレシアは魔光力でさらにジュエルシードの魔力を高めアルハザードへの道を開くつもりだったのだ。

時の庭園　通路

ゼスト隊とクロノ、ユーノ、リンディが結界の裂け目から庭園内へと突入してきた。
通路内はオートアーマーが多数出現していたのでアースラの待機局員では対抗できないため、このメンバーとなった。

「リンディ艦長が庭園中枢の制御ブロックへ行き、次元震を抑える。俺とクロノで護衛だ。ティーダとユーノで出来る限りの資料を集める。
クイントとメガーヌはクロスとなのはの元へ向かう、以上だ」

ゼストの指示に全員が頷く。
次元震が酷くなり庭園が崩壊する危険もあったために分散して当たる事にしたのだ。
どの通路もオートアーマーが多数いたが
皆はクロスとなのはを…次元震の影響を受けている海鳴市や世界を救うために
突撃する！

玉座の間

「これで準備は全て整った…あとは・・・「母さん！」フェイト？」

突然の声に驚き扉へと向くと、そこにはなのはとフェイトの姿がところどころに傷があり、バリアジャケットはボロボロな2人だがしっかりとした足取りでクロスの元へと向かう。

「ど、どうして…っ！魔法が私の魔法が完全に解かれている！？」
「なのはが・・・助けてくれました、私は母さんに伝えたい事があって戻ってきました」

少し時はさかのぼる

ゼストが結界を斬り裂いた衝撃はなのは達の元へも届き

「・・・！」
＜今がチャンスです！＞
「うん！ディバインバスター・フルパワー！！」

吹き飛ばされながらも集中し溜めこんだ魔力を一気に放射。
フェイトを囲むように拡散されたディバインバスターがフェイトに直撃する。

大爆発、そして煙…

その中で現れた、ボロボロにしながらも凛と佇むフェイト。
なのはの起死回生の一撃も耐えきり尚且つ精神操作魔法も解けていなかった
これでなのはの手札は切れた…とフェイトは思っただろう。
しかし、まだなのはのターンは終わっていなかった。

「ただでさえ私よりも強いフェイトちゃんに魔力ダメージを与える…
必要なのは、戦略と…切り札！」

クロノ直伝の束縛用魔法『バインド』でフェイトの手足を拘束する。
フェイトが上空へと向くと
そこらじゅうからなのはの元へ光の粒が集まっていた。
それはさながら「星の光（スターライト）」

「受けてみてディバインバスターのバリエーション！
これが、クロス君との特訓の成果！！」
＜Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ＞
「スターライト・・・ブレイカー！！！」

空間全てを光で包みこむような膨大な砲撃・・・
自身だけでなく周囲の魔道師が使用した魔力をも集積して放つ集束魔法。
なのはが先ほどからいくら避けられても砲撃を放っていたのはこのための布石の１つ。
魔力が足りないのならば集めればいい、どこから？
自分だけでなく相手の魔力をも使用することで威力を増大させる。
なのはとレイジングハートが考えた戦略の結果。
クロスやクロノとの特訓で得た集中力の結果…
それがこの大魔法……スターライトブレイカー！

「う・・・うぅ、ここは・・・庭園？」

プレシアから自分の真実を告げられショックで精神が崩壊しかけて
アルフに連れられクロス達に保護された事はおぼろげに覚えている。
誰かに呼ばれ、手をのばしたような気もした・・・
そう思い自分の手を見ようと顔を上げると
涙ながらに優しく手を握るなのはの姿が・・・

「フェイトちゃん！・・よかった、本当によかった！！」

いきなり泣きながら抱きつかれフェイトは混乱した。
なぜ、なのはがここにいるのか。
なぜ、自分もなのはもボロボロなのか
なぜ・・・こんな自分に泣いてくれるのか。

「は、離れて・・私なんかほおっておいて！！」

軽く突き飛ばし這いずるように後ろに下がるフェイト。
でもなのははフェイトへと近づき手を伸ばす。

「全部・・・知ったよ、フェイトちゃんの事。でもね…
私にとって、フェイトちゃんはフェイトちゃん！
悲しそうな・・寂しそうな、でもとっても綺麗な瞳の・・・
私とクロスくん、ノアちゃん、ユーノくんが友達になりたいフェイトちゃんだよ！」

そう言って優しく微笑むなのはの顔が・・・よく見えない。
涙で・・・見えない、けれども視線をそらせない。
なぜなら・・・この笑顔は母親の笑顔に似ていたから
自分の記憶かは分からないがそれでもフェイトはこの笑顔を知って

いる。
フェイトは母親の笑顔が大好きだった。
昔のように笑って欲しかった、ただそれだけのために今まで頑張った。
ただ、それだけのために・・・

あぁ・・・そうだ、私は私・・・
プレシア・テスタロッサの娘、フェイト・テスタロッサだ。
母親の笑顔が見たくて・・・その気持ちはコピーでもなんでもない、私の気持ち。
だったら伝えなければいけない、例え何を言われようとも。
私はあなたの娘だ、と。
自分の状況を理解する前にもっと大切な、自分がしなければいけない事を理解した。
ならば、やる事は1つ。

2人の魔法少女は手をつなぐ、もう言葉はいらない。

行こう。

うん！

続く

第8話　「クロスとなのは、それぞれの死闘　後編」（後書き）

クロス「おい！俺やられっぱなしじゃん！」

カガヤ「罠に落ちまくりだねぇ…でも仕方ないじゃん！相手オーバーSだぞ！お前古代魔法の力借りなかったらＡＡＡだし！」

クロス「そんなの知るか！だったら俺とノアの設定をかけ！」

カガヤ「あ～それは1章終わったらちゃんと書くってば」

ノア「なのでキャラ設定はもう少しだけお待ちください♪」

カガヤ「ではでは次章で死闘決着です！感想その他もろもろお待ちしておりますペコリ（ｏ＿＿）ｏ）」

第9話　「全ては虚空の彼方へ」（前書き）

プレシア戦、完全決着！

駄文ですが・・・燃え尽きたぁ～

第9話　「全ては虚空の彼方へ」

時の庭園　玉座の間

なのはの活躍で正気に戻ったフェイトがプレシアと対峙する。

「・・・それで、一体何の用？」
「あなたに言いたい事があって来ました。
私は・・・私はアリシア・テスタロッサじゃありません。
あなたが作ったただの人形なのかもしれません。
だけど、私は・・・フェイト・テスタロッサはあなたに生み出さしてもらって
育ててもらった、あなたの娘です！」
「・・・ふふっ、あははは！だから何？もう関係ない。
もうすぐ・・もうすぐ私のたった1人の娘、アリシアは蘇る！
アルハザードの力で、蘇るのよ！！」

プレシアの瞳には狂気しか宿っていなかった。

「ばか・・・野郎！なんで、お前の娘をちゃんとみない！お前の目は節穴か！」

魔法陣に縛り付けられたままのクロスが叫ぶ。

「フェイトちゃんを・・・今ここにいるあなたの子供をちゃんと見てあげて！」
「黙りなさい！私の娘は・・・アリシアだけよ！」

なのはの言葉も狂気に包まれたプレシアに届かない
そんなプレシアに静かに…一歩ずつ近づくフェイト。

「それでも私はあなたをこう呼びます、どんなに否定されても拒絶されても呼びます」

か　あ　さ　ん

プレシアの目に映ったのは、フェイトとアリシア。
2人が笑顔で自分を呼び手を伸ばす姿。
違うと目の前にいるのはアリシアじゃない、ただの出来そこないの人形だ。
そう、否定しようとも・・・目に涙がうかぶ。
アリシアじゃない・・・それでも、目の前にいるのは自分の娘だ、と一瞬でも・・・そう思ってしまった。

「違う・・違う違う違う!!ちが～～う!!!」

喚き散らしながら辺り一面に雷を落とすプレシア。

「クロスを・・・お願い!」

フェイトはそう言うと雷をかわしながらプレシアの元へと向かう。
なのははその言葉にうなずくと。クロスの元へと向かい、防御魔法で必死に防ごうとする。
しかし、さっきの戦闘でのダメージが残っており、徐々に押されていく。

「だ・・めだ、逃げろ!」
「ううん、私助けられてばかりだから・・・だから今度は私が守る

！」
『まだかノア・・・まだなのか！』
『もう、少し！』

「魔力反応さらに増大！計測出来ません！！」
「・・・お願い、みんなを守って」

内部の状況がまだ掴めないエイミィはただ祈る事しか出来なかった。

プレシアの元へとフェイトあと少しと言うところで

「消えなさい、消えて…私の娘の姿を偽る目障りな人形がぁ！！！」

プレシアの見開かれた目がフェイトを捉える。
と、同時に荒れ狂う雷がいっぺんにフェイトへと襲いかかった。

「フェイトちゃん！」「フェイトぉ～！！」
「っ！！」

その時、赤い影がフェイトを抱え、間一髪助けだした。

「なにっ！あの使い魔！！」
「あ、アルフ！？体は大丈夫なの！？」
「へへっ、これくらいなんともないよ、それに今はフェイトの方がボロボロじゃないか。
　遅くなってごめんね・・・ちょっと迷子の道案内をしていたからさぁ」

アルフがそう言って扉の方向くと

「ウイングロード！！」

詠唱と共に青紫色の光の道が扉の外から伸び、玉座の間に張り巡らされた

「クイック・ダガー！」

張り巡らされた光の道の間をすり抜けるように複数のダガー状の魔力弾が飛んできた。

「くっ、管理局がいつの間に！」

魔法シールドを展開して防ぐプレシア。
その時どこからかローラーのような駆動音が響き渡った。

「ナックルバンカー！」

光の道を高速で走りながら肉薄したクイントが
魔力の籠った右手に装着されたデバイス、リボルバーナックルを
プレシアが展開しているシールドへと叩きつける。

「ぐぐっ・・・貫けぇ～！！」

掛け声と共にシールドにヒビが入り、クイントの拳がプレシアの胸を強打する。

「がふっ・・・うぐっ！」

プレシアはそのままジュエルシードの装置横の壁へと激突した。

「か・・あさん?メガーヌさん?・・」

クロスの元へと降り立つフェイトとアルフ。
そして、ウイングロードを解除し駆け寄る、クイントとメガーヌ。

「ごめんなさい・・・その・・道に迷っちゃって」
「来る途中に道を惑わす罠がしかけられていて突破するのに苦労したのよ
アルフちゃんに案内されなかったらもっと手間取っていたわ」
「ははっ・・・母さんらしいや」

バツが悪そうなクイントとメガーヌに苦しげならも笑顔を浮かべるクロス。

「母さん?」
「えぇ、はじめまして。私はクイント・ナカジマ。クロスの母親です♪」
「そして私がメガーヌ・アルビーノよ」

いきなり目の前に現れたクロスの親に動揺するなのはとフェイト。

「ふぇ、フェイト・テルタロッサ・・・です1
「は、はじめまして!!た・・たかまち!・・いたっ」
「あらら大丈夫?でもそれどころじゃなかったわね、ごめんなさい。
積もる話はまたあとで
今は・・・メガーヌ、解除出来る?」

クロスを縛り付ける魔法陣を解除しようとメガーヌは手を伸すが

「触らないで！下手に触ればメガーヌさんも取り込まれる！」
「そんな、じゃあどうすれ・・・？」

困惑しクロスを見たメガーヌの表情が変わった。
クロスに何か違和感が・・それも魔力的な。

「クロス、あなた・・・」
「・・・せい・かい・・・くっ、もう少しの我慢だから・・俺は大丈夫」

決して強がりなどではないクロスの笑みに違和感の正体に気付き驚くクイントとメガーヌ。

「はは・・・何を談笑し合っているの？私はまだ、終わってないわよ！」

そう言ってプレシアは立ちあがり再度雷をクイント達へと放つ。

＜Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ＞

クイントとメガーヌのデバイスが魔法陣を張りこれを防ぐ

「なのはちゃんとフェイトちゃんは手を出さないで、アルフちゃん、クロス共々お願いね」
「は、はい！」

なのはとフェイトは戦闘のダメージが酷いばかりかほとんどの魔力が残っていなかった。

「プレシア、管理局員として以上に１人の母親として私はあなたを

許さない！
　自慢の息子をよくも痛めつけてくれたわね！」
「あなたは自分の寂しさを紛らわせたいだけ…だからここで終わらせます！」

クイントは拳を握り、ローラブーツをフル稼働させプレシアへと突撃した。
同時にメガーヌは魔力弾を矢継ぎ早に速射する。
威力は低いがプレシアに魔法を使わす暇を与えない。
その隙にクイントが間合いへと飛び込み、リボルバーナックルの連打を浴びせる。

「あなただって・・・いえ、あなたの場合は血も繋がってないのよね。なのに
　自慢の息子だなんて」
「おかしい？誰がなんと言おうとクロスは私の愛しい息子よ！」
「・・・かあさん・・・」

嬉しい事を言われているが、クロスは実際かなり恥ずかしかった。

「・・・うっとおしい！誰が来ようと私を誰も止めらないのよ！」

体から衝撃波を出し、クイントを吹き飛ばしたプレシアは魔力を杖に溜めようとした。

『いいえ、もう終わりです。プレシア・テスタロッサ」

突如モニターが現れリンディの姿が映し出された。

『庭園内のオートアーマーはゼスト隊とクロノ達が全て破壊しまし

た。
　次元震も私が抑えています、抵抗せず、大人しくしなさい』
さっきまでは細かい震動が庭園内でしていたが今はほとんど感じなくなっていた。
「お、おのれ～・・・まだ私にはジュエルシードが・「それももう終わりです！」・何！？」
装置の影からノアが姿を現す。
「私が魔法陣を解析して解除しました♪」
「馬鹿な、お前はユニゾン中で「まだ気付かないのか？」えっ！！」
見ると、クロスの縛めは解かれて立ちあがっていた。
クロスの髪はユニゾン時と同じ紅い髪のままだったが・・・
「こんなの魔法でどうにでもなるぞ？」
言った途端にクロスの髪は赤から元の薄い赤茶色に戻っていた。
「馬鹿な、お前に魔法を使う余裕などなかった！」
「確かに、俺にはなかったさ。使おうとしてもあの魔法陣のせいでうまく発動しなかったしな
　けど、ユニゾンを解いて同時にユニゾン状態だと思わせる幻術をかけていたんだよ
　俺の自慢の相棒がな」
ニヤリと笑うクロスの元へと銀色の本をかざした、ノアが肩へと降りた。

「そ、その本は・・・まさか！」
「そう、太極の書だけじゃないんだよ。ノア用にもう1冊あったんだよ…
アルハザードの遺産がな！」
「馬鹿な、遺産の魔道書は一冊のはず！」
「しらなくて当然よ…あの研究所の奴らですら知らない事だったものこの子【光天の書】は私とマスターだけの秘密～♪」
いたずらっぽく笑うノアの手の上で光天の書がキラリと輝いた。
「そして・・・えい」
ノアが指を鳴らすとプレシアに流れ混んでいた魔力が消えた。
「あなたとジュエルシード装置の繋がりもシャットダウンしました！」
「な、なんですって?おのれ・・おのれぇ！！！」
怒ったプレシアは自身の魔力で雷の砲撃を放った。
今までよりも威力は低めに感じるがそれでも十分な力を秘めている。
だが・・・
「ほいっと♪」
「なんですって！?」
クロスが右手を前に出すと雷は掌に吸い込まれてしまった。
「俺にも雷の魔力素質があってな、お前がバカスカ電撃ばっか撃つから

ラファールに解析させて俺の魔力と同調させた、もうお前の雷は通用しない！」

「そんな事が短時間で出来るわけないでしょ！」

「ラファールとミラノールの魔法解析能力を甘く見たな、ラファールもミラノールも
アルハザードの遺産から生み出した超がつくほどの高性能デバイスなんだよ！」

＜＜えっへん♪＞＞

クロスの持つ剣とノアのグローブから得意げな声がした。

「母さん、もうやめて！」

「プレシアさん！！」

「うるさい・・うるさいうるさい、私の邪魔をするなぁ！！」

フェイトとなのはの叫びを無視し
プレシアの体から灰色の魔力が放出され杖へと集まる。

「そんな無茶よ！あなたの体が壊れてしまうわ！」

メガーヌの言葉も聞こえていないプレシアは更に魔力を杖へと注ぎこむ。

「仕方ないな・・・来いよ、お前の全部吹き飛ばしてやる！！」

クロスもノアとユニゾンして、剣をしまいなのはやクイント達の正面に立ち

紋章が浮き出る両手を前に突き出し自分の青とノアの赤の魔力を集中させる。

「「「「「クロス（くん）！」」」」」

全員が叫ぶ中クロスはなのは達へと振り向き

「俺達がやる、手を出さないで。それと全員防御魔法を！巻き込まれてもしらないからな！」

プレシアの杖に灰色の、クロスの両手に青と赤が混ざり強く輝く魔力の球体が・・・

「ラストスペル・・・」

「ハイブリットシャイン・・・」

「「ブレイカー！！！！」」

スターライトブレイカーすら上回りそうな２つの巨大な集束魔法が激突する。

「ぐっ・・・アリシア・・・」

「なぁ、プレシア、なんであんたは自分で幸せを捨てたんだ？

確かにアリシアは死んだ、愛しい娘を失くしてどんな気持ちかは分からないさ。

でも、あんたは新しい家族を、娘を得たじゃないか。なんでそれで満足しなかった」

「私は・・・アリシアを蘇らせたかった・・・」

「あんなに母と慕うフェイトとアリシア、親を想う気持ちに何の違いがある！

偽りも何もない、2人ともあんたの自慢の娘だろうが！！」

「！！！！！」

そうだ、フェイトの笑顔にアリシアを思い浮かべられないから・・・

だから自分の娘、アリシアの生まれ変わりだと思えなかった。

でも、それで良かったのかもしれない。

アリシアはアリシア、フェイトはフェイト・・・少しでもそう思う事が出来たら

あの笑顔も愛おしく感じる事が、フェイトを認める事が出来ただろう・・・

それが出来なかったのはメガーヌの言うとおり、ただ寂しかったのだ。

アリシアが死んだのにアリシアの顔をしてあんな笑顔を浮かべるフェイトを見て

アリシアはもういないと…はっきりと思い知らされた、それが寂しく悲しかった。

「ごめんね、アリシア。母さん…あなたの笑顔が見たかっただけ、だったのにね・・・

ごめんね・・・フェイト」

プレシアの瞳から涙が、アリシアを失って泣きつくしたと思っていた涙が一筋流れ落ちた。

そして、撃ち負けたプレシアの魔法を貫いて

クロスとノアの砲撃の光ががプレシアを包みこみ・・・

そのままジュエルシードの装置を巻き込んで、庭園外の虚数空間へと飲み込まれ…消えた。

続く

第9話　「全ては虚空の彼方へ」（後書き）

カガヤ「祝！ＰＶ１万・・・というか１万１千突破！！」

ノア「ユニークも２０００人間近ですよぉ～♪」

カガヤ「いやぁ～こんな長文…かはわかりませんが駄文にお付き合い頂いて評価も頂いてありがとうございます！」

クロス「・・・感想はまだないけどな」

カガヤ「それはいうなぁ！！紫奥義『弾幕結界』！！」

クロス「うぎゃあああぁぁ～！！な、なぜそのスペカを持っている・・・」

カガヤ「もちろん、この小説完結させたら東方の小説を書くからだ♪」

クロス「だから何年先の話だ・・・ガクッ」

カガヤ「さて、悪は滅びた！というわけで叱咤激励・文法の不備誤字脱字なんでもかまわないので感想お待ちしております」

ノア「次回は第１章最終話『笑顔』です、お楽しみに～♪」

第１０話　「本当の笑顔」（前書き）

さらにもえつきたぜ…２つの意味でもえつきたぜぇ～

第１０話　「本当の笑顔」

今、全てが終わった。
ジュエルシードの制御装置はジュエルシードごと虚数空間に消え
プレシア・テスタロッサも壊れた杖を残して消えてしまった・・・

「か、母さん？・・・」

その場に崩れ落ち、茫然とするフェイト。
何を言えばいいか分からずにただフェイトに寄りそうアルフ。
なのはもまたかける言葉が見つからず
クロスの放った魔法が空けた巨大な穴へと視線を移す。
そんな中、クイントとメガーヌは辺りをキョロキョロと見渡していた。

「・・・お～い、ここここ」

ガレキの影からクロスの声がする。
魔法を撃つまではなのは達のそばにいたはずなのだが
気が付けば消えていた。

「全く・・無茶ばかりするんだか」
「ははっ、流石に今回は無茶の連続だったかな」

クイントの呆れ声にクロスも苦笑いを浮かべガレキから出てくる・・・
気絶したプレシアを抱きかかえて。

「母さん！」

クロスとプレシアの姿を見るや否やフェイトが文字通り飛んできた。
「俺の魔法が当たる直前に跳躍で助け出したんだよ。
大丈夫、無茶な魔法の組み上げ方したからオーバーフロー起こしただけさ」
「ありがとう・・・クロス君の方は大丈夫？」
「あぁ～平気…と言いたいけど、無茶苦茶眠いんだよ」
「眠い？」
なのはも駆け寄り聞いてきた。
「古代魔法は今のクロスには負担も消費も大き過ぎるのよ」
「だから使用を控えるように言ってたのに…この子ったら」
「あだっ！？」
メガーヌの説明に続けて、軽くクロスの頭を小突くクイント。
その様子を見て、普段とは違う子供っぽいクロスの姿に思わずなのは達は笑ってしまった。
「うぅ・・・私は・・・死んでいないの？」
「おっ、ようやく起きたみたいだな」
騒ぎにプレシアが目を覚まし、立とうとするがよろけてしまい。
フェイトとアルフが両脇を支えた。
「…クロス、だったわね、なぜ私を助けたの？」
「あんたがあのままだったら俺は迷わずあんたごと装置を貫いていた。
でもあんたは最後の最後で…母親に戻った、だから助けた。

んで、せっかく助けたんだがら…最後に言ったセリフ、聞かせたらどう?」

クロスに言われプレシアがフェイトを・・・見る。
その瞳は今までの冷たい瞳とは比べ物にならないほど暖かさをフェイトは感じた。

「・・・母さん?」
「フェイト…ごめんね。私は最初からずっとあなたを見てあげなかった。
あなたはこんなにも私を見ていてくれたのに、ごめんなさいフェイト」
「・・・母さん・・・かあさん、かあさんかあさん!!うっ・・・うわあぁぁ〜!!!」

涙を浮かべ優しく、強くフェイトを抱き締める。
フェイトは最初戸惑ったが、すぐにプレシアの胸で大きく泣いた。
2人がやっと本当の親子になれた瞬間だった。

「ぐすっ・・フェイトぉプレシアぁ・・・よかったよぉ」
「うん、フェイトちゃん凄くうれしそうだよぉ」

涙を浮かべるアルフとノア。
横ではなのはもなんだか自分の母親に会いたくなり、もらい泣きしていた。

少し離れた場所でその様子を微笑ましく見ていたクロスの元へそっとクイントが耳打ちをした。

「クロス、あなたわざとあの装置巻き込んだでしょ?プレシアを殺

す気なんてなかったし
　というより…あれを消すためにあんな切り札まで使ったんでしょ？」
「うん、ジュエルシードは管理局側にまだいくつかあるから、それの制御装置なんて存在自体
　しちゃいけないんだ…だから、消したよ。プレシアは…俺も分かんないや」

特に驚く事もなく淡々と答えるクロス。
答えを聞いて目を合わせ軽く肩をすくめるクイントとメガーヌ。
しかし、3人は笑っていた。まるで最初からわかっていたかのように。

「みんな、感動のシーン割り込みして悪いんだけど、すぐにそこから脱出して！
　庭園が巨大な虚数空間に飲み込まれそうなの！艦長やゼスト隊の皆は退避したよ！」

突如エイミィの緊張した声が響き渡る。
同時に庭園全体を激しい地響きが襲い、地割れが起こり、天井や壁が崩れ出した。

「さてっと…そんじゃ、感動の続きはアースラでって事で」
「うん、みんな俺の元へ集まって、一気にアースラへ跳ぶよ！」

なのはやフェイト達がクロスの元へと集まる、しかし。

「私は…残るわ」
「えっ、母さん！？」

プレシアは逆方向のアリシアの入ったケースの元へと歩きだした。

「アリシアと行く事にするわ。母さんね不治の病に冒されていてあまり長くないのよ。
だからフェイト、あなたは生きなさい。生きて少しでも長く生きて！」

そう言って崩れる壁の向こうへとプレシアは姿を消し・・・

「こら、人が死ぬ気で助けた命を勝手に投げ出すな！子供には親が必要だって事
いい加減覚えろ！無理やりでも連れて帰るぞ！！ノア！」
「分かりました！…跳躍！！」
「ちょ、クロス無茶・・・っ！」

跳び出しそうなフェイトを抑え、代わりにクロスがプレシアに駆け出し
クイントがクロスを止めようとするがそれより早くノアが跳躍魔法を発動した。
そして・・・庭園が完全に崩壊した。

数日後　アースラ　医務室

「体の具合はどう、プレシア？」
「おかげさまで快適よ。あなたの自慢の子供達のおかげでね、メガーヌ」

監視付きだが医務室で治療を受けているプレシアの元へゼストとメガーヌがやってきた。

「それで、どうだった？」
「一応裁判はあるけど、フェイトちゃんは大丈夫よ。
クロノ君とユーノ君が色々資料集めてくれたからね、それからあなたの事も」
「私の事はいいのに、それでクロスとノアはどう？」
「さっき目が醒めたわよ」

あの時、本来ならユニゾンしなければ使えないはずの跳躍魔法をクロスとノアは単騎で使用し、プレシアとアリシアのケースを含めた全員を脱出させた。
その後、プレシアが血を吐き倒れ込んだのを見たクロスとノアが

「ちょっと失礼」「えっ？」

2人がプレシアの体に手を当てると3人の体を淡い光が包み込みプレシアは痛みが少し和らぐのを感じた。

「よしっ、応急処置はこんなものかな」
「はい、あとは適切な処置をすればＯＫです♪」

何をしたのかわからない一同にクロスは

「太極の書と光天の書に記録されているのは何も戦う為の魔法や技術だけじゃない。
アルハザードの薬学や医学の知識も詰め込まれているんだよ」
「その中にプレシアさんの病に関する知識や医療魔法もばっちり入

っています。
　現代では不治でも古代のアルハザードではちゃんと治療法があったんですよ♪」

その言葉を一番早く理解したフェイトは

「じゃ、じゃあ・・・母さんは治るの？死ななくて済むの？」
「「もちろん」」

2人してフェイトに親指を立てる。

「ふふっ、こんな使い方もあったのね。おかげで助かったわ…ありがとう」

クロスとノアに向かって笑顔で頭を下げるプレシア、フェイト、アルフ。

「て、照れるっての！俺はただ・・・フェイトに寂しい思いさせたくないだけ・・・で
あ・・やばっ、もう限界・・・かも」
「私もですぅ～・・」
「クロス君！？」「ノア！！」

顔を真っ赤にして照れるクロスだが突然ふらふらと足元がおぼつかなくなり
ノアもクロスの肩にバランス悪くもたれかかっている。
なのはとフェイトがかけよるがそれより先に
ゼストがクロスを支え、肩から落ちたノアをメガーヌが受け止める。

「限界だな、今日だけでも古代魔法を何回も使い、あの未完成の集

束魔法も使ったのだ」
「えぇ、おまけにそれぞれ単騎での次元跳躍、２人ともよく持ちこたえたわね」
「ごめんなさい、ゼスト隊長・・・あとの事は・・」
「あぁ、２人の事と…あの事は任せてゆっくりと休むがいい、よくやったなクロス捜査官」
「ノアちゃんもお疲れ様」
「えへへ・・・私とマスターは・・ゼスト隊の子、ですからぁ～・・・すぅ～」
「よかった・・・それじゃあすみません、おやすみなさい」

ゼストとティーダの労いに笑みを浮かべながらクロスとノアは深い眠りに落ちた。

その後はプレシアとの交渉に入ったアースラ隊とゼスト隊。
フェイトの方はプレシアやなのはからの懇願とクロノ達が集めた資料により
ほぼ無罪となるとのことだったが、肝心のプレシアはそうはいかなかった。
次元震を発生させ次元断層すら発生しかねない一連の事件の主犯であり
フェイトが無理やりこの件に関与させられた事にした為にプレシア１人が全ての罪を負う事になった、これはプレシア自身が強く望んだことであり
管理局への無条件投降の唯一絶対条件だった。
しかし、ゼスト隊が一計を案じた。
プレシアはプロジェクトＡとＦに関わっていた研究者。
Ａに関しては他人から見聞きした程度だＦの方は独自の研究も行っていた事もあり。

その件に関しては第一人者ともいえる。
そんな人物を監獄に閉じ込めるのは不利益極まりない、と上層部に直訴。
管理局への積極的な情報提供と管理局付けの魔道師となる事を条件に執行猶予となった。

アースラ　食堂

「モグモグ…いや…無茶苦茶にもほどがあるんじゃない？」
「あら、あなただってこれくらいの事は考えてゼスト隊長に任せたんでしょ？
　これおかわり～！！」
「はぐはぐ・・・これもおかわり～！」

食堂のテーブルにごまんと並べられた料理を凄い勢いで食べながらクロスが呆れていた。
向かいの席に座ったクイントも負けずに食べている
ノアは1人黙々と料理と格闘中。

「いや、クロスとノアは体力と魔力の消耗激しいからたくさん食べるのはわかるとして…
　なんでクイントの姐さんまで？」
「す、すごい量の料理がすごい量で減っていく…」
「私も負けるかぁ～！！」
「アルフ！付き合う事ないから張りあう事ないから！！」

その料理地獄を横目で見ているのは
ティーダ、なのは、フェイト…そして、大食いバトルと勘違いして

いるアルフ。

「ふぅ～食休めっと。プレシアの事だけど、しばらくは私達の部隊で預かる事になったわ」
「決定早いね！どんだけ無茶したのさ！！」
「まぁ、それだけ上層部も扱いに困っているわけだけど、こっちとしては大助かりだよ」

何かありげにコーヒーを啜るティーダ。

「管理局も色々大変なんですね」
「あぁ、それでも入局したいのなのはちゃん？」
「えっ！…えっと、まだなんとも決めかねています、ははははっ…」
「なのはも一緒に働けたらいいとは思うけど、でも焦らずじっくり決めてね」
「うん、ちゃんと答えをだすから待っててフェイトちゃん」

なのはは自分の力を役に立てたいと管理局への正式入隊を考えていたが
流石にそれはじっくり考えた方がいいとリンディやゼストに言われ答えを保留中。

『クロス、ノアその事で後で話があるの、体は大丈夫？』
『俺は大丈夫！』『わ、私はちょっとお腹が苦しいかも・・・』

お腹を膨らませて苦しんでるノアを無視し念話でやりとりするクロスとクイント。

「そう言えば…2人とも名前で呼び合えるようになったんだ？」
「あっと・・・それは／／／」「えっと・・・その・・・／／／／」

恥ずかしそうに互いの顔とクロスを見比べるなのはとフェイト。

「？？？？」

「あの！クロス君が目覚めたら私とフェイトちゃんでちゃんとした勝負をしようって！」

「そ、そう！私達まだちゃんとスタートも切れてないから、だからけじめつけようって！」

「お、おう。そうか…おれが立会人ってわけだな？」

「くすくす」「ニヤニヤ」「へっへ～♪」

ちなみにクイントとティーダ、ノアは勝負の本当の意味が分かっている。

しかし、実はちゃんと名前を呼び合えるようになったのはつい昨日の事。

なのはがフェイトに友達になりたいと言った返事を聞きたいといい。

フェイトがどうしたらいいかわからない、と言ったので

「簡単だよ。友達なるの凄く簡単♪名前を、呼んで。きみとかお前じゃなくて

私の名前は…高町なのは、なのはでいいよ」

「なの・・は」「うん！」

「・・なのは！」「うんうん！！」

こうして2人は名前を呼び合い、友達となった。

「俺は…どうなんだ？」

「もちろん、クロス君もノアも友達だよ」

「はい～フェイトちゃんはお友達～ついでにアルフも～」
「あたしはついでかい！！」
「や、やけにあっさり呼ばれたなぁ～・・・ん、いつの間にか君付け？」
苦笑するクロスになのはをちら見してフェイトが呟く、ほんのり頬が赤い。
「わたしだけ・・・呼び捨ては…なんだか不公平だから／／／」
「え？」
「な、なんでもない！！！」

そして、とある無人世界
生物の住んでいない世界へと場所を移しなのはとフェイト、1対1の最初で最後になるであろう本当の勝負が始まる。

「なんだか、順番が逆みたいだけど、これでもいいよねフェイトちゃん」
「うん、これは友達になる事とは別だから…負けないよなのは」
2人の視線の先には離れて静観しているクロスの姿。
見ただけで2人とも顔が熱くなっていくのを感じた。
「じゃあ、始めようか♪」
「この勝負は最初で最後でも…簡単には終わらせないよ！」
2人の決意に満ちた瞳が

「それじゃあ、時間無制限一本勝負・・・はじめ！」

クロスの合図で両者は激突する。

真剣な顔でも2人は弾けるような眩しい笑顔だった。

続く

（あの事はまだ誰にも言ってはいない、けど確かに聞こえたアレはなんだったのだろう？）

クロスの脳裏に響く言葉は庭園でジュエルシードと装置で接続させられた時に響いた言葉

『鍵は鍵穴に差しこまれた、この鍵を回せるかどうかは…お前次第だ』

（鍵…ジュエルシードが鍵だったのか、それとも…）

その答えが出るのは、数週間後、クロスに新しい家族が出来た時にだった。

次章　『新しい家族と新たな力、蘇る記憶』

第１０話　「本当の笑顔」（後書き）

カガヤ「・・・・・・」

クロス「作者が燃え尽き症候群につき俺達２人であとがき進行します」

ノア「やっと１章終わりましたね、マスター」

クロス「短いのか長いのかさっぱりわからないけど作者的にはながったみたいだぞ？」

ノア「そこらへんは個人の感覚じゃないでしょうかねぇ、短い人はかなり短い。長い人はもっと長い！」

クロス「まぁ、そこらへんや第１章の総括、この小説の今度や独自設定のあれこれなんかを次回『１章のまとめでお疲れ様会』でやるみたいだぞ」

ノア「でも今回の予告から微妙にサブタイ変わりましたよね？また変わるんじゃないですか？」

クロス「さぁ？…ともかく次回までに作者の目を覚まさせるぞ、いくぞノア！」

ノア「はい！ユニゾンイン！！」

「「古代魔法の力も上乗せ！フルパワーハイブリットシャインブレイカー！！！！」」

カガヤ「ぎゃあああぁあああぁぁぁぁぁ～！！！」（消滅）

「「あ、非殺傷設定し忘れてた」」

第1章あとがきと言うかお疲れ様会（前書き）

小休止、その1です。

第1章あとがきと言うかお疲れ様会

カガヤ：「はい、それでは第1章終了記念としてお疲れ様会を開きたいと思います！」

（一同拍手）

【この小説について】

クロス：「原作ブレイク、チート、ハーレムが大好きな作者なのに他の作者様みたく
　転生ネタや原作を知っているオリキャラの介入とかはないんだな？」

カガヤ：「そっちらへんは色々出回ってるからね、チートはチートでも最初からチートにせず
　色々制限付きにして後々に段々強くしていく事にしたし。原作ブレイクも
　俺の独自解釈でするし、ご都合主義エンドもやりすぎると収集付かなくなるから」

ノア：「と言う事は・・・まさかハッピーエンドではないかも？？」

カガヤ：「最終的にはハッピーエンドだけど、途中では色々悲劇や試練が待ってるぞ」

クロス：「なんかものすご～く嫌な予感しかしないぞ、母さんとかクロス予定の作品見てると」

【クロスオーバー予定作品】

カガヤ：「最初に書いたけど全部が全部ちゃんとクロスするわけじゃなくて設定のみとか
　原作にあった設定のないキャラとかのクロスを予定しています。
　少しネタばれしていい？（ウズウズ）」

ノア：「ネタバレ禁止とか散々言っていて結局はしたいんですか！！」

カガヤ：「いや～そこはケースバイケース？今のところ型月、特にＦａｔｅをしっかりクロスさせます。
　超が付くほど重要な章だし、どうクロスオーバーするかはお楽しみに。
　あと、バイオハザードは基本的に敵キャラや敵モンスター、Ｔウイルスなどをクロスさせますが
　Ｆａｔｅとはまた違ったクロスオーバーになります、どういう意味かは登場したらわかります」

クロス：「俺の名前クロスロードもクロスオーバーと近い意味があるんだよな・・・」

カガヤ：「はいそこ！しんみりするのはもう少しあとの第０章を待ちなさい！」

【オリジナル展開】

カガヤ：「まず１章は原作一期をベースにある程度原作に沿っての流れでした」

フェイト：「その割には結構流れ変わってない？母さんと和解出来たのはうれしいけど」

カガヤ：「あ～プレシアは最初和解して死別の予定だったけど。生存させました」

プレシア：「ちなみにアリシアはあの後ちゃんと埋葬したわ」

フェイト：「安からに眠ってね、お姉ちゃん・・・」

リンディ：「と言う事は、私の養子にはならないのね。残念だわ」

エイミィ：「本当に残念だよね、クロノ君♪」

クロノ：「ほ、本当の母親と暮らせるんだからいいじゃないか！」

カガヤ：「はいはい、次のオリ展開いくよ～」

ゼスト：「なんといっても俺達の介入だな、それもティーダを加えての」

メガーヌ：「それに私とゼスト隊長が・・・恋仲・・ぽっ／／／」

クイント：「ティーダだけ、独り身になってるわね」

ティーダ：「それは言わないでくださいな、姐さんｏｒｚ」

カガヤ：「そりゃのちのちのフラグのためで、先の展開ちらっと言うと…

幼少時のティアナも早めに出ます」

ティーダ：「クロスにならティアナ任せても大丈夫だからいいけど・・・

さぁ、クロス、俺をお義兄さんと呼んでみようか！」

ノア：「変わり身はやっ！・・・はっ、すごい殺気が！？」

なのは：「・・・かなり気が早いんじゃないですか？ティーダさん・・・」

フェイト：「まだティアナは登場もしてないのに、それはどうかと・・・」

2人：「ちょっと、あたま・・・ひやそうか（ちょっと、表に面かせや）」

桜色と金色の閃光がティーダを襲う。

ティーダ：「ぎゃはあぁぁ～～～！！」

クロス：「ん？2人共どうした？？」

2人：「なんでもないなんでもないよ♪（ニコリ）」

カガヤ：「こわっ・・・」

【原作との設定変更】

カガヤ：「とは言え、オリキャラが主人公な時点で結構変わってい

るんだけど、特に明記したいのが」

・シューティングアーツ
・ゼスト隊の魔法
・オートアーマー
・人造魔道師計画
・闇の書とヴィヴィオ

カガヤ：「1つ目はスバルやギンガのオリジナルもクイントの魔法の1つとしています。
クロスも一応一通り習ったけど、ローラーブーツを使わないので
本作オリジナルのエア・ブリットとか初級技しか使えません」

クロス：「まぁ、でも・・・習った意味はあるんだよなぁ」

カガヤ：「それも2章で明らかになります、ティーダに遠距離戦や銃の使い方学んだのにも
理由があります」

ノア：「マスターの進化がはじまりますよぉ♪」

カガヤ：「2つ目はゼスト隊の使う魔法は、スバルやティアナやルーテシア・・・
言うなれば後継者達の魔法をそのまま使うか、変えて使用します」

ゼスト：「俺の魔法は原作に登場した時もほとんど描写がなかったからほぼオリジナルだな」

カガヤ：「ちなみにゼストやクイントのデバイスにカートリッジシステムは組み込まれていません」

クイント：「ナックルスピナーで十分よ、でも最近限界感じてるけどね」

ゼスト：「俺も似たようなものだ、そろそろ組み込みたいところだな」

メガーヌ：「わたしは必要ないわね、アームドデバイスじゃないし」

ティーダ：「俺の銃は、弾倉はあるけどカートリッジシステムではないしなぁ」

カガヤ：「あとでちゃんと付けるから」

プレシア：「３つめのは原作では傀儡兵だったのが変わったのよね」

カガヤ：「それは４つ目にも関係する事ですが、とある計画のサンプルを元に作ったからですね」

クロス：「ま、俺の名字とか次章のサブタイ見ればなんとなく想像は出来そうだな」

カガヤ：「最後に関しては…この作品で一番設定が変わっているものです、しかもかなり重要」

ノア：「闇の書はともかくヴィヴィオが関わってくるのはか～なり先だよね？」

カガヤ：「秋までにかけるといいなぁ～」

クロノ：「どれだけ長く考えているんだ・・・」

【全体の流れとヒロイン】

カガヤ：「輝光戦記は大きく3つに分けて考えています。？で幼少期、？で少年期、？で青年期
みたいな分け方ですね」

クロス：「オリジナル魔法やオリキャラの紹介がたくさんありそうだからなぁ・・・
あまり長いくて多いと携帯からは見えにくいかもしれないと思ってか？」

カガヤ：「うん、自分の携帯で見てながく感じたから、特に古代魔法や技はかなり増えるよ」

ノア：「太極と光天の書自体古代の魔法をほとんど網羅してるくらいだから仕方ないよ」

クロス：「全部出そうとしたら作者・・・死ねるな（笑）」

カガヤ：「たくさん考えれるかもしれないけど、多分死ぬ（笑）」

クイント：「それで・・・この作品のヒロインというか誰ルートかは決まったの？」

リンディ：「それは私も興味あるわね、ほら2人も興味津々よ？」

なのは、フェイト：「ドキドキ・・・／／／」

カガヤ：「一応考えてるけど、ハーレムエンドにしたいしなぁ。ってかヒロインまだ全員出てないし」

？？？：「私も早く出して～！」

クロス：「なんか狸の叫び声が・・・？」

カガヤ：「俺関西弁好きだけどうまく書けるか自信ないなぁ・・・あ、ちなみに2章は狸出番ないよ？
だから、まだでなくてよろしい～」

？？？：「なんやて！？・・・はっ、このスキマは！？きゃあぁあ～～（狸、アウトしたお）」

なのは：「あははは・・・も、もうちょっと我慢だよ」

カガヤ：「ちなみになのはやフェイト、アースラ組もほぼ出番なし、名前が出てくる程度」

なのは、フェイト・・・ｅｔｃ：「「「「な、なんだってーー！！？」」」」

カガヤ：「2章はクロス、ノア、ゼスト隊と2人のヒロインがメインだから」

ティーダ：「2人のヒロインって、あっちの影でじーっとこっち見てるあのチビっこか？」

青い影２つ：「じーーーーーーー・・・」

クイント：「・・・バレバレね」

カガヤ：「あ、忘れてた。原作とは一部時系列が変わってくる出来事もあります」

クロス：「次のあれがそうだな、確か原作だと?期より前に起きた出来事だし」

ノア：「ここまできたら隠す必要もないんじゃない?」

カガヤ：「さ、さってボロがこれ以上でないうちにお開きとします！では、皆様。これからも『魔法少女リリカルなのは～輝光戦記～』を宜しくお願いします！」

一同：「「「感想や質問などまってまーっす！」」」

第1章あとがきと言うかお疲れ様会（後書き）

カガヤ：「この回はウッティやあうあう神が出てくる某ゲームを元ネタに作りました」

なのは：「にぱ～☆」

カガヤ：「あっちもこっちも腹黒いって点で共通してるな・・」

なのは：「・・・遊んであげるわ。おいで、駄作者」

カガヤ：「ぎゃわぁ～～！！」

祝！ＰＶ１５０００　ユニーク２５００突破記念！ＮＧシーン・小ネタ集…って

かなり遅くなりましたが突破記念の書きました（笑）

つまらないものですがどうぞ♪

その？　第1話より

相対する2人の魔法少女…やがて同時に相手に向かって杖を振りかざす
しかし両者の間に光が現れ・・・

「グサッ！…そこまでだ！それ以上の戦闘行為は俺が…ってグサッ？」

レイジングハートとバルディッシュを頭で受け止めた紅い少年の姿がそこにあった。
紅い少年…クロスが2人のデバイスを受け止め（ようとした）手を離し

「いってぇえええ～～！！！！！」
『マ、マスター！？』

デバイスを頭に突きさしたまま血を噴き出しながら転げ回った。

「はにゃ！！だ、大丈夫ですか？」
「と、とりあえずバルディッシュ返して下さい！」
「いや、もっと別の心配しようよフェイト・・・」

その？　第1話より

「光刃斬」（こうはざん）

何が起きたのかフェイトには分からなかった。
上空にいたはずのクロスがいつの間にか背後に現れ
次の瞬間には白い光が奔りバルディッシュが真っ二つに…バリアジャケットも斬り裂かれていた。

「あ、あ・・・あぁぁぁぁ！？／／／／／」
「ふっ、またつまらぬ物を斬ってしまった（↑めっちゃ混乱している）」
『マスターのえっち、女の敵～／／／／！！』

クロスの背後に音もなく立つ白い影、いや魔王。

「クロスくん・・・ちょっと、頭冷やそうか」
「！＃＄＆＃＃＆～！！！」

その？　第2話より

「リンディ提督…すみません、逃がしてしまいました」

ひとまずの経過報告を空間モニターにてアースラにするクロノ。
しかし、モニターに映るのは

「う～ん、お茶が美味しいわぁ～♪」

緑茶に砂糖を砂糖瓶ごといれ、もはや砂糖しか見えない物体を飲むリンディの姿

「母さん！何やってるの！ってか今本番！！ってかそれ何？砂糖しか入ってないじゃん！
緑茶は？緑の液体どこいったぁ～！！」
「さすがはツッコミ役で定評のある声ね、クロノ♪」
「いや、今のクロノは杉〇声じゃないから！」

ちなみになのははあまりの光景に気持ち悪くなり失神。

その？　第2話より

「あ、あれ？……どうしたのなのは？」
「…あの時も……あ、ひょっとして一緒に温泉入った時も！！…あぁ、どうしようぅ」
「「「温泉？…一緒に入った？」」」

クロスとクロノ、それに回復中のノアですら飛び出してきた。

「それで・・・どうだったんだ？」
「いやぁ～僕としてはもっと大きいな子が、アルフくらいの大きさのが見たかったなぁ」

クロス、ユーノ…レイジングハートにて撲殺。

その？　第3話より

その後、なのはを連れリンディとなぜかクロスも引っ張られてなのはの家へと向かい
一家への説明をリンディの巧みな話術で済ませたが
同席していた恭也の視線にクロスが気づいた

「クロス君、と言ったね？…妹に手を出したら……お前を殺す（ヒ○ロ口調で）」

睨みながらクロスの肩を掴む恭也、だがクロスの手が恭也の手をねじり伏せた。

「やめてよね、本気になった俺に恭也さんが敵う訳無いでしょ（キ○口調で）」
「ぎゃはぁ～！お、折れる！手を離し・・・ボギッ」
「・・あ」

その？　第3話より

「最後に…フェイトの魔力やスピード、その他諸々全てなのはの上回っている
そんな相手に有効なのは…」
「有効…なのは？」
「ズバリ、戦略と切り札！いかに自分の手札で相手の隙を作り
自分だけのとっておきをぶつけるか・・・これが大事だな」
「自分だけの・・・とっておき・・・あ、思いついた！」

そう言ってなのははどこかへ飛び出ると…
どこからか変わった形の戦闘機に乗ってきた。

「切り札私にもありました！…鉄拳制裁！ア○カークロー」
「甘い！ミーティア・フ○バースト（ドラグーン付き）」

バキュン、バキュン

「いい加減にしてください」
「「はい、鷹の目さん」」（額に穴が空いた2人）

その？　第4話より

「時間がない…飛ぶぞ、ノア！」
『了解♪…跳躍！！』

次の瞬間にはブリッジからクロス達の姿が消えていた。

「「「がば、ごぼ、ぐぼ！！？」」」

『あ、間違えて海中に転移しちゃった、てへっ☆』

その？　第4話より

フェイトへも雷、それもクロス達へ向けたよりも強いものが降り注いでいた。

「あああぁぁぁ～～！」

「フェイト!?」
「・・・か・・・かあさん?・・・・」
全身をボロボロにし、体から煙を立ち昇らせながら…
「けほっ、けほっ」
頭をアフロにしたフェイトが口から煙を吐いていた。
「「ドリフかよ!!」」

その？　第5話より

『マスター、何者かが近くに転移してきます!数2!』
『Ｉ　ｓｅｎｓｅｄ（私も感知しました）』

急いでノアとレイジングハートの感じた地点で向かう、するとそこには

「頼む!私はどうなってもいいからフェイトを…フェイトを助けてくれ!」
公園の噴水に頭から突っ込み足だけ出したフェイトがいた・・・
「「「犬神家!?」」」

その？　第６話より

「プ・・レシア・テスタロッサぁぁ！！！」

『業火跳躍！』

我慢の限界を超えたクロスはノアとユニゾンをした

髪を赤く染め、瞳すら紅くし顔に紋章を浮かばせ

モニターのプレシアを鋭く睨みつける。

「！？あ・・っ、あぁぁ！！」

すると、プレシアが突如炎をに包まれ燃えあがり・・・

「けほっけほっ」

頭をアフロにしたプレシアが口から煙を吐いていた。

「「母娘そろってドリフかよ！」」

その？　第７話より

フェイトの精神の中

「なんとか成功したな…さて、フェイトを探すか」

そこは形容しがたい空間だった。

モニターがいくつも浮かぶ白い無重力空間。と、言えばいいのだろうか
映し出される映像は・・・たくさんのケーキやパフェ

「・・・フェイトは甘党だったのか」

フェイトの頬が赤く染まったような気がしないでもないなのはであった。

その？　第８話より

「っ！ぐあああぁ～！！」
『きゃあぁ～！』

槍が弾け、クロスの全身を電撃が襲い、立て続けに残りの槍が直撃する。

「『～～！！！！』」

声にならない叫び声をあげ全身から煙を出しながら・・・

「『けほっけほっ』」

頭をアフロにしたクロスとノアが口から煙を吐いていた。

「ドリフ！？というか私のフェイトのネタをパクらないで！」

その？　第９話より

「はは・・・何を談笑し合っているの？私はまだ、終わってないわよ！」

そう言ってプレシアは立ちあがり再度雷をクイント達へと放つ。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

クイントとメガーヌのデバイスが魔法陣を張りこれを防ぐ

「な、なに！？なぜこれを受けない！」

「残念だけど・・・」

「流石に、４回もアフロネタはねぇ～？」

その？　第１０話より

そして、とある無人世界

生物の住んでいない世界へと場所を移しなのはとフェイト、１対１の最初で最後になるであろう本当の勝負が始まる。

「なんだか、順番が逆みたいだけど、これでもいいよねフェイトちゃん」

「うん、これは友達になる事とは別だから…負けないよなのは」

２人の視線の先には離れて静観している・・・

「ここ静かでいい所だなぁ、今度２人きりで来ようか、ノア」

「はい、マスター♪・・・って２人きり！？／／／」

静観している・・・

「ん？俺と２人きりは嫌か？」

「い、嫌じゃないですよ！そんなわけないじゃないですか！／／／」

静観・・・

「・・・フェイトちゃん」

「・・・うん、分かってるよ。なのは」

「ブラスター３！スターライトブレイカーｅｘ－ｆｂ！！」

「リミットブレイク！ライオットザンバー・カラミティ！」

「「ちょっ！それまだ１０年も先の・・・ぎゃあああぁぁ～～！！」」

終われ

祝！ＰＶ１５０００　ユニーク２５００突破記念！ＮＧシーン・小ネタ集…って

クロス：「酷い目にあった・・」

ノア：「三途の川って綺麗でしたねぇ～」

カガヤ：「まぁ、本編じゃありえない展開・・・かな？」

クロス：「ちょっと！何疑問形にしてるんだ！」

ノア：「なんかこの先本編でも似たようなのありそうですよねぇ・・・あれとこれとか、他のヒロイン混ぜて」

カガヤ：「どーしよっかなぁ～♪」

クロス：「マジで勘弁してください・・ｏｒｚ」

第2章予告

プレシアの口から明かされる人造魔道師計画の1つ

『戦闘機人』

ゼスト隊と共にプレシアに教えられた研究所へ向かったクロスとノア

満天の星空の下で出会う2人の姉妹

そして、2人を狙う怪しい集団

切り離されたクロス達の前に立ちはだかる強大な力

絶対絶命の中、クロスとノアの新たな封印が解ける

クロスの3つの新たな力

「ナイト」「グラップラー」「ガンナー」

そして、蘇る記憶の一部…浮かび上がる1つの言葉は

『夜天の書』

リリカルなのは異伝～X　DESTINY～第?部　輝光戦記
第2章　～新しい家族と新たな力、蘇る記憶～
始まります。

第2章予告（後書き）

カガヤ：「さて、オリ展開まっしぐらの第2章！」

クロス：「相変わらずネタバレ全開だなぁ」

ノア：「面白み減りますよぉ」

カガヤ：「いいの！アニメはよくＯＰでネタバレしまくりでしょ、それとおんなじ！」

クロス：「開き直ったよ…2章の長さは未定ですが更新速度は遅くなるかもしれません」

ノア：「でも流れは決まっているので、気長にお待ちください」

カガヤ：「感想もお待ちしております♪」

第１１話　「戦闘機人計画」（前書き）

第２章スタート！

プレシアから告げられた新しい人造魔道師計画とは

第１１話　「戦闘機人計画」

地上本部　訓練室

「クロスファイヤー・シュート！！」

少年の掛け声と共に４つの魔力弾が標的に向けて放たれ
１つ残らず標的の真ん中を射止めた。

「ＯＫ、ナイスだクロス。前よりかなり上達したな」

ユニゾンを解いた少年、クロスとノアの元へティーダがやってきた。

ここは管理局地上本部。
ジュエルシード事件、通称ＪＳ事件が終わり。
なのはとフェイトと別れたクロスとノアはある案件のためにアースラから
一時的にゼスト隊へと出向していた。

「まだまだですよティーダさん。こんなんじゃプレシア級の魔道師相手じゃ使い物にならない」
「本当になんでマスターは射撃や砲撃魔法が苦手なんでしょうねぇ・・・
　クロノ君以上の魔力や魔力制御能力、空間把握能力はあるはずなのに」

クロスは人造魔道師計画の根元である
『プロジェクトＡ（アルハザード）』

その唯一の生き残りである。
プロジェクトAはクローンなどとは違い、ゼロから戦闘に特化した魔道師を作る事を第一の目的にアルハザードの遺産『太極の書』の適合者を作る事を第二の目的としその結果、通常の魔道師よりも魔力素質や戦闘力に関わる特性を高められ
身体能力や精神成熟も高く、古代魔法の唯一の使い手として生み出された。
それゆえにクロスは他の子よりも魔力素質全般だけでなく大人っぽい性格へとなってしまう。

ただし、そんなクロスにも苦手とするものがあった。
それは砲撃や射撃魔法である。
打撃や魔力斬撃魔法は使えるしノアほどでないにしろ回復や補助魔法は難なく使えるが
遠距離系は全く使えない。いや、使えないと言うには語弊がある、

「研究所ではそんな結果…というか基礎能力高めるのが終了した段階であれが・・起きたから」
「クロス、あまり深く考えるなよ?」

弟に接する兄のように優しくクロスの肩に手を置くティーダ。

「俺から見ればの話だけど、クロスが砲撃や射撃が苦手とか適性がないんじゃなくて
うまく発動しないようになってるんじゃないか?他の魔法は使えるのに砲撃とかになると
魔力制御が不安定になってるし」

そう、封印されてうまく使えない、というのが正しい。

スパイラル・キャノンやハイブリットシャインブレイカーは
無理やりノアの魔力と合わせて打ちだす、言わば「力押し」で発動する魔法であり。
雄一使いこなせるシャインホイールも攻撃用ではなく正確には防御破壊魔法である
相手がどんな魔術師であれ、相手の魔法を「鏡面剣」などで跳ね返すか無効化し
間合いを詰めて一気に決める。のがクロスの戦闘スタイルだ。
ただし、相手がプレシアなどの上級魔道師にもなると話は変わってくる。
間合いを詰める事も出来ずに隙を窺って逆転を図る、くらいしか出来ない。

実際、プレシアとの戦闘ではプレシアの砲撃魔法や遠距離魔法に手こずり
魔力の差から跳ね返す事も斬り裂く事も出来ずに
結局は古代魔法で無理やり底上げし制御させたハイブリットシャインブレイカーでしか
プレシアに届かなかった。しかも、あの魔法は未完であり
実体は魔力をただ圧縮して放出しただけの
魔法とは似ても似つかない違うものであった。

「あれ使うと一気に魔力切れて俺とノアかなり消耗しちゃうしな…」
「前回、それにもまして単騎で次元跳躍使うんだもん。そりゃ数日寝込んじゃうわよ」
「「母さん！」」
「はぁ～い♪どう訓練ははかどってる？」

会議を終えたクイントとゼストが戻ってきた。
メガーヌは次の任務の資料作成にあたっている。

「クロスも着々と実力を上げているようだな」
「い、いや。俺なんてまだまだ…」
ゼストの言葉に照れくさそうに否定するクロス。
「ふっ、ならば試すとしよう。俺とクイントの2対1の1時間耐久の模擬戦だ」
「うっわ～…そりゃ地獄だね」
「ティーダ…あなたも混ざる？」
「い、いやいや、遠慮しますよ姐さん」
ティーダの呟きにクイントは冷たい笑みで返した。
その後、なんとか撃墜されずに生き残ったクロスとノア、体中ボロボロだ。

食堂　個別ルーム

「でも本当に驚いたわ、私と隊長の2人かかりで落せなかったなんて」
「あぁ、正直俺もここまでだとは思わなかったぞ」
「私も見たかったなぁ…」
ちょっと早めの昼休みを取るゼスト隊。
ちなみにここは食堂の一角にある個別ルーム。
食事を取りながら作戦事項を話し合う為に設けられた特別室である。
「でも…エクスカリバーが…」

そう言ってクロスが取り出した剣、エクスカリバーには全体的にヒビが入っていた。

＜1時間もすれば治りますよ、マスター＞

エクスカリバーの宝玉が輝き、ラファールが喋った。

「その剣は太極の書の契約者が最初に作る武器、という事だったな。それがクロスの力にこうして耐えきれなくなるという事は…」

「書の記述にあった新しい封印が解け、別の形態が生まれる前兆…ですね」

ゼストの考察をメガーヌが纏める。

太極の書は実体化出来るが、今では資料すら残っていないほどの古い古代文字で書かれていてクロスとノアも一部しか解読出来ず全ての封印が解けた時に契約者とノアが読めるようになるらしい。その中に太極の書で作る武器は最初1つだが成長するにつれ形態を変え、3つの力となる。

と書かれているのを解読した。

「ともかく、捜査には支障がありません…『戦闘機人計画』のね」

戦闘機人計画

プレシアの操るオートアーマーを見てクロスやゼスト隊は違和感があった。

ただの無人魔道兵器にしては人間的な動作や攻撃をしてきたからだ。

相手を倒す為だけに攻撃してくるように見えてもその攻撃には人間

らしさを感じた。
今までも無人兵器を相手にした事があるが、まるで鎧を着た人間を相手にしている感覚は
あのオートアーマーが初めてだった。
そこで、プレシアからオートアーマーの事について聞こうとした時にその名前が出された。

「プロジェクトFは知っていたのにこっちは知らなかったのね」
「いくつか人造魔道師計画が生み出された、ってことだけだし。
その中で唯一名称と詳細が分かっていたのがプロジェクトFなんだよ」
「私もあまり詳しくは知らないのだけど…戦闘機人は人文字通りと機械を合わせた存在よ
鋼の骨格と人工筋肉を持ち、プログラムユニットの埋め込む事でリンカーコアを干渉させて
高い戦闘力を生み出すらしいわ。もちろん、遺伝子操作も使ってね」

オートアーマーはその過程で生み出された技術で作られた物らしく。
一般的な自動魔道兵器と戦闘機人とのちょうど中間にあたるらしい。

「資料の中にオートアーマーの技術についてのもあるはずよ。
確か、研究所の事も書いているはず」

プレシアの言うとおり、庭園から回収した資料を分析したところ。
戦闘機人に関係した資料が見つかり、それによると基礎理論は古くから存在はしていたが
遺伝子操作の段階で頓挫し、今まで成功例がなったが、とある計画の遺伝子操作技術を
参考にした所、驚くほど研究が進み、すでに2名の成功例が出てい

るらしい。
そして、研究が進むきっかけとなったその計画が……

「プロジェクトA……くそっ！！」

ゼストから渡された資料を読んだクロスは両手を血が出るほど強く握り締めた。
その手にクイントとノアが手をそっと添える。

「だから、思いつめたらダメよ！」
「そうですよ、マスターの責任じゃないんですから！」
「でも、俺が生み出されたから…成功例が出てしまったから理論が実証されて……」

その先を言う前にクロスはクイントに抱き締められた。

「例えそうだとしても、そのおかげで私はあなたに出会えたのよ…息子を持てた事を後悔なんてしたくないし…させないで…」
「……ごめん、俺も母さん達に出会えて良かったと思っている。でなきゃ戦うだけの存在になっていたから、だからこそ早くこの研究を止めて
生み出された子を本当の意味で助けたいんだ」
「そうだ、生まれる事は罪ではないし、人生を決めるのも自分自身だ。
だが、生きる道を押しつけるのと示すのでは全く違う。
俺達で示そう、戦闘機人としてではない人としての道をな」

ゼストの言葉にみんなが立ちあがる。

「1時間後に戦闘機人の研究がされている『アトラス研究所』に乗

り込む！」

続く

第11話　「戦闘機人計画」（後書き）

カガヤ：「PV2万、そして書き終えた直後にユニークが3千を突破しました！」

クロス：「ホントにこんな駄文見ていただいてありがとうございます」

ノア：「何か記念作作るの？この前の小ネタ集みたく」

カガヤ：「しばらくは本編進めたいな、正直記念を書くのはもう少しあとで」

クロス：「今度のは2章で小ネタか？」

カガヤ：「2章は…ネタに出来そうなのあるかなぁ、1章よりシリアスだし」

ノア：「ハーレムへの布石その2．だしね…フフフ」

カガヤ：「そこ、黒い笑み浮かべない！というわけですので感想やら質問やらがあればどしどし送ってください♪」

カガヤ：「ちなみにアトラスという名前ですが…型月の某ニーソ錬金術師のアトラス院とは無関係ですので、そういう期待はしないでくださいね？」

ノア：「期待自体あるわけないじゃん♪」

カガヤ：「シクシク・・・」

第１２話　「アトラス研究所」（前書き）

連続投稿、略して連投！（笑）

いよいよ、あの姉妹登場です。

第１２話　「アトラス研究所」

アトラス研究所　近郊

「ゼスト隊長、様子がおかしいです、黒煙が！」

アトラス研究所近郊にヘリで降り森を陸路で向かっていたゼスト隊だが
ふと、研究所の方を向くと何やら黒煙と……爆発！

「何！？急ぐぞ、メガーヌ！」
「はい！！天隼召喚（てんしゅん）！！」

メガーヌは大きな隼を召喚し、その背に乗るゼスト隊。
上空から見ると大規模な研究所の所々に激しい炎が立ちこめ
何かが所員を襲っていた。

「あれは、オートアーマー！？」
「あぁ、それもどうやら改良型らしい…誰の仕業だ」

研究所を襲っていたのはＡＴ、オートアーマーだったが
プレシアのと違い、より細いフォルムをして、手に持つ武器も様々だった。

「気付かれたぞ！メガーヌ、ティーダ！！」
「はい、しっかりつかまってて下さいよ！」
「目標補足、狙撃、開始！」

両肩にキャノンを背負ったＡＴ数体の砲撃を高速でかわしつつティーダの狙撃で一体一体確実に減らしていく。
しかし、一体の動きが止まった。
上空の大きな鳥に載っている人数が減っていたからだ。
鳥を操るメガーヌとこちらを狙撃してくるティーダ…その２人しか載っていなかった。
スコープを上空から地上へ戻すと……スコープの画像に亀裂が走った。

「はあっ！」「とぉ！」「せいやっ！」

いつの間にか地上に降りていたゼスト、クイント、クロスが森を抜けてＡＴに突撃する。
槍が２体まとめて貫き、おまけにと他のＡＴに放り投げまとめて爆発。
ローラブーツを全開にし、ＡＴの体のど真ん中をで殴り後ろの数体をまとめて壁へと叩きつける。
素早い動きでＡＴの間をすり抜ける、そしてそのまま駆け抜けると次々と斬られ爆発した。

アッと言う間に研究所付近のＡＴを沈黙させ、ゼスト隊は入口で合流した。
研究所の所員であったであろう人の死体が至る所に転がっている。

「一体誰がこんな事を、仲間割れ？」

クイントが呟くと窓から１人の研究者が火だるまになり飛び出て来た。

「ジェット・ウォーター！」

掌から水流を出し、火を消すクロス。消火後すぐにメガーヌと治癒魔法をかけるが
ゼストの方を向き無言で首を左右に振る。

「くっ……誰にやられたんだ？」

せめて情報を少しでも聞き出そうとするゼスト。

「なんで、俺達はただ言われたまま研究していただけなのに…なんであいつが来るんだよ…
管理局のあいつが……ちくしょぉ～……結局成果持ち逃げする・・気か・・・よ」

そうして男は静かに息を引き取った。
しかし、絞り出した最後の言葉に一瞬場が静まり返った。

「管理局のあいつ？……襲撃したのは管理局の人間だと言うのか！」
「俺達が来る前に制圧しようと？」
「いや、あの資料は厳重に管理し俺とリンディ艦長とクロノの３人にしか閲覧出来ないはずだ…
おそらくこの男の言っていた通り、この研究所は管理局の誰かの指示で研究していて
用済みになった研究所もろとも消し去るつもりだろう。成果とやらを持ち出してな」
「くそったれが！！」

思わずクロスは叫び、研究所へと駆け出して行こうとして

「待ちなさい、クロス！」

クイントに止められた。

「不用意に跳び込むのは危険よ。まずはこの研究所の情報を集めて目的地を探るのよ」

「・・・・了解。ノア、ハッキングだ！」

『了解です！出番だよ、ミラノール』

＜イエッサー＞

ユニゾンを解き、クロスとノアは研究所入口付近にある端末をいくつか操作する。

２人の能力、レアスキルの１つとして「電脳支配」があり、自身の魔力を変換し

端末からネットワークへ侵入し自由に内部の情報を引き出し、操作出来るというもの

欠点は自動魔道兵器など自立兵器にはよほど集中しないと支配出来ない為

実戦向きではない事。

「見つけました、研究所の見取り図です！データが破損してて詳しい構造はわかりませんが

単純な内部構造ならバッチリです！」

「こっちも見つけた、２名の成功体の情報！居場所はわからないけど、この子だよ！」

各自のデバイスに情報が転送され、研究所の見取り図と生み出された二人の戦闘機人のデータ。

そこに映し出されたのは、２人とも青い髪をしていて

１人はショート、もう１人はロングヘアの女の子だった。

「よし、二手に分かれて捜索だ。ティーダ、一緒に地上部分の捜索だ。
クイント、メガーヌ、クロス、ノアは研究所の地下部分を頼む。
第一目的は少女2名の保護、第二目的は生き残りの保護だ。火事場泥棒の逮捕は後回し！
ただし、可能ならば逮捕、いいな？」
「「「了解！」」」

そうして、二手に別れたゼスト隊の様子をモニターで見る謎の人物。

「ちっ、ゼスト隊か…やっかいな奴らだ。どこにいるんだ『タイプ・ゼロ』は
仕方ない、お前達は地下に迎え、ゼスト隊の奴らは見つけ次第始末しろ！」
「……」

そう言って男は後ろの人影に向かって声をあげると、仮面を被った3人が現れ静かに消えた。

研究所　地下施設部分

途中何体かのATを破壊したが、周辺よりは数が少なくクロス達は難なく進んでいる。
至る所に、研究所所員の死体を発見することを除けば。

「全く、吐き気がする。最近こういう相手ばっかだ」

また2人の死体を見つけ近くにいたATを破壊しながらクロスが呟く。

「クロス・・・」

そんなクロスにクイント達は名を呼ぶ事しか出来なくなっていた。
原因は…クロスが生み出された研究所の光景が浮かぶからだ。
プレシアの言うとおり、クロスは研究所の所員や被験者同じプロジェクトで生み出された
失敗作の子などを皆殺しにして研究所を焼き尽くした生き残りだ。
しかし…クロスの本意ではなかった。今でもクロスやノアもあの光景を悪夢として見る。
そして目が覚めると瞳が紅に染まっているのだ。
プロジェクトＡの証でもある、血よりも紅く輝く瞳。
紅く輝けば輝くほど殺人衝動や破壊衝動が止まらなくなり、能力を限界以上に引き出すのだ。
通常人間は３０％の力しか発揮できないが、残りの７０％を引き出せるようになる力。
魔力も身体能力も全てが限界まで引き出される力
プロジェクトＡの成功体であるクロスだけに与えられた忌わしき力
その名も『エヴォリューダー』

「心配ないよ、母さん達に鍛えられたおかげでだいぶコントロールできるようになったからね」

ゼスト隊に保護された直後はよく暴走し、そのたびにゼスト達に抑えられてきた。
でも今は違う、プレシアへの怒りなどで瞳が紅くなった事はあっても。
エヴォリューダーの力は発動していない。一歩手前のギリギリで抑えているからだ。

「……クロスは連れてこない方が良かったかしら」
「あ～ダメね、この子勝手に付いてきちゃうわよ？それも知らない間に」
『マスターは無茶しかしないですから』
「おーい、人をなんだと思ってるんだぁ？」

場を和ませようと冗談を言い合う４人。
そしてそろそろ最深部に到着しようかとしたその時、ふとクロスが立ち止った。

「どうしたのクロス？」
「……この奥にいる」

クロスは何もない壁に手をあて、目をつぶる。
魔力だけではない、何か特殊な力を壁の奥から２つ感じた。

「隠し扉…と言うわけね」

手分けして鍵となりそうな装置やボタンを探す。

「あった、これだ。この程度のロックなら」

壁に隠していた端末に手をあてロックを解除、すると壁がせりあがり通路が現れた。

「・・・・・（こくっ）」

無言でそれぞれのデバイスを構える。
慎重にクロス、メガーヌ、クイントの順で奥へと進む。
奥には避難シェルターらしき部屋があり

その隅で2人の少女が震えていた。

「お、おにいちゃんたち・・・だれ?」

続く

第12話　「アトラス研究所」（後書き）

クロス：「土日暇だからって書きまくる事はないと思うけどなぁ」

カガヤ：「気が付いたら書いてるんだから仕方ない」

ノア：「だから今回短め？」

カガヤ：「少し短めかな？？」

クロス：「しかし・・・やっと出るんだなあの2人が」

カガヤ：「ヒロイン追加ヒロイン追加♪」

ノア：「何気に作者原作主人公3人組よりこっちの姉妹の方が好きだからねぇ」

カガヤ：「まぁこんな作者ですが今後とも感想などお待ちしております、それではまた次回で！」

第１３話　「３人の刺客」（前書き）

オリ敵です…結構強いです。

第１３話　「３人の刺客」

アトラス研究所　地下隠し部屋

「お、おにいちゃんたち・・・だれ？」

クロス達は隠し部屋の隅にいる少女２人を見る。
青い髪のショート、ロングヘアの２人の女の子、どこかクイントに似た顔立ちだ。

「私に…似ているわね」
「ホント、まるで親子みたい」

クイントやメガーヌも同じ感想を抱いていた。

「あ～俺達は君を守りに来たんだ、２人共名前は？」
「私は…タイプゼロ・ファーストって呼ばれてた」
「……セカンド」

セカンドと呼ばれた幼い少女はファーストと呼ばれた子の背後に隠れている。

「ちっ、もっとマシなまともな名前つけやがれっての」

思わず舌打ちするクロス。

「ともかく、一端ゼスト隊長と合流しましょう。何か通信を妨害されていて繋がらないみたいだから

地上に出るわよ」

そうして隠し通路を出たところで足が止まる。

「ふっ、我らが捜す手間が省けた、感謝しよう」
「捕獲対象と抹殺対象、一石二鳥だな」
「言っておくが我らからは逃げられないぞ」

白い仮面をかぶった黒装束の男が通路を塞ぐように立っていた。

「誰だ、お前ら！」
「って殺し屋が名乗るわけないわよねぇ」

クロスとクイントが少女達を守るように前へと出る。

「…その戦闘機人を渡せば、一瞬で楽にしてやろう」
「誰が渡すか、このロリコン変態仮面が！」
「……言っておくが貴様も捕獲対象だぞ、プロジェクトＡの遺児よ」

この男達はクロスの正体を知っている。
やはり管理局のそれも上層部が関与している可能性は大だ。

「なぁ、お前ら。俺達と来るのと、あの変態仮面に連れ去られるのどっちがいい？」

目だけを後ろに向けてそう言うと、２人の少女は涙目でクロスの手を握る。
クイントとメガーヌは優しく微笑んだ。

「なら、そのお姉ちゃんの後ろに隠れてなよ。メガーヌさん、２人

を頼みます」
「こんな変態仮面私とクロスで十分よ！」
「…わかったわ、2人とも気をつけて！」
（確かに、こんな通路じゃ私の魔法はミスショットしかねないわね）
2人をメガーヌに預けてクロスとクイントは剣と拳を構え直す。
声援を加速剤にしてクロスとクイントは壁や天井を蹴りながら
仮面の男達へと駆け出した。

「アジーン」「ドヴァー」「トリー」
「名前が単純、ね！」

クイントは名乗りを上げた3人の足元を薙ぎ払うように下段回し蹴
りを放つ。
軽く跳んだ3人の腹を狙うようにクロスは剣を横一閃に振う。

「なかなかだな」

しかし、アジーンと名乗った男の両手から突き出た刃がそれを弾き
飛ばす。
同時にドヴァーがクイントの足を持ち、投げ飛ばし、クロスと空中
でぶつかった。
体勢を立て直そうとする2人に向けてトリーの両手の手甲から魔力
弾が撃たれる。

「「トライシールド！」」

無理な体勢からなんとか2人が障壁を張り攻撃を防ぐ。
だが3人の攻撃は止まらない、アジーンとドヴァーが風のように襲
いかかってきた。

「クロス！」「はいっ！」

クロスが天井に、クイントが地面を転がるようにすり抜け2人を挟むようにして
クロスは紋章を浮かび上がらせた拳を
クイントはスピナーを回転させたリボルバーナックルを
2人に叩きこむ！

「「クロス・ナックル！！」」

しかし、仮面の2人はそれぞれの武器を構え、拳を受け止めた。
そしてクロスとクイントに向けてトリーの魔力弾が直撃する。

「うぐっ！」「きゃあぁ！！」
「クロス！クイント！！」

再び間合いと離したアジーン達とクロス達。
クロスとクイントは浅くはないダメージを負っていた。

「こ、こいつら強い！」
「管理局の資料にもない殺し屋、おそらく誰にも見つからず痕跡も残さないほどのプロよ」

トリーが前に出て両手を突き出し、魔力弾をマシンガンのように撃ちだしてきた。

「クイック・ダガー！」

メガーヌが魔法を放ち迎え撃つ。

激しく爆煙を立ちこませ、空中でぶつかり合う弾とダガー。
そして、霧が晴れると同時にかけ出す４つの影

「光刃斬！」
「ツインナックルバンカー！」
「ファントムブレード」
「クラッシュヒート」

クロスの輝く刃、アジーンの腕から伸びた２本のブレード
クイントの魔力が渦巻く両拳、ドヴァーの燃える手甲

ぶつかり合う技と技、激しい衝撃波が辺りに響き渡り、通路を破壊していく。

「きゃっ！」「うぅぅ～」「２人とも大丈夫、私が守ってあげる」

障壁を張りながら、２人を抱き締めるメガーヌ。

アトラス研究所　地上部分

不審な男をあっけなく捕えたゼストとティーダは足元に微かに響く震動を感じた。

「今のは…クロス達か」
「すごい衝撃だ…おい、雇った殺し屋達を今すぐ止めるように言え！」

バインドで拘束された名前を名乗らない男に詰め寄るティーダ。

「無駄だ、あいつらの雇い主は俺じゃない。俺の指示に従えとは言われているが
　一度標的を狙えばあいつらは止まらない！」
「くそっ、ティーダ。こいつを後詰めの奴らに引き渡せ。俺は地下へ行く！」
「ふっ、間にあうかな？」

再び　地下

やがて衝撃が止んで、メガーヌが見た光景は

刃が砕け柄だけ握り締めたクロス、ナックルが砕け血まみれの右手を左手で抑えるクイントと

「あ、あぁ・・・」「おにいちゃん・・・」

無傷で佇むアジーンとドヴァーの姿、いやそれぞれの武器には小さなヒビが入っている。

「ほう、我らの武器に傷を負わせるとはな」
「特別製なのだがな…」
「しかし、もういいだろう。これで終わりだ」

トリーの言葉に武器を構える3人。

『マスター…どうしますか』
「剣が砕けたし…母さんも両手が、メガーヌさんだけじゃ勝てない。隊長達はまだ上にいる…ここは『エヴォリュダー』を使うしかな

い！」
「だ、だめよクロス、死ぬかもしれないのよ！」「危険すぎるわ！」
エヴォリュダーは人の限界まで能力を引き出す代わりに体への負担もかなり大きい。
まだ小さいクロスでは耐えきれない可能性が高いのだ。
クイント達の言葉を聞き流し、クロスは涙を浮かべる少女の元に近寄いて
「大丈夫、俺が2人を絶対に守って見せるからな」
笑顔で優しく頭を撫でた。
そうして3人の男に向き直り、体中に紋章を浮かび上がらせる。
「お前は生きて捕獲と言われたのだがな」
「残念、男に捕まる趣味は…ない！」
クロスの瞳が紅く染まり、紋章の輝きが増していく。
「クロス！！」「ダメよ！！！」
「大丈夫だよ、俺は…死なない、死ねないんだぁ！！！」
その時、クロスとノアの脳裏に声が響く。
＜生きる覚悟があるのか？＞
『だ、誰だ！？』
＜どんな事をしても生きる覚悟があるか？＞
『……当たり前だろ、約束果たさないで死んでたまるかよ』
＜約束？＞

『約束したんだ、あの人と…生きると皆の分まで生きると!!』
『大切な人を守って生きると誓ったんです!』
＜……いいだろう、そこまでの覚悟があるのならば……鍵を回せ＞
『鍵?』
＜そうだ、鍵…ジュエルシードに封じられていた鍵だ＞
『な、なんだと!?』
＜太極の書と光天の書、そしてノアの記憶。それらは後世に災いをもたらす可能性もある
　ゆえに封印の鍵をいくつか設けたのだ＞
『私の記憶も…』
『ジュエルシード自体が鍵だったのか?』
＜ジュエルシード自体は管理局の認識であっている、その中に封じ込めただけにすぎない＞
『それで、鍵を回せば…』
＜そうだ、三つの力、騎士と闘士と銃士の力が使えるようになる＞
『…やっぱり、書いてあった通りの力か…だから俺は母さんやティーダさんからも
　戦い方を教わったんだ』
＜そして、お前の魔法制御の封印も解ける、これで真の古代魔法も使いこなせるだろう＞
『真の古代魔法!?』
『今使っているのに違和感はあったけど…それは本当の古代魔法じゃなかった…から』
＜もう、時間のようだ……クロス、ノア。更なる鍵を見つけ、封印を解き使命を果たせ＞
『使命?』
＜蘇るアルハザードを滅ぼした者が蘇る…そやつを倒す事が、太極の書と光天の書…そして…
　もう1つの魔道書が作られた目的だ＞
『アルハザードを滅ぼした者…それにもう1つ…ってなんだ!?』

『まだアルハザードの遺産があるの！？』

＜戦え、クロス、ノアよ。勝つ為、滅ぼす為ではなく生きるために守るために戦え！＞

『……あぁ、わかってるよ。いくぞ、ノア！』

『…はい、マスター！』

太極の書の主、クロスロード・ナカジマと光天の書の主、ノア・ナカジマが命ずる

太古の縛めを解き、今ここに新たな姿を現せ……第三封印、解放！

続く

第13話　「3人の刺客」（後書き）

クロス：「暇人め…」

カガヤ：「い、いいだろ同日更新しても！」

ノア：「まぁまぁ…」

カガヤ：「余裕あればあと1、2話更新したいですけど未定です！（笑）それでは感想などをお待ちしておりますペコリ（ｏ＿＿）ｏ）」

第１４話　「騎士と闘士と銃士と」（前書き）

やっぱり1作で気力がなくなりました…ってか結構今日で更新出来たうちですよねぇ？（笑）

第１４話　「騎士と闘士と銃士と」

アトラス研究所　地下隠し部屋

「はあぁぁぁ～～！！！」
『うわぁぁぁ～～！！！』

地下中にクロスとノアの雄たけびが木霊する。
同時にクロスの体に紋章が赤く点滅している、外からは分からないがノアの体にも青い紋章が輝いている。
紋章はより複雑な構造となり体中を駆け廻る。

「い、一体何が…」
「クロス…」

アジーン達は攻撃しようとするが凄まじい魔力の放出に身動きが取れずにいた。

「くっ、こんなのは情報にないぞ」

一方、地下入り口に差しかかっていたゼストは瓦礫の下から声が聞こえ、女性を救助していた。

「あ・・りがとう・・・」

しかし、救助した女性はほとんど瀕死状態でゼストには手の施しようがなかった。

「ここに来るときに救助隊を呼んだ、もう少しの辛抱だ！」
「いいの、これは私の自業自得なの…人道に外れた研究をして良心が痛むとかって
　自分に言い訳しながらも何もしなかった…あの子達を隠し通路に隠すしか出来なかった。
　そんな哀れな女の末路にはふさわしいでしょ？…ごふっげほっ！…はぁはぁ…」

女性の白衣は自分の血で真っ赤に染まっていた。

「ねぇ管理局の良心さん…あいつらより先にあの子を保護してあげてくれないかしら？
　地下最深部の長い廊下の途中に隠し通路があるわ、そこに2人の女の子がいるの…
　……お願…い」
「安心しろ、お前の言うあいつらなら俺がさっき逮捕した」
「あぁ…良かった」

そうして、女は静かに瞳を閉じた。
しばらくゼストは動けなった、脳裏に浮かぶ一人の科学者。

「…お前にもクラリス・フォロンのような良心が最後の最後で目覚めたか」

そっと自分のマントを名も分からぬ女研究者にかけて、ゼストは先を急いだ。
先ほどから感じる魔力は間違いなくクロスのもの、だが明らかに出力が違っている。

「まさか、エヴォリュダーの力を使ったのか…」
嫌な予感を振い払うように加速して飛んでいく。

魔力放出が止まり、煙が晴れると、そこに立っていたクロスの様子が変わっていた。
身にまとうバリアジャケットが服から鎧のような外装に変わっている。
手にもつ剣はショートソードからロングソード並の長さと太さに両手はグローブではなく手甲、肩と胸、両脚には小さめだが装甲が付けられている。

「バリアジャケットが…変わっている？」
「これはバリアジャケットじゃない…古代魔法、いや！
アルガス式魔法『アルガスアーマー』だ！」
「ア、アルガス式魔法…それが古代魔法の本当の名前」
「ついに、全てを会得したのね」

クロスは頬をかきつつ、若干苦笑いを浮かべクイントとメガーヌに振り向く。

「いやぁ～…実はこれでもまだ全然全てじゃなくて半分くらいってとこみたいだよ」
『まだまだ修行しないとアルガス魔法を完璧に会得は出来ないのです』
「でもこれでも十分にあいつら倒せる…でもまずは」

そう言ってクロスは剣を地面に突き刺し右手を斜め上に向けた。

「プリズム・ノヴァ！」

巨大な光の砲撃が、天井を突き破り一気に外へと撃ちだされた。

「…！逃がさん」

続けて、襲いかかってくるアジーン達へ左手を伸ばし

「プリズム・クラッカー！」

白銀の１４つの魔力弾をアジーン達に飛ばす
避けようとしたが弾速が早く誘導性能も高い弾に直撃し吹き飛ばされてしまった。。

「い、今のは…砲撃魔法に射撃魔法！？」
「詳しい話はあと！さぁ、ひとまず地上へ！」

唖然とするクイント達をせかして、クロスは2人の少女の手を取り空いた穴から一気に地上へと飛んだ。
クイントもウイングロードを展開しメガーヌの手を取り、続けて飛びだした。
跳躍を使えばいいのだが、地下にジャミングをかけられていてうまく発動しないため
クロスは天井に穴をあけたのだ。

地上では後続のゼスト隊員に犯人を突き出してきたティーダが他の隊員と共に駆け寄ってきた。

「通信が繋がらなくて心配してたんですよ、みんな無事でよかった…ん、その2人が？」

「えぇ、例の少女よ。それより構えて、敵が来るわよ」
穴を囲むように隊員がデバイスを構える。
「すみません、俺がやります！俺に…やらせてください」
「無茶よ！さっきクイントと2人がかりでもやられたのに！」
クロスの言葉にメガーヌが反応したが、クイントがそれを制した。
「クロス…負けたらその子達はきっと悲しむわよ、それになのはちゃん達も」
クロスの両手をじっと握りしめたまま不安そうな顔をしている2人の少女。
黙って…でも笑顔でクロスは2人をクイントへと預けた。
「俺はもう負けない、だから…ここで、待っててな」
「……うん！」「おにいちゃん、負けないで！」
2人の声援を受け、剣を持つ手に力が籠る。
「クイント！」「大丈夫よ、今のクロスは…多分私やあなたよりも強いわよ」
「姐さん、クロスのあの姿は…ひょっとして」
「えぇ、3つの目の封印が解けたみたいなの、だからここは任せましょう」
クイント達と隊員達が見守る中、穴から3つの影が飛びだしてきた。
「…他の隊員達も集まってきたか、面倒だな」

「あ～俺だけ相手になるから問題ないぞ？」
「何！？先ほどあれだけやられておきながら…ガキが！ファントムブレード！！」
「さっきはさっき…今は、負ける気がしない！」
アジーンの剣撃を受け止める、少し押し出されるがすぐに止まる。
「何！貴様…剣が変わっている？」
「名称はこれまで通り、エクスカリバーだからよろしく。そしてさっきまでとは違うのは…
俺の相棒、ラファールが騎士形態≪ナイトフォーム≫だからだ！」
声を張り上げ、腕に一瞬紋章を光らせアジーンのブレードを押し戻す。
その時、クロスの背後にドヴァーが音もなく周りこみ手甲で殴りかかってきた。
クロスは後ろを見る事なく上半身をずらしただけでかわして見せた。
「くっ、なんだ、先ほどまでとは別人か！？」
そしてクロスは足に紋章を浮かばせアジーンの胸に強烈な蹴りを当て突き飛ばし…ドヴァーから距離を取った。
「ならば、これはどうだ！スーパーバスター！」
トリーが両手に魔力を集めて撃ちだす、クロスは剣を立て、左手で上部を支え構える。
「鏡面剣！」

銀色に輝く剣に当たった砲撃はそのままトリーへと跳ね返された。
トリーはその場を飛びのき、これをかわした。

「魔力が上がってる?それに魔力だけじゃない、反射神経や身体能力も?」
「これがアルガス式魔法の基本動作…体中の強化したい部分に一瞬だけ紋章を浮かばせ強
化させる。でも、俺が目覚めた力は…まだこんなもんじゃない!」
『2番目、いきます!』

クロスの体が一瞬赤い光に包まれたかと思うと。
次の瞬間にはクロスの鎧の形状がまた変わっていた。
手足の手甲がさっきまでは守備用の形状だったのが
今で両手と両足首の後ろとジェットノズルのようなものがついた形状になっている。
さながらスピナーの代わりにノズルが付いたリボルバーナックルのようだ。
そして額には鉢巻が巻かれている

「これが…ラファールの2つ目の姿、闘士形態≪グラップラーフォーム≫!」

言うが早いかクロスの姿がかき消え、次の瞬間にはドヴァーの足元に居た。

「速度…」『ソニックバースト』「何っ!?」

そのままドヴァーの顎をアッパーで撃ちあげる。ドヴァーはそのまま地面に落ち、気絶。

「攻撃…」『サイクロンアッパー』「ぐはっ！」

そして、不意に斬りかかってきたアジーンの刃を左手で挟み

「防御…」『パワードアーム』「ぐっ！」

続けざまにトリーが放ったいくつもの魔力弾を右手で張った障壁で受け止めた。

「魔力…」『トライシールド』「ちぃ！」

右の拳が唸りを上げる。

「…受けてみろ、これが母さんのシューティングアーツを元に俺が編み出した…」

右手のノズルから勢いよく魔力光が爆発的に噴射する。

「シェルブリットだぁ！！！」

ノズルの勢いをそのまま載せた拳がアジーンの腹に撃ちこまれた。

「がっ……ぐふっ！」

アジーンは吹き飛ばされ研究所の壁に叩きつけられ動かなくなった。

「あ、ちゃんと気絶程度に押させてあるぞ」

「…我らをこうもあっさりと」

「いやぁ～あんたらが俺を少し見くびって油断してくれたおかげだよだからこっちは速攻で決めるしかなったしさ」

「なるほど…ならば我はもう油断しない！」
「俺は最初っから油断してないけどな」

クロスは不敵な笑みを浮かべてトリーと対峙する。

「せっかくだから…3番目も使ってみるか」
「何！まだあるのか」
「あるんだよ…銃士形態≪ガンナーフォーム≫がな！」

また赤い光につつまれクロスの鎧が変化する。
先ほどまでと違い装甲部分が減り、ティーダのようなジャケット姿になる。
しかし、肩、膝、肘にはプロテクターが装着されてはいる。
そして両手に形状の違う銃を持っている。

「…いくぞ」

まずは左手に持った銃身にバネのような筒が付いた銃を撃つ。

「ちぃ！トリプルバースト型か！」

弾は3連続で発射され、トリーは転がるように横に飛びながらなんとかかわす。
クロスはなおも左の銃を撃ち続け、右手の銃をしっかりと狙い定めて、撃つ。

「こっちは弾速が速く…重い弾か！」

かわしきれずに障壁を張りなんとか防ぐ、だが数発防いだだけですでに小さなヒビが入った。

「右の銃は弾速と威力、左の銃は連射、か…装填がないのはいいけど…」

『マスター、撃ち過ぎると魔力がなくなるので注意して下さい』

左右の銃の性能を確かめてるとノアからの注意を受ける。

「なら、とっととケリつけるか！」

足に紋章を浮かばせ一気にトリーの元へと駆け寄る。

「舐めるな、小僧！」

トリーはとっさに後ろに飛びつつ両手をつきだす。

「小僧じゃないクロスだ！！」

クロスは右の銃を、左の銃の撃鉄部分に銃口を入れる。

すると２つの銃は前後で合体した。

左手の銃のグリットが折りたたまれポンプアクション型ショットガンのような構造になった。

「なにっ！？」

「メテオ・ザッパー！！！」

合体した銃から発射された複数の魔力砲撃がトリーに直撃する

「・・・がっ・・・ぐっ」

ボロボロになりながら地面に倒れ込むトリー。

ちょうどそこへ地下の穴からゼストが出てきた。

「これは…一体？」

「隊長！あいつが雇った殺し屋はクロスが全員倒しました」

ゼストに駆け寄りティーダが報告する。

クイントはメガーヌに治癒魔法をかけてもらっていた。

「ふぅ……任務、終了っと」

肩に銃をかけ、ユニゾンを解いたクロスが息を吐き出す。

「マスター、かっこいいですよぉ～♪」

ノアが口笛を吹きつつクロスを褒める。

そこへ保護した2人の少女が隊員を振り切って駆け寄ってきた。

「「・・・おにいちゃん！！」」

涙を流しながらクロスに飛び付く2人。

とっさの事にバランスを崩し後ろに倒れ込んでしまった。

「ははっ、おにいちゃんって言われるのも悪くないかもなぁ・・・」

そう言ってクロスは地面に倒れ込んだまま、泣きつく2人の頭を撫でつつ

満天の星空を眺めていた。

続く

第１４話　「騎士と闘士と銃士と」（後書き）

カガヤ：「なぁ・・・お前本当に９歳児？」

クロス：「お前が設定したんだろうが！！」

ノア：「でも・・・見えないかもです」

クロス：「いや、そういうノアも実際の稼働年数はエイミィさんくらいだろうに…そうは見えないぞ」

ノア：「若く見られるって素敵ですぅ～♪」

カガヤ：「はぁ・・・それよりもやっと出せました、クロスの３フォーム！」

クロス：「ティガやクウガ大好きだからなお前は」

カガヤ：「フォームチェンジはいいものです！」

ノア：「でも描写が足りないんじゃない？形状とか」

カガヤ：「俺に絵の才能ありゃ描くんだけど…道具も才能もない」

クロス：「ま、あとで説明出すんだろ？」

カガヤ：「そりゃもちろん！ちなみに手甲や銃にもちゃんと名前つけますよ」

ノア：「左右どちらかに性能の違う銃が出るんだよね？」

カガヤ：「そ、軽く説明すると一方がバイオ風に言えば
バレッタ3点バースト型でもう片方がマグナム型…
どちらもクロスの魔力で撃つけどカートリッジシステム
ないから結構消耗激しいかもよ？」

クロス：「そこは新しいレアスキルが出るんだろ？」

ノア：「新しい封印解除になって能力や魔法が増えました」

カガヤ：「そこらへんも紹介書いたり、本編で出すので気長にお待
ちください」

3人：「それでは感想、その他まってまーっす！」

クロス：「そう言えば前回とかで結構な誤字あったんだよな？」

カガヤ：「はい、こっそり直しました…今回もあるかも（汗）」

第１５話　「スバルとギンガ」（前書き）

ちゃっちゃと話進めたいですが…なかなかうまくいかないですねぇ…

第15話　「スバルとギンガ」

地上本部　医務室

重い…体が重い……胸が…苦しい。

「……おい」

自分の胸元にいる物体を睨みつけてクロスは声をかけた。

「なんでお前が俺の胸元に寝ている、ノア？」

「あ、マスタ～…おふぁようございます…おやしゅみなしゃ…」

「寝るな！！！」

今クロスは医務室のベッドで寝ている。

なぜここで寝ているか…は思い出した。

あの後…2人の少女の頭を撫でながら星空を眺めていたら

急に力が抜けて眠ってしまった。

おそらく、封印が解けた直後に激しく戦闘をしたから

一気に消耗してしまったのだろう。

「だって～この前アースラではマスターが先に起きたから…

一緒に寝れなかったんですもん」

「あの時寝起きで残念そうな顔してたのはそのせいかよ！！」

「今回は一緒に寝れたので満足です♪」

「アースラでこんな事になってたら…ものすごく嫌な展開になった気がするぞ」

そう言いながらクロスは自分の手足を動かす。
（よし、体力も魔力も戻ってる！）
おそらく封印が解けた恩恵の1つだろう、回復力がかなり上昇していた。

「あら、起きたのね」

個室のドアが開きクイントが姿を見せた。
クイントが部屋に入るより早く入り込みクロスに飛び付く影2つ。

「「おにいちゃん！」」
「わわっ、お、お前ら！」

ベッドに飛び付いてきたのはクロス達が保護した2人の少女だった。
反射的に2人の頭を撫でる、2人共くすぐったそうにしながらも頬を染めた。

「こらこら、2人とも。嬉しいのはわかるけどまずは言う事があるでしょ？」
「はい、お母さん…おはよう、お兄ちゃん♪」
「違うよ、スバル。挨拶だけじゃなくて・・・ほら」
「ん？母さん？スバル？？」

わけがわからずクロスは？マークを浮かべる。
ちなみにノアは2人が飛び付いた時にベッドから転げ落ちた。

「え、えっと……はじめまして、ギンガ・ナカジマ…です／／／」
「スバル・ナカジマだよ、よろしくクロスお兄ちゃん、ノアお姉ちゃん♪」

「あ、それが2人の名前か…って」
「「えぇえ〜!!?ナカジマ!!??」」
這い上がってきたノアと2人で声を張り上げる。
「ふふっ、そうよ。2人は私達の養子にしたの、ちなみに名前はゲンヤが名付けたのよ」
クイントはまるでいたずらが成功した時の子供のような笑顔で話した。
「よく上が文句言わなかったよね…」
「レジアス少将脅したの♪」
「うわぁ〜……」
自分達の上司であるレジアス少将に今回の件を報告する際に色々言ったらしい。
プレシアの時と言い、本当に交渉がうまい…というか色々な意味で凄い。
クロスとノアは心の中でレジアスに合掌した。
「銀河に昴……か、父さんの付けた名前にしては良い名前だな」
「聞こえたぞクロス!全く……久々に会いに来たかと思えば」
「「父さん!?」」
声のする方を向くと、1人の男…クロス達の父親でクイントの夫である
ゲンヤ・ナカジマが不機嫌そうにドアに寄りかかっていた。
「ったく、クイントと違って任務上でも会える機会少ないってのに

よぉ」
「はいはい、それでもこうして会いに来てくれるあんたはいい父親だよ♪」
「うんうん、お父さんは自慢のお父さんです♪」
「そうそう、渋顔でオヤジっぽい良いお父さんだよ」
「ありがとよ…ってクロス！誰が老け顔だぁ！俺はまだ２０代だ！！」
「誰もそこまで言ってない…ってかもう３０ギリギリじゃないかよ」
ゲンヤはクイントとノア、クロスの言葉に照れくさそうにしつつギンガとスバルに目を向け二人の頭に手を乗せる。
「ま、見ての通り賑やかで騒がしいが…これがお前達の『家族』だ」
スバルとギンガは周りの顔を見た、ゲンヤ、クイント、ノア…そして、クロス。
クロスの顔を見た途端に顔を赤くする２人。
「はは～ん、こりゃ…２人を養子にしない方がよかったかもねぇ」
「なのはちゃん達と私のいいライバルになりそうです♪」
「あら、さりげなく自分も入れるなんて、私も入ろうかなぁ～」
「ってちょっとまて！なんのライバルだなんの！」
「そうだ！第一スバル達はもちろん、クロスにだってまだまだ早すぎるぞ！
というかクイント、お前まで何を考えているんだ！」
「あ～いざとなったらスバルとギンガの養子を解除して…」
「なら、ついでに私も解除して…というかいっそ重婚を」
「こら！そこの２人暴走するな、いい加減落ちつけ！」
「……お見舞いは後にしましょうか」

「それがいいな…」
「ははっ、クロスも大変だなぁ…」

病室近くまでは来たが立て込んでいるようなのでそっと病院を後にするゼスト隊。
しばらく、クロス達の病室からは賑やかな声が絶えなかった、

そして、数日後

「クロスロード・ナカジマ、ノア・ナカジマ両名、本日より出向に戻ります」
「あぁ、退院おめでとう」

クロス達は見事に現場に復帰していた。
ゼスト隊へは本来、人造魔道師関連の事件の捜査の時にアースラ隊から出向となる。
今回は戦闘機人計画捜査の継続という形でまだしばらくはゼスト隊所属となった。

「事件の後処理の事はもう知っているな？」
「はい、あの研究所を襲撃した主犯、バーガス・レミッテの供述に基づき
　管理局地上本部所属の上層部の一部が逮捕され、雇われた殺し屋も裁判待ち、と言う事は」

会議室のモニターに様々な資料が映し出されていた。
その中にはアトラス研究所の様子もある、捜査終了後は廃棄処分が

決まっている。

「そうだ、だが俺は逮捕された上層部はトカゲのしっぽだと思っている」

「確かに…中途半端な地位に居る人達が検挙されましたからね…」

ゼストの言う逮捕された上層部の一部と言うのは供述と証拠はそろっているが
皆はっきりと容疑を否定していない。
潔いと言うには少し歯切れの悪い認め方をしている。

「……ともかく誰かの思惑通りであれ一度区切りは付けられたのだ。
捜査は終了だ…表向きはな」

締めの言葉を言ったゼストにみな意味ありげな笑みを浮かべて答える。
そんな中クロスとノアは難しい顔をしている。

『マスター……』

『あぁ、やっぱり管理局…それも一番てっぺんの部分は腐りきっているようだな』

考えている事はある、だがそれを実行するには全てが足りない。
信頼出来る仲間、頼りになる権力者、実行するだけの実力…その他諸々
その全てがそろった時…「クロスロード」本当の敵との戦いになる。
今はまだ誰にも言っていない、秘めた野望を胸に抱いてクロスとノアは決意を固める。

「それと、クロス。しばらくはクイントと休暇だ」

「……え？」

いきなり名を呼ばれたかと思うと突然休暇を言い渡された。

「お前はここしばらく任務続きだったからな。家族も増えていい機会だ、1か月ほど休め」

「えっ…ええっ！？」

状況が全く分からなかった。

「つまり隊長は家族水入らずで過ごせってことよ」

「というよりはゼスト隊全員のご褒美と言う事らしい、たまには休め！とな

俺もレジアス少将から言われただけだが…」

メガーヌの言葉にゼストも困惑気味に続けた。

最初ゼストは自分達を捜査から遠ざける狙いがあると思ったようだがそれはなく、単にゼスト隊の有給がたまりすぎていい加減まとめて休め！との事だった。

「今日の報告を纏めたものから休暇に入って構わない、いきなりで戸惑っている事だろうが…

次の大仕事への英気を養う上でもしっかり休んでくれ、解散！」

その夜、帰宅したクロス達はギンガとスバルの手厚い出迎えを受け早速休暇の予定を立てた。

ゲンヤの方は、休みは取れるに取れるが2週間ほどが限界らしく…激しく落ち込み、クイントやノアに慰められた。

そして……自分の部屋へと戻ったクロスとノアはベッドの上であの声を思い出す。
３つ目の封印が解けた時に聞いた謎の声…
しかし、２人にはなんとなくだが正体は分かっていた。
あれは…アルハザードの魔道師達だ。
太極の書と光天の書…そしてノアを作り出した古代の大魔道師達。
封印が解除された事により色々な事が分かってきた。
古代魔法がアルガス式と言う名前でありミッド式とベルカ式の原典になったという事。
デバイスも古代は今よりずっと進んだ技術が使われていた事。
そして、その技術は主に光天の書に書き記されているという事。
現在、ゼストとクイントのデバイスは改造中だ。
２人とも今のデバイスでは出力に不満があるそうだ。
特にリボルバーナックルの損傷が酷くどうせなら作り直そうと言う事になった。
そして、光天の書に納められた技術を応用した最初のデバイスになる事も決まった。
だが完成までに数週間かかるらしく、それを見越しての休暇だそうだ。

しかし……ノアの記憶はまだ全て蘇っていない。
正確には色々な情報がいっぺんに押し寄せてきて整理が付かないと言った状態らしい。
その中で思い出した単語がある。
それは古代の魔道師達が残した太極、光天に続く第３のアルハザードの遺産。
用途も詳しい事も何も分からないがその名を言うとノアの胸が熱くなる…
自分はこの書を探さなければいけないという強い想い。

アルハザードの遺産、第３の魔道書……その名は

『夜天の書』

続く

第15話　「スバルとギンガ」（後書き）

ノア：「ニヤニヤニヤ…」
カガヤ：「ニヤニヤニヤ…」

クロス：「な、なんだその笑みは！」

カガヤ：「べっつに～なんでもなぁ～い♪…さて、次回からは少し日常を書くつもりです。家族そろっての休暇の過ごし方などなど」

ノア：「なので…狸さんの出番はまだまだ先ですね」

？？？：「な、なんでやぁ！！！」

クロス：「哀れな…」

カガヤ：「なのはやフェイトも出す予定です」

なのは＆フェイト：「「やったぁ～！！」」

ノア：「レジアス少将も名前だけは出ましたね」

カガヤ：「原作よりは結構丸くなってるようで…本格的な出番はまだですけどね」

クロス：「あといよいよこの単語が出てきたな「夜天の書」・・・」

ノア：「早くあの子達に会いたいです～♪」

カガヤ：「3章は今までよりも激しいバトルになる予定なので2人、次回からの休暇でしっかり英気を養うように！」

クロス、ノア：「「了解♪」」

カガヤ：「それでは感想などお待ちしております♪ペコリ（ｏ_ _）ｏ）」

第１６話　「ノアのハーレム大作戦！？」（前書き）

たまにはシリアス抜きのほのぼのギャグ書きたい！
と思ったのに…どうしてこうなったｏｒｚ

第16話　「ノアのハーレム大作戦!?」

ナガシマ家

「はっ、やぁ!!」「せいっ…っと!」

ナカジマ家の庭では今クロスとクイントがシューティングアーツの特訓中。
ゲンヤの休みに合わせて旅行に行く予定でそれ以外はなるべく家かミットチルダ近郊に居ようという事になり、今日は朝から家にのんびりの真っ最中…で、なぜ特訓しているかというとクロスが剣技や魔法以外にも格闘技により力を入れてマスターしたいと言った為だ。
シューティングアーツの基礎は教わっていたが元々ローラーブーツ専用の格闘技なので空戦魔道師のクロスにはあまり不向きと判断し基礎や格闘戦の技術だけ教えていた。
しかし、格闘戦用の闘士形態を手に入れた事で格闘戦の技術や経験が更に必要になったのでこうしてクイントに本格的に教わっている。

「お兄ちゃんがんばれ～!」「お母さんふぁいと～」「どっちも負けるなぁ～」
「あのなぁ…俺達は別に勝負してるんじゃないんだけど」
「あら、なら…勝負してみる?独自の技開発したんでしょ?♪」

ギンガ達の声援を受けてクイントがそう言ってきた。

「無理！あれはたまたま相手が油断したから当てられたわけで！」

クロスは必死に弁解するが、実際は現段階では形はほぼ完成し、後は実戦で慣らすだけの技

『シェルブリット』元々空気を撃つエアブリットを実戦向きにさせるために考えていた技だが

闘士形態になり鎧を纏い、さらにその両手足には拳や脚を加速させる小型ジェットノズル…

付けた名称「ジェットファイア」のおかげでさらに実用的になったのだ。

「私のリボルバーキャノンとどっちが堅いか試してみたくって～♪」

「ってそれ母さんの新技じゃん！！息子を試し撃ちの相手にさせる気！？」

目を輝かさせて迫るクイントにクロスはどうやって逃げようかと考えてると

「こんちわ～三河屋です～」

「ちょっとお兄ちゃん、違うでしょ！！」

ティーダがギンガくらいの女の子を連れてやってきた。

なぜか挨拶は地球で流行っている国民的アニメのキャラっぽいが。

「あら、ティーダいらっしゃい。そっちの子はティアナね」

「こ、こんにちは……ティアナ・ランスター……です」

クイントが玄関まで向かうと2人が仲良く挨拶した。

が、女の子、ティアナはそう挨拶するとティーダの後ろに隠れてしまった。

「おいおい、さっきまであんなにはしゃいでただろ、クロスに会えるって」
「ちょ、ちょっとお兄ちゃんそれは言わない…でっ！」
「いってえぇ！！！」

ティアナは顔を真っ赤にしてティーダの脛を蹴る。
クロス達は興味深々に庭から覗いていたがやがて2人の前に出てきて

「いらっしゃいティーダさん♪それと…はじめましてティアナ♪
俺がクロスロード・ナカジマ…クロスでいいよ」

差しだされたクロスの手をティアナは顔を真っ赤にしながらもしっかりと握った。

「お、ギンガにスバル…こんにちは、俺を覚えてる？」
「え、えっと……」「あはは…」

しどろもどろに誤魔化す2人にティーダは軽く凹んだ。

「そ、そりゃ俺はあの時は色々事後処理してて2人に会おうとしたら…
肝心の2人は眠ったクロスに泣きついてて全然俺に気付いてなかったからなぁ…」
「？泣きついて？？」「私もそれは知らないですね」
「「あぅあ・・・それは・・・／／／」」

ティーダの言葉に顔を真っ赤にして手をばたばたさせるギンガとスバル。
わけもわからないクロスとノア。

その問いに笑いを堪えていたクイントが答える。

「研究所での戦闘の後で2人がクロスに抱きついたでしょ?それで転倒して…
すぐにクロスが眠っちゃったから2人とも自分が飛び付いたから頭打って気絶したんだと
勘違いしちゃって…」

「そうそう、2人とも大泣きながらクロスとユニゾンが解けたノアを揺すったんだよなぁ
よく目が醒めなかったよな」

「そ、そんなことまでしてないよ!!」

「だって…お兄ちゃんいきなり黙って目を閉じちゃったから…ノアお姉ちゃんもお兄ちゃんの
体から落ちて来ちゃったし」

頬笑みながらクイントとティーダはその時の様子を思い浮かべて語った。
必死に否定するギンガと必死に弁解して俯くスバル

「あの~スバルとマスターが限界みたいだからその辺にした方がいいですよ?」

ノアの言葉にクイント達がクロスとスバルの方へ顔を向けると
茹でタコ以上に顔を赤くするクロスと思いだしたのか涙を浮かべて泣きそうなスバルの姿が

その後、なんとか2人を落ちつかせてリビングへと移る。

クロス達は今は庭で遊んでいる。
普段とは違って純粋に子供らしいクロスとノアの姿に安心する保護者2人。

「しかし、いきなり1カ月の休暇って言われても困りますよねぇ」
「あら、うちはちゃんと計画立てたわよ？いい機会だからティアナちゃんを
遊びに連れて行きなさいよ、なんだったら私達と一緒に過ごす？」
「どこに行こうかと思ってるんですけど…姉さん達はどこに行くんですか？」
「……地球よ、ちなみにこれはクロスとノアが言い出したの」
「地球…か、ＪＳ事件の時はあまりゆっくり出来なかったみたいですからね」
「時期も時期だし、なのはちゃんにギンガとスバル会わせたいって言いだしてね、主にノアが」
「…そういえば一度ティア連れて遊びに来てとも言ってましたね…ノアが」

2人の視線は自然と庭で遊ぶノアに…

そして、当の本人達は

「へぇ、ギンガとスバルってせんとうきじんって言うんだ」
「ちょっと待て！何普通にバラしてるんだよ2人とも！！！」
「え？」「ダメ…だった？？」
「ダメ！！！あーなのはやフェイトやリンディさん達にならいいけど…
ティアナは意味理解してないみたいだな…」

ナチュラルに自分の秘密をばらす2人にクロスは頭を抱えた。

「まぁまぁ、そういえば今度フェイトちゃんに会いに行くんですよね？」
「あぁ、事件は完全にリンディさん達にまかせっきりだから進捗状況を確認にね」

フェイト、アルフ、プレシアは未だに本局で軟禁中。
裁判が終わるまでは少しの間の辛抱との事だが、功労者であるゼスト隊には面会が許されていた。

「フェイト…なのは？？」
「あぁ、2人とも俺の大切な友達でなのははちょっと離れた所に住んでるんだよ」
「友達…かぁ」
「どうしたの、ティアナちゃん？」

友達という言葉に俯くティアナをノアが気付いた。

「わたし、お母さんもお父さんもいなくてお兄ちゃんも仕事忙しいから…1人でいる事多くて
近所の人がよく気にかけてくれるから大丈夫なんだけど…でも友達もいなくて寂しくて」

ティアナは膝をかかえて黙り込んでしまった。

「なんだ、ならもう大丈夫だろ」
「えっ？」

クロスの言葉にティアナは顔を上げた、そこには…

「だってもう友達４人もいるんだぞ？俺にノアにスバルにギンガ…な？」

ティアナを見つめる４つの笑顔があった。
ギンガとスバルは恥ずかしそうにしているがそれでもスバルが手を差し伸べ

「一緒に、遊ぼう…ティアナ♪」
「わ、私の事は…ティアで良いわよ」
「おう、よろしくな、ティア」「ティアちゃん♪」「仲良くしようね、ティア」

四方から愛称を呼べれティアは…

「う、うるさいうるさい！周りでいっぺんに呼ばないでぇ～！！」

湯気が出そうなくらい顔を真っ赤にして駆け出してしまった。
一瞬キョトンとするクロス達だがすぐに顔を見合わせ

「「「「まって、ティア～♪」」」」
「呼びながら追いかけてこないで、みんなで一斉に呼ばないでぇ～／／／／」
（ふふっ、作戦成功！変な策はいらないんです、マスターの近くにいるだけで
マスターの話術にハマっていくんです…でも今回はスバルもナイス後押しですよぉ♪）

笑顔でティアを追いかけるノアは…やっぱり心の中でも笑顔だった。

「あらら～楽しそうね♪」
「流石は姐さんの子…あんなティア初めて見た」

その日からナカジマ家で聞こえる声は一層賑やかになったそうである…

続く

第16話　「ノアのハーレム大作戦!?」（後書き）

クロス：「おいぃ～!!なんだハーレム大作戦って俺は知らないぞ!」

ノア：「だって私が建てた作戦ですもん♪」

カガヤ：「というわけでティアナ（6歳）登場♪ギンガやスバルとめっちゃ早く面識もちました～」

???：「なんで、なんでティアナが早く出てきて私はまだ出番なし!?納得できるか、はっ!またスキマ!?…作者のあほ～～・・・あほ～…!!（フェードアウト」

カガヤ：「はいはい、うるさい狸はスキマ送りっと♪」

クロス：「むごい・・・」

カガヤ：「では次回はフェイト達がちらりと登場予定です」

ノア：「ちなみに2章はもうバトルなし?」

カガヤ：「最後の最後であるよ、まぁバトル未遂ってやつが?」

クロス：「何にせよまだ休暇ってことか」

カガヤ：「そうそう、休暇は楽しみないと♪というわけで感想その他たくさんまってまーっす!」

第１７話　「修羅場？そんなの『まだ』ありません！」（前書き）

いつの間にかポイントが１００越え！お気に入り登録もたくさんしていただいて本当にありがとうございますペコリ（ｏ＿＿）ｏ）

ラブコメ一直線～…脱線してないよね？？

第17話　「修羅場？そんなの『まだ』ありません！」

時空管理局　本局

「なんだかここに私服でいるクイントやクロス君を見ると違和感あるわね」
「来る事は来るのだけど…大抵制服だからね」
「俺も同じく」
「うわぁ～ここが本局かぁ～」
「スバル、キョロキョロしていると転ぶわよ？」
「お兄ちゃんもここで働いているの？」
「いんや、俺はここじゃないよ、それに本局は久しぶりさ」

ナカジマ家とランスター家を出迎えたリンディは苦笑いを浮かべながら案内をする。
ちなみにゲンヤは1人仕事中…南無。

今日は本局にいるフェイト達に会いにナカジマ家総出でやってきた。
ティーダとティアナも行くところがないという事で一緒に来たのだ。

「本来ならまだ裁判中だから面会は難しいのだけど…特別ね」

フェイト、アルフ、プレシアは裁判中のため本局で拘束されている。
本来面会は裁判関係者のみなのだが当事者でもあるクロス達は例外として面会を許可された。

「それにしても…ギンガやスバルも一緒で大丈夫かなぁ」
「大丈夫大丈夫、話は付けているから。リンディ艦長の太鼓判もあ

るのだし♪」
「ホント、あなたって無茶苦茶するわねぇ…ゼスト隊長の影響？」
「いやぁ、姐さんは昔っからこうですよ」

興味津々で本局内をキョロキョロ見回すギンガ達を見ながらクロスは溜息をこぼす

「マスター、溜息ばかりだと幸せにげますよ？」
「ってかお前はいい加減頭から降りろ、垂れノア！」
「誰が垂れパンダですか！いいじゃないですかぁ…あ、ひょっとしてぇ～♪
私の膨らみが頭を刺激し……“＃＞$‘”！$」

邪な笑みを浮かべて頭の上からクロスを見降ろすノアに軽い電撃をくらわす。

「クロス、電撃するならもう少し離れてよ、感電するわ」
「そ、そういう問題ですか…母さん…ケホッ」
「相変わらず賑やかねぇ」

拘置所

「さぁ、ここよ。プレシアとアルフも一緒の部屋よ」

そう言ってクロス達が通されたのは拘置所にしては普通な作りの部屋だった。
その中でプレシアがベッドに腰掛け、膝の上でフェイトとアルフが気持ちよさそうに眠っていた。

「あら、いらっしゃい…来るとは聞いていたけどまさかこんなに大人数とはね」
「久しぶりねプレシア、今日は私の新しい家族を連れて来たのよ」
「んっ……かあさん…おはよ…」
「お、フェイトおはよう♪」「おはよ～フェイトちゃん♪」
「あ、ノアちゃんに……クロスくんだぁ～」
「えっ、あの…ふぇ、フェイトさん!?ちょっと寝ぼけてらっしゃるのでありますか!?／／／」

無邪気な笑顔で抱きついてきたフェイトにクロスは混乱し変な敬語になってしまった。
後ろの年少3人はそんな光景にポカーンとしている。
そして、保護者3人（＋ノア）は最初驚いたがすぐにニヤニヤと笑みを浮かべた。

「あらまぁ…フェイトったら、よほどうれしかったのね」
「感激して嘘泣きしないであんたの娘をどうにかしろよぉ！」

「クロス…大人の階段昇るのね、母の目の前で」
「母さんも嘘泣きしながら何トんでもない事言ってんの!!!」

「ティア…混ざりたいか？」
「…え、えぇ!?／／／・・・その、えっと（チラ）／／」
「そこの兄馬鹿は何妹挑発してるんだ!そして、ティアのその物欲しそうな視線はなんだ!…んっ？」

クロスは背後に熱い視線を感じ、振り向くと…

「「……（ジィー）／／／」」
「おまえらもかぁ～～!!っていうかなんか似た展開、数週間前に

やったぞ！？」

ちなみにフェイトは抱きついたまま寝てしまった。

「フェイト～？いい加減出ておいでよぉ～」

「だ、だだだめだめぇ！！／／／／」

そして、騒ぎに目が醒めたフェイトが顔を大爆発させてトイレに引きこもり

その後に目覚めて何が起きたかわからないアルフがしきりに説得中。

「あなたの息子は本当にすごいわねぇ」

「なんだか将来が不安と期待でいっぱいだわ…何人孫と義娘出来るのかしら」

「もういいでしょ母さん！！／／／／」

なんとかトイレから出てきて、やっと自己紹介が出来た。

「はじめまして、フェイト・テスタロッサ…です…あの、さっきのは見なかった事に／／／」

「あははは……ティアナ・ランスター、ティアって呼んで、フェイトちゃん」

「こんにちは、私はギンガ・ナカジマ……フェイトちゃんって面白いね♪」

「私はスバル・ナカジマ！よろしくぅ～♪」

４人はすぐに仲良くなった。

「そういえばクロス、ノア。ちょっと見ない間に変わったわね、随

分と強くなったんじゃない？」

クロスとノアをじっと見つめていたプレシアが驚いた声を出す。

「え？これでも結構分からないように色々してるんだけどなぁ」

「流石はプレシアさんですね」

実はクロスとノアはアルガス式の封印魔法で外部に自分の魔力が漏れないようにしていた。

それでもプレシアはあっさりと見破ってしまった。

「お～っほっほ、私を誰だと思ってるの？大魔道師プレシア・テスタロッサよ♪」

大きな胸を張り高笑いするプレシアに

なぜかすごくお似合いの笑い声だとプレシア以外の全員が思った。

そして、クロス達が強くなった顛末をプレシアに話した。

「なるほど…それにしてもそんな話を仮にも犯罪者の私に漏らしていいの？」

「大丈夫よ、漏らしたところでどうってことない相手だもん」

「あら、それは信頼されてると思っていいのかしら？」

プレシアの言葉に笑いながら答えるクイント。

「変わったと言えばプレシアさんも変わりましたよ、別人みたいに」

「そ、そうかしら？」

「私もそう思うよ、母さん」「うんうん、プレシアはすごく変わったよ♪」

「まぁ…母親らしくはしたいと一番に考えるようにはなったけど」

ティーダの言葉に動揺し、フェイト達の言葉にさらに動揺してしまった。

「それに、前よりずっと綺麗な良い笑顔で笑うようになりましたよ、プレシアさんは」

「ク、クロスまで…それに綺麗って／／／」

「あの～プレシア？流石にあなたまで……は色々な意味で許せないんだけど？」

「わ、分かってるわよ！…全く、こういうことにまで強くなっているとは思わなかったわ」

クロスの不意打ちにプレシアは顔を赤くして激しくうろたえたがクイントの冷たい視線で我に帰り、わざとらしく咳払いまでした。

「マスターは年下だけでもなく年う……ぎゃにゃ～！！？」

「お前はいい加減にしなさい」

またもや余計な事を言おうとしたノアに、クロスの電撃お仕置きがお見舞いされる。

その光景を見てフェイトはそっと微笑んだ…夢に見た光景がそこにあったからだ。

プレシアやアルフ達家族とクロスやティアナ達友達と笑いあって楽しく過ごす一時。

本当はもう1人一緒にいたかったが彼女とは裁判が終わるまでの我慢。

と、フェイトは頭に巻いたリボンに手を伸ばす。

その時視線を感じ、目を向けると

「フェイトちゃん、その首飾り綺麗だねぇ」

「うんうん、綺麗綺麗♪」
「でもちょっと大きいかな?」

ギンガ、スバル、ティアナがフェイトの首にかかっている金色のクリスタルを見ていた。

「これの事?これはね『ライカフラワー』と言ってクロスがくれた物なんだよ」
「これが花…なの?」

それは花というよりは花弁のようなクリスタルだった。
そこへクロスがやってきて胸元から小さなペンダントを出した

「ほい、これが『ライカフラワー』の本体さ」

クロスが出したのは小さな白い水晶の周りに7個のクリスタルが付いた小さなペンダント。
しかし、7個のクリスタルはそれぞれ色がなく形もフェイトの持っているのとは違って見えた

「これは大切な人からもらったんだよ…ずっと、昔に…
命をかけて守りたい人に渡しなさい。って言われてね」

クロスが懐かしむように、とても大切そうにライカフラワーを抱き締める。

「これはただのペンダントじゃないんだよ、簡易デバイス…とでもいえばいいかな。
この周りに付いているクリスタルは花弁のようにそれぞれ離す事が出来るのさ

で、持ち主の魔力に反応して色が変わるんだよ、たとえば…フェイトの場合は
魔力光が金色だから金色のクリスタルになる、形も微妙にそれぞれ変わるのさ」
「それだけじゃないんですよこれは。なんとこの水晶とこのクリスタルは共鳴するんです。
クリスタルか水晶…どちからの持ち主に危機が迫ると反応しあったり。
危険な目にあったら効果は小さいですけど守ってくれるんですよ」
ノアも懐から青白いクリスタルを取りだした。
「私のは体に合わせた大きさと形になって色も青白くなりました。
花弁は全部で１０枚あって
私とフェイトちゃん、そして今は遠くにいる友達のなのはちゃんに渡したんですよ」
ノアの説明があまり分からなかったのか3人とも首をかしげた。
でも3人ともクロスにもらったという部分に反応して物欲しそうにクロスを見る
「つまり、これは小さなお守りってことさ…そうだ！はい、これ」
その視線に気づかずにクロスは水晶から3つクリスタルを取りギンガ達に渡す。
「えっと…いいの？」
「おう、3人共俺の大切な人だからな…絶対に守り通したいと思ってるから、これをあげるよ」
「「「……／／／」」」

クロスの言葉に顔を赤くするギンガ、スバル、ティアナ
スバルはよく意味がわかっていないようだが…
ギンガのクリスタルは藍紫色に、スバルのは水色、ティアナのは橙色になった。

「これでみんなお揃い、だね♪」

フェイトが差し出した手にみんながそれぞれのクリスタルを持ち、合わせる。
残りのクリスタルは4枚、クロスは誰にあげるのかは分からないが願わくば……その人達とも友達になれますように。
そう願う、フェイト達6人だった。

「……プレシア、ちょっと羨ましがってない？」
「…な、なっているわけないでしょ！！／／」
「そこ！！感動台無し！！！」

続く

第17話　「修羅場？そんなの『まだ』ありません！」（後書き）

クロス：「ＰＶが５０００超えた～！？」

カガヤ：「こんな駄文に本当にありがとうございます」

ノア：「でもお気に入りしてくれる人もいるんだし、もっと自信もっていいんじゃない？」

クロス：「これで感想や一言あればね…」

カガヤ：「１００倍ビックバンかめはめ波！！！」

クロス：「ぎゃわぁ～！！！？」（消滅）

ノア：「・・・・それで何か記念はしないの？」

カガヤ：「本当は何かリクエストに応えようかと思ってるけど…何か皆さんで書いてほしいネタあれば書きます！」

ノア：「なかったら？」

カガヤ：「―（Ｔ―Ｔ）↓　グサッ！！！」

ノア：「あ、頭にゲイ・ボルグ……」

カガヤ：「―（Ｔ―Ｔ）↓　なければ自分で考えます…ちなみにクロスやノアの出会いの話はちゃんと書くのでそれ以外の何かでおねがいします…ヨヨヨ～」

ノア：「それでは感想やら批評やらたくさんお待ちしております♪」

第１８話　「ナカジマ・ランスター家様、地球へごあんな～い」（前書き）

１００％のオリジナル展開って難しいですねぇ～

第18話　「ナカジマ・ランスター家様、地球へごあんな～い」

数週間前　海鳴市　海鳴臨海公園

なのは、フェイト、クロスが並んで海を眺めていた。

「……もう行っちゃうんだね」

「あぁ、ここでの俺の任務は終わった、フェイトも裁判が待っているからな」

「・・・・・・・」

なのはとフェイトの決闘が終わり、アースラが本局へ戻る日がやってきた。

ゼスト隊は地上本部へ報告の為に一足先に帰還している。

次元震の影響で航路に支障がないか心配されたがどうやらほぼ問題なしらしい。

「また…会えるんだよね？…」

「もちろん！まぁすぐにってわけじゃないけどな」

「でも、必ず会いにくるよ…だから……寂しいけど、平気だから…泣かないで、なのは」

なのはは段々涙声になり、フェイトも目に涙を浮かべて笑顔で話す。

そして、ゆっくりとしっかりと2人は抱き合った。

クロスは黙って海を見ている…久しぶりに流した涙を浮かべながら。

「…そろそろ時間です」

少し離れていたノアが近づいてきてそっと告げた。

そのノアも頬に涙の跡がある。

「フェイトちゃん、クロス君…あの、これ！」

そう言ってなのはは自分のリボンを解きフェイトとクロスに1つずつ手渡した。

「これくらいしか贈り物ないけど…これ、受け取って、クロス君はリボン…嫌かな？」

「嫌なわけないだろ、ありがとう。大切にするよ」

「なのは……うん、じゃあ私も」

フェイトも自分のリボンを解き、2人に渡した。

受け取ったクロスは何かを思い出したように空間に手を入れ変わった形のペンダントを出した。

「うわっ！何もない所から取り出した！？」

「これは名前がまだないけど『収納魔法』と言って自分だけの時が止まった空間を作って
その中に仕舞っておく事が出来るんだよ、生物とか人間は無理だけどね」

「魔法って…こういうのもあるんだ、すっごく便利！」

「私も攻撃とか防御、戦うための魔法ばかり教わってきたけどこういう魔法もあるってこと
これから学んでいきたいんだ」

「時間はたくさんあるからな、なのはもフェイトもドンドン学べるさ」

「でしたら私が2人のコーチになります♪」

ノアの言葉になのはとフェイトは微笑んだ。

クロスはペンダントから花弁のような透明なクリスタルを2つ外しなのはとフェイトに渡した。

「これは『ライカフラワー』っていう宝石でね、綺麗でしょ？」

そしてライカフラワーの事を2人に教える。
水晶の周りにある花弁は取り外す事が出来て、最初は10枚の花弁がついていたが
うち1枚をノアが持っている事。
昔にある人から守りたい大切な人に渡しなさいと言われた事。
簡易デバイスと言ってもいいほどに色々な守りに関する魔法が詰まっている事。
持ち主に応じて形や色が変わると言う事。

「なのはは桜色で、フェイトは金色…うん、似合ってるよ♪」

「「……えへへっ／／／」」

クロスにそう言われ恥ずかしがりながらもフラワーをかざす2人。
そうしているうちに離れていたクロノ、アルフ、リンディ、プレシアが集まってきた。

「それじゃあ…色々ありがとうございました、フェイトちゃん、アルフさん、クロノ君
リンディさん、プレシアさん…そして、クロス君にノアちゃん」
「お世話に…なりました！」

涙を浮かべずに精いっぱいの笑顔で見送るなのはとユーノ。

「「「「「「「「「「また（な・ね）、（なのはちゃん）」」」」」」」」」」

閃光が一瞬あたりを照らしたと思うと、もうそこにはなのはとユーノしかいなかった。

「……さぁ、帰ろっか、ユーノくん♪」

「うん！」

深呼吸をして公園を後にする…いつかまた、出会う日を夢見て

現在　高町家

「ふにゃ？……ぅ～…夢？」

ベッドから起き上がりなのははは周りを見渡す。

机の上ではまだユーノが眠っている、どうやらさっきまでのは夢だったようだ。

数週間前に大切な友達と別れた時の夢。

「おはよう、レイジングハート」

＜おはようございます、マスター＞

「今日はクロス君達来るから朝練お休みだったね」

＜はい＞

下の洗面台で顔を洗い、途中で兄に挨拶し着替える。

待機モードのレイジングハートを首から下げ、クリスタルの付いたチョーカーも着ける。

クロスからもらったライカフラワーにフェイトのリボンを結んだ手作りのチョーカー

なのはのお気に入りで、アリサやすずがに羨ましがられたくらいの逸品だ。

目が醒めたユーノと一緒に朝ご飯の時間だ。

「ふふっ♪」

階段を下りる足取りが軽い、まるで羽が付いているようだ。

「あら、なのはおはよう。今日はすごくご機嫌ね、何かあるの？」
「ホント、顔が緩みっぱなしね」
「ははっ、あまりなのはをいじめないでやってくれよ、母さん、美由希」
「理由を知っていてあえて聞くのはタチが悪いぞ？」
「・・・もう／／／」

家族の追及に頬を膨らませて食卓に座る。
見るとユーノも笑いを堪えているようだ。

『ユーノくんまでぇ～』
『ごめんごめん、だってなのはホントに嬉しそうなんだもん』
『・・・うぅ～／／／』

なのはが上機嫌はたった一つ。
今日みた夢もそれが原因だろう、そっとチョーカーについた花弁のようなクリスタルに触れる。

今日も一日、良い日になりそうな予感がした。

数時間後　海鳴市

「う〜ん、やっぱりここの風は気持ちいいなぁ〜」
「ここがお父さんのご先祖様が生まれた世界？」
「そうよ、もっともお父さんは来た事もなかったの」
「一度は来てみたかったんだが…管理外世界ってのはなかなか来るのがな」
「それがこの前任務で初めて…と言ってもほんの少しだったけど」
「ティア海だよ〜！！」
「スバル、引っ張らないで、ころんじゃうわよ〜」
『うぅ…私も風を感じたいよぉ〜』

郊外に一際賑やかな集団が現れた、ナカジマ家とランスター家だ。
一度は自分の先祖様のいた世界を見たいと言うゲンヤの意向によりゲンヤの休みが取れた週にティーダやティアナも含めて地球へと泊りがけの旅行に来たのだ。
それとは別の目的もあったのだが…

「さてと、まずはホテルに荷物を置いて昼食にするか」
「お腹ぺこぺこだよぉ〜」
「スバルはすぐにお腹空くわねぇ」

ゲンヤの言葉にスバルがお腹を鳴らしながら答え、ティアナが呆れている。
早速ホテルに移動し、せっかく日本に来たという事で昼食は和食となった。

「このサバ味噌美味しい！」
「へぇ〜……これが味噌汁」
「これは何？」
「それは納豆だな、醤油つけてかき混ぜて食べるんだよ」
「お兄ちゃん食べた事あるの？」

日本料理をあまり食べた事がないスバル達は日替わり定食にした。
ちなみにクロスやクイント達はミッドチルダで和風料理屋がありそこで食べた事がある。
はじめての料理に目を輝かせたのはもちろんスバルだ。
クイントも料理はするが日本料理はあまり作れないので目下修行中だとか。

「ふぅ～…この天ぷら美味しい～！！」
「……大丈夫かクロス？」
「うぅ～……早く食べ終われノアぁ」

ノアは今ギンガくらいの大きさになっている。
と言うのも本場の日本料理がど～しても食べたいとクロスに懇願しクロスの魔力で体の大きさを変化せたのだ、おかげでクロスの魔力は大幅に消耗中。
感覚的には食べた料理がすぐに消化されていくような感覚。
ゲンヤが心配する中、お代わり自由の御飯と味噌汁を文字通りかきこんでいる。

「……今度はバイキングにしましょうか」
「そうですね、姐さん」

喫茶店翠屋

「へぇ、いい雰囲気の店ね」
「お母さん早く、デザートデザート！！」
「スバル…あれだけたべてまだ食べるの？」

「そういうティアもなんかそわそわしてないか？」
「お、お兄ちゃん！うるさい！！／／／」
「クロス～ティアが反抗期だよ～」
「そんなの知りませんよ……」

わいわい騒ぎながらも一行はなのはの待つ喫茶店翠屋へとやってきた。

「いらっしゃい、お待ちしていましたよ」
「はじめまして、ゲンヤ・ナカジマと申します。息子のクロスがお世話になりました」
「クイント・ナカジマです、クロスから色々聞かされていますよ、ケーキがすごく美味しいとか」
「あらまぁ、じゃあ今日はたくさん召し上がってくださいね」

ゲンヤとクイントが士郎達と仲良く談笑する中
ギンガとスバルはクロスの後ろに、ティアナはティーダの後ろに恥ずかしがって隠れてしまっている。

「久しぶりねクロスくん、あら…今日は可愛い子がたくさん一緒なのね、彼女さん？」
「なのはがいるのにモテモテだなぁ、クロス君は」
「お久しぶりです、恭也さん美由希さん・・・って違います！妹達です！／／／」
「「……／／／」」
「ってお前らも顔赤くするなぁ～！ほら、挨拶！！」

頬を染めるギンガとスバルを無理やり恭也達の前に出す。

「は、はじめまして！ギンガ・ナカジマ…です！！」

「ス、スバル・ナカジマ！！！！」
「お、元気いっぱいだな、流石はクロス君の妹達」
「ホント、うちのなのはに負けないくらいね」

緊張のあまりつい大声になってしまった2人に微笑む恭也達。

「ほれ、次はお前の番だぞティア」
「わ、わかってるわよ！…すーはー……はじめまして、ティアナ・ランスターです！」
「はじめまして、俺はティーダ・ランスター…ティアナの兄です」
「わぁ～この子も可愛い～♪…君はクロス君の彼女？」
「か、かかかかかのじょおぉ！？／／／」
「ティア…お前動揺しすぎだぞ？」

美由紀の質問にティアまでもが顔を真っ赤にしてしまう。
その様子にティーダが呆れていたが…

（まんざらでもない…というより喜んでいる？）

と1人ニヤニヤが止まらない状態だ。

そこへ…

「あ、クロス君、クイントさん、ティーダさん。お久しぶりです！」

奥から元気のいい声と共になのはとユーノが出てきた。

「久しぶり、なのはちゃん。家族そろって遊びにきたわよ♪」
「ユーノ君も元気そうだな」
『はい、お久しぶりです、ティーダさん』

「なのは、ユーノ、久しぶり…って言うのには微妙かな？」
『ビデオレター送ったばかりですからねぇ』

なのはとクロス、フェイトはビデオレターを交換していた。
たまに通信もするがフェイトは裁判中であまりそういう自由が制限されているので
ビデオレターを交換する事にしたのだ。

「おう、君がなのはちゃんか…息子からよく聞かされていた通りの子だな。
俺はゲンヤ…クロスの父親やっているぞ」
「は、はい！高町なのはです！よろしくお願いします！！」
「ははっ、そんなに堅くならなくてもいいって」

緊張して堅くなったなのはを笑いながら優しく頭を撫でるゲンヤの手に
なのはは士郎と同じぬくもりを感じていた。

「あぁ！その子達がクロス君の妹だねぇ！はじめまして、高町なのはだよ♪」
「ギンガ…ナカジマ、です」
「スバル・ナカジマ！！」
「ティアナ……です」

なのはの満面の笑みにギンガとティアナはやや照れてしまい
スバルはお構いなしに元気に握手までしていた。
その様子を微笑む保護者５人。
１週間の旅行はまだまだ始まったばかりだ。

続く

第18話　「ナカジマ・ランスター家様、地球へごあんな～い」（後書き）

カガヤ：「さて、やってまいりました旅行編！」

クロス：「なかなか2章終わらないな？」

カガヤ：「あと2話くらいで終わりにするけどね」

ノア：「あの子達の恨みの視線が怖いですからねぇ」

？？？：（我らと主を早くだせぇ～…な視線の数々）

カガヤ：「2章は主にクロスにとっての、3章は主にノアにとっての転機だからなぁ…話数は変わらなくても長くなるかも」

クロス：「大体1章あたり10話目指してるんだろ？」

カガヤ：「4章以降はそうならないと思うけどな……展開が色々と」

ノア：「来月中にいければいいですねぇ」

カガヤ：「GWは帰省してるから執筆できないしなぁ…まぁそんなわけですが感想やら色々お待ちしておりますペコリ（ｏ＿＿）ｏ）

第１９話　「海鳴と言えばやっぱりスーパー銭湯！？」（前書き）

作者サウンドステージ全く知りません♪

第19話　「海鳴と言えばやっぱりスーパー銭湯！？」

喫茶店　翠屋

「え、ティーダさん私と同い年なんですか！」
「はい、今は学業の傍らクイントさんやゲンヤさんの所で見習いとして働いていますよ」
「俺達には敬語はいらないさ、もっと楽に話してくれ」
「そうか？じゃあ遠慮なく」

「まぁ、なのはがお手伝いしていたのは…」
「はい、私達の仕事だったんです。リンディさんは上司になりますね」
「本当によく出来たお子さんで大いに助かりましたよ」

店内でナカジマ、高町両夫妻とティーダと恭也、美由紀が楽しく談笑している。
クロス達はすずかの家に呼ばれてお出かけ中。

「クロスは弟みたいなもので…もっとあいつが幼い頃からの付き合いさ」
「へぇ、ティーダには妹も弟もいるんだ、いいなぁ…私も弟欲しくなってきたなぁ」
「うちはなのはで十分だろ、まぁ俺も妹2人もいると弟もいてもいいかと思うけどな」

同じ妹を持つ身としてティーダ達は妹・弟談義になっているようだ。

「でも妹も増えてもいいなぁ…あ、クロス君次第で弟も妹も増える

んだよね？」
「あ～…クロスがいたら真っ先に反応しますね、そういうセリフ…というかクロスは俺の弟になるかもしれないけど」
「へぇ、やっぱりティアナちゃんもそうか…さて、誰を選ぶか楽しみ♪」
「おいおい、まだ9歳の子供だぞ。１０年以上は早い話じゃないのか？」
「そっか、まだまだクロスには他の子が出会うかもしれないですしね」
「そうね、あはははは」

楽しく笑いあう3人…その時どこかで車いすに乗った狸がくしゃみをしたとかしないとか…

月村家

「…っ！！？」
「ん？どうしたのクロス君？」
「いや、突然凄く嫌な寒気を感じたんだよ…なんだろう」

今クロス達はすずかの家で楽しくお茶会を開いている。
例によってギンガとティアナは恥ずかしがっていたがスバルはすぐにすずか達と仲良くなった。
また、ギンガがすずかがたくさんのネコを飼っている事に驚き、目を輝かせて。

「一匹もらってもいい！？」「こら！！」

というやり取りがあり、アリサの屋敷では犬が多い事を聞くと今度はティアナが
遊びに行きたいオーラを全開にしたことですぐにみんな仲良くなった。

翠屋で楽しく世間話をしていたクイント達だが…ふと、クイントが

「こんなにいい両親ですもの、あんなに本当にいい娘さんが育つのもわかりますね」

と、物思いにふけた顔でつぶやいた。

「クイントさん達だって立派じゃないですか、共働きなのにしっかりクロス君の事を考えていて
実は…私は以前事故にあいまして…」

以前なのはがクロス達に語った事を今度は士郎や桃子の視点から語られた。

「そういうわけであまりなのはは1人で家に居る事が多くて、周りからは仕方ない。
と言われましたが、それでも寂しい想いをさせたのは事実ですから」
「それならうちも似たようなもんですよ。何せ共働きの上に高町さんみたく
自宅と職場が近いわけじゃない友達という友達も…いませんでしたからね。
リンディさんやエイミィ達のおかげで明るくなったけどどうにも

子供らしさがなくて…」
「それがなのはさん達と出会ってから変わりだしたんですよ、なんというか…
子供らしさが出てきた、トゲが抜けてきた…とも言いますね」

そう言って難しそうな顔をするナカジマ夫妻、実際の意味合いは違ってくるが…
確かにクロスはなのはやフェイト達と出会って少し変わった。
しかし、それも仕方がないかもしれない。
幼い頃から研究所で戦闘訓練を受けて、保護された後も同年代の子は周りにおらず
自分から望んだとはいえ大人ばかりの管理局入りをして数々の任務をこなしてきたのだ。
子供らしさが分からない、とも言えた。
アースラ所属になりリンディ達との出会いで明るくはなったが…それでも堅さは抜けず
なのは達に出会ってやっと無意識に子供らしさが分かってきたのだ。
本人としては変わってないと言うかもしれないが、それでもクロスは変わった…
ギンガやスバルが妹になってからも…

「クロスに必要だったのは友達…か」
「あいつは結構強がりな上に自分で悩みを抱え込んだりするから
俺やクイントさんとはまた違った方面で止めてくれる存在が必要だったのかもしれない」
「そっか…クロス君も寂しかったんだね」

物思いにふける保護者組。
その思いを知ってかしらずか当の本人は猫に囲まれて…もとい襲われていた。

「よ、よじ登るな痛いって！」
「わわっ、クロス君大丈夫？ごめんね、こら、降りなさい！」
『マスター、良かったですねぇ猫にまで好かれるなんて羨ましいったら羨ましい』
『ノア！お前出られないからって焼餅やくことないだろ！』
『あ～僕も以前子猫に追いかけまわされたから少しは分かるかも…』

ユーノは以前すずかの子猫達に追いかけまわされてエライ目に合っていた。
まぁフェレットなのだから仕方がないが…

「お兄ちゃんいいなぁ～…」
「ギンガ、猫の爪ってと～っても痛いんだよ？」

そして、あっという間に夕方となった。

「じゃ、今日はありがとう、すずか」
「えぇ、また皆で遊びにきてね」
「今度はうちに来なさいよ、歓迎するわ」
「うん、いくいく！！」
「ティア…なんだか人が変わったように…」
「あははは…」

アリサやすずかと別れ一度翠屋へと戻る。
今日の翠屋は普段より客足が多く、クイントやティーダも手伝いをしていた。

「ごめんなさいね、お客様なのに手伝ってもらって」
「いえいえ、ケーキのレシピの御礼ですよ」

「長時間お邪魔したわけですから…気にしないでください」
「ただいま～…わぁ、今日は大人数だね」
「なのは、おかえりなさい。今日はクイントさん達も夕食一緒にするから
上にあがって待ってなさい」
「は～い」
「俺達も手伝いしましょうか？」
「大丈夫、ここは私達で十分よ、だから上で遊んでなさい」

裏ではゲンヤと士郎達が皿洗いをしていた。

「手慣れていますね」
「ま、こういう事しか家事が出来ないからなぁ俺は…おう、クロス達も戻ったか」
「ぷっ、ゲンヤさんのエプロンって…」
「しっ！スバルやギンガが初めて見た時に大笑いしてすごく落ち込んだんだから！」

エプロンをして皿洗いをするゲンヤの姿が不似合いでティアナは笑いを堪えるのに必死だった。
なのはの部屋に移動したクロス達。
部屋に入ると早速ノアが姿を現した。

「は～ふ～…美少女監禁からやっと解放ですねぇ」
「誰が美少女監禁だこらぁ～！」

そして翠屋特製ケーキを6人で食べて日が沈んだ頃に夕食の時間となった。

「なんだか1日過ぎるのがすごく速く感じないか？」

「??何の話??」
「いや、こっちの話だ…」

多少メタ的な発言もあったが総勢１２名の大食事会は騒がしくも終了し

「そうだ、銭湯に行ってみませんか？」

桃子の言葉に銭湯という所に行った事がないクロス達。
特にクイントやギンガが興味をもった。
最近市内にスーパー銭湯なる大きな大浴場「海鳴スパラクーア」が出来たとの事で
せっかくだからと皆で行く事になった。

海鳴スパラクーア　女湯

「うっわ～大きい！！」（スバル）
「こらスバル、走らないの。転んじゃうよ！」（ギンガ）
「クイントさんもそわそわしてるよ？」（ティアナ）
「あ、あら～・・・なんの事かしらティアナちゃん？」（クイント）
「なのは、背中洗ってあげるね」（美由紀）
「じゃあ私はお母さんの背中洗うよ」（なのは）
「ふふっ、たまにはこういうのも悪くないわね」（桃子）

女7人も揃えば姦しい事この上なし。

「ノアちゃんも来ればよかったのに…」
「ノア？」
「ノアちゃんって言うのはね…クロ「スバル？」あっ、ごめんなさ

い…」

うっかりノアの事をしゃべりそうになったスバルをクイントが止めた。

「ごめんなさい、ノアと言うのは向こうにいるクロスの友達なの…用事で来れなくって」

「そうなんだ…今度は来れるといいですね♪」

「にゃははは…」

苦笑するしかないなのはであった。

所変わって男湯

「くぅ～体に染み渡る～…風呂ってのはいいなぁ」（ティーダ）

「向こうじゃお風呂はないんですか？」（恭也）

「家にはあるけどな、大体シャワーとかが主だからこんなに大きい施設がないんだよ」（ゲンヤ）

「へぇ～アメリカみたいですね」（士郎）

『あっちに行けなくて寂しいかユーノ？』（クロス）

『そ、そんなわけないでしょ！以前の温泉だってすごく恥かしかったんだから！

大体僕は行きたがっていたわけじゃないの分かってたでしょ！

というかクロスの方が寂しかったんじゃない？』（ユーノ）

『そんなわけあるかよ！』（クロス）

美由紀に女湯に連れ込まれそうだったユーノはクロスとクイントの説得（ユーノへは脅迫）により

今回は男湯に入っている、ペット同伴大丈夫なのだろうか？

クロスもクイントに連行されそうだったが、ティーダとゲンヤが阻止。

「お、ティーダ君は結構体つきがたくましいんだな」
「俺も結構鍛えてるけど、それにしても見事なまでだ」

士郎と恭也がティーダの体を見て感想を述べる。
ティーダは体を流しながら

「肉体労働が主なんで…あとは趣味ですね、体力ないと何事も不便だから」
「うん、いい心掛けだよ」

射撃中心とはいえ接近戦に弱いのでは話にならないとティーダはよくクイントやゼスト相手に筋トレや格闘指南を受けている。

「父さん、久々に背中洗うよ」
「おう…手加減してくれよ?最近クロスも力強くなったんだからな」
「分かってるって♪」
『マスター私も入りたい!』
『分かってるっての!向こうに子供用の風呂あるみたいだからそこ行くぞ。
今日は男子俺しかいないみたいだから、誰か来るってこともないだろ来たら隠れろよ?』
『わ~い、マスターと一緒♪』
『まて、俺もかよ!』

ゲンヤの背中を洗いつつノアと念話もするクロス、結構多忙だ。
ちなみにクロスには体に古傷があるのだが…魔法で見えないように

している。

「おっし、次はお前の番だクロス！」
「俺はいいよ～」
「遠慮するなって」

心底楽しそうなゲンヤに押されてしぶしぶ背中を任せる…恥ずかしいのだ。
その様子を見ながら、一足先に湯船に浸かっていたティーダ達は静かに笑い会った。

子供用（混浴）風呂

子供用の風呂と言う事で深すぎずお湯も若干温くなっていた。
簡易的な防音結界を張り、誰もいない事を確認すると…

「わぁ～い！おっ風呂～！でっか～い！！」

ノアが飛びだしてきた。

「お～い、溺れるなよ～？」
「大丈夫ですよ～いざとなったら大きくなります♪」
「それをしたくないからわざわざ結界張ったんだけど！？」

また昼間みたくなったら溜まらないと必死に止めるクロス、そこへ…

「こっちにもお風呂があるよ～」
「へぇ～こっちは子供用…ぬるめ？」
「ちょっと入ってみようよ♪」

「私とすずかはまだ洗ってるからあとで行くわ」

「ん？」

どこからか聞き覚えのある声がしたかとふと目を向けると…

もう一つ扉があり…

開いた。

カポン♪

クロス…一時停止。

ノア…大はしゃぎ♪

なのは、スバル、ギンガ、ティアナ…特になにもなく普通。

「お兄ちゃんだ～♪」

「こっちに来てたんだね」

「ここ混浴なんだ～」

「へへっ、これで一緒に入れるね」

「マスターってやっぱりそういう運命なんですね…」

「なんでだ～！！くそ…こうなったら！」

ガラッ…ピシャン……スタスタ…ＧＥＴ♪……ガラピシャン！

「あ、ユーノ君だ♪」

「な、なんで僕を連れて来たの？あんなに止めてたのに」
「言うな、こうなった以上男俺1人じゃもたない、だから…道ずれだ♪」

その時のクロスの表情は諦めと開き直りでもの凄く輝いていたよ（ｂｙ　ユーノ）
ちなみにアリサとすずかもこっちに来た為にノアは物陰に隠れながらひっそりと
入る事になり…ちょっと拗ねていた。

続く

第19話　「海鳴と言えばやっぱりスーパー銭湯！？」（後書き）

カガヤ：「やったぁ！！！」

ノア：「作者ついに壊れた！？」

クロス：「あ～あれだろ、ＰＶ５万、ユニーク６千突破してついでに初めての感想が来たってやつ」

ノア：「感想というか…御意見ね」

カガヤ：「それでもいいの！何もないよりいいの！（笑）マイセン様貴重な御意見ありがとうございます」

クロス：「作者が自覚してない事を言われるのは貴重だからな…」

カガヤ：「プレシアの描写はどーしてもいいのが浮かばなかった結果だから無理ありすぎ、なんですねぇ…んで呼称の方は半分はわざと！…と言いたかったけど」

ノア：「普通にミスしてて一部書き直したんですよねぇ…情けない」

クロス：「つっこみどころは満載だからなこの小説」

カガヤ：「この先も展開やキャラ描写や呼称にツッコミ満載だと思いますが、作者の自己満足にお付き合いくださり、感想御意見などたくさんお待ちしておりますのでよろしくお願いします…あと次回で２章終えれたらいいなぁ～」

ノア：「終わりそうな終わらなさそうな、ですからねぇ…」

第２０話　「４回目の墓参り」（前書き）

今回で２章終了です！
さって…デバイスや魔法紹介を更新しないと…

第２０話　「４回目の墓参り」

海鳴市での休暇も残すところあと2日となった。
その間になのはや妹達と色々な所に行ったクロスは…

「任務の方が１００倍マシだ！！」

というくらいに疲れていた、主に精神的に。

「まぁまぁ、なかなかない経験ばっかりだろ？」
「そうそう…スバル達も楽しそうだし」
『それに、なんだかんだでマスターも楽しんでたでしょ？』

今日はクロス、ゲンヤ、クイント、ノアのみで外出だ。
ティーダと士郎達がスバル達の相手になってくれている。
今日は…クロスとノアにとって大事な日…
スバルとギンガを連れてくるにはまだ…早い。
レンタカーを借り、ゲンヤの運転でとある場所に向かっている最中だ。

「あいつらには…いつか話すのか？」
「うん……どうしようか悩んでたけど、なのは達ならいいかなって」
『スバルやティア達にも……』
「そ、２人で決めた事なら何も言わないわ、でも…私やゼスト隊長も立ち会うわよ？
　一応機密事項なんだし」
「…引きずり過ぎると返って気まずいからな…ズバッと言った方がいいかもしれんな」

話の内容は…クロスとノアの過去について。
なのはとフェイトは少ししか知らないが、詳しく知りたいとも言ってこない。
2人とも知りたがってはいるようだが…クロスが話すのを待っている。

「ま、大人になってから話すのが普通だろうけどな…」
「・・・・・」

それからしばらく無言の時が過ぎる。

そうして走る事数時間、目的地に到着した。

今回の休暇での目的の1つであり、ゲンヤと休みを合わせた理由の1つ。
富士山麓のとある場所……
人も寄らない場所、けもの道を進んだ先にある…開けた野原。

「あれから4年…随分と変わったね」
「焼け野原だったのを全部撤去して埋め立てたんだよな」
「元から人も動物も寄らない場所だったけど…今は普通に動物達が住んでるみたい」

いつの間にか実体化したノアの言葉にあたりを見渡すと
微かに草が動いたりと何かの動物はいるようだ。

「ここならノアは出ても大丈夫か」
「はい…ここら辺は地脈を利用した天然の結界ですから…
よほど意識しなければここには来れません」
「……だから『太極の書』が封印されてたってわけか」

「正確には…何回かの流転の果ての地…だけどね」

そうしてクロスとノアは小さな白い石碑に近付く。
周りを花で囲まれた小さくとも立派な石碑だ…
石碑の前に立ち、クロスとノアはそこに誰かいるかのように話しかける。

「また…来たよ、今年は報告する事たくさんあるんだ」
「うん！なんとマスターに彼女ができ（ゴンッ）…痛い！！？」
「嘘つくな嘘を！！…全く……彼女じゃないけど……友達と新しい家族が出来たよ」
「すっごく可愛い子達なんだよ！高町なのはちゃん、フェイト・テスタロッサちゃんに
ティアナ・ランスターちゃん。これだけじゃないんだよ、更に…なんと！
ギンガにスバルっていうこれもまた可愛い妹が出来たんだよ♪」
「ノアはスバルからちっさいお姉ちゃんって言われてるけどな」
「それは言わなくていいですよ！！」
「さっきのお返しだ、それにこれは事実だろ？」
「うぅ～……クロ兄の癖にぃ」
「マテ！それはもう言われなくなっただろ！」
「そう？スバルがよく言ってるよ、それで最近だけどギンガはギン姉私はノア姉って呼ばれてる♪」
「ス、スバル……ギンガは普通に呼んでくれよ、頼むからぁ」

まるで久々に会った家族に話すように自然と話しかける2人。
やがて見守っていたクイントやゲンヤも近付いてきた。

「1年ぶりですね、先生。あなたが守ったクロスとノアは…しっかりと良い子に育ってますよ」

「はじめまして…　クロスの父、ゲンヤ・ナカジマです。来ようとは思ってはいましたが
なかなか来れる機会がなくて…あなたのおかげで俺達にも最高の息子と娘が出来て……
本当に感謝しています……」

昔を懐かしむように石碑を撫で、目を細くするクイント。
手を合わせ軽くお辞儀をする…日本に乗っ取った作法をとるゲンヤ。

4人で丁寧に石碑を拭いて綺麗にし、もう一度御参りをする。
それはさながら…御墓参り。
ここはクロスとノアにとって大切な場所、数多くの兄弟と恩人が眠る場所。
しかし、2人に涙や悲しみはない。
ここに来る時はいつも笑顔で明るく、と決めている。

「この前新しい封印が解け新しい力も手に入ってノアの記憶も少しずつ戻ってきています」
「とはいっても…まだ全然だけど、何かきっかけがあれば…戻る気がするんだけど
何か大切な事を忘れていて…それがなんなのかがわからない……でも
きっと思い出して見せます！」
「そして、いつか…あなたの最後の『指令（やくそく）』を果たします…
だからもう少し、首を長くして待っていてください」

2人して振り向く、そこには黙って2人を待つ両親の姿が

「もう……いいんだな？」

「……うん！さぁ、帰ろう、父さん」
「早く戻らないとスバルが寂しくって泣いちゃうかもしれないですよ～、お母さん♪」
「そうねぇ～急いで帰らないと、案外ティーダの方が大変で泣いてるかもよ？」
「あははは、ありえる～♪」

笑い声を響かせて車は走り去った。

石碑に咲くのは「アメジストセージ」…花言葉は「家族愛」

続く

夕刻　海鳴市中丘町　付近

帰りの車内で寝ていたクロスはふと、視線を感じ…

「っ！？父さん、止めて！！」

跳び起きた。
幸い小道で他に走っている車もなかったのでゲンヤはすぐに路肩に車を止めた。

「な、なんだ？」「どうしたのクロス！？」

ゲンヤ達の問いに答える間もなく車を飛びだしたクロス。
いつでも結界を張り、戦闘が出来るように準備し辺りを窺う。

『…ノア、ラファール』
『・・・・・』
『…ノア？』
『あっ！周りをサーチしました…けど魔力は感じません』
＜同じく、魔力反応はありません＞
『分かった…どうしたんだノア？』
『いえ、なんでもないです…寝ぼけたのかな』
『…そうか』

警戒をしつつ、車に戻るクロス。
クイントとゲンヤも辺りを窺う。

「一体どうしたの、クロス？」
「……誰かに見られてたみたいで」
「えっ、一体だれ！？私は気付かなかったわよ。」

休暇中でデバイスがないとはいえクイントに気取られずにこちらの様子を窺っていたかもしれない誰か。
何か嫌な予感がしたクロスだが、ノアやラファールも魔力反応はないとの事なので

「……気のせいかな」
「そうかもしれないけど、けど一応気をつけなさいよ」
「…うん」

そうして、車は再び走り出した。

しかし、クロスとノアは嫌な予感をしばらくぬぐえずにいた

（確かに視線を感じた…敵意を感じなかったけど、観察……まさか管理局の監視か？）

（なんだろう、すごく胸騒ぎがした…今もまだ胸がどきどきしてる…これは…何？）

その車を遠くから見つめる影

――――あぁ、問題ない、気付かれなかったよ、通りかかっただけみたい――――

・・・・・・・・・・・・・・

――――例のクロスって子とゼスト隊のクイント達だよ、ありゃただの旅行だね――――

・・・・・・・・・・・・・・

――――大丈夫だよ、気にはしてたけどそのまま行っちゃったよ――――

・・・・・・・・・・・・・・

――――分かってる、目標は……闇の書の主からは目は離さないさ――――

影の見つめる先には車いすに乗った少女と、少女を守るように歩くいくつかの人影があった。

次章　『歪められし闇の魔道書』

第２０話　「４回目の墓参り」（後書き）

カガヤ：「どうだろ？ラストを思わせぶりにしてみた」

ノア：「なんか…勘のいい人は色々と分かりそうですね」

クロス：「まぁ…地名でわかるだろうな、あそこに誰がいるか」

カガヤ：「いよいよ2章も終り！次章からは更なる激しいバトルに……出来ればいいなぁ」

クロス：「エライ弱気だな…ま、その前にお疲れ様会やら魔法やデバイスの紹介更新がんばれよ」

カガヤ：「そっちも早めにがんばります・・・ではでは感想やら一言お待ちしております！」

デバイス・その他紹介（その2）（前書き）

2章で判明した太極の書、古代魔法の追加設定紹介です。
見づらいかも…

デバイス・その他紹介（その2）

≪古代魔法改めアルガス式魔法≫

『太極の書』３番目の封印が解かれた事で書かれいる半分近くが解読できるようになった。
それにともない古代魔法の本当の名が『アルガス式魔法』で今まで使用していた
古代魔法も本当の魔法名ではなかった事が分かった。
魔光力も実は太極の書を発見した研究者達が勝手に付けた名であり
本来のアルガス式魔法を使用する時に纏う力の名は『仙気（せんき）』
真の名を唱える事で今まで使用していた魔法の効果が数段あがった。

『業火跳躍』→真の名『フレイム・ギア』　など

太極の書と光天の書にはアルハザードに関わるあらゆる知識や技術などが込められていて
デバイスに関する技術も多くあり、カートリッジシステムの本来の基礎構造などもあるため
近代ベルカ発展の役に立っている。

≪アルガスアーマー≫

バリアジャケットや甲冑と同じでれっきとしたアルガス式の防御魔法。
高密度の仙気に覆われていて防御力が各段に上がった。
魔力で出来たバリアジャケットではアルガス式魔法に合わず
フィールドタイプのアルガス式防御魔法の効果が十分に発揮されなかったが

同じ仙気で出来たアーマーになった事で防御だけでなく攻撃や速度増加なのど
補助系アルガス式魔法が掛かりやすくなり効率が良くなった。

≪クラス≫

アルハザードではベルカの『騎士』ミッドチルダの『魔術師』など、魔法使いの呼称がなく
戦士や召喚士、槍士など様々な職業で呼ばれていた。
太極の書には古来の様々なクラスの情報があり、マスターは自分にあったクラスの力が付く。
クロスの場合は騎士、闘士、銃士のクラスが適合した為
それに応じた形状にラファールが進化した。
なお、クロスが契約した際に将来どのようなクラスが付与されるのかは分かっていた模様。

≪第一のクラス：騎士（ナイト）フォーム≫

基本戦法は今までと変わらないがエクスカリバーがロングソードくらいの長剣となり
今までのバリアジャケットに仙気で出来た装甲が手足や急所に付いたような見た目になり
防御力が3つの中で一番優れたクラス。
アルハザード随一の騎士の技が記憶されているが、クロスにはまだ使いこなせない。

≪第二のクラス：闘士（グラップラー）フォーム≫

素早さに特化したフォームで両手足に動きを加速させる『ジェット

ファイア』と
攻撃・防御力増加効果のある装甲が付き、格闘戦で戦う。
クロスはシューティングアーツに古来の闘士の流派を合わせた
自分オリジナルのアーツを構築中。
シェルブリットもその一つ。

手足に付いた武具の名は「クリムゾン・ブリット」
見た目のイメージはスクライドのカズマ（アルターのシェルブリットが手足に現れた状態）

≪第三のクラス：銃士（ガンナー）フォーム≫

銃を持つ遠距離戦用の姿。だがクロスの場合元が近距離タイプで格闘技も出来る為
この状態で敵に近距離戦を挑まれても問題なく対処できる。
３つのクラスの中で一番武装が豊富で、魔力素質が高くなる。
威力が高い『アグニ』と連射に優れた『ヴァジュラ』という２つの銃を使う
銃弾は仙気を圧縮した弾だが、銃士は魔力素質が高くなるためよほど乱射しない限り息切れはしない。
銃を使用する最大の利点は効率の良さで普通の射撃魔法で
『アグニ』の銃弾並の威力を撃つのに
必要な力は「５０」ほどだが『アグニ』を使って弾を撃つとわずか「１」で済む。

『ショットガンモード』
ヴァジュラの後ろにアグニを接続すると散弾銃型ショットガンモードとなる。
高威力の散弾をある程度連射出来るようになるがその分消費も激し

い。
自動装填ではなく折りたたまれたヴァジュラのグリップを
実在するショットガンのようにポンプアクションでスライドさせる
事で装填となる。
連続でスライドさせる事によって威力が増す。
さらに数回スライドさせチャージが完了すると最高威力の『メテオ
ザッパー』が撃てる。

デバイス・その他紹介（その2）（後書き）

カガヤ：「こんなもんでどうでしょう？」

クロス：「うーーーん…見えにくくないか？」

カガヤ：「だ…大丈夫…でしょう（（汗））」

ノア：「それより私の光天の書はどーしたの！マスターのばっかりじゃない！」

カガヤ：「だって2章じゃあまり戦闘で活躍なかったじゃん」

ノア：「はうぁ！」

クロス：「あ、石化した…」

カガヤ：「3章で活躍するから安心しなさい……それではダラダラと駄文でしたがクロスの新しい力の説明でしたペコリ（ｏ＿＿）」

第2章のお疲れ様会！

カガヤ：「はい、それでは第2章終了記念としてお疲れ様会を開きたいと思います！」

（一同拍手）

クロス：「ちなみに上の文は前回のをそのままコピペして1章の部分を2章にしただけだな」

カガヤ：「リサイクルと言いなさい！」

【新登場キャラ】

カガヤ：「というわけで今回はゼスト隊とギンガ、スバル、ティアナに来てもらいました～」

ティアナ：「ど…どうも」

スバル：「うわっ、この部屋真っ白で何もな～い」

ギンガ：「スバル、そういうのは突っ込んだらダメみたいだよ？」

クロス：「さてと、ギンガやスバルの登場はいいとして…ティアまで出すとは」

カガヤ：「5，6，7歳の口調って結構難しいな…何回も書き換えた結果ああなりました」

ノア：「子供っぽさが出て…るわけないね、作者にそんなの書けたらマスターの口調も
もう少し大人っぽくなってるはずだし…」

クロス：「2章でなんとか子供らしさ出そうとして……あげくに無理やり母さんと士郎さん達の
会話でフォローいれたくらいだからなぁ」

クイント：「幼少期の恋心をなんとか出したかったみたいだけど…あれは、どうなんでしょ？」

カガヤ：「無理やりすぎだけど…すみません、あれが作者の限界です」

ノア：「2人を義妹にするためにナカジマって姓にしたんだよね？」

カガヤ：「まぁねぇ～…おかげでティアとの出合い方も変わったし、原作から大幅に
キャラが変わっていくよ…基本的には原作通りのでいくけど」

ティアナ：「私……将来性格どういう風に変わるんだろ」

カガヤ：「Ｓｔｓ編での3人の新しい関係を楽しみにしてください♪」

ティーダ：「俺は半オリキャラ化しちゃったな…」

カガヤ：「本編に回想シーンでもあればよかったんだけど…全くなかったんであんな感じに…」

ティーダ：「姐さんは回想あってメガーヌさんとゼストさんは原作で出番あるからって…（沈）」

ノア：「ヴァイスさんを参考にしてますね、母さんを姐さんと呼んだり」

カガヤ：「同じ精密射撃タイプだからそうなった（笑）…んじゃ次の項目行ってみよう！」

【古代魔法の正式名称】

クロス：「アルガス式魔法…ねぇ、元ネタはＳＤガンダム外伝か？」

カガヤ：「うんや、アルハザードの名前そのまま使うよりもっと言いやすいの
　考えてたらこれになった」

ノア：「作者のネーミングセンスはもはや突っ込まない突っ込まない…」

メガーヌ：「まぁまぁ…他の神作者様を見習ってがんばっていくしかないですよ」

カガヤ：「はい…というわけでオリジナル魔法や技はか～なり変なのあると思いますが…
　そこはセンスのなさってことで勘弁してくださいペコリ（ｏ＿＿）ｏ）」

クロス：「俺やノアの技も結構増えてくるんだろ？名前大丈夫かよ…」

カガヤ：「考えてはあるけど……結構かっこいい響きで考えたから…あははは～」

クロス：「不安だ…」

【騎士、闘士、銃士】

クロス：「思えば1章の俺は中途半端な強さだったなぁ…」

ノア：「まともに勝ったのフェイトちゃんだけで…プレシアさんにはボロボロに…」

ゼスト：「剣技ならかなりのウデだが…」

メガーヌ：「いかんせん…砲撃や射撃魔法が苦手だったのが原因かと」

カガヤ：「その為に2章では大幅にパワーアップさせました、ってかこの為のあの強さなんで」

クロス：「剣と拳と銃…オールレンジに対応できるようになった！これもゼスト隊の皆に
特訓してもらったおかげだな」

ノア：「３つの力を秘めているっていうのは以前から分かっていたんですよね」

カガヤ：「最初はアルガス式魔法の使い手をなんて呼ばせるか悩んで…
　いっそのことアルハザードでは呼称がなく、それぞれ自分の職業に応じた
　名乗りをしていたと設定したんだよ。だから、上の３つ以外にも
　アルハザードでは占師とか錬金術師とか斧戦士とかもいました」

クイント：「太極の書にはそれらクラスの情報や技が全て記録されていて
　その中でクロスに合うのが剣と拳と銃で戦う事に適性があったから
　この３つのクラスになったのね」

スバル：「お兄ちゃんかっこいい～♪」

ティーダ：「まるでガ〇アメモリだけど（笑）」

カガヤ：「確かにそこは多少影響受けました（笑）」

ノア：「私は私は～？私にも何かクラス付いてないの？」

カガヤ：「♪～（・ε・）　」

ノア：「うぉい！！！」

【2章のまとめと3章について】

カガヤ：「最低限原作と絡ませた1章とは違ってほぼオリジナル展開ってのは…楽しかったけど
　…結構疲れたぁ。ギンガ、スバルとの出会いが中心だったからなぁ」

クイント：「原作でもあった事はあったイベントだからね…
　外伝漫画とかドラマCDにして欲しいなぁ」

メガーヌ：「他にはティアナちゃんとの出会いもあって…フラグの乱立ね♪」

クロス：「死ぬほど恥ずかしかった…」

ノア：「鈍感なフリするからこうなるんです！」

クロス：「いや、そういうレベルじゃなかっただろアレは…」

カガヤ：「まぁ～5，6，7歳相手によく頑張った！…お前はまだ9歳だから良かったぞ。
　さもなきゃロリコンの称号を与える所だった」

クロス：「実は作者がそうなんじゃないか？」

カガヤ：「俺はチビっ娘には興味ないぞ？でも早いうちからフラグ立てておけば
　将来役に立つだろ」

クイント：「義娘と孫が何人できるのかしら♪」

ゼスト：「…今のうちに経験積めば大人になった時に気苦労が減るぞ」

メガーヌ：「私とゼストさんみたいな一途なカップルもいいけど…ねぇ、ゼストさん？」

ゼスト：「・・・・・・・・・・・・／／／（プイッ」

ティーダ：「おぉ～隊長がデレデレしてるぅ・・・これは貴重だ！」

ゼスト：「・・・・・・・・・・・・（怒）」

ザシュッ！

クロス：「あ、ティーダさんが文字通り一瞬で吹き飛ばされた……」

ノア：「なんか、生肉を解体したような音がしたけど…」

カガヤ：「グロいのはまだ禁止！！」

一同：（・・・・・・・・・・・・まだ？）

カガヤ：「2章の終りでは多少は意味深なラストにしましたけど…」

ノア：「思いっきりバレバレだけど？」

カガヤ：「と、ともかく！……次はいよいよA‘ｓ編！狸とその愉快な仲間達が登場しますよ！」

ゼスト：「俺達の出番はあるのか？」

カガヤ：「1章と同じく原作に沿ったオリジナル展開にはしたいけど…
　ほぼオリジナル展開になりそうで、ゼスト隊やプレシアにも見せ場あるよ～」

ギンガ：「私たちは？」

カガヤ：「うーん、ちょっとしか出番ないかも…基本的にバトル中心だから」

ギンガ：「・・・そっか」

ノア：「でも作者は気まぐれだから出番ありまくりかもよ？なのはちゃんやフェイトちゃんだって
　お疲れ様会では出番あまりないと言われてたのに出たんだから♪」

3人娘：「・・・・・！（目がキラキラ）」

カガヤ：「さ、さってボロがこれ以上でないうちにお開きとします！
　では、皆様。これからも『魔法少女リリカルなのは～輝光戦記～』を宜しくお願いします！」

一同：「「「感想や質問などまってまーっす！」」」

第2章のお疲れ様会！（後書き）

クロス：「結局最初と最後は前回の使いまわしかい！」

カガヤ：「次回のお疲れ様会もそうかも？」

ノア：「それより…なんでお父さん出なかったの？出すんじゃなかったっけ？」

カガヤ：「・・・・・あっ」

ゲンヤ：「ふっ、どうせ俺はバトルに参加できない日常パートでしか出番ないからな…」

その頃ナカジマ家では1人寂しくやけ酒を飲むゲンヤの姿があった。

第3章予告

『闇の書』

それは呪われた魔導書、幾千年にも次元を渡り歩き、真名を、運命をも捻じ曲げられた魔導書。

『光天の書』

それは隠された魔導書、幾千年にも歴史から隠れ、ただひたすら覚醒を待っていた魔導書。

『太極の書』

それは託された魔導書、幾千年にも封印されてきた未来への希望の魔導書。

3冊は再会を約束された…はずだった。

夜を闇へと堕とした者は誰だ。

幼き闇の主の涙が、クロスの怒りを燃やし忌むべき血を呼び醒ます。

世界を破壊するのは闇か、それとも…

リリカルなのは異伝～X　DESTINY～第?部　輝光戦記
第3章　～歪められし闇の魔導書～

始まります。

第3章予告（後書き）

カガヤ：「やっときたきたA，s編この章は今まで以上に独自解釈やキャラ改変がますます多くなるのでご注意を…ネタバレ少なめでがんばってみました…どうだろ？」

クロス：「なんか俺すんごい嫌な予感するんだけど」

ノア：「原作通りにいくのかどうか…」

カガヤ：「ドンドン飛ばしていくぞ～！！」

第２１話　「邂逅、騎士（ナイト）と騎士（きし）」（前書き）

Ａ，ｓ編本格スタート。

「あたし」と書くか「私」と書くか…読み方は一緒なんですけどねぇ

第２１話　「遊逅、騎士（ナイト）と騎士（きし）」

管理局　地上本部訓練場

＜カートリッジ・ロード＞
「リボルバー・キャノン！」「シェルブリット！」

正面からのクイントの拳撃を闘士の拳でなんとか相殺し

＜カートリッジ・ロード＞
「絶炎衝！」「雷天剣！」

上空からのゼストの炎の槍を騎士の雷の剣で逸らし

＜カートリッジ・ロード＞
「クロスファイアシュート！」「メテオザッパー！」

間髪入れずに放たれたティーダの砲撃を銃士の砲撃で打ち崩し

「シュートバレット・スクエア！」「ガイアストリーム！」

背後から迫るメガーヌの射撃魔法をノアの広域魔法で吹き飛ばした。

「な、なんとか全部さばいたぞぉ～」「はひ～…」

訓練が終わった途端ユニゾンを解除したクロスとノアは倒れ込んでしまった。
２人とも特に怪我はないが息も絶え絶えだ。

「いくら力を使いこなす為とはいえ私達４人をいっぺんに相手なんて無茶しすぎよ！」

怒りながらもクイントは栄養ドリンクを２人に渡した。
今回の訓練はクロスとノアがゼスト達にどうしても頼み込んで行った特別なもの。
ゼスト隊の４人を同時に相手にしての実戦式の模擬戦、新しい力を使いこなす為と
ノアがユニゾンしながらでも高位な魔法を使えるようにするための訓練だが
流石に最初の頃は反撃も出来ずにただやられるのみだった。

「ま、クラスチェンジが一瞬で出来て、ノアもユニゾン中に攻撃魔法が出来るようになったな」

前まではユニゾン中のノアは補助魔法や防御魔法は使えたが、魔力制御に集中するため
より高い演算能力が必要な攻撃魔法を使う余裕がなかった。
しかし、クロスの能力が上がり魔力制御も自分である程度行える事になり
ノアは魔法の演算処理に余裕が出来たのだ。

「それに、複数の強敵を相手にした時の戦い方も覚えたかった…か？」

ゼストの問いにクロスはようやく息が整ってきて体を起こしながら頷いた。

「乱戦とか経験あるけど、弱い敵ばかりだったし…強敵が必ず１人

で来るとは限らないし」
「だからって体に負担かけすぎよ、もっと丁寧に鍛えないと壊しちゃうわ」
「平気、俺頑丈だから♪」

メガーヌの心配に自分の胸を叩いて答えるクロス。

「でも最近クロス本当に強くなってきたよ、背も伸びて体付きもよくなってきたし」

ティーダの言うとおりクロスの背はここ数カ月で伸び、前はクロノほどだったが
今では完全に追い抜いている。この前クロノやエイミィに会った時にエイミィにその事を言われてクロノが激しく落ち込んだ事もあった。

「私も背が伸びたいなぁ～」
「ノアの場合はとっておきがあるからいいだろ？」
「でも、とっておきだから普段使えないじゃない、そんなの意味な～い！」
「ほらいいから、そろそろ時間だぞ」「あっ！」

頭の上で駄々をこねるノアを机の降ろし、クロスが改めてゼスト達に向き直る。

「この半年間、お世話になりました」
「たくさんの教導ありがとうございました」

2人そろって頭を下げる。

「こちらとしてもいい経験になったぞ」

「楽しい半年間だったわ、2人のおかげでデバイスも改良出来たし♪」
「おまけに俺のまで新調出来たからな、礼を言うのはこっちの方さ」
「それにこれで最後ってわけじゃないでしょ？またの機会にも宜しくね。」

長期休暇から数カ月後。
ゼストの槍型、ロンギヌス。クイントの拳装着型、リボルバーナックル。
ついでに銃型のデータも欲しいとティーダのトライギャランまでカーリッジ・システム搭載型の試作デバイスとして新調されデータ収集と形で様々な任務で活躍している。
だが最近は特に大きな任務もなく日々訓練に明け暮れている。
そして、本来クロスはアースラ隊所属でゼスト隊には半年間の出向でその期間が今日で切れるのだ。

「フェイトちゃん達も今日で裁判終わりでしょ？もう終わってる頃かしらね」
「結局フェイトちゃんは嘱託魔道師でアースラへ、プレシアさんは本局付け…だったわよね？」

クイントとメガーヌの言葉に頷くクロス。

「うん、クロノがうまくやってくれたおかげでね」

今日、本局ではフェイト達の裁判が行われている。
捜査官としてクロスや証人としてゼスト達も数回裁判に出たがある程度の事はリンディとクロノに任せてある。
ゼスト曰く上から色々言われない為らしい。
初回の裁判は立ち会う予定だったが、プレシアから戦闘機人計画の

話を聞き
猶予はない、との事で当初の予定より早めにクロスはゼスト隊に出向したのだった。

「じゃ、3人に宜しくね」
「うん、母さんも父さんによろしく伝えてね」
「はいはい」

こうして地上本部を後にしたクロスとノアは本局へと向かおうとした…しかし。

「さて、ギアで一気に本局に…うっ……」
「ど、どうしたのマスター！？」

クロスは突然胸を抑え座り込んで、胸元からライカフラワーを取りだした。
フラワーの水晶が桜色に淡く点滅している。

「まさか……なのはが！？」

ライカフラワーの花弁の持ち主に何か起きるとクロスが持つ水晶が反応するのだ
その時エイミィから緊急連絡が

『クロスくん、聞こえる？なのはちゃんに危険が迫っているみたいなの！』
『あぁ、分かってる……これから海鳴市へ跳ぶよ』
『それが、強力な結界が張ってあって、さっきフェイトちゃん達をようやく送りこめた所なの

どうも形式がミッドチルダじゃなくて、ベルカ式みたいで…外からじゃ破れないの』
『ベルカ？……わかった、直接中に入って内側から破壊してみる』
『お願い！』

通信を終えて、急ぎ戦闘準備をするクロスとノア。

「行くぞ、ノア」
「了解、マスター！」
「「ユニゾン・イン！」」

海鳴市

今、フェイトは絶対絶命の危機にいた。

始まりは裁判を終え、手続きがあるプレシアを残してなのはに報告しようとした時だ。
裁判の結果は、プレシア、フェイト、アルフ3名とも管理局付けの魔道師になる事で事なきを得た。
プレシアはしばらく本局付けになって自由はあまりないとの事だが本人は気にしていない様子。
ひとまずこちらに向かってくると言うクロスより先になのはへ報告しようと通信をしたが
あらゆる通信手段が通じず、何か起きたのかと調べると。
海鳴市に強力な結界が張られてる事がわかり急ぎ内部へと侵入しようとしたが
結界が頑丈でなかなか転送ポートが開かず、ようやく突破口が開け内部へと侵入

傷ついたなのはとハンマーを持ったヴィータと呼ばれていた謎の少女を見つけ
間に割り込みなのはを救出した。

ヴィータを追い詰めたと思った所にもう1人剣と鞘を持った女性が現れ
フェイトのフォローに回ったアルフにも男の獣人が現れた。
そして、交戦……完全な敗北。
女性はシグナムと名乗り、圧倒的な剣技と謎の弾丸が込められた剣でバルディッシュは本体までも損傷を受け魔力行使は不可能。
アルフとユーノも押され気味だ。
ユーノの治癒と防御の結界魔法内にいるなのはを見る。
不安そうで今にも跳び出しそうだ。
だが、彼女のレイジングハートもバルディッシュよりは多少マシだが敵の攻撃で酷い損傷を負いとても戦える状態ではない。

「よく持ちこたえた、テスタロッサ…だがこれで終わりだ」

避けようとするが体がうまく動かない…これまでかと思ったその時。

＜F・B・A＞
「ファイアーブーストアタック！」

突如、デバイスらしき声と聞き覚えのある声がしたかと思うと炎の球が現れ…
シグナムを、ユーノに近付くヴィータを、アルフと対峙する獣人を次々に吹き飛ばしていく。
そしてそのままフェイト、ユーノやアルフを掴み、なのはの近くへと降り立った。
その姿は少し自分の知る姿と違っていたが、紅い髪をした自分たち

が恋焦がれる少年…

「「「「クロス（くん）！」」」」
「大丈夫か、みんな？」
「クロスくん、その姿は？」
「詳しい話はあとで、まずは…」

クロスが後ろを振り向くとシグナム達が集まっていた。

『ユーノ、アルフ、結界の解析と転送の用意を…俺でもこの人数では結界を越えれない』
『わ、わかった！』
『フェイトはなのはと治癒結界内にいてバルディッシュの損傷が酷過ぎる、戦うのは無理だ』
『えっ、まさか……』
『あぁ、アルフ達の準備が終わるまでの時間稼ぎくらいなら俺一人で十分だ』

「無茶だよ！クロスくん！」
「そうだよ、私も一緒に！」

フェイト達を1対1で圧倒していた3人を1人で相手にしようというクロス。
思わず念話ではなく声に出すなのはとフェイト。

「大丈夫、勝てはしなくても……負けはしない！」

そう言ってクロスはシグナム達の元へと飛び立った。

「今は…クロスに任せるしかないよ」

「…だね」

ユーノとアルフは結界の解析と転送の準備に入った。
残されたなのはとフェイトはユーノの治癒結界の中で無事を祈るしかなかった。

シグナム達は追撃するわけでもなくただ黙って様子を窺っていた。

「話は終わったか？」
「待たせてしまってごめんな。あ、そうだ…これお前らのか？」
クロスが差し出したのは結界内に跳んだ時に拾ったうさぎの顔が付いた赤い帽子だった。

「あぁ！！それはあたしんだ！返せ！！」
「やっぱりか、ほれ、もう落とすなよ」

ヴィータがひったくるより先にクロスが帽子を被せ、ぽんぽんと軽く頭を撫でた。

「お、似合ってるじゃないか♪」
「う…うるせぇ！！勝手にあたしにさわんな！／／／／」

照れ隠しなのか赤面しつつハンマーを一振り、後ろに跳んでいたクロスには当たらない。

「ヴィータ落ちつけ、時間稼ぎのつもりだろう」
「んな事分かってる、ザフィーラ」

獣人…ザフィーラが静かに窘めると、ヴィータは深呼吸して再び向き直る。

「1割は時間稼ぎなんだけどなぁ…」
「…残りの9割は？」
「もちろん、本当に似合ってたから言っただけだ」

サムズアップ付きの笑顔で答えるクロス。

「……っ！／／／／ぶっころす！！！」
「待て、ヴィータ」

飛びかかるヴィータを制してシグナムが前へと出る。

「随分と冷静だな…お前の仲間を襲ったと言うのに」
「いやぁ～そこんとこはすんごく怒りに満ちてるんだけど…なんかお前ら悪人に見えなくてな
ちゃんと攻撃で急所外してるみたいだったし」

離れた所に転送したので少し戦闘を見ていたクロスはシグナムにしろヴィータにしろ
急所を少し外れるくらいの攻撃をしている事に気付いた。

「…だが、お前に対してもそうだとは限らないぞ？」
「大丈夫…お前ら3人を相手にしようってんだ…手加減なんか出来るわけないだろ」

鞘に収まった剣に手を乗せ構えるシグナム、逆手で剣を持ち前かがみになるクロス。

「ばっかじゃねぇの！あたしら3人相手にするなんて…なめてんのか！」
「いや…こいつは俺達を倒す気じゃないようだ…ただ落ちなければ勝ちと思っている」
言葉と裏腹に隙がなく構えるヴィータとザフィーラ。

（この気迫、テスタロッサ以上かもしれないな）
「私はベルカの騎士（きし）ヴォルケンリッターが将、シグナム。そして我が剣レヴァンティン」
「同じく…盾の守護獣ザフィーラ」
「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼンだ！覚えておけ！」
「俺はアルガスの騎士（ナイト）クロスロード・ナカジマ、そしてこいつはエクスカリバーだ！
魔剣に聖剣でいいコンビだろ？」
「ふっ、騎士と騎士か…面白い奴だ…だが、我らが道を阻むものは容赦しないぞ！」
「……？」

ここでいつもならノアも名乗りを上げるのだが…ずっと黙り混んでいる。
不審に思ったクロスが呼びかけるが

『おい、ノア…どうした？』
『…シグナム、ヴィータ、ザフィーラ……っ！』

ノアは呼びかけに答えずいきなり飛び出してきてシグナム達に近付き

「シグナム！ヴィータ！！ザフィーラ！！！…久しぶりだね！私だ

よ！今はノアって名前だけど
光天の書のマスターだよ！」

「…何者だ！？…光天の書？……そのような書はしらん！」
「えっ……夜天の書は、シャマルはどこにいるの？」
「シャマルまで知ってんのか！…でも夜天の書ってなんだ、あたしらのは闇の書だ！！」

ノアの言葉に真っ向から否定するシグナム達。
偽っているわけでもなく本当に知らないような口ぶりにノアはショックを受けている。

「えっ…そんな、闇の書って…なに？私の事…覚えてないの？…」
「おい、ノア！しっかりしろ…何のことだ！」
「…嘘、そんなはずない。私の事は忘れないようになってるはず…うそ…嘘！！」
「いつまでも時間稼ぎしてんじゃねぇ～！！！」

痺れを切らしたヴィータがハンマーをノアに向けて振り下ろした。

「……そ、そんな…忘れてるなんて、それどころか闇の書って…」
「ノア！！！」

続く

第２１話　「邂逅、騎士（ナイト）と騎士（きし）」（後書き）

ノア：「……（ドス黒いオーラ全開」

カガヤ：「……」

クロス：「……」

カガヤ：「…おい、ノアをなんとかしろよ」

クロス：「あんな暗いノア始めてみたぞ！ってかお前がどうにかしろ作者！」

カガヤ：「無理に決まってるだろ！近寄るのだって無理だっての！次回で復活してる事を願うしかないな」

クロス：「…おいおい」

カガヤ：「ともかく、ＰＶ８万、ユニーク８千突破しました！本当にこんな駄文にありがとうございます♪」

クロス：「いや、ホントこんな駄作者に遠慮しないで誤字脱字とか批評とかなんでも送ってくれていいんですよ？」

カガヤ：「こら！俺は叱られて喜ぶＭじゃない！」

クロス：「いや、そう言う事言ってるんじゃないんだけどな……ま、感想とか書いてくれれば作者の気力が１５０超えて１７０くらいにはなるので」

カガヤ：「これからもよろしくおねがいしますペコリ（ｏ＿＿）ｏ）））」

第２２話　「ＶＳ　ヴォルケンリッター」（前書き）

タイマンばっかだったんでそろそろ集団戦とか書きたいなぁ…

第２２話　「ＶＳ　ヴォルケンリッター」

管理局本局　アースラ

ここでは係留中のアースラ内ではエイミィやクロノ達が慌ただしく動いていた。
アースラの整備をいったん保留にして急ぎ結界の解析に挑む、だが思うようにはかどらない。

「ベルカ式っていう事は分かってるのに…あぁもう！やっぱり外からじゃこの結界破れない！！」
「クロスに結界の破壊を頼むべきだったかもしれませんね…」
「仕方ないわ…中で何が起こっているのかわからない以上下手に結界を壊すよりは
内部に行ってもらった方が…クロス君の判断に期待しましょう」

リンディがじっと見つめるモニターでは海鳴市を包み込んだ不気味な結界が映し出されていた。

（みんな、無事でいて…）

海鳴市

目の前に迫ったヴィータのグラーフアイゼンに防壁を張ることも忘れノアはぎゅっと目を閉じた。

キィン！

そして、鋭い音がしたかと思えばいつまでも衝撃が来ない、目を開けてみると…

「俺の相棒に……何するんだよ！」
「ちぃぃ！！」

なんとか間に合い、アイゼンを剣で防ぐクロスの姿。
一撃を防がれたヴィータは、一端離れ距離を取り直した。

「ノア、しっかりしろ！…知り合いだろうが今は向こうが襲ってきてるんだぞ」
「あ・・・マス…ター」

ノアは気を失ってしまった。

「ノア！！…くっ、ギア！」

ノアをなのは達の元へと転送し、すかざすクロスは巨大な防御結界を張った。

「これで難易度は急上昇…今の俺に出来るのはクラスチェンジと近距離魔力付与攻撃のみ
上等！相手も近距離タイプ！こういう時の為にゼストさん達に集団戦教わったんだ」

ユニゾンなしで出来る事を確認する、騎士から闘士など素早いジョブチェンジや近距離技や
補助魔法は自分1人で出来るようになった、高速戦闘中の砲撃や射撃も銃士になれば出来る。

だが1人1人がなのはやフェイトを上回る相手、しかも3人同時に相手をするのは危険だった。
気合を入れ直したクロスはシグナム達へと剣を向ける。

「なんだかなのはに用事あるようだけど…俺を倒さなきゃあの結界破れないぞ?」
「・・・・・・・」
「1対3でしかもユニゾンデバイスなしで…あたし達を馬鹿にするな!」
「…どうした、シグナム?」

意気込むヴィータの後ろでシグナムは無言で立ち尽くしていた。

「いや、なんでもない、すまないなザフィーラ…確かに3対1は騎士の誇りに反するだろう
だが、忘れるな…我らはもう誇りを捨てている事を……」

自らの誇りに反する戦いをすることに歯軋りし剣を握る手に力がはいる…
1対1で相手をしたいが…クロスは3人同時に相手にするようだ。
けれども、引けない…例えどんな戦いをしようとも、全ては・・・

「全ては、我らが主の為に!」
「おうよ!ホントはあたし1人で十分なんだけど…あいつがそうはさせてくれなさそうだしな
それにあいつは今まで相手してきた中で一番強い魔力持ってる…一気に叩くぜ!」
「…無論だ」

斬り込んできたクロスの攻撃を散開することでかわし

三方からの同時攻撃をしかけてくるシグナム達。
クロスは両脚に紋章を浮かばせ、スピードを強化し上空へと避ける。

「飛翔双翼斬！！」

２つの斬撃をヴィータとザフィーラへと飛ばす。
だが、容易にかわさる、反射的に剣を右に向けるとすぐ真横にシグナムが現れた。

「お前が望んだ１対３だと言う事を忘れるな！」

斬撃をかろうじて受け止め、すぐにそらして場を離れる。

（止まるな！…動き回って常に１対１で戦うんだ！）

ゼスト達に教わった複数相手の戦い方は、まず止まらずに動き続ける事。
１人の攻撃を受けて止まってしまえばすぐに別の敵が攻撃してくる。
ゆえに敵の攻撃へは基本回避、防御してもすぐにその場を離れる。
１対１の連続だと思っての行動…これがゼスト達に教わり自分で考えた１対多での戦い方。

「逃がすか！」
＜シュワルベフリーゲン＞

正面に出てきたヴィータがどこからか出した４つの球をアイゼンで打ち飛ばした。
上と下からは避けた所を狙うつもりかシグナムとザフィーラが迫ってきていた。

「…もっと飛ばすぞ、ラファール！！」
＜闘士形態、ソニックスピード＞
クロスは闘士形態となり加速魔法でスピードを上げヴィータを方へとつっこむ。
「なにっ！？」
飛んでくる４つの鉄球を紙一重でかわし、そのまま拳を構え
「シェルブリット！！」
＜パンツァーシルト＞
アイゼンがシールドを張り防御するが、クロスはそのまま力を籠め
「はあぁぁぁ！！」
「あぅ！？」「ぐっ！」
下から来るザフィーラの方へとシールドごとヴィータを殴り飛ばした。
更に、上からのシグナムが斬りつけてきたが体を捻りかわし
「ストライク・カウンター！！」
そのまま勢いに載せた回し蹴りを叩きこむ。
シグナムは左手の甲冑で防御したが勢いが止まらずに下へと落ちていく。
しかし、３人ともすぐに持ち直し再び飛びあがりクロスを囲む。
「言うだけどの事はあったな…」

「あぁ、驚いたぞ…我ら3人を相手に一歩も引かないとは」
「だけど、その様子じゃそろそろ限界みたいだな」

ヴィータの言うとおりクロスは肩で息をするほどに消耗していた。
ユニゾンなしでの仙気の消耗が予想以上に激しく体力を異常に減らしていたのだ。

「……はぁ…はぁ、はぁ…ぐっ…はぁ」
（やばい…ユニゾンなしでの1対多の戦闘はあまりしてなかったから…想像以上に…それに
こいつらやっぱり1人1人がゼスト隊長並に強い！）

クロスにとって幸いなのはシグナム達が近距離での戦いを主にしてくる事だ。
遠距離魔法がないのかは知らないが、少なくともシグナムとザフィーラは使ってこない。
この事で援護射撃を気にする事なく向かってくる敵のみを相手に集中出来る。
もし、敵からティーダ並の援護射撃があればクロスはあっという間に落ちていただろう。

「絶対に負けない絶対に引かない……絶対に守って見せる！」
「ぐっ……だが、守るものがあるのは我らも同じ！いくぞ！」

疲労困憊でも戦う事をやめようとしないクロスの気迫に、一瞬迷いそうになるが
それでも…シグナムは剣を構える、互いに守る者の為に…ぶつかる。

シグナムの剣が、ヴィータの鉄槌が、ザフィーラの拳がクロスに迫る。

囲まれないように高速で移動しつつ時に騎士で、時に闘士でいなしていく
徐々にクロスの体に傷がついてきた、魔法のキレも落ちてきている。

（まだか…ユーノ、アルフ！）

一方、クロスの戦いを見ていたなのは達は

「ユーノ、どう？」
「転送の準備は出来たけど…結界が破れない、アルフも？」
「あぁ、この結界むちゃくちゃ堅いんだ」

結界を破り転送魔法で一気に離脱しようとしていたがユーノとアルフの2人がかりでも破れずにいた。

＜マスター、スターライトブレイカーを撃って下さい＞
「えっ！？」
「ダメだよ！レイジングハートだってボロボロなんだよ？」
＜それしか方法はありません、早くしないとクロス様が＞
「・・・分かった、私、レイジングハートを信じるよ！」
「なのは・・・」
「悔しいけど、それしか手がないみたいだ…」

本当に悔しそうに拳を握りしめるユーノ。
自分も加わりたいが何も出来ない、とフェイトも俯いている。
アルフの手の上でノアが目を覚ました。

「あ、ノアちゃん目を覚ましたんだね！」
「うぅ…はっ、マスター！？」

ノアに今の状況となのはの砲撃で結界を破る事を伝えるユーノ。
「その状態であの集束砲撃は無茶ですよ、私が結界を解除します！」
「ううん、ノアちゃんは早くクロスくんの所に行ってあげて…
出ないとクロスくんがやられちゃう！」
自分なら結界を解除出来るだろう、けれどもクロスが絶体絶命のピンチ…
どちらを優先させるかは決まっている。
「ごめん、なのはちゃん、レイジングハート……私行くね！」
「うん、アルフとユーノも行って」
「でもなのはのサポートを」
「大丈夫、私とレイジングハートに任せてよ♪」
「はぁ…仕方ない、その代わり後でしっかり治療受けるんだよ？」
「……いいのかい？」
「うん、こうなったなのははすごく強情だから」
「うわっ、それなんだかひどいよユーノ君！」
なのはがこんな眼をする時は何を言っても無駄だと分かっているユーノは
アルフやノアと共にクロスの元へ飛んだ。
「紫電一閃」「テートリヒ・シュラーク」「牙獣走破」
「うわわあああぁ！！」
3人の攻撃をどうにか交わしてきたが、ついに限界を越えた。
シグナムとヴィータの攻撃をかわしきれずにバリアで防御した所に

ザフィーラの飛び蹴り。
バリアを破られた瞬間に食らったのでエクスカリバーが削られずに済んだのは不幸中の幸いだ。
ビルの壁へと叩きつけられる……その直前。

「マスター！！」

ノアが駆け付けユニゾンをし急停止。
ビルの屋上へと移った。

『ごめんなさい…マスター、今怪我を治しますね』
『あぁ…ありがとな、ノア。もう大丈夫か？』
『はい、もう躊躇いません！』

ノアの回復魔法で傷を癒してやっと一息付く。

「クロス！」「大丈夫かい？」

ユーノとアルフも駆け寄ってきた。

「大丈夫だ…って結界の方は？」
「それが……」

事情を聞いたクロスの顔が苦悶に歪む。

「くそっ、そんな無茶をさせる羽目になるなんて…助けに来ておきながら…」
「そんなことないよ、クロスが来なきゃ私達みんなやられてたさ」
「今は…なのはに託そう。僕らはその間に彼女たちの足どめを」

3人が顔を上げると

「ほう…ユニゾンをしたか…」

「あの2人もまた復帰したか」

「へっ、これでようやく1対1になりそうだな」

『ヴィータ、目的を忘れるな…今2人が到着した、あと少しで蒐集出来るそうだ』

『…分かってる』

クロスはシグナムと、ユーノはヴィータ、アルフはザフィーラと対峙する。

「さっきまでのようにはいかないぞ…」

「あぁ、私もやはりこちらの方がやりやすい…」

『シグナム……』

「お前またやられたいのか？」

「今はもう戦闘に集中出来るんだ、簡単にはやられないぞ！」

「さ～って今度はきちんとケリつけようか」

「そんな事に興味はないのだがな…」

三者三様に身構え…戦闘を開始した……が

「きゃあぁぁ～～！！」

「うわぁ～～！！！」

「なのは、フェイト！？」

突如なのはとフェイトの悲鳴が聞こえたかと思うと…
なのはの体からは緑色の服を着た手が
そして、フェイトの体からは……灰色の服を着た手が伸びていた。

「全く…あれほど管理局関係の人間からはとってはいけないと言ったのに」
「ヴィータちゃん、強い魔力反応をちらほら感じたと言ってましたからね…」
「シャマル、手早く終わらせて下さいね」
「はい、了解しました……レギナス」

続く

第２２話　「ＶＳ　ヴォルケンリッター」（後書き）

クロス：「わぁ～い、俺またボロボロだぁ！」

ノア：「シグナム達３人相手だと流石にピンチですね…」

カガヤ：「今のクロスじゃユニゾン状態でやっと、だからな」

クロス：「いつになったらチートとか無双！とか出来るんだか…」

カガヤ：「諦めろ、雑魚ならいざ知らずシグナム達はカートリッジシステム搭載したなのは達ですら遅れをとる相手なんだから」

ノア：「それにしても…最後にちらりと出ましたね、原作で見ない名前」

カガヤ：「ん、あれオリキャラ…どういうキャラかは今は秘密」

クロス：「今度は表現とか伏線とか頑張れよ？」

カガヤ：「うぅ…精進しますので何か不自然に感じた事あればどんどん言って下さい…わざと、そうしているのもありますけど」

３人：「それでは感想お待ちしておりますペコリ（ｏ＿＿）ｏ）」

第２３話　「敗北」（前書き）

今回はちょっと遅くなりましたが…次回更新はＧＷ明けになります。

第２３話　「敗北」

海鳴市

なのはは体を引きずるようにビルの淵へと歩く。

「なのは、つかまって」

「ありがとう、フェイトちゃん…大丈夫、なんだか痛みが和らいでいるんだよ」

「なのはも？私も…なんだか少し楽になったよ」

「このライカフラワーのおかげかな…すー・・・はー・・・いくよ、レイジングハート！」

フェイトの肩を借り、胸元のライカフラワーの花弁を掴み深呼吸…そして、レイジングハートを上空の結界へ向けて構えた。

結界破壊能力を付与した『スターライトブレイカー＋』

＜カウント・スタート…テン…ナイン…＞

これなら結界を破壊出来る、その代わりチャージ時間が通常より伸びているのが難点だ。

＜シックス…ファイブ……＞

「レイジングハート？大丈夫？」

損傷が激しいせいかチャージのカウントダウンが途切れ途切れになってしまう。

しかし、それでもレイジングハートは力強く答える。

＜問題ありません…カウント・フォー…スリー…＞

あと少しでチャージ完了となったその時。

ズブリ

自分の胸から変な音がしたかとおもうと…手がはえていた。

「えっ……なに…これ」

「なのは！…うぐっ……」

見るとフェイトの体からも別の手がはえていた。

そして、次の瞬間…2人を激しい衝撃と痛みが襲う。

・

・

・

・

「なのは、フェイト！！」

「何、消えた！？」

シグナムを無視して、なのは達の元へと跳躍したクロス。

「フェイト、なのは！！」

「…大丈夫だ、命までは取らん」

冷静なシグナムの言葉が逆にユーノとアルフを焦らせる。

だが、2人が向かおうとするとヴィータとザフィーラが割って入った。

「お前らまで行かせるかよ！」

「・・・・・・」
「くっ！」
「フェイトぉ～・・・」

『この手…2人のリンカーコアを掴んでます』
＜マスター、あそこです！＞

ラファールが近くのビルの屋上で空間に手を突っ込んでいる敵の姿を見つけた。

「お前らぁ～！！！なのはとフェイトを離せぇ～～！！！」
＜プリズム・アロー＞

2人のうち、緑の服を着た女性に向けて白い仙気の矢を放つ、しかし。
鏡が付いた黒い槍をもち、灰色の服を着た青年が庇うように立ち

＜リフレックス＞
『ちっ、こちらの少女の蒐集は後回しだ。シャマル、そちらだけでも終わらせろ』
『はい！』

矛先に付いた鏡が光ったかと思うとクロスの魔法をそのまま跳ね返した。

「なっ！？」

後ろにいるなのは達にあたらないようにクロスは障壁を張り防御する。

「シャマル、どれくらいだ？」
「もう少し…です」
「仕方ない…今度はこちらが時間を稼ぐか」

青年がそう言ったかと思うと一瞬でクロスの真後ろに姿を移した。

「空間移動！？」
「わが名はレギナス…ヴォルケンリッター幻槍の騎士、レギナスだ！」
『レギナス？……守護騎士にそんな名前の子は…いないはず』
『ノア、ひとまず詮索は後だ、来るぞ！』
『はい！』

青年、レギナスは名乗ると同時に槍を横一閃。
クロスは前に転がるようにかわし、顔を上げるとそこにレギナスの姿はなく。

＜カートリッジ・ロード＞
「幻槍演武」

クロスの周りをいくつものレギナスが囲み、一斉に攻撃をしかけてきた。

（あいつもカートリッジシステムを…くそっ、高速移動？それとも幻術？どちらにせよ！）

「ノア！……炎熱！」『風陣！』
＜フレイムストーム＞

クロスとノアの魔力変換資質で生み出した「炎」と「風」が合わさり炎の烈風となって３６０。吹き荒れ、レギナスを吹き飛ばそうとする。
しかし、レギナスに風が届く直前にまたしても姿が消え。

「甘いな、少年…」
『幻術じゃない！空間移動と高速移動です！』

クロスの首を狙った槍の突きを剣で受け止め、そのまま斬り合いとなった。

「フェイト・・・ちゃん」

生えた手が消えたかと思うとフェイトは倒れてしまった、どうやら意識を失っているようだ。
なのはの方も気を失いそうなほどに力が抜けていく。
うすら空いた目で見る苦戦するクロス達の姿になのはは最後の力を振り絞り
目の前にある発動寸前のスターライトブレイカーへとレイジングハートを向ける。

「スター・・・ライト・・・・・ブレイカー！！！！！」

海鳴市を覆っていた結界を巨大な桜色の閃光が貫いた。

「なのは！」「やった！」
「ちぃ！」

結界を破壊した際の衝撃がユーノ達の元へと伝わった。

『シャマル』

『蒐集は終わったわ、でももう1人が…』

『ならばもう用はない、もう1人はいずれ機会があるかもしれない、今は撤収するぞ』

『『了解』』

シグナムの念話にすでになのはへの用事は済んだのかシャマルは手を戻しその場から撤収した。

一方クロスとレギナスは

「お前ら、目的は一体何だ?」

「……闇の書…完成、ただそれだけだ!」

『じゃああなたは一体何者?守護騎士は4人のはず、あなたはいなかった!』

「ノア?」

「っ!?……お前らがなんと言おうと俺は守護騎士が1人幻槍の騎士、レギナスだ!」

鏡がまた眩しく輝き、思わず顔を背けたクロス。

その隙をついてレギナスが槍の柄でクロスの腹と喉を打ち、蹴り飛ばし

「ぐふっ!」

「……牙狼一進!」

鏡の下に付いているマガジンが数発カートリッジロードすると
柄の根元からロケットのように魔力が噴射し加速させた槍の一突き
がクロスを襲う。

『ト、トライシールド！』

とっさにノアがシールドで防御するが、徐々にシールドにヒビが入
りだした。

「…プ、プリズム…クラッカー！」

朦朧とする意識の中でクロスが至近距離に迫った槍の先端に小さな
魔力弾をぶつけ…
小さな爆発が起きた。
その爆発で槍の軌道がずれ僅かに左肩の装甲を削った程度に済んだが
衝撃が凄まじくクロスはビルに叩きつけられユニゾンが解け、ノア
共々気を失ってしまった。

レギナスはじっとクロスを見つめていた。
そして、視線が横たわるノアにいくと槍を向け、何かを考え込む。

『レギナス…管理局が来る、早く撤退だ！』
『分かった…例の場所で落ち合おう』

シグナムからの念話に答え、しばらくはクロスとノアを見つめていた
が
踵を返し、空へと消えていった。

時空管理局本局　医務室

「また、ここか・・・」

眼を覚ましたクロスは幾度も見た事がある天井と幾度も嗅いだ独特の匂いに溜息をはく。
自分は…負けたのだ…せっかく新しい力を使いこなす為にあれだけ修行したのに…
なのは達を助けるはずが…結局助けられなく敵にもやられてしまった…
体を起して両手を力強く握る……血がにじむほどに。
ふと、扉の外から声が聞こえてくる。

「あ…クロスくん！」
「おはよう…もう大丈夫なの？」

なのはとフェイトが起き上がったクロスを見て駆け込んできた。

「あぁ、もう大丈夫だよ…はいっと」

そう言ってベッドから跳び起き、空中で回転まで加えて着地する。

「ちょ、ちょっと、無茶しちゃダメだよ！」
「そうだよ、丸一日も眠ってたんだよ？」
「丸1日位か…どうりでお腹も空くわけだ、ってかお前らこそ大丈夫かよ？」
「あ、私もなのはも傷はもう大丈夫…でも」
「その話は、クロス君が目を覚ましたら会議をする、とリンディさ

んが言ってたからその時に」

その時、ドアから視線を感じ、クロスが目を向けると…誰もいない。

「…もう、ほ～ら♪」

なのはがドアの外から誰かを捕まえてきた。

「あぅ…マスタ～」

誰かとはノアで、かなり落ち込んで目は赤くなっていた…先ほどまで泣いていたようだ。

「ごめんなさい…ごめんなさい、マスター…私のせいで」

「お、おいおい。なんでノアが謝るんだよ？」

「私が気絶しちゃったせいで…1人であんな無茶する事になって…」

「あ～あれは俺の体力のなさが原因だろ、気にする「違う！！」…ノア」

「マスターは強くなりました！だからシグナム達3人相手にしても一歩も引かなかった！！

でも…えぐっ…それでも…」

クロスは泣きだしたノアをそっと抱き締め

「もういい…ノア。俺もお前も…なのはやフェイトも無事だったんだ…それでいいんだ」

「でも……！」

「でも禁止！！」「あうっ！？」

ノアに額に軽くデコピン。

「ただ、あいつらの事知ってるなら色々聞かせて欲しいんだ」
「それは会議で話します…私の思い出した記憶と守護騎士達が話していた闇の書の事を…」
そう呟くノアの瞳には悲しみと戸惑いが渦を巻いているようだった。
続く

第２３話　「敗北」（後書き）

カガヤ：「最近多忙で書く暇がなかなか…」

ノア：「読みたい小説も増えたしね」

クロス：「んで、気が付いたら…ＰＶ９万、ユニークは９千超えていると…」

カガヤ：「本当に皆様ありがとうございますペコリ（ｏ＿＿＿）ｏ）」

クロス：「ってかまた負けたのか俺…」

カガヤ：「今回は勝利条件を満たせなかったという事で」

ノア：「なのはちゃん達を守り切れなかった…ですね」

カガヤ：「なのはの蒐集は完了しちゃったからな…オリキャラにもやられたし」

クロス：「あいつは一体何者だ？」

カガヤ：「２章の敵とは違って結構重要なキャラなのでオリキャラ紹介したいな～と」

クロス：「でも１週間ほど更新不能なんだろ？」

カガヤ：「５日くらいにはあげたいけど…帰省中にネタ考えよう」

ノア：「行き当たりばったりですねぇ…」

カガヤ：「展開が数パターン考えてはいる…どれを使おうかという話だよ」

ノア：「描写不足にならないようにねぇ」

カガヤ：「それはもう末期で手遅れかも…こんな駄作者ですが今後も宜しくお願いします…皆様、いいＧＷをお過ごしくださいペコリ（ｏ―　―）ｏ）」

第２４話　「光天と夜天」（前書き）

ＧＷ終わっちゃいましたね…皆さんどこかへ旅行行きましたか？
僕は帰省しただけです（笑）

第２４話　「光天と夜天」

時空管理局本局　会議室

広い部屋の中では今アースラ隊の会議が行われようとしていた。
メンバーはクロス、ノア、リンディ、クロノ、エイミィ、なのは、
フェイト、ユーノ、アルフ
と数名のスタッフ。

「さて…それではまず、現状の再確認をしましょう。その前に…
クロス捜査官、体は大丈夫ですか？」
「大丈夫です、魔力も何も問題ありません」
「そうですか、ですがあまり無理をしないでくださいね。では続けます…クロノ執務官」
「はい、知っている人もいるでしょうが改めて、今回の民間人襲撃事件に関わるロストロギア
闇の書についての説明から入ります。まずはこれを見て下さい」

画面に映し出されたのは一冊の本。

「これが第一級捜索指定遺失物…『闇の書』です。最初は白紙の魔道書ですが…」

クロノは闇の書に纏わる情報を説明していった。
最初は白紙の魔道書だが、魔道師や魔道生物のリンカーコアを収集しページを増やし
全てのページが埋まると次元干渉も可能な強大な力を主に与える魔道書。

「そして、その蒐集と主を守護する者たちが…この守護騎士達です。
彼らは古代ベルカ式を使います。今では一部の魔道師にも流通している
カートリッジシステムでデバイスを強化し接近戦で相手を仕留める
近距離型魔道師…騎士と呼ばれる者達です」

ちなみにカートリッジシステムの事はなのは達は事前に説明を受けている。
圧縮された弾丸で強化した一撃をまともに浴び、レイジングハートもバルデッシュも
基本構造にまで酷い損傷を受けてしまった、それほど強力なシステムなのだ。

闇の書と守護騎士の説明が一通り終わり、エイミィからの報告である。

「調べてみて分かった事ですが、ここ数週間ほど様々な次元世界で魔道生物のリンカーコアが
蒐集されている事が分かりました。いずれも現地では『神』として崇められているほどの
高い魔力を持った高位生物で、今回の高町なのはさんの蒐集も含めてかなりのページが
埋められた可能性があります。それも管理局が気付かないほど丁寧に慎重に…
高位生物が蒐集された事実も偶然地元住民が目撃し管理局員が調査して判明したんです」

また、クロノが立ちあがり

「相手は魔道師ではなく、辺境の高位生物から蒐集することで我々の目を掻い潜っています
過去にも何度か闇の書は目覚めていますが…管理局の妨害などで完成した事はありません。
なので今回は特に慎重になっているようです」

説明をするクロノの表情が一瞬曇ったようだが、それに気付いたのは数人のみだ。
最後にリンディが今度の捜査方針について説明する。

「生物が襲われた次元世界は全て、なのはさんの出身世界からの転送で行ける距離です。
なので闇の書の捜索は第９７管理外世界『地球・海鳴市』を中心として行います。
しかし、現在アースラは整備のためここを離れられません、他の艦船も全て出払っています
そこで、襲撃事件の現場近辺に臨時作戦本部を置く事になりました」
「「「えっ！？」」」

クロス、なのは、フェイトはアースラが使えないのに捜査をどうするのかと考えていたのでリンディの言葉に驚いた。
リンディは驚く3人の方へとにっこりとほほ笑みかけ

「司令部へは私とクロノ執務官、エイミィ執務官補佐、クロス捜査官ノア捜査官補佐、フェイトさん…以上で赴きます。
司令部はなのはさんの保護も踏まえて…なのはさんの近所になります♪」
「えっ……やったぁ～♪」

クロスやフェイト達が近所に住む事がわかり、喜びを隠しきれないなのは
フェイトやエイミィも喜んでいる。
しかし、クロスは暗い顔をして肩に止まっているノアの事が気がかりで
それどころではなかった。

「それでは先ほど話したチームごとに分かれて打ち合わせを行ってください」

そして、観測チームと捜査チームはそれぞれ別の会議室へと移って行った。
残ったのは司令部に駐屯するメンバーのみ

「さてと…ある意味で今回の会議の本題に入りましょうか…」
「はい……」

ノアが一歩前へと出て会議室のみんなを見渡し軽く息を吐いた。

「皆さんにこれからお話しすることは…今回初めて話す事です。
闇の書、いえ、夜天の書について」
「夜天の書？」

聞きなれない魔道書にエイミィが首をかしげる。

「はい、闇の書は本来の名と役目は全く違うものなのです。本来の名は『夜天の書』……
マスターの太極の書や私の光天の書と同じく…アルハザードの遺産の１つです」

「…何!?」
「闇の書が…アルハザードの遺産!?」
「それだけではありません。太極、光天、夜天…この魔道書は3冊で1つとして作られました。
アルハザードを滅ぼした存在『帝黒神・アグドラス』を倒す為の未来への希望として」
「闇の書が未来への希望だって言うのか、そんな馬鹿な!」
突然クロノは立ちあがりノアへと詰め寄る。
「あんな魔道書が…未来への希望のはずがないだろ!」
「っ!?」「クロノ!」
「……すまない、つい興奮してしまった」
リンディの言葉にハッとして、クロノは謝り席へと戻った。
その一連の行動や言動がクロスにも分からずに怪訝な表情でみつめる。
「なんでもないんだ…続けてくれ」
「…続けます。私がこの事を思い出したのは先日、なのはちゃんを襲った守護騎士達と
交戦した時に思い出しました。ですがまだ完全とは言えません…
自分の使命は思い出しましたが肝心のアグドラスに関する事はまだ全て思い出したわけではないんです。
でも、この事は話さなければならないので今お話します…始まりはアルハザードでの覇権争い」
遥か昔、アルハザードは2人の王が争いを繰り広げていました。
…当時のアルハザードの王アルガス。そして、アルガスの弟アグド

ラス。
アグドラスが王を名乗りアルガスへと反逆を起こしたのがきっかけです。
戦いは多くの者を巻き込み、何年も続き…そしてようやくアルガスはアグドラスを退けました。
その栄光を称えて、アルハザードでの魔法を『アルガス式魔法』と呼ばれるようになったのです。
敗れたアグドラスは姿を消し、遠い年月が過ぎていきました。
長い年月が立ち、アルガスとアグドラスの闘いが伝説となり人々の記憶から消えかけた頃…
アグドラスが再び攻めてきました。
既にアルガスは亡くなっておりその子孫と多くの魔道師達が迎え撃ちました。
しかし、アグドラスは恐ろしいほど強大な兵器と軍団を引き連れ暴れまわりました。
アルガスのいた当時よりもアルガスの子孫や魔道師達の質が劣っていた事もあり被害は拡大。
アグドラスの目的は征服ではなく…破壊に変わっていたのです。
幾年もの月日が流れているはずなのにアグドラスは生きていました。
それはアルハザードでの延命技術とも違うものでした。
アグドラスは自らを『帝黒神』と名乗りアルハザードを作り変えようとしました。
多くの魔道師や民が犠牲になりながらも戦争は再び膠着状態に入りました。
そこでアルガスの子孫と魔道師達はアグドラスを倒すのではなく封印することにしたのです。
ただし、アグドラスが蘇る事を予見していた子孫達はあらゆる知識や技術を遺す事にしました。
自分達がいなくても後世の者がしっかりアグドラスと戦えるように…
アグドラスの事を忘れ、滅びの道を歩む自分達と同じ過ちを繰り返

させない為に…
まず、あらゆる知識と技術と魔法を詰め込んだ太極の書が生み出されます。
ミッドやベルカやその他様々なの魔法が書には載っているいますがこれは元々ミッドもベルカなどはアルハザードの魔法を元に独自に組まれた術式なので
似たような魔法が登録されているからなんです。
そして、仙気を扱える者がいなくてもアルガス式魔法が使えるようにとの処置を施して…
次に生み出されたのが私と光天の書。
私はアルハザードの記憶を受け継ぎ、太極の書の主と来るべき戦いに備えるのが目的です。
だから太極の書の中に封印されました。何百年、何千年後かに確実に現れるであろう
太極の書の主としての素質を持った者を目覚めと共に導くために…
しかし、目覚めてすぐに力を全て使いこなせるのはまず無理。
未来でこの事実を伝えても周りが理解出来ないだろうと、記憶にもリミッターをかけたのです。
リミッターを解くカギの1つはアルハザードでの魔道技術の原動力になっている魔力石…
そう、ジュエルシードに託したのです。
太極の書の主はジュエルシードと出会う…そう予知したので
主とジュエルシードが出会い、十分な仙気をジュエルシードに注ぐ事で封印が解かれるように。
申し訳ありません…本来この事は忘れずに覚えているはずだったのですが…
リミッターに不備があり…思い出す事が出来ませんでした…
書をある程度使いこなしたと言う事は戦う覚悟がある証
その時に来るべき戦いの真実を明かす。
ただ…少々不備があったらしくまだ私の記憶は完全に戻っていない

のは…誤算でした。

そうして、最後に生み出されたのが夜天の書…
これはアルハザードの技術などは記録されてはいませんが
その分、封印などはされずに様々な次元世界を旅して色々な魔道師と出会い
後の世で生み出された様々な魔法や技術を記録していくのが目的の1つ。
時がくれば太極の書と主の素質を持つ者を見つけ
その時代の知識や組織についての情報を提供し
協力してアグドラス復活に備える…これが2つ目の目的でした。
あの守護騎士達…シグナム達も夜天の書と同時に生み出されたシステムです。
私もシグナム達も数年に渡り一緒に訓練しました。
この守護騎士の事では後で少し別に話さなければならない事がありますが…続けます。
そして…

そこまで事務的に淡々と話していたノアの言葉が詰まる。

「…ノア？大丈夫か？」

沈黙を破るようにクロスがノアに語りかける。
が、ノアは意を決したように。

「大丈夫です、ちょっと長く話し続けたから疲れたみたいです、でももう平気です♪」

そうしてノアの話は続く…

「話を続けますね、実は画面に映っているので守護騎士が全員というわけではありません。
夜天の書、管制人格としてもう1人いるんです」

そうしてミラノールが銀髪で赤い瞳をしたシグナムほどの年齢の女性を映し出す。

「この人…ノアに似てる」
「うん…そっくりなの」

その女性はノアに似ていた。目元や全身からのオーラもそっくりだった。

この子に名前はありません…と言うのも実は私とその子には元々名前がなかったんです。
太極の書と夜天の書の主にそれぞれ名前をもらい、それを契約としていました。
そして、ついに3冊の書が完成し私達の訓練も終わった頃。
アグドラスをようやく封印する機会が来ました。
その頃のアルハザードは…長年の戦争で至る所に次元断層が発生してアルハザードは崩壊寸前でした…ですが、魔道師達はそれを待っていたのです。
アルハザードの崩壊時に発生する膨大な魔力やその他エネルギーを使いアグドラスを封印する。
崩壊時のエネルギーを使用することで他の次元世界への影響を最低限にすることも出来
それが唯一残された手段でした…そして、封印は見事に成功。
太極と光天の書、夜天の書も崩壊エネルギーを使い他の世界へ跳ばされました。
アルハザードの住民はアグドラスが張った結界で一部を除きアルハ

ザードから出られず…
アルガスの子孫や魔道師達も…封印時に死亡。
…これがアルハザードの崩壊時に起こった出来事です。
ここからは私の推測ですが、生き残ったアルハザードの一部の民と
魔道師が各世界へと流れ
仙気を扱える者が全員死亡したため仙気を用いない魔法が作られ…
それがミッド式やベルカ式などの始まりとなった…と思います。

長い…長い時間ノアの話は続いた…
その間だれも一言も喋れなかった。
なのはやフェイトはあまりよく理解出来ないようだったが
クロスやリンディ達には重くのしかかっている。

アルハザードを滅ぼした帝黒神・アグドラス…
それを倒す為の太極の書が目覚めたと言う事は近い将来に復活する…
その事を理解したクロス達は不安にかられた。
そして、それ以上に衝撃を受けた人物が

「僕の…僕の父さんを殺した闇の書に…そんな過去があったなんて」
「・・・・・」
「な、なんですって!?」

クロノの呟きにクロス達はショックを受ける。
特にノアのショックは大きいようだ。

「クロノ君のお父さん…リンディ艦長の夫でもあるクライド提督がね、１１年前の闇の書暴走で
命…落としているんだよ」

エイミィが簡単に説明してくれたがそれだけで十分だった。

「……やはり夜天の書は、誰かに大幅に変えられてしまったみたいですね」

ノアの声が会議室に響く…

「闇の書はノアちゃんの言う通り機能が大幅に変わってしまったみたいですが
　夜天の書であったという事実はともかく、今の闇の書は完成すればとんでもない被害をもたらす
　危険なロストロギアに変わりはありません」

リンディの言葉に更にショックを受けるノア。

「ですが…変えられたと言う事は元の夜天の書に戻すことも可能かもしれません。
　もう少し詳しく闇の書に関して調べる必要がありそうですね、それと闇の書の主の保護も」

ノアは続けて発せられた言葉に顔を上げ驚いた。

「ノアちゃん、あなたにとって夜天の書もあの守護騎士達も家族のようなものなのでしょう?
　だったら一刻も早く探しだして真実を明らかにすることに全力を注ぎましょ」

「特にさっき映し出した闇の書の管制人格は…お前の妹、だろ?お前の反応見てればわかるさ」

リンディとクロスの言葉にノアの瞳から涙がこぼれる。

「ひぐっ、あの子だけじゃないよ…シグナムもシャマルも小さい私を『姉上様』と呼んで…
慕ってくれたんだよ。ヴィータなんかいつもぶっきらぼうに『姉ちゃん』って…うっぐ
…それにあの子の事は『夜っちゃん』って呼んだら…『もうその名前でいいかもしれません』
と照れるんだよ……本当に家族で…封印される時も私も皆も別れを悲しんでいたんだよ」

ノアの涙が止まらない。
クロスはただ黙ってノアの頭を撫でる。
なのは達も何を言えばいいのかと戸惑っている。

「でも…でも、あの時のシグナム達の目は私が赤の他人、邪魔をする敵として映っていた。
演技かもと思ったけど…でもあれは本気で私を忘れていた…あの子の事も…闇の書って…
うっ…あの子は夜天の書は誰かのリンカーコアを蒐集してページを増やして暴走するなんて
リンカーコアを蒐集しなくてもちゃんと魔法も技術も記録できる…
私の最高に自慢の妹なの!!クロノ君のお父さんまで奪うような……
そんな呪われた魔道書なんかじゃない!!
私と会うのを…とても楽しみにしていた優しい子達なの!…うわあぁぁぁ」

クロスの胸に抱きつき泣き叫ぶノア。
長い時を経て再会した妹達が自分の事を完全に忘れていて
そして、本気の殺意を向けてくる…

しかも共に戦うために長い旅をしてきたはずの夜天の書が
世界を幾度となく崩壊へと導いてきた呪われた闇の書へと変わっていた…
それがどんな気持ちかは誰にもわからない
兄弟姉妹を犠牲にして生き残ったクロスでさえも…

「……一休みしましょう。まだ会議は終わりではないのですから…」

リンディがそういうと皆静かに会議室を後にした。
会議室にはクロスとノアだけが残った。
何も言わずに優しく頭を撫でるクロスと、胸元で泣き叫ぶノアだけが残った…

続く

第２４話　「光天と夜天」（後書き）

ノア：「・・・・・・・・・・（隅っこで大泣中」

クロス：「え～っと皆さんお久しぶりです…ってまたこんな空気かよ！」

カガヤ：「あ～休み明けでこんな展開ですけど…どうも」

クロス：「…なんで休みあけでこんな話になるんだよ？」

カガヤ：「う～ん、都合上？」

クロス：「シェルブリット！」

カガヤ：「ぐはうぅ！…さ、３章はこういう展開多いですが御了承を…」

クロス：「ってかアルハザードやら太極の書やらの事が色々出てきたけど」

カガヤ：「前に書いた話やらを見直しつつ書きましたが…どこかで矛盾出てるかも？」

クロス：「そんときは駄作者に叱咤でも注意でもしてやってください」

カガヤ：「ちゃんとした感想もお待ちしておりますのでぜひぜひお願いします…ペコリ（ｏ＿＿）ｏ）」

第２５話　「謎の守護騎士と２人の猫娘」（前書き）

これから段々と原作とは展開がかなり違ったり一部省略してますが御了承下さい。

第２５話　「謎の守護騎士と２人の猫娘」

時空管理局本局　会議室

少し長めの休憩を終え、再び会議が再開された。

「それでは、先ほどの話の続きになりますが…ノアさん、気になる事があるのでしたね？」

「はい…先ほども言いましたが夜天の書と守護騎士は最後に生み出されましたが、本来であれば
　守護騎士は４人のはずなんです。シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ…管制人格も
　５人目の守護騎士ともいえますが…しかし」

そう言ってノアはモニターに映された守護騎士の１人を拡大する。

「マスターと対峙した『幻槍の騎士レギナス』彼は、夜天の書の完成時には
　いない守護騎士なんです」

「そんな事を言ってたな…守護騎士というのは後で追加出来るものなのか？」

クロスが疑問を言う。

「いえ、守護騎士システムは魔法生命体であると同時にプログラムでもあります。
　アルハザードの技術がなければ新たに作成することも生身の人間がなれる事も
　不可能なんです」

「かなり突拍子的な考えだが…このレギナスが夜天の書を闇の書に変えた
　とは考えられないか？」

クロノの言葉にハッとするノア。

「話を聞く限り夜天の書と闇の書では大幅に変わり過ぎている、アルハザードの技術で
　作られた書をそこまで大幅に変える事となると…」
「簡単に変えれるようなシステムじゃないはずです。年月によっての記憶の欠如への対策は
　万全には出来ませんでしたが、機能の改悪にはかなりの防御策をしていましたから」

考え込む一同。
結局闇の書やレギナスの謎は本人を捕獲してから調べると言うことになり。
リンディ達は予定通り海鳴市への司令部設置の準備に取り掛かった。
そんな中クロスは再度、レギナスの姿を見る…
レギナスは対峙した限りでは武闘派で、おおよそ夜天の書を書き変えれる程の
研究者とは見えなかった。

（もう一度レギナスと戦う必要があるな…）

そうクロスは思い立った。

メンテナンスルーム

ここではレイジングハートとバルデッシュの修理が行われている。
「初めまして、マリエル・アテンザです。マリーって呼んで下さい」
白衣にメガネをかけた女性が挨拶してきた。
この人は本局のデバイスなどの装備一式のメンテナンスを担当するメンテナンススタッフで
エイミィの後輩にあたる人だそうだ。
初対面であるなのはとフェイトが挨拶をする。
クロスとノアはゼスト隊のデバイス改修の時に幾度か面識があるのだ。

「高町なのはです、レイジングハートとバルディッシュの事、宜しくお願いします」
「フェイト・テスタロッサです…あのバルディッシュ達は…」
2人の言葉にマリーは難しい顔をしてポット内の待機モード中レイジングハート達に目を向ける。

「完全には直るけど、正直言って時間結構かかるかも…本体まで破損してるから…」
「そうですか…無理させちゃってごめんね、レイジングハート」
「バルディッシュ…」
2人の言葉に反応してレイジングハートとバルディッシュが淡く輝く。

「それとね見てほしいものがあるの」
マリーがコンソールをいじると、モニターにメッセージが現れた。

「これは…エラーメッセージ？」
「うん、パーツが足りませんって…『ＣＶＫ７９２を組み込んでください』っていう意味なんだ」
「っ！！それって…」
「そう…クロス君とノアちゃんの協力で完成した『複合型カートリッジシステム』の事だよ」

マリーの言葉にクロスとノアを見るなのはとフェイト、２人の顔は険しくなっている。

「知っての通りカートリッジシステムはミッド式とは相性が悪くてベルカ式でも扱いが難しい
システムだったんだけど、これを太極の書にあったアルハザードの技術を応用して
ミッド式でもベルカ式でも扱えるようにした、全く新しいカートリッジシステムなんだよ」
「ただし、扱いが難しい事には変わらないけどね、母さんとゼスト隊長、それにティーダさんの
デバイスに組み込んでデータを集めてようやく実戦向きになったばかりのシステムなんだ」
「だから、実戦経験の少ないなのはちゃんとフェイトちゃんにはまだ早いんだよ…
でもレイジングハート達はその力を望んでる、でないとシグナム達に立ちうち出来ないから」

クロスとノアに続いてマリーがなのはとフェイトをまっすぐに捉える。

「２人はレイジングハートとバルデッシュの覚悟と想いを受け止める事が出来る？

制御が今まで以上に難しくなるけど、その分訓練すれば各段に性能が向上するよ」

「…やります！制御してみせます！」

「制御出来ないのなら出来るように特訓します！」

それを聞いてマリー達はにっこりとほほ笑んだ。

「よろしい♪それじゃあ早速レイジングハートとバルデッシュの改修に取り掛かるわね。

完成まではまだしばらくかかりそう、なのはちゃんが全治する頃には出来ると思うよ」

「「はい、宜しくお願いします」

その後フェイトは面接があると言う事でクロノに連れられとある一室へと案内された。

クロスやなのはとアルフやユーノも一緒だ。

ノアはマリーの手伝いをするとの事でしばらくはメンテナンスルームにかかり付けになるらしい。

ユニゾンが必要な時はすぐに連絡して現地に跳ぶようにはしてある。

部屋に入ると上級階級の制服に身を包んだ初老の老人が待っていた。

「お久しぶりです、グレアム提督」

「あぁ、元気そうだなクロノ」

「皆こちらがギル・グレアム提督。今回フェイトの保護観察責任者になる人だ。」

見た目は初老の老人ながらもしっかりとした身のこなしや優しくも鋭い眼差しに

なのはとフェイトは緊張している、クロスも初対面の為少し緊張を隠せないようだ。

（この人も俺の事を色々知っている上層部の1人…クロノの師匠とはいえなんかきな臭いな…
警戒はしておこう）

そんなクロスの心のうちを読んだのかグレアムが

「あぁ、そんなに警戒しないでも構わない…とはいえ無理もないか。君達も楽にしたまえ」

グレアムの優しい微笑みに少しは緊張が解れたのかなのはとフェイトは軽く深呼吸をした。
ただし、クロスは力を抜いたがあまり警戒は解いていないようだ。
その様子に溜息をこぼしつつクロノは話を続けた。

フェイトへの面接はあっけなかった。
人が良いのかそれともクロノやリンディから話は聞いているのかは分からないが
友を裏切らない、それだけを約束させて終わってしまった。
そして、グレアムが実は地球のイギリス出身だと言う話をしている時にドアが開き

「お父様、プレシア・テスタロッサを連れてきました…あっ、クロすけ～♪♪」

プレシアを連れたネコミミ娘が入ったかと思うと一瞬でクロノに跳び付いた。
あまりに一瞬の出来事だった為エイミィとグレアム以外みんな唖然

としている。

「母さん！……あ、あれ？」

「…み、見えなかった。なんて素早い」

「へぇ～…ほぉ～♪」

「へ、変な所に感心するなクロス！そしてアルフはなんだその笑みは！

というか、離してくれロッテ！」

「い～や～だぁ～…嬉しんだもん♪」

「は～なせ～～！！」

「はいはい、じゃれあうのはそれくらいにして…先に用件済ませるわよ」

もう1人のネコミミ娘がクロノを抱き締めて襲っているロッテと呼ばれたネコミミ娘を引き離す。

そして、未だに唖然としているクロス達へそれぞれ自己紹介をした。

「私がリーゼアリア、そしてこのおてんばがリーゼロッテ。お父様の使い魔で…素体は猫よ」

「よろしくねぇ～特にそっちのネズミっぽい子♪」

「あぅ・・・よ、よろしく」

僕は変身魔法でフェレットになるだけなのに…とブツブツ言ってるユーノをなのはが慰めた。

その騒動を軽くスルーするかのようにプレシアがグレアムの傍に行き一礼した。

「お久しぶりです、グレアム提督…」

「あぁ、本当に久しぶりだねプレシア…まさかこんな形で再会するとはな」

プレシアとグレアムの挨拶にクロノやエイミィも含めた一同が驚いた。

「えっ！母さん、グレアム提督と知り合いなの！？」

「えぇ、昔ちょっとね…」

気まずそうに微笑むプレシア。

「まぁ、その話はまた今度という事で…今君の娘さんにも話したんだが

私は立場上保護責任者だが君達の行動に制限をかけるつもりはない。

あの時も言ったがもう後悔のしない生き方をしてくれ」

「はい…ありがとうございます」

プレシアは訳ありな2人を珍しそうに見るクロス達の視線を逸らして席へと座った。

「それで提督、もうお聞きになっているとは思いますが」

「あぁ、闇の書がまた動き出したのだな…すまない、私のミスで君達にまで

重荷を背負わせてしまった」

「そんな事ありません！もう御自分を責めないで下さい…あれは事故なんです」

そのやりとりに困惑するクロス達にそっとエイミィが耳打ちした。

「グレアム提督は…クロノ君のお父さん、クライド艦長が亡くなった時の指揮官だったんだよ」

「「「っ！？」」」

「僕も母さんも…もう乗り越えた事です、そして今度こそ終止符を打ちます」
「うむ…それならいいが、何か策がありそうだな？」
「一つ気になる情報があります。まだ確定的ではないので詳しくは話せませんが…
その情報を確認するためにも提督にお願いがあります」

闇の書が昔夜天の書とよばれアルハザードの遺産の１つであると言う事は
詳しい事が判明するまであの場に居た者以外への口外をリンディが禁じていた。

「なんだね？アリア達の駐屯地への派遣なら今は仕事があって手が話せない状況なのだが」
「いえ…アリア達に無限書庫での調べ物の手伝いをお願いしたいんです」
「無限書庫か…確かにあそこなら闇の書に関する我々の知らない事があるだろう…だが」
「調べ物はチーム単位で行う事も知っています、ですので今回は彼をメインにしようと思いまして」
「彼を？」

クロノがユーノの方へと向いた、そして興味津々にアリア達もユーノを凝視し
ユーノは緊張してしまった。

「彼は歴史調査などを家業とするスクライア家の息子ですから早く検索が出来るはず

それとプレシアも今回の作業の補佐に加わります」
「はい、検索魔法もいくつか持っています…ですから整理などの手伝いだけで大丈夫です」
「調べ物なら研究者の私にとって得意分野、でもいいの？私なんかをそんな作業に加えて」

保護観察中とはいえフェイトと違い執行猶予中のプレシアに無限書庫という重要な場所での作業は普通任せられないのだが…

「心配ない、君達の預かりであるゼスト隊からのお墨付きもある。それにもし何かあれば
クロスが対処する事になっている。今のクロスならプレシアにも負けない…ってね」
「いや、それもどうかと思うんだげど…相変わらず無茶な要求する人達だ」

クロスは今初めて聞いた重大な事に溜息をついた。
隣ではフェイトとなのはが顔を見合わせ笑い合っている。
なんだかんだとプレシアを信用して重要な作業に関わらせることが嬉しいのだ。

「…わかった、2人の仕事の合間を見て手伝わせよう、いいかな2人とも」
「お父様と愛弟子の頼みとあれば…」
「聞かないわけにはいかないね…で、作業終わったらこの子食べていい？♪」

眼を輝かせて歯をぎらつかせるアリアに思わずユーノは席から転げ落ちてしまった。

「だ、ダメですよ！ユーノ君は食べちゃ！」
「そうそう、食あたりなんかじゃ収まらないからね」
「ちょっとクロス！それはどういう意味だよ！」
「あははは♪」

そのやりとりで部屋がみんなの笑いで満ち溢れた。

その後、早速リーゼ姉妹に連れられユーノとプレシアは無限書庫へと向かい
クロス達も司令部の設置準備を手伝おうと部屋を後にした。
残ったのはグレアム提督ただ1人…

「クロスロード・ナカジマ…太極の書…彼が計画の障害にならなければいいが…」

その呟きはだれにも聞こえる事はなかった。

続く

第２５話　「謎の守護騎士と２人の猫娘」（後書き）

カガヤ：「はい、腹黒提督と外道姉妹の登場です」

クロス：「酷い言いようだな…」

ノア：「作者は原作でかなりむかついたらしいからねぇ」

カガヤ：「ふっふっふっ・・・原作では生易しい罰というか罰らしい罰はなかったけどその分ここでは」

クロス：「お前の方が黒いっての…」

ノア：「ってか前からだけど原作の展開省いたりが多いね」

カガヤ：「読んで省き方が中途半端な気がするけど、一応重要な事は簡単に書いてるつもりです」

クロス：「また指摘されるぞ～？」

カガヤ：「むしろその方が書きやすくていいんだけどねぇ…良い点も悪い点も指摘されてないからこのままでいいかな～とも想ったり」

ノア：「…駄作者へカツいれる為にも感想やら何かあればバンバン言っちゃってください」

カガヤ：「更新速度は遅めになるかもしれませんがよろしくおねがいしますペコリ（ｏ＿＿）ｏ）」

ＰＶ１０万ユニーク１万突破記念　嘘予告～輝光戦記外伝　仮面ライダーデュエル

記念作品を考えてたらこんなの出来ました（笑）

気が付くとクロスとノアは真っ白な空間にいた。
なぜか魔法が使えずデバイスも使えない状態の2人の前に1人の男が現れる。

「これから行く世界では魔法は一切使えない、これを使え」（謎の男）

渡されたのは白いダブルドライバー…デュエルドライバーと8本のデュエルメモリ。

「あんたは一体何者だ！」（クロス）

「通りすがりの仮面ライダーだ…覚えておけ」（謎の男、門矢　士）

そして、2人はWの世界へ

「翔太郎、あそこに依頼人が！」（仮面ライダーW・フィリップ）

「何！？…っくっそう！依頼人が！」（仮面ライダーW・左翔太郎）

「ふっふっふっ…これで形勢逆転だぞ！」（トータスドーパント）

「さて、それはどうかな？」（クロス）

「なんだ、貴様は！」（ウルフドーパント）

「マスター、準備はいいですか？」（ノア）

「あぁ、あいつに教えてやろうぜ…俺達が誰かをな！」（クロス）

『バーニング』（ノアの持つガイアメモリ音声）

『ナイト』（クロスの持つガイアメモリ音声）

「「変身！」」（クロス・ノア）

「俺の名は仮面ライダーデュエル！…決闘、開始（デュエル、スタート）」（デュエル）

「デュエルドライバーに未知のガイアメモリ…実に興味深い」（フィリップ）

「ともかく、ガキの遊びはこれまでにするんだ。いいな？」（翔太郎）

「助けられた相手を子供扱い？見た目で判断するなんて…流石は半熟だ」（クロス）

衝突しながらも協力しあうWとデュエル。

「馬鹿な、トリガーフルバーストが避けらた!?」（W）

「はっは～!俺は音よりも速いぞ!」（ソニックドーパント）

「だったら、雷より速く動けるか?」（デュエル）

『ライトニング』『グップラー』（ドライバーの音声）

仮面ライダーとの死闘。

「貴様は井坂の手下か!奴はどこにいるぅ!!!」（仮面ライダーアクセル）

『スチーム』（アクセルドライバーの音声）

「…少し、頭冷やそうか」（ノア）

「いや、なのはのパクリだろそれ」（クロス）

『フロスト』『ガンナー』（ドライバーの音声）

「お前の力、試させてもらうぞ」（スカイライダー）

「飛べるのがお前だけと思うなよ!」（クロス）

『ストーム』『グラップラー』（ドライバーの音声）

徐々に集う仲間達

「あ、あなたは一体？」（ノア）

「２０００の技を持つ男、五代雄介です」（五代雄介）

「えっ？俺と同じ名前？」（ユウスケ）

「僕の名前は……うわっ！？…へっ、久しぶりに俺、参上！」（野上良太郎ｗｉｔｈモモタロス）

明かされる世界の危機

「このままじゃ次元の壁が破壊され、世界は無に消えてしまう…」（門矢　士）

「それを防ぐために彼らを呼んだんでしょ、士」（海東大樹）

暗躍する敵

「世界を征服するのは我ら、ギガショッカーだ！」（謎の紳士）

「イッー！」（戦闘員達）

「協力してもらいますよ、異世界の科学者さん」（井坂）

「ふふっ、この世界なら管理局の目を気にせずに思う存分研究が出来る」（白衣の男）

禁断のメモリ

「仕方ない…４本目だ！」（クロス）

「マスター、そのメモリは危険すぎます！」（ノア）

「でも、やるしかない！」（クロス）

『バーサーカー』（メモリの音声）

今並び立つライダー達

【クウガアルティメットフォーム＆ライジングアルティメットフォーム】

「「仮面ライダークウガ！」」（雄介＆ユウスケ）

【アギトシャイニングフォーム】

「「アギト！」」（翔一＆ショウイチ）

【龍騎サバイブ】

「「龍騎！」」（真司＆シンジ）

【ブレイドキングフォーム】
「「ブレイド！」」（一真&カズマ）

【ファイズブラスターフォーム】
「「ファイズ！」」（巧&タクミ）

【装甲響鬼】
「「響鬼！」」（響鬼&アスム）

【カブトハイパーフォーム】
「「カブト」」（総司&ソウジ）

【電王超クライマックスフォーム】
「電王！……って俺だけ1人かよ！！」（モモタロス）
「まぁまぁ、僕らもいるんだし」（良太郎）
「そうそう、正確には6人だね」（ウラタロス）
「ふむ、光栄に思うがいい」（ジーク）
「一番多いんや、しっかり胸張ってきばるんやで」（キンタロス）
「胸張る…あ、僕が目立つ～♪」（リュウタロス）
「だぁ～もううるせぇ～！！」（モモタロス）

【キバエンペラーフォーム】
「「キバ！」」（渡&ワタル）

【ディケイドコンプリートフォーム】
「ディケイド！」（士）

【ディエンドコンプリートフォーム】
「ディエンド！」（大樹）

【Wサイクロンジョーカーエキストリーム】
「「ダブル！」」（翔太郎＆フィリップ）

【デュエルマテリアルブレイブ】
「「デュエル！」」（クロス＆ノア）

今究極のライダー大戦がはじまる！

輝光戦記外伝　仮面ライダーデュエル

近日公開予定……はないかもよ。

ライダー紹介

仮面ライダーデュエル

魔法もデバイスも一切使えない世界へ飛ばれたクロスとノアが謎の男、門矢士に
渡されたデュエルドライバーとデュエルメモリで変身したライダー
左半身がエレメントサイドでノアのメモリに対応して
右半身がクラスサイドでクロスのメモリに対応。
エレメントサイドで炎や氷などの属性を決定、クラスサイドで騎士や闘士などの身体能力や武器を決定。

決め台詞は「決闘、開始！（デュエル・スタート）」

デュエルドライバー

ダブルドライバーと同じ形で色が白で統一されたドライバー
ラファールとミラノールが変化した姿。

デュエルメモリ

地球の記憶で出来たガイアメモリとは違い、クロスとノアの力を元に結晶化したメモリ
全部で８本ある。

エレメントメモリ

『バーニング』　灼熱のメモリ、ヒートやスチーム以上の炎属性のメモリ。
『フロスト』　凍結のメモリ、絶対零度に近い氷属性のメモリ。
『ライトニング』　雷電のメモリ、雷並のスピードが出せる雷属性のメモリ。
『ストーム』　暴風のメモリ、飛行能力を得れる風属性のメモリ。

クラスメモリ

『ナイト』　剣士のメモリ、剣を主体にした防御力があがるメモリ。
『グラップラー』　闘士のメモリ、格闘戦を主体にした速度があがるメモリ。
『ガンナー』　銃士のメモリ、銃を主体にしたエレメントメモリ効果があがるメモリ。
『バーサーカー』　狂戦士のメモリ、身体能力が数段上がるがファング以上に凶暴化するメモリ。

ファイナルディスク
太極の書、光天の書が変化したディスクで全てのデュエルメモリを装着する事で
「マテリアルブレイブ（魔導勇者）」になれる。
Wの世界にきた当初はまだ完成していなかった。
元の世界でのアルガスアーマーに近い姿になれ、アルガス魔法の一部が使用可能になる。

PV10万ユニーク1万突破記念　嘘予告～輝光戦記外伝　仮面ライダーデュエル

クロス：「しばらく更新しないと思ったらこんなものを…」

ノア：「さっさと本編書きなさい！」

カガヤ：「何か記念書こうと考えてNGシーンは前回やったからと…」

クロス：「で、仮面ライダーと遊戯王見てたら思いついた…」

カガヤ：「決め台詞って難しいね♪」

ノア：「良いから本編を～！！！」

カガヤ：「あ、2、3話は八神家サイドの話になるから…君ら出番全然ないよ？」

クロス、ノア：「なんですとー！！？」

カガヤ：「ちなみに要望があればこれ本編にいれる・・・かも（笑）」

クロス：「…要望も感想も何も癖に」

カガヤ：「はぶあぁ！！（瀕死）」

※

クロス：「ってかキバの存在忘れてたろ？」

カガヤ：「♪～（・ε・；）」

第２６話　「はやてと守護騎士達？」（前書き）

２、３話ほど八神家サイドの話で

第２６話　「はやてと守護騎士達？」

Ｓｉｄｅ　はやて

朝の日差しが眩しい…
ゆっくりと目を開けるとカーテンの隙間からちょうど太陽が昇ってくるのが見える。
さて、布団のぬくもりが恋しいけど、今日も一日のスタートや♪

私、八神はやての朝は早い。
そんなに早起きを心がけているつもりはない。
けど、朝早く起きて朝食の支度をするのが楽しみになってきたのはここ数カ月の事。
それまでは～なんとなく早起きしていたけど、特に意味はない。
今は違う、一緒に御飯の支度して一緒に食べてくれる家族が出来た。
生まれつき足が不自由な上に両親がいない私はこの広い家に１人で住んでいた。
たまに様子を見に来てくれたりする人や遠い国にいる親戚が面倒見てくれているから
特に不自由はしなかったけど、でもやっぱり寂しかった…
そんな私に素敵な出会いがあった…あれは今年の誕生日を迎えた瞬間の夜…

あの日、いつも通り買った本を真夜中までベッドで読んでいた私は当然本棚から紫色に輝く本が出てきたかと思うと５人の見知らぬ人達が現れて…
私はそのまま気絶…だってすごくびっくりしたんやから仕方ないで！
次に眼が覚めたらいつも通ってる病院のベッドの上で…
すぐそばでは先生と黒い薄着の男女が睨みあい…

あれはほんまに怖かったわ、無言の言い争いというのを初体験？
その後うまくその場を乗り切って家に戻ってから皆の名前とか聞いて闇の書とかの事も全部聞いたんやけど…でも話難しくてよう分からんかったわ。
とりあえず、みんなまとめて守護騎士と呼ばれていて
ピンクの髪でポニーテールがよく似合う纏め役のお姉さん、シグナム。
クリーム色のショートヘアな優しい声のお姉さん、シャマル。
赤い髪のちょっとツンツンした態度を取る事があるけど根はやさしい女の子、ヴィータ。
銀髪で無口だけど犬の姿にもなれるお兄さんが、ザフィーラ。
そして…ちょっと掴みどころのない不思議お兄さんが、レギナス。
以上５人が私の新しい家族になりました、Ｏ（≧▽≦）Ｏ　ワーイ♪
というわけで回想は一端終えて朝ご飯の支度支度っと。
６人分の朝食ともなると結構時間かかるんよ…でもその時間が幸せの時間なんやけどな♪

リビングに出るとソファーでシグナムと犬形態のザフィーラが眠っているのが見えた。
気持ちよさそうやな～…でもちゃんとベッドで寝ないとあかんで？
２人に毛布をかけてキッチンへ
昨日は洋風だったから今日は和風で…肉じゃがにしよか♪
調理をしていると廊下からどたばたとした足音が、これはシャマルや♪

「すみません、寝坊しちゃいました！！」

慌ててエプロンに着替えながらシャマルが飛び込んできた、そんな

に急がんでもええよ？

「気にせんでもええよ、ゆっくり休んでても」
「いえ、そういうわけにはいきません！」
「んっ…主はやて、おはようございます」
「……」

シャマルの慌てた声にシグナムとザフィーラも眼を覚ましたみたいや。

「ふあぁ～……おはよ～」
「おっ、ねぼすけさんの登場さ。おはようヴィータ」
「酷い顔だぞ…先に顔洗った方がいいぞ」

ヴィータも眠たそうに起きてきてこれで残りはあと1人。

「おはようございます…もうみんな起きたのか」

玄関からレギナスがジャージ姿で入ってきた。
うーん、なんでかレギナスはジャージ姿がよう似合うなぁ♪

「おはよう、レギナス。今日も早朝ランニングか」
「あぁ、毎日の日課だからな」

これで八神家全員集合や♪

Ｓｉｄｅ　シグナム

…少し寝過ぎてしまったようだ。

昨夜の戦闘での疲れがまだとれていないのだろうか。
私は気付かれないようにそっとわき腹を撫でる。
そこにはうっすらと2本の傷痕がまだ残っている。
1本はフェイト・テスタロッサ、もう1本はクロスロード・ナカジマからの斬撃だ。
2本ともいい太刀筋をしている、よほど良い師と戦いに恵まれたのだろう。
特にナカジマの斬撃は深く治りが遅い、私とヴィータとザフィーラを相手にしながらも
この私にここまでの一撃を加えられるとは…ともかく2人とも楽に倒せる相手ではない。
いつかなんの縛りのない時に決着をつけたいものだ…
そして、あの融合騎ノア…と言ったか、なぜだろう彼女の涙を見ると胸が痛くなる。
まるで…泣かせてはいけない、忘れてはいけない存在のような気がして

「……」
「ん、どうしたシグナム？」
「いや、昨日の魔道師達の事を考えていた…あの融合騎の事もな」
「確かに、俺達の事を知っていた…あの様子では誰かに聞いたら管理局のデータベースやらで
知ったようにも見えなかったな」
「ザフィーラ…夜天の書という言葉に聞き覚えはあるか？」
「ない…と言いたいが、その響きを聞くと少し頭に違和感を覚える」
「……そうか、いずれにせよ我らのやることに変わりはないがな」
「…うむ」

ザフィーラは顔を洗う為に人型となり洗面所へと向かった。
再びあの魔道師達の事を考える、彼らとは再び対峙するだろう…

その時に少し話を聞くのもいいかもしれない。
ふっ、何を考えているのだ。彼らは管理局の人間。
こちらの事情を話したところで主はやてに危害を加えない保証はない…
だが、あのナカジマとノアの事を考えると…信用してもいい気がしてくるから不思議だ。
そこまで考えて自分に驚く、管理局の人間を信用しようとする事にではなく。
そんな考え自体が浮かぶ自分自身に驚いた。

「我らは…変わったな」
「いきなりどうしたシグナム」

そう言いながらレギナスが隣に座った。
…ジャージにタオルを首に巻きスポーツドリンクを持つ姿で。
…一番変わったのはこいつかもしれないな。

「いや、我らがここでの生活をして早半年…随分と我らも変わったなと思ってな」
「確かに…このようにゆったりとした時間を過ごした事など、なかっただろう」

レギナスと2人して台所で調理中の主はやてを見る。
車椅子の生活はさぞや不便で家族のいない暮らしはさぞや寂しかったであろう主はやて。
もっとも車椅子の生活になったのは闇の書が原因なのだが…
そう思うと複雑な気分になる。

「我らと出会わなければまっとうな生活だっただろうに…」
「あぁ、闇の書の浸食はある程度抑えられてるとは言え…いつまで

続くかは分からない」
「うむ、急がねばならない」

「はやてちゃん、味見してもらっていいですか？」
「ん、ええよシャマル……ゴブッ！」
「は、はやて！シャマルお前どんな味付けしたんだよ！！」
「え？えっ！？ちゃんと教わった通りに入れただけよ？」
「シャマル…ヴィータ・・・うち・・・もう、ゴールしてもええよな？」
「はやてちゃん、それ思いっきり死亡フラグよ！」
「医療班っ！なにやってんだよッ！早くしてくれよ！はやてが死んじまうよ！」
「ヴィータちゃんも落ちついて！！」

その様子を見て溜息一つはき苦笑しあって主はやての救出に向かう。
……本当に変わったな。

Ｓｉｄｅ　ヴィータ

はやてがシャマルの料理で逝きかけてようやく立ち直った。
ったく…守護騎士の手料理で昇天する主、なんてシャレになんないっつーの。
シャマルはあれから謝罪しっぱなしの反省しまくりだ。
私らにツッコム前に治療すれば良かったのに、とは言わないでおこう、トドメになりそうだ。

そして、今はやての手料理を皆で満喫しているところだ。
はやての料理はすんごくうめぇ！今まで食べてきた中でもトップ３に入るぞ！

でもなんでだろうな…こうやってみんなで食卓を囲んで食べているとなぜか…あのノアっていう青チビが頭に浮かんでくる。
私らの事色々知ってるみたいだったけど…何者なんだろうな。
まるで…家族に忘れられた捨て子みたいな顔しやがって…
あぁ～思い出しただけでなんか腹立つ！何に腹立ってるかわかんねぇのがまた腹立つ！

「ヴィ、ヴィータちゃん？そんなに急いで食べなくてもおかわりまだあるからね？」
「ハグハグ・・・モグモグ……ウグッ！！？」
「全く…何をしているんだ何を」

レギナスに水を渡され、シャマルに背中を撫でてもらってようやく一息付けた。
はやてとシグナムがクスクスと笑ってる…なんか悔しい
…これもはやての料理が美味しいせいだ！

「ゆっくりでええよ、料理は逃げたりせえへんからな♪」

シグナム風に言うなら…不覚、だな。

食事が終わって皆で風呂に入って…はやてが寝た。
はやてを起こさないように静かにシグナム達と外へと出る。
今日も蒐集しないと…もう少しで、もう少しで完成するんだ！
そしたらはやての足もきっと治る…そう信じてる。

とあるビルの屋上に集まり今日の予定を確認する。
管理局に見つかった以上これまで以上に慎重にいかないとな…

「そもそも、ヴィータ。お前が軽率に民間人を狙うのが原因なんだ

ぞ？」
「う、うっせぇ！魔力が異常に高くて、見た目が管理局と繋がりないと思ったんだよ！」

レギナスの指摘にムキになって怒鳴り返しちまった…
私らは蒐集する時に２つ決めごとをした。

１つ、蒐集対象は魔導生物に限定する。

これはレギナスの意見だけど、魔導師から蒐集すると管理局に見つかり騒ぎが大きくなって
すぐに身動きがとりづらくなるから…まどろっこしいけどやりにくくなるよりはマシか。
それに魔導生物とはいえ色々な次元世界の神獣レベルの生物なら結構ページを稼げるし。
でも、私があの白い魔導師を襲ったせいで管理局にバレてしまった…
今度からはもっと慎重に行こう、管理局の魔導師なんかに負けるわけないけど
昨日みたく面倒な奴がいたら困るしな…

１つ、命までは取らない。

これはみんなの総意だ。私らははやてとの約束を１つ破ってる。
はやては闇の書の完成を望んでいなかった。
ただ一緒に居てくれるだけでいい…そう言われて無性にうれしくなった事を覚えている。
でも…闇の書を完成させないとはやては死んでしまう…それは絶対に嫌だ！
だから、一度だけ騎士としての誓いを破った。
その代わり…と言えばただの自己満足だけど、相手が魔導師であれ

魔導生物であれ
命は取らない、取るのはリンカーコアだけ。
はやての未来を血で汚したくないから…

以上2点…それが私らのきめたルール…でも邪魔する者は容赦なくぶっ潰す！
全ては…はやてのためなんだ……
その想いを胸に秘めて…私達は今日も世界を翔ける…

でも…なんでだろう。
昨日からおかしい……
あの赤い魔導師の融合騎の泣き顔が…頭から離れねぇ…

それに、その話をする時のレギナスの顔が…怖い。

続く

第２６話　「はやてと守護騎士達？」（後書き）

カガヤ：「しばらくはクロス達お休みのため今回はこの方々とあとがきします」

シグナム：「…シグナムだ」

ザフィーラ：「…ザフィーラ」

カガヤ：「適当に選んだ守護騎士ペアです（爆）」

シグナム：「正直我らが選ばれた理由はどうでもいいのだが…そう言えば作者、今回遅れた原因はなんだ？」

ザフィーラ：「嘘予告抜かせば一週間ほど経っているぞ」

カガヤ：「……はやての口調が難しい」

シグナム：「作者は関西弁好きなのではなかったか？」

カガヤ：「はやては京都弁っぽい関西弁だから色々書いてて違和感沸いたりしたんだよ。他の作者様のはやてを見て何回も書き直したし」

ザフィーラ：「それがこれか…」

カガヤ：「いや、まぁ…これでも変な所あればどんどん指摘して下さい。もちろん口調以外でも」

シグナム：「次回あたりでレギナスやシャマルやザフィーラの独白がはいるのか？」

カガヤ：「少し八神家の普通の日常を書こうかと…オリキャラレギナスの独白は次回あたりで、レギナスもなかなかに謎なキャラです」

シグナム：「その謎な部分がうまく表現出来るとは思えないが？」

カガヤ：「うぐっ・・・精進します（汗）」

第２７話　「はやてと守護騎士達？」（前書き）

軽いスランプです～

第２７話　「はやてと守護騎士達？」

Ｓｉｄｅ　シャマル

『こちらシャマル、目標を発見したわ。今は眠っているみたいよ』
『分かった、すぐに向かう』

とある次元世界で今私達は神獣・ヴァルファーレを探していました。
ヴァルヴァーレは大きな鳥のような外見をして空の神とも呼ばれて
いるそうです。
現地の伝承でしか情報は得られなかったけど、神と呼ばれる所以が
分かりました。
眠っているのにこんなにも魔力を感じるなんて…
以前私達は様々な他の世界で神と呼ばれる生物と対峙してきました。
そのどれもが大きな魔力を持っていて闇の書のページもかなり増や
す事が出来ました。
もちろん、命までは取っていませんよ？
いくらはやてちゃんの為とはいえ無駄に命を取る事は…やっぱりダ
メですから。
…昔の私達ならなりふり構わなかったのに…本当に変わりました。

はやてちゃんに召喚されてからの毎日は私達に安らぎと平穏を与え
てくれました。
お洋服を見立ててもらったり、甲冑も今まで見たいな戦う為だけの
ものではなく
どこか童話を思い起こさせるデザインになりました。
ヴィータが帽子にあの個性的なウサギのデザインをいれて欲しいと
言った時の顔ったら♪
一緒に銭湯というものにも行ったりして楽しかったなぁ。

ただ…私やシグナムの胸を見る目つきが少し怖かったけど…少し鳥肌が立っちゃいました。

そうこうしておるうちにシグナム達がやってきました。

「あれがヴァルファーレか…でっかい鳥だなぁ」

「あぁ、だが感じる魔力は半端ない、これなら申し分ないだろう」

ヴィータが珍しいそうにヴァルファーレを見てレギナスが魔力を図っています。

私達も今までに何体もの魔物を相手にした事はありますけどでもこれほど強い魔力を持った魔物は早々いません、さすがは神獣と呼ばれる事はあります。

あっ、ヴァルファーレが目を覚ました、私達に気付いたようです。

「むっ！いかん、散れ！」

シグナムの声で私達は一斉に散らばりました。

そして直後私達のいた場所へビームが放たれ大きなクレーターが出来ました。

見上げるとヴァルファーレが羽ばたきながら口から閃光を出してきています。

チャージもなしであれほどの威力が出せるなんて…

「紫電一閃！」「テートリヒ・シュラーク！」

ヴァルファーレはシグナムとヴィータの同時攻撃を難なくかわして鋭い爪で2人に襲いかかります。

「させるか、牙狼一進！」

そこに横からレギナスの鋭い突きが、しかしそれすらも翼を羽ばたかせかわしてしまい。
逆に翼で叩きつけられてしまいました。

「強えぇ…」
「けどあの光線以外に攻撃力はあまりなさそうだな」

シグナムとヴィータの言葉に反応するかのようにヴァルファーレがまた光線を発射してきました。
しかもただの光線ではなくいくつもの小さい光線が曲線を描きながら私達を追尾してきます。

『シュワルベフリーゲン』

アイゼンが撃ちだした鉄球が光線を次々に相殺。

「陣風！」「飛空突閃！」

そして、ヴァルファーレの上に周りこんだシグナムの斬撃が生み出す衝撃波と
下からのレギナスの突きが生み出す衝撃波の挟み打ちが決まりました。

「だいぶページ稼げそうだな」
「でも思ったより苦戦したわね、ザフィーラも連れてくればよかったかしら」
「いや、管理局に我らの存在がバレた以上、主に護衛は1人ついていた方がいいだろう」

気絶したヴァルファーレからシグナムが蒐集しています。
私の言葉にレギナスが答えます。
ザフィーラも来る予定でしたがレギナスの言った通り
万が一管理局に主はやての事がバレた時の事を考え、今後は蒐集に赴く際には
誰か1人が主はやての護衛に付く事にしたんです。
もちろん、主はやてに蒐集を勘づかれないための処置でもあります。
いつもレギナスの先見には驚かされますね。

Ｓｉｄｅ　ザフィーラ

時刻は草木も眠る丑三つ時…今この家には主はやてと私しかいない。
主はやては自分の部屋で就寝中、結界も張ってあるので異変があればすぐに分かる。
シグナム達は蒐集に出かけている…なら私は一体誰に話しかけているのだろうな？
管理局はまだ我らの存在に気付いた程度で主はやての存在までは嗅ぎつけていないだろう。
だが、油断はしない…闇の書を狙う輩は管理局だけではない。
過去闇の書を得るために主をつけ狙う連中は大勢いた。
愚かな事だ、闇の書は主以外には使用できないというのに、主を脅して意のままに操る事も不可能だ。
そのために我ら守護騎士はいる…
しかし…ふとシグナムに問われた事を思い出す。

『ザフィーラ…夜天の書という言葉に聞き覚えはあるか？』

確か、ノアとかいう融合騎がそのような名前で闇の書を呼んでいた

な。
…あの融合騎の顔を見た途端に激しい違和感に襲われたのは事実。
そして、夜天の書…その名に覚えがある気がする、が考えると頭痛がしてくる。
まるでその情報が封印されているかのように。
ヴィータやシャマル、レギナスにも聞いてみたが3人とも違和感を覚えているらしい。
特にレギナスは『光天の書』という単語を聞くと頭を軽く押さえていた。
光天の書…何か闇の書と関係があるのだろうか…

考え事にふけっていると不意に背後で主の気配を感じた。

「なんやザフィーラ、起きとったんやな」
「主はやて…今日は月が綺麗なものでつい見上げていました」

我ながら柄にもない、と苦笑する。
ヴィータがいれば今のセリフに大いに笑っているだろう。

「ヴィータがおらんようなんやけど、どこに行ったかわかる?」

ヴィータはいつも主はやてと一緒に寝ている。
ふと目が覚めてヴィータがいなかったので起きてきたのだろう。
今蒐集中に行っているとは絶対に言えない、さて…どうするか。

「先ほど寝つけないので散歩に行くと行って出て行きましたが」

とっさに無難な嘘をつく、ヴィータには念話でつじつまを合わせておかねば

「そっかぁ、真夜中に女の子1人で散歩は危ないなぁ…」
「レギナスも一緒なので心配はないかと」
「レギナスも?なんや二人で月夜のデートかいな♪」

くすくすっと小悪魔的な笑みを浮かべる主を見て心の中で2人に謝っておく。
そこへシグナム達からもうすぐ戻ると念話が
急ぎ今の状況を説明する…一芝居打ってもらおうか
早めに打たねば…主はやての誤解が暴走しそうだ。

「もうそろそろ戻ってくる頃でしょう」

ガチャ

「…は、はやて!起きてたの?」
「どうしました?怖い夢でも見ましたか?」
偶然を装ってレギナスとヴィータが玄関から戻ってくる。
シグナムとシャマルは2階の窓から部屋に戻ったようだ。

「いやいや、なんでもあらへんよ~ザフィーラと月夜のお話や♪2人はどうやったんや?」

小悪魔な笑みを浮かべて主はやてが問いかけてくる。
その後ろから、すまない。と私は頭を下げた。

「べ、別にあたしらはただの散歩してただけだ」
「ヴィータが怖い夢を見て眠れなくなったと言うので…少し気分転換しようと」
「こらレギナス!誰もそんな事言ってないだろ!」
「なるほど~それでわざと真夜中に散歩する事で怖さを紛らわせた

…ショック療法やな？」
「は、はやて～こいつの嘘を信じないでくれよ～」

顔を真っ赤にして必死に否定するヴィータ。
うむ、おかげでうまく話を逸らせたようだ、ヴィータが私とレギナスを睨みつけたが。
軽く無視しておこう。

レギナスに連れられ主はやてが部屋へと戻って行った。
ヴィータはジュース飲んでから寝ると言ってリビングにとどまった。

「それで、今日の首尾はどうだったんだ？」
「上々！このペースならあと少しで闇の書が完成する！」
「その割には浮かない顔だな？」
「……あぁ、なんかこうしっくりこねぇんだ。うまく行ってる筈なのにこのままじゃダメだ！
　って心のどこかで叫んでるような…」
「やはり気になるのか…あの融合騎の言葉が」
「あたしらのやる事に変わりはねぇ！…変わりないけど…けどなんだろうなこの胸騒ぎは」
「考えても答えが出ない以上、気に留める程度にしておいた方がいい…さもなくば失敗するぞ？」
「分かってるよ、どんなことがあってもあたしらは必ずはやてを救って見せるんだ！」

そう息まいてヴィータは寝室へと向かった。
胸騒ぎか……過去幾度も戦争に巻き込まれたりなど危険な目にあってはきたが
こんなにも胸騒ぎがするのは初めてだ。
何事もなければいいのだが……

空を見上げると満月が厚い雲に覆われて辺りが暗くなっていった。
まるで今の我らの心境を示すかのように…

続く

第27話　「はやてと守護騎士達？」（後書き）

カガヤ：「う～ん」

クロス：「更新速度が落ちてるし話は短いし…どうした？」

ノア：「食当たりでもしたの？」

カガヤ：「そりゃ親の話だろ！…いや、書く事は浮かんでるんだけど…どうにも書く気力がな…自分の書いてる物に自信がなくなってきてるというか」

クロス：「感想がないからか？」

カガヤ：「うん、自分で書いてて良い点も悪い点も言われない事が良い事なのか悪い事なのか…」

ノア：「お気に入り登録も結構されてるから最低限の評価はされてるんじゃない？」

カガヤ：「それはそうだけど…悪い所は指摘されなきゃわからない性質だからなぁ」

クロス：「まぁ最低限誤字や描写不足がなければいいんじゃないか？難しく考えるなよ」

カガヤ：「本当に俺のお気に入り作品達の神作者様達みたいな文才が欲しい…」

ノア：「えぇ～軽く凹んでる作者はほおっておいて」

クロス：「良い点悪い点なんでもいいので感想があれば励みになるので何かあればよろしくおねがいします」

第２８話　「ぴっかぴかの●年生♪」（前書き）

段々この小説の文面が固定しなくなってきた気がする…

第２８話　「ぴっかぴかの●年生♪」

クロスロード・ナカジマは困惑している。
今の自分の状況が分からない。
なぜこんな事に、なぜ自分がここにいるのか…
なぜ自分が…

「皆さん、宿題はやってきましたか？」
「「「「は～い！！」」」」
「…なんでさ」

小学校に通っているのか…

数日前　海鳴市　某所

今現在この一軒家はクロスやリンディ達アースラ隊が引っ越しの真っ最中である。
アースラ整備中の間、海鳴市にある翠屋の近くの一軒家を購入しそこを臨時作戦本部としてリンディやクロス達アースラ隊が駐屯する事となり
早速引っ越しが行われている。
アースラ隊とはいえノアはここにはいない、管理局本局にてレイジングハートとバルデッシュのカートリッジシステム対応型への改造で大忙しなのだ。
なんでも、ゼスト達の時とは違いレイジングハート達はカートリッジシステムに対応するための新しいモードをいくつか付ける為にフレームの再構成や負担軽減の処置に結構時間がかかるらしい。

だがゼスト達の改造データ、それにノアと光天の書にあるアルハザードのデバイスデータを使用するので
普通に改造するよりはもっと効果的で効率的に改造が出来るとマリーは大喜びだ。

「リンディさん、荷物運び終わりました」
「こっちもモニターの各部チェックが終了しました」
「はい、お疲れ様。クロス君がいてくれて助かったわね」
「力仕事なら任せてください♪」

クロスは日頃鍛えてもいるし、いざとなればパワーアームで重たい荷物も軽々と運べるのだ。
もっとも海鳴市では日頃から魔法の使いどころには気を付けているが。

「馬鹿力が自慢だからな」
「ふふ～ん、羨ましいかい、ちびクロ君?♪」
「な、なんだとぉ!!」
「はいはい、2人ともそこまでそこまで」

リンディがクロスとクロノをなだめているとなのは、フェイト、ユーノ、アルフの4人がやってきた。

「おかえりなさい、診断の結果はどうだったの?」
「私はもうリンカーコアの再生が結構進んでいるみたいです」
「私の方も後遺症もなくて大丈夫と言われました」

なのはとフェイトは先日の襲撃での診察を受けていたのだ。
なのははリンカーコアを蒐集された為しばらくの間魔法は一切使えないが

フェイトの場合、蒐集はされていないがリンカーコアをむき出しにされた為
後遺症がないかの最終検査だった。

「お、ユーノはこっちじゃやっぱりその変態獣モードか」
「なのはの友達の前じゃこの姿でないと……って変態じゃない！！」

ユーノはフェレット、アルフは子犬の姿になっていた。
クロスがユーノの尻尾を持ち上げながら小悪魔の笑みを浮かべる。
ユーノは手足をばたつかせて抗議するが妙にかわいらしさがあるので全然迫力がない。

「あ、なのはちゃん達も来たんだね…うっわぁ～！アルフちゃん何その姿可愛い！！」

2階からエイミィも降りてきて真っ先にアルフに飛び付いた。

「えへへ～新形態子犬フォーム！」
「…やっぱり犬だったのか、アルフ」

その後、なのはからクロス達が引っ越してくると聞いていたアリサとすすがもやってきた。

「クロス君、久しぶり！フェイトちゃんは…はじめましてだよね？」
「うん、ビデオメールでは何回も会ってるけど、それでも会えてうれしいよ」
「へへっ、私達も会えてうれしいよ♪」

すんなりと2人に打ち解けたフェイトを見てクロスとなのはは微笑みあった。

引っ越しもあらかた片付いたのでリンディと共に皆で翠屋へ挨拶に向かう事になり
一同は翠屋へと移動した。

そこでクロスにとって重大事件（？）が起こる。
翠屋の外でなのは達と楽しく談笑している所に大きな荷物を持った観測スタッフのランディがやってきた。
そして、クロスとフェイトに荷物を渡し、２人が開けると……

「「リ、リンディてい・・・リンディさん！！」」

翠屋内で士郎や桃子と談笑しているリンディの元へクロスとフェイトが駆け込んできた。
２人は届けられた荷物を見せながらほぼ同時に言う。

「これは一体なんですか！」「こ、これって・・・まさか」

その様子を見てリンディは満面の笑みを浮かべて

「転校手続きは済ませてあるから、２人ともなのはさんのクラスメートね♪」
「「「えぇ～！！？」」」

喜びと戸惑いの声が上がる、戸惑いはクロスのみだが…

リンディ曰く

「なのはさんもフェイトさんもデバイスなしで危険でしょ？だから身辺警護も兼ねて
同じ小学校に通ってもらう事にしたのよ」

「いや、それはそうだけど…」
「それにこれはクイントからの相談でもあったのよ。クロスはまともな学校に通わなかったから
いい機会だからせめて小、中学校までは普通の学校に通わせたいってね
ちなみにプレシアも了承…というより逆に頼まれたわよ♪」
(まぁ、プレシアの場合学校というよりはクロス君と一緒に通わせて、だけど)
「か、母さん……しかも中学校までって仕事はどうするのさ…」
「あぁ、それなら大丈夫よ。管理局の仕事しつつ学校に通えばいいわ、話はついてるから」
「どんだけ根回しいいんだよ!!」

との事。

そして、週明け。晴れて小学生となったクロスとフェイトの初登校日。

「「いってきまーっす」」
「2人とも車に気をつけてね~」

リンディに見送られて私立聖祥大学付属小学校へと向かう。
その姿を見たエイミィとクロノは

「まるで2人のお母さんだねぇ~」

と呟いたとかいないとか。

途中でアリサ、すずか、それになのはと合流。
5人という大所帯で小学校へ向かっていたのだが…

「あの…なのは、フェイト。なんで俺の手を握ってるの？」
「えっ？クロス君初めての学校だから迷子にならないように…と／／／」
「俺は小学生か！！！」
「小学生でしょ？」
「……そうだった」

アリサのツッコミにｏｒｚ　になるクロス。
フェイトの方は終始赤面していたがしっかりと手だけは力強く握っていた。

「皆さん、今日から新しい友達がこのクラスに入って来ます。海外からの留学生さんです。
　クロスさん、フェイトさん、どうぞ♪」

先生に呼ばれて教室に入る２人。
心なしかフェイトよりもクロスの方が緊張しているようだ。

「クロスロード・ナカジマです、よろしくお願いします」
「フェイト・テスタロッサです…よろしくお願いします」

２人が自己紹介すると教室内から拍手と黄色い歓声が沸き起こった。

（こ、これが転校生の歓迎ってものなのか～！！？）

今まで大人に囲まれた職場ばかり経験していた為新鮮さと驚きを感じるクロス。
フェイトはと言うと…

（クロスと同じ学校…同じ教室、一緒に勉強……えへへ／／／）

少しトリップしていた、ちなみにクロスへは君付けを止めている。
なぜかと言うとクロスが

「なんか知らないけど…落ちつかない！！」

と、よく分からなかったがクロスが君付けを止めてほしいと言うのならと止めていた。
その後も転校生の歓迎は続く…

休み時間の度に質問攻めにあっていた。

「ねぇねぇ、クロス君って外国人？ナカジマって日本人っぽいよね」
「あ、あぁ…父さんが日系なんだよ。血は薄いと言ってたけど」
『そう言えばクロス君って日本人っぽい名字だよね』
『ん？うそは言ってないよ？父さんの先祖が日本人だったみたいだし』
『そ、そうだったの！？』

何気ないクラスメートの質問からちょっとした事実がわかりなのはが驚いたり

「フェイトちゃんってクロス君と知り合いなの？」
「う、うん…母さん同士がちょっとした知り合いなんだよ」
「えぇ～いいなぁ～私もクロス君と知り合いになってればなぁ」
「ねぇねぇ、フェイトちゃんってクロス君と付き合ってるの？」
「にゃっ！？」「ふぇ！？／／／」
「あれ？なんでなのはちゃんも反応してるの？」
「くすっ、クロス君はなのはちゃんともお友達なんだよ」

「えぇ～…って事はアリサちゃんとすずかちゃんとも？」
「「うん♪」」
「羨ましい！クロス君、私ともお友達になろう！」
「私ともぜひ！！」
「ク、クロス～放課後オボエテロヨ～！！」
「あ、あははは・・・」
（（なんだろう……このすごくモヤモヤした気分））

クロスの人気に軽い嫉妬を覚えているなのはとフェイトだが恋愛感情は理解できても嫉妬心までは理解できていない2人はしばらくモヤモヤしていた。
そして、その様子を面白そうに見ているアリサとすずか。
と言うか原作通りに止めないのかアリサよ…

当のクロスは…男子の嫉妬と殺気が籠った視線に晒されていた。

（な、なんだこの殺気は！任務でもこんなに殺気が籠った視線を感じた事ないぞ！）
（…我慢して下さいマスター、これもハーレム小説主人公の宿命です）
（ラファール、久々に喋ったと思えば…ってかだれがハーレム小説の主人公だ！
ってかメタ発言なんてこの小説らしくないぞ！）

そうかも（笑）

そんなこんなで授業を受け、昼休みになり皆でお弁当を食べていた。
クロスとフェイトの弁当はリンディ特製だ。

「つ～か～れ～た～」

「あはは、お疲れ様。クロス君って学校は初めて？」

ぐったりとした表情のクロスに持ってきた紅茶を渡すすずか。

「あぁ、あっちじゃ家庭教師が付いてたからな・・学校は初めてだよ」

「ふ～ん、フェイトもそうなのだっけ？だからあんなに頭いいんだ」

「うん、でも漢字はやっぱり少し苦手かな…」

「あ、俺も苦手だったなぁ…なんで日本語ってあんなに複雑なんだよ～」

「にゃははは、２人とも留学生だから仕方ないよ」

「でもクロス君は漢字結構解いてたでしょ」

「まぁね。母さんに習っておきなさいと言われてたからね」

クロスとフェイトはそれなりの勉学の基礎知識は教わっている。

一応日本出身のクロスは日本語も覚えた方がいいとクイントに言われて

わざわざ日本からミッドへ漢字の本を取り寄せて勉強したほどだった。

「クロス…後で国語とか教えてね」

「おぉ、いいぞフェイト♪俺も復習になるからな」

「あ、私もクロスに勉強教わりたいな～」

「それじゃあ私も♪」

「にゃにゃ！？」

「いや、お前らすんごく頭いいだろ！ってか転校したての俺に教わるってどーよ？」

「わ、私だって色々教わりたいもん！！」

「それじゃあ今度みんなでお勉強会しましょうか♪」

（何気ない会話でマスターへアプローチかけてきましたね、皆さん侮れません）

冷静に分析しているラファール…ノアやクイントの悪影響を受けているようだ。
こうしてクロスとフェイトの小学校第一日目が平和に過ぎていく…

管理局本局　メンテナンスルーム

「わ～た～し～も～学校・・・・・いきた～～～い！！」
＜ノア様、早く完成させましょう早く！＞
「うん、がんばろうねミラノール！」
＜も、もう少し丁寧に改造して下さい…あっ、あ～～～！！＞
＜……無事にマスターの元に帰れるでしょうか・・・ガクッ＞
「ちょ、ちょっとノアちゃんミラノール、焦らないでもう少し丁寧に！壊れちゃうって！
　なんかマッドサイエンティストみたいなオーラ出まくりだよ～」
「早く改造終わらせないと出番が来ないんだよ～！！！」
＜ただでさえ出番全くなんですからぁ～！！！＞
＜＜マ、マスター…ヘルプ・ミ～！＞＞

今日も本局ではレイジングハートとバルデッシュの悲鳴が木霊する。

続く

第２８話　「ぴっかぴかの●年生♪」（後書き）

クロス：「久々の出番かと思えば…シリアスの合間にコメディ混ぜる…ってのはよくある事だと思うけど」

カガヤ：「どうせやるならとことんやりたい！特にアリサは声ネタで（笑）」

クロス：「はぁ……どーせ被害は全部俺に来るんだろ？」

カガヤ：「お、分かってるねぇ～♪諦めろ、ハーレムタグ付けた瞬間にお前さんの運命はきまったんだから♪」

クロス：「お前のせいだろ駄作者！！！」

ノア：「私の出番まだ～？というかレギナスの独白は～？」

カガヤ：「レギナスのキャラ設定はどのタイミングで出せばいいか考え中…独白もな、何せ色々複雑な設定だから」

クロス：「とか言いつつ単純なありきたり設定なんじゃないのか？」

カガヤ：「まぁそこら辺は見てのお楽しみと言う事で…それでは次回も気長にお待ちください」

クロス：「感想なんかもどしどし送って駄作者の尻に火をつけてください」

第２９話　「特訓、決闘！…あれ？」（前書き）

全体的に細かな修正しました…誤字とかその程度の修正ですが。
しかし…誤字多かったなぁ（苦笑）

第２９話　「特訓、決闘！…あれ？」

クロスロード・ナカジマは困惑している。
今の自分の状況が分からない。
なぜこんな事に、なぜ自分がここにいるのか…
なぜ自分が…

「いいか、ナカジマ。真剣勝負だぞ、手加減したら許さないからな！」
「クロス君頑張って～♪」
「…ファイト♪」
「ピッチャーノーコン。ピッチャーノーコン♪」
「デッドボールには気をつけて下さいね♪」
「・・・・・・はぁ」
野球勝負をしているのか…

クロスとフェイトが転入して数日。
シグナム達の足取りは掴めずにリンディやエイミィ達は大忙しだったが
クロスの方は護衛任務と言う名目で相変わらずなのは達と小学校に通っている。
朝と夕方にはなのはとフェイト、アルフと特訓もしている。

新しいレイジングハートとバルデッシュの設計図がノアから送られそれを解説しつつ、カートリッジシステムをちゃんと制御出来るようになるための特訓だ。
しかし少々スパルタ気味で…

なのはに対しては最初、精神集中の座禅のようなものだったが
リンカーコアが活性化して、魔力が戻ってくるようになると
目隠ししてクロスの放った魔力弾を迎撃していく、という内容に変わった。

「うにゃ！何も見えないよ～！！」
「視るんじゃない、感じるんだ！もっと熱くなれよ！！」
「な、なんで松●修造さんなの～！？」
＜マスター…性格変わり過ぎです＞

そして、フェイトに対しては同じく目隠しをしつつ、模擬刀を使って
高速で移動しながら自分に向かってくるクロスの斬撃を捌いていく、
という特訓だ。

カサッ

「っ！？そっち！」
「音がしたからってそこから攻撃来るとは限らないぞ！」
「あいたっ！」
＜なんだか嬉しそうですねマスター＞

アルフに対しては…

「ひたすら模擬戦！」
「ちょっ！説明短くないかい！？」
「いや…俺自身の特訓でもあるし、なのはやフェイトじゃ得物違うからねぇ…」
＜訓練とか言いながらクリムゾン・ブリットを構えて全力でやる気満々ですねぇ＞

そんな毎日を過ごしているとある日の放課後…

「おい、ナカジマ」
「なんだい、磯野？」
「野球しようぜ！…って色々違う！！…いや、野球には違わないか…じゃなくて！
俺は中田だ！今からお前に決闘を申し込む！」

同じクラスの中田からいきなり決闘を挑まれた。
クロスはリンディから

「学校で多少無理してもこっちでどうにかするから、気兼ねなく楽しみなさい♪」

とまでは言われたがまさか喧嘩を挑まれるとは思わなかった。
しかも、どうにかする方法をリンディに聞くと

「えっ？もちろん、学校側との…Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩよ♪」

と、リンディは極上の笑顔で答えた…なぜかクロノが後ろで震えていたが。

ともかく決闘を挑まれた以上どうすればいいかとなのは達を見てみると…
フェイト以外の女性陣が期待に眼を輝かせていた。
クロスは学校では決闘がブームというか普通に行われているのかと思い…
なのはに念話で聞いてみた。

『なぁ、なのは…なんでここじゃ決闘なんて危ない単語が流行っているんだ?』
『え?う~ん…クロス君勘違いしてるかも…』
『勘違い?喧嘩とかじゃなくて?』
『やっぱり……あのね中田君は野球で勝負しようって言ってるんだよ』
『野球でか…そう言えば野球チームだったもんな。んでなんで俺に野球勝負を?』
＜中田君はアリサさんと仲がいいマスターに妬いてるんだと思いますよ?＞
『なにっ!?そうなのか、なのは!?』
『ふにゃ!?多分そうだと思う…けどラファール凄いね。よく気が付いたね』
＜授業中は暇なので皆さんの人間観察を…おかげで色々裏情報持っています、くっくっくっ＞
『『あ、そうなんだ…』』

心なしかラファールの声が暗く黒い…
たまには声かけなきゃな、と冷や汗をかきながら思うクロスであった。

「いいよ、じゃあグラウンドでやろうか」

とグラウンドへ移動、なのは達もついてきた。

そして、グラウンドにて対峙するクロスと中田少年。
なのはの言うように野球勝負を挑んできた。
ルールは簡単、中田の投げるボールをクロスが撃ち返せば勝ち。
フォアボールでもデッドボールでも中田の負けになる。
ちなみに勝っても負けても何も×ゲームなどはないそうだ。

曰く「決闘に罰ゲームも何もない！！」との事。
野球のルールは一通り知っているクロスは数回素振りをしてバッターボックスへと入る。

こうして冒頭部分に繋がるわけだが…

「まぁ…仕方ないか」
（それにしてもアリサ…仮にもお前に好意を抱いてる相手にノーコンとか野次飛ばすってどーよ…）

見ると中田少年は結構心にダメージを負っているようだ。

「くっ、俺は絶対に負けられないんだぁ！！」

と横目でアリサをちらちら見つつ叫ぶ中田少年。
でもアリサは…

「クロス君って野球の経験あるの？」
「えっと…多分ないけど、運動神経はかなりいいから多分大丈夫だよ」
「なら安心ね♪」

フェイトとおしゃべりしていて全く見向きもしていない。

「・・・・・・ｏｒｚ」
「あの～…早く始めないか？」（哀れすぎてみていられないや…）
「あ、あぁ・・・いいともいいともさ、ならば俺の熱い魂の籠ったこの一球で～！！
　振り向かせてみせるぞぉ～！！」
「なぁ、お前本当に小４なのか？」

＜マスターがそれをいいますか…＞

プレイボール！

気を取り直した中田少年の第一球…が投げられた。
ちなみに先生が審判をしてくれている…暇なのだろうか？

（えっと芯に当てて特大のホームランとかになればきっと目立つから…少し外し気味に打つ！）

キンッ、ズボッ

「・・・・ズボッ？」

野球ではあまり聞かない音がして何事かとバッターボックスを見る一同。
すると…クロスが頬をかいて苦笑いを浮かべていた。

「…これって、どうなの？」
「・・・ファ、ファール！」

よく見るとバッターボックスすぐ近くのファールゾーンにボールが…めり込んでいた。

「ちょっと待て！どうやったらボールが地面にめり込むんだよ！！」
「いやぁ～あははは・・・」

中田のツッコミに苦笑いを浮かべるしかないクロス。
適度な当たりにする為にボールの芯を少し外れた所を打つつもりが変化球だったのか少し軌道がずれボールの上を思いっきり叩く形に

なった。
しかも、力加減を間違えたのも加わり思いっきり地面へとめり込ませてしまったらしい。

＜マスター…目立たないように打ったつもりですが…思いっきり目立ってます＞
『言わないでくれ・・・・』

幸い中田はまぐれだろうとあまり気にも留めなかったらしくすぐにプレーが再開された。
まぁ問題は…

『クロス君、魔法一切使ってなかったよね？』
『うん…身体能力だけでああなったんだと思う…』
『…怒らせない方がいいね』
『…うん』

当人の知らない所でなのはとフェイトに恐れられた事だろうか。

「これなら…どうだぁ！」

中田の2球目は先ほどよりも外角高めのカーブだ。
それをクロスは黙って見送った、なぜなら

「ボール！」
「ちぃ、外れたか…」

カーブがかかり過ぎてストライクゾーンから外れると分かっていたからだ。
続けて2球連続ボールでキャッチャーが中田の元へと駆け寄って何

か声をかけている。

「意外と面白いな♪でもいい加減終わらせて帰りたいし…あ、そうだ♪」

＜マスター、今度は何を考えているんですか？＞

『普通に終わらせたんじゃつまらないだろ？♪』

何やらクロスは意味ありげな笑みを浮かべてバットを持ち直した。

「あ、あの笑顔って…」

「うん」

「？どうしたの2人とも？」

クロスの変な笑みに気付いたなのはとフェイトは顔を曇らせた。

「あのね、あの笑みを浮かべたクロス君って思いっきり意地悪な事考えてるの」

「私達も何回かあの笑み浮かべたクロスにイロイロと…ね」

「い、色々って何よ！！」

「「あははははは・・・」」

「ちょっと怖いよ2人とも！」

遠い目をして乾いた笑みを浮かべるなのはとフェイトにアリサとすずかは何も言えなくなった。

ちなみにどれくら意地悪な事かと言うと…主に特訓中でのスパルタ特訓での時だ。

目隠ししての模擬戦や全力の砲撃をデバイスなしである程度相殺する、などなど。

無謀ともいえる特訓をクロスはなのはとフェイト、アルフにしてきた。

カートリッジシステムを使いこなす為の特訓ではあったが
半分くらい本人の趣味が入っているのではないかと疑うくらいだ。
リンディはその様子を見て

「クロス君は…戦技教導官にも向いているかもしれないわねぇ。今度推薦しましょうか」

と呟き、それをクロノ必死に止めていた。

キャッチャーとの話が終わったのか幾分リラックスした様子の中田が再びマウンドで構える。

「これで最後だ、いっくぞ～！！」
「こい！」

ど真ん中より少し下を狙ったストレート、今までで一番速い球だ。

「狙い通り！」

バッドを短めに構えたクロスが芯に捉えて打ち返す！
ボールは地面スレスレを飛び、マウンド上の中田の股の間を高速で掠めて
センター正面へと飛んで…行くはずだった。

「うぶおぉう！！？」

ボールが運悪くマウンド中央に埋め込まれた投手板に当たり…跳ね返り…
中田少年の尻を掠めたのだ…
直撃はしなかったものの変な感触だったのかしばらく中田少年は身

悶えしている。

「あ・・・あれ?おーい、大丈夫かぁ?」

マウンド上にみんなが集まり心配そうにする中。
中田少年はいきなりスクっと立ち上がり…

「俺の負けだ……ぜひ、俺のクラブに入ってくれ!!」

と、いきなりクロスに土下座してきた。

「えっ?…何、なんなのこの展開??」
「俺はお前に負けた!心底負けた!完敗だ。こうまで打球を操るバッターは初めてだ!
お前が攻撃に加わってくれるなら俺は安心してピッチングに専念出来る!」

アリサを巡っての勝負って事忘れてないか…と心の中でツッコミつつも。

「悪い、俺クラブとかには興味ないんだ…またな!!」

その場の空気にどう反応していいかわからず逃げだすようにその場を後にした。

「あ~待ってくれ!試合の時だけの助っ人でもいいから、せめて兄貴と呼ばせてくれ~!!」
「なんじゃそりゃ~!!」

「・・・帰ろうか、みんな」

「・・・うん、そうだね」

後に残ったのは転々と転がる白球のみ・・・

その後、クラブへはたまに顔を出す事を条件に兄貴と呼ぶのを止めてもらったらしい…

ちなみにその日からの訓練から野球っぽいメニューが組み込まれ3人の悲鳴が木霊するようになったとかいないとか…

管理局本局　メンテナンスルーム

「燃えたよ…まっ白に…燃えつきた…まっ白な灰に…」

＜我が生涯にいっぺんの悔いなし!!＞

＜大きい・・・彗星かな。イヤ、違う、違うな。彗星　はもっとバーって動くもんな＞

＜うぅ、もう私、お嫁にいけない…＞

「君達なんでそんな事詳しいの…というか!バルデッシュあなた女性人格だったの!!?」

続く

第２９話　「特訓、決闘！…あれ？」（後書き）

カガヤ：「はい、お疲れ様」

クロス：「なんか前回といい今回といい話がすごいな」

ノア：「私の出番～！！」

カガヤ：「いやぁ～ギャグはこれでしばらく終わり！次回からはシリアスばっかで行くから…こういう話いれてみました」

クロス：「なるほど、それでノアをオチ担当にしたのか」

ノア：「オチでも出番があるだけ…いいかな？」

カガヤ：「なんだかんだでクロスは学校っていうもの知らないからこんな感じになるのかな～っと」

クロス：「段々俺がアホの子に見えてきてないか？」

カガヤ：「♪～（・ε・　）　」

クロス：「おい、こっちみろ」

カガヤ：「さって～週一ペースになってますけど気長にお待ちください。感想その他諸々もお待ちしておりますペコリ（ｏ＿　＿）ｏ）」

第３０話　「新デバイス・新モード・新魔法」（前書き）

暑くてダルいです…どなたかクーラー下さい（爆）

あ、なのはとフェイトの新ジャケットとデバイスは「Ｔｈｅ　ＭＯＶＩＥ　１ｓｔ」のにカートリッジシステムをつけ足したものと思って下さい。

第３０話　「新デバイス・新モード・新魔法」

海鳴市　アースラ隊臨時作戦本部

「エイミィ、その後彼らの手かがりは掴めたかい？」
「掴めるには掴めるけど…全部後手に周っているねぇ」

守護騎士達の足取りを追っているエイミィとクロノの目の前にあるモニターでは
「イフリート」と呼ばれる炎の神獣が管理局員に治療されている様子が映されている。。

「…もう闇の書かなり完成に近づいてるかな？」
「分からない、今までの神獣となのはのリンカーコアでどれだけ埋まったかどうか」

過去にも蒐集のデータはあるが、不完全であるためどれくらいの魔力で完成するのかは予測が難しいのだ。

「でも、好きにさせるのもここまでだ」

クロノがモニターを操作すると、青色に白い鬣をした大きな一角獣が映し出された。

「雷帝イクシオン…ようやく見つけた蒐集されていない神獣だ。こいつをマークすることで
守護騎士達に罠をかける、結界の準備が出来次第すぐに出るよ」

シグナム達が地球周辺の次元世界へ蒐集対象を探しに行っている事

に気付いたクロノ達は
未だに蒐集されていない神獣や魔力の高い生物を探しだしていた。
そして、ようやく見つけたのがこのイクシオンだ。
イクシオンを見張ってシグナム達が現れたら大規模魔法で捕縛すると言う計画。
本来神獣と呼ばれるイクシオンを見張るだけでも気配をすぐに察知されて攻撃されるなど
大変なのだがそこは本局の召喚魔導師にイクシオンとの意思疎通を図ってもらい
特別にイクシオンに許可をもらったのだ、さもなければ雷で黒コゲにされているだろう。

「そういえばクロス君やなのはちゃん達はまだ本局なの？」
「あぁ、デバイスの新しいモードの特訓中さ」

時空管理局本局　トレーニングルーム

「…す、すごいよレイジングハート！」
「バルディッシュも…お疲れ様」

なのはの最終検査も終わりリンカーコアも完治したので新デバイスを受け取り
フェイトと共に本局でデバイスの特訓をしていた。
今までと違い新しいモードがそれぞれ加わったのでそれを使いこなす為の特訓だ。
もっとも、使いこなすのは時間をかけて行う方が体に馴染むのでともかくどういう力が加わったかの確認の為の特訓でもある。
それと……

「それで、２人ともシンクロ魔法の方ははどうさ？」
「うん！すごい力が湧いて来たよ！」
「クロスとのシンクロも結構いい感じに出来たしね」

特訓していたのは新モードの為だけではなかった。
クロスとのシンクロ魔法の特訓もしていた。
シンクロ魔法……

ただ２人同時に魔法を放つだけではなく、ユニゾンのように２人の魔導師の魔力を合わせ
それぞれの技の効果を２乗、３乗していく魔法だ。
誰にでも使えるというわけではない、合わせる魔法や魔力素質の相性などに左右される。
今のところ、クロスはなのはとの砲撃魔法、フェイトとの斬撃魔法をそれぞれ１つ編み出していた。

「本当はこういうのは不要なんだけど…ちょっと嫌な予感がするからな」
「マスターの予感はよく的中しますからね」
「おっ、そっちはもう済んだのかい？」

アルフとノアが持ってきたドリンクを飲みながらクロスが２人を見据えて

「何度も言うけどカートリッジシステムは本来アームドデバイス用のシステムを
インテリジェントデバイスでも使えるようにして術者や本体への負担が軽くなったとは言え
まだ開発されて間がないから不安定な部分もある。だから…」
「無茶をして大出力魔法を連発せずに」

「戦略と戦術で効率的に魔法を行使して危機を乗り切る…だね」
「はい、なのはちゃんもフェイトちゃんもよく出来ました♪」
クロスの言葉になのはとフェイトが続きノアが満面の笑みで締めくくった。
「へっへ～ん、私もパワーアップしたんだフェイト達にばっかり負担はかけさせないよ♪」
胸をどーんと叩くアルフの両手両足には銀色の装甲が装備されている。
先日のザフィーラとの戦いで押されっぱなしだった事を気にしていたアルフは
自分もパワーアップ出来ないかとクロスとノアに相談していた。
使い魔とはいえ修行次第でいくらでも強くはなるが、限界を感じていたのだ
そこでクロスとノアが考えたのは単純に戦闘力を上げる武具を装備する事。
闘士形態のクリムゾンブリッドを元に攻撃・防御・速度を上げる術式を組み込んだ装甲を
ノアとマリーがレイジングハートの改修をする傍ら開発した。
これによりアルフも戦闘力の底上げが行われクロス達は一層戦力を強化出来た。
「…これだけやらなきゃ行けないっていうのは…正直どうかと思うけどな。
まだ9歳のなのは達に強い力を与えるのってさ」
なのは達のデバイスやアルフの装甲を見て溜息をつきながらクロスが呟く。

「…なのはちゃんとフェイトちゃんに戦いを強いているようで…」

ノアも少しうなだれている。

本来ならなのはとフェイト達は一般人、管理局で無理に戦う必要はない。

しかも、新しいデバイスや武具…戦う力を与えて戦力の強化までしている。

今更ながら自分達が進んで行った事が、本当になのは達の為なのかと自己嫌悪になった。

「気にしないでいいよ、これは管理局の皆の力になりたいって自分で決めた事だもん。

だから、クロス君達の力になれるのがすごく嬉しいんだよ♪」

「うん、私もアルフもバルディッシュももっと強くなりたいって願って

クロスとノアはそれを叶えてくれた…ただそれだけだよ」

「そうそう、力の正しい使い方だってイヤってほど身に染みてるしね」

「そ・れ・に！クロス君だって9歳なのに皆の為に頑張ってるでしょ。

それと同じ…守りたいものがある、その為に出来る事をするだけ、ね？♪」

クロスとノアは3人の言葉に表情を明るくする。

「ありがとう…みんな」

「えへへ、なんか嬉しいよ、あんたらがそういう面見せてくれるのがね」

「うん」「…そうだね」

「えっ？」

アルフの言葉にキョトンとする2人、そしてそれに同意するなのはとフェイト。

「クロス君とノアちゃんっていつも私達の事考えて悩みとか聞いてくれるけど」

「自分達の悩みとかはあまり話さないから…」

「そうそう、聞くだけ聞いて解決して、自分達の事は棚にあげてる感じがするよ」

「そ、そうかな？」「あははは…」

2人はそういうのは自覚していたがまさかなのは達に見破られるとは思っていなかった。

「クイントさんから聞いたんだよ。クロス君達は自分の弱さをあまり見せないって」

「見せるのは…信頼してる相手にだけ、とも」

「まいったなぁ…」「お母さん…」

クロスとノアはバツが悪そうに顔を見合わせた。

「でも、私達を信頼してくれてる。ってことでいいんだよね？」

「わ、わざわざ言う必要もないだろ……信頼しているに決まってるさ」

そっぽを向きながら照れるクロスに皆はつい笑ってしまった。

『守護騎士達を次元世界で発見！急いで現場に向かってくれる？』

そこへ突然エイミィからの緊急連絡が入った。

「「「「っ！」」」」

「分かりました、こっちは特訓が一通り終わった所です…みんな、行ける？」

「「「「うん！（おう！）」」」」

『それじゃあ座標を転送するね、クロノ君が罠を仕掛けてるの…だから急いで！』

とある管理外世界

「スティンガーブレイド・エクスキューションシフト！！」

上空に佇むクロノの下に展開された沢山の魔力刃が一斉にヴィータとザフィーラへと降り注ぐ。

とっさにザフィーラが障壁をはり防御する、当たり一面に煙が立ち込める

その隙をついて待機していた武装局員達が陣形を組んで強力な強装結界を張った。

「はぁ・・・はぁ・・・少しは通ったか」

煙が晴れるとザフィーラの腕に数本魔力刃が刺さっていた。

「ザフィーラ！」

「気にするな、この程度でどうにかなるほど…やわじゃない！」

そう言うとザフィーラは腕に力を籠め刺さっていた刃を砕いてしまった。

「上等！…でもしまったな、結界張られちゃったみたいだ」
「あぁ、この結界を破るのは少し厳しいな」
「だったら、まずは局員全員ブッ飛ばす！」

ヴィータの鋭い視線を受けてクロノはデバイスを構える、そこへ通信が入り

『おまたせ、クロノ君。ちょ～強力な助っ人が今そっちに向かったよ！』
「えっ？」

クロノが見渡すと近くの岩場に見慣れた5つの人物が見えた。
それを見たクロノの顔に自然と安どの表情が浮かぶ。

「さ～ってと、2人しか見えないけど、守護騎士達との第二ラウンドと行きますか」
＜この前の借りを返しましょう＞
「今度は…もう迷いません、最初から全力で行きます！」
＜久々の出番。たまりにたまった分暴れますよ！＞
「レイジングハート…特訓の成果を見せる時だね」
＜はい、がんばりましょう！＞
「シグナムがいない…でも油断は禁物だね。行くよ、バルディッシュ」
＜もう遅れは取りません＞
「あの狼のお兄さんはいるねぇ～…この前のようにはいかないよ」

並び立つはクロス、ノア、なのは、フェイト、アルフ…

それぞれのデバイスを掲げ

「ラファール、ノア！」
「ミラノール！」
「レイジングハート・エクセリオン！」
「バルディッシュ・アサルト！」

「「「セット、アーップ！！」」」
「ユニゾン・イン！」

掛け声共に紅色と桜色と金色の三色の魔力光の柱が立つ。

「な、なんだあいつらのデバイスにジャケットも違うぞ！」
「どうやら改良をしたらしいな、それも大幅な」

光が消えるとそこにはユニゾン状態の騎士クロスと
新しいバリアジャケットを纏ったなのはとフェイトの姿があった。
なのはは手足と胸元に金属の装甲部分が増えた姿に
レイジングハートは白いパーツが増えマガジン型のカートリッジが
柄に追加されている。
フェイトは手足にスリットが付いた姿で
バルディッシュは先端に丸みになり、柄にこちらはリボルバー型の
カートリッジが付いた。

「あれは…まさか！」
「カートリッジシステムか」

クロス達はクロノの元へと集まった。

「クロノ、ここは俺達がやる…だから」

「あぁ、分かった」

そして、ヴィータ達へと向き直り

「じゃ、お話しようか♪」

「それ、私のセリフな気がするよ…というかなんだか怖いよ!?」

良い笑顔で剣を突き出すクロスに冷や汗を浮かべるなのは。

「私達はあなた達と戦いにきたわけじゃない、まずは話を聞かせて」

「隣の奴は思いっきりやる気満々じゃねぇか!」

「夜天の書の事で話がしたいだけなの。教えて、夜天の書の完成を目指す理由を」

「おい、無視すんなよ!それにお前らまで夜天の書って……闇の書だ、闇の書!

というかさ…ベルカのことわざにこう言うのがあんだよ」

ツッコミを無視されたヴィータは無理やり原作通りにしようとする。

「和平の使者なら槍は持たない、話し合いをしようってのに武器を持ってやってくる奴がいるか

っていう意味だよ、ばーか!」

「なっ、いきなり有無を言わさずに襲ってきた子がそれを言う!?」

「それにそれはことわざではなく小話のオチだ」

「うっせぇ!いいんだよ細かい事は!」

2人に突っ込まれそっぽを向くヴィータ

その時、結界の外から2つの光が飛び込んできた。

「「「っ!?」」」

「…来たか」
「おせぇよ」
「すまないな、局員に気付かれるずに進入するのに手間取った」
飛びこんできたのはレギナスとシグナム、2人共すでに戦闘態勢だ。
「これで役者がそろったな」
「正直、まだ会いたくはなかった…のだがな」
「・・・・・」
レギナス達がクロス達の正面へと来て対峙する。
『クロノ、あいつら書を持っていない。おそらくシャマルか…』
レギナスと視線をぶつけあうクロス。
『あぁ、結界内ではないけど、書の主が近くに居ると言う事だな』
『じゃあそっちをお願い、シグナム達は私達が抑えるから』
念話をしつつシグナムを見据えるフェイト、対するシグナムも剣を構える。
『まじか…大丈夫なのか?』
「大丈夫だから手を出さないでね、私あの子と一対一だから」
「……っ!」
そう宣言するなのはを睨みつけるヴィータ。
「私もあの野郎にちょっと話があるんでね…」
「……」

アルフの視線の先にはザフィーラの姿が。

それぞれ自分の相手を見据え…一気にはじけた。

いくつもの光が追いかけ合い、時にぶつかり合いながらもそれぞれ散っていく。

その光景を眺めたクロノは深く溜息を吐くと闇の書の主を探しに結界外へと向かって行った。

その頃　管理局ではある重大事件が起こっていた。

「ダメです！こちらにはいません！！」

「こちらゲート。やられました、警備局員数名重傷です、すぐに医療班を！」

「くっ……緊急配備！非常線を張ってすぐに全局員に手配を回せ！脱獄者は「アジーン」「ドヴァー」「トリー」の3名だ！」

クロスが捕えた3人の暗殺者が脱獄したのだ。

目的はもちろん……復讐。

続く

第３０話　「新デバイス・新モード・新魔法」（後書き）

カガヤ、クロス、ノア：「「「暑い……」」」

クロス：「なぁ、北の大地なのになんで室内温度３０℃越えてるんだ？」

カガヤ：「言うな…温度言われると余計に暑くなる」

ノア：「かき氷食べたいよ～」

カガヤ：「……ともかくやっと３０話行きました～」

クロス：「やっとだな…１章１０話ペースだと思ったのだが」

カガヤ：「３章はまだやっと中盤が終わったくらいかなぁ」

ノア：「長いですねぇ…」

カガヤ：「結構重要な話だからな…」

クロス：「この小説の構想ってどれくらいだっけ？」

カガヤ：「小学生編で１部、中学生編で２部、そして、ＳｔｒｉｋｅｒＳ編の３部、完結編の４部
クロスオーバーイベントで２、３部を所々に挟む予定…」

クロス：「先は長いな…全部１００話は越えるな」

ノア：「気力と体力続くんですかぁ？」

カガヤ：「…がんばります」

クロス：「とりあえずこの暑さを凌ぐのをまずは頑張らないとな…」

カガヤ：「ってかクロスオーバー作品をいくつか追加したんでタグ追加しました！」

クロス：「やっとクロスオーバーか…ってか2，3話前に出てただろ！しかも本格クロスオーバーじゃなくて召喚獣のみのクロスオーバーか」

カガヤ：「…忘れてました！（笑）」

ノア：「ダメだめですねぇ…」

カガヤ：「こんな駄作者ですが感想や色々まってまーっすペコリ（o＿＿＿）o）」

第３１話　「ＶＳ　ヴォルケンリッター？」（前書き）

最近Ａ，ｓとＳｔｓのコミック読みました。
いやぁ～結構奥深い設定あるんですねぇ（笑）
ドラマＣＤも聞いてみようかな。

第31話　「VS　ヴォルケンリッター？」

全面対決より少し前　守護騎士サイド　八神家

『主の様子はどうだ？』
「うん、大丈夫。魔法でぐっすり眠っているわ…結界も何重にも張ったし」
『そうか…なら頼むぞ』

ヴィータやザフィーラと別行動していたシグナムとレギナスは2人が罠に落ち
管理局の結界に閉じ込められた事を聞き、用心の為待機中のシャマルも呼ぶ事にした。
シャマルは主はやては魔法でしばらく眠らせて八神家周辺に何重にも結界を張った。
泥棒などの侵入を防いだり、魔力が外にもれないようにするための結界などだ。

一方のシグナム達は管理局が張った巨大な結界を遠巻きに眺めている。

「お前はシャマルの所へ行け、我らはこれから激しい戦闘をするだろうからな」

そう言って闇の書をシャマルの元へと転送するシグナム。
そこへ様子を見てきたレギナスが戻ってきた。

「どうだ？抜けれそうか？」
「あぁ、管理局員が結構な数揃えて結界を張っているから破壊は難

しいが突破なら可能だ」
「なら…行くぞ！」
レギナスが槍を構えその後ろにシグナムが付く。
「……牙狼一進！」
カートリッジを通常よりも多めにロードしレギナスは結界上空から突撃した。
「な、なんだ！？上空に高魔力反応…速いぞ！？」
管理局員達が気付くがその時にはもうレギナス達は結界を貫いて突入していた。
そして……二度目の戦いが始まる。

なのは　ＶＳ　ヴィータ

「私が勝ったら、お話聞かせてもらうよ…夜天の書の事を！」
「ぐっ……お、お前…まで、あたしらが持ってるのは……闇の書だぁ！！」
夜天の書、その名に少し頭を抑えるヴィータだがすぐに気持ちを切り替えアイゼンで殴りかかる。
なのはは難なく上空へと飛びすかさずに反撃する。
＜アクセルシューター＞
「シュート！」
「なっ、はやい！」

なのはの周りに十数発のスフィアが現れ一斉にヴィータへと放たれた。
あまりの速い魔法の展開にヴィータは障壁を張る暇もなく飛びまわり回避する。

「ちぃ、なめんな！！」
＜シュワルベフリーゲン＞

弾速も誘導性能もディバインシューターより数段上のアクセルシューターに
何度かかすりながらも射撃魔法で対抗する…だが。

パリン

「ぐぅ！」

ミッド式よりも破壊力だけなら優れるはずのベルカ式射撃魔法が簡単に撃ち抜かれた。
さらになのはの追撃魔法が迫る。

「ディバインバスター！」
「うそだろ！？射撃魔法と砲撃魔法の同時攻撃だってのかよ！？」

なのははクロスとの特訓で集中力と並列演算処理能力が上がり射撃と砲撃の同時使用が可能となった。
もっとも、砲撃の方は通常よりも威力などが少し落ちるが。

＜パンツァーシルト＞

アイゼンが張ったシールドでバスターを防ごうとするが、徐々に亀裂が入り押され始めた。

「ええい！」
「くっ！」

さらにアクセルシューターが背後から迫り、シールドも同時に破壊された。

＜パンツァーヒンダネス…間に合いました＞
「はぁ…はぁ…このあたしが、さっきから防御ばっか…近づけねぇ…くそぉ！」

間一髪でアイゼンが張ったフィールド魔法でどうにか凌いだヴィータは息を整えながら
上空のなのはを睨む、ここまで防戦一方は久方ぶりだ。
しかし、なのはの方も息が絶え絶えで肩で息をしている。
射撃と砲撃の同時使用はまだなのはには早かったようで体力を消耗している。

「はぁはぁ…やっぱり強いやヴィータちゃん。ここまでやってもまだなんて」
＜でも訓練は無駄ではなかったようです。このままいきましょう＞
「うん！」

なのはやフェイトがクロスとノアに教わった戦法はしごく単純だった。
ベルカは対人戦に特化し接近戦ではミッドを遥かに凌駕する…
その分射撃や砲撃に関してはあまり得意ではない。
もちろん射撃や砲撃に特化した騎士もいるが、シグナム達はその系

統ではない。
遠距離戦でも戦えるがやはり近距離タイプ、近付かれなければ勝機はある。
ならば、射撃や砲撃を多用し遠距離戦に持ち込めせればいい。
なのはは以前の特訓で魔力密度を重視したので今回は発射速度と弾速を重視する特訓をした。
その結果、アクセルシューターとディバインバスターの同時使用、回避直後の反撃など
機動性を魔法でカバーする戦法が出来あがった。

しかし、なのはクラスだから出来る事でもあり……

フェイト　ＶＳ　シグナム

こちらは先ほどからフェイトが一撃離脱の戦法を繰り返している。
元々フェイトは高機動型であり、遠距離戦もなのはと同じくらい得意で
射撃や砲撃魔法自体は元からなのはよりもかなり強力なものなのでフェイトに関しては遠距離に対しての高機動戦闘を重視する特訓を行った。
いかに間合いの外から一瞬で相手の懐に飛び込むか。
と同時にバルディッシュの攻撃パターンも幅を持たせる為にクロスがフェイトに見せたのはずばり、アクション映画だ。
映画の中とは言え、実用的な戦闘シーンもあり、中でも棒術を多用するカンフー映画がフェイトの興味を引いた。
そこで学校に居る間にフェイトにはラファールが仮想空間戦闘データを送り

様々なカンフー映画などの棒術使いのデータとイメージ戦闘をさせて
学校が終わると結界内でクロスとの実戦訓練で成果を試す、という
特訓を行った。
なのはもイメージ戦闘などをお願いしたが、まだリンカーコアが完
全ではなかったので
無理はさせるわけにはいかないので完治するまでは一人精神集中の
特訓をしていたのだ。

特訓の成果が今現れていた。
ただ振り降ろし斬るのだけではなく
フェイトはバルディッシュを振り回し遠心力を加えた一撃を放ち
それがかわされるとすかさず手足や体を軸に回転させさらに連撃を
放つ。
シグナムも鞘で受け、レヴァンティンで反撃するが
すぐにバルディッシュを手元で回転させ斬撃を弾く。

「以前とは全く違う動きだな、読みにくい…だが！」

バルディッシュを体中で振り回して攻撃してくるフェイトに
動きがうまく読めずにいなしていくのがやっとのシグナム…
しかしそれもすぐに慣れたのか防戦のみだったのが段々と反撃して
くる。
ならば、とフェイトは距離を開け射撃体勢に入った。
前方にスフィアを展開し…

「プラズマランサー…ファイア！」

雷の槍が一直線にシグナムへと向かう。
上空へと交わしたシグナムだが

「ターン」

フェイトの一声で遠隔操作になるのか９０。回転し再度シグナムへと迫る。
迎撃しようと構えたシグナムだが自分の更に後ろからフェイトがサイズフォームのバルディッシュを斬り降ろしてくるのを感じ

＜シュランゲフォルム＞
「飛龍…翔刃陣！」

レヴァンティンを連結刃のシュランゲにし炎を纏わせ守るように自分の周りへと伸ばす。
連結刃はシグナムを守る結界となりフェイトの射撃と斬撃を防ぎそのままフェイトを吹き飛ばした。

「ぐっ……」
「ふぅ、まさかこれまで出す事になるとは…見事だ、フェイト・テスタロッサ
そしてバルディッシュ」

レヴァンティンを剣状態に戻し構え直すシグナム。

「あなた達こそ、シグナムにレヴァンティン…」
「このままこの戦いを楽しみたいが我らには果たすべき使命がある…手加減はしないぞ」
「その使命を聞き出す為に…絶対に負けられません」

フェイトもバルディッシュをデバイスフォームにして構える。
再び二人は光となって交差する。

アルフ　ＶＳ　ザフィーラ

こちらは先ほどから膠着状態が続いている。
アルフは新装甲の術式をフル稼働させて攻撃しているが
ザフィーラのガードが堅く決定打を与えられず
対するザフィーラは
アルフの絶え間ない攻撃に反撃の隙を窺えずに両者は決定打を入れられずにいた。

「前より強くなったのはその装甲のおかげだけではないようだな」
「ふん、こちとら主を守れなかったのだ、そりゃ力の入った特訓もするさ！」

言いながら放つアルフの回し蹴りをザフィーラは片手で受け止めそのまま振り回す。
しかしアルフも振り回されつつもう片方の足で蹴り、手を離させる。
さらに踏み込んだアルフの拳を屈んでかわし懐へと潜り込んだがそこがアルフの狙い。
もう片方の拳に魔力を溜め、零距離からザフィーラの腹を思いっきり殴る。
吹き飛ぶ程ではなかったがダメージはそれなりにあり動きが鈍る。
すかさずアルフは縦に一回転にしその勢いのままザフィーラの頭に踵を落とす。

「がっ！」
「まだまだこの前の恨みはこんなもんじゃないよぉ！」

沈んだ顎に強烈なアッパーを繰り出し

駄目押しをばかりに回し蹴りを腰に入れる。
ザフィーラはそのまま岩肌へと叩きつけられ辺りを砂塵が覆う。

「さって、これだけやれば……嘘だろ…」

終わったかと思ったアルフだが、砂塵が晴れの中から
あまりダメージのなさそうなザフィーラが出てきて驚いた。

「残念だったな、この程度でやられるようじゃ盾の守護獣は名乗れないのでな」
「へ、へへっ……上等だよ！」

2人の激突はまだまだ終わらない。

様々な戦いを繰り広げるなのは達。
そして、クロスは…未だにレギナスと正面から睨みあっているのみ。
だが、2人が互いの間合いを測っての膠着状態であった。
そんな様子をモニターで眺めるエイミィとリンディ。
結界の外で隠れながら様子を窺うシャマル。
すぐ近くを闇の書を捜索しているクロノ。

だが、彼らは皆気付いていなかった。
本来このテリトリーの主であり…離れた場所にいる神獣イクイシオンが
仮面をつけた謎の人物に倒された事を…

続く

第３１話　「ＶＳ　ヴォルケンリッター？」（後書き）

クロス：「暑い～」

カガヤ：「暑い～」

ノア：「暑いです～」

カガヤ：「暑いから…あとがきもう終わりにしない？」

ノア：「いやいやいや！ダメですよ！！」

クロス：「とはいえ暑いよなぁ…ここホントに北の大地かと思うくらいに」

カガヤ：「う～ん…なぁ、クロス。幻想卿行って？連れてきて」

クロス：「確かに涼しくなりそうだけど…って幻想卿行けというのか」

カガヤ：「いいじゃん、１０年後に行くんだし♪」

ノア：「はっきりとネタバレしてます！？」

カガヤ：「それはそうと、何気にシグナムのオリ技出してみた」

クロス：「無理やり話そらそうとしてるな…んで、なのは達にもオリ技あるのか？」

カガヤ：「あぁ、前回出てたシンクロ魔法の1つで色々とな」

ノア：「それより…私にちゃんと活躍の場はありますか？」

カガヤ：「ある！他にも切り札を色々出す予定だしな」

クロス：「まぁ…出すまで先は長そうだけどな」

カガヤ：「うぐっ……で、では感想や誤字の報告など色々待ってまーっす♪」

第３２話　「それは、邪悪にして凶悪な…」（前書き）

はい、今回で本格的クロスオーバー第一弾をちらりとお披露目♪

これはクロスオーバーと言えるのか不安ですが（汗）

【注意】一部グロテスク表現ありです。

第３２話　「それは、邪悪にして凶悪な…」

管理局本局　無限書庫

プレシアとユーノは無限書庫に納められた膨大な量の書物から闇の書と夜天の書についての資料を探していた。

「ふぅ…流石は無限書庫ね、資料が多すぎて逆に探しにくいわ」
（でもここにならアリシアを蘇らせる方法が…なんて、馬鹿よね私は）

昔、無限書庫でアリシアを蘇らせる方法を探そうとはしたが管理局のマークが厳しく断念した事があるプレシアは自虐的な笑みを浮かべる。
ノアよりアルハザードでも死者の蘇生は禁忌であり成功した者はいないと言われ
振り切る事ができたがこのような膨大な書を目にするとどこかに可能性がないか。
と思ってしまう自分に笑ってしまう。

「えぇ、それでもちゃんと出てくる辺りは流石ですよ、もっとも闇の書の事だけですけど」
「・・・・」
「・・・プレシアさん？」
「え？・・・あぁ、ごめんなさい。そうね・・・夜天の文字すら出てこないわ」

闇の書に関する書物は出てきたが夜天の書に関する書物は未だに発見出来ていない。

「でも、ちょっと気になる事が出てきました」
「あら奇遇ね。私も気になる事があるのよ」

闇の書に関する記述を探していくうちに2人はある疑問を抱くようになった。
古い書物になるにつれ闇の書と言う単語が出てこないのが1点
書の力に関する内容が時代ごとに変化しているというのが1点。

「夜天の書が闇の書へ変化していく過程…でしょうか？」
「誰かに改造された、とかそういう記述は全く見つからないわね。逆に改造しようとして
　失敗した主やら、聞いていたのと違う書の力に戸惑った主もいるみたいよ」

ある主は闇の書を手に入れたが伝承にはない蒐集について戸惑ったらしい。
伝承では書を手に入れると膨大な力と魔力を手にするとあったが
実際に主になると魔力を蒐集しなければ書が使えない事になっていた…など。
夜天の書を闇の書に改造した、という書かれたものはないが
主が変わったほんの数年で闇の書が変化した、と書かれた伝記すらあるほどだ。

「これらを見る限り闇の書になったのは…」
「えぇ、誰かが改造した、と言うわけではないみたいですね。それと一番は…」
「やっぱり、そっちでも見当たらないのかしら？」
「はい…闇の書が完成した事は過去一度もないみたいです」

今までの伝記や資料では闇の書は完成直前になんらかの失敗をしているのだ。
クロノが管理局などの妨害で完成した事はないと言っていたがそれは管理局が出来た比較的最近の出来ごとのはずで闇の書は大昔から存在しているのに完成した事はない…なのに主には膨大な力が与えられると言い伝えられている。
しかも、妨害されたのなら分かるが、丸で自爆したように消えた事もあったとか。

「……一番古い資料までさかのぼらなければ駄目ね」
「えぇ…がんばりましょう」

2人はさらに古い書物の検索を開始した…

「そう言えば今日はあの2匹の使い魔達は来てないの？」
「えぇ、なんだか特殊任務があるから今日は来られないそうですよ」
「そう」

プレシアはさほど気にも留めず作業を続けた。

とある管理世界

クロス　VS　レギナス

「飛翔双翼斬！」「飛空突閃！」

2つの×文字の衝撃波と槍状の衝撃波がぶつかる…威力は互角。

「シャインホイール！」「リフレックス！」

縦横無尽に迫る魔力弾を放つも　一呼吸　おいて反射されてしまう。

（駄目だ全部あの鏡で反射されてしまう…でも妙だな、この前と少し違和感が）

先ほどから剣士での斬撃以外にも銃士の魔力弾を放っているがヴァジュラの連射もアグニの強弾も反射されてしまっていた。

（反射出来るとはいえこちらからの遠距離攻撃はあまり効果ない）

対するレギナスも本来接近戦が得意なのだが速度はクロスが上で尚且つなかなか間合いを詰めてこないので遠距離技で対抗してきたが…

（…いい加減付き合う必要もないな、ここから先は…）

（あいつ相手に近距離はあまりしたくないけど仕方ないよなぁ…ここはやっぱり…）

（（接近戦！！））

互いに合図もないのに同時にかけ出す…踏み出す一歩で既に2人の姿が消えた。

「シェルブリット！」「牙狼一進！」

速度重視の闘士となり渾身の一撃を一直線に迫ってくる槍へとぶつける。

ガキンッ！　キイーン！

鋭い音と共に拳と槍が弾ける。
その瞬間、強烈で不可解な光が飛び出たが一瞬で消えた

（っ！？な、なんだこの感覚は！）
（…今のは？）

レギナスは何かを感じたがすぐに槍を反転させ、槍のノズルを吹かし近距離から再度技を放つ。
クロスは未だに向こうを向いたままだ。

「牙狼一進！」「ストライク・カウンター！」

クロスは体を浮かせ右足のジェットを最大噴出し左回転すると槍の穂先をかわしレギナスの後頭部へと加速させた回し蹴りを放つ。

「ぐっ！」

だがレギナスもただ吹き飛ぶだけでなく槍を地面に突き刺し蹴り飛ばされた勢いを乗せて体を回転させ回し蹴りをクロスへと御見舞した。

「がっ！」

クロスは地面に手をつき、受け身を取るとすぐにレギナスへと向かう。
対するレギナスも頭の痛みを気にする事なく槍を振う。

「「うおおぉ～～！！」」

クロスの拳や蹴りをかわし、時に柄で受け流しつつ
レギナスは素早い突きや柄の薙ぎ払いなどで応戦する。
しかし、両者ともに掠る程度で未だにまともに当てられずにいた。
クロスとレギナスではただでさえ武器のリーチの差があるのに
体系からもリーチに差が出てしまっている。
だが、レギナスにとってもリーチの短い相手に懐で攻撃されるのは
かわしにくい事なのだ。

「プリズムクラッカー！」「……っ、リフレックス！」

近距離からの仙気弾を反射した所で2人が飛び跳ねるように間合いを開けた。
この間、2人が駆け出してからわずか数秒の攻防である。

（…今の、もしかして…）
『はい、マスター間違いありません…』

クロスの読みに頷くノア。

「驚いたな、この前とは大違いの強さだ…」
「そりゃどうも、あの時よりは幾分冷静なだけさ」
「そうか…お前とは話をしたかったのだが…」
「それはこっちもだ…けど」
「「まずはこの前の決着をつける！！」」
『マ、マスター？…目的代わっていますよぉ～？』
＜無理です、ノア様。こうなったマスターは止められませんから…＞
＜……バトルマニア＞

デバイス達の呟きも聞こえていないのかクロスは右手に仙気を集中させ

「これならどうだ、シェルブリット…バースト！！」

大きな拳のような仙気弾を放った。

「ちぃ、リフレックス！」

レギナスは槍を構え反射しようとするが今までのようにすぐには反射出来ずに
一瞬身動きできずに固まってしまった。

「やっぱりお前の鏡は魔力ならすぐに反射できても仙気はすぐに反射出来ないみたいだな」

クロスは通常仙気はアーマーのみに使用して魔法や銃撃には魔力を使用している。
アルガス魔法は仙気で本来の威力になるが真名発動で魔力でも十分に発動できるようになった。
仙気を使う事でクロスの正体が明らかにならないようにするためだ。
以前の戦闘では不利な状況だった為仙気で戦闘を行っていたが
今回は1対1でユニゾンも完璧なので魔力で戦っていた、そして気付いた違和感。
魔力での魔法はすぐに反射出来るのに仙気での魔法は反射するのにタイムラグがあると言う事
前回レギナスに反射されたプリズムアローは仙気だったが
あの後、ラファールのデータを元にレギナスの槍が魔法を反射するまでの時間を研究していたのだ
そして、今回の魔力攻撃では研究していたよりも反射が速いのに驚かされたが
逆に違和感がわいた、そこでクロスは仙気による攻撃を行い…

「シェルブリット！」
「何！？」

レギナスの頭上にギアで転移し、左手で輝く拳を放つ…狙いはレギナスではなく

「ぶっ壊れろぉ～！！」

レギナスの槍…正確には何度となく魔法を跳ね返してきた鏡を狙っての一撃。

「させるかぁ！！」

叫びながらレギナスは槍を振り上げまだ反射途中のバーストをクロスへと向ける。

「自分の攻撃で吹き飛んでしまえ！！」
「……かかったぁ！」
「何っ！？」

ニヤリと笑みを浮かべるクロス。
握った左拳を広げ反射してくるバーストを掴み、そのまま押し返した。

「ばかなっ！魔力弾を押し返してくる！？」
「魔力じゃない……仙気だ！！」

左右の拳から離れた仙気による攻撃、普通に放ったのでは悟られるかもしれない

なので一発目を『わざと』反射させるように放ち一瞬でも動きを止める。
その隙に死角へと飛び二発目、そのまま通ってもいいが
簡単に割れる鏡ではないと思っていたので
レギナスが自分へと反射させやすい角度からの奇襲に変えたのだ。
そして、反射されたシェルブリットバーストを左手で更に反射させ押し込む。
ノアとのシンクロ中だからこそ出来る仙気の高速並列処理だ。

ピキ…ビキッ

徐々に鏡にヒビが入る…クロスは駄目押しで右手からもう一発放とうとしたが

カッ！！

突如鏡から先ほどと同じ…しかも更にまばゆい光が溢れた。

なのはと撃ち合いをしているヴィータ。
フェイトと鍔迫り合いをしているシグナム
アルフと力比べをしていたザフィーラ。
そして、結界外で隠れて結界破壊を試みていたシャマル。

４人の守護騎士達にも異変が起こっていた。

「あぁぁあ！！あ、頭が・・・」
「なんだ・この・・痛みは・・・ぐっ、今までこんな痛みは」
「か、からだも・・・熱い」
「はぁはぁ・・・どうしちゃったの・・かしら」

その様子に戸惑うなのは達。
そして、クロスのいる方から光が皆を包み込み……

「ここは・・・どこだ?」
「何?この映像・・」
「な、なんだこの破壊された街は!」
『マ、マスター・・』
「あぁ、どうやら全員何かを見せられているらしいな・・」

クロスやレギナス達は皆とある映像を見せられていた。
そこは古い城や街並みが徹底的に破壊されている映像だった。
しかし、逃げまどう人々の姿も・・・倒れている姿もそこにはない。
そこにいるのは・・・

「あ・・あぁ・・」
「な・・んだよ・・・アレ」

紅蓮の廃墟に立つ大きな生物。
槍状の甲羅を生やした手足、胴体からは紫色の光が点灯し、背面には４枚の翼状の突起が
そして、頭部で光る単眼で辺りを見渡しながら両肩から2本ずつ計４本生えている触手で

人々を文字通り吸収している禍々しい怪物の姿が・・・
触手に突き刺され体を吸収されている人々の悲鳴が響き渡る・・・

「い、いやあぁ～!」「だずげ・・・」「じにだぐ・・・な・・」

「っ!!」

この世のものとは思えない地獄絵図に目を、耳を閉ざそうとするなのはとフェイトだが
頭に埋め込まれるように言葉が響く…

【それは、邪悪にして凶悪な…太古に存在した恐るべき邪神…その名は】

【　イ　リ　ス　】

全ての人々を吸収し終えたのか怪物は体中から光を発しながら咆哮する…

続く

第３２話　「それは、邪悪にして凶悪な…」（後書き）

カガヤ：「やっと出せた～！」

クロス：「なぁ…最後に出てきた怪物って」

カガヤ：「平成ガメラシリーズ好きなんで…特に２作目と３作目！」

ノア：「だからって怪獣出しますか…」

カガヤ：「防衛プログラムの方が怪獣でしょ？」

クロス：「いや、まぁ…で…こんなの出して色々大丈夫なのか？」

カガヤ：「強力な援軍も尽くし大丈夫でしょ♪」

ノア：「原作通りの病院で御対面イベントは？」

カガヤ：「そこはヒミツ…でもあのＫＹ馬鹿猫仮面は出るよ」

ノア：「うわぁ…酷い言われよう」

クロス：「原作でなんの痛い目も見てない事にかなり憤ったよなお前」

カガヤ：「そっ、だから…ここでは……ニヤソ（邪笑）」

ノア：「こ、こわっ！！」

カガヤ：「そんなわけで感想やら誤字訂正やら待ってます！…ちなみに今回出てきた怪物に関してはあとで過去編やるんでその時に…」

第３３話　「仮面の男と深まる謎」（前書き）

３７．１℃って……溶けるっての！ここホントに北ですか！？

第３３話　「仮面の男と深まる謎」

海鳴市　臨時作戦本部

「クロノ、そっちはどうなっているの！？」
『わかりません、突然結界内が光に包まれたかと思ったら一瞬で消えて』

リンディが見つめるモニター内では茫然と佇むクロス達の姿が映っている。
シグナム達も含め全員の顔色が悪い…特になのはは今にも倒れそうだ。
クロスの表情はよく見えないが血がにじむほど拳を強く握っているのが分かる。

「一体何が起きたの…ともかく、クロノ執務官は引き続き探索を続行して下さい」
『了解です、リンディ艦長』

何かが起きた、それだけしか分からないリンディだがそれがタダならぬ事だと言うのは
なのは達の表情でよくわかった…恐怖と絶望を味わったかのような表情を見れば…

とある管理世界

「ぐっ・・今のは・・なんだ！」
『シグナム、ザフィーラ・・一度レギナスの元へ合流するぞ』

『・・・あぁ』
『そうだな・・』

不可解な映像を見せられたシグナムは同じく映像を見せられ茫然としているフェイトを一瞥し
レギナスの元へと飛んだ。

「あっ！」

正気に戻ったフェイトは慌ててシグナムを追いかける。
同じようにヴィータやザフィーラやなのは達もクロスとレギナスの元へと集合した。

「クロス・・・いまのは・・・ひっ！！」
「クロス・・あんた！！」

立ちつくすクロスへと声をかけたフェイトとアルフは思わず顔を引き攣らせた。
クロスの瞳が・・血のように赤く黒ずんでいる。
以前にもプレシアに対して同じように赤くなった事はあったが今回はその比ではない。
表情も行き場のない怒りを溜めこんでいるかのように鬼のような形相だ。

「なんだよ・・・今の・・・なんなんだ・・・答えろレギナス！！」

殺気を撒き散らしながらレギナスの胸倉をつかむクロス。
しかし、レギナスはそれに何の反応も示さずに

「闇・・・夜天・・封印・・・復活・・・イリス」

うわごとのようにブツブツと何かを呟くだけだ。
シグナムが突き離そうとする前になのはとフェイトがクロスを引き離した。

「クロス・・・クロス！」
「あっ・・・フェイト、アルフ・・」
「良かった・・元に・・戻った・・」

泣きながらクロスにすがりつくフェイトとアルフ。
その様子からクロスは自分がまた怒りで堕ちかけた事を悟った。

「ごめん、とりあえず大丈夫だよ・・・それより3人共大丈夫か？」
「わたしは・・どうにか」
「フェイトに同じく・・だね」
「そうか、ノアは意識あるみたいだけど反応がないんだ・・・なのは？」

ふと先ほどから静かななのはの方を見ると

ドサッ

「「「なのは！？」」」

なのははうつろな目のまま力なく倒れこんでしまった。
クロスはなのはを抱きかかえて額に手を当てる。

「大丈夫、気絶しただけみたいだ・・流石にあんなの見せられたらな」

クロスはフェイトとアルフを見回し、少し離れた場所に移ったシグナム達を見る。

一方のシグナム達はクロス達の様子を窺いながらも念話でやりとりをしていた。
様子のおかしいレギナスを庇うようにシグナム達が立ちはだかる。

『・・どうする？』
『どうするもこうするも・・ここは引くしかないだろうな』
『賛成・・正直ものすごく気持ち悪い・・こいつらの相手してる余裕ねぇよ・・』
『そうだな。シャマル・・結界は破れそうか？』

クロス達を見据えながら念話で撤退の準備をするシグナム達。

『・・・』
『・・シャマル！！』
『は、はい！！結界は・・闇の書の力を使うしか破れそうにないわ』
『そうか、仕方ないな。それで結界を破壊してくれ・・急ぎ撤退するぞ』
『わかっ・・っ！？』

いきなりシャマルからの念話が途切れてしまった事にシグナムは顔をしかめた。
その頃、シャマルは・・クロノのＳ２Ｕを突き付けられていた。

「・・・ここまでだ、その書を渡して投降してもらおうか」
『クロス、闇の書を抑えた。やはり結界の外にいた、そっちは大丈夫か？』
『あ、あぁちょっと色々あってな。詳しい話は後でするけどなのは

が気絶してしまったんだ』
『なにっ!?』

クロノの意識が一瞬シャマルから離れたその時。

「ぐはっ!!」

いきなり横っ腹に何者かに蹴りを入れられ吹き飛ばれた。

『?・・どうした、クロノ!』
『・・・』
「ん?どうしたんだい、クロス?」
「あぁ、クロノが闇の書を持ったシャマルを見つけたらしいんだが、何かあったらしい」
「じゃあ!すぐに行ってあげて!」
「でもなのはも気絶したこの状態で離れるわけには・・」
「向こうもなんだか立て込んでいるみたいだし、あたしら2人で大丈夫さ」
「・・・悪い、頼む!ノア、行けるな?」
『・・はい、マスター。もう大丈夫です!』
「『ギア!』」

ノアは意識が朦朧としていたがクロスのひとことで元に戻ったのか前のようにユニゾンが不安定になると言う事はないようだ。
そして、クロノの元へと跳ぶ。

結界の外ではクロノと仮面をかぶった謎の男が対峙していた。
クロノの魔力弾をかわしながら肉弾戦をしかける仮面男。

「たりゃあ!!」

クロスは闘士となり間に割り込むように飛び蹴りを放つが

「ふんっ」

「なっ、片手で受け止めた!?」

クロスの蹴りを片手で掴み、そのままクロノの方へと放り投げた。

その時、上空を雷雲が覆い始めた。

シャマルの方を見ると闇の書に何かを唱えている。

「させるか!」

詠唱を中断させようと構えたクロスとクロノだが

「はっ!」

「わっ」「っ!」

またしても仮面の男に蹴り飛ばされてしまった。

「今は動くな、それが正しい事だとすぐに分かる」

「・・何を!」

意味不明な言葉に仮面の男を睨むが・・・結界を貫く黒と紫の雷が降り注いだ。

「しまった!」

気付いた時にはもう遅く結界は音を立てて崩れ去り、そこから幾つかの光が飛び去り

後にはシグナム達も仮面の男の姿もすでに消えていた。

フェイト達はアルフが張った防御陣のおかげで無事のようで
クロス達の元へと跳んできた、なのははアルフに抱えられている。

「みんな、無事だったんだ。良かった」
「アルフの防御結界のおかげだよ」
「ザフィーラがいきなり、防御魔法で皆を守れ。って言ってきたから急いで張ったんだよ」
「シグナム達には逃げられたけどね」
「そっか・・こっちも逃げられた、変な仮面野郎のせいでな」
「・・・・」

『お疲れ様、ともかくみんな戻ってきて頂戴、なのはさんの手当もしないと・・』

モニター越しにリンディの声が虚しく辺りに響き渡っていた。

海鳴市　臨時作戦本部

本部に帰還した一同だが、その顔は暗く・・重い。
一先ず気絶したなのはをベッドで休ませて報告となった。
そこでリンディ達はクロス達が何を見たかを知った。
クロス達が見せられた時にデバイス達にも映像が転送されていたらしく
改めてその映像を見る事となった、フェイトとアルフにはなのはの傍に居てもらっている。

「こ、これは・・・」
「ひどい・・」

エイミィは思わず吐き気を覚え、口を抑えた。
クロノも直視するのはかなり辛そうだ。
しかし、リンディは目を見開き驚愕しきっている。

「この触手・・・まさか！」

そしてリンディは手元のコンソールを急いで操作してとある映像を映し出す。
映像には一隻の艦が何かに乗っ取られている映像だった。
その艦の名は・・

「・・父さんの」
「そう、アースラの同型艦エスティアよ・・辛いでしょうけど、次をよく見て」

そう言うリンディの顔も辛そうだったがモニターから視線を外そうとはしない。
モニターでは制御を失ったエスティア内部からいくつもの触手が伸びてきた。

「あれは、イリスの触手！？」
「そう、まさかと思ったけど」

エスティアから伸びた二本の触手とクロス達が見たイリスの触手。
二本は同じ形をしていた、さらに。

「２つの触手から同じ魔力反応があります・・間違いありません」

ノアが解析した結果でエスティアの事故にイリスが関わっている事が判明した。

「でも、あれは闇の書の暴走が原因、なんですよね？」
「えぇ、エスティアの管制システムを乗っ取りアルカンシェルでグレアム提督の艦隊を狙ったの
そこで提督はやむを得ず・・先に自艦のアルカンシェルでエスティアごと消滅させたわ」
「この触手についての調べはどうなったんです？」
「闇の書は蒐集した魔導師の魔法や生物の姿形になれるから、蒐集した生物の一部だと断定したの」
「それが大昔の邪神イリスと同じ触手だった・・まさか」
「プレシア達にもその事を伝えて資料を探してもらう事にしましょう」

モニター画面を戻し一息付きお茶を口にするリンディ。
長い沈黙が続く・・・
そこへ、目を覚ましたなのはとフェイト達がやってきた。

「あ、なのは。もう大丈夫なのか？無理しなくていいんだぞ？」
「うん・・平気、ごめんなさい。心配かけちゃったね」

あはは、と力なく笑うなのは、まだ顔色は優れない。

「無理もないよ、私達でもあの映像は・・言葉に出来ないほどだもの」
「今日は泊って行ったらどうかしら、桃子さんには私から伝えておくわよ？」
「いえ、大丈夫です。家に帰ってからゆっくり休みますから・・」
「そう？じゃあ、クロス君。なのはさんを送ってあげてね」

無理に引き止めるよりも家族のいる所で休んだ方がいいと判断した

リンディは
夜も遅いのでクロスに送らせた、フェイトやアルフも顔色が悪いので早めに休んでもらう事にした。

翠屋

道中ずっと無言だったクロスとなのは。

『なんて、声かければいいかわからないや・・』
『マスター・・・』

そして、なのはの家の前に着いた。

「じゃあ、おやすみ、なのは。しばらくは休んだ方がいい、何かあれば俺達で対処するから」
「うん・・ごめんね、クロス君。ありがとう」

いつもより素直に聞き入れるなのはに少し不思議に思ったクロスだがあんな事があっては無理もないと納得し、帰ろうとした。
玄関に入ろうとしたなのはに呼び止められた。

「・・クロス君」
「ん？どうしたなのは？」
「クロス君は・・・ああいうのは見慣れているの？」
「え・・・まぁ・・な」

言葉少なに辛そうに返すクロスに悲しそうな顔を浮かべるなのは。
しかし、顔を背けているクロスには見えていなかった。

「それが、どうかしたの？」
「ううん、なんでもない。おやすみなさい！」

飛びこむように玄関に入ったなのは。
クロスは黙って家を見上げていたが、やがて静かにその場を去った。

続く

第３３話　「仮面の男と深まる謎」（後書き）

カガヤ：「・・・・・・・」

クロス：「え～・・・作者が連日の猛暑で死んでるので今回は俺達だけでやります」

ノア：「とはいえいつものグダグダトークだけですけどねぇ♪」

クロス：「おいこら！」

ノア：「何やらなのはちゃんに不穏な空気が・・」

クロス：「まぁ・・フラグ強化のテコ入れだとかなんとか」

ノア：「ぶっちゃけなのはちゃん達よりスバルやギンガ、ティアナの方にフラグ立ってるようにもみえますからねぇ」

クロス：「・・・・・」

ノア：「んで、話の展開上はやてちゃんにもフラグ立ちそうな予感？」

クロス：「正直勘弁して下さい　ｏｒｚ」

ノア：「マスターが何で悩むのかわかりませんけど…ではでは感想や叱咤激励お待ちしております！」

第３４話　「管理局地上本部　レジアス・ゲイズ少将」（前書き）

たびたび名前だけ出ていたＳｔｓ編のキャラが登場します。
この作品中でこの人が１、２を争うほどに性格変わってます（笑）
まぁ、もっと変わった人も沢山出てきますけど（ボソッ）

第３４話　「管理局地上本部　レジアス・ゲイズ少将」

海鳴市　臨時作戦本部　クロスの部屋

なのはを送り、自分の部屋へと帰ってきたクロスとノア
軽くシャワーを浴びてベッドへと身を沈める。
下ではリンディ達が本局スタッフと打ち合わせをしているが
クロス達は疲れを取るようにと言われこうして休ませてもらっているのだ。
手鏡で自分の顔を見てあの映像を思い出す
あんな地獄絵図を見ると胸が怒りで満ちて来る。
今回は今まで以上に堕ちかけた、気をつけなければならない
そして、起き上がり窓の外の月を見て呟く。

「・・・イリス」
「・・マスター」

そして、ラファール内のイリスの映像を再度映し出す。
顔はあるが、表情や感情は読みとる事が出来ない。

「まるで生物兵器だな」
「生物兵器・・・」

クロスが何気なく呟いた言葉にノアが反応する。

「どうした？」
「・・思い出しました！」
「何を？」
「いいですから、来てください！！」

「お、おい！」

言うが早いかノアはクロスを引きずるように下へと引きずって行った。

「それでノアちゃん。何を思い出したの？」

騒ぎを聞きつけてきたフェイトと若干眠そうなアルフも交えての臨時会議となった。

「はい、以前お話ししたアグドラスの事で思い出した事があるんです」

「思い出した事？」

そうして、ノアは光天の書を出し何かを呟くとモニターにいくつか映像が映し出された。

そこには尖った脚をもつカブトムシとカニを合わせたような5つ目の怪物と

逆三角形の鋭い顔をした大型の鳥のような怪物の映像だった。

「なんだこいつらは・・」

「これらはアグドラスがアルハザードへ攻めてきた時の生物兵器です。アグドラスは

1度目の侵攻時には多数の部下を連れていましたがアルガス達によって壊滅。

そして、2度目の侵攻時には魔導師ではなくこの2種類の生物兵器を引き連れていました。

鳥のような怪獣の名は『ギャオス』そして、地上を侵攻しているのが『レギオン』

共にアグドラスがどこからか引き連れてきたもので、その経緯に

関しては一切不明です」
「こんな怪獣達にアルハザードは滅ぼされたのか・・・」
次に映し出されたのはギャオスと呼ばれた怪獣の全体像だ。
隣のにはイリスも映し出された。
「このギャオスなのですが・・・イリスに似ていると思いませんか？」
「・・・そう言われてみれば」
「頭部と・・翼の部分が似ているような・・」
実際に言われてみれば両者にはどことなく似ている部分がある。
「このギャオスとイリスの魔力反応の比較はできないの？」
リンディの質問にノアは力なく首を横に振る。
「すみません、両者共にアルハザードの魔導師達が命と引き換えに全てを消滅させたので・・
研究する時間がほとんどなかったのです。それほどまでに恐ろしい存在だったんです。
一刻も早く消し去る必要があったほど・・」
映像が消えるとリンディは場を纏めるように手を叩き
「分かりました、この件も追加項目として無限書庫に報告する事とします」
そして、クロスとノアに目を向けると溜息をついた。

「本当はノアちゃんにも無限書庫に行って光天の書と照らし合わせてもらいたいのだけど・・・」

困った顔を浮かべるリンディとクロノ、エイミィ。何かあったのかと聞こうとしたクロスだが
どこからかラファールへと通信が入った。

『クロス、聞こえているか?』
「「レ、レジアス少将!?」」

突然の通信相手にクロノとエイミィは驚いた、がリンディの方はあまり反応がない。

『おぉ、リンディ達もいたのか・・ちょうどいい、急ぎ伝えなければならない事がある』

通信相手は管理局地上本部のレジアス・ゲイズ少将だった。
クロスは通信を巨大モニターに移し替えリンディ達とも会話できるようにした。

「クロス、ノア。この人は?」
「この人はレジアス・ゲイズ少将、地上本部の副司令で母さんやゼスト隊長の上司に当たる人だよ」
「ちなみにフェイトちゃんやプレシアさんの便宜を図った陰の功労者だから後で挨拶するといいですよ」
「えっ!あたしらのかい!?」

フェイトがクロスに小声で尋ねた事への思わぬ返答にアルフが大声を出してしまった。

『・・・』
「あ、あはは・・すみません、続けてください・・・」
レジアスに無言で睨まれ思わずエイミィの影で身を縮めるアルフ。
「大丈夫、この人見た目は怖いけど・『オッホン!』そ、そそそんなに怖くないよ、ホントだよ?」
「んで、こんな夜中になんの用?おっちゃん」
「お、おっちゃん!?」
クロスの軽口に驚くクロノだが当の本人は気にする事もなく
『実はな、リンディはもう知っていると思うが・・お前が数か月前に捕えた暗殺者が脱獄したのだ』
「えっ、まさか!」「アジーン達が!?」
なんの事か分かっていないフェイトとアルフにエイミィが以前クロスが捕まえた暗殺者達と軽く説明をする。
そして、クロスはリンディより脱獄に関する通達書を見せてもらった。
「って、これみたら脱獄したの数日前じゃないか!なんで今頃出回ってくるんだよ」
「さっき言いかけた事はこれの事なのよ・・レジアス少将、お聞きしたいのですが
本来ならば脱獄した段階ですぐに全支部へと連絡が回るはずではないのですか?」
クロスとリンディの指摘にレジアスは軽く額を抑え

『うむ、分かっている・・本来ならばこれは極秘事項なのだが』

レジアスはそう言うとちらりとフェイトとアルフへと目を向けた。

「おっちゃんがそう言うのって大抵どういうのか分かっているよ・・
でもフェイトはもう立派な
嘱託魔導師だし、別に隠したって俺が後でばらす事になるよ？」

クロスの言葉にレジアスはさらに頭を抱えながら

『お、お前と言うやつは・・・いいだろう。もしもの時の責任はリンディに押しつけてしまえ』

「ちょ、レジアス少将！？」

『話をつづけるぞ、実はな・・上層部の一部が脱獄の手引をしたのだ』

「「「・・やっぱり」」」

予想出来た答えなのかクロス、ノア、リンディの三人は口を揃えて溜息をつく。

クロノとエイミィはまだしもフェイトとアルフは少し話についていけなくなっていた。

『・・そんな顔をするな！溜息なぞ儂の方がつきたいのだぞ！』

「はいはい・・・んで、そのクソ野郎どもは逮捕したの？いや、してないか・・」

『そう腐るな、逮捕したくても出来なかったのだ・・死んでいたからな』

「・・・はっ？」

『アジーン達と接触でもしたのだろう、全員殺されていたよ・・』

「脱獄の手引したからってあいつらと直接接触するなんて・・馬鹿

じゃないの？」
「そんな馬鹿ばっかりだったら今頃管理局は真っ白だと思いますけどね」

クロスとノアの毒舌に苦笑するしかないリンディとレジアス。

『ともかくだ、そういうわけで体面を保つために早めに処理したかったようだが・・
　時すでに遅く、もう奴らは遠くに逃走してしまったのだ・・・そちらの世界へな』
「な、なんだって！」「うそ・・」「えっ！？」

レジアスの最後の言葉に一同は騒然となる。
直接会った事はないにしろ、リンディ達はクロス達からの報告でアジーン達の事は聞いている。
クロス、クイント、メガーヌの三人を相手にして圧倒、戦闘不能状態にし
新しい力に目覚めたクロスとノアによって不意をつき辛くも逮捕出来たというプロの暗殺者
そんな3人が管理外世界であるここ海鳴市へと逃走してきたのだ。
アースラスタッフの観測の網をすり抜けて。

「ちょっとそれはシャレにならないんじゃない？」
『その事に気付いたのもつい先ほどなのだ、どうやら馬鹿共が用意した逃走先がそこだ・・
　クロス、ノア、お前達が今いる世界というわけだ』
「つまり、そのクソ野郎が・・」
「私達のいるこの世界へ導く事で私達を暗殺するように仕向けた、と？」

クロスとノアの表情が険しくなる。
自分達のせいでこの世界の人々に危機が及ぼうとしている。
リンディはそんな2人の頭に優しく手を乗せ

「駄目よ2人共自分を責めたら・・今は被害が出る前に捕まえる事を考えましょ、ね？」
「「・・はい」」
『そちらも今は闇・・夜天の書の件で大変なのは分かっている。今回の件は管理局上層部が原因だ。
そこでいくつか手を打った、上の馬鹿共を黙らせてな』
「いくつかの手？」
『ゼスト達をそちらに向かわせた、明日には到着するだろう。名目上は逃走犯の追跡だが・・
ついでに夜天の一件が終わるまでそこにつかせる事にしている、それと・・』

レジアスは一端言葉を切りフェイトの方へと視線を向ける。

『君がフェイト・テスタロッサか』
「あ、はい！フェイト・テスタロッサです！！」

いきなり名を呼ばれすくみあがるフェイト。

『そう堅くならなくてもいい。君の母、プレシア・テスタロッサだが・・』
「母さんが、何か？」

母の事で何かあるのかと不安になるフェイトだったが

『無限書庫へは数人調査スタッフを送った、入れ替わりでプレシア

をそちらに配属にしたぞ』
「・・・え？」
『あとついでに新型のデバイスも持たせてある、魔法使用許可も出した』
「「「「・・・え、えっ？」」」」
『まぁ、暫定処置だから配属に関してはそちらの一件が解決するまでだがな』
「「「「えぇ～！！？」」」」

フェイト、続いてアルフ、クロノ、エイミィと驚きの声が次々と広がった。
クロス、ノア、リンディは苦笑しっぱなしだ
プレシアは執行猶予中の身なので探索魔法以外にはリミッターをかけられ使う事が出来ない。
さらにデバイスもクロスとの戦いで修復不能な程に壊れてしまった。
なのに、あっさりと許可されてしまったのはレジアスが色々手を回した結果だ。

「流石、おっさん。脱走の一件を槍にして上層部を動かしたのか、あくどいねぇ～」
『ふん、元はと言えば上層部のせいだからな。無理でもなんでも通さねばならん
隠してもどうこうない事の代わりに【少し】要求をすればいいだけだ』

管理局上層部の一部が脱走に関与しているとの情報は外部には伏せられている。
そのせいで緊急配備が遅れたのだが・・・
実際に関与した者は全員殺されているので判明したところで筋の立つ言い訳はなる。

それよりもそれを武器にレジアスの言う少しの要求を通した方がマシだ。
不敵に笑い合うクロスとレジアスを見て
（クロスやゼスト隊長の腹黒さって・・・少将の影響なのでは・・）
などと思うリンディ達であった。

『あとはアースラへのアルカンシェル実装も既に着工済みだ、だがもうこれ以上の事は出来ん。
厳しい状況だろうががんばってくれ』
「「「「「はい」」」」」

互いに敬礼をし、通信を終え・・・

『あぁそうだ・・クロス』
「えっ、まだ何か??」
『オーリスが寂しがっていたぞ?たまには会いに来てやってくれ』
「えっと・・・考えておきます（汗）」

今度こそ通信が終了した。

「・・ぷはぁ～」「な、なんか疲れたよ～」
「あはは、お疲れ、２人とも」

グレアム提督とは違った威圧感を持ったレジアス少将との会話は不慣れなフェイトとアルフには重荷になったようだ。

「私は通信するのまだ少ししかしてないけど、未だに慣れないのよねぇあのオーラ・・」

「だが、有能なのは間違いない・・・良識人とは言い難いが」
そう言いながら自分の肩を揉むエイミィに苦笑をするクロノ。
「あの人は基本的に偽悪者のような人だからそう感じちゃうのも無理はないわね」
リンディはみんなに飲み物を配りながらそう微笑んだ。
「・・偽悪者？」
「あれでもかなり以前に比べたら丸くなったのよ。ねぇ、クロス？」
リンディに意味ありげな笑顔を向けられても涼しい顔でジュースを飲むクロス。
「ホント、大したものだわ・・・レジアス少将にあんな軽口叩ける９歳児なんて」
「なんだかクロスなら納得出来ると言うのもまた凄まじい・・」
「当然、マスターは超ビッグな大物なんですから」
「俺はそんなんじゃ・・・ってかなんでお前が無い胸張っているんだ？」
「むぅ～マスターそれセクハラですよ！それに私はまだこれからです、まだ９歳だからです！
無いのはフェイトちゃんやなのはちゃんだって同じでしょ！アルフは・・・
うん、犬だからってことで♪」
ビシっとノアに指を刺されたアルフは獣形態となり
「ちょっと、犬だからって何さ！私は狼だぁ！！」

「・・・・（ぺたぺた）・・・（シュン）」
「フェイトちゃん?まだまだこれからだからそんなに気にしなくても大丈夫だよ?」
「はぁ・・難題ばかりが押し寄せていると言うのに何をやっているんだ・・・」
「まぁ、いいんじゃないかしら?私達らしくて」

クロノの苦悩にリンディは笑顔で答えた。

「その私『達』に僕も含めないでほしい・・・」

クロノの呟きは喧騒の中で誰の耳にも届かなかった。

続く

第３４話　「管理局地上本部　レジアス・ゲイズ少将」（後書き）

クロス：「レジアスのおっちゃん登場！・・モニター越しだけど」

ノア：「かなり原作に比べると丸くなっているような??」

クロス：「作者によると『クロスとの出会いで考え方を改めた顔は四角だけど丸いおっさん』だそうで・・・」

ノア：「ぶっ！！四角いって！！（笑）」

クロス：「作者は初見でレジアスのおっさんの頭蓋骨を見てみたいと本気で考えたキャラだからなぁ・・・」

ノア：「気持ちはわかる気がしますけどね」

クロス：「さてと、暑さで他にやる気がなかった作者が無理して書いた久々の同日更新作の駄文ですがいかがでしたか?」

ノア：「描写など毎回試行錯誤おっかなびっくりで書いていますが感想や叱咤激励、意見や疑問などあればメールでもなんでもいいので送って下さい☆」

クロス、ノア：「まってまーっす♪」

第３５話　「はじめての恐怖と絶対の誓い」（前書き）

長文の癖に今までで一番の駄文…
心理描写がうまくなりたいなぁ、状況とかは頭に浮かぶけどうまく書ききれない…

第35話　「はじめての恐怖と絶対の誓い」

翌日、なのはから具合が悪いので今日は休むと連絡が入った。
やはり、昨日の事でショックを受けたのだろうと思ったクロスは
念の為ノアに一足先にお見舞いに行って話し相手になってもらおう
とした。

「まっかせてください！」

と意気込んでノアは翠屋へ向かったが

「おい、姿消すの忘れてるぞ！」
「あ、忘れてました」
「大丈夫…なの？」
「…不安になってきた」

一株の不安を覚えながらもクロスとフェイトは学校での授業を終え
放課後になのはのお見舞いに行く事にした。

「なのはちゃん、風邪かな。最近寒いから」
「うん、お見舞いに行きたいけど今日はどうしても外せない用事が
あるのよねぇ」
「私も…」
「というわけで！」

アリサはクロスの方を向きビシッと指をさした。

「私達の分までしっかりとお見舞いしてくるのよ！」
「お、おう…」

しかし、内心ではクロスはアリサ達が見舞いに来れなくて良かったと安どした。
今なのはの傍にいるノアの話では精神的な不調なようなので原因が原因なだけにアリサ達がいない場でしっかり話した方がいいと思ったのだ。

「あれ？校門の所に誰かいるよ」

すずかの言う通り校門には大人の女性が2人何やら談笑をしている。

「あ、フェイト、あれって」
「う、うん」
「クロス君、フェイトちゃん、知ってる人？」

クロスとフェイトが驚いているとその2人はこちらへ駆け寄ってきて

「クロス♪」「…フェイト」

飛び付いてきた。

「「か、母さん！」」
「「お母さん！？」」

2人の女性とはクロスの母クイントとフェイトの母プレシアだった。

「はじめましてこんにちは！息子がお世話になってるわね、クイント・ナカジマよ」
「…プレシア・テスタロッサ、よろしくね。すずか、アリサ」
「「は、はじめまして…」」

「う～ん、２人共なのはちゃんやフェイトちゃんに負けず劣らずの可愛さねぇ～
さてはて、どっちが将来の義娘になるかしらぁ～？」
「母さん、いきなり現れて何を言ってるの！」
「そうよ、クイント！・・それは当然うちのフェイトに決まってるでしょ！」
「母さんも何を言ってるの！！／／／」
「「……／／／」」

アリサとすずかは突然の出来事に茫然としていたがクイントの言葉の意味を理解すると顔を真っ赤にして固まってしまった。

「さてと、コホン…いきなり驚かせてしまってごめんなさいね」
『全く…なんでわざわざ学校まで来たのさ、母さん』
『え～？だってクロスが通う学校を一度見たいと思って、プレシアも連れて来ちゃった』
『わ、私は別にゼストやメガーヌ達と本部で待機していると言ったのだけど…』
『でも、私は母さんが迎えに来てくれて、なんだか嬉しかったよ』
『ほら、クロスもフェイトちゃんを見習ってもっと喜びなさい♪』
『あ～はいはい、喜んでるヨロコンデル、きてくれてありがとうおかあさま』
『え～ん、プレシア～愛しの息子が冷たいよぉ～』
『あなたってクロスの事になるとキャラが変わり過ぎよ？』

そんな念話が２組の親子で繰り広げられているとは夢にも思っていないアリサとすずかは
ただただクイントに圧倒されている。

「い、いえいえ！…クロス君のお母さんってすごいわね」
「あたま痛くなってきた…」
「あ、あははは…」

その後、迎えに来たアリサの車に乗せてもらい事になったクロス達。
途中車内ではクイントとクロスの親子漫才のような会話が続き
最後にはアリサとすずかは酸欠するかの程に笑い転げていた。
そして、車はあっという間に翠屋に到着。
アリサ達と別れ、翠屋の中へと入ろうとしたが

「どうしたの母さん？」
「い、いえ…ちょっと……やっぱり私はこんな所は場違いだわ」
「そんな事ないよ、大丈夫だから…一緒に行こう？」

プレシアは翠屋へ入るのを躊躇っているのか、難しい顔で立ち止っている。
そんな母親の手を引いて笑顔で翠屋へと入るフェイト。
その光景を微笑ましく見守るナカジマ親子であった。
そして、クイント達が桃子達と店で挨拶している間にクロスとフェイトはなのはの部屋へ

「わざわざお見舞い来てくれてありがとう、クロス君、フェイトちゃん」
「気にしないでいいさ。はい、これ今日でたプリントだよ」
「なのは、気分はどう？」
「うん、ノアちゃんがずっと話相手になってくれたから大分楽になったよ♪」
「えっへん、ちゃんと護衛兼世話係の任務はしっかりとこなしました！」

「あはははは♪」

わざとらしく敬礼するノアに部屋は笑い声に包まれた。

「ま、今日は色々な事忘れてゆっくり休むといいよ。シグナム達の事は俺達が対処するからさ」

「うん…ごめんね、クロス君、ノアちゃん、フェイトちゃん」

「ずーっと言ってきた事ですけど、そこまで気にしないでいいだよ、なのはちゃん」

なのはの眼前でびしっと人差し指を立てるノア。

そして何を考え混んでいたクロスは真顔でなのはとフェイトに向き直り・・

「…なのは、フェイトもだけど…もうこの件に、いや、もう魔法に関わらなくていんだぞ?」

「えっ!?」

「クロス、いきなり何を!?」

「……」

突然のクロスの言葉に驚くなのはとフェイト。そして、厳しい表情で黙って見守るノア。

「あの映像は確かに悲惨な物だったけど、これから先あれよりも辛いものを見る事になるかもしれない。

それに…俺の予感だけど、多分あの化け物、イリスと戦う事になるかもしれない。

なのはは怖かったんだろ?イリスにだけじゃなく、魔法と……俺の事も」

「っ!!!」

「それはフェイトも同じだろ？」
「ク、クロス…それは」
「ま、しょうがないさ。2人ともまだ9歳なんだし、なのはは魔法に出会ってから
半年くらいしか経ってないのに色々起こったんだ、怖くなっても仕方ないさ
そして、あんなのを見慣れたと言った俺が怖くなっても……あれが普通だよ」

クロスは笑いながらそう言った。
暗になのは達が自分を怖がるのは当たり前だと・・・笑いながらそう言ったのだ
なのはとフェイトの表情が強張る、確かに2人共クロスが言った通りに恐怖を感じている。
あの人々を喰らっていたイリスと、そんな化け物を生み出す魔法と・・そして、クロス自身に。

「…ごめんなさい。私怖かったの、魔法を覚えて空を跳んで、クロス君やフェイトちゃん達と出会えて
それで魔法はとっても素晴らしい物だって思って、もっともっと魔法を知りたいと思って・・
でもあの映像を見て、魔法はああいう事も出来るんだって思ったら…それにあの時のクロス君が
私の知ってるクロス君じゃないように見えて…今までも何度かああいうクロス君見てきたけど
なんだか…すごく怖くなって」
「私も…同じ…」
「あ～…あれか、参ったなぁ。感情高ぶるとああなるんだよ・・全く。自分でも怖い顔と思ったよ」
「でもそれだけじゃないの！昨日クロス君が…」

「ん、俺が？」
「クロス君が・・・ああいうのは見慣れているって言った時凄く辛そうで悲しそうで・・
それを見ても私は何も言えなくて…」
「罪悪感と無力感に襲われて…どうすればいいか分からなくなった、かな？」
「……ん」

クロスに全部見透かされて動揺しているのか、なのはは言葉がうまくまとまらないようだ。
それでも何を言いたいかは伝わったようで

「何回も言ったけどそれでいいんだよ、なのはは今までが頑張り過ぎてたんだ・・
魔法とは何の関わりもない普通の女の子に戻ったって誰も文句は言わないし・・言わせない」
「クロス君…」
「それに俺にも責任あるからな、管理局に関わらせるきっかけは別としても・・
誘ったのは俺のようなもんだしな」

力強い言葉と共に苦笑しながらもクロスは優しくなのは頭を撫でた目に涙を浮かべてなのははレイジングハートを取りだしじっと見つめる。

＜私はマスターの決定に従います＞
「レイジングハート…」

ユーノと出会い、レイジングハートのマスターになり、フェイトと出会い、そして、クロスとの出会い

アースラとの皆との出会い…沢山の出会いを経て魔法に関わるようになって
自分が得た物は一体何か、それをなのはは昨日からずっと考えていた。
時折頭に浮かぶイリスの姿に恐怖しながら…

なのは　ｓｉｄｅ　今朝

「…クロス君達、心配かけちゃったなぁ…」

具合が悪いとお母さんに言って部屋で休み始めて1時間も経っていません。
携帯にはクロス君、フェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんからメールが来ていました。

「この携帯、この前クロス君達とお揃いにしたんだよね・・・」
今手に持っている携帯はクロス君とフェイトちゃんとお揃いの物。
前にクロス君とフェイトちゃんが携帯を買う話になった時に
私の携帯も結構使っていたので思い切って私も機種変しようと思ってお母さんに頼んで
アリサちゃんやすずかちゃん達と一緒にみんなで選んで決めた携帯です。

「……はぁ」

朝から何回目かになるかわからない溜息をつきます。
具合が悪いのは本当で、原因は寝不足。
昨日は家に帰ってきてすぐにお風呂に入りベッドに入りました。
でも、瞼を閉じるとあの怪物、イリスが人々を襲っている姿が浮か

んできて・・
気持ち悪くなって、吐いたりもして、そして、気がつけば朝になっていました。
眠気はあるのに眠るのが怖くて、夢にまで出てきそうで・・・
って考えてたらまた頭に浮かんできました！・・・やっぱり怖い。
それにあの時のクロス君のあの目、ものすごく怒ってて、そして何かを憎んでるような目
あの目が、イリスよりも怖く見えて…それに昨日別れ際に思わず聞いてしまった事。
ずっと前から管理局で働いて魔法に関わっているクロス君があんな地獄みたいな映像に…
見慣れてしまってると言った時のあの悲しそうな顔…

「はぁ・・・」
「なのはちゃん、なのはちゃん」
「えっ？」

突然声が聞こえきょろきょろと見渡すと窓の外に半透明なノアちゃんが見えました。

「ノアちゃん、どうしてここに？」
「えへへ～なのはちゃんの様子が気になってマスター達より先に来ちゃいました♪
今は魔力の強い人以外には見えない透明魔法で飛んできたので誰にも見られてないですよ」
「…ありがとう」

ノアちゃんを中に入れて2人で色々話をしました。
途中でお母さんやお父さんが急に来た時は慌ててベッドに潜り込んだりして大変だったけど・・・

透明になれるなら慌てて隠れる必要もないんじゃないかな??
そして、お昼御飯をこっそりノアちゃんと食べ終えて一息ついてると・・・

「なのはちゃん……悩んでる?」
「ふえっ?い、いきなりどうしたのノアちゃん?」

いきなり真顔でノアちゃんに言われて心臓が飛び跳ねるくらいドキッってなったの

「う~ん、乙女の勘?ただ昨日のあれで体調崩しただけなのかな~って思ったんだけど
なんだかそれだけじゃないみたいだし・・ここはどどーんとお姉さんに悩みを打ち明けなさい♪」
「お、お姉さん?」
「そこに反応するんだ…ショックだなぁ。確かに私は一応マスターと同い年扱いになってますけど~
封印される前は数年間活動してたんですよ、なのでなのはちゃんやマスターより年上なんです!」

胸を張って誇らしげにノアちゃんが言うけど、何となくそれって言ったら駄目な事じゃないのかなぁ。
でも、私は思い切ってノアちゃんに話す事にしました。

「…なるほど、あの時のマスターがイリスよりも怖くみえたのね」
「クロス君には言わないでね!…その、傷付けちゃうから」
「う~ん、別にマスターは気にしないと思うけど、だって私だって怖いと思ったし。
マスターだってあの後自分が怖いと言ってたし」
「え、えぇ~!?」

どういう事だろう？

「今は詳しくは言えないけど、マスターはね感情が高ぶるとああなっちゃうんだよ。
以前も何回かプレシアに対してあんな感じに怒りをむき出しにしてたでしょ？」

「そういえば、でもあれってアルガス魔法とか太極の書に関係してると思ってたの」

「なのはちゃんには言ってなかったっけ、あれはアルガス魔法も太極の書も関係ないの、あれは」

そう言うとノアちゃんは急に何かを考え込むように黙り込んで

「それも含めてマスターの全部が知りたいのなら、相当の覚悟がないとダメ。
だから、今はそんな事考えずにもっと他に考える事あるんじゃない？」

「う、うん…そうだね」

そうしてベッドに横になりながら一人で考え込む私をノアちゃんは優しく見守っていてくれました。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「うん、私決めた！クロス君ごめんなさい…私もう迷わないから、だから手伝いたいの！」

「なのは、いいんだな？」

「うん、私もっと跳びたい。クロス君やノアちゃんやフェイトちゃ

ん達と一緒にどこまで跳びたい！」
「…クロス、私も同じだよ。クロスとノアにまだ何の恩返しも出来ていないし…
それにどんな辛い事があっても乗り越えて見せるから…だから」
「「一緒に……いたいの！」」
クロスは2人の真剣な瞳をじっと見つめると…急に笑いだした。
「…ぷっ、あはははは……一緒にいたい、か。何の告白だよそれ」
横でノアもニヤニヤ笑みを浮かべている。
そして、自分が何を言ったのか気付いたのなのはとフェイトは顔を真っ赤にして俯いている。
「うん、分かった。俺はもう何も言わないし、俺からも言わせて欲しい。
今回の件はゼスト隊長やプレシアさん達も来てくれたけど、正直2人もいてくれると嬉しい…
だから、俺に、俺達に……2人の力を貸してくれ。その代わり2人は俺が絶対に守るから！」
そう言って差し出したクロスの手になのはとフェイトの手が重なる。
「うん、もちろん。ヴィータちゃん達ともまだちゃんとお話出来ていないんだもん」
「そうだね、闇の書も放っておけないから…一緒にがんばろう」
「私も忘れないでくださいね♪」
最後にノアの手が重なり…4人の顔に笑顔が生まれる。

それは、もう迷わない、どんな事があっても、一緒に戦うという絶対の誓いだった。

「私達は…お邪魔かしら？」
「クロスに任せておけば大丈夫みたいね」

ドアの外で中を覗き込んでいたクイントとプレシアはそっとその場を離れた。

？？？

「ここの街かあの小僧のいる街は」

「あぁ、ここにアースラ隊や民間協力者と一緒にいるらしい」

「詳しい居場所はアイツにも分からなかったみたいだがな…」

「ふん、あの役立たずの情報なぞあてにしてはいない」

「そうだな、我らを利用しようとしたあの愚か者の情報などはな」

「…どんな小さな魔力反応でも逃すな、奴の居場所を突き止めるぞ」

「それなら問題ない、すでにわずかだが魔力反応を感知した」

「うむ、結界を張って外に魔力が漏れないようにしているようだな、間違いないだろう」

「ならば行くか…場所はどこだ？」

「ここの地名で言えば…『海鳴市中丘町』だ」

続く

第３５話　「はじめての恐怖と絶対の誓い」（後書き）

カガヤ「う～ん・・・何回も手直ししたのに駄文しか出来ない・・・ｏｒｚ」

クロス「・・・今日一日朝からずーっとだもんな」

ノア「それで出来たのがこの話・・・酷い」

カガヤ「なのはをメインにフェイトも含めたトラウマ的な話の・・・はずだったんだけどなぁ」

クロス「考えと違う文になるのは作者のデフォだから諦めろ」

カガヤ「うぐぅ・・・さって、こんな超駄文でしたが感想などあればどしどし送って下さい！」

３人「まってまーっす！」

第３６話　「はやてと守護騎士達？」（前書き）

遅くなりましたがなんとか納得出来る流れが出来たのであげます。
次回はもっと早くあげたいです…

７／２１　修正版と差し変えました。微妙に違うところあります（笑）

第３６話　「はやてと守護騎士達？」

Ｓｉｄｅ　レギナス

闇の書の力で管理局が張った結界を突破した俺達はその後なんとか主の元へと戻ってこれた。
主はやての部屋をこっそりと覗き安らかに眠っているのを確認してやっと一息付けた。

「……」

リビングのソファーに身を投げ出しそのまま沈黙が続く。
誰も何も言わない…シャマルが淹れてくれたお茶を一気に飲んでようやく言葉が出せた。

「なぁ、あの映像って…」
「あぁ、見覚えがあるな」

ヴィータの言葉にシグナムが答え、シャマルやザフィーラも頷いている。
そして、４人の視線は俺の槍へと向いた。

「レギナス、一体何があったんだ?あの光はお前の方からだったぞ？」

シグナムの言う通り俺の槍とクロスの攻撃が原因であの出来事が起きた。
それにクロスが言っていた「仙気」という言葉にも引っかかりを覚える。

「なるほど、あのクロスという魔導師との激突で…か」
「あいつ一体何者なんだよ！」
「分からない…ただの管理局の魔導師とは違うみたいだな、そして…仙気と言うあの魔力」
「あぁ～もう！なんだか知らないけど腹立つ！！」

ヴィータが憤るが…無理もない。
順調とまでは言わないがあの魔導師達に出会ってから少し皆の様子がおかしい。
かくいう俺も調子がおかしい、口調や性格が変わってきているような…錯覚なのだろうが。
主に勘づかれていないのが幸いだが、敢えて気付かないふりをしているかもしれない。

「…あの子にも聞いてみるか？」
「…だな」

シグナムの言葉に俺達は頷き、傍らに置かれている闇の書を見る。
シグナムの言うあの子とは闇の書の管制人格の事だ。
４００ページを越えなければ人格の起動しないのだが、ある程度の意思疎通は可能だ。
実は幾度か「夜天の書」という言葉について聞いた事はあるが返事は決まって「心当たりはない」だ。
嘘をついているわけではなく本当に知らないようだが、何か引っかかるらしい。

「でも大丈夫なのかよ、今回ので結構ページ減ったんじゃないか？」
ヴィータの心配した通り、管理局の張った強力な結界を破るために

闇の書の結界破壊の魔法を使用したのだ、当然使用した分ページは大幅に減っただろう。

「あ！ごめんなさい！その事でまだ言っていなかった事があるの・・・」

突然口に手をあてシャマルが大声をあげた。

「どうしたシャマル？」

「その…実は……」

「何！？仮面の男に助けられたばかりかイクシオンのリンカーコアも！？」

シャマルの話を聞いた俺達は驚いた、なぜなら管理局に捕まりそうになった時に
仮面の男に助けられ、闇の書の使用を勧められ尚且つ結界破壊魔法の足しにしろと
本来の標的であった雷帝イクシオンのリンカーコアを提供されたのだ。
おかげで思ったよりも闇の書のページが減ってはいない。

「何者だろうかその男は」

「わからない、理由を聞いても『ただ闇の書を完成させる事だけを考えろ』としか…」

「闇の書が完成した所で奪い取る…そんな事出来るわけないのだがな」

「主を脅迫して無理やり闇の書の力を使う…これもないか」

うーん、と考え込む。

「ともかく、これから一層の警戒が必要だろう。神獣だけでなく魔導生物は片っ端から行こう」

「そうだな、管理局の罠にかかるよりは効率がいいだろう」

『……守護騎士達よ……』

その時、突然闇の書が輝きだし、声が聞こえてきた。

「なっ、管制人格!?」

闇の書からうっすらと黒い服を着た銀髪の少女の姿が浮かび上がっている。

その少女こそ闇の書の管制人格だ。

「どういうことだ?意思疎通は可能だが具現化など主の承認なしには出来ない筈では?」

確かに闇の書は４００ページ以上の蒐集は終了しているが主はやての承認もなしに

管制人格の具現化はありえないはずだ。

『私にもわからない、ただ言えるのは…私はあのノアと言うユニゾンデバイスを…

知っている気がする』

「「「「なっ!?」」」」

驚く俺達に管制人格が話を続ける。

『あのノアの面影は懐かしさを覚えるのだ…シグナム達もそうではないか？』
「そ、それは…そうだが」
「じゃあ夜天の書やあのイリスってのにも覚えがあるのかよ！？」
ヴィータの問いに少し考え込むような仕草をする管制人格。
『あぁ、イリスの映像は私にも見せられた。何やらノイズのようなものが走る感覚も…』
「ノイズ…か、今までにも感じた事はあったのか？」
『いや、それに他にも気になる言葉がある。仙気、アルガス…光天の書』
「……」
その言葉に俺の表情が硬くなる。
ずっと引っかかっている言葉だからだ。
『それに何より…ノアのあのような悲しくて苦しそうな顔は……見たくないと思っている』
「……それは我らもだ。なぜかノアの悲しそうな顔を思い浮かべると…」
「すっげぇ気分悪くなってイライラする…なんだってんだ」
シグナムとヴィータの言葉にシャマルとザフィーラも辛そうな顔つきになる。
皆思っている事は同じのようだ、俺以外は。
「管制人格、聞きたい事がある」
『何だ？』
「俺は……最初から守護騎士にいたのか？」

「「「「っっ！！！？」」」」

思いもよらなかった疑問なのか、シグナム達の顔が驚きに染まる。
どうやら全員同じ疑問を抱いていたようだ。

『私も同じ質問をしようとしていた所だ、レギナス。あまり思い返したくはないが
遠い微かな記憶を辿ると確かにお前は我らとずっと一緒にいた…』
「だけど…昔にさかのぼれば遡るほどノイズが走る…だろ？俺も同じだ」
「お前達だけではない、ここに居るもの全員だ」

ザフィーラの言う通り管制人格と俺だけではなく守護騎士全員がそうだ。
遠い過去を思い出そうとすればするほどノイズと激痛が襲う。
それほど遠い年月を過ごしているのだから当然かもしれない。
ただし、この痛みは思い出せない、とは別だ。
記憶能力がどれほどか自信はないが昔の記憶はしっかりと残っている。
多少ぼやけている部分もあるが…ノイズや激痛が走るほどのはない。
ただある一定より昔の記憶がそうだ、つまり…

「記憶の封印…か」
『その可能性は否定出来ない、だが我ら全員の記憶を封印出来るほどの人物など…』
「あのさ、１つ思い出した事があるんだけど…」
遠慮しがちに言ったヴィータに視線が集中する。

「クロスが言っていた仙気って言葉、初めて聞いた気がしなかった

んだけど思い出したんだよ」
「何、それはいつだ!?」
「ずーっと昔の主、その人が言っていた気がするんだ…名前は、アラン・コーヴァン」
アラン・コーヴァン
ヴィータがその名を言った途端
【……あの……リス……仙気が……必ず……倒せ!!】
全員の頭に激痛と共に映像と声が響き座り込んでしまった
見ると管制人格も頭を抑えていた。
「ぐっ…な、なんだ今のは」
「また、ですね。ノアちゃんを見た時やあのイリスの映像を見た時のような…っ!?」
頭を抑えながらも立ち上がったシャマルが目にしたのは…
うっすらと邪悪な魔力とは違う光を出す闇の書…だが、それも一瞬で消えた。
しかし、俺も一瞬だが見えてしまった。
「……気のせい?」
「どうした、シャマル?」
シャマルの様子が気になったザフィーラが闇の書を見るがその時は普通の状態だ。
気のせい、とは思いたいが…
「な、なんでもないわ」

「そうか」

ザフィーラは特にそれ以上追及はしなかった。

『…今の声にも聞き覚えがあるな…皆はどうだ?』

「あぁ、今のははっきりと分かる。もう何年何百年も昔の主の声だ…」

「だけど…それ以上はわかんねぇ…なんで仙気って言葉が出てくるのかも…」

「それで、完成まであと少しなんでしょう?」

『そうだな…もう9割以上は埋まっている。もう少しだ、状況は辛いだろうが…』

しかし、そう言葉を続ける管制人格に向けて俺はもういいとばかりに手を向け

「みなまで言う事じゃない、主はやての為だ。どんな障害でも我が槍で貫いて見せる!」

「レギナスの言う通りだ…必ず完成させてみせる」

「おうよ!」

それぞれが自分の相棒を掲げる。

もう先ほどまでの迷いの表情は見えない、全ては主はやての為に。

だが…1人だけ表に出さないように浮かない顔をしている者がいた。

ほかならぬ俺だ。

(そう言えば…この槍の名前は…一体なんだっただろうか…名前を呼んだ事があったか?

そもそもレヴァンティン達のようにまともに反応した事があった

か？）

名もわからぬ自分の槍を見つめる。
今まで誰も疑問に思わないのが不思議だった。
俺は…今まで自分の相棒である槍の名を呼んだ事がなかった。
そればかりか、名前を忘れていたのだ。

その時

『んっ？…主はやて！！』

突然、管制人格が叫ぶと同時に一斉に皆がはやての部屋へと駆け出した。
そこには主はやてが眠っている…はずだった。
何も知らずにぐっすりと眠っている主はやてがそこにいるはず…

だが…

「あ、ある…じ？」

そこには誰もいなかった…ただ、窓が開き風でカーテンが揺らめいているだけだった。

そして、一通の手紙が置かれていた。

その内容は……

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
続く

第３６話　「はやてと守護騎士達？」（後書き）

カガヤ「さて、今回はクロスもノアも出番なしなので守護騎士の皆さんに来てもらう……はずでしたが」

・・・・・・（シーン）

カガヤ「消えたはやてを探しに皆さん出ていっちゃいました…どうしよ」

カガヤ「ま、まぁいいや…今回は難産でした。話の流れは２，３パターン考え付いていてそれをうまく文章にあらわせなくて」

カガヤ「そのまま原作に沿っても良かったのですが、それじゃあ面白くないと色々考えて…その結果がこうなりました。これからますます独自展開が続きます！」

カガヤ「しかし…１人じゃ寂しいなぁ…誰かゲストの人呼ぼうかな…恐れ多すぎて無理だけど……まぁたまには１人でいいか！ではでは感想批評その他ドシドシ下さい♪それではまた～」

ノア「は～い、作者が寂しそうにしてるみたいだから来ちゃったよ～☆」

ノア「あ、あれ？……ひょっとしてもう終わったのかな？（汗）」

ノア「・・・・・・・うそ～ん！？（滝汗）」

第３７話　「開き始めた真実」（前書き）

ここから急展開になります！

ちなみに３６話は時系列的に３２話直後です。
今回の話で１２月中旬の話ですが…
日付の描写いれようかな。

第３７話　「開き始めた真実」

私立聖祥大学付属小学校　屋上

「なのはも体調良くなって良かったわね」
「うん、やっぱり5人一緒がいいよね♪」
「にゃはは、ありがとう、ごめんね心配かけちゃって、アリサちゃん、すずかちゃん」
「やっぱりクロス君のお見舞いが良かったのかな？」
「ふ、ふぇ！？…そ、そんな事は……あるかも／／／」
「いや、ただ様子見に行っただけだっての！」
「くすくす」

アリサの言う通り昨日のクロス達のお見舞いが効いたようで今日はなのはも元気になり
こうして、昼休みに皆一緒に屋上でお弁当を食べる事が出来た。
りなみにノアはエイミィ達とレギナス達の捜索中。
今まで出現した世界の距離を考えるとどうやらここを拠点にしている可能性が高いらしく
光天と夜天の特性を利用し共鳴させる事で居場所を突き止められないか試している所で
ゼストとティーダ、クイントとメガーヌが市内近辺の見回りをしている。
クロノとプレシアは昨日から何やら調べ物をしている。
リンディはアースラの整備が完了したようなので本局に受け取りに行っている。

「そういえばさ、そろそろクリスマスだね」

空を眺めていたアリサが何気なく呟いた。
雪が降るほどに寒くなってきた季節、街ではクリスマスに向けての商戦真っ最中だ。
いつもなのは達は昼に誰かの家でパーティを行い、夜はそれぞれの家でのパーティを行っている
今年はクロスとフェイトも勿論参加することになった。

「うん、今年も盛大にパーティしようね♪それで相談なんだけど…」

そう言ってすずかは自分の携帯を操作し一枚の写真を皆に見せて

「今年はこの子も一緒に誘いたいんだけど…どうかな？」

そこにすずかと一緒に写っているのは車いすに座った栗色の髪をした少女。

「この子の名前は八神はやてちゃん。図書館で知り合ったんだよ」

そうして、すずかははやてという子と自分の慣れ染めを話し始めた。
原因不明の病気で数年前から両脚が不自由な事。
両親は幼いころに亡くなり父親の友人に援助を受けている事。
最近親戚が訪ねてきて家が賑やかになった事。
住んでいるのは中丘町という事。など
すずかはまるで自分の事のように時に悲しそうに、時に喜びながらはやての事を語った。

「ふ～ん、結構苦労してる子なのね…うん、私は大賛成よ！早く会ってみたいわ」
「わたしもわたしも！早くあってお友達になりたいなぁ」

「すずかのお友達ならきっといい子なんだろうね」
（中丘町…確か俺が以前変な気配を感じた場所だな…偶然か）
「そうだな…俺も会ってみた……あれ？皆なんだその目は？」
なのはとフェイト、アリサにすずかまでがじっとクロスを見つめ…
「ねぇ…クロスに会わせて大丈夫かな？」
「う～ん、なんだか一目ぼれしちゃいそう…主にはやてちゃんが」
「あ、やっぱり？はやてちゃんってしっかりしてて純真そうだもんね…」
「自然体に接してくれるクロスに…コロっと……なりそうかも」
「お～い、お前らそういう話は俺のいない所で…ってかどういう眼で俺を見てるんだよ！」
（全く…ノアの変な病気がなのはとフェイトを通してアリサ達にまで移ったのか…）
1人頭を抱えるクロスとなのは達に突然エイミィからの念話通信が入ってきた。
『皆、大至急の用事が出来たの！すぐに来てもらえる！？』
『いきなりどうしたんですか？』
『まさか、シグナム達に動きが？』
『うん、ちょっとね。それで学校の方へはリンディ艦長が話つけてくれたからすぐに戻って！』
『…わかりました』
エイミィのただごとではない様子にクロス達はお互い頷くと
「ごめん、ちょっと急用が出来たから俺達早退するよ！」

「えっ、えええぇ！？」
「ごめんね、アリサちゃんすずかちゃん」
「話の続きはまた明日でいいかな？」
「そ、それはいいけど…どうしたの？」

すずかが言い終える前にクロス達３人は慌ただしく屋上から校内へと戻って行った。

「……行っちゃったね…」
「うん……もう、一体なんなのよぉ！！！」

臨時作戦本部

学校から急いで戻ったクロス達は作戦本部で思いもよらないものを見た。

「リーゼロッテさん…それにアリアさんも！」
「・・・・・」

そこには傷付きノアに治療魔法を受けているリーゼ姉妹の姿があった。
しかし、怪我人のリーゼ達を見る皆の視線、特にノアの視線は厳しい。
それにもましてクロスは無言で睨むようにリーゼ達を見ている。
そして、本来リーゼ達は本局で治療させるべきなのがなぜかここで治療を受けている。
よく見るとリンディとユーノの姿はあるが、代わりにプレシアとクロノの姿が見えない。
ゼスト隊も見当たらないが見周りの途中なのだろうか。

「あ、あの…一体何が？」

重苦しい空気が漂う中、なのはは尋ねた。

「さてと、どこから説明すれば…一先ず分かった事を先に言いましょうか」

「そうですね…まず1つ、夜天の書の主が分かった事」

「ほ、ほんとうですか！？」

エイミィの言葉になのはとフェイトが驚いた、クロスは黙ったままだ。

「えぇ、そして2つ目、その主に危機が迫っている事。3つ目は…」

「当ててみようか？」…えっ？」

「3つ目は…仮面の男の正体がリーゼ達で、グレアム提督が色々仕組んでいた、でしょ？」

「ど、どうしてそれを！？」

「前の戦いで仮面の男と小突き合った時に魔力を解析したのさ。変身魔法はしていたけど…

そんなの俺達には通用しない…提督、俺達の事知っていた割には甘く見ていましたね？」

クロスの言った事がずばり的中しているのでエイミィは驚いた。

そして、通信モニターが開かれ拘束されたグレアム提督とプレシア、クロノの姿があった。

『もう、君にはお見通しなんだろうな、クロス君』

「あぁ、化け猫達に変装までさせて闇の書の主を監視させていたんだろ？

何のためにか、と思って昨日プレシアさんとクロノにそこらへんの調査を依頼していたんだよ」

『クロスとデバイスの魔力解析能力を甘く見ていましたね提督…私もそのせいで阻まれたんですけど』

そこでクロスは横目でリーゼ達をちら見して

『クロス君、私は闇の書を完全に…』

「……あんたの言い訳は後回しだ、クソ野郎」

いきなりクロスの口調が荒々しくなったので皆の顔色が変わった。だが、ノアとリンディは頭を軽く押さえているだけだ。

「先に夜天の主が誰かと危機が迫っているのって言う事を先に説明して欲しいんですけど」

「そうね、まずは夜天の主の名は…八神はやて。クロス君達と同い年の女の子よ」

「「「えっ!!?」」」

リンディの言葉と映し出されたはやての映像になのはにフェイト、クロスですら真っ青になった。

「どうしたの3人共?」

「…あ、あぁ…まさか」

「マスター?」

「その子、すずかちゃんのお友達なんです!」

「クリスマスパーティにはやてを誘おうって話をついさっきしていたばかりで…」

今度はリンディ達が驚く番だった。

まさか身近に夜天の主がいるとは思わなかったのだ。
学校でのすずかの話を思い浮かべたクロスははっとする…グレアムの計画に気付いたのだ。
そして、クロスの顔が怒りで満ちていく…

「グレアム提督……あんたってやつは…まさか」
「待った、父様は関係ない…あたしらが…「ダマレ、殺すぞ?」…ひっ!?」

真紅の瞳に殺気を纏わせてリーゼ姉妹を睨むクロス。
流石のグレアム提督も顔が強張っている。
なのはとフェイトも恐怖で縮こまってしまった。
リンディはクロスの肩を優しく叩き…諭すように

「クロス、今はもっと大事な話があるの…聞いてもらえる?」
「あ、あぁ…ごめんなさい。リンディ提督」

クロスは深呼吸を数回し瞳の色を戻すと、気持ちを切り替え

「それじゃ次、夜天の主…はやての危機ってどういう事だ?監視していたリーゼ達が
こうまでボロボロで師匠達がいないってことは…まさかあいつらに誘拐されたとか言わないよね?」
「それは…私達から説明するよ。もう大分傷も癒えたしね」

リーゼロッテとアリアが立ちあがりコンソールを操作すると…

「…やっぱりか」

映し出されたのは以前クロス達が逮捕したアジーン、ドヴァー、ト

リーの三人。

「一昨日の夜…あなた達が守護騎士と戦った夜の事です……」

リーゼアリアは一昨日の夜に八神家で何があったかを話始めた…

続く

第37話　「開き始めた真実」（後書き）

カガヤ「えっと…よく話に聞くキレやすい子供？」

クロス「お前のせいだろ！！」

ノア「ま、まぁまぁ……マスターの場合色々あるから、あはは～（汗）」

カガヤ「本当に『イロイロ』ね（ボソッ）さてと、ここから最終戦に入りますよ～…その前に特別ゲストです」

はやて「じゃじゃ～ん！輝光戦記真のヒロイン、八神はやてでぇ～す♪キラッ☆」

カガヤ「しょっぱなからキャラ崩壊するな！！（ハリセンで叩く）」

はやて「いったぁ！！…ええやないかぁ、私この章のヒロインのはずなのに出番全然ないし、クロス君やなのはちゃんとの絡みもカットや…どういうことなん？」

カガヤ「原作の7、8話分は丸々カット！…書くネタはあるけど、蛇足な感じするから一気に行きます。ってかクロスがはやてに直で会ったら…」

クロス「夜天の主って気付いちゃう？」

カガヤ「お前の魔力解析能力はレアスキルクラスに高いからねぇ…」

ノア「良かったですね、念願のチートですよチート♪」

クロス「すんごく地味なチート…ってかこれチートじゃないだろ？」

はやて「チートでもデートでもそのおかげで私とクロス君の出会いが遅れて……うぅ　ｏｒｚ」

カガヤ「安心しろ、後でた～っぷりヒロインらしいイベントあるから」

はやて「ほんま!?ほんまにほんまでほんまなんか!?」

カガヤ「た、立ち直りはやっ！ってか落ちつけちゃんと日本語話せ!!」

クロス「はぁ……ともかく、これから3章も最終面、急展開にはなります。描写不足などはあると思いますが…菩薩並の暖かい慈悲の眼差しで見てください」

ノア「誤字脱字もドンドン指摘しちゃって下さい…ではでは、まってまーっす♪」

第３８話　「運命を斬り開く勇者よ」（前書き）

急展開続きます！
うぅ～…描写がぁ～心理描写がぁ～！！

第３８話　「運命を斬り開く勇者よ」

八神家
Ｓｉｄｅ　リーゼアリア

（どうやら守護騎士達は全員戻ったみたいね）

今私は闇の書の主、八神はやての家を変身して監視中だ。
もちろん誰にも気づかれないように厳重に結界を張っている。
もうすぐ…もうすぐでお父様の悲願が叶う。
１１年前、クラウド君を死なせてしまってからお父様は必至で闇の書に関する事を調べた。
その時に偶然にも次の転生先である八神はやてと完成前の闇の書を発見。
当時今よりも幼く両親を亡くし身よりのなかった八神はやてに接近し援助を行った。
直接姿を現した事はないが、手紙のやりとりはしている。
正直言ってこの子には同情を禁じ得ない、だが闇の書に選ばれた以上救う手はない。
だからこそお父様は何不自由ない援助を行った…せめて、短い夢でもと…
そして、月日は流れ闇の書の第一の覚醒、守護騎士達が現れた。
すぐに蒐集は行わないようだが時間の問題だった…
八神はやてを侵食する闇の書を止める為に守護騎士達は蒐集を開始した。
守護騎士達は闇の書の蒐集に管理局の魔導師を狙うのかと思っていたが…違った。
もし、魔導師を狙っていたらすぐに管理局に目をつけられやりにくくなっていただろう。

様々な世界の神獣を狙っているようだ、苦戦はするが大量のページを獲得出来るので効率はいい。
今日狙った神獣で闇の書も9割以上になるはずだ…終焉は近い。

「どうだ、何か変化はあるか？」

背後に気配を感じ振り返ると同じ仮面の男の姿をしたリーゼロッテがいた。

「戻ったか…むっ、どうしたその怪我は？」
「どうということはない…が、あのクロスという少年にな」

良く見るとロッテの脇腹に傷が見えた。
すぐに治療したが、まだ少し痛そうだ。

「全く、あれほどの力を持ってまだ未覚醒とは…プロジェクトAに太極の書、恐れ入る」
「そうだな…大丈夫か？我らの計画に気付いている事はないか？」
「問題ない…が、何か今回の守護騎士達との接触で何かあったようだ」
「そうか、後で調べるとしよう……むっ！？」
「どうした？…ん？」

ロッテと2人ではやての部屋を見る…
はやての体が黒く淡い煙に包まれ…消えてしまった。

「一体何事だ…魔力などの力は感じられなかったぞ？」
「守護騎士達も気付いたようだ…ん？闇の書がある…と言う事は」
「あれは闇の書の力ではないと言う事か……っ！？今度は闇の書が消えたぞ？」

はやての部屋にかけ込む守護騎士達、闇の書はレギナスが抱えている。
が、突然その闇の書が消えた。
主の元へ飛ばしたのかと思ったが、レギナス達の慌てぶりを見る限りは違うようだ。
なら、一体何が起こったというの？
守護騎士達がちりぢりになって探しに行ったようだ、私達も行かなくちゃ。

「ともかく、探すぞ…」
「あぁ」

そうして、私達は守護騎士達とは別方向へと移動した。
やがて、海辺方へと出た私達はある異変に気付いた。

「まて、この周辺に微かに空間の歪みがあるぞ…」
「…確かに、微かな歪みだ……現場に来なければ気付かない程の」

しかし、周辺を警戒していた所、いきなり結界に閉じ込められた。

「くっ、なんだこの結界は！」
「見た事もない術式だ…」

「ほう、管理局や守護騎士達より先にお前達のような鼠がかかるとはな」

突然辺りに声が響いたかと思うと攻撃を喰らってしまった。

「ぐっ…誰だ！？」

見ると白い仮面をつけ、頭まで覆いかぶさるような黒いローブを身につけた3人の男がいた。

「貴様ら…手配されていた脱獄犯か」

「ほう、それを知っていると言う事はお前達も管理局の者か…」

「だが俺達の目当ては貴様らではない……消えてもらおうか」

そう言って3人の脱獄者は襲いかかってきた…

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「覚えているのはここまでよ、後はぷかぷか浮いていた所を」

「今日ゼストとティーダに拾われたってわけ」

リーゼ達の話を聞いたクロスは不可解そうな顔をしていた。

「この話はもうゼスト隊長達も知っているわ、そして…」

「すぐに現場に向かったけど、空間の歪みは消えていた…で現在捜索中、というわけなの」

リンディとノアの言葉に更に難しい顔をするクロス。

「……どういう事だ、レギナスやリーゼ達の眼を掻い潜り、魔力を使わずにはやてをさらい

観測出来ないほどの空間の歪みを作るとは、あいつらにそんな芸当が出来るとは…」

「それより、私達もすぐに探しにいきます！」

「早くはやてを見つけないと！」

「うん、行くぞノア！」

なのはの言葉に頷くとノアを連れて出ようとしたが…

「待ちなさい、なのはさんとフェイトさんはここで待機して下さい」

「えっ？」「どうして？」

「守護騎士達とは違い、アジーン達は命を奪う事に容赦しません…

しかも、強い。

なのはさん達じゃ危険すぎるわ」

「……」

リンディの心配ももっともだが、クロスとなのはとフェイトは頷き

あって

「大丈夫ですよ、何があっても俺が2人を守ります…だから」

「お願いします、行かせて下さい！」

「はやてを…助けたいんです」

「……やれやれ、まだ会ってもいない子にそこまでなんて…」

「会った事あるとか友達だからとかじゃないですよ」

「「「みんなで一緒にクリスマスパーティしたいから！」」」

「私も、そのパーティに行きたいですよぉ♪」

「あ～……考えとくか」

「む～、ひどいですよマスター！」

「あ、あたしもいいかい？」

「あ…なんだ。いたんだアルフ」

「ひ、ひどいよクロス～」

「「「あはははは」」」

どんなに不安要素を言われても一度決めた事を曲げずにいつも通り

な4人を見て
リンディとエイミィとユーノにも笑顔があふれる。
モニター向こうのクロノとプレシアも笑いあっている。
そして、そんな様子を見るグレアムやリーゼ達は真剣な顔で頷き合う。

「さてと、実は分かった事はそれだけじゃないの…ユーノ君、例の物を」
「はい、無限書庫で夜天と闇の書、イリスの事を調べているうちにこんな物を見つけたんだ」

そう言ってユーノが持っているのは分厚い黒い本だ。
金色の文字で何かが書かれていて、本を開けようとしても封印が施されているのかびくともしない。

「これは…厳重な封印だな、んで書かれている文字は…ん?古代の本にしては簡単に読める?」
「そうなんだよ、この文字は見る者の理解出来る言語で翻訳されていくんだ」

古代ベルカ文字かと思っていた文字をクロスやなのは達が見るとなぜか違う文字として読めてしまうのだ。
例えば、なのははこの文字を見て、日本語で書かれているように見えたり、などだ。
肝心の書いてある内容は…

『仙気を操る太極の勇者と光の使者へ、この書を託す』

「これって…」
「あぁ、太極の書と光天の書の主、つまりクロスとノアの事をさす

んだと思う」

ユーノの言葉の通り、クロスがその本を触ると自然と何か言葉が浮かんでくるようだった。
それはノアも同じのようだ。

「無限書庫で調べ物をしていくうちにいくつか違和感を見つけたんだ。
闇の書という名前は実は割と最近使われた名前でそれまでは黒の魔導書とか
蒐集の書、と言う風に呼ばれていてそれで古代ベルカよりももっと昔の記録まで遡って…
ようやく『夜天の書』という名を見つけられたんだよ、イリスという邪神の事も一緒にね」

ユーノの説明を聞きながらもクロスとノアの視線は黒い本に集中している。
まるで、吸い込まれるような感覚、まるで本が2人にやっと出会えたと言っているような…

「よしっ、リンディ艦長。俺この本持って守護騎士達に会ってきます」
「えっ！？」
「はやてちゃんの家に行けば誰かには会えますよね？」
「え、えぇ…気付かれないように監視してるけど…今はレギナスとシャマルがいるみたいだけど…」
「その2人がいれば十分、急がないと……行くぞ、ノア！」
「うん♪」

立ち上がるクロスとノアに続くようになのは達も立ち上がった。

「ま、待って私も行くよ！」「私も！」「僕も行くよ！！」「私も当然！！」
「あ、ちょ…ちょっと待ちなさい！！」
「大丈夫です、レギナス達と話すだけだし、ちゃんと連絡も入れます！」

リンディの止める間もなくクロスとノア、なのは、フェイト、ユーノ、アルフは
飛びだして行ってしまった。

「はぁ…しょうがないわねぇ……さてと」

深いため息をついてリンディはモニターのグレアムに向かい合う。

『君達の言いたい事はわかる、しかし、私はこれ以上闇の書の存在を許すわけにはいかないのだ』
『事態は闇の書だけの問題じゃなくなりました…最悪世界が滅びるほどの…』
『提督、アリシアを失った時にあなたに言われました…覚えていますか？
【悲しむのは当然、しかし、そればかりに目を向けていては…アリシアが悲しむ】と
あなたはクライド提督を自分の不注意で失ったと思いこみ…過去の清算をしようとしています
八神はやての未来を犠牲にして』
「そんな事で…あの人は帰って来ません。それにそんな事をしたらあなたは今以上に後悔しますよ」
『ならばどうすればいいと言うのだ？君達の話では…闇の書の覚醒は邪神の復活だというではないか！』

グレアムの叫びにリンディはふっと頬笑み。

「希望はあります…あの子達がきっとなんとかします」

『君らしくもないな、そんなあいまいな表現とは…』

『僕も信じます、クロス達ならきっと解決してくれると…』

「クロすけ……」

リーゼ達も何か思うところがあるのかお互いに頷き合った。

「エイミィ、私達はアースラに行くわよ。念の為だけどアルカンシェルの準備をするわ」

「了解！……あなた達はどうする？」

エイミィの言葉にリーゼ達が出した返答は……

管理局本局　グレアム提督私室

「それじゃあ私もそっちに戻るわ、ここはレジアス少将が寄こしてくれた局員に任せるわね」

「僕も行きます、それでは…」

見張りの局員に取り調べを任せ、部屋を出ようとするクロノとプレシア。

何か考え込んでいたグレアムは2人を呼びとめた。

「待ちなさい…どうしても、あの子にかけると言うんだね？」

「クロスに賭けるんじゃない…僕達皆で闇の書を止めるんです」

真剣な表情でそう答えるクロノをグレアムはじっと見つめたが、懐から1枚のカードを出した。

「私が闇の書の完全封印の為に用意した絶対零度を生み出す最新型デバイス『デュランダル』だ
これを、君に託そう…後を頼む」
「グレアム提督……はい！」

グレアムからデュランダルを受け取ったクロノは頷くとプレシアと共に駆け出した。
残されたグレアムは椅子にもたれ掛り…呟いた。

「老兵は死なず、ただ消え去るのみ……日本の名言だったかな」

八神家

「…どう、レギナス？」
「どうもこうも…管理局はただ監視しているだけ、みたいだ」

シグナム達がはやてや闇の書の捜索に出ている間の留守番として残ったレギナスとシャマルだが
管理局の監視が入っている事に気付き、戦闘態勢を整えながら様子を窺っていた。
しかも、シグナム達とも連絡が取れなくなっていた。

「まずいな、この状況で主はやてが戻ってきたら…」
「そうね……あっ！あの子達は！」

シャマルが指さす先ではクロス達が真剣な顔立ちでこちらに歩いてくる姿。

「……どうしよう、レギナス？」
「ここまで来たら仕方がないな。相手の出方次第で突破するぞ」

「ねぇ、クロス君…レギナスさん達とどうやってお話しするの？」
「この前みたく戦闘になったら、また同じ事だよ？」

なのはとフェイトの疑問にクロスは黒い本を指さし

「大丈夫、これを見れば話くらいは聞いてくれるさ…それからどうなるかはわからないけどね」
「……」

ノアは難しい顔をしていたがクロスに撫でられると表情が和らいだ。
そして、一行は八神家前に到着。

「あの時感じた視線はどうやらリーゼみたいだな」

半年前に休暇で地球に来た時の事を思い出すクロス。
ノアは悔しそうな顔をしている。

「あの時の違和感が夜天の書が近くにあったからだなんて……気付かなかった」
「まぁ、闇の書になっちゃっていたから共鳴も弱かったんだから仕方ないさ、さぁ行くぞ」

意を決したようにインターフォンを鳴らす。

「……はい、今開けます」

静かに、シャマルの声が聞こえてきた。
どうやらすぐに戦闘、とはならなさそうで安心するなのはとフェイト。

リビングに通されたクロス達、だがなんとも言い難い空気だ。
互いに相手の出方を窺うような視線。
戦闘中でもないのに妙な緊張感に包まれる。

「…ここに来たってことは全部分かってるんだな？主の事も」
「あぁ、今主である八神はやはここにいないってこともなでも、勘違いしないで欲しい
君達を捕まえにきたんじゃない。見てもらいたい物があるんだ」

レギナス達は怪しげな眼だったが、クロスが取り出した黒い本を見た2人の眼が変わった。

「これは…一体？」
「夜天の書が…闇の書と呼ばれるようになった原因と邪神イリスについて書かれた本だよ」

夜天の書という言葉が出た途端に2人が頭を軽く押さえたが構わずにクロスは話を続ける。

「この本の著者の名は、アラン・コーヴァン。3代目の夜天の書の主だ…」
「アラン…コーヴァン？…3代目の夜天の主」
「名前だけは聞き覚えがあるみたいだね…それじゃあ、本を開けるよ？」

「開けるって、これは厳重に封印されていて僕やプレシアさんでも解けなかったんだよ？」
「これを開ける鍵は『仙気』なんだ…見てなよ」
本に手をかざし、仙気を送り込むと…本から光が溢れだした。
「こ、これはあの時と同じ！？」
それは以前レギナスの槍とクロスの仙気がぶつかりイリスの映像を見せられた時と同じ光。
その光が今度はこの本から照らし出され、世界が真っ白になった。
そして、クロス達が目を開けると…
赤いローブに身を包んだ、老人が眼の前に佇んでいた。
『私の名はアラン・コーヴァン…私が犯した大罪の贖罪の為に後世にこれを記す。
仙気を操り、運命を切り開く勇者よ…どうか私の大罪を聞いてくれ…私達が生み出してしまった
邪神イリス…そして、運命を狂わされてしまった哀れなアルハザードの魔導書の顛末を…』
続く

第３８話　「運命を斬り開く勇者よ」（後書き）

カガヤ「じゃんじゃんばりばりじゃんじゃんばりばり～！」

ノア「作者は一体何をしているのんですか？」

クロス「創作意欲がなぜか沸きまくってるから今のうちに書きまくるんだって」

ノア「いつまで続くのやら…それに展開が急すぎて描写が雑にならないでくださいね？」

カガヤ「じゃんじゃんばりばりじゃんじゃんばりばり～！」

ノア「き、きいてないし…こんな作者に目が覚めるような叱咤激励その他諸々お待ちしております」

クロス「それではまた次回！…過去編です！」

第３９話　「愚者と邪神」（前書き）

連日更新間にあった～！！！

今回は過去編…というかある愚者の独白とも言うべきですか。

第３９話　「愚者と邪神」

Ｓｉｄｅ　３代目夜天の主　アラン・コーヴァン

私はアルハザードの数少ない生き残りの１人の家系に生まれた…
生まれつき魔力が強かった私は魔導師として様々な研究にのめり込んだ。
自身の家系の研究をするうちに我が家に伝わるアルハザードの秘密を知った。
かつて栄華を極めたアルハザード！…だが、帝黒神という存在に滅ぼされ
アルハザードの知識を集めた魔導書がいずこかへ流れたと聞き、私は旅に出た。
そして…長い歳月をかけてついに出会った、夜天の書に！

「やりましたね、師匠！」
「これで念願のアルハザードの研究が出来ますね！」
「我々も腕が鳴りますよ！」

３人の若者が私と共に喜びを分かち合った。
それぞれ名をアスト、レーン、ガンタスと言う…私の研究仲間であり愛弟子達だ。

「さぁ、師匠…早く夜天の書を！」
「うむ…」

さぁ、いよいよ念願の時…私は夜天の書を手にとりページをめくろうとした。
その時だった…突然夜天の書が輝き５人の男女が現れた。

「我ら夜天の主を守護する守護騎士…我が命、我が剣すべて主の為に」

4人はそれぞれシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラと名乗った。

だが、最後の1人の少女は名乗らなかった、名前がないのだそうだ。

シグナム達守護騎士とはまた違った立場であるらしく夜天の書の管制人格である彼女は

代々の夜天の主から名前をもらってきたという…なので私は「ライラ」と名付けた。

……戦争で亡くした娘の名前だ。その事を聞いた彼女は涙を浮かべて礼を言ってくれた。

思ってもいない出来事だったがおかげで夜天の書がどういう書なのかを早く理解出来た。

しかも、万年人手不足だった私達にとっては4人共絶好の助手だった。

最初は硬く人間性が薄く感じた彼女らだが、それは表面だけの事

実際はとても人間と変わらぬ感情や表情を見せ、護衛以外の家事も進んで行ってくれた。

だが……シャマルの料理だけはどうにもならない程の殺人的な物だったが…

私達は各世界を渡り歩きながら様々な魔法や魔導技術を研究、収集して行った。

実は私達の目的は古代アルハザードでは頻繁におこなわれていたという技術…

人造魔導師と魔導説物の作成が最終目的だ。

各世界にはわずかながらアルハザードの技術の欠片がありそれを元に私達は研究を続けた…そこまでしなければならなかった

理由。
それは、私達の時代は各地で戦乱が繰り広げられていたからだ。
ある日一つの国が滅びたと思えば次の日には新たな国が出来あがり
また次の日には別の国滅ぼされる…それの繰り返しだ。
娘もその犠牲となった…正直私達は疲れていた、だから戦乱を収める力が欲しかった…

そして、数年が過ぎた頃そろそろ夜天の書を転生させる時が近づいてきた。
夜天の書はある一定の知識や技術などを収集すると次の世代の技術を取り込む為に
また数十年から数百年眠りにつくと言うのだ。
私は名残惜しかったがもう十分に彼女達は役に立ってくれた…
私の知識や技術もこの書は引き継いでくれる、そしていつか現れる太極の勇者と共に
忌むべき仇敵を討つ事になる、私に出来るのはその使命を果たせる事を祈る事だけだ。

しかし、ここ数年ほどの弟子達の様子がおかしい…
私も知らぬどこぞの世界の研究所で何か新しい生物の研究をしているというのだ。
2年ほど前になるか…帝黒神が操っていた怪獣のサンプルを偶然発見した…それが転機だった。
私の監督不届きと言われればそれまでだが、もう1人前となった3人に余計な詮索はかえって
3人の為にならないと判断し半ば放置し、自分の研究に専念したのがいけなかった…

気付いた時はもう手遅れだった……彼らは決して手にしてはならないものに手を出したのだ。

ギャオス…帝黒神の空の軍勢の名だ、資料によれば巨大な怪鳥だったという。
そのギャオスの血液サンプルを手に入れた彼らはなんと…
ギャオスのサンプルを元に遺伝子から改良して復活させる研究を行っていたのだ。
私も彼らも抑止力としての人造魔道師や魔導生物の研究だったはず。
しかし、ギャオスの復活などどとても抑止力になるわけがない。
そう忠告しようとしたが全ては遅く……ついに邪神イリスとして復活してしまった。
彼らの姿はそれ以来見ていない、おそらくはイリスに殺されたのだろう…
私と守護騎士達は各世界の精鋭達と力を合わせてイリスに立ち向かった。
だが、イリスは強かった…世界の人々を、精鋭達を吸収し更に強くなった…

強いだけではなく厄介な事が1つある。イリスに魔力は通じにくいと言う事だ。
全く通用しないわけではないが効果が薄かった、守護騎士達の攻撃も同様だ。
私はその理由を調べた、その間にもイリスは様々な世界を丸ごと吸収する如く蹂躙している。
もはや守護騎士達や各世界の魔導師達に出来るのは生存者の救助と避難のみ…
彼らの崩壊した研究所からなんとか資料を探し出し、ようやくその答えを見つけた。
その答えはギャオスにあった、ギャオスは魔力耐性が非常に高くアルハザードの魔導師達は彼ら特有の特別な魔力「仙気」で対抗していたと
答えを知った私は絶望した…仙気を操る者でなければイリスは完全

に倒せないのだ。
ギャオスの特性を持つイリスは魔力耐性が高く…
世界を滅ぼせるほどの魔力でも倒しきれるか分からない。
イリスの蹂躙は続く…抵抗する勢力はもはや守護騎士と僅かな魔導師だけになった。

そこで私はある決心をした、私の研究と夜天の書…これらを使い、イリスを封印する。
夜天の書には収集能力があり、それを最大限に生かしイリスのコアだけでも封印するのだ。
そして、心苦しいが…後世のきっと現れる仙気を操る太極の勇者と守護騎士達が言っていた彼女達の姉「光天の書」に任せる事にした。
もちろん、ただ封印するだけではダメだ、倒す為の手段も残さなければならない。
そこで私は長年の研究の成果を試す事にした。
ただの人造魔導師や魔導生命体ではない。
私や各世界の魔導師達が対イリス用に開発した究極の槍「グングーニル」
それに守護騎士達を元にした魔導生命システムを組み込み
完成したのが槍でありながら人の形をも持つ疑似守護騎士「レギナス」だ。
疑似守護騎士とは、夜天の書に組み込む事で守護騎士と同じシステムの一部となり。
守護騎士として夜天の書と長い旅をし、いつか出会う太極と光天の主の武器として戦う騎士。
いつかきっとレギナスが太極と光天の主の力になるだろう。

問題が起きた。イリスを封印するだけでもかなりの苦難だが封印したとしても
たやすく破られる可能性がある、とライラは言った。

イリスにも夜天の書と同じ収集能力があり、力を削って封印しても夜天の書がこの先新たな地で収集活動を行うとその力を利用して復活する可能性がある。
私は夜天の書自身の改良も行う決心をした。
だが、これを行うと予想も出来ないバグが夜天の書に生まれる可能性があった。
最悪、夜天の書の機能が変わり、守護騎士達の記憶に齟齬が生まれ太古の使命も忘れてしまう可能性も…しかし、すぐに決断した…迷う暇は1秒もなかった
私は不治の病にかかっていたのだ。当然の事だろう、弟子達が作ったとは言え
私にも責任はあるのだから…これは私の罪だ。
そして、私はライラやシグナム達に謝罪した。
これから先イリスを封印する事でどんな事になるか分からない、と。
彼女たちは笑って快諾してくれた。

「何があっても未来の事は未来で対処します。ですがイリスは一刻も早く対処しなければ
ですから、我が主、偉大な大魔道師アラン…どうか夜天の書の改ざんを！」

ライラの優しい笑顔と言葉を胸に私は…夜天の書を改造した。
同時に守護騎士達の記憶を保存する事にも成功した。
これで記憶がなくなったとしても記憶を蘇らせる事が出来る筈だ。
イリスの封印に対する防衛プログラムも組み込んだ。
もし、万が一イリスの封印が破れそうな時は…自爆するようにした。
これも守護騎士達の総意の元で作成した…彼女達は何も悪くはない。
悪いのは自分だ…なのに彼女達は笑顔で私を慕ってくれる…なぜだ…

・　・

・
・
そして、イリスとの決戦の時が来た。
イリスのコアを封印するのは至難の業だ。
その為に守護騎士達は自らを犠牲にしても私をコアまで導くと言っている。
守護騎士達は夜天の書の修復プログラムで復活できる、とはいえ心苦しい。
彼女達は私の家族でもあったからだ…
ザフィーラが…シャマルが…ヴィータが…シグナムがイリスに消された。
残ったのはライラとレギナスのみ…レギナスは未だに感情がぎこちないが
それでも私を主として守り通してくれた。
ついに…ライラとレギナスの命と引き換えの一撃がイリスのコアまで届いた。
私は全身全霊全ての生命力と魔力を注ぎ込み封印魔法をかけた。
結果は成功…夜天の書に封印され防御プログラムが封印結界の役割を果たした。
これで…一先ずは安泰だ…世界は平和を取り戻した…皮肉な事だ。
私が望んだ戦争の終結が…まさかこのような形で叶えられるとは。

夜天の書との別れの時、守護騎士達を復活させる余力がなかったのでライラのみだ。
だが、私は問いかけた……最後まで笑顔で別れを言い消えかけているライラに…

「なぜだ！なぜ愚かな主であった私にそこまで笑顔を向けられる！
なぜ命がけで守ってくれた！
守護騎士としての…夜天の主に対する忠誠か！！」

そして、ライラは…いや、微かにシグナム達の姿も見えた。
イリスに消され夜天の書で次の主に会えるまで眠りについているはずの姿を
うっすらとだがレギナスの姿も…今まで見せた事のない笑顔を見せていた。

「私達はあなたが主である以上に…あなたが私達にとっての家族でしたから…
遥か昔に姉君が、アルハザードの魔導師達がそう接してくれたように…だから…
私達はあなたが大好きでした…だから…最後まで笑顔でお別れしたいのです」

そう言ってライラ達は夜天の書と共に消えた…
残された私は全てを残す為に様々な延命治療を行いつつこの本を書いている。
もはやこの本を書き遺す為だけに私は生かされているのだろう…
この本が太極と光天の主の元へ渡る頃には夜天の書が、ライラ達がどうなっているかはわらかない。
許してほしい、などと言う資格は私にはないだろう…
本来ならば永い永い時を隔てた家族との再会が…悲劇となっているかもしれない。
そればかりか私の罪の形である邪神イリスを最悪の未来への土産としているのだ…
それでも…それでも私はこの本を残さなければならない。
この本が渡る事を信じ…無限書庫と呼ばれる巨大な記録空間へと封印する…
願わくば……夜天の書が、ライラ達がそのままの姿で再会出来る事を祈る……

・
・
太極の勇者と光天の使者へ

稀代の愚者　アラン・コーヴァンより

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

続く

第３９話　「愚者と邪神」（後書き）

クロス「……」

ノア「……」

カガヤ「え～ようやく明かされた闇の書とレギナスとイリスの話…どうでしたか？クロスとノアの反応は次回書くとして…」

クロス「無駄に文字数あるね」

ノア「見えにくくないかな」

カガヤ「だ、大丈夫だと信じたい…むしろ誤字脱字の方が心配（汗）」

ノア「だよねぇ～…そこら辺はドンドン指摘してもらいましょう！」

クロス「読者様にゆだねてどうするだよ！…とそれはさておき、感想や叱咤激励、もちろん誤字脱字の指摘などなんでもドンドン送って下さい」

カガヤ「次回、３章後半戦へ一直線！！」

第４０話　「嘲笑う者、逆らう者」（前書き）

連日投稿ならず！…４５分早ければ……

第４０話　「嘲笑う者、逆らう者」

？？？

「ぐっ・・あっ・・・ぐあぁぁぁ！」
「あう…がぁぁ！……」

とある空間に３人の男女が閉じ込められている。
名をシグナム、ヴィータ、ザフィーラ。
３人は突然消えたはやてと闇の書を探し歩いていたのだが、突然開いたワームホールに吸い込まれ
主であるはやてを人質にされて、謎の紋章を刻み込まれてしまった。

（し、しまった……まさかこのような手を……主…はや……）

シグナムが手を伸ばした先には紫色の球体に浮かぶはやての姿が……
しかし、力尽きてしまい、倒れこんでしまった。
その様子をアジーン達３人の復讐者達が眺めていた。

「ふっふっふっ…まさかこのような形でこの『愚者の刻印』を使う事になるとはな」
「あぁ、これで奴らへの復讐への手ゴマが増えたというわけだ…」

「一体誰への手ゴマだと？」

突如何もないはずの黒い空間にヒビが入り、４人の人影が飛び込んできた。
ゼスト率いるゼスト隊、通称フォース・ストライカーズだ。

「お互いに名乗る必要はないな」
「でも随分と仮面が変わったわね、前の白無地の仮面はどうしたのかしら？」

ゼストとクイントが一歩前へ出る。

「抵抗はやめて素直に投降しなさい！…って言って素直に投降する人見た事ないわね」
「そうっすねぇ…人間素直が一番だと思うんですけどねぇ」

両手と銃を構えるメガーヌとティーダ。

「ふっふっふっ、４対３で自分たちが有利だと思っているようだな…」
「ならば、これならどうだ？」
「「「「っ！？」」」」

アジーン達の背後で３人の人影がゆっくりと立ち上がった…

八神家

アラン・コーヴァンの遺した手記…それを「視終えた」クロス達。
誰も何も言葉を出せない、長い沈黙が続く…レギナス、シャマルの顔は真っ青だ。
クロスとノアは真剣な表情で手記を見つめている。
なのは、フェイト、ユーノ、アルフは困ったような表情でクロスやレギナス達を交互に見る。

「それで…これを信じろ、と？」

「さあな、強制する気はない。でも…嘘だと決めつけられないって顔してるよ？」
「確かに、嘘だと言いきれない自分がいる…これは真実だと告げる自分もな」
「けれど…こう釈然としないというか……」
ちらりとシャマルが困惑気味にノアに視線を移す。
対するノアはにっこりと微笑み返した。

「それは仕方ないよ、私だってまだ昔の記憶が完全に戻ったわけじゃないから…」
「で、でも！…釈然としなくても思い出した事もあります！その思い出の中で私は……」

あなたを　『姉さん』　と呼んでいました。

自然と姉さんという響きが自分の口から出た事に驚くシャマル。
しかし、もっと驚いたのはノアの方だった。

「今……今私を『姉さん』って…うん、うん！私シャマルにそう呼ばれていたの！！」

涙が溢れる、シャマルもなぜ自分が涙を流しているかわからないようだ。

「ごめんなさい！なんで私姉さん、だなんて…それに涙が…」
「いいよ……今はそれだけでいいんだよ、シャマル」

ノアは優しくシャマルの頭を撫でる、シャマルは懐かしさを覚え、しばらく身を委ねた。

「良かったねノアちゃん…忘れてても、思い出が消えちゃったわけじゃないんだね」
「うん、絆は消えてなかったんだね…」
なのはとフェイトも貰い泣きしている、アルフも目じりを抑えている。
「……分かった、君達を信じよう。主はやての行方は分からないが…」
「なら俺達も一緒に探すよ！」
「うん！みんなで探せばきっと見つかるよ！」
「クロス…なのはにフェイトまで、なぜだ。なぜそこまでする？管理局の使命感か？」
レギナスがずっと抱いてきた疑問をぶつけてきた。
「なんでって…うーん、また聞かれたなぁ…でも理由なんて、なぁ？」
「「うん」」
「「「「…はやて（ちゃん）と友達になるため！」」」」
とびっきりの笑顔でそう答えるクロス達にレギナスは遥か昔、同じように笑いかけてくれた
一人の魔導師…父と呼ぶべき存在が頭に浮かんだ。
その時
グォン！

「な、なんだこの気配は？」
「これは…はやてちゃん？シグナム達も！？」
突然周りの空間が一変し辺り一面に魔力が漂い出した、広域結界が張られたのだ。
『クロス！すまん、今すぐ来てくれるか！？…厄介な事態になっているんだ』
『みんな、すぐに向かって！ちょっと大変な事になってるみたいなの！』
そして、ゼストとエイミィからの緊急通信。
何事かはわからないかただ事でない…クロス達とレギナス達は頷き合い飛びだした。
そして。広域結界の中心部へとたどり着いたクロス達が目にしたのは殺気をむき出しにしゼスト達へと襲いかかるシグナム達の姿。
それを遠巻きにながめるアジーン達の姿。
「なっ！？シグナム、ヴィータ、ザフィーラ！？」
シグナム達を止めようとレギナスとシャマルが飛び込んだが
「ほほぉ…やっと来たか」
「いかん、来るな！」
ゼストの一喝で止まった所にシグナムとヴィータの一撃が駆け抜け

た…
あと一歩でも踏み出していれば首を斬られている一撃だ。

「ヴィータちゃん!?」「シグナム!!」

そのままの勢いでなのはとフェイトへと迫るシグナムとヴィータ。

「プリズムノヴァ!!」

クロスの放った砲撃が2人を引き離し、続けてクロスは魔法を連発する。

「プリズムアロー!」

牽制に放たれた矢のような魔弾でシグナム達は一端距離を取った。

「クロス、大丈夫か?……どうやら話はついたようだな」

クロス達の元へ集まるゼスト達、片目でレギナスとシャマルをみながらゼストが声をかけてきた。

「あぁ、まだしっくりとは来ていないが…もうお前達と敵対する意思はない」
「私もです、でも…シグナム達が」

ゼスト達とレギナス達の簡単な自己紹介を終え、現在の状況を確認する。

「俺達がシグナム達を発見した時は手遅れだったようだ…アジーン達は何かをしたようだ」

「遠巻きだからよく分からなかったけど…何か刻印のようなもので操っているみたいなの」

メガーヌの分析にユーノはハッとした。

「もしかして…精神操作の呪縛かもしれない、だとしたらその刻印を破壊できれば！」

「ヴィータちゃん達は元に戻るんだね！？」

「うん、問題は刻印がどこにあるか…だね」

なのはの言葉にユーノは頷いた。

「…！主はやてはどこにいる！？近くにいるのは分かるのだが…」

「それならあそこにいるわ…アジーン達の背後の球体の中、怪我などはしていないけど」

「まさか…はやてにまで精神操作をするつもりじゃ…」

ノアの言葉にシャマルは首を振り

「いえ、あれは闇の書が貼った防御結界です…だからあれがある以上はやてちゃんは無事だけど…」

「いつまでも人質にされてちゃ、よしっ。レギナス、シャマル…はやての救助に行ってくれ」

「えっ？」

クロスが言うとなのはとフェイトもそれに続き

「うん、シグナムさん達は私達に任せて！」

「絶対に助け出して見せます」

「ユーノとアルフも行って、結界内とはいえ厄介な魔法にかけられ

ているかもしれないから」
「わ、分かった」
「ザフィーラの事も頼んだよ！」

「作戦会議は終了か？…なら今度は我らが行くぞ！」

どこからか響く声と共に三方向からクロス達に迫る影が…

「ならばお前達の相手は俺達がしよう…」
「人質なんて姑息な真似しちゃって！」
「お仕置きが必要ね」
「さっきの続きだ！！」

ゼスト達によって阻まれた。

「クロス！アジーン達は俺達が相手をする…だから」
「必ず、シグナム達を助けなさい！」

そう言ってアジーン達を遠くへと引き離すゼストやクイント達。

「愚かな、所詮お前達全員はピエロ…無駄にあがいて道化らしく踊るだけだ」
「あら、仮面を被らなきゃ人前に出れずにいるあなた達の方がよっぽどピエロよ？」
「……ダマレ！」

ゼスト隊とアジーン達の戦いが始まった。

一方、シグナム達の相手を引き受けたクロス達は…

シグナム達の攻撃をなんとか交わしていた。

「それで、どうするの？私達が１人ずつ相手をして眼を覚まさせるの？」

「でも、３人とも前よりもずっと強く感じる…」

「多分、体のどこかにある刻印のせいだと…うわっと！」

シグナムの剣とザフィーラの拳を受け止めるクロスだがすぐに押され始めた。

なのはとフェイトはヴィータの鉄球に翻弄されている。

「くっ……なめるなぁ！！」

クロスは体中から仙気を放出させ、シグナムとザフィーラを吹き飛ばした。

＜マスター攻撃を防ぐのに精いっぱいで刻印の場所を特定できません＞

「だろうね…攻撃力も防御力も速度も段違いだ……」

『…マスター……ですがシグナム達は力が上がっている「だけ」です』

「ん？…そうだな…」

クロスはノアの言っている意味を思案する。

『でしたら、ここは私に任せてください！』

「えっ！？」

『あの子達をひっぱたいて目を覚ませます！…大丈夫です、ちゃんと考えていますから』

「本当か？……あれは長くは出来ないぞ？」

＜長くて１０分です…それを過ぎれば…＞
『大丈夫だよ、ミラノール……それだけあれば十分！』
ノアは何やら必勝の策でもある様子。
クロスは少しだけ考えて…
「なのは、フェイト！一端集まってくれ！」
こくんと頷きなのはとフェイトはヴィータを振り切りクロスの元へと集まった。
「２人、これから短時間だけのとっておきを出す、２人は援護に専念して欲しいんだ」
「えっ、もしかしてまた１人で相手をするの！？」
「ダメだよ！今のシグナム達はあの時とは比べ物にならないほどに…」
「でも２人まで巻き込んじゃうかもしれないからな、大丈夫…今回戦うのは…」
「私ですから！！」
なのはとフェイトの心配そうな顔にクロスは笑みを浮かべ…両手を胸で交差させて叫んだ。
「「ソウル・チェンジ！！」
叫ぶと同時にクロスの体が蒼い光に包まれる。
眼を開けられないほどの光になのはとフェイトは思わず眼をつぶる。
そして、光が収まり２人が目を開けると…
「さてと、ここから先は私のターンです！！」

１４、５歳ほどの背丈になり、蒼い髪とエメラルドの瞳をした少女、ノアが立っていた。

続く

第４０話　「嘲笑う者、逆らう者」（後書き）

ノア「わーいわーい！次回からはノアちゃん無双はっじまりますよ～♪」

クロス「いつにもましてハイテンションだなぁ…それにしてもやっと出たか『切り札その１』」

カガヤ「まぁノアは大きくなった自分の胸がシグナムクラスだったのに狂喜乱舞してるんだからほおっておこう…そして、最後に出てきたノアの姿こそが！」

ノア「私とマスターの切り札「ソウルチェンジ」です！！」

クロス「元ネタはＰＳＰの『魔法少女リリカルなのはＡ' ｓ　ＰＯＲＴＡＢＬＥ　－ＴＨＥ　ＢＡＴＴＬＥ　ＯＦ　ＡＣＥＳ－』です…まぁ作者やった事ないけど（笑）」

カガヤ「はやてがリインフォースの方へ融合するって話を聞いて…これは使える！！と（笑）」

ノア「というわけでこの逆ユニゾンも原作とは矛盾があると思いますがいつものことですので（爆）」

カガヤ「うぉい！……さて、次回も早めに更新出来るようにがんばりますので感想その他モロもろお待ちしております♪」

第４１話　「Ｆａｉｒｙ　ｄａｎｃｅ」（前書き）

今週はまた暑くなるそうで…
皆さんも熱中症には気をつけてくださいね。
では、４１話です！

今回は誤字ありませんように！

第41話　「Ｆａｉｒｙ　ｄａｎｃｅ」

クロス達から離れた場所で戦うゼスト隊、アジーン達。
主はやての救出に向かうレギナス達。

その両方にもノアの強大な仙気が伝わってきた。

「これは…ついに使ったのか」
「クロス、ノア…」

「な、なんだこれは！聞いていない力だぞ」
「落ちつけ、それよりも…闇の書の主を奪還されるぞ」
「それはそれで構わないが……アレを使うか」

「…あの巨大な魔力…いや、仙気は一体！？」
「僕らにも分からないよ、ノアがあんな姿になれるだなんて」
「あ、はやてちゃんを見つけました！」
「ちょっと待ちな！何か出てくるよ！！」

薄い球体に包まれたはやてを発見し、近付こうとしたレギナス達だが突然はやての周りに数十個の魔法陣が現れ、そこから何かが出てきた。

「あれは…オートアーマー！？なんであいつらがあんなものを！」
「しかも、プレシアが使っていたのよりもなんか強そうだよ」
「なるほど、自動式魔道兵器というわけか…なら、あれは俺が相手をしよう」

槍を構え、突撃しようとするレギナスの腕を取るシャマル。

「いくらあなたでも一人じゃ危険よ、レギナス！」
「なら、あたしも付き合うよ、ユーノとシャマルはしっかりとあたしらに付いてきな」
アルフがレギナスの隣に立ち、指を鳴らした。
「…頼む」
「あ、あぁ……まさかあんたの口からそんな言葉が出るとはね」
「俺に対してどんな認識を持っているんだお前は…」
「さぁ～クロス曰く『一生決着が付かずに戦いあいたい相手』…だそうだよ」
「なんだよそりゃ～」
軽口を叩き合いながらも2人はＡＴを次々と落とし、道を開けていく。
その後ろをユーノとシャマルが続く、はやてへはあと少しだ。

蒼い長髪をなびかせ、青紫のロープのようなアルガスアーマーを纏い
蝶のような薄い七色の羽を羽ばたかせ、エメラルドの瞳がシグナム達を捕え
桃色の唇が薄く笑みを浮かべる…

『ノア、制限時間は１０分…それまでに決めるよ』
「はい！…マスター、刻印の検索をお願いします」
『あぁ…それまでしっかり頼むぜ！』
「了解！……行くよ、ミラノール！アイスエッジ…」
＜フォーソード！＞

ノアの両手の先と両脚のつま先から氷の刃が伸び、羽を一羽ばたきさせると
一気に海上にいるシグナム達の懐まで飛んだ。

「っ！？」
「眼を覚まして！…なんて、ありふれた事は言わないよ、お姉ちゃんが目を覚まさせてあげる！」

すぐさまシグナム達はそれぞれのデバイスで攻撃してくるがノアは手足の刃をつかい、捌いていく。
一つ一つの動きに銀色の燐粉のようなものが舞い上がる、さながら踊っているかのように。
その幻想的な光景になのはとフェイトはすっかり取り込まれていた。

「き、綺麗……それにシグナム達を」
「うん、押してる、完全に押してるよノアちゃん！」

なのは達を一度は退け、クロスですらやられかけ、先ほどゼスト隊と互角だったシグナム達と
ノアは1対3で互角…いや、押していた。それもいつの間にか攻めていたシグナム達が
逆に守りに専念しているほどの押し様だ。

「ノアちゃん…すごく強いよ！援護なんていらないよ！！」
「確か…ソウルチェンジ…って言ったよね」

ソウル・チェンジ・ユニゾン。

本来、マスターであるクロスにユニゾンデバイスであるノアがユニゾンするのだが

逆にノアにクロスがユニゾンする事で通常のユニゾンよりも高い戦闘力を得る事が出来る。
しかし、弱点もある。魔力消耗が激しく１０分が限界でそれ以上すると
強制的に解除され、クロスはさほど支障はないが、しばらくノアが魔力切れで行動不能になる。
射撃や砲撃魔法も使用は可能で威力も絶大だが消耗が激しすぎる為に使用不能。
その代わり儀式魔法や広域攻撃魔法は逆に発動時間の短縮、少ない魔力での発動が可能になる。

クロスとノアがここぞという時にしか使わない「切り札」の１つだ。
なぜ、この場面でそれを使うかと言うと…

『なるほど…シグナム達の戦う時の細かな癖…か、すごいな俺もまだ掴み切れてないのに』
「へへっ、この子達昔よりかなり強くなってるけど…でも根本的な癖は直ってないから」

シグナムの微妙なバランスのズレ、ヴィータの攻撃軌道、ザフィーラの重心の動き。
そして、３人の攻撃に移るまでの細かな時間、魔法の発動タイムラグなど…
どれも細かな、癖ともわからないような特有の動きだったが。
昔一緒に特訓を受けていたノアだから分かる細かな癖…
相手がレギナスだったら、２回も戦ったクロスの方が良かっただろう。
だから１対３とはいえ、動体視力も瞬発力も上がった今のノアには動きが完全に読み切れるのだ。
ゆえにクロスよりもノアの方が戦いやすい。

『なのは、フェイト…聞こえるか？』
『ク、クロス君！？聞こえてるよ！ノアちゃんのあの姿は？クロス君今どこにいるの？』
『あ～その話は後で、今はシグナム達を元に戻す作戦の事で話があるんだ』
『シグナム達を元に戻せるの！？』

ノアの戦いぶりに見惚れていたなのはとフェイトにクロスから念話が入った。

『時間がないから手短に言うぞ、シグナム達を操っている刻印は強い防壁によって守られていて
防壁ごと破壊するのには、ブレイカー級の砲撃じゃなきゃだめだ。
でもそんな事したら
シグナム達に悪影響が出るかもしれない…だから、ノアが動きを止めるから2人の砲撃で
刻印の防壁を打ち破ってくれ、後は俺が刻印をピンポイントで狙い撃つ！』
『それで…大丈夫なの？』
『あぁ、防壁破壊の砲撃は多少のダメージあるかもしれないけど、
それも俺が2人へ刻印の場所を
送るから、そこを中心に狙ってくれ、刻印だけならピンポイントで狙った射撃でも破れるし
ダメージも最低限に出来る！あと、こっちで補助魔法かけるけど
2人はそのまま砲撃を！』
『？……分かった、クロスを信じるよ』

なのはとフェイトはそれぞれ砲撃準備に入った。
それを横目で確認したノアが仙気を高め…3人の動きを止める為に

動く。

「飛龍一閃！」
「甘いよ！」

レヴァンティンのシュランゲフォルムから、魔力を帯び長く伸びた連結刃を
ノアは紙一重で交わし逆にカウンタの蹴りを放つ。
シグナムは鞘で防御したが、ノアの蹴りに乗ったつつま先についた氷の刃に弾かれてしまった。
ダメ押しとばかりのまわし蹴りを腹にくらい、シグナムは下に広がる海へと叩きつけられた。

「ラケーテンハンマー！」
「お見通し！！」

頭上からのヴィータの攻撃に、ノアは両手を交差させアイゼンの柄を刃に乗せる事で防いだ。
そして、柄を押さえた刃を滑らせ、アイゼンを弾くと
そのままの勢いで肩に刃の腹を当て、ヴィータをシグナムの近くへと落とす。

「はっ！たぁ！！」

続けて迫るザフィーラの連撃を交わし、ノアは海面近くへと降下した…そこへ。

「鋼の軛！」

浅い海底から白い杭が至近距離に伸び、ノアを刺そうとするが

「だから……甘いっての！！」

両手足をまっすぐに伸ばしながら高速で回転する事で杭を全て斬り裂いてしまった。
一度、止まると羽を強く羽ばたかせ…

「たあぁぁぁ！！」

高速で回転しながら両脚を突き出し、さながらドリルのように突っ込んだ。
ザフィーラは防壁を張り防ごうとしたが…ドリルとなった刃に障壁は紙の如く容易く貫かれ
そのまま胸へと突き刺さった…だが出血はしていない。

「非殺傷設定だから…大丈夫だから、ね！」

ザフィーラも態勢を立て直そうとしているシグナムとヴィータに蹴り飛ばす。
再び海中へと沈む3人。
ノアは手足の刃を消し、代わりに両手と羽から銀粉を撒き散らしながら
3人へ向けて急降下した。

「これ、ただの余剰魔力の放出だと思ったら…大間違いだよ！」

良く見るとシグナム達の体があちこち凍りだしていた。
先ほどからノアの羽から出ていた銀粉の正体…
それはノアの魔力変換素質『氷結』が込められた仙気の粉だ。
微量ゆえに効果が出るまでに気付かれずノアに接近するたびに浴び

ていたシグナム達が
知らず知らずに徐々に体を凍らされて動きを鈍らされていたのだ。
レギナス達やをこの場から離し、ゼスト達が離れたり接近戦が得意
のフェイトにも
援護を頼んだ理由の1つがこれにある。
まだ制御が不完全なのでノアの近くにいると銀粉がかかり凍りつか
ない保証がなかったからだ。

その凍結の銀粉を撒き散らしながらシグナム達の周りを高速で旋回
するノア。
さらにノアはもう1つ持つ魔力変換素質『風陣』で銀粉を旋風に乗
せて舞いあげる。
シグナムが自身の変換素質である炎で焼き払おうとするが…
海水に浸かった事で凍結の効果が強まり、何よりノアの仙気の方が
自身の魔力より強く
炎は消され、ヴィータやザフィーラ共々凍らされてしまった。
刻印のある部分を除いて…これで刻印を狙った砲撃でも少しは体へ
の被害が減る。
それでも3人とも氷を砕こうとしている。

「今だよ、なのはちゃん、フェイトちゃん!」
『刻印データ…送信!』

＜ターゲット、補足しました＞
＜…撃てます＞

レイジングハートとバルデッシュに刻印の位置が送られ
なのはとフェイトの眼に刻印の場所を示すロックオン表示が映し出
された。
ある程度固まっているとは言え3つある標的と2人の砲撃で撃とう

としている。
1つ足りない…だが、先ほどのクロスの言葉を信じ2人はそのまま発射した。

「ディバインバスター・エクステンション…」
「プラズマスマッシャー…」

「シュート！！！」「ファイア！！！」
「スプレットシェル！」

なのはとフェイトの砲撃と共にノアが2人の砲撃に魔法をかけた淡い青色の光に包まれた桜色と金色の砲撃が一直線に進み、それぞれ3つに分裂した。

「ええぇ！？」「わ、分かれちゃった…」

そして、2人の3つの砲撃…計6つの光がシグナム達へと直撃する。

「あああっぁぁ～！！？」
「うぐぐっ～！」
「ぬうぅ！！」

ノアは3人の苦悶の表情に顔を曇らせたが、眼をそらさずに刻印の防壁が消えた事を確認し

「……マスター……お願いします」

そう言うとノアの体が紅い光に包まれ…

「あぁ、時間ギリギリだったな」

再び銃士クロスの姿がそこにあった。だがユニゾン状態ではない。
ノアが魔力の消耗が激しいのでユニゾン状態にはならずに魔力の回復に専念している為だ。
クロスはシグナム達を見据え、左手の銃ヴァジュラを右手のアグニの後ろに連結させた。
銃身の長いスナイパーライフルのような形になった。

＜スナイパーライフルモード＞

そして、左目を閉じ、狙いをつける。
右目にはシグナム達の内部にある刻印の姿がはっきりと写され、それぞれをロックオン表示が出る。

「ロックオン完了……デルタファング…シュート！！」

ライフルから3つの仙気弾が発射され三方向からシグナム達へと迫る。
意識が朦朧して交わす事が出来ないシグナム達の体へとと弾は吸い込まれるように…

刻印を貫いた。

その頃、結界内の少し離れた場所で2人の少女が爆発を目撃し近付いてくる事に
誰も気づいてはいなかった。

続く

第41話　「Ｆａｉｒｙ　ｄａｎｃｅ」（後書き）

カガヤ「～～～～～♪」

ノア「～～～～～♪」

クロス「え～カガヤはアルフォンス先生より頂いたティアナの抱き枕に狂気乱舞、ノアは大活躍出来た事に狂喜乱舞しております（汗）」

カガヤ「いや～可愛いなぁティアナは…これでスバルとギンガも揃えば完璧だ！」

ノア「短時間ですが、ギリギリ大活躍できました！！ノア無双です！」

ティアナ「あれ？これ…わたし？？」

カガヤ「おっ、ティアナ（7歳）じゃないか…いいかよく見ておけよ、ああいうお姉さんを目指して頑張るんだぞ？…胸はもう少し大きくてもかまわないか…（ジャキッ）…ジャキッ？何この頬に伝わる金属感は（汗）」

ティーダ「人の妹にな～に余計な事吹き込もうとしてるのかなぁ～？（憤怒）」

カガヤ「出たシスコンスナイパー！ジェクトの息子！（逃走）」

ティーダ「待ちやがれ！…ってそれはティーダ違いだ！！！（撃ち

ながら追いかける）

クロス「あ、あははは…どうしようもないなこの駄作者は（汗）」

ティアナ「・・・・・・（ジー）」

クロス「ん？どうしたティア？」

ティアナ「クロス君は……ああいうのがいいの？もっと大きいのがいいの？」

クロス「はいぃ～！？何言ってるの！？7歳児が凄い事言ってる！？…って7歳？…はて？なんだか嫌な予感が（汗）」

カガヤ「ふ、ふふふっ・・・・（ボロボロ）

第４２話　「悲しみの慟哭、怒りの咆哮」（前書き）

急展開…いや、狂展開？
表現が最後グロいです…ご注意を…

２４話一部若干変更しました、本当に若干（苦笑）

第４２話　「悲しみの慟哭、怒りの咆哮」

ノアの活躍によってシグナム達は解放された。
同じ頃、ゼスト隊とアジーン達との戦いも終わりを迎えようとしていた。

「はっ、やぁ！」
「ちぃ！」

ゼストの鋭い突きを受け流すのに必死なアジーン。
みると自分の両手から伸びた刃は所々刃こぼれを起こしている。
脱獄の手配をした男よりもらった新型デバイスのおかげで戦闘力は上がっている。
数か月の取り調べや牢獄生活などブランクにもならない…はずだった。
だが結果はどうだ？
押されている、いくらＳランクの相手とは言え完全に押されている。

「どうした？クロスとクイントとメガーヌを圧倒したというのはまぐれか？」
「……」

仮面の下で軽く歯軋りをする。
本来プロの暗殺者である彼らは感情を表に出さずに仕事をする、正にプロ中のプロだ。
しかし、今回ばかりはそうではなかった。
新型デバイスと刻印魔術の副作用によるものだ。
本来のアジーン達の術式は刻印魔術と言う特殊な術式を編み込んだ刻印を用いた魔術。

故にアジーンの刃、ドヴァーの手甲、トリーの掌、それぞれに刻んでいるかと思うではない
刻印は体に直接刻まなければ効果は薄い、ゆえにトリーはもちろん掌に刻んでいるが
アジーンは
特殊な刻印を書き込む事で
膨大な威力を発揮する、だが副作用がある。
理性の欠如と感情の爆発…それを抑える為に彼らは仮面を被っていた。
彼らのデバイスとは武器ではなく『ラーダ』と呼ばれる白い仮面が真のデバイス。
そして、管理局に没収されひそかに改良された『ニーヴァ』として彼らに与えられた。
『ニーヴァ』のおかげで刻印の力は更に上がった…はずだ。
なのに、押されている…抑制出来ていた感情も今は爆発寸前だ。

（我らは騙されていたのか？）

見るとドヴァーとトリーも押されている。

「あの時と立場が逆みたいね！」
「うっ…ぐっ」

クイントの連撃にドヴァーは防戦一方だ。
従来よりも力が上がり攻撃力も上がったはずだが、クイントの猛攻は反撃を許さない。
ウイングロードを縦横無尽に張り巡らし
左足の後ろ回し蹴りをかわしたと思えば左の裏拳が
右足の踵落としを受け止めると左足の蹴り上げが来る。
クイントの攻撃力、というよりも攻撃速度が以前とは比べ物になら

ない。
わずか数カ月でここまで伸びるのだろうか？

「なんで私の攻撃速度が上がっているか、不思議がっているみたいね」

「……」

クイントは余裕の口ぶりだが隙を見せず、攻撃の手を緩めない。

「私はあの時から強くなったわよ？愛息子と過激な特訓もしたりしたしね…でも」

クイントはドヴァーの剛腕から繰り出す一撃を寸前でかわし、逆に勢いを利用して投げ飛ばした。

「なっ！？」

「私の攻撃速度が極端に上がったわけじゃないわ、ただあなたの動きを見切っただけよ」

「な、なんだと…」

「あなた達は確かにプロの暗殺者、狙った獲物は必ず仕留めてきた…私達を除いてね」

「……」

「それがいけなかった、今まで手の打ちを相手に知られずに殺してきたせいで
あなた達の殺しの技は超が付くほどの一撃必殺になった…でもね」

「っ！？」

言葉と共にクイントは一呼吸でドヴァーの顔面まで迫り…
今まで積極的に使わなかった右手の一撃を…

「一撃必倒、リボルバーキャノン！」

ドヴァーの水月めがけ、スピナーを回転させ魔力を十分に蓄積させた正拳を叩きこんだ。
正確に一点を貫いた衝撃は無駄に体中を駆け巡らずに背中から突き出た。
ドヴァーは呼吸も出来ずその場から一歩も動く事も出来ずにただ立ちつくした。

「私のシューティングアーツは小技で相手を翻弄し、刹那の隙を狙い必倒の一撃を叩きこむ。
つまりあなた達のと同種なのよ…殺すか倒すかの決定的違いはあるけどね。
そして、同種ゆえに…容易に見切れる。あなた達はあそこで私達を殺せなかった時点で
再戦を挑むべきじゃなかったわね」

一撃で相手を殺してきたドヴァー達の暗殺術はその一撃で殺せなかった場合
格闘戦に長けた相手だと見切られるという弱点を持っていた。
アトラス研究所ではその鋭い攻撃とコンビネーションにクロス達は圧倒されたが
威力の高い攻撃ほど単調になりやすい、まして今はコンビネーションもなく1対1の戦い
近接攻撃専門のゼストやクイントに見切れないわけがなかった。

意識の朦朧としたドヴァーにバインドをかけ念の為にと仮面型デバイスを取り外した。

「ふ～ん……素顔は割と普通ね」

つまならなさそうに呟くと…仮面を握りつぶした。

メガーヌとティーダもトリーを相手に終始押している。
ラファールが記録した戦闘データから刻印は同時に使用しても2，
3個と言う事が分かった。
刻印を使用すればするほど副作用が強まるからだ。
そして、トリーの刻印は両手に1つずつしか刻まれていない。
ゆえに腕の動きに気をつけていればタイミングは図れる。
これが普通の魔術師ならば、スフィアなどを使い発射タイミングや
角度を自由に出来るが
掌の刻印でしか魔弾を撃てないトリーには無理な話だ。

「結局は…彼らは暗殺以外には向いていないって事ね」
「屋内戦だと危なかったですけどね…流石暗殺に特化しているだけ
ありますよ」

メガーヌとティーダは冷静に分析しつつ、必勝のコンビネーション
の準備に入る。
本来遠距離タイプである2人、ティーダはゼスト、メガーヌはクイ
ント、というように
近距離タイプの2人と組む事が多いが、遠距離同士のコンビネーシ
ョンも持っている。
それは…

「…そこっ！リバースアンカー！」

メガーヌが叫ぶと同時にトリーの足元に魔法陣が現れ沢山の錨が伸
び体を拘束した。

「…！？罠をしかけていたか！」

メガーヌは気付かれないようにいくつかの召喚魔法陣をあちこちにしかけていたのだ。
しかし、まだ攻撃はこれで終わらない。

「ミラージュボルケーノ！！」

トリーの足元に一回り大きな魔法陣が現れ、火山が噴火したかのようなマグマが噴出した。

「ぐあああぁぁ～！こ、これは幻術！？だがこの…燃えるような熱さは…ぐぅ～！」

幻術とは言え、本物まではいかなくとも超高熱の熱さを感じるトリー。
錨で身動きが取れずにただただ噴き出す幻術のマグマに飲まれる。
そして、マグマが収まった所でようやく錨を砕く事が出来た……が

「はぁはぁ……ん？ティーダがいない？……グハッ！」

眼の前には少し息切れを起こしているメガーヌのみ、ティーダの姿が見当たらない。
だが、その瞬間、顔面に魔力弾が撃ち込まれ…トリーの仮面が砕けそのまま意識を失った。
少し離れた所に自分のデバイスをスナイパーモードに切り替え狙撃態勢のティーダがいた。

メガーヌの捕縛と幻術で足止めをし、その間にティーダが十分に溜

めこんだ魔力弾で狙撃する。
これが遠距離コンビの必勝のパターンだ。

「どうやら、クイントも片付いたみたいね…隊長と合流しましょう」
「了解…それにしても1人で仕留めるなんて、流石姐さん」

笑顔で親指を立てるメガーヌとティーダに笑顔で答え
クイントはゼストの方へと走った。

「これで…」
「最後！！」

レギナスとアルフの一撃をくらい最後のＡＴは沈黙した。
周りにはＡＴの残骸が多数転がってはいるが2人の息にはそれほどの乱れはない。

「使い魔とはいえ流石にザフィーラと互角以上の戦いをしただけの事はあるな」
「そっちこそ、伊達にクロスが認める相手じゃないね」

拳を突き合わせる2人。ユーノとシャマルは呆気に取られているがすぐにはやての元へと駆け出した。

「良かった…この球体は闇の書が貼った結界よ、はやてちゃんへ危害を加えられないようにね」
「それじゃあ…あっ、解除されましたね」

球体がうっすらと消えてゆきゆっくりと降りてくるはやてをレギナ

スが抱き支えた。

「ふっ…よく眠っている。だがこれでいいのかもしれないな…」
「そうね、誘拐された。だなんて…知ってもしょうがないし」
「さぁ、シグナム達も元に戻ったみたいですから合流しましょう」
「うん、アジーン達もゼスト隊のみんなが抑えているよ」

急いでその場を離れクロス達と合流しようとするレギナス達。
シャマルが抱える闇の書が淡く輝いている事には誰も気づいていない…

「ふぅ～…なんとかなったぁ」

シグナム達を海辺近くの公園に運び、そのままクロスは仰向けに寝転んだ。

「クロス君あれは一体？」
「あ～あれね、ソウルチェンジユニゾン…簡単に言えば俺がノアにユニゾンしたのさ」
「ユニゾンデバイスに逆にユニゾンしたってこと!?そんな事が…」
「逆ユニゾンとは微妙に違うかな…ま、そういう認識でいいよ」

その時シグナム達が目を覚ました。

「うぅ……す、すまないな…」
「世話をかけた…」
「……」

操られた間の記憶があるのかシグナムとザフィーラは礼を言ってき

たが
ヴィータだけはそっぽを向いている。

「…ヴィータ？」

クロスがどうしたのかと声をかけると…

「おい…あ、あの蒼いちびっこはどうした…？」
「ノアか？…今は休んでいるよ、ちょっと消耗激しかったからな」
「っ！？だ、大丈夫なのか！？」
「どこか怪我はないのか！？」
「お、おぉいおい！」

身を乗り出すようにヴィータやシグナム達が詰め寄ってきたので思わず後ずさるクロス。
なのはとフェイトも豹変ぶりに驚いたが

「ひょっとしてシグナムさん達…」
「昔の記憶が？」

するとシグナムはバツが悪そうにし…

「いや、正直全て…ではない」
「だが…ノアと戦って、体がな」
「覚えていたんだよ…ずっと大昔にああやって特訓してたって事をな…まだ全部じゃないけど」

再びそっぽを向いたヴィータの言葉に…

「ヴィータ、シグナム、ザフィーラ……思い出してくれたの？」

「あ、おいノア！まだ休んでないとダメだ！」

ノアがふらふらと跳び出てきた、しかし目は驚きと喜びに満ちている。

「シグナム…ヴィータ…ザフィーラ…」

「申し訳ありません…あなたの事を忘れていたなんて…『姉上様』」

「すまなかった……忘れていたばかりか…」

「…本気で襲いかかったりして…本当にごめん、『姉ちゃん』」

ノアは俯きながら目に涙を浮かべるヴィータに抱きつき…

「……しょうがなかったんだから…だから、もういいんだよ」

シャマルに続いてシグナム達もノアに関する記憶を少しだが取り戻した。

なのはとフェイトもまたもや貰い泣きをしてしまった。

そして、目尻をぬぐいクロスが何気なく街の方へ目を向けると…

「クロス…君？それになのはちゃんにフェイトちゃん？」

「ど、どうしてこんなところでそんな格好しているのよ！それにその人達とちっさいのは何！？」

なんとアリサとすずかがそこにいた。

「ア、アリサ！？それにすずか！？」

「なんで！？…なんで、結界内にいるの？」

『ごめん！その結界内のスキャンに手間取っちゃって…今まで気付かなかったの』

エイミィからの通信、それによるとこの結界内はアジーン達が貼った特別製で
転送やスキャンが非常にしにくく、アースラスタッフの総力をあげても
内部の映像すらついさっきやっと出せるようになったみたいなのだ。

（そんな高性能な結界をあいつらが？……今はそんなことより）

「ごめん、訳はあとで説明するから2人ともここから早く脱出を…っ！？」

混乱しているアリサ達を避難させようと近付いたクロスだが
突如、巨大な殺気が急接近している事に気付き

『ク、クロス…気をつけて……あいつらが…』
「か、母さん？どうしたの！？…あいつらって、まさか！」
「っ！気をつけろ！何か来るぞ！」

シグナムが叫んだ咆哮を見ると、禍々しい魔力を纏ったアジーン達が白目をむきながらも野獣のように吠えながらこちらへ突撃してきていた。

同時にクロス達へと合流しようとしたレギナス達もすぐ近くで異変に気付いた。

「レギナス、これは？」
「あぁ…急いで合流だ。シャマル、主はやてを頼む」
「えっ、えぇ…「うっう～ん…」はやてちゃん、気が付いたのね？」

レギナスからシャマルへと抱きかかえられていたはやてが目を覚ま

した。

「レギナス…シャマル……なんで甲冑を纏ってるんや?それにここは…」

はやては眼をこすりながら周りを見渡すと…

「アリサ、すずか!逃げろ!!」

クロスは駆け出した…どういうわけか豹変したアジーン達がアリサ達に襲いかかったからだ。

なのはやフェイトも跳び出した、デバイスを構えるがそれよりも速い。

ノアも魔法で足を止めようとアジーン達を狙うが…魔力がほぼ0なので発動出来ない。

…クロスはソウルチェンジユニゾンのせいかうまく体が動かなかった。

ここから魔法や銃で狙う暇はない…どうにかギリギリ、アリサ達の元へと来たクロスは…

「…えっ?」

両手を広げアリサとすずかを庇うように立ち、防壁を張った。

だが、アジーン達は防壁を容易く破り…その刃や拳や掌をクロスへと…

なのはとフェイトが悲鳴を上げる…間に合わない!

アリサとすずかが抱き合いながら悲鳴をあげてしゃがみこむ。

「「「「……！！！！」」」」

声にならない声が４人の少女から発せられ……無音。

「……あ、あぁ……」

アリサとすずかが恐る恐る目を開けると…
なのはとフェイトが震えながら見つめる先には…
ノアが両手を顔にあて、かけ出した先には…

レギナスがはやてに見せるまいと目をふさごうとした光景は…
シャマル、ユーノ、アルフが…茫然と見つめる先には…
そして、はやてが信じられないという顔で見るものは…

クロスを庇うように…

巨大な刃で左肩から深く斬りつけられたシグナムと…

拳から生えた爪で胸を刺し貫かれたヴィータと…

いくつもの魔力弾を体中に浴びたザフィーラの姿…

激しく血しぶきを撒き散らしながらゆっくりと3人は倒れ…

クロスの方を向き倒れたシグナムの目に…

はやての方へ倒れたヴィータの瞳に…

体中を穴だらけで倒れたザフィーラの瞳に…

光はなかった。

「いやあああぁぁぁぁぁぁぁ～～～～！！！！！！！」

「あああぁぁぁぁぁぁ～～～！！！！！」

「うおおぉぉおおあぁぁぁぁぁあ～～～～！！！！！」

2人の少女の悲鳴と、1人の少年の叫びが…辺り一面に木霊した。

そして…少年と少女は光に包まれた……淡く暗く絶望を纏った禍々しい黒い光に…

続く

第４２話　「悲しみの慟哭、怒りの咆哮」（後書き）

カガヤ「え～…クロスとノアはトんでもない事になっているため…いません（汗）」

カガヤ「代わりのゲストも…いません（汗）」

カガヤ「寂しいなぁ…（涙）」

カガヤ「アルフォンス先生からいただいたスバルの抱き枕でも…床の間に飾って癒されるとしようかな…」

カガヤ「では…次回！」

第４３話　「エヴォリューダー」（前書き）

暑いです・・・北海道がいつの間にか沖縄より南に移動しちゃったみたいに暑いです！！
誰か…パーフェクトフリーズをぉ～…

それと、今回も結構過激な表現使っていますのでご注意を…

８／１５　暴走中のクロスをEクロスと表記修正しました。

第４３話　「エヴォリューダー」

数分前
Ｓｉｄｅ　ゼスト

俺とした事が油断した！！
アジーンの武器を破壊し、他の２人を撃破したクイント達もかけつけ４対１になり降伏を勧めた。

「大人しく捕まる気はないか？武器のないお前１人を倒すのはわけがないが…」

今までこの類のセリフで降伏してきた奴はいなかったがな。
今回も例外ではないようだ。

「ふふふっ……愚かだなゼスト、貴様らは所詮道化でしかないのだ…」
「堕ちたチンピラ風情に言われたくはないな…」

仮面の下でアジーンが歪んだ笑みを浮かべているのが分かる。

「本気で俺達が『脱獄』し『復讐』しようとしていると思っているのか？」
「何っ！？」

瞬間、アジーンの仮面がはじけ飛び、その下の素顔が現れた。

「なんだその刻印は！？」

仮面の下にはアジーンの顔全体を覆うほどの刻印が浮かび上がっていた。
クロスやノアの使用するアルガス
気絶しバウンドで拘束されているはずのドヴァーとトリーにも刻印が浮かび上がった。

「ちっ、させん！」

動きを完全に止めようと４人一斉に攻撃をしかけたが

「「「うおぉぉ～～！！」」」

ドヴァーとトリーがアジーンの傍に立ち刻印が一層輝きを増した。
まるで…クロスのアルガス魔法のように。

そして…気が付くと……４人共地面に叩きつけられていた。
何が起きたのか分からなかったがアジーン達がクロス達の方へ飛んで行くのが見えた。

急いで追いかけた俺たちが見たのは

血塗れの守護騎士達と禍々しい光を放つクロスと夜天の主の姿だった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ミッドチルダ　ナカジマ家

Ｓｉｄｅ　ギンガ

「お兄ちゃんやクロスさん今頃どうしてるかぁ…」
「…お母さん達もしばらく帰れないみたいだし」
「なんだか心配だよぉ…」

今、私とスバルは遊びに来たティアと一緒に庭で遊んでいます。
ティアナはティーダさんが長期任務でいない時にうちで泊る事になって
最初のうちはぎこちなかったけど、すぐに馴染みました。
ぎこちないというよりは…恥ずかしがっていただけかも?
兄さん達がいなくて私もスバルも寂しかったけど、ティアのおかげで…

「「「っ!!?」」」

突然胸が苦しみ出して3人してうずくまってしまいました。

「ど、どうしたお前ら!?」

休み中の父さんが異変に気付いてかけつけてくれたけど私達には原因がわかっています。

「スバル、ティア……」
「うん…これ」
「クロスさんが…」

3人して取り出した兄さんからもらったライカフラワー。
それが、言葉に言い表せないほどに澱んで光っていました。
握っているだけで寒気がして、立っていられないくらい恐ろしくなって…

「まさか…兄さん達の身に何か起きているんじゃあ」
「大丈夫、母さんやゼスト隊長達がついてるさ」
父さんが私達の優しく頭を撫でて微笑んでくれたおかげで少しは不安が和らいだけど…
ライカフラワーは赤黒く光ったままでした…

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

アースラ
静止衛星軌道上

「ダメです、結界内高濃度の魔力で何もモニターできません！」
「急いで現場の映像と解析を！クロノ、まだなの？」
『もう少し、もう少しで結界内に突入出来ます』
「急いで、おそらくクロス君は…いえ、夜天の書も」
『はい！』

リンディが見つめるモニターでは結界内部に突入しようと懸命に穴をあけようとしているクロノ、プレシア、リーゼ姉妹の姿…４人とも異常を察知し焦りつつも作業を行っている。

（モニターが切れる寸前の映像…間違いなくクロス君のアレが発動するわ…クイント、頼むわよ）

Ｓｉｄｅ　レギナス

眼の前の光景が信じられなかった。
突然アジーン達が２人の少女…１人は主はやての新しい友人、すずか、だったか
に襲いかかりクロスが２人をかばうように覆いかぶさり
急いでかけつようとするよりも速くシグナム達がクロスをかばい…
討たれた。
全てが一瞬だった…そして、主はやてはそれを全て見てしまったのだ。

「シグナム！ヴィータ！ザフィーラ！！」
「そ、そんな…」

『闇の書の起動指令を確認、ただし、完全に起動にはページが不足しています。
緊急事項適用により、守護騎士４名分の代理蒐集を行います』

「な、なんだ？」

シグナム達の…死を目のあたりにした主はやてと闇の書が突如シャマルの手を離れ
主はやては禍々しい光を放ちながら中に浮かび…
闇の書からは管制人格とは違った声が聞こえ…
その意味を理解し主はやてとシャマルをここから引き離す前に

「っ！？いけない、レギナス、ユーノ君、アルフちゃん離れて！！」

シャマルに魔法で吹き飛ばされ俺達が目にしたのは…

「きゃあぁ～！…レ、レギナス…あとをお願い・・・」

闇の書から伸びる太い触手のようなものに絡めとられるシャマルの姿と
同じく伸びた触手に闇の書へ吸収されていくシグナム達の姿。
シグナム達を取り混み、不気味に静かに佇む黒い球体…中の様子は分からない。

そして、闇の書と同じほど…
いや、それ以上に暗い光を放つ薄色の球体に包まれたクロスの姿だった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「あ…あぁ……」
「い、いったい……何が…」

一部始終を目撃したなのはとフェイトは眼の前の光景が信じられなかった。
突然現れたアリサとすずかに今の姿を目撃されてしまった事。
凶暴化したアジーン達がアリサ達に襲いかかった事。
２人をかばおうとしたクロスをシグナム達が庇い殺された事。
シャマルに抱えられた現夜天の主、はやてがそれを目撃した事。

全てが信じられなかった、何が起こったのか分からなかった。
しかし、それを考える余裕すら今のなのはとフェイトにはない。

今の２人の眼の前では、怒りの咆哮をあげたクロスが赤黒い球体に包まれた

アジーン達が飛びかかったが見えない力に吹き飛ばされた。
唯一幸いなのはあまりの出来ごとにアリサとすずかが気絶した、と言う事だろうか。

「あ、あれは…」
「…ついに、暴走したのね…エヴォリューダーの力が」

そこへ体中を傷だらけにしたクイント達がやってきた。

「クイントさん！皆さん大丈夫なんですか？」
「えぇ大丈夫、こんな傷どうってことないわ、それよりも、最悪ね」

少し離れた所で紫色の光に覆われているはやてと夜天の書を見ながらクイントが呟く。
ティーダとゼストがアリサとすずかを離れた場所へ移し、メガーヌが強力な結界を張った。

「アースラと連絡が取れたらすぐに避難させるから、しばらくここで寝ていてくれよ」
「すまない、俺達がアジーン達にやられさえしなければ…」
「今はそんな事後回しいよ、ティーダ」
「…ノア、ノア！しっかりして！！」

ノアは頭を抱え込み小刻みに震えている。
メガーヌが声をかけるが焦点の合わない目を変貌したクロスに向けて反応がない。

「ノア、お願いしっかりして！！今のクロスを止められるのはあなたしかいないのよ！」

「クイントさん！一体何が起きているんですか？それに向こうでも同じような…」
「俺が説明しよう、クロスは…エヴォリューダーの力が暴走してしまったのだ」
「エヴォリューダー？」
ゼストが厳しい顔をしてなのはとフェイトに説明する。
「本当はクロスが時期を見て話すつもりだったのだが、仕方ない…今までも何度かクロスの瞳が
怒りで紅くなった事があっただろう？」
「はい、ノアちゃんがそれはアルガス魔法とかとは関係ないって…」
「アレはな…プロジェクトAの最大の特徴なんだよ」
「プロジェクトA…の」
ティーダの言葉にフェイトの顔が沈む。
「エヴォリューダーとはとある博士が名付けた力だ。人間が無意識にかけたリミッターを解除し
潜在能力や魔力を限界以上に引き出す…ただし、普通はそんな事したら体が壊れてしまう。
だがエヴォリューダーは違う、少ない魔力や仙気で肉体を保護し自壊せずに魔力の続く限り
限界以上の力を発揮し、尚且ついくつかの特殊能力も発動させる、というものだ
ただし、欠点もある。ある程度コントロールが出来るようになるまでは感情の爆発で発動しやすく
一定以上発動すると…理性がなくなり、破壊衝動や殺人衝動に支配される…」
「そ、それじゃあ！今のクロス君は…」

「第一段階はなのはちゃん達も幾度か見た瞳が紅くなり、軽い興奮状態になる…
でも第二段階は瞳だけでなく眼全体が紅くなり…殺人衝動が増していく。
そして、最終段階…紅い眼と金色の瞳、破壊の翼が生え、体中を仙気が覆い…
全て破壊しつくすまで止まらない……今のクロスがまさに最終段階」
「マ、マスターから…激しい怒りと憎悪が…」
震えるノアが絞り出すように言葉を吐いた。
「ノア!?しっかり!」
「…怒りが…憎しみが…黒い…仙気が…シグナム達を殺したあいつらが…ニくい、コロしタイ…
シグナム?…ヴィータもザフィーラも……ころされ?…い、いやあぁぁぁぁぁぁあ!!!」
「ノア!私を見て!…私を見なさい!誰だか分かる?ダメよあなたまで呑まれたら…
誰がクロスを助けるの?……しっかりして!」
クイントが必死に呼びかけるがノアは酷く錯乱状態にあり震えるだけだ。
「ノアちゃん…」
「マスターであるクロスの負の感情が一気にノアにまで押し寄せてきたのだろう…
それほど今のクロスはアジーン達を憎み怒りに満ちている、ということだ」

ゼストは忌々しげに吹き飛ばされたアジーン達へ眼を向ける。

「なのは、フェイト！」

そこへユーノとアルフが飛んできた。

「レギナスがあっちは1人で抑えるからこっちを頼むって…」

ユーノがノアに目を向けながら辛そうに言った。

「闇の書の事は俺の方が分かっているから…ってかっこつけちゃってさ。

それより…こっちはどうなってるんだい？」

ユーノ達となのは達はそれぞれの状況を交換しあった。

「なるほど…あっちはシグナム達が殺されたのを見たはやてに夜天の書が反応し…暴走した」

「はい、まだ完成には足りなかったみたいなんですが…その……」

「足りない分は守護騎士達を取り混んで補った……だからシャマルもシグナム達も取り込まれた…と」

「あぁ…シャマルはあたしらを助ける為に…くそっ！！」

アルフが地面を叩く音が響く…なのはとフェイトがそれを止めた。

「ともかくあの状態でどうなるかをレギナスは知っていてどうにか1人で抑えきれる

と言ったのだな？」

規模の分からない夜天の書の暴走…しかし、それをレギナスは1人

で抑えると言った。
邪神との関わりもあるのかわからないが…
それよりもクロスの暴走の危険性をゼスト達は知っている。
以前に…目の当たりにした事があるからだ…

「はい。それで…クロスも同じようにシグナム達の死を眼の前で見て…暴走」
「あぁ、状況は最悪だ…俺達がどうにか2つの暴走を止めるしかないわけだが」
「そんな、ダメですよ!ゼストさん達だって大怪我しているのに!」

なのはの言う通り、アジーン達の攻撃でゼスト達も浅くない怪我を負っている。
なのは、フェイト、ユーノ、アルフ、レギナス。
この5名がまともに戦える状態であった。

「お前たちはダメだ!今のクロスも夜天の書もアジーン達以上に危険すぎる…」
「それに…これは親の役目でもあるのよ」
「これは、友達の役目でもあります!」
「クロスは大切な友達…だから、私達も止めるのを手伝います」

なのはとフェイト、それに頷くユーノやアルフ、

「…どちらにせよ、頼みの綱はノアよ…ノアがクロスにユニゾン出来れば…」
「来るぞ!!」

ゼストの緊迫した声に一同はクロスの方へと向くと
まるで悪魔を思わせる赤黒い翼が球体を突き破った。

「夜天の書の方にも動きが！…隊長、どうします？」
（くっ…どうする、あの状態のクロスは俺達総出で抑えられるかどうか…
それに夜天の書の暴走もどのような規模かわからない…）
夜天の書の球体を向くと…紫色の光が収まり、そこには
長い銀髪と深紅の瞳、黒い服と黒い翼、ノアにどことなく似た若い女性の姿があった。
女性、管制人格は眼からあふれ出る涙をそっとぬぐった。
その表情は無表情に見えたが、悲しみと苦しみが微かに感じ取れた。
管制人格は一度目を閉じるとゆっくりと開き、レギナスを睨んだ。
対するレギナスは無言で槍を構える…

「あれは…資料にあった…夜天の書の」
「そう、あれは間違いなく管制人格です…」
「ノア！」「ノアちゃん！」
「ごめんなさい、心配かけて…でももう大丈夫、あの子を見たら少し…気分が落ち着きましたから」

ふらふらとクイントの手から起き上がったノア。
まだ足元がおぼつかないが焦点の合わなかった目はしっかりと見開かれている。

「ノアちゃん、もう大丈夫なの！？」
「無理しなくていいんだよ？」
「うん、ありがとう、なのはちゃん、フェイトちゃん…それよりもあれを見て」

ノアの指さす先には、３対６枚の悪魔のような赤黒い翼を羽ばたか

せ…
凄まじい…仙気を放ちながら球体を突き破り
血よりも紅い目に波紋のような金色の瞳をして
体中を翼と同じ赤黒い仙気で覆われ…手足はまるで鋭い爪をつけて
いるかようなクロスの姿。

「……」

その場にいる全員が一言も喋れずに金縛りにあったかのように動く
事すらできなかった。
それほどまでにクロスが変貌を遂げていた、クロスの全身から溢れ
る殺気に当てられていた。
普段のわざとらしくおどけなくて、そして、優しいクロスを知るな
のはとフェイトは
涙を流して目を逸らした…目の前のクロスの…化け物のような姿が
信じられなくて…

「なのはちゃん、フェイトちゃん…あれもマスターの姿なの…だか
ら、目を逸らさないで」

厳しい口調でなのはとフェイトにいうノアだが、当のノアも涙を浮
かべ
血が出るほど唇を強く噛み締め、苦しそうな顔をしていても目はし
っかりとクロスを見ている。
ゼスト達も表情は辛そうだが…じっとクロスの姿を見ている…

「おおおおおおぉぉぉぉ～～～～！！！」

憎悪と怒りの雄たけびをあげるエヴォリューダー・クロス（以下、
Eクロス）

と、同時にいつの間にか近付いていたアジーン達が三方向からEクロスめがけて襲いかかった。

「あいつらいつの間に！」
「危ない！」

なのは達の心配をよそにEクロスは雄たけびをあげながらアジーン達へは見向きもしない。
そして、アジーンの長く伸びた刃が肩に突き刺さり、ドヴァーの手甲から伸びた刃がEクロスの心臓めがけて突き刺さった。

「クロスくん！！！！」「クロース！！！

ようやく金縛りから解放され急ぎクロスの元へと跳び出したなのは達。
だが…

「……っ！？」

白目をしたアジーン達が驚愕の表情を浮かべる。
アジーンとドヴァーの刃はEクロスの体に突き刺さる事はなかった。
体に刺さるほんの数ミリで防壁にさえぎられていた。
それではアジーン達は止まらず、すかざすクロスから離れるとトリーが両腕にびっしり描かれた刻印から魔力弾を発射させた、その数3，４０はある。
しかし、クロスはそれらを一瞥すると、翼を一度大きく羽ばたかせただけだ。
すると、強い風が巻き起こりトリーの発射した弾は全てかきけされてしまった。

「あ、あれだけの魔力弾を翼のひと羽ばたきだけで…かき消した」
「あれは仙気の風です…それも高密度に圧縮された仙気の…」

Eクロスは両手をアジーンとドヴァーに突き出した、すると
腕の形をした仙気が伸び2人の両手を掴み……文字通り握りつぶした。

「がっ、あぁぁぁあ〜!!」
「うがぎゃぁ〜〜!!」

「ひっ!!?」「うっ!」

あまりの光景になのはとフェイトは眼を瞑った。

「いかん、あのままでは3人とも殺してしまう!」

ゼスト達がEクロスを押さえようとするが…Eクロスがゼスト達を
睨むと瞳が妖しく輝き
全員の動きを止めてしまった。

「こ、今度は魔眼の力…空間ごと相手を捕縛する『フィールド・バインド』?」

ノアは必死でバインドを解除しようとするが魔力が付きかけている
状態では何もできなかった。
他の皆も同様でどうにか動こうするが体がピクリともしなかった。

そして、Eクロスはゆっくりとトリーへと目を向ける。
トリーは恐怖を感じたのか背を向けて飛びだした。

しかし…次の瞬間、Eクロスは一瞬でトリーの上へと跳び、地面へと蹴り落とした。
地面へと叩きつけられたトリーの両手に勢いよく飛び降りたEクロス。
トリーの両手が砕ける嫌な音が響く。

「もうやめて…やめてよ…クロスくん…」
「マスター…正気に戻って…」
「クロス！…もう、あなたはそんな道を走らなくてもいいのよ！」
「やめるんだ…お前はもう殺戮兵器じゃないんだぞ！！」

なのはやクイント達の叫びが聞こえていないのか
Eクロスは見向きもせずにトリーをアジーン達の方へと蹴飛ばし
上空へと跳び上がり両手を掲げ…巨大な仙気の塊を作ると

「やめてええぇ～～！！」

誰の声かももはやわからないほどのいくつもの叫びを背に受けアジーン達の方へと解き放った。

巨大な閃光と爆発があたりを覆い尽くした…

続く

第43話　「エヴォリューダー」（後書き）

カガヤ「さって…暑くて暑くて最近暑いという言葉しかでないぞこんちくしょう！！」（笑）

カガヤ「クロスやノアの代わりにティアナ達呼ぼうと思ったけど…こんな話の時に呼ぶものじゃないしなぁ…」

カガヤ「というわけで今回も俺一人！…寂しいなぁ…」

カガヤ「ノア達はクロスを元に戻せるのか、覚醒した闇の書はどうなるのか…今月中に2部終わらせたいけど…まだまだ戦闘シーンは続きます！」

カガヤ「暑さで大分まいってる中書いたものなので誤字や表記におかしな所あったら遠慮無く言ってください…加筆修正しますペコリ（ｏ＿＿）ｏ）」

第４４話　「悲哀の魔人　ＶＳ　憤怒の鬼人」（前書き）

暴走したクロスは九尾の力が暴走したナルト状態です。
ちゃんとした設定書こうとは思っていますが…ひとまず見た目はそういう感じと言う事で（汗）

第４４話　「悲哀の魔人　ＶＳ　憤怒の鬼人」

コワセ…

いやだ！

コロセ……

いやだいやだ！

モヤセ……【あの時】のように

いやだいやだいやだいやダイヤダイヤダイヤ

解放するため。
　3つ目…お前がアイツであってアイツじゃないからだ…お前は誰だ？」
（それに…もうほとんど記憶が…な）
「……」
レギナスの言葉に管制人格は無表情のまま黒い翼を羽ばたかせ……

エヴォリューダー・クロスが放った巨大な仙気の塊はアジーン達を直撃したかに見えた。
爆煙がはれると…そこには大きななクレーターが出来ていた。

「ま、まさか…マスター…アジーン達を」

真っ青な顔をしてノアが眼だけを動かして辺りを見回すと

「あ、あそこ！」

なのはが何かを見つけたらしい、視線の先を見るとクレーターのそばで倒れているアジーン達の姿があった。
3人とも動けなく気絶しているようだが、しっかりと生きていた。

「よかった、生きているわ……でも、外したのかしら？」
「いや、違うな……まだ間に合うかもしれない！」
「ノ、ノア、どう？バインドから抜け出せそう？」
「無理です…ね。今の私はほとんど魔力がありません、せめて魔力があれば…ミラノール？」
＜もうしわけありません、解析も解除も不能です…ラファールも応答なしです＞

「そう…あの状態のマスターのアルガス魔法じゃしょうがない…わね」

ノアやゼスト達は未だEクロスのフィールドバインドで空間ごと束縛されたまま
身動き一つ、魔法すら発動出来ずにいた。
ただのバインドなら魔力が切れかけていてもミラノールならば解析し解除できる。
だが、アルガス魔法のバインド、しかも、エヴォリューダーの力で強化されたバインドは
いかにミラノールとはいえ簡単には解析も解除も出来ない。
Eクロスの方はアジーン達が生きているのが不思議そうな顔でみつめている。
とどめを刺そうと右手を突き出した、その時

「刃以(も)て、血に染めよ。穿(うが)て、ブラッディダガー」
「えっ？」

突然なのはやノア達の周りにいくつもの赤い短剣が現れた。
それを見たEクロスの顔が少しだけ変化した…焦りを感じたように。
そして、手を大きく一振りすると…今まさになのは達に刺さりそうだった短剣が
1つ残らず吹き飛ばされ霧散した。

「夜っちゃん!?」
「あれは夜天の管制人格!…レギナスはどうしたんだ?」

ゼストはレギナスの姿を探そうとしたが頭も動かせないのでよく見渡せなかった。

「隊長！レギナスは…あれは、イフリート！？」

たまたまティーダの視線の先に移ったレギナスと…一回り小さいが間違いなく炎を吐きながら巨大な剛腕を振るう山羊頭の巨人…イフリートの姿が

「闇の書の力に、収集したのが魔導生物ならその生物を召喚出来る、というのがあります」

無限書庫で調べた闇の書の力を思い出したユーノが言う。

「くっ…まずいな」

ゼストは歯軋りするがそれでも動けない以上、何も出来なかった。

「夜天の書さん！聞こえますか！？」

「夜っちゃん、私だよ！！…お願いだから目を覚まして！」

「我の名は…闇の書だ……主はやての望みを叶えるために…全てを消し去る」

「はやてちゃんの願い…？」

「そうだ、主はやては守護騎士達の死を悪い夢であって欲しいと願った…ゆえに」

なのは達の叫びにも、管制人格は両手をなのは達に突き出し…

「その願いを叶えるだけだ」

「違うよ！そんなの願いじゃないよ！」

さらなる魔法を繰り出そうとしたところを…

「うがあああぁぁ！！！」
「マスター！」
「っ！！」

Eクロスに殴り飛ばされた。
しかし、すぐに態勢を立て直し管制人格は魔法で応戦する。

「お前も…眠れ」
「■■■■■！」

もはや声にもならない叫びをあげ、管制人格を攻撃するEクロス。
Eクロスは迫りくる血の色をした短剣を仙気の爪で砕き
管制人格は伸びてきたいくつものの腕を紙一重で交わし
管制人格とEクロス、互いに一進一退の攻防が繰り広げられる。
荒々しく獣のような動きで攻めるEクロス…その表情は先ほどと同じ怒り。
無表情の奥にどこか悲しみと憂いを秘め攻撃を捌く管制人格…
動と静、怒りと悲しみ、対極な2つの力が激しくぶつかり合う！
その様子を見る事しかできないなのは達…しかし、ノアは

「まだ…まだです、まだマスターは完全に呑まれていません！」
「あ、あれでもまだ呑まれてないっていうの？」

ノアの言葉にメガーヌは疑問げに言う。

「はい、アジーン達を無意識にしろ殺さないように加減したり、私達をただ捕縛するだけだったり…
エヴォリューダーに完全に呑まれているのなら私達にも攻撃をしかけてきます！
それに私達を守ってくれました、まだ私達を味方と認識していま

す！」
「じゃあ…管制人格をあんなに激しく攻撃しているのは…」
「私達を殺す気で攻撃してきたから…だと思います」
夜天の管制人格は…ノアの妹だ。
その妹にまともに話しも出来ずに殺されかけた事に少なからずショックを受けていたが
Eクロスが自分を守ってくれてまだ希望が残っている事に気付き気力を奮い立たせるノア。
「このままじゃ…どちらかが死ぬまで終わらない感じだよ」
アルフの言う通り、戦いは熾烈を極めている…どちらかが倒れるまで止まらない。
唯一動けるレギナスもイフリート相手に苦戦している。
「くそっ、早くあの2人を止めないと…神獣だからって一度倒した相手に…負けられるか！」
イフリートはオリジナルより一回り小さく力も弱いがそれでもレギナスが1人で相手をするには荷が重い相手だ。
まして、レギナスには明らかに焦りが見える、冷静になろうとしているが…難しかった。
「…闇に、染まれ」
右手に魔力を圧縮した球体を作り出し、管制人格の声と共に球体が炸裂する。
デアボリック・エミッション、ベルカ式の広域空間攻撃魔法が発動した。

だが、Eクロスは膨張する球体に突っ込み…

「■■■！！！」

内部から破壊した。
それでも管制人格は表情一つ変えずに、両手に魔力の刃を作りEクロスへと斬りこむ。
Eクロスは両手で刃を手ごと掴み、また握りつぶすのかと思えば…
両腕や体から仙気の腕をいくつも生やし…管制人格を連続で殴りつける。

「…パンツァーガイスト」

管制人格はシグナムが使う装着型のバリアで防御したが体中に徐々にヒビが入り

「ブラッディダガー」
「っ！？」

破られる寸前でEクロスの背後に短剣を発生させ、攻撃することでEクロスから離れた。

「鋼の軛」

今度はザフィーラの使用していた拘束魔法。
しかも、ザフィーラは必ず地上や海底から発生させていたが
管制人格はEクロスの周りの空間から発生させ、Eクロスの動きを完全に封じた。

「！」

Eクロスは仙気の爪を伸ばし、楔を破壊しようとしたがなかなか破壊できず
管制人格はその隙にとある魔法の攻撃準備に入った。
その魔法はなのはの切り札である集束魔法『スターライトブレイカー』だ。

「あれは、私の魔法!?」
「なのははリンカーコアを蒐集された事があるから、なのはの魔法も使う事が出来るんだ」

驚くなのはにユーノは解説した。

楔が破壊出来ない事を悟ったEクロスは管制人格を睨む。
金色の瞳が妖しく輝くと管制人格に特大の雷が落ちた。

「がはっ!」

流石に応えたのかSLBを解除され、Eクロスを拘束していた楔も消えた。
好機と見たのか、Eクロスは両手を広げ体中から仙気を触手のように伸ばした。
一本一本がまるで槍のように先端が尖り、管制人格を突き殺そうとする。

「…エアロスパーク」

対する管制人格は右手を掲げ、振りかぶるように一気に降ろした。
すると光輪の形をした2つの魔力弾が迫りくる触手を次々と斬り裂く。

蒐集した神獣の一体、一角獣の姿をしたイクシオンの技、エアロスパークだ。

「アークセイバー」

さらに管制人格はなんとフェイトの魔法を使用した。
エアロスパークが触手を切り開いた空間に向けて斬撃が飛ぶ。
さほど速くない攻撃にEクロスはなんなくかわした。

「えっ、なんで私の魔法まで!?」
「多分、なのはちゃんが蒐集された時に少し蒐集された…みたいね」

フェイトは驚いたがノアが冷静に分析する。
以前なのはが蒐集された時にすぐ近くでリンカーコアを露出させられていたフェイト。
その際に少し巻き込まれて蒐集されていたようだ。

Eクロスは右手の仙気をドリルのような回転させ管制人格へと突撃する。
管制人格は防壁を張ったが、簡単に突破され…爆発。
しかし、次の瞬間には2人とも違う場所へと移動していた。
紅い光と黒い光に化した2人は激しくぶつかり合う。

「メガーヌ、召喚も出来ないのか?」
「ごめんなさい…魔力を集中させれなくて」

ゼスト隊やなのは達も黙って2人の戦闘を見ているわけじゃない。
なんとかバインドを解こうとそれぞれのデバイスに魔力を集中させようとしている
が、結果は変わらず…バインドもとけない。

「はぁ…はぁ……」
「ノア、大丈夫!?」

様子のおかしいノアにフェイトが声をかける。
他のメンバーからはノアの様子はわからない…が声の感じで調子がよくない事はわかる。

「へ、平気…ちょっと魔力切れが酷くて……へばりそうなだけだか…ら…」

段々と弱くなっていくノアの声。
しかし、なのは達にはどうする事もできない。

「ノア、ノア!……くぅ!!!」

クイントがもがくが先ほどまでと変わらずに身動き1つ出来ない。
無力感が漂う中…変化があった。

バシュ!!

突如、巨大な閃光が結界を刺し貫いた。
そして、閃光と共に舞い降りたのは

「母さん!それにクロノ!!」
「リーゼさん達まで!」

現れたのはプレシア、クロノ、リーゼ姉妹の4人。

「ごめんなさい、この結界を突破するのに時間がかかって」

「状況は知っている…少し前にアースラで結界内がモニター出来るようになったからな」
「もっとも通信はまだできないみたいだけどね」

プレシアとリーゼアリアの力でバインドを解除してもらいようやくノア達は自由の身となった。

「ノア！しっかり！」「大丈夫、ノアちゃん？」「早く回復魔法を！」

バインドが解かれた途端にノアは意識が朦朧とし地面へと力なく落下した。
近くにいたティーダがキャッチしたがノアは息も絶え絶えで苦しそうだ。

「アリア！あれを早くノアに！！」
「えぇ、ノアちゃん今回復させるからね…『リダクション』！」

リーゼアリアがカードを数枚取り出しノアの周りに浮かせ、魔法を唱えるとカードから白い魔力光がノアの体へと流れ始めた。

「ミラノール、分かってるわね？」
＜……はい！了解しました＞

プレシアの言葉にノアの左手についた腕輪が輝き出した。

「これは…魔力の還元？」

メガーヌが気付くとアリアは頬笑みながら頷き

「はい、このカードには魔力がたくさん蓄えられています…それをノアちゃんに流して…」
「魔力を回復させている、というわけか」

リーゼ姉妹はデバイスを使わない代わりに特殊なカードに魔力を溜めこんで使用している。
使い道は多種多様で今行った通り、カードに籠められた魔力を相手に流し
魔力を回復させる事が可能だ。

「すごいよ、この子…普通の魔導師なら1枚で十分なのにもう4枚も使ってるよ」
「ゼスト隊長達も今のうちにこれで回復を」

ロッテが数枚のカードをゼスト達に投げる。
するとゼスト達の体が光に包まれ、怪我が治っていく。

「ふぅ…助かった。このような使い方もあるのか、便利なカードだな」
「門外不出の技術なんだけどね…お父様も許可してくれたよ」
「提督が…」

今回の事はリーゼ達がグレアムに頼んだのだ。
カードに魔力を溜めこみ多種多様な魔法に使用する技術は管理局にあるが
リーゼ達の使用するカードは従来のより効率がよく、外部に漏らせない独自の技術でもある。
ゆえに仮面の騎士に変身している時にしか使っていなかった。

「それを惜しげもなく使用するとは…」
「別に、私達は私達のしたい事をしているだけよ」

照れくさそうにそっぽを向きながらもノアを回復させるアリア
見る見るうちにノアの顔色が良くなり、眼を開けた。

「うーん…あ、あれ……体が、軽い？魔力…回復してる！？」
＜はい、ノア様の魔力は完全に回復しています＞

ティーダの手からはね起きたノアは自分の体を見渡し魔力が回復した事を確認した。

「それで…問題はあっちね」
「私達が行きます！ゼストさん達はレギナスさんを…「その必要はない」あ、レギナスさん？」

なんとかイフリートを倒したレギナスがなのは達の元へとやってきた。

「それで…どうやってあの2人を止める？2人ともかなりの強さだ、何か考えはあるのか？」

ゼストの言う通りEクロスも管制人格も今この場にいる誰よりも強い。
下手に近付けば命はない。

全員が見上げる先では管制人格がEクロスの爪を右手で受け止め、左の手刀で首を狙おうとしている。
Eクロスは仙気の爪を後ろ向きに伸ばす事で管制人格から距離とってかわした。

まさに一進一退、しかも疲れをしらないのか息切れすらしていない。

「夜っちゃんは６６６ページもの膨大な魔力が…マスターはエヴォリューダーの力で魔力消費が
極限まで抑えられています…勝負はなかなかつかないでしょうね」

今にも飛びだしたい衝動をおさえノアがつとめて冷静に語る。

「ノアちゃん…なんとかならないの？」

「私がマスターにユニゾンしてマスターの意識を起こすしかないですね…」

「どういうこと？」

「今のマスターは破壊衝動に支配されていて本来の意識は眠りについているはずです」

「なるほど、ノアがユニゾンすることで内部から鎮める、ということか」

「それで…管制人格さんの方はどうすれば？」

「俺が行こう、俺が一番あいつの戦い方をわかっているからな」

「ならば俺も行こう、管制人格は近距離がメインの広域型みたいだからな」

「えぇ、私達で接近戦をしかけて魔法を使わせる暇も与えないわ」

管制人格を押さえるのにレギナス、ゼスト、クイントが名乗り出たが。

「いや、クイントはクロスの方を頼む…気になって集中出来なかったから困るからな」

「……ありがとうございます、ゼスト隊長」

「それでも結局戦って抑えるしかないって事かい？」

アルフの指摘に一同は黙り込んでしまった。
Eクロスはノアがユニゾンすることで目覚めさせる事が出来るかもしれない。
が、闇の書の管制人格の方はそう簡単にはいかない。
倒せば終わりというわけではないからだ。

「でも早くしないと、このままじゃいずれ…」

邪神が蘇る。
今はまだ防御プログラムのおかげで表には出ていないが
このままでは蒐集した魔力を利用して邪神の意識が目覚め管制人格を支配し
かつての肉体を取り戻し、完全復活を遂げるというのだ。
しかも、防御プログラムが邪神の邪悪な力に当てられ改悪された時に自爆プログラムが消去されてしまい、邪神復活を止める手立ては闇の書自体にはない。

「今のあいつは管制人格の姿をしているけど、実質は闇の書の防御プログラム…
邪神の封印プログラムとして作られ邪神の影響で改悪されてしまった…闇の書の闇」
「レギナス、ひょっとして記憶が！？」
「はい、全て戻りました。申し訳ありませんノア様」

そう言ってレギナスはいきなりノアに跪いた。
なのはやゼスト達もどうしたのかと顔を見合わせる。

「えっ？え？…ノア様って？」
「私の本来の使命はアルハザードの後継者に邪神の事を伝え共に戦う事でした…

しかし、邪神の影響を受けたとはいえ記憶を失い、あまつさえ本気で命を狙った事も…
重ね重ねの不義に不忠、まことに申し訳ありませんでした！」

地面に頭がめり込むほどに土下座するレギナス。
困惑するノアだったが

「顔をあげてよレギナス。今はそれよりもはやてちゃんやシグナム達を助けなきゃ」
「えっ、シグナムさん達って死んだんじゃ…」
「あ、それはね…そうだ、レギナス。守護騎士の破損修復システムは有効なの？」
「はい、今暴走している防御システムから主はやてが管理者権限を用いれば…」

夜天の書には例え守護騎士が大怪我や死んでも魔力さえあれば完全に治療出来るシステムがあった。
闇の書に変わった事でそのシステムも改悪を受けていないかと心配だったが
レギナスの言葉が正しければシグナム達は復活出来る。

「それじゃあ！」
「うん、多分はやてちゃんの意識もマスターと同じく眠っているはずだがら」
「それが出来れば苦労はないのだが…何かいい方法でも？」

レギナスの指摘にノアは不敵に笑い。

「それは大丈夫、万が一の時にってマスターと考えてた事があるから」

「ならばさっき言ったように二手に分かれよう」

まずはEクロスを元に戻す事を第一にという事で
ノア、なのは、フェイト、ユーノ、アルフ、クイント、クロノがEクロスへ
ゼスト、ティーダ、メガーヌ、レギナス、リーゼ姉妹、プレシアが
管制人格へと当たる事にした。

「いいか、今のあいつらは何をするか分からない、くれぐれも…死なないようにな」
「「「「はい」」」」

そうして魔導師達は魔人と鬼人の死闘へと介入していく…

・
・
・

ここは…どこや?暗い…みんな……どこいったん?

少女の意識は未だ闇の鎖に囚われたまま……

続く

第４４話　「悲哀の魔人　ＶＳ　憤怒の鬼人」（後書き）

カガヤ「は～い、何十回も書き直して…やっと少しはまともな文章になったかなぁ～レベルになりました４４話です！」

ノア「…早くつづき書いてマスター元に戻しなさい駄作者！！」

カガヤ「あ、ノア。あとがきにも復活か♪」

ノア「そんなことはいいんです！なんで3章はエピローグまでプロット出来てるのに書くの遅いんですか！」

カガヤ「いや…どうも頭に映像として浮かぶんだけど、文章にするとなかなか難して…無駄にいつもより長くなったし（汗）」

ノア「それで、あとどれくらいで3部終わりそうなんですか？」

カガヤ「う～ん…7，8話かな？」

ノア「今年中に第1部終わるんですか？」

カガヤ「まだ書きたい話が3章分くらいあるから……無理かもしんない（滝汗）」

第４５話　「戦う理由」（前書き）

誰かカリム、シャッハ、オーリスのＳｔＳ編での年齢大まかなのでいいので分かる人いませんか？
Ｗｉｋｉにも載ってないし…さて、何歳の状態で登場させようか（汗）

そんな先の話より、４５話始まります！

第４５話　「戦う理由」

ナゼコロさなイ？

『殺すのは嫌いだからだ』

うソダナ

『嘘じゃない！』

だッテおマエはもう…何人モころシタジャなイカ

『あぁ…だからもう殺すのは嫌だ』

ころサナくてモ…見殺シなラいいノカ？シグナムたちのように…

『っ！！！！』

・
・
・

「飛空突閃！」「絶炎衝！」

地上で激突するクロスと管制人格の間を割り込むように
レギナスとゼスト、２人の槍使いの斬撃が飛ぶ。

「クロスファイアーシュート！」「ディバインバスター！」

クロスと管制人格が上空へかわした先に、さらに追撃の砲撃が放たれた。

かわせないと判断したのか2人ともバリアで防御した。
しかし、これでは止まらない

「リバースアンカー！」

メガーヌの召喚魔法で2人の足元から錨が伸び拘束する。
2人共すぐに鎖を破壊しようとするがそれより先に動いた影2つ。

「「たあぁぁ！！」」

リーゼロッテとアルフがクロス達を束縛する鎖を持ち
それぞれ反対方向へと投げ飛ばした。

「それじゃ、ゼスト隊長」
「あぁ…クロスを頼む」
「夜っちゃんをお願いね」
「任せてください、時間稼ぎはしっかりしますよノア様」
「そのノア様はやめて、それと今まで通りの口調でいいよ。なんだか調子狂っちゃいます」
「ははっ、了解…ノア」
「うん、よろしい♪

ゼストとクイント、レギナスとノアは拳を突き合わせそれぞれの相手へと駆け出した。

ＶＳ　エヴォリューダー・クロス

「さてと…それじゃあ始めましょうか…馬鹿息子の強制更生をね！」

リボルバーナックルを打つ合わせ気合を入れるクイント、その後ろに控えるなのは達。

「いい？直接クロスとぶつかるのは私だけ。皆は援護に集中してもちろん手加減抜きでね！」

「今のマスターは対魔防御力が高いですから…本気で行かないと通りもしませんよ」

「わかった」「クロス君を元に戻す為なら…」

「それとクロノ…デュランダル、使えるわね？」

「はい、やれます！」

クロノの言葉にクイントは満足げに頷いた。

その時、Eクロスが鎖を破壊し…クイント達を睨みつけた。

（フェイトちゃんは速度は早くても防御が弱いから攻撃をかわしきれないだろうから厳しいし

アルフは補助系要員としてがんばってもらわないといけないし…

やっぱりこれしかないわね）

「ノア、フルドライブを使うわ、補助魔法お願い」

「…わかりました、ミラノール！」

＜スピリット・ブレス！（精霊の祝福）＞

ノアの強化魔法によりクイントの全能力が一時的に引き上げられる。

「さ～って行くわよ…『デュエルキャリバー・フルドライブ！』」

＜ストームモード・イグニッション＞

クイントのローラーブーツ型デバイス『デュエルキャリバー』

寡黙なデバイスで必要以上に喋る事はないがれっきとした新型ＡＩ

搭載型だ。
そのフルドライブは…ローラーブーツの踵に左右2本のノズルが付き
クイントの背中に青白い大きな翼が生える。
本来陸戦魔導師であるクイントが空戦にも対応出来るようになった
姿。
それが、デュエルキャリバーのフルドライブ『ストームモード』
さらに…フルドライブ中限定で魔力変換素質がつくというおまけ付
き。
デバイスを新調した事でゼスト隊の全員がフルドライブになる事で
魔力変換素質を得た。
メガーヌのグローブ型デバイスも外見は同じだが中身をアップグレ
ードさせている。
そして…クイントの得た魔力変換素質は魔力を風に変える…『風陣』
そして、ノアのアルガス式の補助魔法で通常よりも数倍の戦闘力と
なった。

「綺麗…まるで大きくなったノアの」「うん、天使みたい…」
「この年で天使っていうのも恥ずかしいけど…でも天使だろうが悪
魔と言われようがが…
あなたとノアのおかげで得た力であなたを止めるわ、クロス！」

青白い翼を羽ばたかせ、黒き翼のEクロスへと迫るクイント。

「アクセルシューター」「プラズマランサー」
「「シュート！（ファイア！）」」

クイントを援護する形でなのはとフェイトの射撃魔法が放たれた。
Eクロスはブラッディダガーを吹き飛ばしたのと同じように翼を羽
ばたかせるが
それを察知したなのはとフェイトはそれぞれの誘導魔力弾を散開さ

せた。

「隙だらけよ、リボルバー・ゲイル・キャノン！」

その隙にEクロスへと接近し突風を纏ったクイントの一撃がEクロスを捕えた。

黒い仙気の衣を貫きEクロスへと直撃、大きく吹き飛ばされた。

素早く態勢を立て直そうとしたところへ

「「いっけえぇ！！」」

先ほど散開したなのはとフェイトの魔力弾が全て襲いかかり、全弾命中。

「管制人格との戦いで多少なりとも疲れがあるみたいね…決めるわ、ユーノくん、アルフちゃん！」

「「チェーンバインド！」」

ダメージでふらついた所をユーノとアルフの2人がかりでのバインドで捕縛した。

「よしっ、いまだ！…いくぞ、デュランダル！」

＜OK，ボス＞

仕上げにクロノがグレアム提督から譲り受けた氷結の杖『デュランダル』を掲げた。

グレアム提督が闇の書を凍結封印しようとしていた広域凍結魔法「エターナルコフィン」

一時的にEクロスを凍結し、その間にノアがユニゾンしクロスを元に戻す。

Eクロスには仙気の衣があるので動きが封じられる程度で身体に影響が出る事はないらしい。
これがクイント達のプラン……だが、プランにはアクシデントが付きもので

「■■■■！！」
「ぐっ、エターナ…ぐあっ！」
「うわっ！？」「きゃっ！！」

Eクロスは2人ががりのバインドをあっさりと引きちぎり、全身から衝撃波を放った。
比較的近くにいたユーノとアルフは衝撃波を喰らい、弾き飛ばされ地面へと激突…
いや、直前でノアが魔法で衝撃を和らげたおかげでなんとか2人共無事だ。
クイントはなのはとフェイトを庇うように前に立ち翼を盾替わりにし、なんとか堪える。
広域魔法の準備に入っていたクロノの元にまで衝撃波が届き
発動直前でエターナルコフィンは解除されてしまった。

「ぐっ…ダメか」
「いえ、まだよ！」

クイントはEクロスへと突撃しようとしたが…

「■■■！」

Eクロスの全身から仙気の槍がクイントに向けて放たれる。

「この程度！……ディスペルスクリュー！」

風陣のおかげで攻撃に風の魔力が籠り、相手の魔力攻撃を吹き飛ばす効果が付く。
クイントは両手に魔力を籠め、迫る幾多の槍へ向け一気に解き放つ。
青白い魔力の渦は黒い仙気の槍を弾き飛ばしながら突き進む、がその先にクロスはいない。

「っ！？」

とっさに翼で右を守るように包んだ。
同時に、クロスが現れ、爪で翼ごとクイントを引き裂いていく。

「転移は出来なくても高速移動は出来るのね……ぐっ、きゃあぁ！」

・
・
・

ほラ…もうすグ、コロセレル…

『やめろ！』

なんで止める？それがプロジェクトＡの遺児としてのお前の存在意義…

『違う、俺は…』

それがエヴォリューダーとしてのお前の戦う理由…

『俺は…俺は！』

・
・
・

・

「クイントさん！…バルディッシュ！」

＜ソニックフォーム＞

フェイトはマントなどを外し軽装となる事で爆発的な速度を得る事が出来る

ソニックフォームとなり、クイントを救出した。

「あ、ありがとうフェイトちゃん…でも早く私から離れて！」

「いえ…私も戦います！」

「だから…援護をお願い…「違います！」…えっ？」

フェイトはバルディッシュを強く握り

「バルディッシュ…フルドライブ、いける？」

＜イエス、サー＞

「待ちなさい！あなたは…「やっぱりフェイトちゃんも同じ事考えたんだね」なのはちゃん？」

なのはがフェイトの隣に降り立ち、レイジングハートを構える。

「ごめんなさいクイントさん…でも私達どうしてもクロス君を助けたいんです」

「えぇ、だから2人には援護をお願いと言ったのよ？」

「援護じゃなくて私達も…クロスと戦います」

「そんな無茶よ！」

しかし、なのははクイントの方へ振り向き笑顔でこう答えた。

「クロス君が教えてくれました…無茶はこういう時にするものだっ

て」
「クロスが？」

それは、以前シグナム達と初めて戦った後の本局医務室での出来事…

「さって…それじゃ会議に行きますか…ん？どうした2人共？」

医務室を出て、リンディ達が待つ会議室へ向かおうとしたクロスは今にも泣き出しそうな顔で自分を見ているなのはとフェイトに気付いた。

「クロス君…どうしていつもそんな無茶をするの！それで何もなかったように笑って！」
「そうだよ…そんな無茶ばかりしていたらいつか死んじゃうよ！」

2人の言葉に少し驚いたクロスだが、優しく微笑み2人の頭を撫でた。

「俺は死なないよ…どんな事があってもどんな目にあっても絶対に帰ってくる。
　ノアになのはにフェイトに母さんにギンガにスバルに…みんなが待ってくれるからな」
「クロスくん…」「…うん」

先に医務室を出たノアが外で嬉しそうに中の様子をこっそり見ていた。

「それに2人とも覚えておくといいよ、無茶ってのはな…」

・

・
無茶は、大切な人の為に、大切な誰かを守る為にこそするもの。
・
・
「クロス君は私やフェイトちゃんやギンガちゃん達の為に無茶をしてきたの」
「だから今度は私達が…今、クロスの為に…」
「「…大切な人の為に無茶する時！（なの！）」」
「なのはちゃん…フェイトちゃん…」
「2人ともありがとう…」

クイントとノアの目から涙がこぼれ落ちた。
自分の息子の為にこの子達は命を張る覚悟があると…気付いたからどんな事があっても2人はマスターの側にいてくれると…心の底から感じたから
そして、2人がどれだけクロスの事が好きなのか…あらためて知ったから。

なのはとフェイトはそれぞれのデバイスを高く掲げ…

「レイジングハート、エクセリオンモード…」
「バルディッシュ、ザンバーフォーム…」
「「ドライブ！！」」
＜＜イグニッション＞＞

2人が光に包まれデバイスが変化していく。
その様子に反応したのかEクロスが2人を攻撃しようとするが

「おっと、女の子のお着替えを邪魔するなんて、そんな子に育てた覚えはないよ！」

クイントが間に割り込み妨害した、さらにユーノとアルフのバインドがEクロスを縛りあげ

「これならどうだ！ブレイズキャノン！」

デュランダルを右手に、SU2を左手に構えたクロノの砲撃がEクロスに直撃する。

一方なのはとフェイトはデバイスだけでなくバリアジャケットにも変化が現れた。

レイジングハートは先が尖り、槍のような形状になり

バルディッシュは杖の先が展開し魔力刃が伸び、巨大な剣のような形状になった。

そして、2人のBJにはなのはは桜色、フェイトには金色のラインが体中に走った。

このラインのおかげで出力リミッターが解除され、発生する過剰魔力の制御や放出を行う事で

身体への負担が極限まで減り、長時間の運用も可能になった。

ゼスト達の場合はリミッターがなくなり膨大な出力に鍛えられた身体が耐えられる為ついていない。

「私も…ユニゾンの準備だけなんてしてられません！」

＜スピリット・ブレス、リリース・デルタフォーメーション＞

ノアはクイントに賭けられていた強化魔法をいったん解除しなのは、フェイト、クイントの3人に高い効果が出る高位強化陣形魔法をかけた。

すると3人は半透明な球体に包まれそれぞれをラインで結ばれ三角形の陣形になった。

「これは…ノア！あんたまで無茶して！」
「へへっ、私にとってもマスターは大切な人だから…それに最初に無茶したのはお母さんだよ？」

負担が少ないとはいえフルドライブを使用しＥクロスに単独で接近戦を挑み
文字通り命がけでクロスを元に戻そうとしていたクイントは苦笑いを浮かべ

「仕方ないわね…それじゃ、みんなでもう少し無茶しましょうか！」
「その三角の陣形は簡単には崩れませんが、デルタフォーメーションの効果時間は５分です！」
「それだけあれば十分、よね？なのはちゃん、フェイトちゃん」
「はい！」「音速で決めます！」
＜＜＜ロードカートリッジ＞＞＞

三人のデバイスがカートリッジをロードし、準備は整った。

「援護する、スティンガーブレイド・エクスキューションシフト！」

ＳＵ２とデュランダル、２つのデバイスの力で以前よりも早く多数の魔力刃を形成し
クロノは上空からＥクロスへ向けて、魔力刃の雨を降らした。
あまりに広範囲だった為避けきれずに黒い仙気を何重に重ね球体となり防御した。
そして、魔力刃の雨が止み、煙に包まれるとすぐにクロノへ反撃しようと防御を解いた…
すると煙が晴れる前に。

「「チェーンバインド！」」
「嵐撃必倒、ハリケーンダンサー！」

またもやユーノとアルフのチェーンバインドに縛られ間髪いれずに
強化魔法で速度が強化されたクイントが真正面にが現れ
リボルバーナックルのスピナーとデュエルキャリバーのノズルを全開にし
拳撃と蹴撃の嵐をEクロスにお見舞いした。
防御を解除した直後なために防御が間に合わず次々に攻撃がEクロスに当たる。
一撃一撃が必倒の威力、しかも打つ度に攻撃速度があがる。
流石にEクロスを守っていた黒い仙気の衣に少しずつヒビが入っていく
それでも反撃しようと爪を伸ばしたが…クイントを斬り裂く前に爪が先に斬り裂かれた

「ソニックレイダー！」

ソニックフォームとフォーメーションの強化で音速となったフェイトが
縦横無尽にEクロスの回りを飛び回りすれ違いざまに何度も斬りつけている。
クイントの乱撃に衣を打ち砕かれていき
仙気の爪や槍を伸ばそうとするたびにフェイトに斬り裂かれ
徐々にEクロスを覆っていた黒い仙気がはがれていき…クロスの身体が見えてきた。

「「「「「「なのは（ちゃん！）」」」」」」

自分を呼ぶクイントやノア達の声に答えるように…Eクロスの背後

へとまわったなのはの…

＜ロードカートリッジ＞

レイジングハートのカートリッジ装填音が力強く響いた。

＜A．C．S．スタンバイ＞

レイジングハートの先端側面から大きな三対六枚桜色に輝く光の翼が開き。

「アクセルチャージャー起動、ストライクフレーム！」

＜オープン＞

さらに先端から魔力刃の槍、ストライクフレームが飛び出てきた。

「エクセリオンバスター、A．C．S．…ドライブ！」

翼を羽ばたかせレイジングハートを突き出し、なのはEクロスの背中へと突撃した。

それに気付いたEクロスは背中から巨大な仙気のドリルをなのはへと突き伸ばした。

「なのは！？」

ストライクフレームと仙気のドリルが激しく激突する。

「と…どいてえぇぇ！！」

カートリッジをいくつも装填させながらストライクフレームはドリ

ルを貫き
そのままEクロスの背中へと突き刺さった、それと同時に

「ラストクラッシュ！」「フィニッシュブレイク！」

クイントの右拳がEクロスの腹を、フェイトの振り下ろした巨大な斬撃が脳天を
それぞれ激しく打ち付け…仙気の衣に入ったヒビから光が漏れ

「ブレイク…シュート！」
「っ！？」

なのはの掛け声と共に光の翼が巨大化して羽ばたき
ストライクフレームの先端から放れた巨大な砲撃が

「■■■！！！！」

Eクロスの黒い衣を完全に破壊した。

「…マスター！！！」

露わになったクロスの身体にノアが溶け込んでいった。

そして、遠いミッドの地でクロスの無事を祈る三人の少女が持つ
ライカフラワーが強く輝きだした。

「兄さん…」「クロスさん…」「お兄ちゃん」

・　・
・

ががっ…なぜ…否定する…

『俺は…殺す為に戦っているわけじゃない！』

そ…そんな…馬鹿…な…

クロス…クロス君…クロス…クロス君…お兄ちゃん…兄さん…クロスさん…

『沢山の声が…皆の声が聞こえる……俺は…この声を、皆を、俺の大切な人を…』

やめ・・ろ・・・やめ・・・

『守る為に戦うんだぁ！！！』

ひ・・ひかり・・・怒りも憎しみも照らす・・・この光はぁ！！

・

・

クロスは何もない空間で手を伸ばす…その手は沢山の光に導かれ光と共に現れたノアの元へと…

「…マスター」「いくぞ、ノア、ラファール！」

＜セットアップ＞「ユニゾン・イン！」

なのはのブレイクシュートがEクロスの衣を吹き飛ばし

ノアがユニゾンすると同時にクロスの身体は光に包まれた。

だが、その光は暗く黒い光ではなく…眩しく輝く紅い光。

光の中から出てきた少年は…もう黒い衣を纏い紅い目に金色の瞳を

していなかった。

「クロス…くん！」「クロス…」「クロス！」「…クロス」「クロスゥ！」「クロス！」

そして、自分を呼ぶ６人の声に…

「みんな…ただいま！」

「「「「「おかえり！」」」」」

とびっきりの笑顔を浮かべそう答えた。

続く

第４５話　「戦う理由」（後書き）

カガヤ「勇者帰還！！」

ノア「わ～い！わ～い！！」

クロス「あ、ども…３話ぶりに帰って来ました…うぅ～穴があったら入りたい…」

カガヤ「掘ろうか？マントルまで届くくらいの」

クロス「やめい！！…ってか長かったなぁ俺元に戻るの」

ノア「本当は１話で戻るはずだったのでは？？」

クロス「うーん、Ｅクロスの無双戦闘が思ったより長くなっちゃって…にゃははは」

クロス「笑ってごまかすな！！…皆さん！こんな適当駄作者にどんどん言ってやってください！」

ノア「そーですそーです、私とマスターの間を裂くものはなのはちゃん達以外許しません！」

クロス「…そう言ってくれるのは嬉しいんだけど、ノア…そのなのは「達」には…誰が入るの？（汗）」

ノア「……ニヤリ（邪笑）」

第４６話　「ＶＳ　闇の管制人格」（前書き）

誤字脱字あるかもしれませんが…始まります！

第４６話　「ＶＳ　闇の管制人格」

ノアやクイント達のおかげでクロスの暴走が収まった。

「ごめん、みんなにすごく迷惑かけた…ありがとう」

深く頭を下げるクロスをクイントは優しく抱き締めた。

「馬鹿だねこの子は…分かっているよ。守れなかったのが悔しかったんでしょ？

夜天の書を解放して、はやてもシグナムもレギナスも…皆助けようとしたのに

逆にシグナム達が自分を守って死んだのが…許せなかったんでしょ？」

「うん…シグナム達が殺されたの見た時頭が真っ白になって…それで…また…」

「大丈夫、今のお前はクロスロード・ナカジマ…私の自慢の息子、殺戮兵器なんかじゃないんだよ」

「母さん…ありがとう」

そしてクロスはなのはとフェイト達の方へと向き。

「本当にありがとう…声、聞こえたよ。俺を呼ぶ声が」

「えへへ、これのおかげ…かもね」

「うん、それにいつもクロスには助けてもらってるから…ほんの少しでも恩が返せてよかったよ」

２人は胸元からライカフラワーの花弁を出した。

２つの花弁は共に淡く輝いている。

「そっか…」
（もしかしたらこうなる事が分かっててくれたのかな、クラリス博士）

「クロス」
「あ、あぁ。クロノ…ごめん、結構世話かけた」
「何普段から君には世話になっているからな、お相子だ。それよりアースラと通信が回復した」
『クロス君！みんな無事！？』
「うおわぁ！？」

通信モニターが開くとエイミィの焦った顔がアップで映し出された。

『あ、ごめんごめん、驚かせちゃったね…もうしばらく通信もモニターも出来なくて心配で心配で』
「は、ははっ…御心配おかけしました。でもまだこれで終わりじゃないから」
『うん、そうだね。こっちでも今アルカンシェルの準備と結界とかの解析進んでるよ』
「そっか…それじゃ俺達も……ってその前に！」

何か思い出したのかクロスは急いでどこかへと飛んで行った。
なのはとフェイトもすぐにクロスを追った。
その後ろを何事かと言う顔でクイント達が続く。

「う、う～ん……あれ？私どうしちゃんだんだろ？」
「アリサ、ちゃん？…私達どうしてこんなところで……あっ！」
「よっ、気が付いたか？」

クロスはメガーヌの張った結界内で気絶していたアリサとすずかの元へ向かったのだった。

「クロス！あんた…その格好は！ってさっきのお姉さんたちは？あれ？…あれれ？？」

「アリサちゃん、落ちついて落ちついて深呼吸深呼吸」

混乱するアリサをすずかが宥める。

クロスの後ろでは沈んだ様子のなのはとフェイト。

だが、２人とも意を決したようにアリサ達の元へと歩いてきた。

「アリサちゃん、すずかちゃん…」

「……」

「なのはにフェイトまで！これは一体どういう事なの？その服はなんなの！？」

「なのはちゃん達って……」

「アリサ、ずずか」

クロスは２人を制するように両手を突き出し真剣な顔つきになり

「悪い、その話は全部終わってから必ず話す…だから今はここから出ないで欲しい」

「えっ？」

「あ、これは？」

そう言われて２人は初めて自分達が薄い球体に包まれている事に気付いた。

「これは２人を守る結界なんだ、ここにいれば安全だよ」

「2人共、久しぶり。それでごめんね、本当は2人とも安全な場所に連れて行きたいのだけど
ちょっと厳しくて、その代わりここに居れば大丈夫だから、ね？」
「ノア」
『はい！』

クイントが2人に事情を説明している間にクロスとノアはメガーヌが張った結界の上に
更に強力な結界を3重に張った。

「これでよし！…それじゃまたあとでな」
「ちゃんと後でお話しするから！」
「待ってて…」
「あ、ちょっと！」

アリサとすずかを残してクロス達は飛びだった。

「あれで…いいのかな？」
「あぁ、今はああするしかないさ…でも後でちゃんと話ししないとな」
「その…全部話して大丈夫なの？」

フェイトが不安そうな顔でクロスに訪ねた。
一般人であるアリサとすずかに話す事が管理局としてどうかというのだ。

「大丈夫大丈夫、そこら辺は私達ゼスト隊に任せなさい。それとなのはちゃん」
「えっ？あ、はい」
「いい機会だから士郎さんや桃子さん達にも話した方がいいわよ？

これからも魔法に関わるならね」

クイントに言われた事はなのはがずっと考えてきた事だ。
いくら誤魔化してもこれからもうまく誤魔化しきれるとは思えないし何より家族に秘密を持つ事がなのはには耐えられなくなってきていた。

「…はい！」

そう返事するなのははどこか…すっきりとした笑顔だった。
その様子にユーノはどこかほっとした顔をして眺めていた。

「ノア、シグナム達は元に戻るんだな？」
『はい、レギナスの言うにははやてちゃんがマスター権限を取り戻せば、可能だそうです』
「そっか…良かった、なら全速力ではやてと夜天の管制人格を元に戻さないとな！」
『任せてください！』

Ｓｉｄｅ　プレシア

「たあぁ！」「はっ！」

ゼストとレギナスの槍が左右から管制人格へと襲いかかる。
しかし、管制人格は無表情に素手で槍を掴み放り投げてしまった。

「牙狼召喚！」

今度は天隼に乗ったメガーヌが召喚した数匹の銀色の狼が上から飛

びかかる。
管制人格は片手を掲げバリアを張り、狼達は弾かれてしまった。
正直流石としか言えない、これが闇の書…世界を滅ぼすと言われた力のほんの一部。
元は夜天の書と言うアルハザードの遺産の1つ、ここまでの力とは。
でも…目的は管制人格の無力化でも撃破でもない。
私達の第一目的は…時間稼ぎ、今の私達では管制人格内に閉じ込められた少女を救う術はない。
救えるのは…おそらく、クロスとノアあの2人だけ。

「こんのぉ！」「堕ちろぉ！」

リーゼ姉妹が格闘と砲撃で挟撃を仕掛ける。
管制人格に広域魔法を使わせない為に私達は連続で攻撃を仕掛けている。
詠唱の隙を与えない為の私の魔法の準備も整った。

「2人共離れなさい！　サンダーレイジ・スフィアブレイク！」

管制人格を巨大な球体に包みこみ内部で雷を多数発生させ、最後に爆発させる。
私の手にある新しい杖型デバイス『ケラウノス』のおかげで出来る新魔法。

「ケラウノスウィップフォーム！」
＜ラジャ＞

杖の先についた3つの突起が魔力ワイヤーで伸び、鞭のようにしなった。
鞭…これを見るとフェイトへ行った様々な酷い仕打ちを思い出す。

全く、クロスやノアもいい性格してるわ、こんな形状持たせて…
でも、だからこそ…もうあんな思いをフェイトにさせない、と決意を固める事が出来る。
そこまで深く考えてデバイス設計するなんて、あの2人は9歳とは思えないわね。

「バイパーウィップ！」

3本の鞭が蛇のように管制人格へと絡みついた。

「今よ！」
「クロスファイアシュート…セカンドシフト！」

メガーヌの召喚した隼に乗ったティーダが管制人格を取り囲むように設置させた
多数のスフィアから一斉に射撃が放たれた。
これで少しは応えてるはず…と思ったが甘かったみたいね。

「ブラッディダガー」

爆発で起きた塵煙の中から沢山の紅い短剣が飛んできた。
不意を突かれたが、そこへレギナスが前に立ちはだかり

「リフレックス！」

槍に付いた鏡から発せられた光が短剣を全て撃ち返してしまった。
しかし、煙の中には管制人格の姿はなく

「上だ！」

上空に佇む管制人格の両手には見るだけで分かる強力な広域攻撃魔法が…

「デアボリック…」
「しまった！」

一瞬の隙をついて広域攻撃魔法の詠唱をさせてしまった。
プロテクションやシールドで防御しようとした私達だが一手遅い…
やられる！
その時…

＜ソニックスピード＞
「シェルブリットォー！」

聞き覚えるある声と共に、眼にも止まらぬ速さで管制人格が誰かに殴り飛ばされるのが見えた。
その声の主はゆっくりとこっちを向き

「間に合ったぁ…大丈夫ですか？」

本来なら彼が眼の前にいる事に驚く場面だろう…
だけど、私も周りのみんなも彼がいるのが当たり前のような顔をしている。
当然だ、なぜなら…目の前に居る彼、クロスは必ず暴走したエヴォリューダーから元に戻る。
私の愛する娘たちがきっと止める。
そうみんな信じていたからだ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

管制人格を殴り飛ばした闘士クロスの元へクイント、なのは、フェイトが集まった。
ユーノ、アルフ、クロノが反対方向から管制人格を囲むようにいる。

「遅いぞ、クロス」
「遅れてごめん、レギナス。その分きっちり決めるさ」
「クイント、フルドライブを使ったのね」
「えぇ、メガーヌ達はまだ使わないでね、切り札は取っておきたいから」
「随分と余裕だね…」
「仕方がないよロッテ、まだ何があるかわからないんだから」

管制人格は態勢を立て直し何事もなかったのように周りに注意を払っている。

「あれが…ノアの妹の姿を真似ただけで管制機能を乗っ取っている封印プログラムか」
『うん、そうだよ。だから呼びかけても反応なし、夜っちゃんは完全に取り込まれてるみたい…』
「大丈夫だ、必ず…助け出そう！」
『うん！で…どう？私の妹の姿は？可愛いからって惚れちゃった？』
「いやいや…てかあれは見た目だけの偽者って言ったばかりだろ！」
『それでも見た目は夜っちゃんそのまんまですよ？』
「あのなぁ…見た目だけ言われてもしょうがないだろ…」
『性格も問題ないですよ？　何せ私の妹なんですから♪』
「だからこそ心配なんだよ」
『ちょ、ちょっと！　それは酷いと思いますよマスター！』

漫才のようなやりとりをするクロスとノアにみんな苦笑した。
なのはとフェイトなどは話の内容を興味津々で聞いている。
ユニゾン中とはいえノアの声は周りに聞こえまくりだ。

「はいはい、じゃれあってないで…何か作戦あるんじゃなかったの？」

クイントの声にハッと我に帰り、軽く咳払いをして改めて管制人格と対峙する。
そうこうするうちに管制人格の方は何かまた神獣を召喚しようとしていたが

「させるか！」

ティーダの精密射撃に阻まれ

＜アクセルシューター＞
「シュート！」

なのはの誘導弾を交わした先で

＜プラズマランサー＞
「ファイア！」

弾速の速いフェイトの射撃魔法が直撃する。
さらにゼストとレギナスが追撃をかける。
クロス剣士になり全員に話をしながら攻撃に加わった。

「んな、俺がメンタルダイバーで管制人格内に侵入してはやての眼を覚ましてくる」

「メンタルダイバー…なるほど、あれなら精神世界への侵入も可能だな」
「でも、メンタルダイバー中はクロスの身体は…」
会議に集中しながらもクロス、ゼスト隊を中心に攻撃は続く
「大丈夫だよ、母さん。その間は私がソウルチェンジユニゾンで戦うから」
「えっ、あれって魔力の消耗が激しいから１０分しか…」
「それも大丈夫、リーゼ達からもらったこの魔力カード、これで随時魔力を回復させながら戦うから」
「私達の持ってるカード全部持ってきたからね、十年間溜めに溜めたカードだよ」
「でも、こういう時にこそ使うカードだから…遠慮なく使って」
「カードの蓄えは結構あるけど、それを全部使ってもタイムリミッドは４５分かな」
メガーヌの錨、ユーノ、アルフの鎖が管制人格を捕えたが一度捕えられたせいか簡単に破壊された。
「しかもリミッドぎりぎりまで戦ってたらまた魔力切れになっちゃうから…」
「３０分で…ケリ付けます！」
沈黙する一同、しかし決断するのは一瞬。
「大丈夫ですよ、マスターは可愛い女の子を助けるのは早いですから♪」
「ちょっ！なんか誤解招く言い方はよせよ！」
「ふふっ、そうね。クロスなら…きっと助けられるわね」

「ま、囚われのお姫様を助けるのは白馬の王子様の役目、だからな」
「我が主と仲間達を…頼む！」

みんなの激励を受け、クロスは闘士となり身構えた。

「みんな、クロスの援護だ！」
「「「「「「「「「「はい（おう）」」」」」」」」」」

一斉に散開し、ユーノとアルフのバインドを合図に遠距離組は射撃魔法を連射し。
その弾幕を縫う様にゼスト、クイント、レギナス、リーゼロッテの４人が四方から攻撃を仕掛けた。
だが、管制人格が両手を広げると

「飛龍翔刃陣」

シグナムの防御技で炎の蛇剣を周りに張り巡らせ４人を吹き飛ばした。
しかし、吹き飛ぶ４人と入れ違うかのように近付く２つの小さい影があった。

「エクセリオンバスター、Ａ．Ｃ．Ｓ．ドライブ！」
「ソニックレイダー」

なのはとフェイトだ。
２人共高速近接攻撃で隙を作ろうと突撃するが。
管制人格が２人のデバイスの魔力刃を掴んで止めた。

「えっ！？」「止められた！？」

掴んだ両手が淡く輝き、闇の書のページが実体化し開かれた。

「いけない！」「２人とも離れろ！！」

クロスとレギナスが叫ぶが…少し遅く。

「あっ…ぁ」「くぅ…」

なのはとフェイトは光の粒となって…闇の書へと吸収された。

「なのは！」「フェイト！！」

ユーノとプレシアの悲鳴が木霊する。

「くそったれ！！！」

瞳が紅くはなっていないが管制人格の元へと飛びだそうとするクロスをレギナスが止めた。

ノアも実体化してクロスを止める。

「落ちついて下さい、マスター！」

「そうだ、あの２人は吸収されただけだ！」

「くっ…」

「エイミィ！２人の状態はどうなってる？」

メガーヌとティーダとリーゼロッテが射撃で牽制する中

ゼストがエイミィになのは達の確認をした。

『２人のバイタル正常！内部空間に閉じ込められたみたい！』

「聞いたな、クロス？」
「はい…なら、やる事は変わらない！　助ける人数が増えただけ！」
『行きましょう、マスター！』

再び態勢を立て直したクロス達。

「ゼスト隊長…フルドライブは」
「いや、まだ使うな…」

ティーダの言う通りゼスト達もフルドライブを使えば事態は好転するかもしれない。
だが、ゼストは嫌な予感がずっとしていた。
クロスの暴走も止まったと言うのにこの胸騒ぎは一体…

「お前達も吸収してやろう」
「冗談言うんじゃないよ！」
「アルフの言う通りね…少しは話すようになったかと思えば、フェイトを返しなさい！」
＜サンダープレッシャー＞

特大の雷が管制人格を呑みこむ。

「はぁ…はぁ……クロス！」
「了解！！」

クロスはなんとプレシアの雷魔法の流れに乗り管制人格へと接近した。
魔力変換素質を身体に纏う事で、ある程度同系列の魔法を防ぐ事が出来る。

さらにクロスは以前プレシアの魔力を解析し同調させた事があるので
同じように同調させ、プレシアの雷の流れに乗る事は簡単だった。

「ここだ！」
＜メンタルダイバー＞

雷で身動き取れない管制人格に紋章を浮かばせた額を合わせ
クロスの精神は管制人格を通じて、闇の書の内部世界へと侵入した。
そして、後に残されたのは…

「さて…次は私が相手よ！　夜っちゃんやはやてちゃん達を解放してもらうわ！」

ソウルチェンジユニゾンをしたノアが右手をかざして闇の管制人格を睨みつけた。
太極の書と光天の書と闇の書…
光と闇の戦いが内と外で始まった。

第４６話　「ＶＳ　闇の管制人格」（後書き）

カガヤ「いやはや…キャラが多いと戦闘シーンが難しくなる！」

クロス「ま、その為に色々な神作者様達の小説見てきたんでしょ？」

ノア「感想とかで散々暴れましたねぇ～ティアコン駄作者♪」

カガヤ「うるさい！ツンデレで適度な胸の大きさ！ツインテールほどけば立派な長髪！…最高でしょ！」

クロス「でもその割には…ティアナ出番まったくないなここ」

カガヤ「…シリアスの戦闘シーンで７歳児に出番あったらそれはそれでどうよ？」

クロス「そうそれ！なんでティアナ７歳なんだ？６歳じゃないのか？」

カガヤ「えーこの小説では事件の年代やキャラの年齢を多少いじっている場合があります！」

ノア「スバルとギンガが母さんに保護される時期も変わりましたからね」

カガヤ「まぁね…ところで皆さんに質問です！

カリム、シャッハ、オーリスのＳｔｓ時点での大まかな年齢設定ってありました？」

ノア「なかったような気がしたけど…大体じゃダメなの？」

カガヤ「いや、早めにだそうかと考えてるから…逆算してどれくらいの年代になるのかとね」

クロス「なるほど…んでいつ出るの？」

カガヤ「次の次の章あたり…今年中に出るといいなぁ（遠い目）」

ノア「本当に完結出来るんですかこの作品（汗）」

カガヤ「が、がんばります（滝汗）」

第４７話　「フェイトの世界、なのはの世界」（前書き）

うわぁ～！！！気付いたら朝だったぁ～！！
パソコンの前で寝てしまったぁ～！！

な第４７話です（笑）

第47話　「フェイトの世界、なのはの世界」

？？？

Ｓｉｄｅ　フェイト

「フェイト、アルフ…起きなさい」

誰かが私を呼んでいる…この声は

「お母さん？」

「全く、リニスを困らせないでね」

リニス？

「あははは、私は大丈夫ですよ。それに寝る子は育つといいますから♪」

「そういう問題じゃないわよ、リニス。アリシアはもう起きてるのよ」

アリシア…？

「あ、そうでした！早く起きてくださいね。朝御飯食べずにまってるんですから」

そうだ…早く起きなきゃアリシアがまた拗ねてるかもしれない！

脇に眠るアルフを起こして急いで着替える。

食堂に行くと、思った通りアリシアがテーブルに座ってこっちを睨んでいる。

「ぶ～遅いよ、フェイト！せっかくの朝御飯冷めちゃうよ。フェイトのお寝坊さん！」
「あら、夜中に寝ぼけて私のベットに潜り込んできたのは誰だったかしら？」
「あ、あああれは、その！…お母さん！」

顔を真っ赤にするアリシアにお母さんとリニスと顔を見合わせ笑ってしまった。
それを見て更に顔を赤くして怒るお姉ちゃん。
これがいつもの私の朝…いつも通りの朝の風景

「本当にそう思う？」
「えっ！？」

ふとそんな声が聞こえた気がしました。
でも周りを見回しても私達以外誰もいません。
今の声…どこかで聞いたような声がするけど、どこだったかな

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「よしっ、ダイブ成功！…ってなんだかドロドロしてるなここ」

アルガス魔法で闇の管制人格の内部世界へと突入したクロス。
以前にフェイトの精神に入り混んだ時とは違いそこには何もない虚無の空間が広がっている。

「ともかく、なのはとフェイトを先に探そう」

そうして暗闇の奥深くへと進んでいく。
だが、少し進んだ所で辺り一面から黒い手がいくつも伸びてきた。

「くっ、異物の俺を取り込もうとしているのか？参ったな…魔力はほとんどノアに残してきたから」

少しでもソウルチェンジユニゾンを長引かせる為にノアに自分の魔力を分けてきた今のクロスには少しの魔力しか残っていない。

「えぇ～い！ゆっくり探してる時間もないんだ…一気に突っ切る！」

気合を入れて手を振り解くとクロスは更に奥底、黒く深い闇へと進んでいった。

Ｓｉｄｅ　なのは

「おはよ～アリサちゃん、すずかちゃん」
「おはよっ、なのは♪」

学校へ向かうバスの中でアリサちゃんやすずかちゃんと合流、今日も時間どおりです♪
いつも通りの登校で…いつも通りの授業風景です。
でも…

「将来の夢…かぁ」

お昼休み中、さっきの授業での先生の話を私はずっとその事を考え

てきました。
将来の夢、みんな色々な夢を話してて
アリサちゃんやすずかちゃんにも漠然としてもちゃんと夢がある
みたいで
私もお母さんやお父さんの店、翠屋を継ぐ…事になるのかもしれな
いけど
なんだかやりたい事が他にあったような気がして…

「でも私達まだまだ小学3年生なんだし」
「うん、そこまではっきりとは決めてなくてもいいんじゃないかな
？」

なんて、2人が言ってくれて少しは気が楽になったけど
私のやりたい事…なんだったっけ？

「忘れちゃったの？」
「えっ？」

屋上の隅で茶色の髪をした男の子が…ふと私にそんな事を言ったよ
うな気がしました。
でもふと眼を向けるとそんな男の子はどこにもいません。
アリサちゃんとすずかちゃんに聞いても何も聞いてなかったみたい
で。
気のせいだったかな？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「はあぁぁ！」

「せいっ！」
「……っ！？」

ノアの蹴りとクイントの拳を両手で受け止め管制人格の顔が少し歪む。
足と手を掴まれたままさらに追撃の魔法を放つノアとクイント。

「アイスエッジ！」
「リボルバーシュート」

手を凍らせようとしたノアの氷刃も、頭を狙ったクイントの拳撃も管制人格には確かに直撃したのに無傷だった。

「くっ」「離れるわよ！」

一端距離を保つ2人、すると同時にプレシアの電撃が管制人格を襲う。

「…ワンパターンだな」

管制人格は電撃を一瞥しただけで隙を窺っていたリーゼ姉妹へと跳ね返してしまった。

「ぐっ…きゃ」「あぁぁ～！」
「…まずいわ、戦えば戦うほどに強くなってる」
「こっちの動きも魔法も見切られてきてる・・・このままじゃ」

ゼストとレギナス、ティーダ、アルフは管制人格の攻撃で無視できない怪我をしてしまい。
メガーヌ、ユーノの治療を受けている。

「人数的にも戦力的にも打つ手が厳しくなってきてる…」
「頼みの綱は…マスターですね」
「えぇ、だからそれまでがんばりましょう」
「はい！」

（マスター、急いで下さい…私の魔力が付きる前に！）

Ｓｉｄｅ　フェイト

今日は天気もいいのでみんなでピクニックです！
見晴らしのいい丘までアリシアと競争です。

「フェイト～早くおいでよ、あの丘から見る景色が最高だって評判なんだよ！」
「ま、待ってアリシア！」
「あ～２人共、そんなに走ると転んじゃいますよ」

なんでアリシアはあんなに足が速いんだろう？私より小さいのに

ボカッ！

「イタイ…」
「そ、それは関係ないよ！」

あ、そんなやりとりしてる間にアルフが…

「えへへ、一番のり！」
「し、しまった～！まさかのアルフに先を越されちゃったよ～」

「もう、競争なんてしないでゆっくり行かないとダメですよ」
「ふふっ、2人共元気ね」

後ろからバスケットを持ったリニスとお母さんが追いつきました。
その後ろに…ふと、誰かが見えた気がしました。

「あれ？お母さん、その男の子…誰？」
「ん？男の子…どこにいるの？」

あれ？今確かにお母さんの後ろにいたような気がしたのに…
あ、いた！…でも、あんな下に、それも遠ざかっています。

「ねぇ、あの子が気になる？」
「えっ？アリシア？」

ふと、後ろを振り向くとアリシアが立っていました
その顔がまるで表情のない人形のようで、少し怖いです…

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「フェイト、なのは…どこにいる？」

さっきからクロスはずっと闇の中を進んできた。
途中幾度も黒い手がそこらじゅうから伸びクロスを掴もうとしていた。
だが、なんとか振り解きクロスは先へと進む。
手にはライカフラワーが、強く握りしめる。
クロスが気が付かないうちにライカフラワーの水晶がうっすらと輝きだした。

「ん、この感じは…見つけた！！」

突然なのはとフェイトの魔力を感じ取ったクロスは
感じた場所を目指して一直線にスピードをあげた。

Ｓｉｄｅ　なのは

放課後です！　今私はアリサちゃんの案内で公園内の抜け道を通っています。
ちょっと薄気味悪いけど木がおいしげってて風が気持ちいいなぁ

「もう少ししたら林を抜けるよ」
「段々日もくれてきたから、早く帰らないとね」

２人の言葉通りもう夕日も沈みかけていました。
その時です

『…たすけて！』
「えっ？」

突然誰かの声が聞こえてきて、私は辺りを見渡しましたけど誰もいません。
気のせいかと思い先を急ごうとすると…

『たすけて！』

また聞こえました、さっきよりもはっきりと
しかもこの声にはどこか聞き覚えがあるような…

「い、今の聞こえたアリサちゃん、すずかちゃん?」

恐る恐る2人に声の事を聞きましたが

「私は…何も、すずかは?」

「私も聞こえないけど…大丈夫?」

「う、うん…誰か助けてって声が…」

「ちょ、ちょっと! 脅かさないでよ! 何か出たの!?」

アリサちゃんが震えながら辺りを見渡しましたがやはり誰もいません。

私達の周りに涼しい風が通り過ぎました…

「は、ははは…やく帰りましょう!」

「そうね…もう暗くなり始めたし」

「…うん」

私達は急いでその場を離れようとしました…が

「待って」

「えっ、何?」

また声が…しかもさっきの声とは別の昼休みに聞いた男の子の声が…

後ろを振り向くと昼休みに見かけた男の子が私の手を掴んでいました。

「だ、誰? あなた誰なの?」

「行かないの? 助けを呼んでいるよ?」

「助けを?…あなたには聞こえるの?」

「うん、呼んでるよ。ほら」
『たすけて…たすけて！』
「あ、あぁ…こ、この声は！」

誰だったか…私のよく知るこの子とこの声は…

「どうしたの？　なのは？」
「早く行きましょうよ、なのはちゃん？」

振り変えるとアリサちゃんとすずかちゃんが無表情な顔で私に向けて手を差し出しています。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　フェイト

「あり・・・しあ？」
「ん？な～にフェイト？　どうしたの？」

顔は笑っているけど、なんだかお人形みたいな笑顔のアリシア。
違う、アリシアはこんな顔で笑わない…これも違う！
違う？　何が違う？　こんな顔の事？　それも違う…
あ！　あの男の子が行っちゃう！　追いかけなきゃ！

「待って、フェイト…どうして追いかけようとするの？」
「どうして…って、それは…」
「ほら、行こうよフェイト。お母さんもリニスもアルフも待ってるよ」

丘の上でこちらに手を振るお母さん達。

やっぱり違う、何もかも違う…全てが違う！
そう思った時、私の胸元で何かが光輝きました。
取り出してみると…それは、ライカフラワーの花弁……

そうだ！

私は、闇の管制人格に呑みこまれて、そして…

「……思いだしたんだね」
「…アリシア…」

ここがどういう世界かは理解出来た、同時に眼の前にいるアリシアの事も

「うん、でも良かった！」
「えっ？」

先ほどまでの人形みたいな顔とはうって変わって満面の笑みを浮かべるアリシア。

「本当はこのままが良かったんだけど…フェイトはあっちがいいんだよね？」
「あ…うん……待ってる人が…いるから」
「うんうん♪　あ、ごめんなさい…こういうのは普通フェイトから言いだすもの、だよね？」

ごめんごめん、としきりに頭を下げてくるアリシアについ噴き出してしまった。

「あ、笑ったなぁ～！」

「ごめん、アリシア…ここは夢の世界なんだね？」
「うん、フェイトが望んだ世界だよ」
「私が望んだ世界…」

確かに…リニスもアリシアもお母さんも４人で仲良く暮らす世界。
それを一時も望んだ事がないか？と聞かれたら…

「それでも…ここには」
「クロス君もなのはちゃんも…いない。ここは私が死なずにフェイトが普通に生まれた世界」
「だから、クロスもなのはとも出会っていない…」

私がプロジェクトＦの産物じゃなく普通にお母さんの娘として生まれた世界。

「アリシア…ごめんね、ここには…いられない。約束…したから」

そう、私はなのはと一緒に誓ったんだ。
何があってもクロスと一緒にいたいと…クロスの助けになりたいと

「そう言うと思ったよ、でももう少し考えてくれてもいいのになぁ～お姉ちゃんは寂しいかも」

涙目で俯くアリシアに罪悪感が込み上げてきた。

「ほ、本当にごめんなさい！」
「な～んて、嘘だよ♪　確かに私はここでなら生きていけるけど、でもそれじゃフェイトが
　大切な出会いをしないじゃない。私はもう死んだ人間なの、それをお母さんも受け止めて

立派な御墓まで立ててくれて、フェイトとクロス君達には感謝してるんだよ」
「アリシア…」
アリシアが私の手を優しく握る…暖かい。
そして、握られた手を見ると…そこには私の相棒がいた。
「だから、私の事は気にしないで…精いっぱい生きて！」
「アリシア……うん、私生きる！　みんなと一緒に生きるよ！」
アリシアは私の言葉に満足そうに何度も頷いた。
その時胸元のライカフラワーがまるで何かを訴えかけるように点滅し出しました。
「それじゃあ、そろそろ行ってあげて、もうそこまで来てるみたいだよ？」
「えっ…まさか！？」
「そっ、白馬の王子様が眠り姫達を起こしに来てるよ…あ、目覚めのキスがないとダメかな？」
「なっななななにをいっているの！？」
思わぬ言葉に顔を真っ赤にしてあたふたしてしまった。
ケタケタ笑うアリシアを見て、からかわれた事に気付いた。
「あ～おかしい。朝の仕返しだよ、フェイト♪　なのはちゃんもすぐに出てくると思うよ
それじゃあ…行ってらっしゃい」
「アリシア…ありがとう、姉さん」
アリシアが私を抱き締める…すごく暖かくて柔らかい、母さんに抱

かれているみたいだ。
涙がこぼれる…でも、気にしない。
だって、私の願いが叶ったから。
私の元になった、アリシア・テスタロッサ。
事故で死んだ、私の姉さん。
出会う事も話す事も別れも言えずにいた…けどこれで別れが出来た。
お別れがしたい、だなんて変なお願いだけど。

「いい子だね、フェイト…お姉さんも鼻が高いよ♪…それじゃあ、さよなら、だね
お母さんに伝えて。生んでくれてありがとう…私はいつでも見守ってるよ。って」
「うん…うん、絶対に伝えるよ」
「…良かった」

笑顔のままアリシアが…消えた。
私は涙を拭いて、バルディッシュを強く握りしめる。

「……行くよ、バルディッシュ！」
＜イエッサー＞

見ていてね、姉さん…私達の事を…

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　なのは

私を無表情でみつめるアリサちゃんとすずかちゃん。
２人の方へ足を踏み出そうとします…けど、足が動きません。

「…あ、あれ？」

その間にも私に助けを求める声は強くなっていきます。

『たすけて…たすけて……！』

「そんな声…無視しちゃえばいいじゃない」

「そう、早く帰りましょう、なのはちゃん」

「アリサちゃん？　すずかちゃん？」

無表情に言う2人の口元がうっすらと歪みました。

それがとても怖くなって…でも、反対方向では声が聞こえて…

「どうするの？」

男の子はさっきから私の手を握っています。

「どうするの…って」

「あの声の元に行って、助けるの？　それとも…今まで通りの平穏な世界を望むの？」

胸元で何かが暖かく輝くのを感じた私はそれを取りだしました。

それは……ライカフラワーの花弁

そして、私を呼ぶ声にその顔をよく見た私は……

「クロ…ス君？」

思いだしました。

「思いだしたんだね、でも俺はクロスであってクロスじゃないんだ」

「どういう事？それにここは…私は確か…」
「ここはなのはが望んでた世界さ」
「望んだ…世界？」

私の問いに眼の前の幻のクロス君はアリサちゃん達を指さして

「このままアリサ達と帰れば、魔法と一切関わらない普通の生活が待ってるよ」
「えっ、じゃああの声はやっぱり…」
「そう、なのはが初めて魔法と出会ったきっかけ…ユーノが傷付き誰か魔力がある人を
探して助けを求めている声さ」
「そんな！助けなきゃ！」
「いいの？助けちゃったら…魔法に関わって、前と変わらない世界になっちゃうよ？」
「でもユーノ君が！」
「ここは夢の世界…でも、ま、あのユーノは俺が助けるよ、それじゃダメ？」

幻のクロス君の言葉に少し考え込んでしまう。
でもそれも一瞬。

「私、行きます！」

そういって、ユーノ君の声がする方へかけだそういとする私。

「なんで、魔法に関わらない世界はイヤかい？」

まるで何かを確かめるようにクロス君が聞いてきた。
確かに少し前は魔法が怖くて嫌にもなったけど、けど今は…

「ううん、私…クロス君やフェイトちゃんと誓ったから…一緒にいるって」
「……後悔しない？」
「ここで行かない方が後悔するもん！」
「そっか」

そう言ってにっこりほほ笑んだクロス君は幻とはいえやっぱりクロス君で…
知らず知らずに頬が熱くなってきました。

「じゃあ早く行ってあげなよ、外で俺が待ってる。あとフェイトももうすぐ出てくるよ」
「フェイトちゃんも無事なの！？」
「あぁ…後は頼んだよ？」

そう言って幻のクロス君は消えちゃいました。
いつの間にかアリサちゃんやすずかちゃんもいなくなっていて

「…アリサちゃん、すずかちゃん……現実の世界で会おうね」

私は駆け出しました、声のした方へ、ユーノ君とレイジングハートの元へ
そして、茂みの向こうには…

＜待っていました、マイマスター＞
「レイジングハート…ごめんね、待たせちゃって」

レイジングハートが待っていてくれました…私が来るのが分かっていたかのように

胸元でライカフラワーも激しく輝きだしました。
＜問題ありません。さぁ、行きましょう＞
「うん、行こう！」
確かに魔法は危険で怖い事もこれからもあるかもしれない…
けれども、これが…私が選んだ、世界！
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
「ここか」
ライカフラワーの導きでクロスは桜色と金色に輝く大きな球体へとやってきた。
それはまぎれもないなのはとフェイトの魔力光。
クロスがゆっくりと球体に手をかざすと、球体から手が伸びクロスの手を掴んだ。
「なのは、フェイト！」
「クロス君」「クロス！」
無事に2人とも夢の世界から脱出できたようだ。
「えへへっ、ありがとう、クロス君」
「気にするなって俺だって2人に助けられたばかりなんだからさ」
「そうだね、今回は助けたり助けられたり、だね」
「それもいいじゃん。俺達らしくてさ」
そして、3人で思いっきり笑い合った。

「さてと、それじゃ最後の2人を助けに行きますか」
「うん、はやてちゃんと夜天の管制人格さんだね」
「2人のいる場所はわかってるの？」

フェイトの問いにクロスはある一点を指さした。

「おそらく、あそこだよ」

そこには黒い空間の中でもさらに黒いと認識させるほどの闇の光を放つ
巨大な球体が静かに佇んでいた。

続く

第４７話　「フェイトの世界、なのはの世界」（後書き）

カガヤ「いつの間にか寝てしまい、やっと日曜にアップ出来ました…」

ノア「気持ちよさそうに寝てたようで…」

クロス「どんな夢見てたんだ？」

カガヤ「覚えてない（汗）…さて、気持ち切り替えて第４７話！」

ノア「なんか…文字数だけは多くなってきてるね」

クロス「内容は微妙だけどな、原作と随分変わってるし」

カガヤ「今回はなのはも閉じ込められちゃったからな～プレシアも生きてるし」

ノア「原作ブレイクって言ってるからいいんじゃない？」

カガヤ「だな、というわけでしてまだまだ続く第３部、５０話は確実に突破しそうで…ですが暖かい目で見守って下さい」

クロス「感想やら何やらくれるとカガヤが発狂するのでよろしくお願いします。あと誤字脱字も」

第４８話　「夜天の夜明け」（前書き）

暑すぎです…熱中症になりそうです…へるぷみー

第４８話　「夜天の夜明け」

現実世界

「？…お母さん、管制人格の様子が！」

見ると闇の管制人格の動きが鈍くなった。
まるで歯車がかみ合わない人形のような動きだ。

「あれは…」
「きっとクロスだろう」

ノアとクイントの元に治療を終えたゼスト達が集まってきた。

「そっか…じゃあ私達もがんばらないと」
「ノア、あなた大丈夫なの？」
「無理しないでいいのよ」

中身は違えど妹と同じ姿の管制人格と死闘を演じているノアに
クイントとメガーヌが声をかける。

「平気です、私の可愛い妹の姿を真似て酷い事するなんて…余計に
燃えます！」
「ふふっ、流石我が娘ね」

管制人格の震えが止まり、またゆっくりと動き出そうとしていた。

「ぐっ、チェーンバインド！」
「リングバインド！」

「リバースアンカー！」
「クリスタルケージ！」
「アクアゲージ！」
「ホワイトエリア！」

ユーノとアルフのバインドが管制人格の動きを止め
更にメガーヌのアンカーが絡まり
リーゼアリアがケージに閉じ込め
その上にノアが空気中の水分をかき集め水のケージに閉じ込め
クロノの限定空間氷結魔法が水の檻ごと凍らせる。
何重にもよる拘束魔法の重ねがけ。

「これで…少しは…時間稼ぎ……が」
「ノア！」

ふらつきながらもゼストに抱えられたノア。
急いでリーゼアリアがカードを数枚ノアにかざした。
カードからの光を受け、ノアの顔色がよくなっていった。

「私は…もう大丈夫です、隊長達も」
「いや、俺達は後でいい。後はクロス達の為に残しておくんだ、クロノお前もだ」
「な、そんな！？」
「いいか。切り札は火力の高いお前達なんだ」

クロノの抗議の声を無視してゼストが続けた。

「それに消耗はそんなにしてないわよ？」
「私達はくぐった修羅場の数が違うの、魔力の効率的な運用くらい出来るわ」

「そうそう、だからほれ」

しぶしぶティーダに渡されたカードで魔力を回復させるクロノ
カードは沢山あるとはいえ無限にあるわけではない。
すでに2／3以上使い切っている。
そこで近接攻撃や射撃攻撃専門のゼストやクイント達より
より火力の高い砲撃や広域攻撃魔法を持つノアやクロノ、そしてク
ロスやなのは達の為に
出来る限りカードを温存しようとしている。
全ては今を乗り切る為じゃなく、邪神復活を阻止するための布石の
1つにすぎない。

「……感じない」
「うん、徐々に感じなくなったね」
「えっ、何を？」

管制人格を睨むレギナスとノアの呟きを聞いたユーノが怪訝な顔を
する。

「さっきは多少なりとも本当の管制人格の気配をあれから感じてい
たのですが」
「それが全く感じなくなったの。まるで闇の管制人格に乗っ取られ
たように…」
「それは、どういう事だろう？」
「わからない、けど…マスター、早くはやてちゃんを目覚めさせて
ください」

氷の檻の中で闇の管制人格の眼の色がうっすらと変わり始めていた。

闇の書内部世界

クロス、なのは、フェイトの3人は内部世界の最深部と思われる場所へとたどり着いた。
そこでは暗く黒い空間内でもさらに一際闇の色をした球体が佇んでいる。

「これは…なんだろう？」
「多分、封印プログラムがはやてを閉じ込めている檻だと思う」
「それじゃあこれを破壊すれば！」
「この中に……いる！」

クロスは黒い球体内部から微かに誰かの魔力を感じ取った。

「悪い、俺は砲撃出来るほどの魔力がないから2人ともお願いできるか？」
「任せて♪行くよ、フェイトちゃん！」
「うん！」
「ディバインバスター！」「プラズマスマッシャー！」

なのはとフェイトの同時砲撃。
確かに黒い球体に直撃したが…音もなくかき消されてしまった。

「き、消えちゃった？」
「防がれた！？」
「いや、防がれた…とは少し違うな」

それを見ていたクロスは違和感に気付く。
吸収されたわけでも防がれたわけでもなく、ただ砲撃が消えた。

「なのは、アクセルシューターで全方位から攻撃してみて」
「う、うん！…アクセルシューター、シュート！」
なのはのアクセルシューターが球体を囲むように散開して全方位から攻撃する。
しかし、先ほどと同じように直撃しても爆発もせずにかき消されるだけだった。

「そんな、これもダメだなんて」
「間違いない…ラファール」
＜はい、なのはさんの魔力結合が分解されています＞

シューターの着弾の瞬間を解析していたクロスはある事に気付いた。
それはなのはとフェイトの魔力結合が分解されていると言う事。
魔力結合が分解されると言う事は魔法が効かないと言う事。
魔力結合・魔力効果発生を無効化する上位フィールド魔法が存在するが
それともまた違っている。

＜おそらく、お2人ののリンカーコアが蒐集された事で魔力が解析されたのでしょう＞
「ちっ、俺達みたいな事してるってことか」

以前にクロスがプレシアの魔力変換素質を解析して無力化したように
闇の書がなのはとフェイトの魔力を解析して無力化したのだ。

「恐らく2人が取り込まれたのもそれが原因だと思う」
「そんな、それじゃどうやって！」

その時球体の表面がうなり、触手のようなものをなのは達に伸ばし

てきた。

「きゃっ！？」

「まずい！はっ！！」

クロスがなのはの前に立ち右手をかざすと触手の先端が崩れ落ちた。
それに驚いたのか球体は触手を引っ込め様子を窺うようにうねっている。

「今のは？クロス君魔法使って大丈夫なの？」

「もしかしたら、と思ったけどやっぱりだ。俺は今特に魔法も使ってないんだ」

「どういう事？」

「俺は今ただ仙気を放出しただけなのさ、アランの手記にあっただろ？邪神は仙気に弱いって」

「でもこれは邪神じゃないよ？」

この球体はあくまで邪神を封印していた防御プログラムが変質し暴走したもの、ならば。

「邪神の影響を受けているなら仙気が有効じゃないかってね、思った通りだ」

そうして、クロスは仙気を放出しながら球体へと近付く。
球体も触手を伸ばすが全て仙気に触れると崩れ落ちていく。

「ダメだよクロス君！」

「そうだよ、少ない魔力を仙気にしちゃったら、すぐになくなっちゃうよ！」

なのはとフェイトの叫びも無視してクロスは球体に触れた。
すると球体表面が勢いよく波打ち出した。

「はあぁぁぁぁ！！！」

さらに仙気を籠めると球体にヒビが入り、粉々に吹き飛んだ。

「あっ！あの子は！」
「八神、はやて！」

球体の内部では車いすに乗った少女、はやてがイバラのようなものに絡み取られていた。
いや、正確にはまだ絡み取られてはいないようだ。
黒い服に銀色の髪をした少女がはやてを抱きしめ防御フィールドで守っている。
その少女の姿は表で暴れている闇の管制人格と瓜二つだ。

「あれが…本物の管制人格」

クロスがはやてと管制人格に近付こうとしたその時。

「危ない！」

はやてを絡め取ろうとしているイバラが一斉にクロスへと向かいだした。

（まずい、これ以上仙気を出すのは…）
「ハーケンセイバー！」

フェイトの放った魔法がイバラを斬り裂いた。

「ありがとう、フェイト」
「うん、それよりにこれになら私達の魔法も通じるみたいだ」
「なら私も今度こそ、アクセルシューター！」

なのはの射撃も次々にイバラを打ち抜いていく。
だがイバラは次々に現れなのは達にも襲いかかってきた。

「イバラは任せて！」
「クロスは早くはやてを！」
「わかった、頼む！」

クロスがイバラをかわしながらはやてに近付くと管制人格が手で制した。

「？？なんのつもりだ？俺の名は…」
「クロスロード・ナカジマ…知っている」
「なら俺達がはやてやお前を助けに来たのも知ってるだろ？ノアが、お前の姉ちゃんが…」
「私は昔から闇の書だ…光天の書の姉などいない」
「こんの…どいつもこいつも…いい加減に目を覚ませ！！」

しかし、管制人格は悲しげに首を振った。

「無駄だ、主はやてを目覚めさせたところで防御プログラムの暴走は止まらない…邪神も蘇る」
「それを止める為に！」
「それこそ無駄だ、邪神復活は止められない、ならば主はやてはここで夢を見ていた方がいい」
「夢…だと！？」

「そうだ、我が愛しき守護騎士達と平穏な日々を送る夢を永遠に見る方が主はやてには幸せだ」
「「「違う！！」」」
管制人格の言葉にクロス達3人は即座に否定した。
「確かに夢の世界は苦しみも悲しみもないかもしれない、楽しい事ばかりかもしれない」
「けど、どんなに幸せな夢でも夢でしかないんだよ！」
「苦しくても、悲しくても…現実には明日がある！」
イバラを薙ぎ払いながらなのはとフェイトは叫び続けた。
クロスもイバラを避けながらも必死にはやてと管制人格へと手を伸ばそうとする。
「愛しい守護騎士達を失い、主はやては深い悲しみに包まれた…全て夢であって欲しいと…」
「願ってない！」
「お前に主はやての悲しみが「分かる！」何？」
クロスと管制人格の応酬は続く…はやての手が動いた事には1人を除いて気づいていない。
「はやてがどれだけシグナム達と楽しい時間を過ごしていたか、シグナム達がどれだけ好きか…
そんなのはやての為に自分の手を汚す覚悟をしていたシグナム達を見ていれば分かるさ！
だから、そんな大切な人目の前で失って、すごく悲しくて認めたくなくて…夢ならいいと思うさ！」
「だったらなぜ！」

「決まってる！……はやての顔を見れば分かるさ、はやては現実を受け入れている」

管制人格は自分が守っているはやての顔を見た…虚ろな瞳だが、涙でぬれている。

「主はやて…目が覚めていたのですか？」

「目なら、とっくに覚めとるよ。確かに、シグナム達が死んだのは夢ならいいと思うたよ？

でもそれはただの夢や、それに私はこんなの望んでない、あなたも同じはずや」

「私も騎士たち同様あなたを愛おしく思っています…ですからこのままあなたが死ぬのは見たくない」

「だから…勝手に決めるなぁ！」

バキッ！

「はぐっ！？」

「グーで殴った！？」

側まで来ていたクロスが管制人格を思いっきり……殴った。

イバラはいつの間にか動きを完全に止めていてなのはやフェイトはその光景に顔をゆがませた。

「うっわぁ…」

「グ、グーで…」

女の子をグーで殴るのはどうかと思ったがクロスならばと自然に納得できた。

「な、何を!?」
「いい加減にしろよ、なんで決めつけるんだ?防御プログラムが暴走する?なら破壊すればいいだろ!
邪神の復活が止められない?止められないなら…復活した邪神を今度こそぶっ倒せばいいだろう!」
「そんなの…できるわけが「諦めたら、あかん!」…主?」

はやての言葉に驚く管制人格。
先ほどまでと打って変わってその瞳は涙でぬれておらず強い意志を示していた。

「今までの事、色々分かったつもりや、大昔に何があったかも、その人達が何しに来たのかも」
(レギナスの仕業…か?)

未だに活動中の守護騎士、レギナスによって情報がリンクされたと推測したクロス。

「まだ誰も諦めてない…外にいるレギナスも管理局の人達も、ここに私らを助けにきたその人達も
私も諦めてない…諦めたくないんや!きっとまたみんなで笑って過ごせるようになる!
シグナム達も私がマスター権限で復活させる…防御プログラムの暴走も止めて、邪神も倒して
…みんなでハッピーエンド迎えよう」
(ハッピー…エンド)

その言葉にクロスの顔が一瞬苦悶の表情を浮かべたが、誰も気づいていなかった

「ですが、そんな事が…」
「今は私がマスターや、マスターの言う事は…信じなあかん」
「…マスター…はやて…」
「今までどれだけシグナム達と溜めこんでたか知らないけどさ」
「今回は私達もいます！」
「だから、一緒に…戦おう」

クロスやなのは、フェイトも集まり手を伸ばす。
その手をはやてと管制人格はしっかりと合わせた。

「お前達…」

管制人格の目から涙があふれ出してきた。
はやての足元に魔法陣が現れた。
シグナム達と同じ三角型のベルカの魔法陣。

「…私があなたに名前をあげる、もう闇の書とか呪いの魔導書とか言わせへん」
「無理です…いくら主はやてが覚醒しても、管理者権限は凍結されています…」
「それなら、俺達が…ノア！」
『はい、待ってました！』

クロスが外に居るノアと念話をする。

「光天の書と太極の書で闇の書に直接干渉する。はやてが覚醒した今なら…
強制的に管理者権限を発動させる！」
「ノア…光天の書…」
「はやて、ノア、行くよ」

「はい！」『はい！』

クロスの前に太極の書が開かれる。

「我、太極の主が命ず…」『我、光天の主が命ず…』

「太極より夜天の新たな主を導き…」『光天より夜天の新たな主を照らし…』

現実世界

ノアが突然光天の書を開いたかと思うと何か呪文のような言葉を紡ぎ出すのをみて
クイント達はいよいよ時が来た事を知った。

「…いよいよ、ね」

「えぇ…見て！闇の管制人格の様子が」

氷の檻を破ろうとした闇の管制人格が苦しそうに小刻みに震えだしていた。

「もう少しよ、がんばって、クロス、ノア」

闇の書内部世界

「夜天の主の名において汝に新たな名を贈る。強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール」

「『夜天に新たな名を与え、真なる道を指し示せ…その名は』」

「『「リインフォース！！！」』」

クロス、ノア、はやて…3人の書の主の心が1つとなり。
光天の書が外から闇の管制人格を照らし出し。
太極の書から伸びた光の渦がはやてと管制人格、リインフォースを包み込み。
闇を夜天へと変化させた。

「あぁ……暖かい、何もかも…全て洗いだされるようです…」
「そやな…さぁ、これからが本番や、いこか、リインフォース…」
「はい、主はやて」
「管理者権限発動…リンカーコア送還、守護騎士システム破損修復、開始」

「なのは、フェイト…ここから出るぞ！掴まれ！！」
「うん」「分かった」
「光天へと導け……ジャンクション・ギア！！」

辺り一面が白い光で覆われ、黒い闇がかき消されていく…

現実世界

「あ・・・ぐっ・・・あぁぁぁぁ！！！」

氷の檻を砕いた闇の管制人格だか突然苦しみ出したかと思うと
体中にヒビが入りそこから光が漏れだした。

「この感じは…やったのか！」
「えぇ…マスター達がやってくれましたよ、レギナス」
「おぉ、それでは！」

ノアの言葉に高揚し、レギナスが振り向いた先には

「よっ…戻ったぜ」
「ただ今戻りました！」
「…ただいま」
「フェイト、なのは、クロス♪」

ソウルチェンジを解き元に戻ったクロスと、なのは、フェイトの姿があった。
アルフ達が喜びあう中で、そして、闇の管制人格は内部から溢れた光に包まれたかと思うと
４色の光の柱が立ち…

「おいで、私の騎士たち…」

はやての言葉にシグナム達４人の守護騎士が光の柱より顕現した。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」
「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」
「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」
「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

「ヴィータちゃん！」「シグナム！」「シャマルにザフィーラも！」

その中心で一際眩しく輝く光の中から

「リインフォース…杖と甲冑を」

黒い騎士甲冑に身を包み剣十字が先端に付いた杖を持ったはやてが現れた。

「主はやて！」「はやてちゃん！」

「様になってるなぁ…」

『流石は夜天の主です♪』

レギナスが吠え、クロス達が微笑む先で新たな夜天の主、八神はやては微笑み返し

「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風、リインフォース、セットアップ！」

リインフォースとユニゾンし白い帽子と白い服を纏い、黒く、しかし天使のような3対の翼が現れた。

数千年ぶりに闇は解放され、夜天へと戻った。

また、今ここに幾年の時を越え、アルハザードが未来へ託した希望の3冊の書が揃った。

続く

第４８話　「夜天の夜明け」（後書き）

カガヤ「お前…暴走してから性格ワイルドになった？」

クロス「そんな事は……ないよ？」

ノア「その間はなんですかマスター（汗）」

カガヤ「それはともかくやーっとはやてのターンが」

ノア「本当に長かったですね～…いや長すぎでしょ！！」

カガヤ「一応この章終わったら外伝って形ではやてと守護騎士達の日常を短編コメディで書くつもりだよ」

クロス「それは後日談ではなくて？」

カガヤ「うん、外伝とはいえちゃんと本編中にあった出来ごとを書くよ。ちなみにこの書き方はこれからも所々書くつもり」

ノア「別投稿にしないんですか？」

カガヤ「本編と一切関係ない話だったらそっちがいいと思うけど、一応本編では起きたけど流れ的に別で書いた方がよさそうな話。の予定だから」

ノア「ネタがあればいいですけどねぇ～」

クロス「文才もな」

カガヤ「う、うるさい！！（恥）」

第４９話　「ＶＳ　邪神防御プログラム」（前書き）

止まらない独自設定。
第一部最大の総力戦が始まります…今までのはほんの前哨戦、これからが…本戦です！

各フォームの掛け声は悠様より頂きました、ありがとうございますペコリ（ｏ＿＿）ｏ）

第４９話　「ＶＳ　邪神防御プログラム」

「はやて！」「主…」「はやてちゃん！」「主はやて…」
「みんな…私の為に色々苦労かけて、ありがとうな」

夜天の主として覚醒した八神はやての力で４人の守護騎士達が復活した。
はやてと４人は涙ながらに再会を喜びあっている。
少し離れた場所にいるレギナスも嬉しそうだ。

『主はやて…』
「あぁ、そやな。ええよ、行ってあげて」

一時的にユニゾンを解除しクロスの方へとリインフォースはやってきた。
と、同時にクロスもユニゾンを解き、ノアが実体化する。

「あね…上」
「…夜っちゃん…あ、今はリインフォース、だよね」
「…っ、申し訳ありませんでした！！」

その場でリインが土下座をした。

「ま、待ってリイン！　そこまでしなくても！」
「いいえ、あなたとの約束も使命も全てを忘れて…私は…私は！」

涙を零しながらうずくまるリイン。
なのは達はどう声をかけていいのかわからない。
そんなリインにノアは近付いて…デコピンをした。

「いたっ…姉上？」
「もう、レギナスとかシャマルとかにも言ったけど、もういいの！」
シグナム達も近くによってきた。
「姉上…」
「全て思い出しました」
「……ごめん」
「わびのしようもない」
次々と頭を下げる守護騎士達にノアは困惑しっぱなしで
「ちょっと！？　だからもういいってば！それより、今は防御プログラムの方を…」
『みんな、感動の再会中にごめん！すごい魔力反応が海中から上がってくるよ気をつけて！』
エイミィからの通信と同時に海中から巨大な紫色のおぞましい球体が浮かび上がってきた。
「…これは？」
「闇の書の…邪神の防御プログラムです。主はやてと夜天の書から管制権限は切り離しましたが
　邪神ごと実体化しようとしています」
「ってことはだ、あれは…邪神の動く繭みたいなものか？」
ティーダの言葉にうなずくレギナスとリインフォース。
『魔力反応増大中！さらに圧縮されてるよ、このままだと数分で実

体化しちゃうよ！』
「対処法は？」
「防御プログラムのコアは邪神そのものになっている。なのでコアを破壊すれば」
「邪神ごと…防御プログラムを破壊出来る！」
「しかし…容易な事ではない。防御プログラム自体魔力と物理の複合五層式バリアで覆われている」
「しかも、本体の耐久力も並じゃない…生半端な攻撃ではとてもコアまで届かない」

一同の重苦しい空気をあざ笑うかのように球体が一際膨張していく。

『アルカンシェルの準備なら整っているわよ…』

リンディがモニターごしに淡々と唯一の対抗手段を述べる。

「アルカンシェル、か…」

百数十キロの空間を湾曲させ消滅させるアースラの切り札。
しかし、過去数回闇の書の主もろともアルカンシェルで消滅させたのにも関わらず
闇の書は数年で再生した。
１０年前クロノの父、クライド提督が亡くなった闇の書の暴走事故の時も
アルカンシェルを使用したが、それでも今こうして転生している、
アルカンシェルだけではダメなのだ。

「ノア、どうだ？　やれそうか？」
「はい…エイミィさん、さっき転送したデータは確認しましたか？」
『うん見たよ。でもこれって、実行可能って出たのがすごいね』

「一体なんの話なの？」

クロス達とエイミィのやりとりを聞いていたなのはが疑問を口にする。

他のみんなも同じようだ。

「聞いて欲しい事があります、これからノアと前から考えていた作戦を話します」

「作戦？」

クロスとノアが考えていた作戦とはこうだった。

はやてを夜天の主として覚醒させ、防御プログラムを邪神ごと管制プログラムから分割の後。

コアを露出させ、軌道上のアースラまで転送させ、アルカンシェルで消滅させる、といういもの

「防御バリアはどうやって貫く？　そこの幼い魔導師達の魔法は通じないぞ」

「それって、蒐集されたから？　だったらシグナムさん達も通じないってこと？」

「私とヴィータは魔力バリアを担当する、あちらには通じるからな」

シグナム曰く五層のうちの魔力バリア三層は強い物理攻撃なら破壊出来

二層ある物理バリアは強力な魔力砲撃で破れるとの事。

「…あいにく今ある魔力では俺達ではロクな攻撃が出来ないからな」

ゼストが悔しそうに言う。

ゼスト達は蒐集もされていないのでバリアを破るのにはうってつけ

だが
魔力消耗があるため、クロス達の方が適役だ、また火力もなのはやフェイト達の方が上だ。

「でも私とフェイトちゃんの魔法は通用しないのにどうやって？」
「なのは、忘れたの？　クロスとの特訓」

クロスの読みをいち早く気付いたフェイトが言うとなのはも何かに気付いたようだ。
「あっ！　シンクロ魔法！！」

管理局のデータで防御プログラムには強力なバリアが備わっている事は分かっていたため。
クロスとノアはなのはやフェイトとのシンクロ魔法開発に力を入れていたのだ。

「そうだ、この時の為にあるシンクロ魔法…やれるな二人とも？」
「うん！」「もちろん」
『作戦は決まった？　防御プログラム暴走開始まであと１０分！』

エイミィの緊張した声が響くと各々は配置についた。
そんな中リーゼ姉妹はじっとクロスとはやてを見ている。

「父様、見えてる？」
『あぁ、見えている…あの少年は闇の書の主を救出したか…』

自分の部屋で軟禁中のグレアムは眼をつむりゆっくりと顔を上げる。
あの少年、クロスがここまでやるとは思わなかった。
いかに闇の書が生まれた理由を知ろうとも結局闇の書は暴走してしまう…そうなれば終わりだ。

だが結果はどうだ？
自分が利用していた少女を救い出し今また闇の書を完全に消す為に行動している。
その顔には焦りはあれど、迷いはない。
他の魔導師達も同じだ、プレシアもプレシアの娘も、自分と同じ地球出身の少女も
皆、信じているのだ。闇の運命を終えられると…

『私は…とりかえしのつかない過ちを犯すところだったのかもしれない…』
「人は誰だって過ちを犯すものですよ提督」
「大事なのはそれに気付き、認め、どうするか…です」
「それを、クロスは知っている…だから、強い」

クロノが通信に入ってきた、プレシアとゼストもだ。

『…そうだな』

小さく呟くグレアムを見てロッテとアリアは頷き合う。
そして、クロスとノアの元へと飛んだ。

「クロスロード」「ノっち」
「ん？　どうしたの？」「…ノっちって私の事！？」

ノアの抗議を無視してアリアがクロス、ロッテがノアの前に立ちじっと見つめた。

「…私達の魔力をあなた達にあげるわ」
「私達の力じゃちょっと手に負えないからね…だから、２人に任せるよ」

2人はそういうとクロスとノアにそれぞれ手をかざした。

「「マテリアルチャージ」」

リーゼ姉妹から白い魔力がクロスとノアへと流れこむ。

「アリア、ロッテ…2人共ありがとう」

「礼ならあとでいいわ、防御プログラムと邪神を倒した後でね」

「あぁ必ず倒すよ！　そうだ、2人共アリサ達とアジーン達を見ててもらっていい？」

「そうだね、巻き込まれないとも限らないし…わかった」

リーゼ姉妹がアリサ達の方へ行ったのを見送ってクロスとノアも配置についた。

「確認だ。まずはクロス、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータでバリアを突破、プレシア、メガーヌはその際の補助を。

その後はやて、ノア、クロノで本体を攻撃。

俺とクイント、ティーダとザフィーラ、レギナスで奴の攻撃を防ぐ。

クロス、なのは、フェイト、はやての4名の砲撃でコアを露出

そして、ユーノ、アルフ、シャマルが衛星軌道上までコアを転送。

最後にアルカンシェルで…」

「防御プログラムごと邪神を倒す！」

ゼストの確認をクロスがしめる。

「これで邪神も倒せるといいが…」

今までの闇の書への対処を思い浮かべてたクロノが疑問を口にする。

『今までは闇の書ごと消滅させていた、だから転生機能に応じて邪神も復活していた』

「でも今回は違う、私がマスター権限で管制システムから切り離したから転生機能はないはず」

クロノの疑問にリンディとはやてが応えた。

しかし、クロスやリイン達の顔が晴れない。

「？　どうしたんだい？」

アルフが声をかけるが

「いや、なんでもないよ…ただ確実に邪神ごと倒さなきゃなと思って」

「えぇ、確実に…倒しましょう」

「……」

クロスとリインの言葉に僅かに反応したのは守護騎士達だけ…

「…あっ、その前にみんなの怪我を治さないと…シャマル」

ユニゾンしようとしたノアが急にシャマルを呼びとめた、

「はい、姉さん♪」

ノアのしようとしている事に気付いたシャマルは皆の中心に立ち、

クラールビントを掲げた。

「静かなる風よ」「安らぎの光よ」
「「癒しと暖かな恵みを与えて」」

ノアとシャマルの詠唱と共に光の粒子が緑の風に運ばれ、その場に居る全員に降り注いだ。
するとみんなの傷が次々と癒えていき。さらに失った体力と魔力も少しながら回復した。

「すごい！　ノアちゃんもシャマルさんもこんな事も出来るんだ！」
「湖の騎士シャマルと風のリング、クラールビント、ノア姉さんも加わればこんな事も出来ますよ」
「これは…助かる」
「えぇ、魔力も少し回復したわ、2人ともありがとう」

次々と感謝の言葉を述べるとノアとシャマルは照れながらも微笑みあった。
それを見たクロスとリインフォースの口元が少し緩んだ。
これが本来の光天と夜天の姿だ、と。

『っ！？　来ます！！』

緊迫したエイミィの言葉と共に巨大な黒い雷が落ち
黒紫色に輝く球体が一層輝きを増し、破裂した。
一同はそれぞれデバイスを構え、クロスとはやてはそれぞれユニゾンをした。

「ホオォォ～！！」

産声をあげ姿を現したのは、邪悪な存在と見せつけるかのような怪物。

黒と灰色の幾何学的な翼を携え４本足で巨体を揺るがす
中心部分には女性の姿をした本体も見える。

「いくぞぉ！！」

ゼストの掛け声と共に各々が動き出す、まずはユーノとアルフ。

「ストラグルバインド！」
「チェーンバインド！」

２人のバインドが海中から次々と跳び出てくる触手を絡め取り。

「鋼の軛！」
「絶炎衝！」

ザフィーラとゼストが薙ぎ払う。

「ファアアァァ～！！」

何も応えていないのか防御プログラムは雄たけびをあげ攻撃をしかけようとする。

「ちゃんと続けろよ、高町なのは、クロスロード！」
「ヴィータちゃんもね」「任せろ！」

続けてヴィータとなのは、クロスの攻撃。

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン！」
＜ギガントフォルム＞

グラーファイゼンが巨大な鉄槌へと変形し

「轟天爆砕、ギガントクラーク！」

まるで巨人が放つような強烈な一撃を防御プログラムの魔力バリアへと叩きつけ、砕いた。

「アァァッァ～～！」

防御プログラムが砲撃しようとあ触手を伸ばすが、ゼスト達によって阻まれる。

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン」
「クロスロード・ナカジマとラファール・ガンナーフォーム・ヒュドラ」
「「行きます！！」」「「

「天と地より気を手繰り、かの者達の、力となれ！」
＜オーラチャージ＞

メガーヌの補助魔法がなのはとクロスを包み込む。
レイジングハートのフルドライブモードとショットガン形態のヒュドラ
その2つの砲撃が合わさるシンクロ魔法…それは

「エクセリオンバスター」「破邪天昇・メテオザッパー」
「「スターダストクラスター！！」

エクセリオンバスターにメテオザッパーの砲撃が絡まるように合わさり、拡散！

白銀の砲撃はまるで流星群のように幾多にも分かれバリアへと降り注いだ。
一撃一撃がエクセリオンバスターとメテオザッパーの合わさった威力を持った拡散射撃。
バリアは周囲の触手を巻き込みあっと言う間に砕け散った。

「次！」

ゼストの言葉に頷くシグナムとフェイト。

「剣の騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン」
＜ボーゲンフォルム＞

レヴァンティンと鞘を上下に重ねると一本の弓へと変わった。
そして、シグナムの手には1本の鋭い刃を持った矢が。

「駆けよ、隼！」
＜シュツルムファルケン＞

放たれた矢は彗星のように魔力バリアを撃ち貫き砕いた。
フェイトの隣に騎士となったクロス、その後ろにはプレシアが降り立った。

「フェイト・テスタロッサとバルディッシュザンバー」
「ラファールナイトフォーム・エクスカリバー」
「「行きます！！」」

「天空より来たれ、大いなる一撃を守護する聖なる雷！」
＜サンダーチャージ＞

プレシアの詠唱と共にバルディッシュとエクスカリバーに巨大な雷が落ちた。

「撃ち抜け、雷刃！」「光刃一閃・雷天斬！」
「「雷帝十文斬！！」」

プレシアの補助魔法で強化されジェットザンバーと光刃斬が十文字を描き
バリアを貫き本体ごと斬り裂く。

「ファァァァ～～！」

防御プログラムは悲鳴をあげながら翼を振わせ針のような羽をクロス達へと飛ばしてきた。
しかし、その羽は誰の元へも届かない、なぜなら

「クロスファイアシュート・セカンドシフト！」

ティーダの弾幕が羽を全て撃ち落とし

「リボルバー・ゲイル・キャノン！」
「牙狼百進！」

クイントとレギナスが左右の翼を斬り裂き、打ち砕いたからだ。

「今よ、はやてちゃん！」

シャマルの声と共にはやての詠唱は完了した。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。

石化の槍、ミストルティン！」

はやての足元の魔法陣から数本の光の槍が防御プログラムへと放たれた。
槍が突き刺さるとその部分から高速で石化し、見る見るうちに防御プログラムは石になった。
だが、これで終わらない。

「天駆一撃・ラディアンスブリット！」

クロスは両手に仙気を集め、光輝く拳を石化した防御プログラムへと叩きこんだ。
輝きが一層増し、両拳から放たれた光の奔流が防御プログラムを駆け巡り
内側から全身を粉砕した。

「まだまだ、ノア！」
『はい！』
「『ソウルチェンジユニゾン！』」

ソウルチェンジしノアが表に出てきた。
すぐさまノアはアルガス儀式魔法を唱える。

「マーメイド・スプラッシュ！」

防御プログラムの周りの海面が波打ち激流となり防御プログラムを呑みこんだ。

「エターナルコフィン！」

クロノが先ほどから魔力を籠めるに籠めた全力の凍結魔法で一瞬で氷漬けにする。
ノアが巻き上げた海面の効果もあり、防御プログラムは巨大な氷塔と化した。
それでも防御プログラムは氷の中で肉体を再生しようとしていた。

「なのは、フェイト、はやて、仕上げ行くぞ！」
「「「うん！」」」

ソウルチェンジを解いたクロスがなのは達に声をかける。
今回は短時間でソウルチェンジを解いたのでそれほど消耗はしていないようだ。
防御プログラムを取り囲むように四方へと散る。

「必ず…絶対……これで邪神を倒す！！ノア！…はあぁぁぁぁ」
『あああぁぁぁ～！！！！』

気合と共にクロスとノアの仙気が極限まで高まり混ざり合う。
以前のとは違い完全に2人の仙気を融合させたアルガス式集束魔法。
なのは達もそれぞれのデバイスに魔力を籠め、砲撃態勢を整える。

「全力全開、スターライト…」

星の煌めきの如く周囲の魔力がレイジングハートへと集まってきた。

「雷光一閃、プラズマザンバー…」

フェイトの周囲にも雷が鳴り響き魔力が集まる。

「これでもう、終わり…おやすみな。響け終焉の笛、ラグナロク…」

労うように防御プログラムへと呟き、はやては書と杖を掲げた。

「はあぁぁ～！！…極光！」『爆烈！』

「『ハイブリットシャイン…』」

紅と蒼の仙気がクロスの手の中に集まり眩い光を放つ。

「「「「『ブレイカー！！』」」」」

４つの巨大な集束砲撃魔法が放たれた。

「「「「『いっけえぇぇぇ～！！！』」」」」

４つの光は更に力強く輝きそれぞれの砲撃は中心へと吸い込まれるように放たれ…

大爆発。

メガーヌとプレシアが周囲への衝撃波を押さえる結界を張り続ける。

そうでもしなければ結界内とはいえ周りに甚大な影響が出るからだ。

そして、目も開けれぬほどの閃光の中に光る小さな球のようなものが見えた。

「「「今（だ、です！）…転送！」」」

ユーノ、アルフ、シャマルがその光る球を衛星軌道のアースラ前へと転送する。

その光の球とは防御プログラムのコアだった。

「アルカンシェル、発射！」

いつでもアルカンシェルを発射出来るように準備を終えていたリンディは
迷う事なく、アースラ一の切り札を発射した。
再生が追いつかないほどの痛手を負ったコアはそれでも少しずつ再生していた。
だが、それを消し去る攻撃がコアへと直撃。
地上とアースラと本局、それぞれに戦況を見つめる者達の前でアルカンシェルは着弾、周囲の空間が歪ませコアは呑みこまれ、完全に消滅した。

『空間内の物体、防御プログラムのコアの完全消滅を確認！！』

エイミィの興奮気味な状況報告が終わるとアースラブリッジは歓声に包まれた。

「やった！！」「ついに俺達の手で闇の書を！」「流石だよ、クロス君達は！」

アースラブリッジ内では管理局員達の歓声と現場への労いと感謝の言葉で満ち溢れた。
そんな中、リンディだけはじっと真剣に、どこか絶望を感じさせる顔でモニターを見ている。
モニター内に映し出された映像はクロス達…だが、みんな上を見上げている。
最初はコアの消滅を見て、茫然と力が抜けてしまったかと思ったが…違う。

どの顔にも…いつも冷静なゼストですら驚愕と絶望の表情を受けべている。
なのは、フェイト、はやてに関しては恐怖からか身体が小刻みに震え顔は真っ青だ。

「な…に、これ……」
「知っている…知っているぞ…この感覚は！！」
「あぁ……数千年前に我ら夜天の騎士達が遭遇した…恐るべき力を感じる」

シグナム達も若干震えながらもじっと上空を睨んでいる。

「間に…合わなかったというのか！目覚めたと言うのか…」

苛立ちを隠さずにまるで怨敵に出会ったかのようにクロスは憎しみと怒りを籠めてこう叫ぶ。

「邪神…イ～リ～ス～～！！」

クロス達が睨む先では青白い満月をバックに静かに佇む…邪神イリスの完全な姿がそこにあった。

続く

第４９話　「ＶＳ　邪神防御プログラム」（後書き）

カガヤ「手間取った…今回も手間取った…」

ノア「何回も書き直してこれですからねぇ」

クロス「１話で終わらせる必要なかったんじゃないか？」

カガヤ「うーん、テンポ的に防衛プログラム戦は１話で終わらせたかったから…その分描写に苦労しまくったけど（汗）」

ノア「誤字脱字たくさんありそうな予感…それとつっこみ要素たくさん」

カガヤ「色々独自設定は挟まりまくってますが普通にミスってる描写もあるかもしれないのでその時は遠慮なく言って下さい」

ノア「もちろん感想もしっかり待っていますよ♪」

カガヤ、ノア、クロス「「「まってま～す！」」」

第５０話　「古の契約」（前書き）

そういえば…ユニゾン中のリインとかって…外部と話せるんでしたっけ？…あれ？
ま、まぁ…そこは独自設定と言う事で！
ってか…今更すぎますよねｏｒｚ

今回も描写に自信なしですが…駄文だなぁ

第５０話　「古の契約」

時間は少しだけ遡る…

「あ、いたいた…えっと、アリサちゃんにすずかちゃんでいいかな？」

『こっちも見つけたよ。生きてるのかな、これ。あ、かろうじて生きてるね』

クロスに頼まれたリーゼ姉妹はアリサやアジーン達の元へとそれぞれやってきた。

「あわ…ね、ネコミミ…」

「空からネコミミさんが？」

突然空から現れたネコミミ少女に驚くアリサとすずか。

「あ～驚かせちゃったね、ごめんごめん。私はクロスロードの……知り合い？」

「なんで疑問形？」

「クロスロードの友達でも同僚でもないし…う～ん、やっぱり知り合いって事で」

「はぁ…」

呆気に取られるアリサとすずか、そこへ

『ロッテ！　すぐにこっちに来て！　今すぐに！』

突然、アジーン達の方へいるアリアから念話が入った。

かなり切迫した声をしている。

「あ、ごめんね。ちょっとお姉さんここ離れるけどすぐに戻ってくるからね」

2人にそう言い残し、すぐさまアリアの元へと飛び去った。
残されたアリサとすずかは何だったのだろうと2人で顔を見合わせた。

「な、なんなのこれ!?」
「わからない…急に3人とも苦しみ出したんだ」

アリアの元へとやって来たロッテは思わず声をあげた。
アジーン達3人の身体に大きな見た事もない紋章が浮かびあがり
3人を拘束するかのように黒い帯が伸び、身体を覆い尽くしていた。

「ぐがっ……ふっ、…はは…っ……ピエロはおれたち…だったか」

そう言い残してアジーン達は、消滅した。

「あっ……いったい…なに…っ!?」

直後、上空から凄まじい殺気と魔力を感じた。

「何、これ?」
「まさか……あ、あれ見て!」

2人が上空を見上げると、月夜に、邪神の禍々しい姿が浮かんでいた。

・

・
・
「あれが…邪神イリス」
邪神の姿を初めて見たゼストが呟く。
「とうとう…完全に蘇った、昔より小さいようだが…でもなぜ蘇った!?」
「防御プログラムのコアと分離した、というのか」
レギナスとザフィーラの言葉通り、イリスはクロス達4人のブレイカー直前に分離したのだ。
しかし、それだけではない…
『ゼスト隊長、聞こえますか!?　こちらリーゼアリア!』
リーゼアリアからの通信が入った。
「こちらゼスト、どうかしたのか?」
『それが…いきなりアジーン達が消滅したの』
「消滅!?」
アリアから状況を聞いたゼスト達は驚愕した。
(まさか…邪神の非常食にされたのか?　だとすればあの紋章は…)
思案にふけるゼストだが、考えを纏める前にイリスが動いた。
「キュオオォォ〜〜!」

耳がおかしくなるほどの奇声をあげたかと思うと大気と大地が激しく揺れた。

「これは…何をしているの？」

「何もしていない、ただ力を解放しているだけだ」

耳をふさぎながら周りを見渡すなのはにイリスを見据えながら応えるレギナス。

海面は激しく波うち、まるで大時化のように荒れ狂い。

大地震のように大地は震え、遠く離れているアリサやすずかは座り込んでしまった。

『時空間にも少なからず影響が出ています！』

「な、なんて事…あれが邪神」

アースラでもモニター越しでもわかるほど闇の書以上のイリスの桁はずれな魔力にスタッフにも緊張が走っている。そして…イリスがクロス達を捉えた。

「クロス！　俺を…」

「ダメだ！」

『そうよ、ダメよ！』

「ノアまで、しかし、これしか手は…」

「諦めるな！　みんなで戦えば…倒せるはずだ！」

クロス達が何を言っているのかわからないなのは達は首をかしげ何事かと聞こうとしたが

「来るぞ！」

ゼストの言葉にクロス達は身構えると同時にその場を飛び去ったがイリスの方が速かった。

ボキッ　ゴキッ

「あがっ！」「がはっ」
「アルフ！」「クロノ！」

いくつもの触手がアルフとクロノを打ちつけた、それは誰も反応できないほどの速さだった。
骨が砕けるような嫌な音と共に2人は海面に叩きつけられた。
すぐにフェイトとクロスが駆け寄ろうとしたが
何本もの触手の尖った先端部分が開き、そこから光弾が発射され2人を襲う。

＜ディフェンサー・プラス＞
「だめだ、よけろ！　貫くぞ！」

バルディッシュがバリアを張ったが、シグナムが言った通りイリスの光弾は簡単にバリアを貫き、フェイトとクロスを襲う。

「あぁっ…」
「ちぃ、鏡面乱舞！」

クロスが光弾に向けて技をかけたが、一発一発を逸らすのがやっとそれもよほど重い一発なのかクロスは4，5発逸らした直後に吹き飛ばされてしまった。
その間にザフィーラとシャマルとユーノが海に落ちた2人を救助に

向かった。

「エクセリオンバスター！」
「ディスペルスクリュー！」

なのはとクイントが砲撃を放つが、魔力弾はかき消せてもイリスの本体に当たる前にかき消されてしまった。

「えっ、消えた！？」
「ＡＭＦ？」
『ＡＭＦとよく似ていますが、現在解析中！』

魔力の結合など、魔力全般を阻害するフィールド上位魔法、ＡＭＦ。
それとよく似た反応で砲撃をかき消したイリス。

『主はやて…イリスに仙気以外の攻撃は効果がありません』
「そんな…」

リインフォースの言う通り、プレシアやメガーヌも射撃や砲撃を放つが
全て本体に届く前にかき消されてしまう。
はやても石化の槍を放つが届く前に砕かれてしまった。

「…ならば、フルドライブ！」
「「フルドライブ！！」」

ゼスト、メガーヌ、ティーダがそれぞれのデバイスにフルドライブをかける。

ゼストの槍、ロンギヌスはさらに鋭いフォルムになり、ゼストの背中には炎のマントが現れた。
メガーヌのアスクレピオスも両手と背中に水で出来たフィンが生えた。
ティーダのトライギャランは大口径ライフル型の2丁拳銃となり両脚に雷が纏いついている。
ゼスト隊のフルドライブにはそれぞれ魔力変換素質が付き、尚且つ空戦適性を備える事が出来る。
ゼストには元々変換素質があったが、さらに強大になっている。
クイントの風、ゼストの炎、メガーヌの氷水、ティーダの雷。
しかし、後遺症もあり、フルドライブを使用するとしばらく魔力が使えなくなる。
なのでソウルチェンジ同様文字通りの切り札なのだ。
ゆえにクイントはフルドライブを切らずに継続使用していた、魔力の消耗も相当になっている。

「母さん大丈夫？」

無理をしていたせいで体力に自信のあるクイントも少し息切れを起こしている。

「大丈夫よ、少しリーゼ達から魔力もわけてもらっていたからね」

気丈に振る舞うクイントだが辛そうだ。

「キュオー！」

鋭い触手を四方八方へと伸ばし、なのは達を捉えようとする。

「させるか！」

シグナムとレギナスが触手に切りつけるが効果はない。

「これで…どうだ！　紫電一閃！」
「牙狼一進！」
「猛火絶炎衝！」
「光刃斬！」
「ジェットザンバー！」
「ラケーテンハンマー！」

6人が近接攻撃で触手を斬り裂こうとするが、斬り裂いたのはクロスの一撃のみで
他の攻撃は全て通らなかった。
さらにイリスの触手から放たれた光弾に全員吹き飛ばされた。
なんとか各々バリアを張ったがそれでも結構なダメージだ。

「これでもダメか」
「俺の攻撃しか通らないのならば」

クロスは銃士となり、イリスに近付きながらアグニとヴァジュラを乱射する。

「キュオォオ！」

効いていはいるのかイリスが叫び声をあげた。

「プリズムノヴァ！　メテオザッパー！」

至近距離まで接近した砲撃とヒュドラによる拡散弾の雨。
しかし、それを喰らっても少しよろけるだけでイリスの動きが鈍る

事はなかった。

「まさか、効いてないのか!?」

＜いえ、攻撃は効いています…けど＞

『防御力が高すぎて…効果が薄いんです』

「そんな！　それじゃあ打つ手が！」

「なくてもなんでも…黙ってやられる手はないさ！　サンダーランスストーム！」

ティーダの上空に魔法陣が現れ、そこに銃弾を放っていく。

するとイリスの上空にも巨大な魔法陣が現れそこから雷の槍がいくつも降り注いだ。

が、またもや届かない。

「氷錬召喚…フリーズスパイカー！」

「エクセリオンバスター…ブレイクシュート！」

メガーヌの氷の杭もなのはの砲撃も見えない壁に阻まれたかのように消滅する。

「だったらこれや！　みんな、離れて！　デアボリック・エミッション！」

巨大な青紫色の球体がイリスを包み込む。

本来はもっと広範囲の広域攻撃魔法だが、リインが調節してイリスを呑みこむほどで抑えている。

「はぁ…はぁ……こ、これで少しは…なっ！?」

球体からイリスの手甲と触手が伸び、魔法を内部から崩壊させてし

まった。

「なんて規格外…クロス！？」

イリスが球体を崩壊させ頭部が露出した、直後。

「ギア……ハイブリットシャインブレイカー！！！」

クロスがイリスの眼前へと転移し、自身の持つ最強の攻撃力を誇る集束砲をはなった。
上半身を呑みこみほどの砲撃がイリスを直撃する。

「……今度こ…ぐあぁぁあ！」

これで、決まったかもしれない…そんな皆の淡い期待をあざ笑うように
クロスの身体に触手が絡みつき締めあげた。
イリスはまだ生きていた。
頭部からは煙があがっているが見た目では損傷はさほどない。

「クロス！」

ゼスト、レギナス、シグナムが絡みついた触手を斬り裂こうとしたが刃すら通らない。

「こいつっ！」「私の息子を離しなさい！」

ヴィータの巨大な鉄槌もクイントの嵐の乱撃にも全く動じず、イリスはさらに力を強める。

「あ…ぐっ…あぁ！」
「クロス君！　リイン、何か方法はないんか！？」
『……あるにはありますが…』
「だったらそれで！」
リインの歯切れの悪い返事にしびれを切らすはやて。
「……ノアッ！」
『はいっ！』…「フロストアロー！」
ユニゾンを解き、分離したノアが氷の矢を放った。
ユニゾンを解いた状態とはいえそれなりの大きさの矢がイリスの目に突き刺さる。
「キュオオ～！」
これには応えたようで、たまらずにクロスを締めつけていた触手が緩む。
すかさずノアと再度ユニゾンをし、その場を離れた。
ゼスト達が追撃しようとするイリスの足どめした。
「はぁ…はぁ」
「大丈夫、クロス君？」
「すぐにシャマルに治療を…「だ、大丈夫だ」えっ？」
なのはとフェイトが両脇からクロスを支える。
はやてはアルフとクロノを治療中のシャマルを呼ぼうとするが、クロスが止める。
「俺は骨に異常ない、それよりアルフ達の方が重傷だ」

「私がやるわ」

プレシアの治癒魔法でどうにか息を整え、支えなしで浮かぶクロス。
クロスの言う通りアルフとクロノは肋骨がいくつか折れていて重傷。
シャマルとユーノの2人がかりの回復魔法でどうにか応急処置をしている程だ。
すぐにアースラに転送したいがイリスが現れた時に強力な結界が張られ
アースラとは通信するのがやっとの状態…

「ありがとう、プレシア」
「どういたしまして、それより…何か手はあるの？」
「このままじゃみんなやられちゃう！」
「……」

プレシアとなのはの問いに無言になるクロス。

「ちくしょー…あいつ、ここまでの強くなかった…あの時以上だ！」
「おそらく、私達が…神獣ばかり集めたせいで……」
『いや、それだけではない。おそらく過去に蒐集したリンカーコアの魔力も…』
「まさか、ずっと溜めこんでたと言うのかリインフォース！？」

今の邪神はシグナム達が集めた神獣やなのは達の魔力の他に
過去幾数年にも渡り蒐集した魔力を持っている、リインはそう推測した。

「やはり封印されていながらも少しずつ進化したようだ……クロス」

レギナスは真剣な表情でクロスを向いた。

「もう迷っている暇もない！　やり方はアランの手記から伝授されたな？」
「伝授は…された」
「ならやるんだ！　輝光天装を！」
「輝光…天装？」

夜天の主になってそれなりの知識を継承したはやてだが、聞いた事がない言葉だ。
シグナムとヴィータは知っているのか、何か苦虫をつぶしたような顔をしている。

「リイン…知ってるんやろ？」
『……』
「なんで黙るん！？」

しかし、リインからの返事はない。

「クロス…それしか手はない」
「シグナム！」
「私らは守護騎士だ…主を……この場にいる皆を守る手段を使うのは当然だ！」
「ヴィータ……」
「ねぇ、その輝光天装をするとどうなるの？」

恐る恐る尋ねるなのはにクロスはどう返事をすべきか悩んでいるようだ。

『輝光天装はイリスを封印したアラン・コーヴァンが作り出した、対抗策だ』

リインは静かに語る。

『かつての主アランはこうなる事を予測した。仙気だけではイリスに対抗出来ない…事をな』

「だから、対イリス用に特化した武器を…用意した。アランの手記にも書いてあっただろう？

太極と光天の主の武器として戦う騎士、その真の使命を全うする時が来たんだ」

そう言ってレギナスは自身の槍を見る。

「こいつの…グングーニルの封じられた真名を太極の主が仙気をもって解放する事で

俺とグングーニルが太極の主、クロスへとユニゾンする…武器と鎧になってな」

「それが…輝光天装だ、でもこれは…」

その時、イリスの胸元が紅く輝き、衝撃波が起こり、全員が吹き飛ばされた。

「うっ……こ、これじゃ、私の白天王でも…ダメね。でも隙を作るくらいなら…」

「待て！　さらに何かする気だ！」

メガーヌが更なる召喚魔法を繰り出そうとしたその時、イリスに変化が現れた。

「キュロロロロロ～！」

奇妙な尾雄叫びをあげたかと思うと、イリスの隣に…

「あ、あれは…召喚の魔法陣!?」

メガーヌの言葉に、特にシグナム達が驚いた。
イリスの隣に召喚の魔法陣が沢山描かれた巨大な球体が現れたのだ。

「馬鹿な！　邪神が魔法を使うだと?」

魔法を行使する知性は持ち合わせていないはずの邪神。
獣のように蹂躙し捕食し破壊しつくだけの存在である邪神。
しかし、復活した邪神は本能で魔法を使おうとしている。

「……クロスロード・ナカジマ！」

その様子を見たレギナスはクロスの胸倉をつかみ、怒鳴った。
なのはとフェイトとはやてが止めようとしたが、シグナムとヴィータに制された。

「お前の使命を思い出せ！　太極と光天と夜天が何のために生み出されたか！
それがここで…邪神なんていうイレギュラーに殺されてもいいのか!?
お前達が戦う相手は…もっと別にあるはずだ！」

「帝黒神……アグドラス」

「そうだ、お前が戦わなきゃならない相手だ！　今お前が死んだら…誰が倒すんだ?」

レギナスは昔アランから聞かされていた。
太極、光天、夜天…この3冊はアルハザードを滅ぼした元凶と戦わ

なければならない、と
しかし、邪神などと言う化け物とも戦わなければならなくなった。
本来の使命を果たさせるためにも…レギナスを生み出した、と。

「そして、それよりも…」

レギナスはなのは達、そして、イリスに攻撃しているクイント達に目をむけ

「お前が大切に守ろうとしている仲間や友や家族を…死なせてもいいのか！」
「死なせたくないさ！　でも…輝光天装したら…お前が…消えちゃうじゃないか！」
「「「「っ！？」」」」

クロスの言葉になのは達が息をのんだ。

「お前が消えたら…はやては大切な家族を失うじゃないか！」
「レ、レギナス…うそやろ？…冗談…でしょ？」

はやての声が震えている。
シグナム達も辛そうに俯いている。

「嘘でも冗談でも…ありません、主はやて…それが、作られた時からの…寿命です」
「そんな……」
「私は…元々イリスが倒されるまでのかりそめの命を禁術によって与えられていただけです」

アランの命を代価として武装魔導生命体として生み出されたレギナ

ス。
そして、その命は…真の姿である輝光天装を行い、イリスを倒す事で消える。
限られた時間内で武装型の魔導生命体を作らなければならなかった。
アランの、これが精一杯だった。

「今の技術ではどうかは知らないが…あの時代では誰かの命を対価にしなければ…
魔導生命体は生み出せなかった…」

静かに淡々とシグナムは告げる。

「それでも、輝光天装せずにイリスを倒せば…まだ道があるかもしれないんだ！」

しかし、可能性の低い話だった。
レギナスを作った技術と術式を太極と光天の書で解明し延命を行う。
アランの手記を見たときからクロスとノアが考えてはいた事だが…

「そんなあいまいなものじゃない…イリスが死ぬ時が俺の使命が果たされ…契約が切れる時だ」

どこか達観したような顔をするレギナスに…はやてが泣きついた。

「ダメや！　そんなんダメや！　レギナスを犠牲してだなんて…クロス君も止めてな？」
「主…」「はやて……」

レギナスとクロスに涙ながらに懇願する…が

「グオォォオオ～！」
「…立て込んでいる間に、どうやら召喚が完了したようよ」

プレシアの視線を追うクロス達…そこには。
イリスの球形召喚魔法陣から召喚…いや、生み出された召喚獣の姿が。
イリスよりは一回り小さいが、それでも巨体、そして、その姿は…

「うそだろ…ヴァルファーレの翼とイフリートの腕！？」
「下半身はイクシオン、上半身と背後に浮かぶ車輪は…バハムートか」
「それにあの纏っている凍気はシヴァだな」

冷や汗を流しながらシグナム達は自分が蒐集していった神獣の集合体を見る。
それは……更なる絶望の獣だった。

続く

第５０話　「古の契約」（後書き）

カガヤ「あ～シリアスだ～超シリアスだ～」

クロス「仕方ないだろ…相手が相手なんだし」

ノア「これでさむ～いギャグ入れてもひかれるだけですよ？」

カガヤ「そうだな…しかし、あ～文才が欲しい！」

クロス「文字数増えて連載初めよりはましなんじゃない？少しくらいだけど」

ノア「その分誤字脱字とか描写不足が出まくりっぽいですけど？」

カガヤ「…もっと、精進しますｏｒｚ」

第５１話　「白銀の天使」（前書き）

短いです。
前回と今回で区切りを迷った結果こうなりました…

第５１話　「白銀の天使」

シグナム達が蒐集してきた神獣のリンカーコアを元に、神獣を召喚した邪神イリス。
しかも、ただ召喚したのはただの神獣ではなく、それぞれの力を融合させた合体召喚神獣だった。

「ギャアオォォ！！」

イリスよりも一回り小さいとは言え、巨体から来るプレッシャーはイリスに負けるとも劣らない。

「ぐっ、化け物が２匹に増えたか…さしずめ、エビルキメイラ（邪神の融合獣）か」

ゼストが名付けたケンタウロスのような姿をしたエビルキメイラは背中の車輪を回転させ、魔力をチャージしているようだ。
そして、上空に昇ったイリスも胸元が妖しく輝き出し、触手を開いた。

「あれは…いかん、散れ！」

シグナムが叫ぶと同時にイリスの触手から光線の雨が降り注いだ。
みんな避けようと飛びまわるが、避けきれないほどの光線だ。

「集まれ！」

なんとか一か所に集まり、バリアを重ねかけする。
しかし、それでも防ぎきれずに次々とバリアにヒビが入っていく。

「…前！」

プレシアの声に前を向くと、エビルキメイラの車輪が雷を発しながら輝き
口を大きく開け何かを発射させようとしていた。

「あれは…バハムートの技！？」

どうにかしようとしているが全員イリスの光弾を防ぐので精一杯だ。

「ちぃ…ギ・・・あ？」

クロスがギアで全員を転移させようとしたが
突然視界がぐらつき、ユニゾンは解け倒れこんでしまった。
海面に落ちる前にゼストとクイントに支えられたが
クロスもノアも体が小刻みに震え顔色は悪く唇は真っ青だ。

「「「クロス（くん）！」」」

バリアを張り直しながらもなのは達の顔に焦りが浮かぶ。
その間にもイリスの光弾はバリアを破壊し続けた。

「限界だ。さっきギアとブレイカーを同時に使ったばかりなんだぞ？」
「ただでさえ無茶しっぱなしなのに…もうこれ以上は危険よ、なんとかアースラへ…」

本来、転移魔法直後の集束魔法は仙気の消耗が激しい。
ただでさえクロスとノアは暴走の件も含め仙気を使い過ぎている。

魔力カードで回復させながらとはいえ9歳の身体には反動が大きすぎた。
だましだましでここまできたが…とっくに限界を越えている。
それでも平然とアルガス魔法を使ってきたが、体力も肉体も崩壊寸前だ。

「クロス…もう迷ってる時間もないぞ！」

苦しそうなクロスへレギナスはそれでも強い口調で決断を迫った。

「何言ってるの？　今のクロスにはもう魔法自体使うのは無理なのよ！！」

クイントがクロスに輝光天装を迫るレギナスの言葉を怒りと共に遮る。

「だからこそだ、今のクロスは危険な状態だ。俺と融合すれば…」
「わ・・・・・がっ・・・った」

苦しみながらも歯を食いしばり悔しそうな顔をしながらも目は強く訴えかける。

「何かするなら急いで！　もう攻撃が来るわよ！」

メガーヌの言う通りエビルキメイラはチャージを完了させたらしく巨大な魔力の塊を発射させようとしていた。

「…早く！」

レギナスがクロスに自分の槍を手渡す。

クロスは震える手でなんとかグングーニルに手をかけた。
そして、ノアはレギナスの手を握る。

―我、太極の主なり―

―我、光天の主なり―

―幾年の星の流れを辿り―

―幾多の昼と夜を巡り―

―この手に掴むは白き槍―

―この手を掴むは銀の鎧―

「もう…バリアが…持たない！」
「クロス、ノア…」
「レギナス…レギナス！！！」
「……」
「……さようなら、我が主、八神はやて…そして、仲間達…」

はやての叫びにレギナスはまるで妹を慰める兄のような顔で笑って応えた。
シグナム達守護騎士ははただ黙ってレギナスを見つめている。
黙ってはいても…その表情には悲しみと悔しさで一杯だ。
そして…レギナスの体が光となって消えていく…

―今こそ悠久の鎖を解き、我が声に応えよ―

―今こそ悠久の鎖を解き、我が魂に応えよ―

――真なる名の元に我らに力を示せ　　エクリプス！――

クロスとノアの詠唱と同時にバリアが音を立てて砕けて
エビルキメイラから極大の黒い閃光が放たれた。
しかし、なのは達それ以上の眩しい光に包まれた。
黒い閃光はかき消されイリスとエビルキメイラはその光にはじきとばされた。

「一体…何が、クロス君は！？」

眩しい光に思わず目をつむっていたなのはは自分達が何かに包まれているのに気付いた。

「これは、羽？」

そして、周囲には白い羽が無数に舞っている。
見上げると、クロスやノアやレギナスの姿はなく…代わりに
右手には穂先フェイトのザンバーのような金色の魔力刃が付いた大きな長い槍をもち
左手には大口径の銃口がついたクリムゾンブリットにエクスカリバーを握りしめ
白いローブの上に、紅、蒼、白の宝玉を胸に付け金色に縁取られた白銀の鎧を身に纏い
背中には吸い込まれそうなほどに白い3対6枚の翼を生やし
虹色の瞳に銀色の髪の天使のような青年の姿がそこにあった。

「…あ…えっ？…だ、誰？」

全員が呆気に取られている中、青年の口が開いた。

「邪神イリスは俺が倒します。だから皆はエビルキメイラの方をお願いします」

「あっ……まさか」

「クロス…なの？」

「レ、レギナスはどこにいったん？」

信じられないという顔をしながら問いかけるなのは達に青年、クロスはにこりと微笑み答えた。

「この鎧がレギナスの真の姿なんだ、でも意識は俺の中にあるよ」

大人のように成長した姿のクロスの優しい笑顔になのは、フェイト、はやての顔は自然を赤く染まっていった。みると、シグナムやヴィータにシャマルも頬を赤く染めている。

「それじゃあ…アレを頼みます。イリスとは違って魔法は有効なはずです」

そう言ってクロスは態勢を立て直しこちらへ向かってこようとするイリスへと飛んだ。

背中の翼を力強く羽ばたかせて。

「クロス君…綺麗でかっこいい……」

「うん…あれが、天使なの…かな？」

「ほんまに綺麗やったなぁ…レギナスの鎧もかっこええし」

未だに顔を真っ赤にしてうっとりとする魔法少女3人娘。

「ほら、3人とも！　まだ戦闘の真っ最中よ！」

プレシアの叱咤でようやく戦闘態勢を立て直しエビルキメイラへと向き直る。

「全く…いくらかっこいいからって」

「まぁまぁ、あんな姿見せられたんじゃなのはちゃん達はイチコロでしょ？」

小声で愚痴るプレシアに声をかけるクイント。

しかし、プレシアの頬もうっすら紅くなった事を見逃してはいなかった。

「それにあなただって…見惚れていたんだし。それにしても…あれはクロスの未来の姿みたいね」

「わ、私は別に！　ってそうね、おそらくはノアの逆ユニゾンと同じようなものね」

ユニゾン対象者の肉体を一時的に活性化させ、肉体年齢を上げる事で基礎能力を底上げする。

管理局でもレアスキル級の扱いの魔法技術だ。

「おしゃべりはそこまでだ…イリスはクロス達に任せて俺達はあいつを倒すぞ」

「「「「「「了解！」」」」」」

（クロス…油断するなよ）

ゼストは燃え盛る炎の槍をこちらへ突進してくるエビルキメイラへ

と向けた。

イリスはクロスに近付くと、急にとまりクロスを威嚇するように低く唸る。

「へぇ、知性はあれど本能だけで動く化け物が、さっきまでと仙気が違う事に気付いたか」

「キュオオォォォ～！」

更に激しく威嚇するイリス、どこか委縮しているようにも見える。

対するクロスは両手の獲物をイリスへと突きつけ高らかに叫んだ。

「邪神よ、せいぜい恐怖しろ。俺は…俺達はお前の天敵！　我が名は輝光聖天！！」

続く

第５１話　「白銀の天使」（後書き）

クロス、ノア「「厨二病、乙☆」」

カガヤ「こらぁ！！いきなり何言ってんだ！？」

クロス「いや、だってネーミングが…なぁ？」

ノア「もっといいのなかったんですか？」

カガヤ「頭に浮かんだのが…これしかなかった」

ノア「まぁ…仕方ありませんね我慢しましょう」

クロス「…そうだな、せっかく大人モードになったんだし」

カガヤ「後で設定まとめて載せるつもりですが…輝光聖天時の外見は２０歳前後のクロスの未来の姿…だ」

ノア「うっわあ～私よりも未来の姿お披露目だぁ」

クロス「文章だからあんまし分からないだろ」

カガヤ「まあな（苦笑）…さて次回は　チート邪神　ＶＳ　チート天使　です！」

ノア、クロス「「感想叱咤激励お待ちしております！」」

第５２話　「天使　ＶＳ　邪神」（前書き）

区切りが見えずに書き続けて言ったらこんな長さに（苦笑）
でも文字数多いだけで中身は薄っぺらいカモ…
感想でもメッセージでもなんでもいいので何か下さい（笑）

第５２話　「天使　ＶＳ　邪神」

衛星軌道上　アースラ

なんとか現状の確認をしようとしているアースラスタッフだが
邪神の張った結界内部の映像を出すだけで精一杯の状況だ。
しかし、向こうとは通信がなんとか生きているので状況はかろうじて分かっている。
そして、今目の前の光景に皆、目を奪われている。

「あ、あれが…クロス君？」
「輝光聖天、それがあの姿の名前みたいね…それにしてもなんて神々しい姿」

ソウルチェンジしたノアやフルドライブのクイントの翼とも違うどこか神聖なものを感じる輝光聖天クロスの白い翼。
そして、全身を覆う金色の仙気がクロスを本物の天使のように思わせていた。

「邪神共々数値計測不能！　おそらくＳＳＳクラスだと思われます」

管理局が認定する魔術師ランクは魔力数値だけではなく様々な要素で判定する。
今回はイリスの魔力とクロスの仙気を測定したのだが
アースラの設備では完璧に測定することが出来なかった…
それはすなわち、クロスとイリスが共にＳＳＳという極めて高い数値を誇ると言う事。

「…ゼスト隊長達の方はどう？」

「はい、既に戦闘が開始されています。こちらはイリスとは違い攻撃が通っているようです」

モニターにはエビルキメイラと戦闘を開始したゼストやなのは達の姿。

イリス相手には弾かれるばかりだった攻撃がエビルキメイラには効いているようだ。

「いつも最後に私達に出来るのは……祈る事だけなのね」

唇を噛み、悔しそうにモニターに見入るリンディ。

だがすぐに気持ちを切り替え、指示を飛ばす。

「各員アルカンシェルのチェック急いで！　使用する事になるかもしれないわよ！」

「「「はい！」」」

・

・

・

海鳴市近海の海上にて睨みあう、邪神イリスと輝光聖天クロス。

先に動いたのはイリスだ。

「キュオロロロ～！」

叫び声と共に大量の触手を伸ばし先端から光弾を次々に発射した。

だが、クロスは避けるどころか防ごうともしない。

「無駄だ」

その一言が物語っている。

クロスの胸に付いた三色の宝玉が光ったかと思うとイリスの光弾は全て吸収してしまったのだ。

「そら、返すぜ！」

左手を構え、腕に付いた銃からイリスの光弾に似た仙気弾をマシンガンの如く放った。
イリスはただの弾ではないと直感で気付いたのか、初めてバリアを張り防ごうとした。
だが、仙気弾は軽々とバリアを貫きイリスの体に突き刺さり打ち砕いていく。

「キュオ～～～！？」

「どうだい、バリアが全く効果なく貫かれる気分ってのは？」

クロスがやった事は…簡単に言えば、吸収と解析と合成。
鎧と化したレギナスが吸収し、ノアがイリスの魔力を解析し、クロスが自分の仙気と合成する。
そうする事でイリスのバリアを無効化したばかりか強靭な甲羅すら貫通させる事ができる。
クロスの攻撃が効果なかったのはイリスが強靭な装甲の上に圧縮した魔力で覆い
防御力を各段に引き上げていたからだ。
ならば、イリスの魔力を解析し、魔力を利用する事でイリスの防御力を無効化すればいい。
案の定あれほどクロス達の攻撃をかき消していたイリスの体に次々と傷が付いていく。
クロスの左手には騎士、闘士、銃士、３つの力が融合している。
その最も特化したのが、腕に付いたアグニよりも強力で、ヴァジュラよりも高い連射力を持つ銃だ。

「キュオ！」

キッと睨みつけ、イリスは触手を尖らせ直接攻撃してきた。

「光弾がダメなら物理的に…か、それも無駄だ！」

右手のグングーニルと左手のエクスカリバーを振う。
1つ振うごとに数本の触手が薙ぎ払われる。
しかし、すぐに触手は再生されまたクロスへと向かってきた。

「ならば…たぎれ猛火！　業火剣乱・嵐槍炎舞！」

槍と剣に灼熱の炎を宿し、縦横無尽に振り回しながら一直線にイリスへと突撃した。
近付く触手が刹那のうちに斬り刻まれ、切り口が炎に包まれる。
ならばとイリスは両手の手甲をクロスへと突き出したが剣と槍で阻まれる。

「俺に触れると火傷じゃすまないぞ？」

巨大な手甲を押さえている剣と槍から炎がイリスの手甲へと伝わり瞬く間にイリスの全身を包み込んだ。

「キュオオ～！」

『…お前に食われた人達は痛みを感じる間もなく…苦しみだけで食われたんだ』

クロスの内部からレギナスの声が響く。

『瓦礫の下に逃げ込もうとも、死体の山に隠れようとも…貴様は全てを喰らった！』

両目が輝き、イリスを激しい衝撃波が襲った。

『貴様が通った後には……生物すら残らなかったんだ！！』

イリスの胸元へと槍を突き刺し、剣で滅多斬りにした。

『やっとお前に借りが返せれる…数百年分の悲しみと痛みと苦しみと怒りを味わえ！』

レギナス、と言うよりはレギナスを通してアランが喋っているかのようだ。

「ラディアンスブリット！……ブラストノヴァ！」

更に傷口に光の拳を叩きこみ、内側から砲撃で徹底的に攻撃した。

「ギュオォ～ロ～！？」

イリスの体全体に白銀の光が内側から漏れ、爆発を起こしながら体が崩れていく。

「これで…トド…ぐっ！」

クロスがトドメの一撃を放とうと構えたその時
イリスの胸が紅く輝き、クロスは衝撃波に吹き飛ばされてしまった。
そして、イリスの体中に出来た傷や穴が次々とふさがって行った。

「ちっ、防御力を無力化したと思ったら今度は異常な再生力…か」
『でも、確実にダメージは通っている！』
『このまま攻め続けましょう、マスター！』
「おう！」

「キュオン！」

イリスの触手が様々な色に輝き、巨大な火炎弾や雷撃を放ち始めた。

『イリスめ、自分の魔力は効かないと分かると蒐集した神獣やなのは達の魔力を使い始めたぞ』

イリスの魔力は解析し終えているのですぐに吸収することができる。
だが、神獣やなのは達の魔力は解析していないのですぐには吸収出来ない。
しかも、解析しようにもイリスは自分の魔力と合成して解析しずらくさせているのだ。

「俺の真似ってわけか…いいぜ、だったら小細工なしだ。全部跳ね返してやる！」

再度、両手の得物を構え直しクロスはイリスへと突撃する。

Ｓｉｄｅ　ゼスト

「ギャオォ～！」

エビルキメイラの咆哮が響く。
同時にキメイラの周囲にいくつもの円盤状の魔力弾が形成された。
あれは神獣イクシオンのエアロスパークだ。

「シュート！」「ファイア！」「いっけえぇ！」

なのは、フェイト、ティーダの射撃で次々と撃墜され
俺とシグナムが翼を斬り落とし、メガーヌとプレシアが砲撃を放つ。
先ほどからの連携攻撃で次々とキメイラに致命傷を与えていく。
イリスとは違いこちらの攻撃が通りもしない事はない…ないが。

「また回復していきます！」
「させないわ！　ヴィータちゃん！」
「おお！」

まだ回復しきっていないうちにヴィータの鉄槌が撃ち込まれ
その上からクイントが追撃を放っていく。
それでもキメイラの回復の方が速い。
先ほどからこれの繰り返しだ。
クロスの白い羽の力で体力も魔力も回復した俺達だがこれでは分が悪すぎる。

「隊長、このままでは！」
「あぁ…全滅だ」

息も上がってきたティーダの言う通り、このままではやられる。
せっかくクロス達が作ってくれた勝機を無駄にするわけにはいかない。
まだ切り札は残っているが…アレは正真正銘、最後の切り札だ。
それにしても少し気になる事がある。

「あの、ゼストさん…キメイラの回復力って一定じゃない気がするんです」
「うん、どのタイミングでなるってわけじゃないんやけど」
「再生が鈍ってる時があります」
『恐らく、イリスからの魔力供給になにかあるのかもしれません』

ほう、なのは達も気付いたか、それにリインフォースの言う通りかもしれない。
どんな攻撃をどこに当ててもキメイラは即座に再生させている。
だが、再生力には何か法則があるのか時折鈍るか全く再生しない時がある。
とはいえ、それは短時間の事ですぐに再生が再開される。

「…あっ、今もです！」

みると、プレシアとはやての砲撃で潰された両腕が再生しているが再生途中で止まっている。

「今のうちに追撃だ！」

ヴィータとシグナムがトドメを刺そうと攻撃をしかけるが急にキメイラの両腕が再生され、イフリートのマグマのような剛腕が振るわれる。

「なっ！？」「ぐっ！」
「ちぃ、少し我慢しなさいよ！！」

クイントが両手で発生させた突風で2人を吹き飛ばす。
巨大な剛腕よりもヴィータとシグナムの方が飛ばしやすいからだ。

「ギュオォオオ！」

キメイラが突然雄叫びをあげたかと思うと周囲に氷の粒のような粒子がキラキラと舞いだした。

「あれは、ノアのに似てるわね」

確かに、ソウルチェンジしたノアが纏う氷結の凍気に似ている。

「アクセルシューター！」「ジェットザンバー！」

なのはの射撃とフェイトの斬撃、死角をついたうまい位置での攻撃だ。

パキンッ

だがキメイラには届かなかった。

キメイラの周囲の粒子に触れた途端に射撃も斬撃も凍りつき砕けてしまったからだ。

「…あの凍気はノア以上かもしれないわね」

メガーヌも冷や汗を流している。

しかし、ますます奴を倒す手段が……切り札を使うしかないがん、まてよ…

『クロス、聞こえるか？』

イリスの相手で手一杯なのを承知でクロスに念話をする。

確認しなければならない事がある。

『マスターに代わってノアが出ました！』

『ノアでもいい、今さっきイリスに大きなダメージを与えなかったか？』

ノアでもいいので俺の疑問を言った、俺の推理が正しければイリスは…

『はい、マスターがイリスの両腕と頭を吹き飛ばしたのですが…再生してしまって』

口調からして、まだイリスを倒す糸口は見えていないようだな…

だが、俺の予想は当たった。

エビルキメイラが再生出来るのはイリスの魔力を受信しているからだ。

そして、イリスが自身の傷を再生中は魔力の流れが止まるのでキメイラは再生できない。

ノアもそれに同意した。

『そうですね、イリスから微かな流れがあって再生中にはそれが止まっています』

ならば、作戦は決まった。

「全員よく聞け！　しばらく耐えろ！　今にあいつの再生力が一時的に止まる。

俺の合図で一斉に攻撃を加えるんだ！　生半端な攻撃ではなく…最大の攻撃でだ！』

「「「「了解！」」」」

「ただし、なのは、フェイト、はやての3名は待機だ」
「えっ？」「どうしてですか！？」「なんでやの？」

メガーヌと3人の方を向き静かに語った。

「私達は次の攻撃で魔法がしばらく使えなくなるわ…フルドライブの影響でね」
『…だから主はやて達をもしもの為に温存する…と？』
「流石ねリインフォース。と言うわけだから…ここは私達に任せて」

どうやらメガーヌの言葉に納得したようだ。
俺達は次の攻撃で恐らく魔力がなくなりしばらくは戦闘不能になるはずだ。
ならば俺達4人の最強の攻撃でキメイラを削り、プレシアのブレイカーでトドメをさす。
シグナムとヴィータは火力が不十分だから牽制に回ってもらわなければならない。
問題はキメイラの凍気だが、俺達ゼスト隊ならば問題はない。
魔力を籠め槍に炎をたぎらせる、あとはクロス次第だ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『マスター、聞いていましたか？』
「あぁ、要はイリスを倒しきれなくても再生するのに精一杯の状況にすればいいんだろ？」

イリスの触手を斬り裂きながらクロスとノアは作戦の確認をした。
作戦はこうだ、キメイラに魔力が行かないほどの大ダメージをイリスに与え

再生力を失ったキメイラをゼスト達が再生不可なほどに倒す。
あれほどの質量を持ったキメイラを再生不可になるまで消滅させるのは不可能に近いが
今のゼスト達はまだとっておきが残されている。

「…なら、まずはブレイカーで……ん？」

集束魔法を放とうと構えたクロスだがイリスの様子がおかしい。

「キュー…オーーン！」

クロスよりさらに上空へと舞いあがり、背中から一際大きな触手を４本生やしたかと思えば
触手と口を一斉に開き魔力を溜め始めた。

「あれは、スターライトブレイカー！？」

それも口４本の触手、合わせて５発分のスターライトブレイカーだ。

『まずいぞ、あれだけの威力。かわしたら街が吹き飛ぶぞ！』
「あぁ、しかも反射も無理だろうな…１つ１つがなのはのより数倍の威力だ」
『どうします？　集束時間が早すぎてもう止める時間が…』
「……」

クロスは無言で翼を大きく羽ばたかせ、羽を撒き散らした。

『どうする気だ？』
「俺がかわせないようにわざと上空から狙ってる。俺がさらに上空に転移しても

イリスはそのまま地表を狙って撃つ気だ…だったら、吸収するしかないだろ」

『無茶ですよ！　なのはちゃんのより数倍の威力…それが5発分なんですよ？』

「でも、これを利用しない手はない！　来るぞ！」

「ギュオロロローーー！」

イリスは咆哮と共に黒と桜色が混ざった巨大な5発の集束砲撃が放たれた。

5つの光は1つのさらに巨大な光へとさらに集束する。

対するクロスは両手を広げ、その全てを吸収しようと胸の宝玉が輝きを増す。

「なんやあれは！？」

イリスの砲撃は離れて戦うはやて達にも感じるほど強大だった。

いち早くそれに気付いたはやてが声をあげる。

一方アースラでもこの様子はモニターされていた。

「クロス君、一体何を…まさかアレを吸収する気！？」

「そんな無茶よ！…でも、それしかないわね…」

リンディが強く拳を握りしめる…

（せめてアルカンシェルが大気圏内でも使えれば…！）

「『『はあああぁ～～～！！』』」

3人の気合と共に迫りくる黒い光へと両手を伸ばす。
そして…衝撃。
凄まじいほどの魔力に押しつぶされそうになりながらもそれでも両手を前に突き出す。
同時に舞いあがっていた羽が一斉にクロスを守るように展開された。

「少しずつですが…イリスの集束砲の魔力が吸収されています！」
「クロス君…」

エイミィとリンディは見守る事しかできない。

「はあぁぁ～！！」
「キュオオォ！」

少しずつだがクロスが集束砲を押し返し始めた。
集束砲に次々とクロスの羽が纏わりつき吸収し始める。

「もう……すこ…っ！？」

チュドーン！

しかし、もう少しと言うところで大爆発が起きた。
イリスが新たな触手を生やし別角度からクロスへと攻撃したのだ。

「「「「クロス（君）！！」」」」

その光景をモニター越しにでも遠くからでも見ていた者は全員叫んだ。

海面が波立ち、突風が吹き荒れバリア内にいたアリサやすずか達にまで及んだ。

「く～～！！　な、なんなのよこれはぁ！！」

「なのはちゃん、フェイトちゃん…クロスくん」

リーゼ姉妹が残った魔力で必死に2人を守っている。

『い、今のはちょっとやばいんじゃない！？』

『黙って！　この子達の前でそんな事言えるわけないでしょ！』

流石のエビルキメイラも激しい衝撃波に動きが止まる。

だが、これを好機と攻撃出来る余裕はゼスト達にもなかった。

「っ！　クロスぅ！！」

「クロスくん！」

「クロス！」

「返事して！！」

粉塵と煙が巻き起こっている中心に向けてクイントやなのは達が叫ぶ。

バサッ！

その時、叫びに答えるような力強い羽ばたき音が確かに聞こえた。

「こんなことで……やられるかぁ！！」

そして、煙を吹き飛ばし、ボロボロになりながらもクロスの姿がそ

こにあった。
羽は少し破れ、鎧はヒビや砕けている所もあるがそれでもしっかりとイリスを睨みつける。

「キュイ!!?」

無傷ではないがしっかりと羽ばたいているクロスにイリスは動揺している。

「さ～って……倍返しだ！」

傷だらけの腕を頭上に掲げて組む、その中では光輝く何かがあった。
さらに周囲の桜色と黒に光る羽がクロスの拳へと集まり光となる。

「ハイブリット・エクストリーム・シャインボンバー！」

組んだ拳をイリスへと突きだし、解放した。
拳から放たれた光の粒は小さくも力強く瞬きイリスへと迫る。
イリスは逃れようと上空へと飛んだが光の粒の方が早い！

「ギァオォー！」

光の粒はイリスへと着弾すると大きく膨れあがり、イリスを呑みこんで大爆発。
紫電を纏った爆炎が巻きあがる。
先ほどの爆発より規模は小さいが、威力は数段上だ。

「はぁ…はぁ……これで……どうだ！」
『いや、恐らく…完全には』
『こ、これだけやってもまだなんですか!?』

レギナスの言葉にノアが驚く。

ドクン…ドクン…ドクン

その言葉通り、辺りに不気味な鼓動が響く。

「…どうやらまだみたいだな」

クロスが睨む先では真っ赤に輝く巨大な水晶が浮かんでいる。

「あれが…コアか！　叩き潰……す？」

コアを砕こうと構えたが体に力が入らずに海面へと降下するクロス。

「ハァ…はぁ、やっぱり…きつかった…かな…」

クロスが辛そうに見上げる先では紅い球体を囲むようにイリスが再生を始めていた。

「でも……ゼスト隊長！　今です！」

イリスがコアだけになったせいで今までよりも魔力を消耗している今が
エビルキメイラを倒す好機でもある。

「分かった…全員用意はいいな！？」

「「「はいっ！」」」

「まずはキメイラの凍気を無力化するぞ！」

「…行きます！」

クイントは両拳を突き合わせ、リボルバーナックルのタービンを全開にする。
風…いや、竜巻が巻き起こりリボルバーナックルへと吸い寄せられていく。

「灼熱の炎よ、我が力となれ！」

ゼストも槍を大きく振り回す、そして全身が炎で包まれだした。
燃え盛る炎は翼や尾を形成していく、さながら火の鳥だ。

「白き者よ、煌めく氷水と共に我の声に応えよ…」

メガーヌは眼を瞑り何かを呟いている。
それはメガーヌのもつ召喚獣で最大最強を誇る神獣クラスの召喚術だ。

「フルリロード…」

ティーダの持つ2丁ライフルから薬莢が次々に排出されていく。
一発リロードする度に雷が銃身にほとばしる。
そして、ティーダの体から発せられた雷光は上空へと昇り、周りの雲を集めて
巨大な雷雲を発生させていた。

プレシアも最大級の砲撃魔法の準備をしている。
プレシアのブレイカーは自身の全ての魔力を使いきっての大砲撃だ、外すことは出来ない。
その動きを察知したのかキメイラが妨害しようと攻撃をしかけようとするが…

「邪魔、するな！」「大人しくしてろ！」

シグナムとヴィータによって阻まれる。

「一撃必倒・リボルバーマキシマムバースト！」

クイントは突き合わせた両手を前へと突き出した。

左右のタービンはそれぞれ逆方向へと最大稼働している。

両手から放たれた逆向きの魔力の渦は途中で１つの巨大な渦へと発達し

キメイラの巨体へと当たると、そのまま巨大な竜巻となりキメイラを切り刻む。

「翔破蓮獄・鳳炎爆火斬！」

さらに全身を炎の鳥と化したゼストが竜巻に包まれているキメイラへと激突。

炎は竜巻とあわさり巨大な火柱となり、キメイラを覆っていた凍気は一瞬で蒸発してしまった。

突撃した反対側からゼストが飛び出してきた、それに続くように。

「究極召喚・水帝白天王！」

メガーヌの究極召喚、白天王を召喚した。

白い外骨格に水色の模様が入っていて、通常なら紫の羽だが蒼い膜状羽に代わっている。

フルドライブによって水の魔力変換素質を得たメガーヌの属性が付与されているからだ

ゆえに『水帝』白天王。

「……っ！！！」

白天王は無言で炎の竜巻に包まれているキメイラを睨み極度に圧縮された水流を放った。
キメイラは炎の竜巻の次に水の竜巻に呑みこまれる。

「ギャオォ！！」

キメイラの外骨格の所々にヒビが入り始めた。
炎で限界まで熱せられた所に白天王の激しい水流によって急激に冷やされ
キメイラを守っていた外骨格がボロボロに崩れていっているのだ。

「いくぜ、白天王！　雷砲爆撃・ライジングコメット！」

水帝白天王の腹部に巨大な水晶体が現れ魔力砲が放たれた。
同時にティーダは銃口を上空の雷雲に向け発射した。
上空へ発射された2つの雷撃弾は周囲の雷雲を巻き込み
白天王の半分くらいの大きさの魔力砲撃弾となり、キメイラへと高速で落下した。
ボロボロの外骨格の上に白天王とティーダのダブル魔力砲撃。
避けるすべもなく直撃した。

バリバリ…ボカーン！

それでもしぶとくキメイラの頭部と上胸部が残っていたが…

「しぶといわね…これで、終わりよ！　ラストスペルブレイカー！」

プレシアが自身の魔力全てを使い果たしブレイカーを放った。
今までのデバイスでは無理に自身の魔力を使い果たしていたが
ケラウノスのおかげで調整され、命に関わるまでの消耗はなくなり、
威力が更に増した。

「ガアァオォ～～！！」

断末魔の叫びをあげながらエビルキメイラは閃光の中で欠片も残らず消滅した。
これで…エビルキメイラとの戦いは終わった。

「……」

突然ゼスト達のバリアジャケットがフルドライブモードから通常モードに戻り
力なく海面へと４人とも墜落していった。

「あっ！？」

だが、間一髪で白天王が４人共すくい上げる。
プレシアも魔力を使いきってはいたが最低限浮かぶだけの魔力は残していたらしく。
力弱く飛びながら白天王へと降り立った。

「……ぐっ、分かってはいたが…」
「ははっ…ものすごい脱力感ね…」

白天王の上で４人とも力なく崩れ倒れてしまった、プレシアも辛そうだ。

「皆さん、大丈夫ですか!?」
「すぐにシャマルに!」
「いや、心配には及ばないよなのはちゃん、はやてちゃん…それにこれは回復魔法じゃ治らない」
「えぇ、ただ魔力を使いきっただけだもの…私達のフルドライブモードの副作用ね」
苦笑するゼスト達。

「私達の事より、クロスの事を…お願い」
「あぁ、イリスにまだどんな能力があるかわからないからな」
「はい!」

力強く答え、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータの5人は
イリスと戦うクロスの元へと飛んで行った。
メガーヌの召喚した白天王はしばらく存在出来るらしく
ゼスト達を陸地へと運んで行ったあとで静かに戻って行った。

「さてと…後はイリスだけ、少しでもクロスの役に立ちたかったけど…」
「あとは若い子達に任せましょう」
「あら、私から見ればゼスト隊長以外みんなすごく若いわよ?」
「むっ…確かに俺は老け顔だが…」
「あ、隊長やっぱり気にしてたんですか?」
「……」

ちなみに上からクイント、メガーヌ、プレシア、ゼスト、ティーダの順だ。
未だに邪神イリスが残ってはいるが…それでもゼスト達は信じてい

た。

必ずクロスなら邪神を倒せると…

続く

第５２話　「天使　ＶＳ　邪神」（後書き）

クロス：「…長いなぁ、この小説にしては」

カガヤ：「そうかもね…戦闘描写を詳しく書きたかったから」

ノア：「んでも…薄っぺらかったりわかりにくかったり？」

カガヤ：「…ｏｒｚ」

クロス：「そんなんだからこれだけ話数投稿してもアクセス数も感想も増えないんだぞ？」

カガヤ：「グサグサ！」

ノア：「そーいえば、新作と礼のアレはいつ書くんですか？」

カガヤ：「ともかく３章を終わらしてだな…んで今悩んでいる事が」

クロス：「ほうほう？」

カガヤ：「今が？部なんだけど？部や？部を書くときに別投稿しようかそれとも、？部から続けて書こうか…また？部や？部別投稿するときはタイトル変えようかどうか…」

ノア：「なるほど…でもですね、駄作者（ニコニコ）」

カガヤ：「は、はい？ナンデショウ？（汗）」

ノア：「?部が終わるまであと何章何話分くらいある予定?（ニコニコ）」

カガヤ：「あ、あと3章全部で多くて５０話くらいが?部である予定です（滝汗）」

ノア：「そんな先の心配より早く?部終わらせろ～!!!（ドカッバキッ）」

カガヤ：「アギャーーーー!?」

クロス：「……はい、感想とか質問とか待ってマース、本当にまってまーっす（汗）」

第５３話　「哀しき決着」（前書き）

やーーっと3章戦闘終了…長かったぁ

アランとレギナス達の過去話やはやて達との私生活の過去話…色々

短編書く予定です

第５３話　「哀しき決着」

「…どうやらキメイラは倒したみたいだな」
『はい、反応消滅しました』
『あとはイリスのみだ』

ようやく、クロスはブレイカーの反動硬直が解け動けるようになった。
また同時にイリスの方も…コアからの完全再生を終えたようだ。

「ご丁寧にただ再生するだけじゃなかった、か」
『キメイラに回していた魔力を使って強化したようです』

イリスの姿は以前よりも獰猛さと凶暴さと攻撃性を増した姿となった。
所々に突起が増え、口からは鋭い牙をのぞかせ、４つに増えた目はクロスを睨みつけている。
突起の付いた触手も剣や槍、砲塔のような形へと変わっている。
手甲に刃をいくつも生やし、胸元の水晶体のコアも見るからに頑丈そうな外骨格に覆われ
背中の羽も４対８枚へと増えている。

「グルッ…」
「はっ！？」

一声唸ったかと思うと一瞬にしてクロスの眼の前へと移動し両腕の刃を振ってきた。

「転移！？」

『いや、ただ高速移動しただけだ……それも超高速でな』

一振り防いだだけで腕に鈍い衝撃が伝わる。
イリスは攻撃の手を止めずに目にもとまらぬ速さで腕と剣や槍のついた触手で襲いかかってきた。

「さっきより…また……手ごわい！」

クロスも槍と剣で応戦するが徐々に押され始める。

「なめる……な！」

宝玉から衝撃波を出しイリスを吹き飛ばす…がそれも少し後退させただけだ。
しかし、反撃するにはそれで十分。

「たあぁ！」

クロスは槍に付いたノズルを全開にしてイリスへと突き立てようとしたが…
イリスは突如黒い霧となって霧散した。

「なっ…に！？」
『上だ！』

レギナスの言葉と同時に上空からイリスが腕についた刃を振り降ろした。
その斬撃は一撃でクロスを両断出来る威力。
だが、黙って斬られるつもりはない。

「グオ？」

クロスは白い羽を撒き散らし、姿を消した。
イリスが高速移動で黒い霧となるなら、クロスは羽を残して瞬間移動をする。

「さーって…高速移動と瞬間移動の根競べだ！」

クロスが瞬間移動でイリスの死角から攻撃を仕掛ければ
イリスは高速移動でクロスの背後に周り攻撃をしかける。
瞬間移動、攻撃、高速移動、攻撃、瞬間移動……

「な、なんて戦いをしているんだ」

シグナムの言葉がこの場にいる全員の総意だ。
エビルキメイラを倒しクロスへの援護にかけつけたなのは達だが…
手が出せない。

「私よりも何倍も早い…」
「あぁ、悔しいけど援護もできねぇ」

力強くアイゼンを握りしめるヴィータ。
はやてはヴィータの頭に優しく手を置き

「そやけど、何も出来る事がないわけやない…しっかり目に焼き付けるんや」
「はやて…」

はやての眼は力強く、でも少しどこか悲しさも見える。

レギナスはイリスを倒せば消えてしまう。
勝って欲しい、けど勝てば大切な家族を1人失う事になる。
その事実が…どうしてもはやての心を揺さぶっている。

クロスとイリスの一進一退の攻防が続く、だがそれは突然訪れた。

「グルッ!?」

突然、イリスの動きが止まったのだ。

「…かかったな!」

イリスの正面に出たクロスのがニヤリと笑う。
見るとイリスの至る所にクロスが撒き散らした羽が付着していた。

「フェザーバインド…無駄に羽を散らしてたわけじゃないんだよ」
「グルオォ!?」
「極大光刃斬!」

両手の剣と槍を交差させると、交差した所から巨大な仙気剣が生み出された。
それをクロスは力の限りイリスのコアへと斬り降ろした。

ギャリギャリガリ…

何かをひっかくような音がしたが…イリスのコアは少し傷が入った程度のダメージ。

「極大光刃乱舞!」

そのまま、光の剣で幾度もなく斬りつけたが小さい傷が沢山付くだけで
一向に外骨格を破る気配を見せない。

「はぁ…はぁ……仕方ない」

そして、クロスは少し離れているなのは達へと向き

「なのは、フェイト、はやて！　俺にトリプルブレイカーを撃ってくれ！」
「え～!?」「な、なんで!?」「なんやて!?」

何をする気かわからないなのは達。

「いいから早く！　大丈夫、自殺するわけじゃない!!」
「「「は、はい!!」」」

なのは達は急いでブレイカーの準備を始めた。

『何をする気だ?』

レギナスの問いに無言で自身のデバイス達に指示を出す。
(イリスの魔力も使ったブレイカーでもあのコアは破れなかった…でも、皆の力を1つにすれば)
「ノア、ラファール、ミラノール、アレを使うぞ」
『まさか、アレって!』
＜ダメですマスター!＞
＜ラファールの言う通りです！　アレは自爆技ですらないんですよ!＞
「大丈夫だ、今の俺なら…やれる」

そう言ってクロスは3つのクラスの力が合わさった左手を見た。

『なんだか知らないが、一体お前らはいくつ切り札を持っているんだ…』

呆れながらのレギナスの言葉にクロスは得意げに笑いながら

「あっはっはっ～切り札はいくつも持ってこその切り札さ…」

が、直後に冷や汗を流しながら

「と言ってももうこれ以上は切り札ないけどな」

と呟いた。

「おい、何かするにしても早くしないとイリスがバインド解きそうだぞ！」

ヴィータに言われてイリスを見ると。

イリスに纏わりついている羽がドンドン弾き飛ばされていった。

「ちぃ！　なのは、フェイト、はやて…準備は？」

クロスは右手で支えながら左手を前に突き出した。

「う、うん……本当にいいの？」

「あぁ、俺を信じろ」

頬笑み返すクロスに覚悟を決めたなのは達は一斉に砲撃を放った。

「スターライト…」
「プラズマザンバー…」
「ラグナロク…」
「「「ブレイカー！！！」」」

3つの光は1つになり螺旋を描きながらクロスへと向かう。

「すぅ……いくぞ！！」

体中に現れた紋章が左手に集まっていく。
そして、左手は1つの巨大な弓へと変わった。
クリムゾンブリットとアスカロンが弓、エクスカリバーが矢になっている。
クロスの周りに羽が舞い散り…トリプルブレイカーを吸収していった。

「ぐぅ…さ、流石になのは達のはきついな…イリスのより吸収しやすいけど」

轟音と共にブレイカーの魔力を吸収した羽が次々とエクスカリバーの矢へと吸い込まれる。
しかし、それよりも早くイリスがフェザーバインドを打ち破った。

「グルオォ～！！！！」

怒声と共にブレイカーを吸収中で無防備なクロスへと刃を振りかざす。

「させるかよ！！　ギガントシュラーク！！」

ヴィータが巨大な鉄槌で迎え撃つ、だが相手が悪すぎた。
徐々にアイゼンにヒビが入り、押され始めた。

「飛龍一閃！！」

シグナムがイリスの顔めがけて放った一撃は、見事に４つの眼へと当たった。

「どんな生き物も眼は弱いものだ…っ！？」

その場を離脱しようとしたシグナムの眼に写ったのは…巨大な口といくつもの牙。
そして、閃光。

「ぐあぁぁぁ～！！！」

イリスの魔力砲。
レヴァンティンで防御をしたが、すぐに刀身が砕け散り、シグナムは光の中へ消えた。

「シグナム！？……（ゾクリッ）…っ？…がはっ！？」

アイゼンもイリスの剛腕によって砕かれ、そのまま腕に付いた刃でヴィータを斬り裂いた。
力なく海面へと落ちるヴィータ。
ブレイカーの発射中のなのは達ではどうする事もできない。

「シグナム！　ヴィータ！」

はやてがすぐに2人の魔力を確認すると、微かに感じた、どうやら生きてはいるようだ。

「……ちっくしょ～！！！」

クロスの叫びと共に羽が今まで以上に撒き散らされ…
そして、音が消えた…

「…出来た！」

クロスの左手全体が光を放ち、矢は黄金に輝いている。

「これが…俺達の全ての力だ、受け取れ！　究極雷光・ケラウノスだ！」

クロス、ノア、レギナス、なのは、フェイト、はやて…
6人の力が籠った矢はオリンポス十二神の頂点、ゼウスが持つ雷霆の如く翔ける。

「行け」
「行けっ…」
「「「「「いっけえぇ～！！！！」」」」」

何人もの声が重なり、それに後押しされるように黄金の矢はイリスのコアへと突き刺さり

ドゴオォーーン

この日何度目か分からない爆音を鳴り響かせた。

「ギュ…グルォロォ〜！」

イリスの今までにない程の叫び、微かな手ごたえ。
そして…煙の中から現れたのは…

「……決まっ…た」

下半身と左半身と右腕を失くしたイリスの姿が
コアを守っていた外骨格は後欠片もなく、コア自体も半分以上が砕けている。
クロスも反動が大きかったのか、血だらけの左腕をだらりと下げ、息も絶え絶えだ。

「もう、しばらくは騎士も闘士も銃士の力も使えないな…」

動かなくなった左腕に眼を落とし、すぐに右手でしっかりと槍を構え直す。

「最後の…トドメ、いくぞ…」
『待て！　イリスのコアが！』

レギナスに言われイリスのコアを凝視したクロスは息をのんだ。
コアが…周りの全てを吸収し、膨張しはじめている。

「なんだ？　何を集めている？」
『残留魔力です！　微かな魔力も全て吸い込んでいます！』
『まさか…自爆！？』

すでに何倍にも膨れ上がっている。

「させるか！　『待て！　今攻撃しても誘爆させるだけだ！』…ちい！」

魔力を十分に溜めこみ爆弾と化している今のコアに刺激を与えるだけでも大爆発を引き起こす。
その推定被害範囲は広範囲に及び次元震すら引き起こす程の威力だ。

「だったら…大気圏外まで押しだして！」

グングーニルに残った全ての仙気の羽と仙気を注ぎ込む。
魔力刃に全仙気が集まり矛と化した。

「これが俺たちに残された全てだ…いっくぞぉ！！」

グングーニルのノズルを限界以上にふかし、イリスのコアに向けて突撃。
コアに当たった仙気刃の矛はそのままイリスごと押し出し始めた。

「クロス君！」
「まさか…あのままイリスを大気圏外まで」
「そんな、心中する気なん！？」

茫然と見上げるなのは達、既に魔力はそこを付き浮かんでいるのがやっとの状態だ。
ヴィータとシグナムが海面へと浮かび上がってきた。

「はぁはぁ…クロスの羽に守られてなかったら…」「あぁ…死んでたな」

2人とも攻撃が当たる直前にクロスの仙気の羽に守られて致命傷を

避けていたのだ。
それでも2人とも戦闘不能な程の怪我をしている。
その2人が見上げる先で異様に赤い光を放つイリスを押し上げるクロスの姿が。

「あいつ…まさか死ぬ気か！」
「ぐっ、我らには何もできない…」

黙って見守る事しかできなかった。

「うおおおぉ～～！　リンディ艦長！　イリスが大気圏外まで行ったらアルカンシェルを！」
『アルカンシェルなら爆発させずに今のイリスを消滅させれます！』
『……わかったわ、イリスを運んだらすぐにそこから退避するのよ！』
「分かってますよ、こんな奴と心中する気はないですから」
『そうだな…ここまで来たら俺一人でも十分だな』
「『えっ？』」

いきなり輝光聖天からいつもの姿へと戻ったクロスとノア。
見上げた先ではグングーニルを構えたレギナスがイリスを押し上げている。

「な、何をするんだレギナス！」
「そうですよ！　1人でかっこつけですか！」
『かっこ…つけじゃない……大気圏外まで出たら離脱できないだろ？』
「ぐっ…」

レギナスの言う通り、もう体力も魔力も仙気も限界のクロスとノア。

大気圏外に運んだあとギアで離脱するつもりだったが…もうそれすら出来ない状態だった。

イリスと共に更に上空へと昇っていくレギナス。
声届かぬ所まで行ったレギナスはクロス達へと念話を飛ばした。

『それに…俺はどうせ……消える身だ、遠慮無くこんな役目が出来る』
『そんな……』
『……クロス、ノア様、なのは、フェイト…小さき勇者達よ』
『レギナス…お前と決着はいよいよ付かなかったな』
『何…お前には負ける気はしないが…勝てる気もしないさ』
『最後まで様付けだなんて…柄じゃないのよ、そういうのはマスターの役目、ね』
『くすっ、そうですね……主はやてとシグナム達を頼みます…』
『…あぁ』『任せて…』

『高町なのは、フェイト・テスタロッサ…2人共、主はやての良き友になれるだろうな…』
『うん、もうはやてちゃんとは友達だよ！　だから…』
『…だから……大丈夫だよ…』
『そっか…なら、安心だ…』

レギナスが今まで見た事もないような笑顔で笑ったと…4人は感じた。

『ゼスト、クイント、メガーヌ、ティーダ、プレシア…管理局の戦士達』
『一度くらいは本気でぶつかってみたかったな…』
『そいつは残念だったな…でもあんたの愛弟子は最高に強かったぜ、

ゼスト』
『当然よ、クロスは私達ゼスト隊の子供なのよ?』
『ははっ、クイントみたいな親に育てられたおかげであんな風に厳しく優しくなれたんだな…』
『そうね…でも、あなたもなかなかよ? もっとお話しして貴方の親の事も聞きたかったわね』
『あぁ、プレシア…貴方もいい母親だよ…フェイトの純真さを見てるとよくわかるよ』
『俺はつくづく戦う機会なくて良かったと思うぜ…何せ相性最悪そうだしな』
『あ~それは同感だ、きっと俺の圧勝だっただろうな…ティーダ』
まるでいたずら好きな子供のような笑顔が見えたゼスト達だった。

『シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ』
次にレギナスは守護騎士達へと念話を送った。
海面から浮かび上がったシグナムとヴィータ。
アルフとクロノをユーノに任せこちらに向かっている途中だったシャマルとザフィーラ。
ザフィーラはずっと戦闘の余波からアルフやシャマル達をガードしていたのだ。
4人共レギナスからの念話にもう全てを悟ったように辛そうに顔をゆがませている。

『シグナム、この世界は今までよりは血なまぐさい戦乱の世界じゃないはずだ…だから、これからは
…もう少し気楽にやれ。主と共に自分の幸せを見つけるのもいいものだぞ?』
『ふっ…考えさせてもらおう…ありがとう、幻槍の騎士よ』

『こちらこそ、お前のおかげで腕が鍛えられたんだからな、剣の騎士』

まるでいつものような別れの挨拶だった、またすぐにでも再会するかのような…

『ヴィータ、悪いな…いつも子供扱いして…お前の事は妹みたいに見ていたぞ』

『ふん、口うるさいのがいなくなって……いなくなって…せいせいだぞ、馬鹿兄貴!!』

『ははっ…今度からはクロスやノアにも甘えてみるのもいいぞ?』

2人の名が出ると涙を流しながら顔を赤くするヴィータ、まるで本当の兄妹のよう会話だ。

『シャマル、最後までお前のまともな料理が食べれなかったのが心残りの1つだな』

『も、もうレギナス!!』

『ははっ、冗談だ…早く料理うまくなってクロスやノア達にも振る舞ってやってくれ』

『……はい、絶対…あなたが食べれないのを後悔させるくらい美味しい料理作って見せます!』

涙目で微笑むシャマル、最後は笑顔で…共に戦ってきた家族を見送る。

『ザフィーラ、お前と飲む酒はうまかったが……主はやてが大人になるまでは控えろよ?』

『お前こそ、あちらでは酒を控えるんだな…うまいつまみがあるといいな』

『言ったな…これからはもっと飲み仲間が増えていくさ…戦友よ』

人型で眼を瞑りながらザフィーラは世間話で別れを告げた、居酒屋での会話のようだ。

『主はやて、リインフォース…聞こえますか？』

『っ！　き、聞こえてるでレギナス！』

『私にもはっきりと聞こえている！』

最後に地上で赤い光を押し上げる黄金の光を見上げているはやてとリインフォースに念話が入った。

『すみません…こんな形でお別れをする事になりました…』

『お別れって……そんな！』

『……クロスロードと姉上は？』

『無事です…彼らはもう力残っていないので俺が代わりにこいつに引導渡す役をもらったんです』

はやての眼から涙が毀れた、それはリインフォースの涙でもあった。突然涙を流し始めたはやてになのはとフェイトも黙っている。

『主はやて、あなたは自分の運命にも負けずに今までよく耐えきりました』

『そんなんちゃう！　レギナスが…皆がいてくれたからや！』

『ですがもう大丈夫、あなたの運命を縛るものはなくなります…これからは自由ですよ』

『自由やけど、そうかもしれへんけど…うぐっ…家族を失ってまで…得たいものやない！』

『……』

『出会いと別れ、それが人生の醍醐味ですよ主はやて、もっと…こ

れからも楽しんで生きてください』
『楽しんで…一緒に生きればええやん！　レギナスだってずっとずっと辛い想いしてきたんやろ！』
『…ですが、あなたに出会ってからの日々はそれすらも帳消しにしてくれました。もう十分です』
『レギナスぅ……ありがとう…』
『…リインフォース…』
『幻槍の騎士レギナス……今まで貴方と共に戦えた事を誇りに思う』

「イリスとレギナス……アルカンシェルの射程に…入りました」
アースラブリッジで淡々と何かを押し殺したようにエイミィが告げる。

「了解……アルカンシェル、発射！！！」

極めて冷静に努めてリンディが命令を下す…そして、アルカンシェルが放たれた。

「さてと…これで本当に最後だ…地獄への案内人は俺がしてやるよ」

勝ち誇った顔であがくイリスを見るレギナス。
レギナスの笑顔もイリスの断末魔も…
全てがアルカンシェルの空間湾曲と反応消滅へと飲みこまれた。

その時…

『いやいや、すまんが地獄へはイリスだけに行ってもらうぞ…』

レギナスは確かに聞こえた…数百年か数千年ぶりかに聞いた懐かしい声…

『これでもずっと息子を待ちわびていたのでな…なぁ、息子よ』

「ア、アラン……父上」

イリスは完全にこの世から消滅した…

地上ではクロスとノアがザフィーラに抱え上げられてゼストやなのは達の元へと降り立つ。

全員がボロボロだった…

『ま、まだ…倒れるなよノア』

『えぇ…私達にはまだやる事がありますからね』

足元がおぼつかないクロスとノアだが…まだ意識を失うわけにはいかない。

唯一怪我があまりないユーノ、シャマル、ザフィーラも回復や防御で魔力がほとんど残っていない。

アルフやクロノは回復魔法のおかげでどうにかなっている状態で長期入院が必要そうだ。

泣きじゃくるはやてやシグナム達が慰めている。

そして…1人空を見上げるリインフォース…

続く

（レギナス……すぐに…私も）

第53話　「哀しき決着」（後書き）

カガヤ「…やっと終わったぁ！」

クロス「終わったぁ～じゃないだろ！」

カガヤ「ん？　どしたの？」

ノア「最後のあれなんですか！」

カガヤ「……さぁ？」

ノア「……（怒）」

カガヤ「さ、さーってボロ出ないうちに今日はここまで！　感想などドシドシ送って下さい♪」

第５４話　「最後の旅」（前書き）

カガヤ「……（　。　ρ　。）ボーーーー」

クロス「……なにしてるんだ？（汗）」

カガヤ「レビューってのがこれだけ恥かしいものだとは…褒め殺しにも程がありますぞ悠様！」

ノア「でもめっちゃくちゃ過大評価ありがとうございますね♪」

カガヤ「ゼスト隊がここまで活躍するとは思っていませんでした（笑）」

クロス「…なのはやフェイト完全にくってる時も多々あったしな（苦笑）」

カガヤ「でも…この結末は最初から決めていました……」

第５４話　「最後の旅」

アースラ　会議室

「死傷者の数極めて少数…しかも、ほとんど現場の人間のみ…建造物その他の被害…少数。
戦闘の余波で発生した高波で沿岸部に被害が出たが結界と修復作業のおかげで復元。
過去の闇の書関連事件でこれほど被害が少ないのはない…」

今会議室にはリンディ、エイミィ、クロノ、クロス、ゼスト隊がいる。
そして、レジアス少将とグレアム提督のモニターが開いている。

『が、一番の重傷者であるお前達がここにいていいのか？』

呆れ気味に話すレジアスの視線の先には…
体中包帯だらけのクロノ、クロノよりは少ないが包帯を巻き左手をつりさげているクロス。

「はい、問題ありません」
『いや、その格好で言われても説得力がないぞ？』

エイミィにツンツンと包帯を突かれながらも平然としているクロノ、脂汗が大量発生だが。

「俺は反動で少しの間左手の感覚なくなっただけで痛くも何ともないので大丈夫です」
『ふむ…まぁいいだろう』

イリス消滅確認後、後続のスタッフに現場処理を任せて全員一度アースラへと帰還した。
その際、はやてが突如意識を失い昏倒したが、リインやノア曰く

『初めての戦闘であれほどの魔力を行使したいのです、反動は大きい』
『癒しの魔法はかけましたけど、これは自然に眼が覚めるのを待つのが一番です』

との事なのでヴィータとザフィーラ、なのはとフェイトが看病して眠っている所だ。
シグナムとシャマルは事情聴取中。リインとノアも別室で……作業中。

あれからもう3日が経過していた。
なのはとフェイトとクロスは学校を休むと連絡はしてある。
その際になのはの家族には戻り次第大事な話があると付け加えている。
アリサやすずかも同様にしばらく戻れないが戻ったら話があると連絡済み。
その時にえらく心配されたが…特に混乱はしていないようだ。

『しかし…闇の書を滅ぼそうとする意気込みは買うが……やり方は賛同出来ませんな』

モニター越しにグレアムを睨むレジアス。

『ゼストやクロスの嘆願もあって処分保留中だが…個人的な問題には一切関与しませんぞ?』

『分かっています。例の件は…私が直接あの子と話をします。それで罪滅ぼしにはなりませんが』
「それで、はやてやシグナム達はどうなりそうですか？」
クロスは一番の心配ごとを尋ねた。
通常ならばもっと長い時間をかけて審査する事柄だが今回は事情が事情だ。
プレシアの時のような裏口は使ってはいない、ただ直接上層部が判断を下しただけだ。
『…蒐集に関する人的被害の一番は高町なのは君の一件だが…彼らは神獣を襲った』
「……」
『だが、管理局に関しては積極的に敵対意思を見せずに隠匿や逃走で済まそうとした。
襲われたのは君達だけだ。しかも、邪神イリスを消滅させるのに多大な貢献もしている。
以上を考慮すると…保護観察、管理局への従事が妥当だろう…それも比較的短い期間でだ』
「……ほっ」
『…そしてここからが重要だ』
レジアスの顔が更に真剣になる。
『八神はやてと守護騎士達の保護観察で済むが…高町なのは、フェイト・テスタロッサもだが
今回の功労者でもある彼女達を管理局としては是非に正式に所属してもらいたい…だが』
横目で睨むクロスに咳払いしつつレジアスが続ける。

「…分かってるよ……全部話すさ、俺の過去を」
「クロス…いいのね？」
「…無理しなくてもいいのよ？」

クイントとリンディがクロスの肩に手を置く。
ゼストの表情が硬くなる。

「まだ幼い彼女達に話すのは早すぎるとは思うが…管理局へ正式に入る覚悟を決めたならば…」
「…話さなければならない…か」
『うむ、わしも時期尚早とは思うが…管理局の現実を直視出来るほどの覚悟でなければ…
ただ利用されるだけで終わるからな』
「確かに、早い時期に話した方が…管理局に心酔してしまったら厄介だからな…」

レジアスとティーダも同意する。

『私も詳しくは聞かされてはいませんでしたが…そこまでなのですか』

眉間にしわをよせてグレアムが問う。

「ふっ、他人事のように言っていますが…貴方も巻き込みますよ、グレアム提督
今回の一件の個人的な感情は…それでチャラにします」
『……分かった。君を敵にまわすよりはマシだろう…私も覚悟を決めよう』

……こうして、壮大な計画は影で少しずつ動き出している。
全ては…遥かな未来の為に。

『さてと…次だ、ゼスト隊、アースラ隊は臨時ボーナスと特別休暇を出す。しばらくは休め』
「え？　わ、私達もですか？」
「ゼスト隊やクロスはわかりますけど」
突然のレジアスの指令にリンディやクロノは戸惑った。
『ゼスト隊にクロスやノアはしばらくまともに魔法すら使えない状態だからな…
ちょうどいい、地球でしばらく療養してこい、家族もそちらにおくる手配をしよう』
「ちょ、ちょっと待って下さいよ！　いくらなんでもそこまでは…」
ティーダが戸惑いの声をあげるがレジアスは特に気にも留めず。
「闇の書を解放して邪神イリスを倒す…これほどの功績に対しては当然だろう？」

『ちなみにゲンヤ達にはもう伝えてある』
「早すぎるっての！！」
『まぁ、しばらくは学校生活を満喫しろ』
頭を抱えるクロス、ゼストやクイント達も苦笑しっぱなしだ。
『それで…ノアがいないようだが。夜天の書の方はどうなんだ？』

レジアスの言葉に一気に場の空気が暗くなる。

『……そうか』

レジアスも何かを悟ったようだ。

「……くっ！！！」

ダンッ

突如クロスが壁を思いっきり殴り、会議室を飛びだした。

「クロス！！」

「リンディ艦長…今はそっとしておいてあげて…」

「クイント……」

『すまない…どうやら、余計な事を言ったようだ』

「いや……こればかりは俺達ではどうする事も出来ない」

「私たちは……無力ね」

クロスは走った。

走ってどうにかなるものではないのは分かっていたが走り出したら止まらない。

止まれば…眼に写る物を壊し始めてしまいそうだったからだ。

・　・　・

イリス消滅から1夜あけたアースラ

「消滅させて欲しいってどういう事だ！？」

リインフォースより自分を消滅させて欲しいと頼まれゼスト達は困惑した。

「邪神も封印プログラムも消滅した…だが長年イリスによって基礎構造が汚染され
闇の書としての機能を夜天の書へと変換できなくなっている…そして…」

「でも！　クロス君達が元に戻したんじゃ！」

なのはの言葉にクロスとノアが悲痛な表情をする。

「俺達は…闇の管制人格から権限を切り離してはやてを覚醒させただけだ……」

「本格的な夜天への修復は試みたけど…」

俯きながらクロスとノアが答える。

アースラへ帰還した後、クロスははやての事後診断をノアがリインの夜天への修復を行った。

初戦闘で多大な魔力を消耗したはやてに闇の書やイリスの汚染がないかを太極の書で診断したクロス。

闇の書としてのリインを完全に夜天の書へと光天の書のリカバリーシステムで修復しようとしたノア。

２人の作業の結果は両極端なものとなった。

はやては昏倒したのはただの過労で、魔力消耗は激しいが特に支障はないレベルで

闇の書の汚染も真の主に覚醒した際に消え、残っていた汚染部分も太極の書の力で完全に治療され、不自由だった足も早く完治する見込みとなった。

太極と光天、２つの書に夜天の書に万が一の事があった時の為の様々な処置方法が記載されていたのが幸いだった。
しかし…闇の書の完全修復は失敗に終わった。
リカバリーシステム自体が使えなかったのだ。
イリスの魔力汚染と防御プログラムを組み込んだ副作用により夜天の書は根本から改変が行われていたからだ…
夜天の書本来の姿も削除されている。
本来の姿のバックアップは太極と光天の書にもあるが…
基礎システム自体が変わっていれば変わる前用のリカバリーは通用しない。
しかもこのまま放置すれば闇の書本体は新たに防御プログラムを再構築すると言う。
それも…今度は封印対象であったイリスがいなくても暴走を起こす…
主はやての浸食も再会し…最悪周りの人間の魔力も自動蒐集してでも回復する…

「唯一の方法は…夜天の書のリセット…再構成……でもそれをすれば」
「リインやシグナムの人格もリセットされる…最後の手段」

壁を強く叩きクロスが呟く。

「もっと簡単な解決策がある。私を太極と光天の書で消滅させてくれれば…」
「だな、もう少しはやてと一緒に過ごしたかったけど」
「主はやてに何も問題がなく、足も治癒するというならば…」
「心残りはないわね…」
「……あぁ」
「なんで…なんでそんな風に思えるの！」
「そうだ！　諦めるなよ…せっかく、イリスも倒してはやてと一緒

にいられるんだぞ！」

シグナム達の言葉にノアとクロスが激昂する。

「こうなる可能性は…イリスを封印する時に覚悟きめてたさ」

「ヴィータ…」

「いや、行くのは私だけだ…守護騎士システムは切り離した。お前達は残って主の側にいてくれ」

「なっ…それでは！！」

「いいんだ！　シグナム…これも主はやてや姉上達のためだ」

「俺は認めない！　犠牲の上でしか成り立たない平穏なんて…絶対に認めない！」

「私も抗う！…レギナスの為にも……絶対にリインを救って見せる！！」

そうして、リインの言う防御プログラム再生開始期限の3日間が過ぎた。

その間クロスとノアは寝る間も惜しんで、書を調べリインを救う方法を模索した。

ユーノやプレシア、リーゼ姉妹も無限書庫で色々調べをしてくれた。

ゼスト隊にアースラスタッフ、なのはやフェイトも総出でデータの整理も行い。

闇の書の解析にも全力を注いだ。

しかし……瞬く間に時間が来てしまった。

・　・　・

ガン　ガンガンッ！！

＜マスター！　止めてください！！＞

休憩室に壁を叩く音が響く。
ラファールの声も無視しクロスが頭を…右手を壁へと叩きつけている音だ。

「くそっ…くそっ！　レギナスに続いてリインまで犠牲にしなきゃならないのかよ！！」
＜右手が真っ赤ですよ！　自分を責めないでください！＞

右手は皮膚が裂け血がにじんで真っ赤になっている。
悔しさのあまり…涙がこぼれる。
誰かを犠牲する…それはクロスが最も嫌う解決策だ。

「…クロス君！　何をしているの！」
「やめて、クロス！！」

通りかかったなのはとフェイトがクロスを止める。

「俺は…俺は太極の書の主だ！　夜天の書の知識も持っている！なのに…なんで救えない」
「やめて……やめてよ！　それ以上はクロス君が壊れちゃう！」
「ノアが…せっかく、再会出来たっていうのに。はやても…2人も家族を失うのかよ！！」
「クロス！…ともかく落ちついて……ね？」

見るとなのはとフェイトも泣いていた。

「お願いだから…やめてよ…ひぐっ…クロス君がこれ以上傷付くのは見たくないよ…」

「クロス……自分を傷つけてもなんの意味もない……だから、やめて…」
「なのは…フェイト、ごめんな…2人共」
傷だらけの右手で2人の涙をぬぐう。
なのはとフェイトはそっとその手を握った。

「…私達は…何も出来ないし何も分からないけど…」
「でも、クロスが…自分を責める必要がないのはわかってる…だから、責めないで」

「…そうだ、お前が自分を責める必要などどこにもないぞ、太極の主よ」
「リイン…フォース…」

リインフォースと肩で泣き腫らしているノアがやってきた。
後ろにはシグナムとヴィータも一緒だ。
リインはしゃがみこむクロスを抱き締め

「…お前達のおかげで…私は本当の自分を取り戻す事が出来て主も救う事が出来た」
「でも…お前は救えない！　レギナスも救えなかった!!」
「レギナスは…救えた。それはお前が一番分かっているはずだろ?」
「…えっ」

シグナムの言葉にクロスは顔を上げる。

「我らもリインフォースも与えられた役目を思い出し、邪神イリスを撃ち倒す事ができた」
「もし、あのまま闇の書の蒐集続けてたら…はやても誰も救えなか

った…だから…」

感謝してるんだぞ、と顔を真っ赤にしながら小声で言うヴィータについ噴き出してしまった
それに釣られたのかなのはやフェイト、シグナム達まで笑いだした。

「あっ…こらっ！　なんで笑うんだ！　ブッ飛ばすぞ！！／／／」
「ごめんごめん……そう…だな、救えなかった、だなんて…本人に失礼だよな」

ノアも涙をぬぐい、笑顔を見せ

「そうですね、可愛い妹の最後の旅立ち……盛大に見送りです！」

みんなに笑顔が戻った。それは確かに別れだ…でも悲しみだけの別れにはしたくない。
それが…その場にいる全員の想いだった。

（あとは…はやての意識が戻れば…だな）

最後の夜天の主、八神はやてはまだ眠ったまま…
リインフォースを…最後の旅へと送る事となった。

続く

第５４話　「最後の旅」（後書き）

クロス「やっと死闘が終わったと思えば…これか」

カガヤ「うーん…こればっかりはね。最初から決めていたから…でも絶対に必要な事だし」

ノア「なんとかならなかったんですか？」

カガヤ「闇の書本体が汚染されすぎてて１から作り直さなきゃ元に戻らないレベル…だからなぁ。いくら太極と光天の書でも無理」

ノア「そんな……」

カガヤ「設定に粗やミスや矛盾があるとは思いますが…独自設定やマイナス面でのご都合主義の部分もあるのでご了承ください」

第５５話　「リインフォース」（前書き）

カガヤ「……ニコニコ動画で涙腺崩壊の曲やＭＡＤを聞きながら作りました」

カガヤ「やっぱりインスピレーションは大事ですね」

第５５話　「リインフォース」

Ｓｉｄｅ　はやて

朝の日差しが眩しい…
ゆっくりと目を開けるとカーテンの隙間からちょうど太陽が昇ってくるのが見える。
さて、布団のぬくもりが恋しいけど、今日も一日のスタートや♪
って呑気にしてる場合やない。急いで朝食の準備準備っと

７人分の朝食ともなると結構時間かかるんよ…でもその時間が幸せの時間なんやけどな♪
リビングに出るとソファーでザフィーラが眠っているのが見えた。
気持ちよさそうやな～…でもちゃんとベッドで寝ないとあかんで？
一瞬犬小屋を買おうかとも考えたけど……それはザフィーラに失礼やな（汗）

「んっ…おはようございます、主」
「おはようさん、御飯これから作るからもう少し寝ててもええよ」

庭からは何かを打ち合う音が聞こえてくる。
シグナムとレギナスがまた軽い修練でもしてるのかな？
キッチンへ行くと…

「あ、はやて…おふぁよ～…」
「おはようヴィータ、牛乳温めてたんか？」
「……うん」

そこには先客、ヴィータが牛乳を温めてた。

今日は冷えるから、あったかい飲み物が欲しいなるもんな。
でもヴィータ、ちゃんと見てなあかんよ？　鍋の牛乳沸騰しとるで
（ー＿ー；）

「うおぉ～！？　ぎゅ、牛乳がぁ～」
「あ、あはは…少し冷ましてから飲もな」

さてと…昨日は洋風だったから今日は和風で…肉じゃがにしよか♪
調理をしていると廊下からどたばたとした足音が、これはシャマルや♪

「ごめんなさい！　寝坊しちゃって…昨日、ビデオ見過ぎちゃって…」
「気にせんでもええよ、ゆっくり休んでてな」
「あ～そう言えば昨日熱心に料理番組のビデオみてたっけなぁ」
「ヴィ、ヴィータちゃん！？　見てたの！？」
「夜中に起きた時にばっちり…「ヴィータ、それまだ！」…あっつ！！」
「なっ…ぐ、あああぁ！？」

ヴィータが凄くいい笑顔でサムズアップをしたけど…
さっきまで沸騰してた牛乳を飲んで…
放り投げたコップが綺麗にザフィーラの頭に…あぁ、大惨事や。
普通はコップについだ時に気付くもんやのに…
ザフィーラが人型になって洗面所へと駆けこんだ…御愁傷様（ー。ー；）

「ヴィータちゃん、ザフィーラ！？」
「％‘％＆$＆！？」
「シャマル。こ、氷や！　はよ冷やさんと！」

「はい！」

ヴィータの舌を冷やしていると…

「…騒がしいですね」

「何やらヴィータとザフィーラのすごい悲鳴が聞こえたが」

「朝から楽しそうだな、ヴィータ」

「あ、リインフォース。散歩に行ってたんか？　シグナムにレギナスも3人共おはよう」

「おはようございます。主はやて、それにシャマルに……ヴィ、ヴィータ」

「……おふぁよう」

その後シャマルに回復魔法をかけてもらって復活したザフィーラも戻ってきて

ようやく朝御飯。

ちなみにシャマルが料理てつどうてくれるはずやったんやけど…

リインとレギナスに全力で阻止されて凹んでしもうた…ちょっと可愛そうやな。

「う～ん、はやての御飯はギガうまい！」

「ヴィータ、美味しいからとそんなにかきこんでは…」

「ケホッ、ゲホッ」

「…喉がつまる…と、手遅れか」

喉を詰まらせたヴィータの背中をさするレギナスとリイン。

ええなぁ…兄妹3人な絵になって。

シグナムとシャマルも笑ってる、ザフィーラは黙々と御飯を…ってクールやな。

これがいつもの我が家の朝の風景……あれ？

なんやろ、この違和感……

『はやて…』

いきなり、どこからか声が聞こえてきた。

『はや…て、眼を覚　すんだ…でないと……』

だ、誰や!?

『リイン……が』

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

アースラ　医務室

「リインがどうしたって言うんや!?」

「わっ!?…び、びっくりしたわ…」

眠っていたはやてがいきなり眼を覚ましたので様子を見に来ていたリンディがびっくりしてしまった。

横にはクイントもいる。

「・・・あれ？　ここは？　今の…夢？」

（…そやろうな…リインがおったもんな……でも、なんであんな夢を？）

「はやてちゃん？　大丈夫？？」

「はい…あの～？」

「あ、ごめんなさい。私はこの船、アースラの艦長のリンディよ。

よろしくね」

「私はクロスの母、クイントよ。改めてよろしく、はやてちゃん♪」

差し出された手をはやてはしっかりと握った。

暖かい、少し昔に確かに感じた……母のようなぬくもりを持った手だった。

「それで……みんなはどこにいるんですか？」

その言葉に2人は黙って顔を見合わせたが、やがて意を決したように話した。

「はやてちゃん、今から言う事を…しっかり聞いてね」

そうして2人の口から語られた事。

闇の防衛システムを完全に消滅させる為にリインフォースを削除する事を。

はやてに……黙って消えようとしている事を。

「そんな……リインフォース！！」

ベットから飛び出しそうな勢いのはやてをクイントがとめた。

「離して下さい！　リインが…リインフォースが！！」

「分かってるわ…私が連れていくから、行きましょう」

クイントの諭すような言葉と笑顔にはやては少し冷静になり、頷いた。

・　・　・

・

海鳴市のとある丘

今、クロス達はリインフォースの最後の見送りの為に集まっている。

「…はやてに黙っていくつもりか？」

「はやてちゃん…悲しみますよ？」

「そうだな。しかし、これ以上はもう時間がない…」

クロスとノアの問いに少し悲しげに答えるリイン。

「お前の方こそ手は大丈夫か、クロスロード」

「…これくらい、なんでもない」

手に巻かれた包帯が一瞬で燃え盛り、自由になった左手を動かして見せるクロス。

「…そうか」

リインはうっすらと笑みを浮かべ、儀式は始まった。

リインを中心にクロス、ノア、シグナム達の三人を頂点に三角の白い魔法陣が現れる。

そして、それらを包むように紅と蒼の魔法陣が包み込む。

「まずは…太極と光天でリインフォースから完全に守護騎士システムを切り離す」

＜コマンド、開始＞

＜５％……１０％……１５％…＞

「ラファールにミラノール、だったな…私の代わりに姉上達を頼む」

＜…はい＞

＜コマンド…受領しました＞

ラファールとミラノールの声にも行き場のない悲しみがうかがえる。
クロスとノアの前に開かれた太極と光天の書から光の帯が伸び
リインの持つ闇の書とシグナム達を包み込む。

「守護騎士システム、切り離し…完了」

事務的に淡々と言うノア、しかし眼には涙が浮かんでいる。

「続けて、闇の書本体と管制人格…・・・削除を・・・」

クロスが言葉を続けたが…最後まで言い切れない。
言葉が…続かない。

「リインフォースさん…」
「クロス…ノア…」

なのはとフェイトも眼に涙を浮かべているが、それでも眼を逸らす事はしない。
シグナムやゼスト達も黙って見守ってる。
ほんの数秒間の静寂。

「リインフォース!!　みんな、やめて!!」
「っ!?　主はやて!」

その静寂を破るようにクイントと車椅子に乗ったはやてがやってきた。

「はやて…」

「…動くな！　まだ儀式の途中だ」
＜７０％…７５％…＞
はやてへ駆け出しそうになったヴィータをリインが止める。
「なんで…なんで破壊なんて！　私が……私がちゃんと制御する！　だからやめてえぇ！！」
「主はやて、私は…幸せでした…あなたと出会い、呪われた運命からも解放されて…」
「せやから！　これからもっと幸せに…リインのいきたいように生きれるんやんか！！
　お姉ちゃんにだって再会出来て、シグナム達とも笑って暮らせるようになったんやないか！」
はやての悲痛な叫びが木霊する。
リインに駆け寄ろうしたが車いすがつまずき、はやてが転げ落ちた。
「はやてちゃん！」「はやて！」
なのはとフェイトが駆け寄りはやてを抱き起こす。
「……」
クロスが無言で手をかざすと、淡い光がはやてを包みこんだ。
「クロス、くん？…あ、歩ける…？」
自分の足で立って動けるようになったのを感じたはやてが驚きながらもクロスを見る。
クロスは黙って魔法陣の中心を見据えながら、顔を少し動かしリイ

ンへと促した。
それを見てはやてはリインへと走った。

「リインフォース！」
「あ、主はやて…クロスロード…お前は」
「……儀式は完了した。時間は…あと少し」

そう言ってクロスはリイン達に背を向け、指をパチンと鳴らした。

「…あっ、マスター…」

見ると、ノアの大きさがヴィータより少し大きくなっていた。
クロスが自分の仙気をノアへと送り、大きさを変えたのだ。
はやてとノアとリイン…3人にちゃんと別れをさせるために。
魔法陣が消え、リインとはやてとノアは並んで丘から街を見下ろす。

「…主はやて、覚えていますかこの場所を」
「忘れるわけないやろ…私達の、お気に入りの場所や」

この場所は公園から少し離れた場所にあり街が一望できる丘。

「ここで眺めた夕日は…綺麗でした」
「うん……うん」
「意思の具現化や疎通が出来ずに本のままの私をよく色々連れ出してくれました」
「ふふっ、最初はすぐに浮かんでしまうから周りにばれないかとヒヤヒヤだったで」
「くすっ、申し訳ありませんでした…私には全てが新鮮だったのです。
戦いもなく平和な街で…様々な事を教えられ、本のままでも私は

充実していました
　姉上も…そうだったのでしょう？」

リインはノアへと眼を向ける。

「う、うん…最初は色々嫌な思いもしたけど…でも」

ノアは振り返り今だ背を向けるクロスとこちらを優しく見守るクイント達を見まわした。

「マスターと母さん達に出会って、なのはちゃんやフェイトちゃんやティアナにも出会えて
　スバルにギンガという妹も出来て…すごく、幸せな毎日だよ」
「姉上ならいいお姉さんぶりを発揮しているでしょうね」
「あ、リイン…ひょっとして妬いてる？　スバルにギンガもリインに負けないくらい可愛いからねぇ」
「えぇ、写真を見せてもらいましたから…でも、私にも新しい家族にができましたのでお相子です」

自分の横に立つ幼い主の頭を優しく撫でる。

「申し訳ありませんでした、姉上。本来の役目を忘れたばかりか…その役目すら全う出来ず」
「それはもういいの！　私だって…リインやシグナムの事忘れてたんだから、おあいこだよ♪」
「…主はやて、幸せな思い出を綺麗な名前を…ありがとうございました」

リインの足が消え始めていた。

「…レギナスもリインも……そんな笑顔で別れなんて言われたら…私…私！」
「主はやて…確かに私の肉体は消えます。でも心は…あなたの魂に残ります」
リインははやての胸元を指さし、鎖に繋がれた十字型の紋章を手渡した。

「これを、私の知識が詰まった紋章です。これを使って新たな魔導の器を作った時に…
祝福の風リインフォースの名を与えてください」
「リインフォース…」
「リイン…」

はやてとノアは涙を堪え、リインを見つめる。
「…守護騎士達」
「……」
「もうお前達を縛るものは何もない。私とレギナスの事を思うのならば…精一杯幸せに生きてくれ」
「あぁ…」「…リインフォース」「……ありがとう」「…さらばだ」

「クロスロード…新たな太極の主、小さな勇者達」
「…あぁ」
「リインフォースさん」
「はい」

クロスはゆっくりとリインへと顔を向け、なのはとフェイトも近付いてきた。
リインはもう胸元まで消えている。

「3人共…ありがとう。主はやてと騎士達、それと…私の姉をよろしく頼む」
「全く…レギナスにも頼まれたけどさぁ……そんなの頼まれるまでもない」

クロスはいたずらっぽく笑い、真顔になって

「だから……安心して、旅立ってくれ。化けて出るなよ？」
「ふふっ…」
「やっと、見れたなお前の笑顔……ノアに似て可愛いいい笑顔だな」
「……ありがとう。そう言われるのは…初めてだ」
「リインフォースさん…その……」
「ありがとう、高町。私を気遣うその心だけで十分だ」
「…良い旅を」
「あぁ、ありがとうテスタロッサ。家族を大切にな」

ゼスト達も寄ってきて、リインと無言で握手を交わした。
その顔は…戦友を讃える顔だった。

そして、最後にノアとはやての頭を笑顔で撫でながら…

「……リイン…」
「リイン…フォース……リイン…フォース！！　うあああぁぁぁ～～」
「リイーーン……っぐ…ひぐっ」

はやてとノアの泣き声を残して
リインフォースは消滅した。

≪ありがとう。そして、さようなら≫

続く

第５５話　「リインフォース」（後書き）

カガヤ「…出来たぁ」

ノア「リイン…」

クロス「……」

カガヤ「連載開始前から決まってた結末とは言え…」

クロス「どうしようもない…からなぁ」

カガヤ「ご都合主義はプレシアでしちゃったようなものだから…」

ノア「でも、これでいいです…ちゃんと別れ出来たんですから」

カガヤ「だな…それじゃ、感想やら色々待ってます！」

第５６話　「それぞれの道」（前書き）

カガヤ「１つの節目を終えて…少し燃え尽きてました（笑）」

クロス「やっと念願のギャグ編に行けるんだから…がんばれよ」

ノア「私の暗躍もさせてください～」

クロス「いや、それはいい（汗）」

第５６話　「それぞれの道」

リインが旅立ち、はやてとノアが落ち着くのを待ってクロス達は帰宅した。
ゼスト、プレシア、ユーノは用事があるらしく本局へと戻った。

「さてと、それじゃあ…（ドサッ）……ドサっ？」

今後の事を話そうとした矢先にクロスが突然倒れ込んだ。

「ク、クロスくん！？」
「どうしたの！？」

みんなが慌てる中……

グゥ～

「「「「「……」」」」」
「……はらへったあぁ～……」
「そう言えば…ろくに食べてませんでしたね、マスター」

ノアの言う通り、クロスはリインを助ける為に
３日間ろくに休まず食事も必要最低限で済ませていた。
魔力も気力も体力も極限以上に消耗した中では到底持つわけがなかった。
クイントやプレシア達が休むようにと幾度か声をかけたが

『時間が……ない、から…』

と言い、今まで無理をしてきた。そのつけがこの程度で済んだのはむしろ幸運だろう。

「はぁ…全く…だから言ったのに」
「今更言っても仕方ないわよ。それじゃ急いで作るから、クロスは休んでなさい」
「そうね、はやてちゃん達も休んでて良いわよ。お昼食べていくでしょう？」
「あ、ありがとうございます」
「それじゃ私が手伝い…「「それは絶対にダメ！」」……ません（涙）」

はやて達の必死の静止に凹むシャマルに苦笑するクロス達。

「ごめん…御飯出来たら、呼んで」
「……」

そして、ふらふらと自分の部屋へ戻るクロスを見送ってから
何事か考え込んだノアがなのは達の元へと…

・
・
・

「クロス君、起きてクロス君」
「あ、エイミィさん…」
「よく寝ている所悪いんだけど、昼御飯出来たわよ♪」

眠り眼で居間へと来たクロスの眼の前には、料理が山のように積まれていた。

「うっわぁ～…」

「私達は先に済ませたから、これ全部クロスの分よ」
「お、やった！　ノアも済ませたの？」
「はい、満腹ですよ♪」
「…これだけの量を…1人で」

シャマルが文字通り料理の山を見て、クロスも驚くと思っていたが

「ふふっ、どう？…足りる？」
「「「「…えっ？」」」」
「…多分、足りるんじゃないかなぁ…」
「「「「…えぇっ！？？」」」」
「あはは、まぁ育ち盛りってのもあるし。仙気はカロリー消費が激しいからな」

驚くはやて達にティーダは苦笑しつつ。

「これから一緒に飛んだり、戦ったりする気なら…こういう光景はすぐに見慣れるさ」
「…あっ……」

その言葉に考え込むはやて、しかしすぐに笑顔になり

「そうですね♪」

と答えた。

「いっただきま～す！」

クロスは料理の山へと突撃する。
その勢いにただただ驚愕するシグナム達、そしてなぜか緊張してい

るなのは達。

「んっ…これって母さんとメガーヌさんと……オーリスさんの料理？」

「えぇ、そうよ。レジアス少将が送ってくれたの、オーリスが張りきっちゃったみたいで」

クイントやメガーヌの同期でレジアスの娘であるオーリス・ゲイス。
彼女はなぜかクロスがお気に入りで、クイントやレジアスからの悩みの種でもある。
クイント達同期が次々と相手を見つけ結婚までしていく中少し焦っているのかもしれない。
だが…クロスに手を出そうとするのは色々な意味で問題だ。
そして、それを知ったプレシアがライバル心を密かに燃やしているのは本人だけの秘密。
流石のノアもクロスとオーリスがくっつくのは反対している。

「そっか、今度御礼に行かないとなー…拗ねたらおっさんに被害いくし」

苦笑しながらも、次々と料理をかき込んでいくクロス。
だけど、途中で手が止まった。

「ん？　これは…あ、こっちも、これも…誰が作ったんだ？」

クイントやメガーヌ達が作ったのとはまた変わった味付けの料理を見つけ不思議がるクロスに
なのは達がクイントに背をされてクロスの前にとやってきて

「あ、あの！…これ、私達が作ったの」

「まだ、あるから…」
「どんどん食べてな♪」
「あ、あぁ…」

モグモグ
ドキドキドキ（・ω・。）　ジーッ×３
モグモグモグモグ（￣ー；）
ドキドキドキドキドキ（・ω・＊）　ジーッ×４

「ってそんな凝視されてたら食べにくいっての！！　なんでノアまで凝視さ！」
「あ、あはは……ご、ごめんなさい」
「いやぁ～すごい食べっぷりだったから…つい？」
「はぁ…残さず食べるから大丈夫だっての。こんな美味しい料理なんだから」
「「「ホント！？」」」
「うぇ！？」
「「「ホントに美味しい！？」」」
「あ、あぁ、美味しいよ？」
「「「良かったぁ…」」」

ホッと胸をなでおろすなのは達３人にわけがわからない様子のクロス。
クイント達はくすくすと笑いあっている。

「なのはちゃん達がね、何かクロスに恩返し出来る事ないかって言ってきたのよ」
「そこで私が手料理をおススメしたんですよ」

えっへんと胸を張るノア。

「恩返し、って今回は俺も結構助けられたからそんなのお相子…」
「それは違う」

クロスの言葉を遮ってはやてがクロスの前へと進んで

「助けたり助けられたりは当たり前や、でもそれでも御礼はしたいんや…私に出来る恩返し。
リインとのお別れさせてくれて……ありがとうな」
「はやて…」
「クロス君やろ？　私を起こしてくれたのは、夢の中で私を呼ぶ声が、クロス君の声がしたんや」
「……」

クロスは肯定も否定せず、ただ黙っている。

「それだけやない、お別れの時も私に魔法かけて歩かせてくれたり…それも含めた色々や」

恥かしそうにほほ笑むはやてにクロスも眼を細める。

「私とフェイトちゃんもそうだよ。結局クロス君に最後まかせっきりになっちゃったし…」
「それと、これからも一緒に働く事になるから、それの挨拶も兼ねて、だよ」
「…なのは、フェイト、2人とも決めたのか？」

真剣な表情で頷く2人。
クイント達には話したが、改めてクロスにこれからの事を話す。

「…今回の件でクイントさんやリンディさん達に聞いたの。ロストロギアに関わる事件は
いつもこんな悲しい結末を迎える事が多いって…それをクロスは少しでもいい方向へと
母さんの時のように色々頑張って…無茶もしてるって」
「……」
「本当はそんなの止めたいんだけど、でもクロス君は絶対に聞かないだろうし
それじゃ本当の解決にはならないから、だから決めたの。私達がどうすればいいかを」
「私は管理局に迷惑をかけた罪滅ぼし…っちゅうのもあるけど。それ以上にせっかくリインが
残してくれた力があるんやから、この力をもっともっと使いこなせるようになって
それで少しでも多くの人の助けになりたいんや…」
「だから、私は自分の魔法を、自分の思いをたくさんの人に伝えたいから…
武装隊に入って戦技教導官を目指します」
「私は執務官になって、今回みたいな事件を未然に防いだり犠牲を少なくしたりしたいんだ」
「私は～…あかん、私だけ特に決まってなかったぁ…でも、これから決めていくつもりや！」
「我ら守護騎士も当然主はやてと共に管理局で尽力するつもりだ」
なのは達の意思は固い、それは眼を見れば明らかだ。
本心では止めたい。もう管理局とは関わらせたくない、そう思うクロスだが…
「クロス、3人共もう覚悟も決意も固めてるわ…あなたが悩む事じゃないでしょ？」

「それに…もうクロスだって決めたんだろ？　なら今さら考える事ないさ」

クイントとティーダに促され改めてクロスはなのは達に向き直った。

「うん…なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ
…これからも、よろしく！」

「うん！　あの時の誓いも含めてこれで2回目だけどね」

「それでも、改めてよろしく、クロス」

「うちらから見たら…クロス君やなのはちゃん達は先輩やな♪」

「こちらこそよろしく頼む、それといずれ手合わせをしたいな」

「ふん！……よろしく」

「ヴィータちゃんったら…よろしくね、クロス君」

「よろしく頼む」

「…良かったです…グスッ」

見るとノアは今にも泣きだしそうで、メガーヌがそっと頭を撫でた。

「今回の一件ではまだ姉上にも償い切れない事をしてしまいました…」

「その借りは……一生かかっても必ず返す」

「ちょ、2人とも！　それはもういいってば…皆で一緒にいられるんですから♪」

新たな友達、仲間、そして…家族。

戦いの度に広がる絆、その絆はいずれ大きな輪となり変革をもたらすだろう。

「さて、それじゃクロス君早く食べちゃって。午後から士郎さん達

が来るのよ」
「あ、そうだった…アリサちゃん達もね」
「……うん、ちゃんと説明しないとね…これからの事も」

なのはの今後の事も含めて、士郎や桃子、なのはの家族に説明しなければならない。
アリサやすずかにもちゃんと説明する。
これにはレジアスも最初は渋い顔をしたが、現地協力者が必要だという事になり
魔法や管理局の重大な機密以外は明かしてもいいと言う事になった。

午後……士郎やアリサ達がやってきた。
士郎達はなぜ呼ばれたのかは知らされていなく
ただ大事な話があるからとなのはに言われてきただけであった。
そして、リンディやクイントが説明を始めた。
管理局と魔法の事、自分達の正体、なのはの将来。
桃子や美由希はすぐに受け入れたが、士郎や恭也は半信半疑でノアやザフィーラの姿を見たり
クロスが簡単な魔法を見せた事でようやく納得した。
特に美由希はティーダが魔導師だった事になぜか感動したらしく色々聞いてきて
機密に触れない程度に自分の事を色々話している。
クイントとノアがその光景をニヤニヤしてみていたが…
アリサとすずかは実際に見ていた為それほど驚きはなかったが
自分達に黙っていた事にも気にも留めていなかったようで
なのはとフェイトは安堵した。
そして、フェイトとクロスは今度も中学卒業まで学校に通う事とはやてが来春から復学出来る事もその時明かされたが…

「ちょっと待って！　フェイトはともかく…俺はもう学校には通わ

ない」
「えぇ～！！？」
「あら、学校は嫌い？」
「そうじゃないけど…ただ」

エヴォリューダーとしての暴走。
それに伴いクロスは表には出していないが…精神が不安定になってきている。
だから、学校で暴走しないように、退学する予定でいた。
しかし、それをクイントが止めた。

「だからこそ、あなたは学校に通った方がいいわね。いい抑制剤代わりになるわよ？」
「…でも！」
「もし、何かあったら…私達が絶対に止めてみせるから」
「うん、だから…一緒に通おう？」
「うちもせっかく復学してもクロス君おらへんかったら…寂しいんや…」
「うっ……わかったよ…中学卒業まで学校でもよろしくな」
「「「うん！♪」」」

なのは達のウルウル視線に…クロス陥落。
その後、ゼストやプレシア達も戻ってきて、改めて自己紹介をして夕食を皆で取る事になった。
アルフやユーノやザフィーラがアリサとすずか達の玩具にされてたり美由希が昔遊んでいた人形の服をノアに着せかえたりゼストとメガーヌ、士郎と桃子の惚気合戦になったりと騒がしくも楽しい1日を過ごした。

なお、美由紀とティーダがこっそりと連絡を取り合う仲にまで発展し

ノアとエイミィが2人の仲を応援する事になるのだが……それはまた別の話。

続く

第５６話　「それぞれの道」（後書き）

カガヤ「はい、というわけで５６話！」

ノア「描写に手こずってたみたいですね…」

クロス「キャラ数も多いからなあ」

カガヤ「次は短編って形で補足的な話を少し書きます。１話の中に２，３話小話を入れるような形式で」

クロス「前言ってたやつ？」

カガヤ「それもあるけど…色々とな♪それとギャグではクロス、お前かなり壊れてもらうから、色々と」

クロス「えっ？俺…どうなるの？（汗）」

ノア「噂では…黒くなるとか、Ｓに目覚めるとか…固有結界発動するとか？」

クロス「ちょっ！　ってその前に設定を出すんだろ？ゼスト隊長達のデバイスとか」

カガヤ「うん、それさっきまで忘れてたから…書かないとな（汗）」

ノア「全く……こんな駄作者ですが叱咤激励感想、その他どしどし送って下さい」

カガヤ、クロス、ノア「「「まってまーっす！」」」

第57話　「真冬の怪談　メリーさんの電話？」（前書き）

今回から所々で短編「真冬の怪談シリーズ」を挟みます。
ホラーですが、怖くありません。完璧ギャグです。
クロスの性格が壊れてるかもしれません。
でも、これもクロスの性格の1つ…かもしれません。

第57話　「真冬の怪談　メリーさんの電話？」

第57話　「真冬の怪談　メリーさんの電話？」

「メリーさん？」
「そう！　メリーさんの電話！！」

クリスマスを間近に控え、校内の空気も浮ついてきた冬のある日。
傷も完全に癒え、年内は完全に休みとなりはやて達に管理局の事を教える為に
帰宅の準備をしていたクロスの元へ血相を変えたアリサがやってきた。

「なんだそれ？」
「えっと、確か……怖い話？」

なのはに聞いてみたが、なぜか顔色が悪い。

「クロスあんた、魔法使いなんでしょ？　心霊とか幽霊には強いでしょ！」
「いや、そういう類とはまた別物だと思うんだけどなぁ」
『幽霊とかはあまり詳しくないですねぇ』
「私も詳しくは…たまにテレビで見かける程度で」

ノアやフェイトも幽霊やそういう類には詳しくない。
信じる信じない以前に幽霊や心霊現象と言った物を知らないだけではあるが
どうもアリサは魔法についてまだ若干誤解しているようだ。

ともかく詳しい話をするには人目が多いとの事で目的地であるはやての家へとやってきた。
守護騎士達はユーノに連れられ全員管理局に呼ばれていてはやてが1人で留守番をしていた。

「…なるほど、メリーさんの電話のせいで怪我した子がおるんやな」

アリサの話によると
昨日の夜、隣のクラスの子が1人で留守番していた時に
突然携帯に電話がかかってきて出てみると

『あたしメリーさん。今ゴミ捨て場にいるの…』

と、か細い女の子の暗い声がして、怖くなって電話を切ったがすぐにまた携帯がなり

『あたしメリーさん。今タバコ屋さんの角にいるの…』
『あたしメリーさん。今あなたの家の前にいるの』

と次々と電話がかかってきて、その子は思い切って玄関のドアを開けたが、誰もいない。
やはり誰かのいたずらかと思った直後、またもや電話が…

『あたしメリーさん。今　あなたの後ろにいるの』

とそこでその子の意識は消えた…というわけだ。

「そ、それで……その子はどうなったんや？」

震える声ではやてがアリサに聞くと

「病院に運ばれたわ、ただ気絶しただけだけど」

それを聞くと一同はほっと胸をなでおろした。

「それで…俺にどうしろと？」

「だから～退治して欲しいのよ！　その子の敵討ち！」

意気込むアリサだったが

「俺そういうの詳しくないからよくわかんないんだよなぁ…なのははどうだ？」

「わ、わわ・・・私！？　私は怖くないよ、うん怖くないもん！」

「いや、誰もそんな事言ってないんだけど…」

しどろもどろであたふたを両手を振るなのはにノアがニヤリと笑いながら

「あ。なのはちゃん…怖い話苦手？」

「ふ、ふぇ！？　そ、そんな事全然ないよ！」

「ふ～ん、他の皆は？」

クロスは他の皆に声をかけるが

「私は…どうかな、テレビで見た時は怖いって思ったけど」

「私もそういう話の本は好きやけど、実際にはみとうないなぁ」

「私は全然問題ないよ♪」

「アルフ、尻尾が凄く逆立ってるよ？」

「べ、べべべつに…これは……その！！」

フェイトは若干、なのははかなり、はやてはそこそこ怖いらしい。
アルフは強がってはいたが冷や汗を流しながら尻尾を逆立てては説得力も何もない。

「お、女の子は誰でもこういう話は苦手なものなのよ！」
「アリサも苦手だったのか、てっきり強いのかと思ってた」

クロス達にこういう話を普通にふってきたのでアリサは平気かと思っていたが

「……っ～！！！……そうよ、苦手よ、大っきらいよ！　悪い！！」

顔を真っ赤にして開き直ってしまった。
すずかが苦笑しながら慰めている。

「すずかちゃんは、怖い話はどうなの？」

ノアが尋ねると、すずかはケロっとした顔で

「私も前は苦手だったけど、もう平気かな……見慣れちゃったし」
「「「「「「…え　？」」」」」」

それからはクロスがなのは達に管理局の話をして
夕食の時間になったのでそれぞれ解散となった。

「ねぇ、さっきの話って私達も聞いてて良かったの？」
「うん、こういうのってダメなんじゃ…」

アリサとすずかの前で堂々と話をしていたクロスとノアが心配になり尋ねたが

「あ～問題ないよ。別にこれ機密ってわけじゃないし」
「2人は口が堅いから問題ないですよ～それにこういう知識は持っていた方がいいんです」
「あ、私達が現地協力者…って立場になるからだよね？」
「そうそう、それに話と言ったってなのは達が年明けに訓練校に通うってだけだし」

なのは、フェイト、はやては年明けから3ヶ月間訓練校にて訓練を受けてもらう事になった。
正式に管理局員となるために本来はもっと時間をかけるのだが基礎が出来ている3人ではちょうどいい期間らしい。
講師は以前クロスも同じように教わっていた講師が受け持つ事となった。
そして、はやてだが、治療の成果が着実に出ており、リハビリも訓練と同時に行う事になり
訓練が全て終わる事にはちゃんと歩けるようになるらしい。
それを聞いたはやては涙を浮かべながら治療をしているクロスとノアに御礼を言った。

「ただの病気とかじゃないからな、闇の書の浸食による魔術的な事だったし」
「太極と光天の書の知識で完璧に治りますよ…リインも色々置き土産残してくれたみたいですから」
「リインがか……ほんま、うちは色々な人に助けられてばっかりやな」

リインフォースが消滅する前に自分の知識やスキルをはやてへと遺

した中に
浸食に対抗する術式もあったらしく、クロスとノアでその術式を強化すると言う治療法だ。

「ふ～ん…でも学校も通うんでしょ？　大変じゃない？」
「そこは考えてるから問題ないさ」

アリサの疑問にクロスが答えた。
学校を休んで訓練校に通うのもいいが、それだと学業に支障が出るとの事で
昼間はデバイスを通じて短時間の通信教育のような形を取り
平日の放課後に2時間、土曜日に半日程度通うというスケジュールとなった。
本来これはかなりの無茶ではある。
海鳴市と訓練校までは通常の転送でも時間がかかる為私生活にも支障が出るが
そこはクロスのギアによる転送魔法の出番だ。
一瞬で訓練校と自宅とを行き来できるのでこのようなスケジュールが可能となったのだ。
クロスも来春までの任務はなのは達の送迎となり
なのは達がどうしてもと言う事で、日替わりでなのは達が手作り弁当を作るという
特別報酬（？）が付いた、ちなみに発案者はノアだ。
タクシー代わりにしているようでクロスに悪い気がしていたなのは達だったが
だったら、と耳打ちをし、こういうギブアンドテイクとなった。

「……俺、いつか男子に闇討ちされないかな」

とぼやくクロス…実際、クロスはいつもなのはやフェイト、誰かが

付いていた為
闇討ちを計画はしたが断念した、という…本人も知らぬ間に未遂となっている。

その夜　クロスの自室

フェイトと宿題をしていたクロスの携帯が鳴った。
こんな夜更けに誰だろうと取った、聞こえてきたのはか細い少女の声で

「わたし、メリーさん…いま…（ブチ）」

クロスは電話を切った（笑）

「えっ？　今の誰だったの？」
「間違い電話だったみたい、気にする事ないさ」
「そ、そう…？」

直後、また電話がなった。

「わたし、メリーさん…ねぇ、切る事ないんじゃ…」
「あ、メリーさんね。こちら来々軒、ラーメン大盛５人前確かに承りました！（ブチッ）」

また切った。
フェイトとノアが唖然としている。

「ね、ねぇ…今メリーさんって言ったよね？」
「ひょっとして…アリサちゃんの言っていた」

「同姓同名の別人でしょ？　メリーって名前珍しくないし」

しれっと答え、また勉強に取りかかるクロス。
その様子に思わず顔を見合わせたフェイトとノア。

そして…また、電話。

「わたし、メリーさん。ちょっと、出前じゃないわよ！　しかも大盛5人前って何よ！！」
「え？　お前が食うんだろ？　育ち盛りっぽいから沢山食べないとなぁ」
「育ち盛りにもほどがあるでしょ！　そんなに食べる子なかなかいないわよ！」
「そっか？　俺はそれでも少ない方だと思うぞ？　今度大食い対決しようか？」
「だ～か～ら！　私は大食いじゃないし、これでも小食なのよ！」
「ダメだぞ、しっかり食べないと大きくなれないぞ？」
「あなたねぇ、私が小さいなんて決めつけないでよ！……ま、まぁ、大きくないけど…色々と」
「そんな、落ち込むなって…元気だせよ、そんじゃな（ブチ）」
「「……」」

なぜか頭が痛くなってきたフェイトとノア。

「ねぇ、フェイトちゃん……これが普通の対応なのかな？」
「私に聞かないで…テレビで見た時はこんなんじゃないと思うんだけど…」

黙々と勉強するクロス。

そして、数分後

電話が鳴り響く、だが今度は取らない。
ずっと鳴り響く電話…仕方なくフェイトが取った。

「わたし、メリーさん……いい加減話を進ませてよぉ（涙声）」
「ご、ごめん。今度はちゃんと話を聞くよ？」
「…ホント？……ならいいのよ♪　えっ？　女の子の声……ど、どなた？」
「私？　私の名前はフェイト・テスタロッサ」
「……ご、ごめんなさい！　かけ間違えました！！（ブチッ）」
「……あっ」

今度はメリーさんから電話を切ってしまった。
そして、電話が鳴る事はなかった。

「クロス…どうすればいいかな？」
「別にいいんじゃない？　声に害意なかったし」
「でも、隣のクラスの子が…」
「それだって気絶しただけだろ？　多分メリーさんは何もしてない、恐怖で気絶しただけさ」
「い、いいのかなぁ～…」

これでいいのかと首をかしげるフェイトとノアを尻目に…

「よしっ！　宿題終わったぁ！！」

超マイペースなクロスであった。

続く

第57話　「真冬の怪談　メリーさんの電話？」（後書き）

クロス、ノア「「・・・・・・・何これ？」」

カガヤ「え？　真冬の怪談だよ？」

クロス「これのどこが怪談だ！　ってか俺すごいマイペースだな」

ノア「いや、マイペースというレベルじゃないですよ（汗）」

カガヤ「怖い話好きだけど、俺の文才じゃ怖くはならないから…いっそギャグにしよう！と思って作ったのが「真冬の怪談シリーズ」」

クロス「…シリーズって事は続くの？しかも？とかって」

カガヤ「不評ならやめるけどね。メリーさんの電話はまだやる予定だよ。でも次の話はクリスマスパーティの話！」

クロス「いや……もう、何も言わないよ（汗）」

ノア「う、うん…そうだね（汗）」

カガヤ「感想やら色々待ってまーっす！……あ、俺の知ってる怪談や都市伝説を元にしたギャグを書きますが、この怪談をギャグにしてくれぇ～とかあれば、がんばって書きますよ♪」

第５８話　「全員集合！　ホワイトクリスマス　前編」（前書き）

今回は駄作で短いです…
うーん、戦闘描写以外の描写はとことん苦手だ（汗）

第５８話　「全員集合！　ホワイトクリスマス　前編」

メリーさんを見事に撃退（？）した翌日。

「えぇ～！？　メリーさんから電話があってしかも追い払ったの！？」

クロスとフェイトから昨夜の出来事を聞いたなのはとアリサは驚愕した。

「あ～追っ払ったのはフェイトだけど」

「フェイトちゃん…すごい、すごいよ！！」

「ちょっとクロス、私は別に追っ払ったと言うか…何と言うか…」

そんな賑やかな朝の登校風景だった。

「さてと！　いよいよ明日はクリスマスイブよ！」

昼休み、屋上はさすがに寒くなってきたので教室で弁当を食べている。

「明日は雪も降るみたいだし…ホワイトクリスマスだね♪」

「ホワイトクリスマス？」

聞き慣れない単語にクロスとフェイトが首をかしげると

「あ、クリスマスイブやクリスマスの日に雪が積もって街が白くなってるのを

ホワイトクリスマスって言うんだよ」
「へぇ～…なんだかロマンチックだな」
「ふっふ～ん、今年は大勢集まるんだもの、それくらいでなきゃね♪」

アリサの言う通り今年は大勢でクリスマスパーティを行う。
現在、アースラ隊、ゼスト隊は年内休暇中で地球に滞在している。
ゲンヤやギンガ達も今日こっちに来る事になり
すずかの家で高町家、バニングス家、月村家、八神家、アースラ隊、ゼスト隊
それにティアナ、ギンガ、スバルが加わり大勢で親睦会を兼ねたクリスマスパーティを…
という話になりなのは達は大喜びだ。
はやてやシグナム達は最初渋っていたが、クロスやなのは達がどうしてもと勧めて参加となった。
しかし、一番はしゃいでるのはおそらく…

『プレゼント、プレゼント～♪』

とプレシアとメガーヌを引き連れ街へと繰り出したクイントのはしゃぐ姿が
未だにクロス達の脳裏に焼き付いている。

そして、翌日

「おにい～ちゃ～～ん！！」
「お、スバ…はぶっ！？」

アースラ隊地球駐留所　兼　管理局地球派出所となったハラウオン

家に
ゲンヤに連れられスバル達がやってきた。
クロスを見つけたスバルはいちもくさんに駆け出し…飛び付いた。

「ス、スバル！ダメだよ、いきなり兄さんに飛び着いたら」
「元気いっぱいだね。スバル、それにギンガ♪」
「あ、ノア姉さん♪」

苦笑しながらもノアが出迎える、クロスは少しむせていた。

「あらあら、よっぽどお兄ちゃんに会いたかったのね」
「この前よりはマシですよ…3人揃って泣かれましたから」
「それは仕方ないわよ♪」

クスクスと笑うリンディ。
先日、一度クロスとノアが家に戻った時には、ちょうど遊びに来ていたティアナもいて
3人してクロスに泣きついてきたのだ。
どうもライカフラワーでクロスとノアに危険が迫っていた事を知っていたようで
クイントやゲンヤも微笑むだけだったので、3人を宥めるのにクロスはかなり苦労したのだ。

「よぉ、クロス、ノア。お前らも元気そうだな…他の嬢ちゃん達はどうした？」
「なのはちゃん達はみんなでお買い物と翠屋でケーキ作ってますよ」

ゼスト隊と美由希は買い物に行っている。
なのは、フェイト、はやて達は翠屋でケーキ作り中だ。
ケーキは器具の揃っている翠屋の方が作るのにちょうどいいと言う

事になったからだ。
今はクロス、ノア、エイミィ、クロノ、シグナム、シャマルが飾り付け中で。
買い物から戻り次第クイントとメガーヌも加わる。

「それにしても…話で聞いていた以上に大きな一軒家を購入したんですな、リンディ艦長」
「ふふっ、こんな事もあろうかと…思ってたので、無駄にならずによかったわ」
「最初、どうしてこんなにも大きな家を買ったのかと思ってたけど…はぁ」

母親の行動に溜息がもれるクロノ、エイミィがまぁまぁとなだめている。

「あれ？　父さん、ティアは？」

一緒に来るはずのティアナの姿がなく、きょろきょろとあたりを見渡すと…

「ティアナなら……ほれ、あそこだ」
「……ムスッ（睨」
「う、うぉ！　ど、どうしてドアに隠れて睨んでいるんだ！？」

ティアナはドアの陰からじーっとクロス…
というより未だしがみついているスバルを睨んでいる。

「……スバル…ずるい」
「はわわわ～ご、ごめんティア！」
「ティア、そんなに拗ねないの」

「ごめんな。この前は少ししか会えなくて…でも、今回はゆっくりできるから大丈夫だよ」

なでなで

「あっ……／／／」

クロスがティアに近付き優しく頭を撫でると、頬を染めながら入ってきた。

「「……（ジー）×2」」

「…ほれ、スバルとギンガも」

なでなで×2

「「……／／／／」」

「ねぇ、クロノ君…」

「なんだ、エイミィ…」

「最近の子供って進んでるねぇ～…スバルなんてまだ5歳なのに」

「…それは僕も思ったよ…」

「クロス君って…いつもああなの、姉さん?」

「闘いの時とはまるで別人だな…」

「あはは、2人は戦闘の時しか知らないから…でもあれが、マスターが戦う理由なんですよ」

「大切な人、家族と共に過ごす為に…」

「守る為に……私達と一緒だったんですね」

頬笑みながら話すノアにシグナムとシャマルも不思議な感覚を抱いた。

「お〜い、シグナム、シャマル。俺の家族を紹介するからこっちにきなよ」
「ふふっ、呼ばれたわね」
「あぁ…いくとしようか」
・
・
・
翠屋　ケーキ班
「フェイトちゃん、そっちはどう？」
「もう少し…これでどうかな？　母さん」
「うん、いい味になってるわよフェイト」
「ザフィーラ、これもっててくれる？」
「分かりました、主はやて」
「アルフ〜つまみ食いしちゃだめだよ！」
「ぎくっ、あ、あははは〜なんのことかな〜ユーノ？」
上からなのは、フェイト、プレシア、はやて、ザフィーラ、ユーノ、アルフ
こちらはこちらで賑やかにやっているようで…
ちなみにヴィータはというと…
「い、いらっしゃいませ〜！」
「まぁ可愛い店員さんだこと…お手伝い？」
「え、えっと…友達のお手伝いで」
「へぇ〜偉いわねぇ」
料理は苦手だからとなのはの代わりに店の手伝いをすると言いだし馴染みの客達（主におじいちゃん、おばあちゃん）のマスコットとなっていた。

「ありがとね、ヴィータちゃん。助かるわ、なのはもケーキ作りに集中出来るし」
「美由希も買い物だったし、人手足りなかったんだよ」
「…こっちも、はやてが厨房借りてるからこれくらいしないと」
照れくさそうに返すヴィータに桃子と士郎は顔を見合わせ頬笑み会った。
クリスマスイブという事で翠屋もいつも以上に混雑している。
にも関わらずなのはをケーキ作りへと回してくれた。
その代わりヴィータとザフィーラが色々と手伝いをしている。

「それにしても、ザフィーラ君の服装はお似合いだな…天職かもしれないよ」
「…そうか？」
ザフィーラは耳としっぽを隠し士郎の制服を借りて着ている。
無口で引き締まった体付きといい…どこかの執事のような風格だ。

「それでなのはちゃん、フェイトちゃん…2人に聞きたい事あるんやけど…」
「ん？　どうしたのはやてちゃん？」
「？？」
ケーキ作りもひと段落したころ、はやてが真剣な表情で2人に話しかけた。
「2人とも…クロス君の事が好き？」
「「…えっ！？／／／／」」

突然の質問に2人とも固まってしまった。
プレシアやアルフはニヤニヤと見ている。

「な、ななにをいきなり言っているの!?　は、ははややややてちゃん!／／／」
「そそそ…そうだよ、クロスはた、ただの友達…だよ／／／」

2人共しどろもどろにアタフタしていて…頬どころか顔中真っ赤だ。

「ふ～ん…ほなら、私が告白してもかまへんよな?♪」
「「……ブッ!!」」

落ち着こうと飲んだココアを噴き出しそうになった。

「「だ、ダメダメダメ!!」」
「そ、そんな2人してすごい顔にならへんでもええと思うけど…」

2人の迫力に思わず後ずさるはやて。
そんな3人をプレシアは…

（クロスの10年後が色々な意味で楽しみね…）

と思ったそうな…

・
・
・

一方　買い物組

「ねぇ、これなんかどうかな?」
「う～ん、こっちの食物もあっちと変わらないんだな」

「向こうではどんな食事してるの!?」
「そうだなぁ…この前来た時も感じたけどあまりこっちと変わらないよ」
「いいなぁ～今度食べてみたいな」
「ははっ、美由希がこっちに来た時はおススメの店を案内するよ」
「ホント!?　楽しみ～♪」

ティーダと美由希が仲良く食材選びをしていた。

「若いっていいわねぇ～…」
「あら、クイント。家でゲンヤさんを待ってれば良かったんじゃない？」
「そうなのよねぇ～…家で待ってればとっても面白いイベントが見れたのに…」
「面白いイベント？」
「そっ、でもこれはこれで…面白いイベントね」

若いカップルの食材選びはまだまだ続く…

「まだか……」

そして、1人店の外で荷物番をしているゼストなのであった。

続く

第５８話　「全員集合！　ホワイトクリスマス　前編」（後書き）

カガヤ「２カ月早いクリスマス話、その前編でしたぁ」

クロス「うーん……相変わらず下手だな？」

ノア「まぁ、こんなものじゃないですか？」

カガヤ「……ｏｒｚ」

クロス「特にネタもなく…ただただ少しだけ進みます」

ノア「次回は私も大活躍！…出来るといいなぁ（遠い目）」

カガヤ「ともかく、次回もお楽しみに！」

第５９話　「全員集合！　ホワイトクリスマス　後編」（前書き）

今までで一番の駄作な予感…
何回も書き直した結果…こうなりましたｏｒｚ

キャラ崩壊絶賛進行中！

今回よりギャグ回はこういう台本形式で書いてみようかと思います。
今回は試験的に書きましたが、不評なら変えます。

第５９話　「全員集合！　ホワイトクリスマス　後編」

クリスマスイブ　ハラオウン家

パーティの準備も全て整い、ハラオウン家に士郎達もやってきた。

士郎：「今回はお誘い頂きありがとうございました」
リンディ：「いえいえ、今回は子供達が考えた事で私達はただ手伝いしただけですよ」
恭也：「それにしても豪華に飾り付けたものだなぁ」
忍：「本当に綺麗ね」

恭也と仲良く入ってきた女性は月村忍。
すずかの姉で恭也の恋人だ。

シャマル：「あ、皆さんいらっしゃい♪　もうお店はいいんですか？」
桃子：「ヴィータちゃん達が頑張ってくれたおかげで…早く売り切れになっちゃって」

高町一家の後ろザフィーラにおんぶされたヴィータが入ってきた。

シグナム：「ヴィ、ヴィータ!?　一体どうしたの!?」

シグナム達がかけよるとヴィータはぼんやりと目を開け

ヴィータ：「お、おぉ～……シグナムが…たくさ～ん・・・（ガクッ）」
シグナム：「ヴィーター!?」

ザフィーラ：「…慣れない仕事で疲れが溜まったようだ、少し休めば大丈夫だろう」
エイミィ：「そんなに大変だったんだ？」
なのは：「あ、あはは…クリスマスはいつもこうなんだよ。ありがとう、ヴィータちゃん」
桃子：「でも、ヴィータちゃんががんばってくれたから思ったより早く売り切れになったわ」

なのはと桃子にヴィータは虚ろな目をしながらも小さくサムズアップで答えた。

スバル：「わぁ～！！　おぉーーー！！　すごーーーーーい！！！」
ティアナ：「スバルさっきから声大きい！　驚き過ぎ！！」
ギンガ：「でも本当に大きいねぇ」
アリサ：「ふ～ん、まぁまぁの大きさね」
すずか：「雪も降ってきたし、ホワイトクリスマスにぴったりね」

庭に飾られているのは屋根まで届きそうなクリスマスツリーだ。もみの木ではないが立派に飾り付けられライトアップもされて一際綺麗に見える。

スバル：「すごいよね～…この料理の山とケーキ！」
ティアナ、ギンガ、アリサ、すずか：「そっち！？」

スバルの視線の先にはテーブル一杯の料理の山と巨大なケーキがあった。

ティーダ：「よくまぁあんなに作れたものですねぇ」
ゼスト：「なのは達がケーキを、クイント達が料理を頑張ったから

な」
はやて：「ほんまはあんなに大きくはしないつもりやったんです…けど」
プレシア：「いつの間にか…ねぇ？」
メガーヌ：「こっちもつい作り過ぎて…」
クロノ：「でも、クロスやクイントさん達もいるんだからこれでも足りるかどうか…」
ユーノ：「あ、クロノ…そんな事言うと……手遅れだ（汗）」

クロノの後ろに近付く1人の影…

クイント：「あ～ら、誰が大食いなのかし～？」
クロノ：「イ、イエナンデモアリマセンヨ……」

クロスとノアはその様子を2階から見下ろしていた。

クロス：「ホント、賑やかだよなぁ…」
ノア：「…たまにはこういうのも悪くないですね」
ゲンヤ：「まだ始まってもいないのに何こんな所でたそがれているんだ？」

後ろからやってきたゲンヤが2人の頭を撫でる。

ゲンヤ：「ほれ、パーティが始まるぞ」
クロス、ノア：「うん」

リンディ：「本日はようこそお集まり頂きました…なんて堅苦しい挨拶は抜きにしましょうか

さぁ…皆さん、今日はクイント達が作った料理となのはさん達が作ったケーキを
どうぞ、お楽しみ下さい♪」

そして、パーティは始まった。

忍：「うわぁ～…本当に妖精みたいに可愛いわね♪」
ノア：「あ、あはは…どうも」
ヴィータ：「な、なんで私まで…」

初めてノアを見た忍が眼をキラキラさせてノアを撫でている。
ついでに目が覚めたヴィータも忍の眼に止まり、玩具と化している。

クイント：「ふふっ、反応が姉妹そっくりね。ねぇ、すずかちゃん？」
すずか：「うぅ…なんだか恥ずかしいかも…」
恭也：「適応力高いな忍は…俺は最初見た時でも信じられなかったのに」
ノア：「まぁ、普通はそうですから」
はやて：「私も、ヴィータ達に出会った時はすぐに気を失って…全部夢やと思いましたよ」
ヴィータ：「本当にあの時はどうしようかと思った、いきなりはやてが眼を回してたからなぁ」
クイント：「ところで、ヴィータちゃん…その格好はどうしたの？」

今のヴィータの恰好は俗にいう「サンタ姿」だった。

ヴィータ：「えっ？…な、なんだよこれはあぁぁ！！／／／」
すずか：「気付いてなかったんだ（汗）」
クイント：「あら～よく似合ってるわよ♪……ねぇ、クロス？」

傍らで静かにシャンパン（子供用）を飲んでいたクロスに声をかける。

クロス：「ん？…うん、よく似合ってるよ、ヴィータ」
ヴィータ：「い、いたのかおまえええぇ～～～！！／／／／」
クロス：「さっきからずっといたんだけど…気付いてなかったの？」
はやて：「なんや今日のヴィータはえらい鈍感さんやなぁ…疲れとるせいか？」
ザフィーラ：「あまり無理せず休んだらどうだ？」
ヴィータ：「そういうザフィーラもなんて格好だよ…」
ザフィーラ：「……動けないのだ」

狼形態のザフィーラとアルフ。
そして、その背中には…

ティアナ：「……ふかふか～」
ギンガ：「気持ちいい～♪」

ティアナとギンガがしがみついていた。

一方大人たちは…

士郎：「ほう、それではあなたは内勤が主でしたか」
ゲンヤ：「俺には魔力素質が全くなかったもので…前線を支える後衛部隊って所ですよ」
ゼスト：「ふっ、懐かしいな…お前とクイントの出会いをな」
ゲンヤ：「お、おい！　いきなり何を言うんだゼスト！！」
桃子：「あら、興味ありますね…ついでに私達の慣れ染めも話しましょうか？」

メガーヌ：「それはいいわね♪」
ゲンヤ：「よくないだろ！？」

大量のお酒で出来あがったのか惚気暴露大会と化していた。
そして、なのは達は…ペアになってポーカーをしていた。

ティーダ：「…ワンペア……ｏｒｚ」
美由希：「ティーダ君！？　たかがポーカーにそんなに気落ちしないでよ」
フェイト：「これはなんだっけ？」
プレシア：「あぁ、それはフルハウスね」
スバル：「ねぇねぇ…これは？」
クロノ：「スバルのは、フルハウスだな」
スバル：「おぉ～ありがとう、クロのお兄ちゃん」
クロノ：「…なんだか、若干発音変じゃなかったか？（汗）」
エイミィ：「とかいいつつお兄ちゃんと言われて照れてるクロノ君なのでした♪」

エイミィとはやてがニヤニヤしながらその様子を眺めていた。

アルフ：「ふふっ、いいお兄ちゃんっぷりだよ～クロノ」
クロノ：「エ、エイミィ、それにアルフまで／／／」
美由希：「あははは～実のお兄ちゃんが拗ねちゃうよ？♪」
シグナム：「うーむ…これはロイヤルストレートフラッシュ……だった？」
なのは：「うん…って、シグナムさんすごいよ！！」
シグナム：「そ、そうなのか？／／」
プレシア：「…罰ゲームはティーダね。はいこれ」
ティーダ：「う、うぅ…せめてまともなのが出ますように…ってなんじゃこりゃー！？」

ポーカーのペアはティーダ&美由希、フェイト&プレシア、スバル&クロノ
エイミィ&アルフ、シグナム&なのは、ティアナ&ギンガだ。
ルールはポイント制で一番役が低いペアが1枚罰ゲームが書かれたカードを引き
それに書かれた事を必ずする、ということだ。
ちなみにカードを書いたのはノア。

エイミィ：「どれどれ…『一番好きな人に愛の告白を』……ってきゃ～♪」
シグナム：「そ、それはまたすごい罰ゲームを…」
クロノ：「エイミィはしゃぎすぎだ…それにしてもこの罰ゲームは（汗）」
ティーダ：「間違いなくノアの仕業だな……はぁ」

何かを諦めたのかティーダは顔を真っ赤にしている美由希へと振り返り。

ティーダ：「……好きだ、美由希。他の誰よりも君を…愛してる」
美由希：「は、はひ！！／／／／……これ、私が前に告白した時に返したセリフじゃない！！」
ティーダ：「…はっ！？　俺は何を？…って美由希、大丈夫か？」
美由希：「……／／／　ば、ばか！　私が告白した時の事思い出しちゃったじゃない！」
エイミィ：「へへぇ～…ティーダ君もなかなか情熱的な返しをしたんだねぇ♪」

エイミィの指摘に自爆したと気付いた美由希の顔はタコよりも赤くなった。

あたふたするバカップルを尻目にプレシアはティーダが引いたカードを手に取った。

プレシア：「（…魔法を仕込んでいるわね。ノアったら…クロスにこれ引かせる気だったわね）」

当の本人である、クロスは向こうではやてやすずか達と料理を楽しんでいる真っ最中でノアはと言えば…

忍：「本当に可愛いわね…ねぇ、借りたら…だめ？」
恭也：「ダメに決まってるだろ？…全く、プレゼントした人形で我慢してくれ」
忍：「うん、ありがとう、恭也♪」
ノア：「だ、誰かたすけて～……」

忍と恭也のラブラブオーラに毒されていた。

そうしてパーティは賑やかに過ぎていった、その時…

バタン！

ヒゲサンタ：「メリーークリスマーース、わ～っはっはっは♪」
ミニスカサンタ：「め、めりーくりすます・・・／／／」

2人のサンタクロースが乱入してきた。

ゼスト：「レ…レジアス？」
むっさいサンタ：「ちっが～う！　わしはレジアスなどではない！

…レジアスサンタだ！」
ティーダ：「そのまんま！？　せめてもう少しいじるとかしないんですか！？」
タイツなオーリスサンタ：「……うぅ／／」
メガーヌ：「ってオーリス！？　あなた何をやってるの！？」
ミニスカで網タイツなオーリスサンタは顔を真っ赤に俯きながら小声で

オーリス：「……ひ、久々にクロス君に会えるから、少しインパクトのある服装した方がいいって…
お父さんが…」

クイント、クロス、メガーヌ、ノア：「「「「あんたは自分の娘に何させてんだあぁぁ～～！！！」」」」
レジアスサンタ：「グハァァ～！？」

４人にボロボロにされるレジアスサンタ。
見れば、ゼストとティーダもデバイスをセットしている。

レジアス：「こ、こらお前ら！　一般人前に何デバイス起動させている！？」
ゼスト：「…だからこそだ、こんな上司を紹介出来ると思うか？」
ティーダ：「汚点は消毒、ですよね～♪」
レジアス：「ま、マテマテマテ！　せめてワシの紹介を彼らにしろ！　これではただの変態だ！」

見れば、なのは達は全員ポカーンと口を開けて唖然としている…リンディやエイミィでもだ。

メガーヌ：「はぁ……仕方ないわね」
クイント：「皆さん、この変態は一応私達の上司に当たるレジアス・ゲイス少将です」
クロス：「不審人物だけど変質者じゃないから、大丈夫ですよ」
レジアス：「ちょっと待て！　なんだその紹介は!!　せっかくのワシの威厳が台無しだぞ！」
ノア：「いや、もう威厳も何もないですから…」
オーリス：「父さん…もういい、もういいわ（涙）」
なのは達：「……（汗）」
未だに硬直してる一同。
士郎：「あ…えっと……はじめまして、なのはの父親の高町士郎と言います」
桃子：「私は妻の桃子です。そして、恭也に美由希です…娘のなのはがお世話になります…」
士郎や桃子に続けて恭也と美由希も頭を下げた。
その後、硬直から回復したアリサやはやて達も挨拶をし、ようやく元の空気が戻ってきた。
ちなみにオーリスはずっと凹んでいる。
はやて：「でもほんまに面白い人やね、レジアス少将って」
ヴィータ：「全くだ、前に会った時とはエラい違くて驚いたぞ」
クロス：「あははは、まぁ…一応あれでも地上本部総司令だから」
シャマル：「それがまた信じられないですね…とは失礼、かな？」
ノア：「気にしないでいいよ～場を弁えていればあの人基本無礼講だから」
シグナム：「……いいのか、それで（汗）」

冷や汗を流すシグナムの視線の先では…サンタ姿から私服に着替えるレジアスが……

クロス、ノア、クイント：「ってそんな所で着替えるなぁ～！！！」

またもや殴り飛ばされていた。

ティーダ：「はぁ…あんなのが上司だなんて」
恭也：「なんだか苦労しているみたいだな、ティーダ達は」
ティーダ：「分かるか？　でも昔に比べたらかなり変わった…ってのはゼスト隊長の弁なんだけど」
美由希：「え？　昔はどうだったの？」
ティーダ：「そうだな…今も昔も武闘派なんだけど、ちょっと硬い人だったんだよ」
クロノ：「あれを見ると…影も形もないけど…」
恭也：「へぇ…でも、ああ見えても根はすごくしっかりしてる人だと思う」
美由希：「うん、なんだかそんな気がするよ…理想の上司って感じ♪」
クロス：「ま、理想かどうかはともかく…良い人なのは間違いないな」

恭也と美由希に尊敬のまなざしを受けてるとも気付かずに泣く泣く2階の部屋で着替えてるレジアスなのであった。

リンディ：「それで今日は2人してどうしたんですか？　見た所随分ご機嫌なようですけど」
レジアス：「お～よくぞ聞いてくれた、さすがは気遣いのリンディ

だ。どこぞの女狐とは大違いだ」
クイント：「あら～女狐なんて、褒め言葉ですよ～レジアス少将♪（ギリギリ）」

目は笑っていない笑顔でクイントがレジアスをつねる。

レジアス：「い、いたたたっ！？…オホン、実はな、この度の一件でワシの昇進が決まったのだ」
ゼスト：「そうか…おめでとう、レジアス中将」
レジアス：「ふっ、辞令が出るのはまだ先だ…それと、ゼスト隊の皆も一階級昇進だぞ？」
クイント：「ホント？　やったぁ♪」
ゲンヤ：「おいおい、随分軽いな」
クイント：「あら～？　愛しの妻の昇進が気に入らない～？　嫉妬～？　うーん、可愛い♪」
ゲンヤ：「こ、こら…クイント、離れ…酒臭いぞ！？」
メガーヌ：「そう言えばさっき桃子さんやプレシアと飲み比べしてたわね（汗）」

プレシアは飲み比べの末…ソファーでダウン、フェイトとアルフが看病中だ。
桃子は顔色変えず平然としている。

レジアス：「話……進めていいか？（沈）」
一同：「あ、どうぞ…」

床にノの字でも書きそうなレジアス。

レジアス：「クロス、真面目な話だ…例の試験が決定したぞ」
クロス：「えっ！？　本当ですか！？」

レジアスの言葉にクロスは目の色を変えて詰め寄った。
レジアス：「こんなウソをついても仕方がないだろう？　今回の一件の事もあるが…
　　前々からの評価が実を結んだ結果だ…試験は3月、がんばるんだぞ」
クロス：「…はい！」
なのは：「ねぇ、クロス君。なんの試験なの？」
クロス：「あぁ…試験って言うのはね執務官の試験なんだ」
ユーノ：「執務官！？　それって結構厳しい試験だけど…大丈夫なの？」

執務官試験…
執務官になるための試験とは合格者がごくわずかという難問の試験だ。

クロス：「ま、なんとかなるでしょ」
ノア：「マスターならくしょーですよ♪」
シャマル：「あ、姉さん…脱出出来たのね」
ノア：「……ヒドイ目にあいましたぁ…」

ノアはふらふらとクロスの肩に止まった。

レジアス：「…分かってるなクロス、その歳でこの試験を受けるという意味が」

周りに聞こえないように小声でクロスに聞いた。

クロス：「あぁ…それでも受けるよ、そして絶対に合格してみせるさ」

ゼスト：「…うん、良く言ったクロス」
クイント：「私達が残り3カ月みっちり付き合ってあげるからね」
ティーダ：「最年少執務官誕生なるか…楽しみだな」
メガーヌ：「でも、今はひとまず…パーティを楽しみましょ♪」
クロス：「…うん♪」

こうして、クリスマスパーティはまだまだ続くのであった…

続く

オーリス：「私って…来た意味あったの？（涙）」

第５９話　「全員集合！　ホワイトクリスマス　後編」（後書き）

カガヤ「うぅ～ん…大丈夫かなこれ」

ノア「今までで一番ひどくないですか？」

クロス「１週間ねばって・・・これ？」

カガヤ「……あとは読者様の判断に任せます…ごめんなさい、こんな駄文でペコリ（ｏ―　―）ｏ）」

ノア「何気にオーリスさん初登場…でもひどいですね、これ」

クロス「初登場がこんなのなんて……トラウマにならなきゃいいけど（汗）しかも、全員集合してもキャラの出番に偏りがあるな…」

カガヤ「……それでは感想やら色々まってまーっす！！（汗）」

第６０話　「一年の終わり、新たなる始まり」（前書き）

サブタイトルと次章の名称にかーなり悩みましたぁ。
長かった第３章の最終話です。

第６０話　「一年の終わり、新たなる始まり」

大晦日　高町家

場を沈黙が支配する…
この場には対峙する二人の剣士以外の存在を許さないかのような静寂さだ。
一方は二本の木刀を交差するように構え、もう一方は左逆手に木刀を構え深く腰を沈める。
先に動いたのは…逆手に構えたクロス。
迎え撃つは…高町士郎。
なのは達が見守る前で…二人の剣士が激突した。

・
・
・

事の発端は、なのはが家族に魔法についての事を告白した日に遡る。
魔法の存在を皆が認めた後、なのははこれからの事を話した。

「私…これからも管理局で働きたいの！」
「なのは……本気なのか？」
「でも…まだなのはは９歳なのよ？　それなのにそんな仕事を
「そうよ　死んじゃうかもしれないでしょ！」
「…あんな怖い思いをこれからもなのはちゃん達は味わなきゃいけないんでしょ…私は嫌だよ」

なのはが管理局で正式に働きたいと言い
まず、恭也と美由希、アリサとすずかが反対した。
アリサとすずかはイリスとの一件を直に見ているからこそ一層反対した。

桃子も士郎もじっとなのはの話に耳を傾けていた…

「恭也さん、美由希さん…俺は本当ならなのはを止めたい。なのはだけじゃない…
フェイトもはやても…戦いから遠ざけたい。でも、なのは達は言ってくれました。
一緒に戦いたいと、強く望みました。だから…その気持ちに応える為に
俺がみんなを守ります、絶対に死なせたりはしません…約束します」

「クロス君……」

「全く、こういう事は大人の私達が言うべき事なのに…取られちゃったわね」

リンディが苦笑いを浮かべつつ、クロスの頭を撫でた。

「確かに危険な仕事も多くあります。ですが皆さんに悲しみを味わせる結果にはさせません」

「私も子供を戦わせてるので言う資格はありませんけど、それでも…」

リンディとクイント、クロスの真剣な表情に何も言えなくなった。
が、それまで眼を閉じ黙っていた士郎が、眼をあけクロスを見た。

「クロス君…一つ手合わせ願えないかな？」

なのはやリンディ達の話を黙って聞いていた、士郎がふとクロスへと目を向け言った。
以前にも恭也がクロスに向けて同じような事を言われたが、今回は違う。

士郎のクロスを見る目がまるで試しているかのような眼をしていたからだ。
生半端な気持ちで受けるわけにはいかない。

「わかりました…ですが、少し待ってもらっていいですか？」
「ん？　あぁ、君の体が治ってからで構わないよ」

士郎の言葉にクロスは驚いた。
ゼスト達も同様だ、なにせ外見は完治しているように見えているがクロスの内部は未だに爪痕が残っている、それを士郎は見抜いたのだ。

「気付いてましたか…俺はこの前の戦いの影響がまだ残ってるんですよ」
「なら、それが完治した頃に…」
「はい」

2人は固く握手を交わした。
士郎はクロスをただの子供とは見ていない。
強い想いを胸に秘めた1人の剣士として見ていた。
その事がクイントやゼストには嬉しかった。

そして、大晦日。
体調が完全に戻ったクロスと士郎が手合わせをする事になった。
なのはやフェイト達は何も大晦日にしなくても、と止めたが

「年越す前にやり残したことは終わらせたいんだよ」

とクロスに言われ、渋々引き下がった。

（お兄ちゃんといいお父さんといい、なんでクロス君と戦いたいんだろう…）

未だに士郎の考えが分からないなのはだが、せめて2人が怪我をしない事を祈るだけだった。

・
・
・

（士郎さんは恭也さんよりも強い…でもこれは勝ち負けが問題じゃない…）

（クロス君、君がなのはや皆を守ると言ったあの時の言葉…試させてもらうよ）

2人の視線が交わり、クロスが駆け出す。

ただ一点、士郎だけを視界に入れ、自分の思い全てをこの一太刀に籠める。

すると、自然ととある型が頭に浮かび上がった。

クロスは疑問を抱かずに自然と思い浮かんだ型へと態勢を変える。

一歩一歩翔ける毎に手が、足が…変わる。

膝を深く曲げ、一気に伸ばし駆け出す。

左手で逆手に持った木刀を振りぬきながら右手に持ち変える。

左手に籠った力が右手にそのまま宿り、さらに強くなっていく。

そして、士郎の木刀と交差した…その時

ガゥアァ～！

「っ！！？」

士郎の眼に移ったのは…大きく吠える白い虎。

仕掛けたクロスの耳にも微かだが虎の咆哮が聞こえた気がした…。

バキッ…パラパラッ…

何が起きたのかはクロスにも士郎にも、一部始終見ていたはずのゼストやなのは達にも分からない。

確かなのは…クロスの木刀が柄を残してバラバラになって砕けた、ただそれだけだ。

2人とも無傷ではあったが…

「俺の……負け、ですね」

大きく息を吐いたクロスが言った途端に凍りついた空気が溶けていった。

「お父さんやりすぎだよ！　全く恭ちゃんもだけどなんでやりすぎちゃうかなぁ」

「いやぁ～クロス君が思った以上の使い手だったから…手加減しようがなくってなぁ」

「俺とやりあった時よりずっと強くなってるから…多分俺負けるかもな」

鋭く睨む美由希に恭也と共に苦笑いを浮かべるしかない士郎。

しかし、士郎と恭也は気付いていた。

クロスの木刀が砕けたのは、士郎が砕いたのではない。

士郎の木刀と当たる寸前に自分から砕けたのだと言う事に。

それほど強力な技をクロスが放とうとしていた事に。

「見事な試合でした、引退したとは思えませんよ」

そこへゼストとクイントがやってきた。

「こちらこそ、クロス君ほど見事な剣士は早々いませんよ」

「ありがとうございます。でもまだまだですよ」

クイントは息子を褒められて嬉しそうに笑った。

「それにしてもあの歳であの強さ、特にあの眼は…おっと、これは余計な事でした」

士郎は慌てて自分の発言を謝ろうとするがクイントはそのまま続けた。

「…おっしゃりたい事はわかりますよ。クロスは色々な経験を積んできました。

あの子は…クロスは…経験を積み過ぎているんです」

クイントはティーダ達と話しているクロスを悲しそうに見つめ、息を吐いた。

「以前こちらにこられた時に話していたのは…そういう事だったんですか」

「えぇ…だからクロスにはもっと子供らしく生きてほしいんです…だから」

「だから…学校へ？」

クイントの言葉を今度は士郎が続けた。

「そういう意味でも本当になのはちゃん達には助けられてますよ」

「こっちこそ、なのはも前にもまして明るくなったし」

「何よりクロス君の事ばっかり話すようにもなって…男の子に対する接し方も
色々変わってきたみたいだし…お互い良い刺激になってるみたいですね♪」

大人達がまたクロスに目を向けるとちょうど話の中心であるなのはがフェイトと一緒に
クロスの元へと駆け寄っている所だった。

「お疲れ様、クロス君…大丈夫？」
「どこか怪我はない？」

なのはとフェイトがスポーツドリンクとタオルを持ってきた。

「あぁ、ありがとう…どこも怪我はないよ。ふぅ、流石はなのはのお父さん、強い強い」
「もう…お父さんったら本気にならなくてもいいのに」
「木刀が粉々になっちゃったね…」
「あ、あれは……ん？」

ふと眼を向けると、眼を輝かせたティアナ、ギンガ、スバルの姿が

「ク、クロスさんすごい…すごいよぉ！」
「兄さん……かっこよかった／／／」
「うん、クロ兄かっこよかった！！」

ナカジマ家ではクイントと組み手などを行っている時とはまた違ったクロスの
真剣な表情を間近で見たティアナ達は大はしゃぎだ。

「ははっ、流石のクロス君も妹達にはお手上げみたいやな」
「ティアは特にマスターの戦う姿初めて見ましたからねぇ…」
「ふっ…しかし、それほどまでに素晴らしい気迫と剣技だったぞクロス」

はやて、ノアとシグナムも先ほどの戦いを褒める。

「お～い、お前達。ちょっと手伝ってくれ～」
「ティア、手伝いしてくれるんじゃなかったのか？」
「あ～！　そうだ！　メガーヌさんの手伝いするんだった。いこっ、スバル、ティア」
「「うん！」」

そう言ってギンガ達は顔を出したゲンヤとティーダに連れられ道場を出た。
それを見計らってクロスはシグナムとノアの方を向き

「あ、そうだシグナムとノアに聞きたい事があるんだけど」
「あぁ、なんだ？」
「どうしましたか、マスター？」

クロスは急に神妙な顔つきになり聞いた。

「俺のあの構え…どこかで見た事はないか？」
「？　どういう事だ？」

質問の意図が分からずに怪訝な表情をするノアとシグナム。

「実はさっきのあの構え、無意識に出たんだよ…今までも何回かそう言う事があって…」

「ひょっとして太極の書に記録されてる、アルハザードの戦士達の記録？」

太極の書にはアルハザードの騎士や槍士と言ったクラスの記録が込められている。
その中でクロスは最初に剣士、そしてその上位である騎士、闘士、銃士の３つのクラスが適合し
その力を太極の書から引き出して使っている。
記録の中にはそのクラスに応じた技も入っていて、クロスが現在使っている技は
アルハザードの騎士達が使っていた技とクロス自身が生み出した技の２種類がある。
例えば、光刃斬はアルハザードの騎士が使っていた技で
デルタファングシュートは銃士が使っていた技だが
シェルブリットはクイントの技を元にクロス自身が生み出した闘士の技。
という分け方となる。
そして、今回使った剣技もアルハザードの騎士が使っていた技の１つ…のはずだった。
だが、今まではイメージとして技の名前すらはっきりと頭に浮かんでいたが今回は違う。
漠然としたイメージしか浮かんでこない。

「なるほど…アルハザードの騎士が使っていた技で」
「しかも、不完全な状態で放ったから…木刀が耐えきれずに砕けちゃったんだね」

実は士郎と恭也以外にもゼスト、クイント、シグナム、フェイトがクロスの木刀は士郎によって砕かれたのではないと言う事に気付いていた。

「あぁ、それも…頭に浮かんだのが……白い虎だ」
「白い虎…白虎。四神の1神やね」
「それだけじゃないんだ。最近夢に出てくるんだよ…青龍、朱雀、玄武も」

クロスが四神の夢を見だしたのはイリスとの戦いが終わった後の事だ。

「じゃあ、ひょっとして…四番目の鍵？」
「ジュエルシードみたく、夜天の書が鍵になってたのかも」

以前なのはとフェイトはクロスから太極の書の封印と鍵について聞いていた。

「……そんな感じ…だろうな」

一瞬クロスの表情が曇ったが、皆はそれぞれ考え事をしていたので表情の変化に気付いたのはノアだけだった。

「…済まないな、私も夜天の書に封じられる前の記憶は完全に戻ったとは言えないらしい」
「私も…太極の書には様々な技や魔法が詰め込まれている…と言う事しか」

シグナムとノアが申し訳なさそうに項垂れる。

＜申し訳ありませんマスター、私も検索をかけましたが…＞
＜アルハザードの魔法や技に関しては未だに全て開示されているわけではないので…＞

書の管制デバイスであるラファールとミラノールも同様のようだ。

「ま、おぼろげに浮かんでくるって事はこれから少しずつ浮かび上がってくるって事だろ
　どんな技か知らないけど、完全に使いこなせるようにもっと…強くなるさ！」

クロスは沈みがちな空気を振り払うように明るく言ったが…少し裏返ってしまった。

「ぷっ…あははは、そやね。考えても仕方ない」
「うんうん、でもクロス君、声裏返ったよ？」
「い、いいだろ！　別に」

それを見てなのはとはやてがふき出し、ノア達もつられみんなで笑いあった。

（うん、気にしたって仕方がない…考えてもどうしようもない……四神と浮かんだあの言葉も）

【この魔法だけは決して、使ってはならない…禁断の魔法…全てを破壊する禁忌の魔法だ】

四神の夢と共に頭に響いた、声…以前に夜天の書について暗示が来た時と同じ声をまた聞いた。
しかも、不吉な言葉だった…だがクロスはそれを誰にも話す気はなかった。
禁断と言うのならば…使わなければいい、使い方を知らなければいい…そう思ったからだ。

「クロス君」
「あ、士郎さん…ありがとうございました！」
「いやいや、御礼を言うのはこちらの方さ、久々に現役の頃を思い出せたよ」

士郎に一礼したクロスは、差し出された手をしっかりと握った。

「君の想い、確かに受け取ったよ…なのはを、頼む」
「…はい！！」
「……お父さん！」

思わずなのはは士郎へと飛び付いた。

「あははは、なのはが気にいる訳もしっかりと分かったからな…お父さん大満足だよ」
「あ、ぅ……それは言わないでよ！／／／」
「あれれ～？　だったらここ半年毎日のようにクロス君の事ばっかり話してる事も…」
「当然、それも秘密に……って、あぁあ～！？／／／」

美由希の口をふさごうとしたなのはだが時すでに遅し。

「……聞かなかった事にしよう、うん／／／」

クロスは顔を真っ赤にしてそっぽを向いていて、フェイトとはやてもニコニコと笑みを浮かべ
ノアと美由希は小悪魔な笑みを浮かべている。
その様子を見ていたクイントやシグナム達の笑い声が道場に響いた。

そして、その後。桃子やメガーヌ、プレシア達が作った年越しそばや料理を皆で食べ
騒がしくも慌ただしい一年の終わりを大勢で過ごしたクロスとノアであった。

「来年もさ来年も…ずっとこんな年越しが出来るといいなぁ」
「なのはちゃん…来年はもっと増えてるかもしれませんけど♪」
「おいおい、ノア。流石にこれ以上増えるっていうのはなぁ…」
「あはは、うんうん、私は大歓迎だよ！」
「私もなのはちゃんに同じく大歓迎…毎年賑やかに楽しくや♪」

フェイト、ノア、クロス、なのは、はやて…五人の少年少女が見上げるのは
満天の星空…来年もみんなでこの星空を眺めれるように…

それが五人の心からの願いだった。

・
・　・　・

時空管理局　地上本部

真夜中だと言うのにその一室には明りがついていた。
そして、一人の男がクロス達と同じく星空を見上げていた。

「オーリス、その後の調査はどうだ？」

ドアを開け、入ってきた女性、オーリスに背を向けたままレジアス

は静かに尋ねた。

「…ダメですね。アジーン達の追加調査は…これ以上は無理でした」

「そうか……やはりか」

レジアスとオーリスはアジーン達の脱獄事件につい極秘に調査をしていた。

ゼスト達も気にしていたが事は管理局上層部が絡んでいるとの事もあり

調査にはレジアスとオーリスが中心となって行っていたのだ。

「脱獄したアジーン達の使用していたデバイスのデータはゼスト隊のデバイスに記録されています

ですが、それだけのデータではやはり作成元を特定するには…せめて現物が少しでもあれば…」

「…アジーン達に浮かび上がった刻印については?」

「それも、アジーン達が元々使用していた刻印魔法の亜種だろうと言う事に…」

脱獄したアジーン達が使用していたデバイスがあまりに特殊だったので

本局の調査部とは別に地上本部でも独自に調査を行っていた。

だが、アジーン達が消滅した際に一緒に消えたので現物はなくゼスト達のデバイスに残っていた交戦データだけでは情報不足だった。

そして、彼らの使用していた刻印魔法についてはクロスやノアのアルガス魔法の紋章に似ている部分があったのでこれも調査していたが。

結局、一部の魔導師が使用している刻印魔法であるという結論が出されてしまった。

刻印魔法。
それはアルガス魔法の紋章と同様に体の各部分に特殊な刻印を浮かび上がらせる事で
様々な効果をもたらすと言う珍しい魔法だ。
しかし、アルガス魔法の紋章と、効果が長持ちしないという点で違いがある。
時間と共に刻印が消えてしまうからで、新たに刻印を描き直さなければならない。
にも関わらずアジーン達は刻印を描き直す様子もなく長時間使用していた。
しかも、それまで確認されていた刻印魔法とは明らかに効果も違っていた。

「…なぜイリスに吸収されたのか、についてはどうだ?」

クロスやゼスト達の一番の疑問はそこだった。
なぜイリス覚醒の時に遠く離れていたアジーン達が吸収されていたのか。
単に一番あの中では弱っていた…とも考えられるが
暴走していたクロスの攻撃で瀕死だったアジーン達にはろくな魔力も残されていはいないはずだった。
しかし、現実は消滅寸前のアジーン達には膨大な魔力が秘められていた、と
リーゼ姉妹の報告がある。

「これは…私個人の大胆な仮説ですが…」
「…聞こう」
「はい…今回の闇の書、そして、イリスに関して…管理局内部にくわしく知る人間がいた

と考えられます。闇の書だけなら知る者もいますがイリスに関しては…」

「…無限書庫をひっかきましてやっと引き出せた情報…知る者などいるとは思えないが…」

闇の書の情報だけならグレアム提督のように知る者もいるだろう。だが、闇の書の裏の事情、しかもイリスに関してはいるはずがなかった。

いたとしたら…あれだけの怪物の情報を隠匿する理由が浮かばないからだ。

「…無理だとしても再度、調査をしてくれ。それと、この件はクロスにはまだ伏せるようにな」

「今はクロス君には大事な時期ですからね…ゼスト隊には知らせても」

「あぁ、構わない…年明けにでも早速会議を開く事にしよう」

「はい、それでは私はこれで…父さんも早くお休みになってくださいね」

そう言ってオーリスはレジアスのデスクに書類の束を置いた。

「分かっている…これに目を通したら休むとしよう」

オーリスが去り、また一人になった部屋でレジアスは報告書を読みながら思案にふけていた。

（…管理局の闇、中将になったとして全てを暴く事は出来ないだろう…）

レジアスはコーヒーに口をつけ、深く息を吸い込んだ。

（だが、時間がかかろうとも…全てを暴いて見せよう…そして、変えるのだ、管理局を！）

立ちあがり、もう一度星をみあげ、その下に広がる街並みを見下ろしながら
レジアスは息子のように思っている一人の少年と初めて出会った時の事を思い浮かべた。
…あの、自分の価値観も何もかもを変貌させた、一人の少年との出会いを…

「クロス、お前の夢は…使命は……きっと叶えて見せるぞ」

・
・
・
？？？

「…ふふふ、ようやくだな」

「あぁ、一番の懸念材料だった邪神は太極によって滅ぼされた」

「我々も運がいい。イリスの完全復活と太極の覚醒が同時期で行われたのだからな」

「全くだ、おかげでイリスを完全に消滅出来た…これも、運命だろう」

「ならばその運命は我々の味方、と言う事だな」

「しかし、いいのか？　例の部隊が目立った動きをし始めているが」

「うむ、太極とレジアスを縛り付けるという意味でも…そろそろ」

「ならば…それはあやつに任せるか？　確かもう半年もせずに」

「手駒が一段落すると言っておったな…出来をみる良い頃合いだろう」

「…それまでは、せいぜい泳がせるとしよう」

「プロジェクトＡの遺児…太極の方はどうする？」

「そちらも好きにさせるさ。優秀な魔導師を引き寄せる素質もあるようだからな」

「例のプレシアの娘に夜天の主、それに地球の娘か…確かに良い素質を秘めているな」

「それに、いい人質にもなりそうだ…だが、人質として使うには早すぎる」

「まだ太極の完全なる覚醒には程遠い…」

「ならばこれで決まりだな…ジェイル・スカリエッティにゼスト隊抹殺を」

「太極とレジアスには今まで通りの高待遇で好きにさせる…その時までは、な」

どこかで闇の鼓動が静かに鳴り響いている。
静かに…誰にも聞こえないよう、静かに…だが、邪神よりも邪悪な意思を秘めて…

続く

次章『ゼロより始まり、無へと至る道』

第６０話　「一年の終わり、新たなる始まり」（後書き）

カガヤ「な、長過ぎたぁ…」

クロス「本当に長かったな第三章…でもこれで終わったな」

ノア「しかもすんごーーーく不吉な終わり方ですけどね！！」

カガヤ「まぁ…そこらへんの詳しい話は座談会で話すとして、これからの予定を少し…」

クロス「予定は未定で変わるかもしれませんけどね（笑）」

カガヤ「今回で3章は終わりです。次回はいつも通り3章の座談会とオリキャラ、オリデバイス設定などを書いて…4章までの幕間劇と言う事で『真冬の怪談』と『どたばた日常』を書く予定ですが…」

ノア「ですが？」

カガヤ「短編なのに更新速度が速くなるかは未定です…ちょっと他に書きたい物があるので…」

クロス「散々引っ張ってきたものいくつかあるからな（汗）」

ノア「やっと…って感じですねぇ…」

カガヤ「それでは、そこらへんの話も次回の座談会で！！」

第3章お疲れ様会！

カガヤ
「はい、それでは第3章終了記念としてお疲れ様会を開きたいと思います！」

（一同拍手）

クロス
「ちなみに上の文は前回のをそのままコピペして2章の部分を3章にしただけ…またか」

カガヤ
「リサイクルと言いなさい！」

ノア
「このやりとりも前回やりましたね…」

【新登場キャラ】

カガヤ
「はい、3章からはついにあの狸と愉快な仲間達が登場しました…それではどうぞ！」

狸
「どうもどうも…って誰が狸や！…あ～狸って言うなぁ～！！」

ヴィータ

「愉快な仲間……」

レギナス
「ま、なんでもいいさ」

シグナム
「そうだな、主はやてにようやく日の目が当たったのだから」

狸
「当たってない、微妙に当たってへんからね！」

ザフィーラ
「主はやて、少し落ちついた方が」

シャマル
「そうよ、弄られるうちは華なのだから」

狸
「う、うぐっ…」

なのは
「カガヤさんってはやてちゃん嫌いなの？」

カガヤ
「うんや、大好きだよ？　でも関西弁な喋りが…書く方が大変なんだよな」

フェイト
「でも関西弁は好きなんじゃなかった？」

カガヤ
「聞くのは好きだけど、それをまた文章化するのがな」

クロス
「ゼストのおっさんやオーリスさんも初登場だよな、オーリスさんの登場シーンは…」

メガーヌ
「あれは忘れてあげて…本人のためにも（汗）」

カガヤ
「あの話をやりたい為でがんばったようなものだから、イリスの設定より先に浮かんだ話だし」

なのは
「サ、サンタネタを春に思い浮かぶって…」

ノア
「今の時期でも早いと言うのに」

カガヤ
「レジアスのおっさんに関しては、原作とは１８０。違います。キャラ崩壊の極みだな」

はやて
「原作でもこれくらいだったら…はぁ」

ゼスト
「あれはあれで苦脳が見えていいとは思うが、これも…ありか」

【イリスと闇の書】

リインフォース
「私の出生の秘密やレギナスの存在、３章は今までよりも独自設定が強くなったのだな」

カガヤ
「闇の書の防御プログラム以上の敵を考えて…最初はレギナスがラスボス候補だったんだよ」

レギナス
「俺が夜天の書を闇の書へと書き変えた犯人…だったってわけか」

クロス
「それがまさかまさかのガメラ２からの怪獣登場」

カガヤ
「ガメラシリーズでイリスとレギオンが大好きだったからな…どうしても登場させたかった」

ノア
「アルハザードを滅ぼした軍団にギャオスとレギオンを加えましたか…」

カガヤ
「オリキャラでやるよりは有る程度イメージ出来るからね、それに個体でも強いけど
２体とも数で圧倒する怪獣だから、ちょうどいいんだよ」

なのは
「イリスは…すごく怖かったよ」

フェイト
「うん、勝てる気がしなかった…」

カガヤ
「イリスは1部で最大最強の敵だからな…普通に戦ってたら絶対勝ち目がない、な雰囲気にしたかった」

レギナス
「それで俺の役回りが、対イリス用最終兵器か？」

はやて
「イリスを倒す為とは言え…悲しい設定やったなぁ」

クロス
「俺達だけで倒そうとしたけど…無理だったからな」

ノア
「反則級の強さでしたよ」

カガヤ
「それくらデタラメな強さを表現出来てたかどうかが怪しいけど…」

リインフォース
「原作ブレイクが多々ありましたが、私とレギナスの消滅は確定事項…」

カガヤ

「それに関しては…色々考えありまして…退場となりましたぺコリ（ｏ―　―）ｏ」）」

レギナス
「無意味に命散らせたわけじゃないから、主はやてのためだ」

リインフォース
「そうだな…」

狸
「2人共……それにしても…私ヒロインポジションだったのに全然出番なかったのはどういうわけや！　しっかり説明してもらうで！！」

カガヤ
「……クロスとはやては今後フラグ強化していく予定だから、はい次！」

狸
「うぉい！！…って私いつまで狸になっとるん！？」

【ゼスト隊大人気】

ゼスト
「…沢山の感想に礼を言う」

クイント
「レビューにまで明記してくれてありがとね♪」

カガヤ
「これは思いっきり予想外！」

ノア
「あれだけ活躍フラグ出してたのにですか？」

カガヤ
「ゼスト隊は原作でもゼスト、メガーヌはちゃんと出てたけど魔法とかデバイスは不明なの多いし
メガーヌはＶＩＶＩＤに出て解説役になってたけど使用魔法とかは相変わらず不明で…」

クイント
「私は回想シーンでも会話あったし…戦闘スタイルも推測できるし」

ティーダ
「俺は完全にモブキャラだったからな、声優すらついてない（苦笑）」

カガヤ
「ゼスト隊全員は9割オリキャラの扱いで、ティーダはヴァイスを参考にしたよ」

ヴィータ
「原作でヴァイスが兄に似てたからティアナは話しやすかったのかも…と思ったんだよな」

シグナム
「開き直りとも言うな」

カガヤ
「うぐっ……そ、それにデバイスも独自設定で…」

【なのは、フェイト、プレシアのデバイス】

なのは
「私とフェイトちゃんのは原作通りじゃなくて映画版のデザインにしたんだよね」

フェイト
「原作A's よりも高性能になってる設定で」

カガヤ
「ゼスト隊のデバイスに試験的にカートリッジシステム組み込んだ事で原作より高性能な
カートリッジシステムが開発出来て、その分デバイスの形状も変えちゃおう！と」

クロス
「プレシアさんのも含めてオリジナルデバイス設定はちゃんと書くんだろ？」

カガヤ
「うん、今回はレギナス、アジーン達、イリスのオリキャラ紹介となのはやゼスト達の
オリジナルデバイス紹介とクロスとノアの3章での設定の3つに分ける予定」

クロス

「輝光聖天に関してもだよな？」

カガヤ
「それはオリジナルデバイスの項目で紹介する予定だよ」

ノア
「ちゃんと書けるんですか？説明下手ですからねぇ…」

カガヤ
「が、がんばります……ｏｒｚ」

【４章について】

はやて
「当然、うちとクロス君のフラグ強化な話になるんだよねぇ～？♪」

カガヤ
「こわい、笑顔が怖いから！　まーそういう話も書くかもしれないけど…」

クイント
「…けど？　なんだかすごく嫌な終わり方したわよね、３章が」

ノア
「２章の終わり以上に不吉でしたよ」

カガヤ
「それもあるし、まず幕間と言う事で１月から３月までの出来事を番外編の位置づけで書くよ」

なのは
「真冬の怪談とか短編とかかな？」

ノア
「1月から3月の間……あぁ～！あれがありますねアレが！」

はやて
「あれって・・・・まさかあれか！！」

クイント
「そうねぇ…アレがあるわね♪」

なのは
「・・・・あ、うん、あれ、だね♪」

フェイト
「えっ？…何かあるの？」

はやて
「フェイトちゃんには後で教えてあげるな、そうだギンガやティア達にも教えとかなあかんな」

クロス
「なんだろう…嫌な予感しかしない（汗）」

カガヤ
「あっはっはっ、それでは今週中には3章の設定を書こうと思います…それでは！」

一同

「「「「「これからも輝光戦記をよろしくお願いします！！」」」」」

オリキャラ紹介：3章（前書き）

3章で登場したオリジナルキャラの紹介です。
あ、アジーン達の事忘れてた…ま、いっか（爆）

オリキャラ紹介：3章

名前：レギナス
性別：男
出身：古代ベルカ
二つ名：幻槍の騎士
アームドデバイス：無名の槍（グングーニル）
魔術師ランク：S＋相当
好きなもの：主、仲間達
嫌いなもの：主を利用しようとするもの、卑劣なもの。
イメージCV：神谷　浩史（ガンダム００シリーズ：ティエリア・アーデ）
（マクロスF：ミハエル・ブラン）（Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ：間桐慎二）など

存在しないはずの6番目の守護騎士。
参謀的なポジションで、シグナムの補佐が主なはずだが、戦闘では先陣を切る斬り込み隊長。
ベルカでは珍しい幻術魔法が使えるが、単体では滅多に使用しない。
戦法は槍に付いた鏡で相手の射撃や砲撃を反射させ、幻術と絡めた乱舞で相手を倒す。
性格は特に冷静、特に熱くもなりシグナムほどではないがバトルマニア。
主はやて以前は守護騎士で一番の冷徹無比な戦闘マシーンと化していた。
しかし、自分のデバイスの名を呼ぶ事はなくシグナム達も気には止めなくなった。

その正体は3代目の夜天の主アラン・コーヴァンが作成した特殊な

魔導プログラム生命体。
夜天の書に邪神イリスを封印した経緯を未来の太極の主に伝え共に戦う為だけに作られた存在。
そして、対イリス用決戦魔導武具『エクリプス』の中枢（主人公設定参照）
『グングーニル』の外部ＡＩとも言える。
だが、邪神イリスの闇の書への浸食が激しくレギナスもシグナム達と同じく使命を忘れていた。
特殊な契約魔法により、その存在を許された為、邪神イリスが完全消滅すると消える宿命だった。
世界を消滅させるほどの自爆をしようとした邪神イリスを道ずれにアルカンシェルの中に消えた…

どうしようもできない定められた事とは言えレギナスとリインフォースが消滅した事はクロスの中に消えない強い傷痕を残した。

名前：アラン・コーヴァン
性別：男
出身：古代ベルカ
その他不明

夜天の書が転生を初めて3代目の主、事実上オリジナルの夜天の書の最後の主。
当時のベルカ最大の魔導師ともいわれ、アルハザードにも詳しく、その技術を使用する事も出来た。
先祖がアルハザードの生き残りであり、帝黒神についても少しは知っていた。

長らく戦争状態であった世界を平和にするために夜天の書の力を求め弟子達と共に発見し、夜天の主となった。
だが、弟子達がアルハザードの技術を勝手に使い暴走、邪神イリスを生み出してしまう。
イリスを倒す術をどうにか生み出し、未来へと託した。
長年の戦いで不治の病にかかり、レギナスを誕生させるための契約魔法の副作用で
イリスを封印し手記を書き残した直後に死亡。
シグナム達によれば八神はやて同様に自分の家族のようにシグナム達と接した心優しき魔導師。
妻と娘がいたが、戦争によって亡くした。それがアランが夜天の力を求めたきっかけ。

名前：アスト、レーン、ガンタス
性別：男
その他不明

アランの研究仲間にして、弟子であるがアルハザードの技術に目がくらみ。
師であるアランがもつアルハザードの知識を盗み見、ギャオスを元にした魔導兵器邪神イリスを生み出す。
しかし、制御できずに研究所ごとイリスに潰された。

名前：帝黒神アグドラス
性別：男
その他一切不明。

アルハザードを壊滅状態にし実質滅ぼした人物。
その力は未知数であり、敵対したアルハザードの戦士や魔導師達ですら把握できていなかった。
1度目は多数の弟子でもある部下を引き連れ実の兄であるアルガスに反旗を翻し
2度目はギャオスやレギオンなどの無数の巨大生物と新たな部下達を率いて
アルハザードを消滅へと道いびいたが消滅時に発生した膨大な力を使い
超空間に封印されている。
しかし、アルハザードの魔導師達は遠い未来に復活すると予期している。
『太極の書の主』であるクロスの最大最強最悪の敵として登場予定。

名前：アルガス
性別：男
初代アルハザードの王

長らく統治者不在のアルハザードをまとめ上げた偉大なる王、アグドラスの兄。
その力は絶大で、惑星をも操るほどの仙気を持っていたと言う。
半ばアルハザードでも伝説の存在とされていた。
子孫は全てアグドラスとの戦いで死亡したと言われている。

名前：邪神イリス
推定ランクＳＳＳクラス

古代ベルカを圧巻し、壊滅寸前まで追い込んだ巨大魔導生物。

アグドラス軍団の空戦魔導生物兵器『ギャオス』の遺伝データを元にアストたちが生み出した。
巨体に似合わず俊敏性に優れ、高速移動をこなし、回復力も凄まじい。
その最大の特徴は異常なまでの「魔力耐性」でＳＳランクの魔力攻撃すら完全に無力化する。
弱点は『仙気』で仙気での攻撃は耐性がなく回復力も鈍ってしまう。
夜天の書に長い間封印されていたがその邪悪な魔力の影響で夜天の書は闇の書へと変貌した。
そして、シグナム達守護騎士の記憶にも影響を及ぼし夜天の書の根幹すら変化させた。
闇の書が完成に近づきイリスの封印が解けそうになると自動的に自爆するようになっていたが
イリスを封印していたプログラム『闇の書の闇』が破壊された事で完全復活を遂げた。
その時、アジーン達の魔力を吸収し、少なからず仙気に対する耐性もついた模様。
アースラ隊、ゼスト隊の総攻撃をも、もろともせずに壊滅寸前まで追い詰めた。
闇の書が吸収した魔導師や魔導生物の力も使用可能で。
吸収した神獣のリンカーコアから神獣を合体させ再構成した『エビルキメイラ』を生み出した。
胸元にある水晶体がコアとなり、そこを消滅させない限り何度でも即時再生可能。
外見は『ガメラ３　邪神降臨』に登場したイリスに触手を多くした形態。

※強攻態

消滅したエビルキメイラに回していた魔力を還元させ肉体を強化さ

せた姿。
背中の羽が増え、体中に突起が生え、仙気に対する耐性も上がっており
全身の触手先端に剣や槍や砲塔を生やし攻撃力も各段にあげた。
弱点であったコアも強靭な外骨格で覆われた。
黒い霧に体を変化させ攻撃をかわす事も可能になり、クロスと高速戦闘をした。
最後はコアを残し全身をブレイカーで消滅させられ、残ったコアもグングーニルで貫かれ、レギナスと共にアルカンシェルで完全に消滅した。

名前：エビルキメイラ

イリスが蒐集した神獣のリンカーコアを使って召喚した融合超神獣。
上半身と背後に浮かぶ車輪はバハムート。
下半身はイクシオンの４本脚。
両腕はイフリート。
背中に生える翼はヴァルファーレ。
そして、全身にシヴァの凍気を纏っている。
近付くだけで凍りつくほどの凍気を持っていて、生半端な射撃や砲撃も凍らせてしまう。
しかも、イリスからの魔力供給で無限に近い再生力も持つ。
が、イリスが自身の体を再生している時は、キメイラは再生力を失う。
各神獣の技や魔法も使用可能。
最後は再生力を失った状態でゼスト隊の最強攻撃のオンパレードとプレシアのブレイカーによって消滅した。

オリキャラ紹介：3章（後書き）

クロス
「もぐもぐ…おいしいなこのチョコエッグ」

ノア
「そうですね…程良い甘さがナイスです、イツキ先生、コルトさん
ありがとうございました！」

クロス
「んで…クロスは？」

ノア
「あっちで倒れてますよ…昇天してるともいいますね」

カガヤ
「・・・・・・・・・・・・・」

クロス
「あーアルフォンス先生から頂いた甘楽の中身か…」

ノア
「ギンガの爆笑ＤＶＤで笑い転げた後にトドメにティアとスバルの
写真集…私は見てませんけど１８禁ギリギリだとか」

クロス
「……それで倒れたのか、鼻血が出てないのは免疫ついたってこと
かな？」

ノア
「どうでしょう?…それで、もう一つの甘楽は?…」

クロス
「さあ?どこかに運んだみたいだけど…」

ドカーン（地上本部から大爆発音）

クロス、ノア
「「……まさか（汗）」」

地上本部では…

管理局員A
「い、今の爆発はなんだ!?中将の部屋からだったぞ!?」

管理局員B
「わからない、今さっきオーリスさんが血相を変えて向かったぞ!」

クロス、ノア
「「……（滝汗）」」

オリジナルデバイス紹介：3章（前書き）

なのはやフェイトの既存デバイスの原作との違いや
オリジナルデバイスの紹介です。

オリジナルデバイス紹介：3章

※　新型カートリッジシステム『ＣＶＫ７９２－ＥＳ』

ベルカ式カートリッジシステム「ＣＶＫ７９２系」を太極と光天の書のアルハザードの技術を用いて
クロスとノアが主体となって発展させたもの。
従来のシステムよりベルカだけでなくあらゆる術式に対応出来る用に幅を利かせており
一番は使用者への安全対策をしっかりさせ負担も軽減させている。
それでも無謀な使用法を取れば使用者への負担はかかる。
あらゆるデバイスで使用した時のデータ収集の為に試作型を作成するにあたり
槍、拳、銃という従来とは違った形状のデバイスを集団・個人運用するゼスト隊が
新型の試験運用に選ばれた。
カートリッジの形状に問わず型式番号は『ＣＶＫ７９２－ＥＳ』で統一されている。

◆　レイジングハート・エクセリオン
使用者：高町なのは

◆　バルディッシュ・アサルト
使用者：フェイト・テスタロッサ

原作Ａ‘ｓと同じ名前だが、外見上は「Ｔｈｅ　ＭＯＶＩＥ　１ｓｔ」にカートリッジシステムを搭載した外見。
カートリッジシステム『ＣＶＫ７９２－ＥＳ』を搭載しており原作より安定性も出力も上がっている。

スタンバイモードなどは原作Ａ‘ｓと変わらないが…
フルドライブモードではそれぞれ魔力光のラインがバリアジャケット全体に入っている。
なのはのバリアジャケットには桜色のラインがフェイトには金色のラインが複数走っている。
これはフルドライブで上がった出力のうち耐久値を上回った分を外部へと排出する為のラインで
そのままバリアジャケットの防御やスピード強化などへと自動分配される。
原作よりもデバイスやなのは達への負担が激減している。

◆　ロンギヌス
使用者：ゼスト・グランガイツ

『ＣＶＫ７９２－ＥＳ』搭載試作型アームドデバイス。
形状は原作Ｓｔｓ編と同じだが出力は段違い。
元は原作同様非人格式アームドデバイスだったが、無口ながらＡＩが搭載された。
モードは「待機モード」「通常モード」「バーニングモード」の３つ

『バーニングモード』

ロンギヌスのフルドライブモード。
炎の魔力変換素質【炎熱】を得る事が出来、槍を炎が纏い、背中には炎のマントが現れる。
最高出力で放つ必殺技「鳳炎爆火斬」を使用すると副作用により、一時的に魔法が使用不能になる。
これは試作型特有の副作用であり、後日アップデート予定。

◆　デュエルキャリバー・リボルバーナックル
使用者：クイント・ナカジマ

原作Ｓｔｓ編でスバルとギンガが使用していた装備と同様の形状。
リボルバーナックルにはカートリッジシステムは搭載されていたが旧式の為、新調した。
その時、新たリボルバーナックルと同調するローラーブーツ型デバイスも開発された。
デュエルキャリバーにはオートで壁や天井など接地面に張り付く機能が付いている。
モードは「待機モード」「通常モード」「ストームモード」の３つ

『ストームモード』

デュアルキャリバーのフルドライブモード
風の魔力変換素質【風陣】を得る事が出来、ブーツに左右２本ずつのノズルが付き
加速性能があがり、背中には２対４枚の風の羽が付く。
クイントは陸戦魔導師で飛ぶ事は出来ないが、ストームモード中は自由に空を飛べるようになる。
ゼスト同様、最強の必殺技「リボルバーマキシマムバースト」を使用すると魔法が使えなくなる。
後日アップデート予定。

◆　トライギャラン
使用者：ティーダ・ランスター

両手持ちの２丁中型拳銃デバイス。ティアナのクロスキャリバーよ

り少し大きめ。
クロスのヴァジュラとアグニを参考に作成された。
元々はなかったＡＩを搭載した事により連射力や威力の調整がしやすくなった。
モードは「通常モード」「待機モード」「スナイパーモード」「ライジングモード」

『スナイパーモード』

２丁を連結させて銃身を伸ばした遠距離精密射撃モード。
ティーダは元々精密射撃が得意なので、よく多用する。

『ライジングモード』

トライギャランのフルドライブモード。
雷の魔力変換素質【電気】を得る事が出来、両脚に雷が纏い機動性が上がっている。
大口径の２丁ライフルとなり、連射力や威力が大幅に増大するが、魔力消費も激しい。
必殺魔法は「ライジングコメット」

◆　アスクレピオス
使用者：メガーヌ・アルビーノ

原作でルーテシアが使用しているのと同じグローブ型デバイス。
ブーストデバイスなのでカートリッジシステムは搭載されていないがノアのミラノールを元に微調整や改良が加えられ、性能は上がっている。
他のデバイス同様にフルドライブで魔力変換素質を得る事が出来る

ようになった。
モードは「通常モード」「待機モード」「アクアモード」

『アクアモード』

アスクレピオスのフルドライブモード
水と氷の魔力変換素質【氷水】を得る事が出来、両手足に水のフィンが生える。
メガーヌ自体もそれなりに格闘戦がこなせるのでフィンが生まれた事で打撃力が上がっている。
このモードで召喚魔法を使用すると自動的に水・氷属性が付く。
必殺召喚魔法は「水帝白天王」

◆　ケラウノス
使用者：プレシア・テスタロッサ

クロスとの戦いでデバイスが破壊されたプレシアに新たに作成した『ＣＶＫ７９２－ＥＳ』搭載デバイス。
試作型ではく正式仕様。形状は杖、先端に３つの突起がつき、その下に接近戦用に刃が付いている。
レジアスの指示で秘密裏に製造されていた特注品。
前の杖とは違いＡＩが搭載されていて「ラストスペルブレイカー」の安全性が向上している。
モードは「通常フォーム」「待機フォーム」「ウィップフォーム」と未使用のフルドライブフォーム。
ラストスペルブレイカーの特性上フルドライブでなくても撃てるようになっている。

『ウィップフォーム』

先端の突起が展開し3本の伸縮自在な雷の鞭が発生するフォーム。
攻防一体の攻撃が出来、鞭も闇の管制人格が引きちぎれないほどに上部になっている。

オリジナルデバイス紹介：3章（後書き）

カガヤ
「・・・・・・・・・・（汗）」

プレシア
「さて・・・何か言う事は？」

カガヤ
「すいませんした！（土下座」

クロス
「どうしたのさ？」

ノア
「・・・プレシアさんのデバイス紹介書き忘れてたんで慌てて直したんですよ…」

クロス
「なるほど・・・」

プレシア
「…せっかくだし、フルドライブフォーム試しましょうか♪」

カガヤ
「いーーやーーー！！」

第６１話　「真冬の怪談　メリーさんの電話？」（前書き）

怪談のはずなのに一切ホラー要素がなく…ギャグ＆カオス！
サブタイトル詐欺というやつかな？
ふぅ…やっとこういうのが書けた…

ちなみにメリーさんのイメージＣＶは平野綾さんです（笑）

第61話　「真冬の怪談　メリーさんの電話？」

正月　ハラオウン家

新年を迎え、雑煮を食べたりカルタで遊んだりと正月を満喫したクロス達。
えっ？　その描写はないのかって？　うん、ない。

クロス
「久々の本編で手抜き！？」

いいんだよ、？部で色々そういうイベントするんだから。
メタ発言はしたくないんだからとっとと本編に戻る戻る！

フェイト
「あまり慣れない事はしない方がいいと思うけどなぁ…」

ノア
「うんうん」

コホン…ともかく今クロス、フェイト、ノア、ティアナ、スバル、ギンガの5人は
クロスの部屋ですごろく中。
なのは達もいたのだが、もうそれぞれ家に帰っている。

なのは、はやて、その他
「私達今回出番これだけ～！？（涙」

御愁傷様……

こうしてまったりとした時間をすごしていると…

～～♪～～♪（某団長アニメの着うた）

クロス
「はい、もしもし？」

クロスの携帯が鳴りだした。

？？？
「もしもし、私、メリーさん。今神社にいるの…って今回は間違ってないわよね？
あなたクロスロードよね？」

最初こそ、低く暗めの声だったが、すぐに普通の女の子の声が聞こえてきた。

クロス
「あ、あぁそうだけど…誰だっけ？」

？？？
「あんたって人は……私よ、私！　メリーさん！　さっき名乗ったでしょ！！」

クロス
「あーそうだったそうだった…んで何の用？」

メリーさん
「そうそう、今神社で今回こそはあんたの所に行けるようにお祈りしたのよ！

さぁ～これから行ってあげるから覚悟なさい！！」

そう言って電話は切れた。

ノア
「マスター…今のってまさか…」

クロス
「あぁ、どうやらメリー…」

～～♪～～♪（某団長アニメの着うた再び）

メリー
「もしもし、私、メリーさん。忘れたけど、新年あけましておめでとう。今年もよろしくね！（ピッ）」

クロス
「……なかなか礼儀正しいんだなメリーさんって」

ギンガ
「それで、誰だったの兄さん？」

ティアナやギンガ達にメリーさんの電話について説明したが…

3人娘
「お、おもしろそ～！！」

3人共目がキラキラ輝きだした。

フェイト
「お、面白そう…なのかな？（汗）」

そして、また着信が…

メリー
「もしもし、私、メリーさん…神社の人ごみから抜け出せないの…助けて（涙）」

クロス
「そりゃ～初詣客でにぎわってるってテレビでやってたからな…どこの神社にいるんだ？」

メリー
「……鷲宮神社」

クロス
「それは混むぞ…うん、人ごみに酔わないように気をつけろよ」

メリー
「分かったわ、がんばる！！（ピッ）」

ノア
「どこまで行ってるんでしょうね、彼女は（汗）」

ＶＳ　ティアナ

そして、３０分後。

またもや着信が…しかし、今回取ったのは

ティアナ
「はい、もしもし」

ティアナだった…

メリー
「もしもし、私、メリーさん…ってまた違う子!?　ちょっとクロスはどうしたのよ!」

ティアナ
「クロスさんなら今いないけど…あなたメリーさん?　クロスさんが言ってたメリーさん!?」

ティアナの声に弾みがつく。

メリー
「え、あ、うん、メリーさんだけど…ふふ～ん、クロスが私の話をねぇ～♪」

クロスが自分の怖さをどう伝えているか興味が沸いた。

ティアナ
「うん!　クロスさんが天然なのかドジっ子なのか良く分からないけど良い子だって言ってた!」

メリー
「ちょっ、そういう話?　私は天然でもドジっ子でもないわよ!!　どういう話してるのよ!」

ティアナ
「あと…すごい大食いだとも」

メリー
「ちっがぁ～～う！！　私は大食いじゃなくて…」

ティアナ
「でも小さいとも言ってたよ、色々と…」

メリー
「ブチッ…おっけー、分かったわ。どうやらクロスは私に喧嘩売りたいようね…
その喧嘩…買ってあげるわ！！（ピッ）」

ティアナ
「あ、切れちゃった…」

ノア
「なんだか怒鳴り声聞こえた気がしたけど…どうしたの？」

ティアナ
「メリーさんからの電話…切れちゃった」

ノア
「そ、そう（汗）」

少し残念そうなティアナなのであった。

ＶＳ　スバル

また1時間後。
リビングでテレビを見ながら談笑をしていると…

～♪（別の着うた）

スバル
「もしも～し」

メリー
「もしもし、私、メリーさん…なんで着うた変わってるのよ？　ってまた違う子!?」

スバル
「あ、メリーさんだ♪　わたしスバルだよ♪」

メリー
「うぐっ…さっきの子といいなんで嬉しそうなのよ！　怖がりなさいよ！」

スバル
「??? メリーさん、怖くないよ??」

スバルは悪意のない思った通りの事を言ったのだが…

メリー
「こんな…こんな小さな子にすら怖がられないなんて…」

メリーさんには大ダメージだったようだ。

メリー
「そ、それで…クロスはどこにいるのかしら？」

スバル
「あれ？　クロ兄いない？……お父さん、クロ兄どこ～？」

ゲンヤ
「ん？　クロスなら風呂に行ったぞ？」

その時、風呂から声が聞こえてきた。

クロス
「なっ、母さんにノア！　なんで入ってきてるのさ！！」

クイント
「あら～？　久々に背中流してあげようかな～…なーんて思ったのよ♪」

ノア
「ふふ～ん、ちなみにギンガもいますよ♪」

ギンガ
「……［壁―・―・＊）ジッー」

クロス
「なんでギンガまでいるんだよ！！」

スバル

「あ～！！ギン姉もお母さんもずるい～！私も入る～！！（ポイ）」

メリー
「ちょっと！　放り投げないで！　私はどうなるのよ！？」

仕方なくフェイトがクロスの携帯を取った。

フェイト
「ご、ごめんなさい。またあとでかけてもらえるかな？」

メリー
「はぁ……仕方ないわね。あなた、フェイトだったわよね、この前電話に出た…
あなたも行ってきたら？」

フェイト
「えっ…えぇぇぇ～！？／／／　わ、私は別に…／／／」

内心ギンガやスバル達を羨ましく思っていたフェイトはまさかメリーさんに感づかれると
思わなかったので、かなり焦ってしまった。

メリー
「声だけで分かるわよ…私なら後でかけ直すから…とっとと風呂場に行きなさい！！！」

フェイト
「は、はいっ！！……あ、ありがとう、メリーさん」

最後に御礼を言い、電話を切った後急いで風呂場へと駆け出した。

そして、さっきからティアナは風呂場をちらちら眺めてはそわそわしている。

ティアナ
「……ぅぅ」

ティーダ
「…ティアも行ってきたらどうだ？」

リンディ
「うちのお風呂は広いから、ティアちゃんが行っても大丈夫よ」

ティアナ
「……（コクコク）」

リンディの言葉に首を高速で縦に振りながら、ダッシュするティアナ

メガーヌ
「青春ねぇ～…」

ゼスト
「そうだな…」

ゲンヤ
「ふっ…お父さんとは入ってはくれないんだな、スバル、ギンガ…」

微笑ましく見つめる大人たちの中で1人だけ涙を流すゲンヤであった。

ＶＳ　クイント

１時間後。

ゲンヤ達大人も風呂に入り、リビングで一杯飲んでいると…

～♪（盆踊りなどで流れる着うた）

クイント
「はい、もしもし、クロスの携帯だよ」

メリー
「もしもし、私、メリーさん…なんで今度は●ーラン節!?　しかも今度は女性の声!?
　どんだけクロスはハーレム状態なのよ!!」

クイント
「なんでこっちの着うたがそっちに分かるのかは謎だけど…あなたは誰？　クロスの友達？」

メリー
「私はメリーさん、断じて友達なんかじゃないわよ!　えぇ、友達なんかじゃないったら!!
　……あの～あなたはクロスのお姉さん？」

大人っぽい声だが随分と若々しい声に勘違いをするメリーさん。
そして、それを聞いたクイントの頬がものすっごーく緩んだ。

クイント
「お姉さんだなんて～私はクロスの母、クイントよ。よろしくねメ

リーちゃん♪」

メリーさん
「お、お母さん!?　あ、あの…えっと本日はお日柄もよく…じゃなくってええっとええええっと…」

クイント
「ふふっ、そんなに焦らなくてもいいわよ、可愛いわね♪　それで、クロスに用なの？
　ごめんなさい、あの子のぼせちゃって…ちょっとやりすぎちゃったかな」

メリーさん
「可愛いだなんて！／／／　えっ？　のぼせてるんですか？…風呂場で何したのよあいつは…
　女の子に囲まれて風呂に入った罰よ、うん」

その時、クイントに小悪魔の尻尾と触角が生えたのをゲンヤ達は確かにみた。

ゲンヤ
「（また何か弄りがいのありそうな玩具でも見つけたか…（汗））

クイント
「あら～？　ひょっとしてメリーちゃんも一緒に入りたかったのかな～？♪」

メリー
「そ、そそそんなわけないじゃない！　大体私はあいつとまだ数回しか話してないし

それに会った事もない…というかこれから会いに行くところだったのよ！」

クイント
「へぇ、これから来てくれるの…それは楽しみね。でももう夜遅いから
今度にしたらどうかしら？」

既に１０時を回っている。

メリー
「いや、そういう意味じゃなくって！　私は！…はぁ、もういいわ…また後日かけ直すわよ」

クイント
「ごめんなさいね、また電話しましょうね♪」

メリー
「今度はあいつと電話したいわよ…」

クイント
「あらら～私はお邪魔虫さんになる気はないから…若い子達のお好きにどうぞ♪」

メリー
「だ～か～ら～！！　私とクロスはそういう間柄じゃ…（ピッ）」

クイント
「…切れちゃったわね、それにしてもクロスったら私の知らない間にあんなに

可愛い声の子と知り合うなんて…ふふっ、将来が楽しみね」

ゼスト
「随分と話が弾んでいたようだったが、誰と話していたんだ？」

ゼストの問いに、みかんの皮を剥きながら含みのある笑みを浮かべて…

クイント
「う～ん、未来の義娘候補の新しい1人、かしらね～♪」

おまけ　？　その後のメリーさん

メリーさん
「し、しまったぁ！　電池が切れちゃったぁ！！　まだ神社の人混みから抜け出れなくて
助けを呼ぼうとしていたのに～！！」

神社の人ごみに飲まれて迷子中。

おまけ　？　風呂場の死闘（笑）

結局、フェイトやティアナも風呂場に乱入し大勢で入る事になった。

クロス
「うぅ～…どうしてこうなったかなぁ」

スバル
「ねぇねぇ、クロ兄、どうしてかべを向いてるの？こっちみてよ～」

クロスは体を洗っているスバル達を見ないように風呂の壁に向かって静かに入っていた。

ギンガ
「ティア～背中洗ってあげるよ」

ティアナ
「あ、うん、ありがとう。ギンガ」

クイント
「いつみても綺麗な髪の毛ね、フェイトちゃんは」

フェイト
「あ、ありがとうございます／／／」

ノア
「まーすーたー…えいっ！」

こっそりとクロスの背後に忍び寄ったノアは、そのまま頭を力強く抑えつけた。

クロス
「わっ、ぷっ！…な、何をするんだノア！……あっ！！」

無防備な所にノアに頭を押され沈められて、頭を出したクロスの眼の前には…
同じく無防備な女性陣…

フェイト、ティアナ、ギンガ
「……っ／／／」

スバル
「あはは～クロ兄びしょぬれだよ～！」

クイント
「元気よねぇ～♪（ニヤニヤ）」

ノア
「えへへっ～大成功♪」

クロス
「こ、こぉ～ら～！／／／／」

おまけ　？　その頃の残りのヒロイン達

なのは、はやて、その他
「「「……なんだろう、すごくムカムカしてきた…」」」

続く

第６１話　「真冬の怪談　メリーさんの電話？」（後書き）

カガヤ
「～♪～～♪♪」

クロス
「すごーく満足そうだなこいつは…」

ノア
「私も満足ですよ～♪　お風呂場イベントは必須です！」

クロス（黒化）
「…一番ぺったんこの癖に（ボソッ）」

ノア
「ぺ、ぺったんこ！？…今はぺったんこでも、大きくなれば大きくなるのは分かってるじゃないですか！」

カガヤ
「…でも今はなのは、フェイト、はやてよりも負けてる…（設定）」

ノア
「ちょっ！そんなどうでもいい設定云わないで下さいよ！」

カガヤ
「あ・・・お前らの３章での新しい設定書くの忘れてた（爆）…これから書こう」

クロス

「おい！！ってか俺らの設定なんか追加するのあったか？」

カガヤ

「まー…色々と？　ちなみにメリーさんは幕間というかギャグ話の準レギュラーだから」

ノア

「……そして出番が食われる…狸ちゃん」

狸

「狸いうなぁ～！！！（涙）」

第６２話　「真冬の怪談　口裂け女」（前書き）

わぁ～い、お気に入りが大激減！…やっぱこういう書き方で文才のないカオスギャグな話はダメなのかなぁ…
でもめげずに続けます！！（笑）
見てください…お願いしますから最後まで見てくださいペコリ（ｏ＿＿）ｏ）））（爆）

口裂け女のイメージＣＶは三石　琴乃さんです♪

第６２話　「真冬の怪談　口裂け女」

正月休みも明けたある日。
クロスは放課後図書室で１冊の本を読んでいた。

アリサ
「あ、いた～！　掃除終わったわよ～」

なのは
「ごめんね、待たせちゃって」

すずか
「さっ、帰りましょう」

今日はなのは達が掃除当番なので終わるまでクロスは図書室にいたのだ。
フェイトはプレシアと用事があるので先に帰った。

クロス
「おっ、じゃあ行くか…」

一冊の本を借りて、クロス達は学校を後にした。

なのは
「一体何を借りたの？」

クロス
「ん、これ…じゃ～ん『都市伝説大百科』」

それを見た3人の顔が若干引きつった。

なのは
「えっと…それは…まさか」

クロス
「そっ、メリーさんから電話きただろ？　あれで都市伝説とか怪談に興味沸いてね」

アリサ
「そ、そんなものに興味湧くんじゃないわよ！」

すずか
「興味あるなら…私の持ってる本をいくつか持ってくるよ？」

すずかの言葉にまたもやなのはとアリサは引いた。

アリサ
「な、なんですずかそういう本持ってるの？」

なのは
「それもいくつか…なんて」

・
・
・

そうして4人は都市伝説談義をしながら（2名は物凄く引いているが）公園までやってきた。

クロス
「それで口裂け女はポマードが嫌いって話なんだよ」

すずか
「私の持ってる本だとべっこう飴も有効、って書いてるよ」

アリサ
「全く話についていけないわ…ってどうしたのなのは？」

なのはは公園の脇道をじっと眺めていた。
その道の先でなのはは傷付いたユーノを見つけて魔法少女へとなったのだ。

なのは
「ううん、なんでもないよ」

なのはの笑顔にクロスはどこか安心したように

クロス
「……そっか」

とだけ呟き、再び歩き出した。
すると、1人の女性がクロス達の方へと向かって歩いてくるのが見えた。
その女性は真っ赤なコートに黒い帽子を被り、口元にはマスクをしている。

アリサ
「ね、ねぇ…あれってまさか…」

嫌な予感がしたアリサは思わずクロスの袖をぎゅっと握り
反対側ではなのはもしっかりと手を握っていた。

クロス
「まさか～いくら……この本の口裂け女の絵そのまんまの人がいたからって」

クロスが借りてきた本の絵とそっくりそのままの容姿の女性は音もなくクロス達の前へとやってきた。

アリサ、なのは
「……（ガクガクブルブル）」

すずか
「２人共、驚き過ぎだよ」

クロス
「全く、それで俺達に何か用ですか？」

マスクの女性
「ねぇ……私って、キレイ？」

アリサ、なのは
「「で、でた～！？」」

すずか
「２人とも落ち着いて！　ただ聞かれただけだから！」

クロス
「う～ん、母さんの方が綺麗だよ」

アリサ

「すずかは落ち着き過ぎ！　でクロスは何普通に答えてるのよ！！」

マスクの女性
「そう…これでもキレイ？」

アリサ
「って、微妙に会話繋がってないわよ！？」

アリサのツッコミを無視してマスクの女性はゆっくりとマスクを外した…

アリサ、なのは
「「や、やっぱり口裂け女～！？」

すずか
「わぁ…」

マスクの下は口が耳まで裂けた恐ろしい顔をしていた。

クロス
「あ、本物の口裂け女だ」

アリサとなのはの顔はもう真っ青だ。
流石のすずかの顔も若干恐怖が浮かんでいる。
だが、クロスは平然としている、この程度は任務で見慣れているからだ。

口裂け女
「どう、これでもキレイかしら？」

クロス
「…ほい」

そう言ってクロスが出したのは…手鏡。
それに映しだされるのは口裂け女の恐ろしい顔。

口裂け女
「ぎゃ～！？　口が耳まで裂けてる～！？……ってこれ私じゃない！！」

自分の顔なのに自分で怖がってしまった。

アリサ
「なんで手鏡なんて持ってるのよ、差し出すのよ！　なんであんたは自分の顔で怖がってるのよ！」

なのは
「あ、アリサちゃん落ち着いて落ち着いて！」

クロス
「人に聞くより自分で見てもらった方がはっきりわかりやすいかなーと…」

口裂け女
「……私ってあんな顔してたのね　ｏｒｚ」

口裂け女は地面に手をつき深く落ち込んでいた。

なのは
「な、なんだか…少し可哀相な気がしてきた、かな」

クロス
「なのは…現実を見せるのも優しさなんだよ」

すずか
「それはちょっと違うと思うなぁ…」

アリサ
「もう…どうでもよくなってきたわ」

先ほどまであれほど怖がっていたなのはとアリサだったが
慣れてしまったのか、平然としている。

口裂け女
「…はぁ、やっぱりあの子の言う通りね…ちっとも怖がらないわ」

マスクをつけ直し、気を取り直した口裂け女は深く息を吐いた。

クロス
「ん、その口ぶりだと…俺達と知ってあんなことしたの？」

口裂け女の言葉を聞いたクロスはふと疑問に思った。

口裂け女
「そうよ、メリーちゃんからちっとも怖がらない子がいるって聞いてね」

なのは
「メリーちゃんって…メリーさんの電話の？」

アリサ
「ちっとも怖がらない子って間違いなくクロスの事よね」

マスクを付けたのでもう怖くもなんともなくなったのかすっかりなのは達は普通に会話している。

クロス
「怖がらないって言われてもなぁ…正直何を怖がるのかがわからない」

アリサ、なのは、口裂け女
「「「……えっ？」」」

クロス
「だってメリーさんの電話だって普通に女の子からの電話だし、口裂け女さんだって…
ただ口が裂けてるだけでしょ？」

真顔でそんな事を言うクロスになのは達は呆れ半分で唖然としてしまい

口裂け女
「ただ口が裂けてるだけ…ただ口がって……私の存在意義はなんなの　ｏｒｚ」

口裂け女はまたしても凹んでしまった。

すずか
「クロスくん、流石に不味いよ。口裂け女さんは口が裂けてるのが自慢なんだから…」

アリサ
「それは自慢じゃないと思うわ（汗）」

クロス
「そっか、商売道具みたいなものだったのか」

なのは
「それも違うと思うよ（汗）」

わざとかと思うほどにぼけぼけな2人だが、本人からすれば真面目に言っているらしい。

凹んだまま放置するのは流石に気が引けたので口裂け女を慰める事になった。

クロス
「要はさ、ただ口が裂けてるだけで怖がらせようってのがインパクト薄いんだよ」

アリサ、なのは
「「裂けてるだけで十分なインパクトだよ！？（汗）」」

しかし、口裂け女の方はクロスの指摘に眼を見開き
そして、微かに頷きながら

口裂け女
「そうね、やっぱりそうよね。私もそう思ってたわ」

アリサ、なのは

「「納得した!?　しかも自覚してたの!?」」

すずか
「2人ともさっきから息ぴったりだね♪」

笑顔でそういうすずかになのはとアリサは深く溜息をつくのであった。

こうして、口裂け女を立ち直らせるために改造計画が立ちあがった!

クロス
「まずは、マスクを外すタイミングとセリフ、これ重要だと思うんだ」

口裂け女
「でもあなたさっきインパクトが足りないって…」

クロス
「だ～か～ら、足りないなら…つけ足せばいいんだよ、例えば…相手に恐怖を与えたいなら
声色を変えるとか、声をもっと低くして、震えるようにとかだよ」

口裂け女
「なるほどなるほど…」

口裂け女は先ほどからのクロスの指南に必死にメモを取っている。

アリサ
「ねぇ…帰らない?」

なのは
「も、もうちょっと…」

すずか
「そうだよ、生まれ変わった口裂け女さん、見たいと思わない？」

アリサ
「思わない！！！」

・
・
・

クロス
「次に動作！　さっきは一気にマスクを剥がしてたけどもう少しゆっくりでもいいと思う」

口裂け女
「でも、一気に見せた方がより印象的になるわよ」

クロス
「ん～なら…こうしてみたらどうかな？…見ててよ」

クロスは自分もマスクをつけた

クロス
「ねぇ…これでも…き～れ～いぃ？」

俯きながらゆっくりと…そして一気にマスクを取った。
同時に眼をカッと見開き、口元は酷く歪ませた笑みを浮かべながら

アリサ、なのは、口裂け女
「「「きゃあぁぁ～～！！？」」」

あまりの迫力に口裂け女も悲鳴をあげてしまった。
すずかだけは驚いた表情を見せているが拍手をしている。

すずか
「すごい、すごいよクロスくん！　実際口は裂けてないのにすごく怖く表現出来てたよ！」

アリサ
「びっくりしたわ…本当に怖かった」

なのは
「うん、口裂け女になったのかと思ったくらいだよ」

口裂け女
「私でさえも怖くなったほどだもの…でも、こういうやり方でなら」

クロス
「ま、これはほんの一例だな、あとは自分なりのアレンジを色々考えればいいよ」

こうして、クロスの口裂け女恐怖講座は終了となった。

口裂け女
「ありがとうクロスくん、あなたのおかげで怖がらせ方に自信がついたわ！
　正直…今回初めて驚かせたから自信なかったのよ」

そう言って苦笑い（マスクなのでわからないが）を浮かべる口裂け女に

クロスの眼がほそまった。

クロス
「今回が…初めて？」

口裂け女
「そうよ、私今まで誰を驚かせた事が…あれ？　そういえば私は…いつから……
　ううん、なんでもないわ、それじゃあまた機会があれば会いましょう」

口裂け女はそう言ってクロスと握手をして別れた。

なのは
「がんばってくださいねぇ～…と言うのはおかしいかな？」

アリサ
「いいんじゃないの？　別にただ怖がらせたいだけ、みたいだったし…あぁ～私なんか
　都市伝説とか怪談の見方が今回で変わっちゃったなぁ…」

すずか
「ふふっ、興味が沸いたならそういう系のＤＶＤでも見てみる？」

アリサ
「い、いえ、それは遠慮するわ（汗）」

なのは
「あははは…どうしたのクロス君？」

ふと黙りこんでいるクロスになのはが声をかけた。

クロス
「ん？…あ、あぁなんでもないよ…口裂け女さんに肝心な事言い忘れてたなぁとね」

3人娘
「「「肝心な事？」」」

クロス
「今度は…せめて暗くなり始めてから、ってね」

3人娘
「「「…あっ」」」

時刻は午後2時、まだまだ日の光が強い真昼間。
今日は午前中で終了となり、午後からは休みの日だった…
午後からはそのまますずかの家に行く事になっていたので問題はなかったが…

一方、月村家では…

はやて
「…おそいなぁ～クロス君達…どこで道草くっとるんやろ」

ノア（透明になりはやての側にいる）
『まぁまぁ…少し用事済ませてから来るってマスターから念話入りましたし』

ヴィータ
「うぅ……」

シグナム
「クロスロードを待たずとも先に昼食を食べても良かったのだぞ、ヴィータ」

ヴィータ
「う、うっせぇ！　クロスを待ってるんじゃないだ！　なのは達を待ってるんだ！！」

クロス達が来るまで昼食を取るのを我慢していたはやて達がお腹をすかせていた。

続く

クロス
「（…やっぱり、もっと精密な調査を依頼した方がいいみたいだな…）」

第６２話　「真冬の怪談　口裂け女」（後書き）

カガヤ
「さーって…書き方が悪いのかネタが悪いのかギャグセンスが悪いのか……全部だな」

クロス
「そこまで卑屈にならなくてもいいんじゃないか？（汗）」

ノア
「さっすがカガヤ、わかってますねぇ♪」

カガヤ
「でしょ♪」

クロス
「うぉい！！…ってカガヤも開き直るな！！…第一俺らの設定どうした！」

カガヤ
「ん？あーイマイチ説明不足だったから一から書き直し中…明日か明後日には書きたいなぁ…♪～（・ε・；）」

クロス
「そんなんだから不評を喰らうんだぞ…」

カガヤ
「……がんばります（汗）」

ノア
「シリアスで戦闘描写もある話はもうしばらくお待ちくださいね…
次回からは書き方を以前のに戻す予定だそうですので…どうかもう
少しは見捨てないでやって下さいね♪」

カガヤ
「誰かおらにギャグセンスを～！！文才を～～！！！」

第６３話　「真冬の怪談　雪女」（前書き）

今回は今まで通りギャグ回ですが…バトルもあり。
うちの小説の八神家…主にシグナムのポジションや役回りが段々固まってきてるかも（笑）

シグナムキャラ崩壊注意！……かな？（笑）

第６３話　「真冬の怪談　雪女」

1月も終わりに差しかかった金曜日…
この日、海鳴市は朝から晴れていたが夕方から急に空模様が怪しくなり、猛吹雪となった。
八神家に遊びに来ていたクロス達は、しばらく雪が止むのを待っていた。

「こんなにすごい吹雪、私見た事ないよ」
「うん…そうだね」

なのはとすずかは窓の外で轟々と吹き荒れる吹雪を眺めていた。

「ふぅ…はねてもはねてもキリないな」
「こう吹雪いていてははねたそばから積っていく」
「全くだ…」

外で雪はねをしていたクロス、シグナム、ザフィーラにフェイトとノアがタオルを渡して行く、3人とも全身雪塗れだ。

「3人とも、御苦労さま。牛乳温めたから飲んでな」
「クロス君も雪はねありがとう。クッキーもあるわよ」

車椅子なしでも十分に歩けるようになったはやてとシャマルが牛乳を持ってきた。

「もう夜も遅いし止まっていったらどうや？」
「そうね…車も出せなさそうだし」

アリサが言うように記録的な猛吹雪の為、市内各所で道路が雪でふさがれている。というニュースが流れいている。元々雪があまり積もらない街なので除雪車の数が少ないのだ。

「俺のギアで送ってもいいけど…」

（マスター…あれ、あれ）

と、そこまで言いかけてクロスはノアに言われてはやての方へとちらりと眼をむけると懇願するような視線を送ってきていてシグナム達が苦笑していた。

「はぁ…ここははやての好意に甘えるか」

「そうだね、私家に電話してくるよ」

「私も…はやて、電話貸してね。雪のせいか電波が悪いのよ」

なのは、アリサ、すずかはシャマルに電話を借り家に連絡しにいった。

「リンディさんには通信で伝えてありますよ♪」

「動き早いなノア……ごめん、シグナム、迷惑かけるな」

「気にするな、お前達ならいつでも大歓迎だ、そうだな、ヴィータ？」

「うっ、あ、私ははやてがいいというなら何も言わないっての」

シグナムに話を振られたヴィータの反応がおかしくてフェイトとノアは思わず笑ってしまった。

そして、急きょ開かれたお泊り会は賑やかに過ぎて行った。

次の日

「やまないね…雪」

なのはの言う通り、雪はやまなかった。

窓の外では相変わらずの猛吹雪で一面の銀世界。

ニュースでは雪害の事ばかり言っていて、気象予報士が異常気象と伝えている。

「交通がマヒして結構大変みたいだよ…」

すずかとアリサも心配そうにニュースを眺めている。

最初のうちは見慣れない雪に心躍っていた住民達だが、降りやまない雪に嫌気がさしていた。

念の為、アースラに連絡を取って魔力反応などを調べたが結果は…白。

これは完全な自然現象と言う事だ。

「流石にみんなを家に戻した方が……マスター？」

ギアでなのは達の家まで送ろうと言いだしたノアだがクロスが外を見上げて何やら睨んでいた。

「……何か、いる」

「何？」

クロスの言葉にヴィータやシグナムも同じ方向を見上げるが、何も見えない。

「どこにいるんだ、クロス？」

「ずっと上…雲の中、何か力を感じるんだ、魔力じゃない力を」

「レイジングハート、どう？」
＜私は何も探知出来ません……訂正します。不思議な力の流れは感じます＞
＜私もです＞
「バルディッシュ、どういう事？」
＜魔力とは違う力を微かに感じます、クロス様の言う方向を重点的に調べてやっと感じました＞

クロスやレイジングハート達が感じた先をアースラで調べてもらった。

『確かに、クロス君の言った方向の雲の中に何かがいるね…でも魔力反応はないよ』
「やっぱり…正体や姿は分かる？」
『う～ん、ごめん、よくモニター出来ないよ。おかしいなぁジャミングはかかってないんだけど』
「でも、これって人…だよね？」
「シルエットだけならな」

アースラのエイミィが調べてくれた映像をラファールがモニターに映し出した。
そこには厚い雲の中を踊るように上下左右に動く人影が映し出されている。

「何にせよ、この世界で空を飛んでるんなら、普通じゃないな…よしっ、行ってくる」
「えっ、クロス君？」
「あ、なのはとフェイトはいいよ。戦闘になるかもしれないしこの天候で戦闘は
慣れない2人には結構きついからな」

そう言ってアップを始めたクロスになのはとフェイトは顔を見合わせる。

「この猛吹雪の中だよ!?　いくらクロス君でも危険だよ」
「ならば、私が一緒に行こう。主はやて、よろしいですか？」
「うん、クロス君をお願いなシグナム。気を付けていくんやで」

シグナムも立ち上がり軽く体をほぐす。

「それじゃ…いくか、座標認識はいいな？　ラファール」
＜はい、問題ありません＞

「気を付けてね、クロス」
「危ないと思ったらすぐに戻ってくるのよ」
「ありがとうな2人共…行ってくるよ、ノア！」
「はい！　ユニゾン、イン！」

心配するすずかとアリサの頭を軽く撫でクロスとノアはユニゾンをした。
シグナムも甲冑を身に纏う。

「クロス、シグナム、気を付けて…」
「何かあったら私達も行くからね」
「ははっ、俺とシグナムの騎士コンビが行くんだ、なぁ？」
「そうだな…負ける気はしないな…行くぞ、クロス」
「あぁ…ギア！」

なのは達の心配をよそにクロスとシグナムは絶対の自信を浮かべ、謎の人影へと転移した。

「やっぱりあの姿のクロス君も…かっこいいよね」
「…そうね」

すずかとアリサの呟きになのは達はクスリと笑った。

・
・
・

海鳴市　上空

分厚い雲の中、クロスとシグナムは謎の人影のすぐそばまでやってきた。

「くぅ～…アーマーの効果あってもきっついなこれ…大丈夫かシグナム？」
「なんとかな…しかし、視界も悪いぞ」

アルガスアーマーと甲冑のおかげで寒さは感じないが
視界を埋め尽くす猛吹雪のせいで前が全く見えなくなっていた。

「ラチがあかないな…ノア、結界展開！」
『了解！　広域封鎖結界展開！』

まずはこの辺り一体を結界で包み込み外部への影響を失くす。
そして、次にクロスは両手を交差させ、力強く広げた。

「ヒート…ストーム！！」

クロスを中心に熱風が吹き荒れ吹雪を雲ごと吹き飛ばした。
流石に分厚い雲の層に穴をあけるまでには至らなかったがこの空域

の視界は開けた。

「あら？　あらら～？…だ～れよ、せっかくの吹雪を吹き飛ばしちゃったのわぁ～」

頭上から声が聞こえ、クロスとシグナムが身構えると
肩までかかる青みがかった銀色の髪、見る者を凍て付かせるような青い眼に真っ白な肌
腰に瓢箪をぶらさげ胸元を開かせた白い着物を着た女性は、雪を纏いながら降りてきた。

「あれ？　人間が空を飛べるようになっただなんて…ん～？……あんた達人間じゃないね」

若干頬を赤くし呑気そうに話しかけてきたが、2人をじっと見つめると、警戒を強めた。

「一番人間ぽくないお前に言われたくはないんだけど…何者？　この吹雪はお前のせいか？」

クロスも負けじと睨み返すが女性は不敵な笑みを浮かべるだけだ。

「ふふふっ…私は雪女の氷女（ひめ）…雪を降らせるのは雪女の仕事でしょう？」

「そうか、ならば即刻この吹雪を止めろ。街は大混乱に陥っているんだぞ」

「知った事じゃないわ～私はただ雪を降らせるだけ～…それが雪女の存在理由だもの♪」

シグナムの言葉も意に反さずに氷女は陽気に踊り始めた。

それを見たクロスとシグナムは頷き合い、左右に散った。

「これが最後の通告だ、吹雪を止めろ」

「止める気がないなら…少し痛い目を見てもらうぞ」

それでも氷女は踊りを止めない。

「出来るのかしら？　私は自然が生んだ雪と氷の妖怪…坊や達も不思議な力使ってるみたいだけど
大自然の力に勝てるかしら？」

「そうか、自然の力をそのまま使っているから探知できなかったのか」

魔力や仙気ではなくあくまで大自然の力、すなわちどこにでも溢れている力だ。
異能を検知しようとしても無理な話だった。

「それでも、これ以上好き勝手に暴れさせは…しない！」

シグナムが斬りかかるが、氷女はすいっと流れるように身をかわす。
しかし、かわした先には闘士クロスが身構えていた。

「殺しはしないけど、覚悟しろよ…シェルブリット！！」

完璧に捉えた攻撃だったが、氷女はにやりと笑い右手を突き出すと

「はい、終わり♪」

「なっ！？」

クロスの右手に吹雪を纏いつき、一瞬で凍りつかせてしまった。

『マスター！　一端離れてください！』
「言われずとも…」

クロスは氷女から距離を取り、シグナムの元へと飛んだ。

「ぐうぅ……」
「大丈夫か、クロスロード」

凍りついた右手を溶かそうとするシグナムだがそれより速く氷女が動いた。

「だ～か～ら～大自然の力に勝てるかっての…そのまま2人まとめて凍りつきな！」
「シグナム、危ない！」

氷女は両腕を突き出し、激しい吹雪を繰り出してきた。
とっさにクロスは左手でシグナムを突き飛ばし、吹雪から庇うように身を繰り出した。

「クロスロード！！」

見る見るうちにクロスの全身は氷漬けにされてしまった。
シグナムも完全にかわしきれずに右足が凍りついている。

「あっはははは～！　私を舐めるからこうなるのよ！…さーってそっちの剣士さんはどうやって…」
「くくくっ……」

勝利を確信し、シグナムをどうしようかと考え込んだ氷女だが

シグナムの笑い声に顔をしかめた。

「何がおかしいのよ、あなたの仲間の坊やは氷漬けなのよ？　それとも気が狂ったかしら？」

「いやすまない。確かにお前の力を甘く見ていたようだ…だが」

ピシッ

何かにヒビが入ったような音が響いた。

「今度はお前が私達を甘く見たようだな…」

ピキッ…バキッ……ゴオオォー！

クロスの氷にヒビが入り、そこから真っ赤な炎が漏れだし…爆発したかのように一気に溢れ出た。

「うおおおぉぉぉ～～！！！」

「な、何？　氷漬けで死んだはずじゃ！！」

燃えあがる氷の中から全身を炎に包んだクロスが出てきた。

「確かに氷漬けにはなったけど…あれくらいじゃ死なないさ」

「そう言う事だ…レヴァンティン！」

＜エクスプロズィオン＞

シグナムの方もレヴァンティンがカートリッジをリロードさせると全身に炎を纏い

あっという間に凍りついた右足を元に戻した。

「ぐぬぬぅ…私の吹雪で凍りつかないなんて…なるほど、甘く見ていたわ」

そう言うと腰の瓢箪の栓をあけ、中の液体を一のみした。
飲んだ氷女の頬は先ほどより若干また赤くなり、しゃっくりを上げている。

「…それは、まさか酒か？」
「そうよ、人間が作った酒は上物でね、濃度も高くて私のお気に入りなのよ」
「おいおい、雪女がお酒で温まったら内側から溶けちゃうんじゃないか？」

クロスの指摘に氷女はさらに瓢箪の酒を飲み

「私をそんじょそこいらの雪女と一緒にしないで、私は真夏の炎天下ですら平気なのよ
お酒程度で体が温まったからってどうってことないわ！」

両手に巨大なツツラを作り出し、剣のように振りかぶってきた。
騎士となったクロスとシグナムは左右に散らばるように避け、同時に斬りかかった。

「紫電一閃！」
「炎天剣！」

2つの炎の剣が氷女へと迫ったが、氷女はそれらを見向きもせずに

ガキンッ

両手のツララで受け止めた。

「むっ」

「ありゃ、意外と力あるんだな…」

「んふふ～そうでしょそうでしょ♪」

「でも、これはどうだ？…フレイムノヴァ！」

クロスは空いた左手を氷女へと突き出し、炎の砲撃を放った。

「～～っ！！？」

声にならない悲鳴をあげ、火だるまになった氷女は落下していった。

「少し、やり過ぎじゃないか？」

「そんな事ないよ、ほら」

冷や汗を流すシグナムが眼にしたのは、所々着物を焦がしてはいるがしっかりと宙に浮かぶ氷女の姿。

「あ～危なかった…ちょっと、レディーにいきなりあれは酷いんじゃないの！」

今度は氷女の周りの雪が固まり、氷塊となって撃ちだされてきた。

「…なっ？」

「あれを受けてもまだこれだけの力が」

『おそらく、吹雪で防いだのだと思います』

ノアの分析通り、氷女はとっさに全身を吹雪で覆いダメージを最小限で食い止めていた。

「しかし、ただの炎ではないのだぞ？　それをただの吹雪で防ぐとは…」
「魔力や仙気とは違う自然の力を使った雪や氷だから…か」
雪女は正確には妖力という力を使っているが、それも自然の力から生み出された力。
普段目にしている力とは全く違うこの世界独自の力にクロス達は苦戦している。
魔力や仙気で操った炎よりも自然の力で発生させた吹雪の方が力が上だからだ。

『解析するのに少し時間かかりますよ、何せ魔力と違って自然が生み出した力なので…』
「解析を待っていたら街が雪に埋もれてしまうな」
シグナムが見降ろす海鳴市では、先ほどよりも更に激し吹雪が嵐のように吹き荒れていた。

「近付けば凍らされてしまう…遠距離からの仙気の炎ですらすぐに凍らされる…どうする？」
銃士となり炎の仙気弾で迫りくる氷塊を撃ち落としながらクロスは考え込んだ。
「ならば魔力でも仙気でもない炎で一瞬でも弱らせる、ならどうだ？」
シグナムは斬り落としながら、ある一点を眼で知らせた。
それに気付いたクロスはニヤリと笑みを浮かべた。

「なるほど…シグナム、足どめお願い」
「分かった、クロス…外さないようにな」
2人は頷き合うとそれぞれ別方向へと飛んだ。
シグナムは一直線に氷女の方へと突き進む。
「…特攻でもする気?…食らいなさい！」
「飛龍翔刃陣！」
炎のシュランゲを身に纏わりつかせ、迫りくる氷塊を蒸発させ
「こんのぉ！…凍れ！！」
両手で圧縮した吹雪をシグナムへと放つが
「飛竜一閃！」
ドゥン！
シグナムの炎の技と相殺され、水蒸気爆発が起こった。
「……！」
シグナムは距離を取り、直撃を避けたが
「あっぐぅ…！」
氷女は爆風もろに浴び、吹き飛ばされないようにするのが精一杯で
動きが完全に止まった。

バシュッ…バシャ

「なに！？」

離れた場所に移動していたクロスがその瞬間を逃すはずがなかった。
クロスのスナイパーライフル“ユニコーン”が放った一撃は氷女の腰に吊るされた瓢箪を粉砕した。
そして、中に入っていたお酒が氷女へと振りかかる。

「…瓢箪の中身がうまくお前にかかるように撃てる角度に移動する時間稼ぎと」
「お前の動きを止めるのが私の役目だったんだ…今だ、クロス！」
「くっ…しまっ！」

氷女が次の行動に移る前にクロスの眼の周りに紋章が浮かび上がった。

「…お酒の飲みすぎには要注意ってな…フレイム・ギア！」
「きゃあぁぁぁぁ～～！！」

クロスの付けた火は氷女についた酒にすぐに引火し瞬く間に全身を覆い尽くした。
先ほどと同じく吹雪で炎を消そうとするが今度はなかなか消えない。
今度の炎は着火こそ仙気の炎だが全身に燃え広がったのはお酒に引火した自然の炎
火力が違い、なかなかすぐには消えなかった。
やっと火の勢いが弱まった氷女の眼の前にはクロスの炎の拳が迫っていた。

「これで…トドメだ！…フレイム・シェルブリ……へ？」

だが、クロスの拳は氷女に届く事はなかった。
さっきのように凍りつかされたわけではなく、クロスが自分で止めたのだ。
その理由は……

「な、にっ！？」
「ひぐっ…うぇ……うぇえ～ん…ごべんなざいぃ～～！！！！」

シグナム並の大人の女性だった氷女が、なのは達並に幼い女の子になっていたからだ。

もう、吹雪は収まり雲の切れ目からは一日ぶりの日差しが海鳴市を照らしていた。

・
・
・

八神家

「じゃあまず氷女の話を整理するぞ、お前は冬の間に全国各地を渡り歩いていて
海鳴市に入った時に急に力が漲って上機嫌になりお酒を飲んで、酔っぱらって
気が付いたら空前絶後の猛吹雪を降らせていた…で、いいか？」

クロス、ノア、なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか、守護騎士達
そして、駆け付けたリンディとクロノの中心には

「はい…すみませんです…」

後ろ手にバインドをかけられた少女・氷女が座り込んでいた。

「人間と結ばれた雪女の話を聞いて、私も人間に興味がわいて全国を回ってみようと思いまして…」

シュンと沈み込んだ氷女がボソボソと話す事に黙ってなのは達は黙って聞いていた。

「それで、力を使い過ぎて、一時的に幼くなった…と言うわけね？」

「はい……もう力は何も残っていません…」

リンディの問いにも力なく答える氷女。

「リンディさん…あの、この子はどうなりますか？」

「…もしかして、重罪人として逮捕になりますか！？」

なのはとはやてが恐る恐るリンディに尋ねた。

俯き涙を流しながら反省と謝罪の言葉を並べる氷女に罪悪感を感じているのだ。

「う～ん、そうねぇ…正直言って、魔法もロストロギアも全く関わってないし、氷女ちゃんは

この世界の自然が生み出した存在なのだとしたら…私達の管轄外で…」

「罪を問う理由もない…幸い吹雪で人的被害は最低限だ、怪我人はいても死者はいない」

リンディも困ったように言い、クロノも続く。
慣れない大雪で大混乱にはなったが、あまりの猛吹雪で皆自主的に家に閉じこもったり
近くのビルなどに避難していたため被害はあまりなかったのだ。

「それじゃあ…」
「十分に反省しているようだし…このまま解放だな」

クロスの締めの言葉になのは達の表情が輝く。

「ありがとうございます！　ありがとうございます！　ありがとうございます！」

氷女は地面に頭突きでもするかの勢いで何度も土下座している。

「他の街に行っても今回みたいな事するなよ？…もし、したら……」
「は…はひぃ～！！　肝に銘じます！！！」

眼に紋章を浮かべ殺気立てるクロスの脅し（注意）に
元から白い肌をさらに真っ白にして氷女は何度も頷いた。

結局、力が戻り元の大人の姿に戻るまで1日ほど休めばなんとか戻るとの事なので
その日は、氷女は八神家に泊り、監視と言う名目でクロスも（無理やり）泊る羽目になった。
それならばとなのは達も引き続き泊る事になり、氷女を交えたお泊まり会は賑やかに延長戦になった。
大人の時とは打って変わり大人しい性格の氷女はなのは達と一緒に風呂に入り…
緊張のあまり逆上せてしまう、などのハプニングが起こったが何事

もなく翌日を迎えた。
ちなみに、子供になっても氷女ほどの雪女では風呂も問題なく入れるそうで
氷女が入ったからといってお湯が温くなる、などと言う事はなかった。

翌日　朝

「それじゃあ、色々と迷惑かけてごめんなさいね」
クロス達に見送られて氷女はまた旅立っていった。
だが、去り際に…
「…また来るわ、その時は……」
チュッ
「「「「「「ああああっぁぁぁぁ～～～！！？」」」」」」
「…ほへっ？／／／」
「あなたの視線にぞくぞくしたわ…また、遊びましょうね、クロス君♪」
クロスの頬に雪女とは思えない熱いキスをされて、なのは達が大混乱に陥ったのはまた別の話。

続く

余談

「あの時は助けてもらったな、ありがとう、クロス」
「あーいやいや、こっちこそ俺だけだとちょっときつかったよ、ありがとうなシグナム」
「ふふっ、お前と組むのも…悪くなかったぞ」
「ほほぅ…」

そう言ってクロスとなのは達も八神家からそれぞれの家へと戻って行った。
そして、クロスとシグナムの会話に聞き耳を立てる狸一匹。

「なぁ…シグナム？」
「な、なんでしょうか主はやて！？」

只ならぬオーラを纏ったはやての言葉に背筋を伸ばし答えるシグナム。

「いつの間に…クロス君の『クロス』って呼ぶようになったん？」
「ま、マエカラデスヨ？…」

はやての剣幕に汗がだらだらと流れる。

「そう言えば…今回も初めは『クロスロード』って呼んでいましたよね？　それに…
さっき『クロス』と呼んだ時にシグナムの頬が若干赤かったですねぇ…」
「あ、ああ姉上ぇ！！？…いや、これはですね、寒さのせいで…」

ノアが小悪魔の笑みを浮かべボソリと呟き、クロスの後を追った。
その言葉を聞いたはやての耳としっぽが狸から魔王へと変わったような気がした。

「な～ん～や～てぇ～？」
「……聞きづてならねぇな…」
「そこらへんを詳しく聞きましょうか♪」

はやてはフラグを先に建てられた嫉妬心から
ヴィータはよくわからないモヤモヤ感から
シャマルはただの好奇心から
三者三様の思いでシグナムを引きずる。

「あ、主！　ヴィータ、それにシャマルまでどうした！？…ザ、ザフィーラ！」
「……すまん、シグナム…骨は拾おう」
「あ、姉上！クロス！！助け…」
「「「…またクロスって呼んだ（♪）」」」
「うっ、うわあぁあぁ～～！！？」

オチ担当、八神家

第６３話　「真冬の怪談　雪女」（後書き）

カガヤ
「うーん、予定より長くなった（笑）」

ノア
「はやてフラグ強化しようとして…先にシグナム回に（笑）」

狸
「…まさかシグナムに先を越されるとは…」

クロス
「いや、ただ名前を短く呼ばれただけでそこまでじゃないでしょ…」

狸
「そやな～クロス君にしてみれば…氷女さんにされた事の方がインパクトでかいもんな～（イジイジ）」

クロス
「隅っこでへのもへじ書き始めた!?…暗いから!思いっきり暗いから!!」

カガヤ
「…まー…あれだ…どうしてこうなった?」

ノア
「私に聞かないでください（汗）それより私達の設定はどうしたんですか?」

カガヤ
「今後の事もあるから…幕間劇おわって4章に入る直前に入れる事にしたよ、ちょっとネタも仕込んだし（ニヤリ）」

ノア
「またろくでもない伏線ですか（汗）」

カガヤ
「ろくでもない言うなぁ！！」

狸
「はやてのは～はハブられるのは～…（遠い目）」

クロス
「お、お～い…かえってこ～い！（汗）」

第６４話　「はやての涙」（前書き）

ほのぼのシリアス全力全開！
はやての心理描写をわざとあやふやで支離滅裂に表現したかったけど…これが限界（苦笑）

あ、前回登場した雪女・氷女のイメージＣＶは後藤　邑子さん！（朝比奈みくるなど）です（笑）

第６４話　「はやての涙」

「もしもし、私メリーさん。今、さっぽろ雪まつりに来てるの。すごいよ雪像が沢山！
あの涼宮ハ●ヒちゃんの雪像なんか本物そっくりなんだから！」
「…いやお前、俺の所に来る気ないだろ」

2月になってまだ間がないある日の休みの日。
いつも通りにクロスの元にメリーさんから電話が来る。

「何よ～せっかくこんな可愛い女の子からの電話なのよ、もっと喜びなさい！」
「だからお前の目的ズレてるだろ…」

電話でも分かるようにクロスは盛大に溜息をついた。

「そんな事より！　今回はあんたの周りにどの子がいるのよ、なのは？　フェイト？？」
「なんでイチイチお前にそんな報告しなきゃならないんだよ…」

メリーさんから電話が来るたびに同じような事を聞いてくる。
もっとも、毎回誰か彼かは一緒にいて、たまに電話を代わる事もある。
すずかやフェイトとは妙に親しくなって、クイントやノアが出た時はかなりいじられている。
ちなみにアリサやなのはは怖がってはいないがあまり出たがらない。

「いいから答えなさい！」
「はぁ……はやてだ、ちなみに風邪引いて看病中だからもう切るぞ

？」

今クロスがいる場所は八神家のはやての部屋だ。
後ろにはベッドに横になってクスクス笑っているはやてもいる。

「えぇ～!?　だ、大丈夫なの!?」

大声に携帯を耳から離したクロスはふと、ベッドの上のはやてが携帯を指さしているのに気付いた。
また深く溜息を吐きながら仕方なくスピーカーにしてはやての枕元に携帯を置く。

「もしもし？　メリーちゃん？　心配しなくても大丈夫や、ただの風邪やしクロス君も
　看病に来てくれてるし。ありがとうな」
「それならいいけど、変な事されてないでしょうね？　寝顔にラクガキされたりとか」
「おい、そんな子供みたいなイタズラするわけないだろ！」
「だって、あんた子供でしょ？」
「少なくとも…駅で迷う誰かさんよりは子供じゃないぞ」

どこをどうすればそうなるのかは分からないが、以前迷子になったメリーさんは
新宿の駅で迷いに迷って1日を過ごした事があった。

「そ、それは今関係ないでしょ、もう！　それじゃはやては体を大事にしなさいよ！
　そうそう…伝言があったんだったわ、クロス…口裂け女さんがありがとうって言ってたわよ
　じゃあね」

そう言い残して電話は切れた。

「悪いな、病人の傍で長電話しちゃって…」
「ううん、気にせんどいて。私がクロス君に頼んだ事なんやし」

今八神家にはクロスとはやて、そしてリビングにいるザフィーラしかいない。
事の起こりは数時間前…

・
・
・

時間は朝へと遡り、八神家を訪れたクロスとノア。

「フルメンテナンス？」
「あぁ、シグナム達のデバイスの検査と中身を新調するんだよ」

前々から計画していたことだが本局の施設に空きがなく先延ばしにしていた
シグナム達守護騎士のデバイスのフルメンテナンスと中身のバージョンアップをする事になった。
なのはとフェイトの2人もデバイスの微調整を行うと言う事で本局に呼ばれている。

「でも、精密検査なら去年したじゃねぇか…定期検査にしては早くないか？」
「そこは…色々とな」

珍しく言葉を濁すクロスに目をひそめるシグナム。

「何かあるのか？」
「…今すぐに答えられる事じゃないけど、少し気になる事はある。ま、数時間で終わるよ」
「そうか…しかし、困ったな。主はやてが今風邪を引いていてな。看病をしていた所なんだ」
「私なら平気やで～」
はやての部屋から風邪声ではやてが返事をした。
覗き込むと、氷枕をして額にタオルを乗せたはやてが寝込んでいた。
「何を言います、風邪をこじらせたら大変です！」
「そうだよ、ちゃんとついてて看病するからさ」
「ん～シグナムもヴィータも心配しすぎや、さっきよりは大分楽になったんよ？」
そう言いながらはやては胸元からライカフラワーの花弁を出した。
「クロス君がくれたこれのおかげや♪」
「ライカフラワーには癒しの効果もありますから気持ちが楽になったんですよ」
ライカフラワーはただのお守りではなく、身に付けた物の怪我や病気を癒す効果もある。
「それじゃあ俺が残るよ。ノアはみんなを本局まで送ってあげて」
「えっ？……はい♪」
ノアは何かを感づいたように笑顔で頷いた。
「そ、そんなええって。私は1人で大丈夫だから！　それにクロス

君に風邪うつしてまうよ！」
「はやてちゃん、寝てなきゃダメよ」
慌ててベッドから起き上がろうとするはやてをシャマルが抑えた。
「俺なら大丈夫、風邪や病気にはめっちゃ強いから」
「俺も残ろう、俺はデバイスを持っていないからな」
「ザフィーラもいるなら大丈夫…だな」
自信たっぷりのクロスにシグナムとシャマルはやれやれと肩をすくめザフィーラも残る事になり、ヴィータも渋々承諾した。
「それでは、主はやてを任せたぞクロス」
「はやてちゃん、目を離すとすぐに起き上がっちゃうから…いざとなったら縄で縛りつけてね」
「ザフィーラもしっかり見張っとけよ」
「マスター、はやてちゃん、ザフィーラ…いってきまーっす♪」
ノアの転移でシグナム達は本局へと向かった。
（さて、俺はどっちを見張るように言われたのだろうか）
そう苦笑しながらザフィーラはクロスとはやてをちら見してリビングへと戻って行った。
・
・
・
そうして、はやての看病をしている所にメリーさんから電話があり、切ろうとしたが
はやてが話してみたいと言う事で仕方なく出た所で冒頭の会話へと

戻る。

「口裂け女さんって、確かクロス君が色々教えて大ブレークしたんやよね？」

「あぁ～そう言えば結構他の街で噂になってるんだったな」

以前クロスの前に現れた口裂け女。

だが、あまり怖くないとクロスにダメだしされ、厳しい特訓（？）の末

見事にたくさんの人を恐怖に陥れ、ニュースになるほどの存在となった。

もっとも脅かすだけで後は何もしない。

「驚いた顔を見るだけで私は十分なのよ！」

とは口裂け女の捨て台詞だとか…

そして、メリーさんが思いっきり対抗意識をむき出しにしてクロスにますます電話をしてきているのだが…こちらは効果は全くなし。

「くすくす、それにしてもほんまにクロス君はモテモテやね」

「え～…しつこい電話をしてくるだけだぞ？　しかも会った事ないし」

「せやけど、それだけ何回も電話してくるのはクロス君とそれだけ話したいって事やない？」

はやてに言われクロスは思わず天を仰いだ。

「俺は興味ないっての」

「メリーさんって結構可愛い声しとるやん♪」

「ノアみたいな事言うな、それに可愛い声ならいつも今も聞いてるから十分だ」
「またまた～…って、へっ？　今…も？」
思わぬ一言にはやては固まった。
「ん？　可愛い声ならはやてやなのは達がいるから十分だ、って言ったんだけど？」
「あっ…あははは……可愛い…私の声が…っ！！」
窓の外を見ながらのクロスの言葉は半分程度しかはやての耳に届いていない。
「あ、ありゃ？　はやて？…ね、熱上がったのか！？　顔真っ赤だぞ？」
「お、おおおきになさらず～…」
覗き込むクロスの方を見ないようにはやては目元まで布団を被る。
そこにクロスが熱を測ろうと額を合わせた。
（ひゃうわっ！？…お、オデコがこっつんこ～！？）
「やっぱり少し熱上がったか…ごめんな、はやて。少し休んだ方がいいよ」
と言って部屋を出ようと立ち上がったクロスだが、布団から伸びた手が袖を掴んではなさい。
「…いかんどいて」
「えっ？　いやでも少し寝た方が…」
「……いやや」

布団から真っ赤な顔を出し、上目遣いでじっと見つめられ…

「はぁ…わかった、わかったからとりあえず離して、氷枕取り変えてくるから」

「……早く戻ってきてな」

クロスは氷枕と温くなった洗面器を持って部屋を出る。

・

・

ｓｉｄｅ　はやて

「…はぁ～……どうしたんやろ私…」

今日は少し調子がおかしい。

風邪のせいやと思うたけど、何か違う。

やっぱり…

「クロス君がずっと看病してくれてるせい…かな」

風邪を引いて、シグナム達に心配かけて申し訳ない気持ちやったけどクロス君が看病してくれると言ってくれて…嬉しかった。

なんでやろな、シャマルやヴィータに看病されるよりも心地よくって…安心出来る。

もちろん、シャマル達が看病下手なわけやない。

暖かいお粥も作ってもらって…台所から何回か悲鳴やら爆発音みたいなのが聞こえた気もするけど（汗）

それでも…家族がいる事が実感できて私は一人ぼっちじゃない気がして…

あ、あれ？　どうしてこんな事考えだしたんだっけ…あ、そっか…

クロス君の事考えてたら…
…眠くなってきたかな、頭の中がぐるぐるしてきた…
ちょっと、やすも…

「んっ、どれだけ眠ったんや…」

目が覚めた私は暗い部屋を見渡し、時計を探し時間を確認する。
あれから結構眠ったみたいやな。それにしても、静かや…それに冷たい。
部屋、と言うより家から冷たさを感じる。
ついさっきまでは暖かさを感じていたのに、ふと嫌な予感がしてベッドから起き上がり
自分の部屋を出てリビングへ向かう。

「クロス君？　ザフィーラ？　いる～？」

そこには誰もいなく、元から誰もいないように静まり返っている。

「……ど、どこいったんや2人共？」

ピチャン

水道から水の跳ねる音が聞こえ、私の背筋に悪寒が走った。
まるでここには最初から私しかいないような…

「…クロス君、ザフィーラ…みんな、ただ出かけただけや…すぐに帰ってくる」

そして、私はそこから一歩も動けなくなり…時間だけが過ぎていく。

いつまで立っても誰も来ない。音も聞こえない…ただただ静かに暗い…
ライカフラワーを握りしめる…冷たく何も感じない…いつもなら暖かさを感じるのに…

「うそやっ……」

周りの景色が黒くなり…色がなくなっていく…

「みんな…みんなどこや!?　クロス君?　なのはちゃん?　ヴィータ?　シグナム?　フェイトちゃん?…
シャマル、ノアちゃん、ザフィーラ……みんな、みんなどこいったんや～!?」

色のなくなった世界に私の悲鳴が木霊する…

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

・
・
・

「いやあぁぁぁ～～!!!?」

ガバッ!

「どうした、はやて?」
「主はやて!?」

突然聞こえてきたはやての悲鳴にクロスと人型のザフィーラが部屋に飛び込む。
そこにはベッドから跳ね起き、汗をびっしょりとかき…

恐怖で顔が歪み切ったはやてがいた。

「クロス君…ザフィーラ？」

そして、はやては2人の方を向きそのまま部屋を見渡した。
窓の外から夕日が差し込んできている。

「……はやて？」
「…大丈夫ですか？」

ザフィーラははやての顔を見てから、クロスへと顔を向け

「…あとは俺がやろう。主はやてを頼む」
「あ、あぁ」

肩を軽く叩き部屋を後にした。

「ご、ごめんな…ちょっと変な夢をみて、全く恥かしい姿みせてしもうたわぁ」

あはは、と笑うはやての側へとクロスはやってきて

「悪い、はやて…夕食の支度してたんだけど、1人にしちゃったな」

そっと頭を撫でた。

「えっ、ちょっ…そ、そんな謝らんで！　私が悪いんやし…」

慌てるはやての眼をじっと覗き込み、真剣な表情でクロスは

「…溜めこむな」

と一言、しかしその一言にはやての頭に衝撃が走った。

「た、溜めこむって何のことや？　あ～風邪のウイルス？　溜めこんだらますます悪化するから
早く治して蹴散らさなあかんな～」

「…誤魔化すな。はっきり言われないと、認めたくないのか？」

「っ！……」

「誰にも気付かれないように、溜めこんで…周りに心配かけないように無理をして…
シグナム達が気付いていないとでも？」

クロスが何を言いたいかは、最初からはやてには分かっていた。
クロスの眼をこれ以上見つめる事が辛くなったはやては顔をそらす。

「家族を失った悲しみがそう簡単に消えるわけがない事くらい、俺にもわかる」

「っ！！？」

「最初の数日はなのはやフェイト達のおかげで少しずつ落ち着いてきたのだろうけど…最近は」

「それ以上言わんといて！！」

はやてが突然怒鳴り出した。

「クロス君に言われんでもわかっとる。レギナスとリインがいなくなって…シグナム達も落ち込んで
それ以上に私が悲しんで…でも、無理して乗り切ったように見せて、出来るだけ自然に笑って！
シグナム達も私の気持ちを知らないふりして、安心してくれてる

フリしてる事くらい！」
「……」
「それでも、2人は私達の為に行ったんや、ただの犠牲になったわけやない！　せやから…
いつまでも私が悲しんでたら…ダメやないか！　だから…だから！！」
「……大馬鹿狸～」

涙を流しながら自分の胸中を吐き出すはやてに軽いデコピンをした。

「いたっ？」
「はやてさ～、俺よりもレギナスやシグナム達と長い時間過ごしたんだろ？
だったらあいつらがそんなお前みたらどう思うかはわかるだろ？」
「……せやけど」
「お前らは家族なんだからさ…気を使い過ぎてどうするんだよ、我慢してどうするんだよ」
「家族……せや、シグナム達みんな家族や…でも…シグナム達だって……」
「だったら、俺やなのは達にぶつけろよ！　家族に知られるのが嫌なら友達にぶつけろよ！」
「クロス君やなのはちゃん達だってあんなに傷付いたやないか！
これ以上…」

お互い一歩も引かない、互いに相手の為の言葉…
悲しみと苦しみを分かち合う前に相手への負担を考えてしまい…結局自分で溜めこむ。
クロスはそんなはやてを見るとまるで自分を見ているようだった。
自覚がある分タチが悪いのも同じだ。

「ったく…俺もこんな感じで強情だったなぁ、そのせいで母さん達に余計な心配かけちゃったし…」
「えっ？」
「いや、こっちの話だ…それより」
クロスははやてをびしっと指を差す。
「哀しくなるのは当たり前、苦しくなるのは当たり前。２人共それだけ大切な人だったんだからな
……そんなのを１人で支え切れるわけないだろ？　それに俺がはやて１人に抱え込ませたくはない」
「クロス君…」
「あ～もう、はっきり言うぞ？　俺が今日ここにいるのは勿論看病がメインだけど…」
「だけど？」
「はやての無理して溜めこむ姿が見たくないから…ケリを付けさせるために残ったんだ」
「ケリ…」
そう言うとクロスははやてを優しく抱きしめた。
「今はシグナムもヴィータもシャマルもいない。ザフィーラも外にいる…」
「あっ…」
「…はやての悲しみが少しでも癒されるなら俺はなんでもする…だから、協力させろよ」
「うっ……うぅ…」
「それとも、俺じゃ…ダメか？　少なくとも１人で抱え込むよりはマシにはなるぞ？」
「クロス…ぐん……わたし…わたしぃ…」

「…なんだ、はやて？」

クロスはゆっくりと暖かい笑顔ではやてに応える。
はやての眼からは涙が溢れ出ていた。

「…ずっとさみじがった…お父さんもお母さんも死んじゃって…いきなり1人ぼっちになって」
「あぁ…」
「やっど1人じゃなく…家族が出来、て、やざしい時間が過ぎて…ずっとこのままだと…」
「そうだな…」
「でも…でも、私の為に私の知らない所で皆が必死になってて…私何も知らずに…」
「それははやてのせいじゃない、そうするためにあいつら頑張ったんだ…」
「…ごれから、リインも…みんなもやっと解放されて…また家族が増えて、ひぐっ…なのに…」
「……」
「私は結局何も出来ずに…家族がいなくなって…また1人ぼっちに戻っていくんやないかって」
「それはないな…俺もノアもなのはもフェイトもアリサもすずかも…これからもどんどん増えるぞ」
「…そしたら、皆いなくなって…わだし1人が取り残される夢をみて…それでそれで…うぐっ」
「さっきはその夢を見たのか…」
「怖かった…すごく…怖かった……夢じゃなくて…現実かと思って…」
「じゃ、今俺がこうして側にいるのが…夢か？」
「ううん…違う、ちがう、これが現実や…だから、嬉しい…」
「くすっ、悲しいんだり喜んだりと、忙しいんだなはやては…」

「…うん、うん…・・・・うわぁぁぁぁ～～！！！」

この涙はうれし涙か悲し涙か…それははやてにも分からない。
だけど、自然に嗚咽と共に溢れ出てきて、止まらない。
決して泣くまいと…もう泣かないとリインとの別れで誓ったあの時から止めたはずの涙。
それが今…眼の前の少年によって崩された。
でも、はやては…これで良かったと思った。
クロスの前で壊れた事が、クロスなら全部受け止めてくれると分かっていたが…
それでも最後の一線を越えれずにいたが、これで越える事が出来た。
何が越えて、越えるとどうなるかは分からないけど…分からない事だらけだけど
それでも今わかるのは…

「あぁぁ～・・・うわあああぁぁ～～！！」

一つ、自分の中で確かなケジメが付ける事が出来た。

続く

第６４話　「はやての涙」（後書き）

カガヤ
「祝、狸フラグ！」

ノア
「おめでとう、狸ちゃん！」

なのは
「おめでとう、狸ちゃん♪」

フェイト
「おめでとう、狸」

アリサ
「おめでとう、狸♪」

すずか
「狸ちゃん、おめでとう」

シグナム
「おめでとうございます、主狸」

ヴィータ
「狸…おめでとう♪」

シャマル、ザフィーラ、ティアナ、ギンガ…ｅｔｃ
「「「「「おめでとう、狸（ちゃん）」」」」」

狸
「みんな……ありがとうな…って狸狸と言われたら素直によろこべんわぁ！！」

クロス
「ちゃんちゃん（汗）」

第６５話　「バレンタイン決戦！（笑）　第１戦」（前書き）

短めですけど、２月と言えばあのイベント回です！（笑）
本当は２月に書きたかったですけど・・・

第６５話　「バレンタイン決戦！（笑）　第１戦」

２月１３日　バニングス家

バレンタイン…それは年の一度、乙女たちが自分の想いを籠めたチョコを男子へと渡す日。

「どう、フェイト？　これがバレンタインデーよ」

「そ、そうなんだ…」

なのは、フェイト、すずかはアリサの家でチョコレート作りに来ていた。

まだ状況がうまく飲み込めていないフェイトにアリサがバレンタインの事を教えたわけだ。

「それで、アリサちゃんは誰に贈るチョコを作る予定なの？♪」

ニコニコとすずかが聞いた。

「そ、それは……去年と同じよ、なのは達に贈るに決まってるでしょ！」

「えっ？　でもさっきチョコは男子に渡す日って…」

「日ごろお世話になってる人に渡すのもアリなのよ」

顔を赤くして拗ねるように言うアリサになのははは苦笑いを浮かべる。

「それじゃあ、私達はクロス君へのチョコ作りましょうか、なのはちゃんフェイトちゃん♪」

「ちょ、ちょっとすずか？」

「アリサちゃんは私達のチョコ作るみたいだから、邪魔しないようにしましょ」
「あ、あはは～」
「そうだね、アリサのチョコ楽しみにしてるよ」
「フェ、フェイトまで！？」
すずかはわざとフェイトは素で反応している。
「うっ、うぅ～…分かったわよ！　私もクロスへのチョコ作りに混ざってあげるわよ！」
さっきよりも顔を赤くして言わされた感を出しながらのアリサに皆は笑い合った。
フェイトだけはあまりよくわかってないようだったが。
・
・
その頃　ミッドチルダ　ナカジマ家では…
なぜか軍服を着たノアとスバル、ギンガ、ティアナが揃っていた。
「以上がバレンタインの概要よ、質問は？」
「はい、姉さん」
「姉さんじゃありません！　今日の私は教官と呼びなさい！！」
「は、はい教官！……なんでそんな格好をしてるんですか？」
「それは……ノリよ」
「ノリなんですか！？」
ギンガの質問に真顔で自信満々に応えるノアに突っ込むティアナ
ちなみにスバルは眠っている。

「「……寝るなぁ！！」」
「い、いったいぃ～！？」

ティアとノアのW攻撃に頭を抑え涙目になるスバル。

「スバル…また昨日夜更かししたでしょ」
「えへへ、クロ兄が向こうから持って来てくれたアニメが面白くて、つい」
「……今度夜更かししたら没収するからね」

ちなみにスバルが見ていたのは勇者王ガ●ガ●ガーとＧＥＡＲ戦士●童

「ともかく…がんばってなのはちゃん達より美味しいチョコを作るわよ！」
「「おぉ～！！」」
「お、おぉ～／／」

ノアの掛け声にノリノリなスバルとギンガ、若干恥かしげなティアナであった。

「元気よねぇ～…」
「本当、でもあの娘達ちゃんとうまく作れるかしら？」

離れた所ではクイントとメガーヌがチョコ作りをしていた。

「大丈夫よ、ノアはああ見えて料理上手だから」
「へぇ、クイントが教えたんでしょ？」
「これから私達とは別の任務やあの子達だけの単独長期任務も増えてくると思うからね…」

「2カ月後の執務官試験…ね」

2人の顔色が少し曇る。
史上最年少の9歳で受ける執務官試験、試験自体も難関で今までの最年少合格者は12歳。
ちなみに、クロノが最年少合格者だ。
そして、合格すれば捜査官と執務官の2つの資格をクロスは持つ事になる。
これまでのようにアースラ隊やゼスト隊だけでなく様々な部隊に帯同しての任務が増える。
クロスの周囲の環境も変わってくるだろう。

「サバイバル…とまではいかなくても最低限の料理は出来るようになればと思ったんだけど…」

と、ここでクイントの顔色が暗くなり沈んでしまった。

「2人に料理の腕を越えられちゃった…と」

苦笑するメガーヌの言うようにクロスとノアの料理の腕は既にクイントを越えてしまった。
それでもギンガやスバルもクイントの料理が良いと言ってくる辺りは流石母の味、なのだろう。

「それより、メガーヌの方は体調どうなの？」
「うーん、少しはマシになったわよ。風邪だったのかしら」
「無理したらダメよ。ゼスト隊長が心配するわよ」
「ふふっ、分かってるわ」

こちらは何やら大人な会話（そうか？）。

・
・
２月１４日　ミッドチルダ地上本部　屋外特殊訓練場

「はぁ～……ふぅ…」

ミッドチルダ郊外にある特殊訓練場。
空中にまでいくつもの岩が浮かんでいる岩ばかりのフィールド
その中心に銃士形態で目を閉じ、息を整えるクロス。
周りにはいくつものクレーターが出来ている。
そして、その様子を空中の岩場の影からクロスの様子を窺うティーダ。

（これで…最後だ、クロスファイアシュート・セカンドシフト）

クロスの周りにいくつものスフィアが現れ高速で回転し始め一斉に射撃を放った。
回避する隙間を与えないほどの魔力弾の嵐。
しかし、クロスは両手の銃を構え、動じる事なく目を開き…

「はあぁぁ～！！」

右のヴァジュラの連射で魔力弾を次々と相殺し、アグニの貫通弾でスフィアを纏めて落としていく。
それでも全ての攻撃は捌ききれない、だが身を翻し攻撃をかわして行く。
頭を下げ魔力弾をかわすと同時に、別方向からの攻撃を相殺し、スフィアを撃ちぬく。
回避、防御、攻撃をほぼ同時に行う事で全ての射撃に対処していく。
やがて数秒もせずにクロスの周りに浮かぶスフィアは１つも残って

いなかった。
最後の仕上げとばかりにある方角へ目を向け、アグニの後ろにヴァジュラを連結させる。

「ユニコーン…デルタファングシュート」

3方向に放たれた仙気弾がとある岩場へと向かった。

「…やばっ！」

その岩場にはティーダが隠れていたのだった。そこへ高速で迫る3つの仙気弾。
迎撃は間に合わないと判断したティーダは素早く岩を蹴り、その場を離れた。
その瞬間に一発の仙気弾が岩を砕き、ティーダのトライギャランを弾き飛ばした。

「しまっ！？…ぐあぁ！」

そして、残りの2発が前後からティーダを挟み込むように命中した。

「よしっ、2人共、そこまでだ」

ゼストの声と共に岩が全て消え、機械的なフィールドに変わった。
昨日からクロスとゼスト達は新型空間シミュレーターのテストの為に地上本部に通っていた。
ついでに執務官試験に備えての実戦形式の模擬戦を行っていたのだ。

「いたた……全く、クロス少しは手加減してくれてもいいだろ」

ティーダは腰と頭を抑えながら恨めしそうな顔をした。

「あんなに大量にクロスファイア撃っておきながら良く言いますよ」

負けじとクロスもジト目になる。

そこへ、紙袋を持ったオーリスがやってきた。

「あ、オーリスさ…オーリス一尉」

慌てて言い直したティーダにオーリスは笑顔を向け

「一尉はいいわよ、昇進したばかりなんだから。3人共、御苦労様。差しいれ、お持ちしました」

そう言ってオーリスが袋から取り出したのはしっかりと梱包された小箱。

「これは、あけてみても？」

「えぇ、どうぞ」

3人が小箱を開けると、そこには小さなチョコレートが入っていた。

「おー、チョコレート…「あぁ～～！！？」…へっ？　姐さん？」

突然クイントの声がしたかと思うとメガーヌ共々一瞬でオーリスの眼前へと現れた。

「は、早いわねクイント…」

「オーリス！　抜け駆けは許さないわよ！」

「そうよ、私達が先よ！」

「か、母さん？」

「メガーヌまで、一体どうしたんだ？」

なぜ非番のクイントやメガーヌまでここにきているのか分からない3人。

「あ～3人ともバレンタインの事知らなかったわね…」

とここで、クイントがクロス達3人にバレンタインの事を説明した。

「…それでお前達もチョコを持ってきたというわけか」

ゼストに手渡されたのはクイント、オーリスからの義理チョコとメガーヌからの本命チョコ。

「母さん達が知ってるって事は…ノアも…」

と、相棒に一株の不安を覚えるクロスの元には3人からの義理チョコ。

「なるほど、それじゃ今頃ティアも」

と普段、家に帰れないときはナカジマ家に泊っている妹の事を考えるティーダ。

当然、3つの義理チョコを持っている。

「良かった、なんとかオーリスに先を越せずにギリギリ間に合ったわ」

満面の笑みを浮かべるクイントと

（本当は本命チョコ、だなんて口が裂けても言えないわよねぇ…）

心の中で涙するオーリス。
そしてメガーヌは何やらゼストとティーダに耳打ちしている。

「クロス、今日の報告は俺達がやっておくからもう家に戻っていいぞ」
「えっ？　でも…」
「いいから、今日はゆっくり休め。明日は地球で学校だろう？」

ふに落ちない所はあったがゼストの好意に甘える事にし、帰宅する為に飛び去ったクロス。
そして、意味ありげに笑みを浮かべ合うクイントとメガーヌ。

「さぁ～て、クロスはどう出るかしら？」
「う～ん、私としては簡単に決着ついてほしくはないわね」

一方ゼストとティーダは

「「……がんばれよ、クロス」」

と色々な意味でエールを送っていた。
はたして、クロスの運命やいかに！？

後半戦へ続く（でも次は中編（笑））

オマケ

「あっ……」
「どうしたのクイント？」
突然素っ頓狂な声をあげるクイント。
「…あの人の分、すっかり忘れてたわ…」
「……旦那より息子を優先させるの程ほどにしないとゲンヤさん泣くわよ？（汗）」
実は手遅れだったりする……

第６５話　「バレンタイン決戦！（笑）　第１戦」（後書き）

カガヤ
「短め～」

ノア
「本当に短いですね…」

カガヤ
「いや、全部書いたらすごく長くなりそうだから、まずは義理チョコ編で一度切ろうかと」

ノア
「…義理チョコ以外混ざってたみたいですけどね（汗）」

クロス
「次回がすごく怖い気がする（ガクガクブルブル）」

カガヤ、ノア
「「…がんばれ♪」」

第６６話　「バレンタイン決戦！（笑）　第２戦」（前書き）

季節外れの～バレンタインネタ～
ギャグでカオスで～さあ大変（笑）

第６６話　「バレンタイン決戦！（笑）　第２戦」

２月１４日　ハラオウン家

バレンタイン…それは年の一度、乙女たちが自分の想いを籠めたチョコを男子へと渡す日。

「「ってこれ前回と同じだよね！？」」

「ど、　どうしたの？　アリサちゃん、ティアナちゃん？」

「…あ、あれ？　私今何を言ったのかしら？」

「ん～？？」

今ハラオウン家にはなのは、フェイト、アリサ、すずか、ノア、スバル、ギンガ、ティアナそして、はやてに守護騎士達が集まっている。皆それぞれ手作りチョコを持参している。

「さて、皆に集まってもらったのは他でもないわ！　それぞれ作ったチョコをどう渡すかの作戦会議よ！」

「作戦って…普通に渡せばいいんじゃないの？」

「甘い、甘いわフェイト…私が作ったハニ―シロップチョコより甘いわ！」

「なんだか名前聞いただけで胸やけしそうなチョコだね…」

「うっ、私はちょっと手遅れかも…」

フェイトの疑問をアリサが一蹴した。なのはとヴィータの呟きも無視する。

「クロスってバレンタインの事知らないし今回初めてチョコもらう

んでしょ？」
「うん。あ、でもお母さんが先に義理チョコ渡しちゃったみたいだけど…」
クイントより報告を受けたばかりのノアが答えた。
「なっ！？…さすがクイントさん、抜け目ないわね…」
「うんうん…まぁ、いきなりポンと渡されるよりはある程度慣れていた方がいいとは思うけど」
考え込むアリサとノア。
「でも、このチョコ作ってる時、なんだか不思議な気持ちになれたよね」
「う、うん…なんだかすごく恥かしいような」
「でも暖かいような…」
「スバル、がんばったよ！」
はじめてのバレンタインチョコ作りに頬を赤くしながら感想を言うミッド出身４人娘達。
スバルはいまいちよくわかっていないまま作っていたようだが…
「ヴィータにシグナムも楽しそうやったもんな？♪」
「あ、私は別に…そこまで…」
「……楽しかったのは事実ですが…」
顔を赤くして俯く2人、その横ではシャマルが沈んでいた。
「私も作りたかったなぁ…」
「その試食係…いや、毒味をさせられる俺の身にもなってみろ」

ザフィーラの鋭い言葉でさらに沈んでしまった。

「ま、まぁまぁ…シャマルはこれからやこれから！」

はやてが必死で慰めているがシャマルはまだ沈んでいた。

「ところで……ノアちゃん、その大きさでそのチョコ作ったの？」

「ん？　そうだけど、どうしたの、すずかちゃん？」

ノアは普段は３０センチほどの大きさになっている。

未だになのは達くらいの大きさになると仙気の消耗が激しい。

そして、ノアの作ったチョコの大きさはなのは達よりも少し大きめサイズだ。

「その大きさのチョコ作るの大変だったんじゃないかなって思って、手伝ってもらったの？」

「ううん、３人共自分のチョコで手一杯だったから、１人でやったよ…魔法で♪」

そういうとノアは軽く腕を振うとテーブルに置いてあったテレビのリモコンが宙に浮かんだ。

「あぁ～！　すご～い！」

「すごいでしょ♪　これくらいの重さなら簡単に操る事が出来るよ♪」

まるで誰かが手に持っているかのようにリモコンが動いてる。

テレビの電源を入れたりチャンネルを変えたりも自由自在だ。

それを見たアリサとすずか、それにはやても目を輝かせている。

「うっわぁ～こんな事も出来るんだ…」
「ほんまもんや…これが、これが見たかった魔法や！！」

特にはやての反応は凄まじい。

「は、はやてちゃん？」
「あんな…今まで魔法って言うてもシグナムやヴィータの魔法って魔法らしくないやろ？
なのはちゃんやクロス君達のも似たようなもんやったし…せやから、今私めっちゃ感動しとるんよ！」
「あ、あはは…気持ちは分かる…かも」
「う、うん…私もちょっとクロス君やなのはちゃん達が魔法使いって言われても…」
「あんなにビームを撃ったり剣で斬り合ったりじゃイメージしてる魔法とはかけ離れてるわよ」

なのは、すずか、アリサの地球出身組もはやての意見に同意する。
確かに地球の一般人から見た魔法となのは達の使う魔法は程遠いかもしれない。
しかも、シグナムやヴィータに至っては剣にハンマーを使う…魔法戦士と言えばそうなるが

「あはは、確かにね。私も魔法少女物のアニメとか見るけど、私達の魔法とはイメージがね」

ノアの見ている魔法少女物とはプリティーサ●ーなどである。

「そればかりは私達に言われても…」
「…だな」

シグナムとヴィータは苦笑するしかない。

「あ、大変！　もうマスター戻って来ちゃう！　しょうがない…今回はクジで」

「待ってました～！！」

と、シャマルが取り出したのは商店街でたまに見かける三角くじが入った箱。

「シャ、シャマル？　いつの間にそんな物を？」

「いえ…私、暇でしたから…こんな事もあろうかと、と」

そう言うシャマルはどこか明後日の方を向いている。

「それじゃあ時間もない事ですし…」

と急いでクジを引いていくなのは達。

全てのクジを引き終わった頃にクロスが帰って来た。

「ただいま、あれ？　ギンガ達まで来てみんな揃ってどうしたんだ？」

「おかえりなさい、マスター。ちょっとした用がありまして…」

本来、地球は管理外世界でミッドの住民が出入りするには申請が必要なのだが…

レジアス中将の働きかけで一般人であるティアやギンガ達も度々地球へと来れるようになっている。

越権行為と言われかねないが、なぜかまかり通っている。

レジアス中将に関しては細かい事を気にするとキリがない。

これはゼスト、アースラ隊共通の認識だ。

「ふーん、それで用事ってどういう…「クロスさん！」は、はい！？」

突然、ティアナがクロスの前にやってきて大声を出した。
しかも、顔を真っ赤にして目が若干泳ぎ気味というすごい形相で迫ってきたので
流石にクロスも戸惑いを隠せないでいた。
そして、ティアナは小さな小箱をまるで宝物を献上するかのように突き出し…

「クロスさん…あの、これ受け取ってくだちゃい！！！」

…噛んだ。

「「「「「……」」」」」
「あ…あわ、あわわわ……／／／／」
「ティ、ティア？　少し落ちつけ…おい、ノア。これは一体どういう事？（汗）」

頭から湯気が出そうなほどのティアを落ち着かせながら
額に手を当て深いため息をついてるノアに聞いた。

「あのですね…マスターにバレンタインのチョコをみんなで渡そうって事…で」
「チョコを渡す順番をクジで決めて、それでティアナちゃんが一番になったんだけど…」
「緊張しすぎて、渡すタイミングをあやまっちゃって…」
「噛んじゃった…と」

ノア、シャマル、アリサ、そして、クロスと簡単な状況説明を終えた所で

「は、はぅあぁ～…（ドサッ）」
「ティア～！？」

顔中から湯気を出しながらティアが倒れてしまった。

「ティアの勇気…決して無駄にしないからね。2番、スバル・ナカジマいっきまーっす！」
「スバル、アニメの見過ぎ…」

ギンガのツッコミを背に受け、スバルが2番手としてクロスの前に立った。

「バ、バレンタインってこんなに緊張感持ったイベントなのか！？」
「まるで戦場のような緊張感…このような空気は久方ぶりだ」

シグナム達は初めてのバレンタインチョコの渡し方に驚愕している。

「まぁ、間違っては…いないような、そうでもないような…」
「いいえ、はやて…バレンタインは…乙女の戦争よ！」
「アリサちゃんも少し落ちついた方がいいよ？」

そして、何やら一部盛り上がってる。

「あぁ、ありがとうなスバル♪」
「えへへへ／／／」

クロスの方はもう慣れてしまったのかスバルからのチョコを嬉しそうに受け取り
スバルの頭を優しく撫でる余裕まで見せていた。
その光景を羨ましそうに眺める女性陣（ほぼすべて）

「なんだかいいわよねぇ、こういう光景って」
「…まぁな、平和そのものだ」

エイミィとクロノはその様子を離れて見守っていた。
クロノの片手にはエイミィからもらったチョコをちゃっかり持ちながら

「クロス君も大変よねぇ…なのはちゃん達だけでなくシグナム達までだもの」
「あぁ、いつの間にああなったんだか…」
「兄貴分としては弟分の将来が心配？」

いたずらっ子のようにエイミィがにやりと笑った。

「ぼ、僕はクロスの兄貴分じゃない…その役目はティーダさんだろ」
「ふふっ、そういうことにしておきましょ～か」

その間にもなのは達は次々とチョコをクロスに渡していった。
3番目のヴィータが…

「ほ、ほらよ…あ～…あれだ、去年の借りを返すだけだからな…」
「そんなの別にいいのに、でも、受け取るよ…ありがとな、ヴィータ（なでなで）」
「～っ！／／／／…や、やっぱさっきのはなし！　お前への借りは別ので絶対返す！！」

「?…あ、ああ…わかった」

頭を撫でられ混乱したのかヴィータの眼がクルクル回っているようだ。

「ヴィータ…なんかそれ違うで…」
「ヴィータちゃんってウブなんだから♪」

次はすずか

「はい、これ…受け取ってもらえる?」
「おっ、すずかのは形が色々あるんだな♪」
「本当は味も変えたかったんだけど…」

すずかの渡したチョコはクッキーのように型が取られていてそれぞれ幾何学的な形をしていた。

「いやいや、これだけでも楽しみながら食べられるよ。ありがとう、すずか」

そう言ってすずかの頭を撫でようと伸びたクロスの手を…

「えいっ♪」
「「「「「あっ～～!!」」」」」

すずかが握り、自分の頬へと押しあてた。

「す、すずか!?」
「クロス君の手…暖かいね」

手に頬ずりするすずかにクロスは固まっている。

「すずかちゃん、ずるい！！」

「そうよ、反則よ！！」

「……むぅ」

なのはとアリサとフェイトの抗議に

「ごめんね」

とペロリと舌を出す、すずか…

「すずかちゃん…恐ろしい子！」

「あんな大胆な事する子やったんか…あなどれんで」

ノアとはやてもこれには驚きの表情を浮かべ

「……なら私は…（ブツブツ）」

とギンガは自分の番ではどんな事してもらおうかと思考にふけってしまった。

「い、今の子達って…進んでるのね。それともこの世界独特なのかしら」

「クイントさん達がこの場にいないのが幸いだな…あの人達がいたら余計騒がしくなる」

そんな解説者っぽいポジションのエイミィとクロノの後ろでは

先ほどからリンディが何やら探し物をしていた。

「どうしたんですか、リンディさん？」
「それがね…ゼストさんに渡すはずのチョコが見当たらないのよ」
リンディは時間がなかったのでチョコを桃子の店で買ったのだ。
その時に大人向けのチョコと言われて渡されたのがゼストとゲンヤ用のチョコだ。
だが、今手元にあるのはゲンヤ用に包装されたチョコのみ。
「変ねぇ…確かにここに置いておいたのに」
リビングでは5人目のクジを引いたシャマルがようやく回復したクロスにチョコを渡す所だ。
「はい、これ…本当は手作りチョコを渡したかったんだけど…翠屋の特性チョコで我慢してね」
「ははははっ……ありがとう、シャマル」
と残念そうに翠屋の包装がされたチョコをクロスに手渡した。
手作りでなくて良かったかも、と心の奥底で思うクロスなのであった。
はやて達がシャマルの後ろでサムズアップをしている。
（クロス君、シャマルにはよーく言い聞かせて手作りチョコを諦めさせたで）
（一度は手作りチョコを作ったんだけどな…）
（ザフィーラが瀕死になったのだ…）
（……三途の川とはああいうものなのだな）
（ありがとう、みんな…）

以上の会話を念話ではなくアイコンタクトにて済ませられるのはシャマルの料理全般に対する共通認識の賜物であろう。

「せっかくだから、シャマルのも少し今食べてみようかな」
「うぅ…手作りチョコ渡したかったなぁ…」

そう言ってクロスはシャマルに渡された包装を開け中のチョコを取りだした。

「あれ、あのチョコって…」

そのチョコを見たなのはがある事に気付いた。
その時、キッチンからリビングへ来たリンディもある事に気付いた。

「それって、まさかうちの特製のウイスキーボンボン!?」
「あぁ～！　その包装は私が買ったチョコよ！」
「…えっ？（ゴクン）」

いきなりの大声に驚いたクロスはチョコをそのまま飲みこんでしまった。
幸い小さいチョコなのでそのまま詰まる事なく飲みこめた。

「シャマルさん、そのチョコは私がゼストさんに買ったチョコよ」
「えっ？……あぁ～！　私間違えて渡しちゃったみたい！」
「ひょっとして、シャマルが渡したかったチョコって…これ？」

エイミィが持ってきた箱は確かにクロスが持っている箱と似た梱包がされていた。

「それです、それが私が買った翠屋のチョコです！」

「シャマル…まちごうたらあかんで」
「うぅ～せめて、甘いチョコをって桃子さんと士郎さんおススメのチョコ買ったのにぃ」
シャマル達を尻目にクロスはぼーっと突っ立っていた。
「…マスター？　大丈夫ですかー？」
ノアが顔前で手を振るが、無反応。
「ねぇ、なのは。翠屋特製のウイスキーボンボンって？」
フェイトがなのはに尋ねると
「あのね、お母さんがこの時期に作る。大人用のチョコで…少し強めのウイスキー入ってるの」
「あ、それお父様がよく食べてるわね…ってそれって要はお酒でしょ！？」
「えっ？…マスターにお酒…ですか……」
お酒入りと聞いたノアの顔色が真っ青になる。
「マスターの食べたチョコに…お酒、それも強いお酒入っていたって事…？」
「う、うん…他の店のよりも強めのウイスキー入ってるのが売りの1つなんだけど…」
「あ、あははは……た、大変だぁ～！！　マスター！？」
ノアの慌てぶりの意味が分からない面々。
リンディやギンガ達もどうしてノアが慌てているのかわからないよ

うだ。
慌ててクロスへと駆け寄ったノアだが
「……」
バタッ
糸が切れた人形のようにクロスが倒れた。
続く

第６６話　「バレンタイン決戦！（笑）　第２戦」（後書き）

反省部屋

カガヤ
「……（反省中）」

シグナム
「……カガヤ、何か申し開きはあるか？」

カガヤ
「ありません！（土下座）」

ヴィータ
「この話、アップ直前で私らの存在忘れて気付いて…慌てて手直ししたらほぼ全部書き直しになった。だな？」

カガヤ
「はい、そうです…素で狸達の事忘れてました！」

狸
「……危うく私らの出番ないままバレンタイン話終わる所やったんやね　ｏｒｚ」

ノア
「ま、まぁまぁ……なんとか間に合ってよかったじゃないですか…前編は流石に無理でしたけど（汗）」

シャマル

「…次からは忘れないでくださいね？」

カガヤ
「…前中後編に分けててよかったぁ…」

ノア
「まさかの3部作ですか…しかもマスターがエラい事になってるような（汗）」

カガヤ
「それは次回のお楽しみ～♪…ではでは今回も駄文でしたが感想お問い合わせ苦情返却の連絡まってまーっす！」

ノア
「返却って（汗）」

クロス
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（　。　ρ　。）ボーーーー」

第６７話　「バレンタイン決戦！（笑）　第３戦」（前書き）

遅くなりました！
またまた長くなりそうなので前中後編ではなくナンバリングも変えました。
本当に予定って未定だから予定なんですね（苦笑）
クロス暴走（？）作者暴走…はいつもの事か（爆）

第67話　「バレンタイン決戦！（笑）　第3戦」

シャマルのうっかりでウイスキーボンボンを食べてしまい倒れたクロス。

「マ、マスター！？」
「兄さん！？」

ノアとギンガがゆするがクロスの反応はない。

「ノアちゃん、これはどういう事なの？」

エイミィが尋ねると、ノアは青い顔をしながら恐る恐る話した。

「詳しい説明は省きますけど、マスターは体質のせいで…アルコールを摂取すると…」
「…すると？」
「間違いなく酔ってしまい…どうなるかわからないんです、最悪暴走するかも…」
「「「っ！？」」」

その言葉に反応したのはなのはとフェイト、それにクロノだ。
3人とも即座にデバイスを構え、ギンガをクロスから離して臨戦態勢を整える。
少し遅れてはやてやシグナム達も構える。
脳裏に浮かぶのは以前シグナム達が倒された時に暴走したEクロスの姿だ。
アリサやすずか達も心配そうに眺める中。

「……」

ムクリとクロスは起き上がった。そして、緊張な面持ちのなのは達へと振り返り…

「ク、クロス君？」

「大丈夫…？」

「なのは、フェイト…うん、大丈夫だよ。寝起きに君達2人の可愛い笑顔に出迎えられたからね」

「ほにゃ！？／／／」「えっ！？／／／」

今まで見た事もないような笑顔でなのはとフェイトへと微笑みかけた。

緊張していた2人は思わぬ言葉と笑顔に一瞬で顔を赤くしてしまった。

さらに…

「シャマルさん、先ほどはチョコありがとうございました。あまりに衝撃的な美味だったので

つい意識が昇天してしまいましたよ」

「え、えっと…その、翠屋で買ったもの、ですよ？」

「いやいや、大切なのは心ですよ、心！　確かにあのチョコを作ったのは桃子さんですが

そのチョコを僕にくれたのはシャマルさんじゃないですか！　シャマルさんが僕の為に

熱心に心をこめて選んでくれたチョコ！」

「そ、そこまで言われちゃうと、照れちゃいますよ／／／」

顔を赤くしながら奥へと避難したシャマル。

その様子を一同はあ然と眺めていた。

「…あ、あれ～？」
「姉上、クロスは一体どうしたのでしょうか？」
「私にも、わからないよ…」

どうしようかと思っているとギンガが一歩前へと踏み出した。

「ギンガ？　今のクロス君には近付かん方がええと「次…私の番です！！」…は、はいぃ！」

わずか7歳にして、強い決意に満ちた表情、一体何が彼女をそこまで奮い立たせるのか！？

「に、にんに…兄さん！」
「ん、どうしたんだいギンガ？」
「こ…こここここれ」

緊張しすぎてロクに言葉が回らないギンガの肩にクロスは手を置き

「まずは落ち着いて、深呼吸してごらん？」
「は、はい！…ヒッ、ヒッ、フー…」

ラマーズ呼吸法。

「ギンガ、その呼吸法違うから！」
「というよりどこで覚えたんだ…」

アリサとクロノに言われて、更に赤面しながらもなんとか落ち着かせたギンガ。

「兄さん、これ受け取って下さい！　初めてだから美味しくないし形も悪いかもしれないけど…」

不安げにクロスを見上げながら小箱を渡した。

「ありがとう、ギンガ。今食べてみてもいいかな？」

「う、うん！」

それを笑顔で受け取り、開けて中のチョコを取りだし口へと放った。

「あぁ、美味しいよギンガ。初めて作ったとは思えない程の絶妙な甘さと苦さが混ざり合った
　まさに究極のハイブリット！」

「あのね、今日は皆からチョコもらうから甘過ぎると他のチョコ食べにくくなるかな、って思って」

「そっか、ギンガはいつもそうやって周りの事を考えてくれるよな。その優しさに僕はいつも癒されるよ
　こんなに可愛くて優しい良い妹を持って俺は幸せだよ」

目を細めゆっくりとギンガの頭を撫でながら耳元で囁く、甘い言葉。

「……っ！！？／／／」

「おっと」

ギンガ、陥落。

そして、倒れかかったギンガをクロスが抱きとめ、お姫様だっこをして

ソファで気絶したままのティアナの横へと降ろした。

「クロスってああいう事言うやつだったか？」

「そうだね…何か違うね。酔ってるせいか」
「…ノアちゃん、あれもアレのせいなの？」
リンディが小声で傍にいるノアへと聞いた。
「恐らくは…エヴォリューダーの作用かと…うぅ、ますたぁ…」
クロスの変貌ぶりに驚きながらもノアは少しギンガが羨ましそうだった。
「次は…私だ」
シグナムが若干緊張した面持ちでクロスの前へと歩み出した。
「やぁ、シグナム。そんなに肩に力を入れ過ぎてると美人が台無しだよ？」
「な、何を！？」
「でも、凛としたカッコよさを秘めたいつものシグナムも素敵だけどね」
「なっ、ななななっ～！？」
クロスの先制攻撃、シグナムに大ダメージ。
「あかん…シグナムでもダメや」
「というより、シグナムもキャラ変わってるぞ」
不機嫌な表情でそんな2人を見つめるヴィータ。
「コホンッ／／／……クロス、その…これはこの前の一件の礼だ。受け取ってくれ」

極めて冷静に努めながらクロスに包みを渡すシグナム。
だが、顔を真っ赤に染めながらなので冷静さは皆無だ。

「この前のお礼？　ありがとう、シグナム…なら僕もお礼をしなきゃね」

そう言って、片膝をついたクロスはシグナムの手を優しく握り…
手の甲へとキスをした。

「「「「「な“っ！？」」」」」

クロスのまさかの行動にその場にいた全員（スバル以外）が声をあげた。
特に普段のクロスを知っているリンディやノア達は眼を見開いている。

「ク、クロス…い、一体なんのつもりだ？／／／」

数秒ほどフリーズしたシグナムはなんとか言葉を発せれた。

「何って、手の甲へのキスは尊敬の意味ですよ。シグナムには色々教えられてますから」

ニコッと無邪気にほほ笑むクロスから視線を逸らす事が出来ずにただじっと見つめるシグナム。
それ以外のメンバーは未だに固まっている、なのは、アリサ、はやてに至っては石化していた。

「手の甲は尊敬…クロ兄ってものしりだねぇ」

スバルだけはよく分かっていずにいた。

「タ、タイムや！」

「いいよ？　僕はいつまでも待つから」

いち早く硬直から立ち直ったはやてがタイムを宣言し、まだチョコを渡していないなのは、フェイト、はやて、アリサ、ノアが別の部屋へと移動していった。

「私達は…お邪魔みたいだから」

「そ、そうね…ちょっと部屋に戻ってようか、クロノくん」

「あぁ、ここにいると精神衛生上よくなさそうだ…」

「主、健闘を祈ります」

リンディ、エイミィ、クロノは自室へと戻って行った。

ザフィーラは人型になり耳と尻尾を隠すと外へと散歩に向かった。

「ノアちゃん…あれ、一体どういうことや！？　あんなんクロスくんちゃうで！」

「そうよ！　いくら酔っぱらったからって…あ、ああんな行動するなんて…／／／」

数々のセリフと行動を思い返してアリサは頬をさらに赤く染めた。

「にゃはは、ちょっと羨ましかったけどね」

「…うん」

「大丈夫だよ、なのはちゃん、フェイトちゃん」

「そうや！　まだ私らはチョコを渡してへん！　勝負はこれからや

！」

「うん、ギンガやシグナムさん達のようには行かないわよ！」

何やら作戦会議を始めたはやて達

と、そんな5人が行った部屋を横目で見ていたすずかとヴィータ。

「……一体何をやっているんだ？」

「まぁまぁ、私達はもう渡し終えちゃったんだし」

「ふんっ、その方が良かったっての」

そこへクロスが近付いてきた。

「ヴィータのチョコ、すごく美味しいよ」

と、ヴィータの頭に優しく右手を乗せゆっくりと撫でた。

「なっ、何するんだ！？／／／」

「何って…お礼だよ？」

「お礼って、チョコのお礼ならさっきもらったぞ！」

と嫌がりながらも撫でられる手を振りほどこうとしないヴィータ。

そんな様子を頬笑みながらもちゃっかりクロスの左側へと移動するすずか。

そして、それに気付いたクロスは

「どうしたんだい、すずか？　やきもちかな？」

「そう思うんなら…ね？」

と、頬を染め、目を潤ませながら見つめる。

普段のクロスならば慌てるか、顔を背ける所だが、今のクロスは違

った。

「仰せのままに、お姫様♪」

と、すずかを優しく抱きかかえ、頬を撫でた。
すると、眠くなったのかすずかは寝息を立て、気持ちよさそうに眠ってしまった。

「おや、眠っちゃったね」
「今日は遅くまでチョコ作ってたって言ってたから疲れたんだろ…起こすなよ？」
「分かってるよ、こんなに可愛い寝顔をしているのだもの、邪魔はしないよ」

「お前…本当にクロスか？」

ヴィータが怪訝そうな表情で睨むように見つめた。

「僕は僕だよ…けど、僕じゃないよ」

そう言ってクロスは悲しそうな笑顔を浮かべた。

「？？どういう意味だ」
「僕は…もう1人のクロスさ…普段、表に出さない感情の塊、かな」
「二重人格…ってやつか？」
「それは違うね。僕は僕であり、僕ではない」
「ん～…いみわかんねぇぞ」
「ははっ、そうだね。ヴィータには言ってもいいかな…今の僕は、さっき言った感情の塊
と言うのわね、普段ヴィータ達に抱いている感情なんだよ」

そう言うクロスの眼は悲しみに満ちていた。

「これはノアも多分知らないと思うけど僕は普段皆からどう思われているのかは…分かってるんだ」

その言葉にヴィータは驚いた。

ヴィータははやて達に異性として好かれていると感じているとは思っていなかったからだ。

あくまでも友達としての好感として感じてると思っていた。

それはなのはやノア達も同じで、クロスはなのは達の好意に気付いていないのではないか、と。

「なんで、気付いていないフリをしているんだよ?」

「…僕は、存在自体が…罪だから」

「ん? なんて言ったんだ?」

小声だった為、ヴィータにはよく聞き取れなかった。

「…待てよ! 今のお前が普段隠してる感情って事だよな?」

「そうだよ」

「じゃ、じゃじゃあ…今のお前がギンガやシグナム達にした事って…」

ふと何かに気付いたヴィータが詰め寄ろうとするとクロスはシーっと人差し指を当てて

「あはは、それはヒミツさ。この事は、皆には内緒だからね? もちろんノアにももう一人の僕にも」

「どうしてだ?」

「……僕はね、僕の敵だからさ…それじゃあ、そろそろ表に出るの限界だから…」
「お、おい！」
「皆には酔ったせいでこうなったって思っていて欲しいんだ…まぁ半分本当だけど」
クロス…もう一人のクロスはシグナムやギンガへと眼を向け。
「ごめんね、ギンガ、シグナム…本当は俺が受け取らない方が良かったん…だけど…」
「何を言ってるんだよ？」
「ははっ、今回は事故で表に出てきたようなものだからすぐに戻るつもりだったんだけどね。
ギンガやシグナムからチョコ受け取るつもりはなかったんだよ…その役目は僕じゃないから…」
「おい、大丈夫か？」
段々とクロスの言葉が弱弱しくなっていった。
「じゃあ、もう会えない事を祈ってるよ…ヴィータ」
「クロス、おい、クロス」
そのまま、また力なくヴィータの方へと倒れこんでしまった。
「どういう事だよ…何がなんだって言うんだよクロス…」
最後までもう1人のクロスの言っていた事が分からずに困惑するヴィータ。
と同時に別室に行っていた5人やリンディ達がリビングに駆けこんでくるのが同時だった。

続く

第67話　「バレンタイン決戦！（笑）　第3戦」（後書き）

カガヤ
「あっれ～？」

ノア
「あっれ～？…じゃないでしょ！なんですか今回の話は！私、聞いてない！」

カガヤ
「どこの所長さんだよお前は（汗）…さてと、今回は多く語りません。ただ以前の描写と矛盾が色々あるかも、矛盾しないようには書いていたつもりですが」

クロス
「俺の裏設定か？」

カガヤ
「クロスは表向きは超鈍感で、ノアですら騙しています。ですが本心は……それともう1人のクロスとも言うべき存在。二重人格に見えて実は違います。そこらへんはまた後ほど…」

ノア
「なんだかなぁ～…批判とかきそう…」

カガヤ
「甘んじて受けますよ！だからこそ描写にすごく手間取ったんですから（苦笑）…と言うわけで感想などお待ちしております！」

第６８話　「バレンタイン決戦！（笑）　第４戦」（前書き）

やっとかけた―！
…最近多忙で疲れが取れない…

第６８話　「バレンタイン決戦！（笑）　第４戦」

第６８話　「バレンタイン決戦！（笑）　第４戦」

再びクロスが倒れて、数分後。

「う、うぅ…なんだ、俺どうしたんだ？」

眼を覚ましたクロスが当たりを見渡すと…

「「「「……」」」」

「うわっ！？」

ソファで横になっているクロスを囲むようになのは達がジーッと見降ろしていた。

「あ、みんな…その、俺どーなったの？」

「えっと、ね…」

「うーんと…」

苦笑しながらなのはとフェイトが振りかえった先には…

「「……／／／／」」

惚けた顔でどこか別の世界へ旅立っているギンガとシグナム。

「……何があったの？　マジで」

口を開け、茫然とするクロスの肩をはやてとノアがそっと叩き。

「なんにもあらへんよ？」
「うんうん、気にしない気にしない…それよりもマスターこそ大丈夫ですか？」
「俺、いや、これと言ってなんともないけど？」
と自分の体のあちこちを見て、念の為ラファールがスキャンして以上なしと出た。
クロスが酔って倒れていた間の事はラファールにも記録がないらしい。

（なんだかよくわかんねぇけど、今は一応黙っておくか…）

クロスを睨むように見つめていたヴィータはやがて自分の部屋へと戻って行った。

（…ただ酔ってああなっただけならいいんですけどね…）

ノアも深く考えるのは後回しにして、今は眼の前のイベントに集中する事にした。
ちなみにティアナは今だ気絶中、すずかはお昼寝中だ。
シャマルとスバルはクロノとエイミィと一緒に買い物に出ている。

「大丈夫ならいいわね、皆」

アリサが目配せするとなのは、フェイト、はやて、ノアは少し緊張した面持ちで頷いた。
そして、皆でクロスを囲むように並び立ち…

「それじゃあ、クロス君…」

「「チョコレート受け取って下さい！」」

アリサとはやてが小箱を手渡した。

「お、おぉ。皆ありがとうな…それにしても同時に渡されるとは」

「し、仕方ないでしょ…1人1人に渡して行ったら私達の身がもたないもの（ボソリッ）」

「ん？　何か言ったかアリサ？」

「ううん、なんでもないよ。それよりも早く食べて感想聞かせて」

なのはに急かすように言われてクロスは次々と箱を開け、チョコを食べ始めた。

（1人1人渡す度にあんな恥かしい事言われてたら周りで聞いてる方も持たないわよ）

（酔ってあんな事言ってたんやとしたら…ちょっとおしかった気もするけど…）

（甘いですよ、はやてちゃん。酔ってなくても結構恥かしい事言ってるから）

（う～ん、確かにクロス君は普段からあんな事言ってる…かも／／／）

（そう、だね…あの時も…／／／）

（なんや、2人とも言われた事あるんやね／／／）

（それでこそマスターですよ／／／）

（ちょ、ちょっと！　なんで私だけないわけ！？）

「どうしたんだ、5人共？」

「「「「「なんでもない（わよ・ですよ）」」」」」

恐ろしいほどのタイミングでさっきから発言が重なる5人。

そんな事にはさほど気にも留めずにチョコを食べ終わったクロス。

「じゃ、まずはアリサ。思ったより甘くない、甘さ控えめのチョコだったね」

「ま、まあね。甘過ぎると飽きると思ったんだけど…ギンガも同じような事考えてたみたい」

少し悔しそうにつぶやくアリサの頭に手を置き

「そんな事ないさ、誰かがやった事を自分がやったらダメだって事はないんだし。
　アリサだって俺の事考えて作ってくれたんだろ？　その気持ちだけで俺は嬉しいよ」

「はうっ！？／／／」

ニコリと満面ではないがさり気ない優しい笑顔を向けられアリサの顔はタコのように真っ赤になった。

（あかん！　これじゃ一緒に渡した意味がないやんけ！！）

はやてが焦るが、時すでに遅く…

「はやて、これ…クッキー、だよね？」

「あ…うん、そうや、チョコばっかりだと飽きるかなー思うてな。味付けはアリサちゃんが
　形はすずかちゃんが変えるとい言うてたから私はいっその事クッキーにしようかと…」

なんでチョコじゃないんだ。と言われるかとはやてはおどおどしながら答えたが

つい先日までバレンタインの事自体知らなかったクロスにはそんな事はどうでもいいらしく

「ありがとう、はやて。皆が作ってくれたチョコを飽きるなんて事はないけど。
それでもこのクッキーも結構美味しいよ」
「ごめんな、時間あればもっと色々凝りたかったんやけど…」

はやては時期が悪く、病院で精密検査を受けたばかりではなくシグナム達に教えながらだったため時間があまり取れなかったのだ。その事でシグナム達が申し訳なさそうだったが、はやて自身はこれも家族のためや。と笑っていた。

「これでも十分すぎるよ。程良い食感に歯応え、はやてはお菓子作りも上手なんだな」
「そ、そんな…前にクロス君が作ってくれたクッキーの方が美味しいで？」

以前にクロスはクッキーを作ってみた事があり、それを食べたなのは達やクイントでさえあまりの美味しさに女としてのプライドがズタズタになった事があった。

「自分で作ってるものの味は比べようがないからな…でも、はやてのクッキー俺は好きだよ？」
「ほんまか！？」
「あぁ、ほんまほんま♪　また…食べたいな」

そう言って優しく撫でられ、はやては眼を輝かせてくすぐったそうに、でも嬉しそうに身を任せた。

「クロス君って頭を撫でるのが好きなのかな？」
「というよりも女の子は頭を撫でられると喜ぶ、と思ってるんですよ。母さんの入れ知恵で」
「そ、そっか…でも、皆嬉しそうだから間違いじゃないよね」
なのは達3人はその光景を羨ましそうに、でも微笑ましく見ていた。
そして、なのはとフェイトはその場を離れた。
「それで、なのは達のは…どこに？」
今まで渡された中になのは、フェイト、ノアの分は入ってなかった。
「私のは最後に渡しますから、まずはなのはちゃんとフェイトちゃんの合作を♪」
ノアが指さす方では台所から少し大きめの箱をなのはとフェイトが運んできた。
「お、おぉ～なんだなんだ、何を作ったんだ？」
「へへっ、フェイトちゃんと2人でがんばりましたぁ～！」
「ちょっと、作りすぎちゃったかな／／」
2人が箱を開けると少し大きめのチョコケーキが出てきた。しかも…
【クロスくん、いつもありがとう】
と書かれている。
「えっとね…」

「…あの」

2人が何か言う前にクロスが2人を抱きしめた。

「わっ!?／／／」

「ク、クロス?／／／」

「ありがとう…なんか、すっごく嬉しいよ…」

「はにゃ…2人でがんばったんだよ／／／」

「……よ、喜んでもらえてよかった／／／」

なのはとフェイトは顔を真っ赤にしながらもお互いに笑い合った。

「ふふっ、マスター…あんまり強く抱きしめると窒息しちゃいますよ?」

「あっ…ご、ごめん!」

2人の顔が真っ赤なのに気付き急いで離れた。

それを2人は名残惜しそうな表情を浮かべ、ノアの方へと向いた。

「違うよ、クロスくん!　これは苦しかったわけじゃなくて…もう!」

「ノ～ア～!」

「あはは、ごめんね、2人とも…私の番が待ちきれなくて♪」

大して悪びれるずにノアは自分の番とばかりになのは達と同じくらいの箱を運んできた。

「私のは…これです!」

箱の中身は独特の色をしたマフィンだった。

「こ…れは、まさか…！？」

マフィンを見たクロスは驚愕の表情を浮かべノアを見た。
なのはとフェイトには少し変わった色をしたマフィンにしか見えない。

「ふふっ、マスターが思ってるようなものかどうかは食べてみてください♪」
「あ、あぁ……もぐもぐ…これは、この味は間違いない…クラリス博士のマフィンの味！」
「「クラリス博士？」」

聞き慣れない名前になのはとフェイトは首をかしげる。

「あ…クラリス博士っていうのはな…俺とノアの恩人だった人なんだよ」
「だった？」
「…まさか」

2人が動揺するより先にクロスが2人の口を抑えた。

「…その先はいずれ、な？」
「うん…」
「わかったよ…」
「ノア…」

無表情でノアを見つめる。それに大してノアはニコリと微笑み。

「やっと、この味を出せたんですよ…それに」

ノアの視線の先にはなのはやフェイトの他にはやてや起き上がったティアナ達がいた。

「うん…そうだな、ありがとう、ノア。このマフィン、最高のマフィンだよ」

「どういたしまして、マスター…あ、一応教えておきますけど、来月は三倍返しですよ？」

「……え“っ？」

固まるクロスになのはは来月の１４日のホワイトデーについて説明した。

「さ、三倍返しか…」

そこへ玄関から元気な声がした。

「たっだいま～お買い物終わったよ～♪」

「フェイト～ただいま～♪」

買い物に行っていたスバル達と一緒に本局へ出向いていたアルフがやってきた。

そして、２つの包みをクロスへと手渡した。

「アルフじゃないか、どうしたんだこれ？」

「これは私からのバレンタインチョコ、こっちはプレシアの分だよ」

「か、母さん…」

やけに気合の入ったプレシアからの包みを見てフェイトは少し複雑な気持ちになった。

「それでアルフ、クロノくんには渡せたの？」

ノアが興味津々に聞かれるとアルフは途端にうろたえ出した。

「な、ななんでクロノの名前が出てくるのさ！？　私はただ多忙でこっちに来れないプレシアにチョコを渡してくれって頼まれたから本局に行っただけさ！／／／」

真っ赤になって否定するアルフに皆が笑い出した。

それを聞いてますますアルフは赤くなり小さく縮こまってしまった。

「それにしても…この人数に、あ、母さん達にも3倍か…」

苦笑するクロスになのは達は今まで以上の笑顔で

「うん♪　楽しみに待ってるよ♪」

「一カ月後、期待してるから」

「楽しみにしとるでぇ♪」

「さ～って、どんなのがくるかしら？」

「ふふっ、3倍の基準はクロス君が決めるんだよ、がんばってね♪」

「あっはっはっ、私も知らなかったけど…面白くなってきたじゃん」

「そうだな、今日は散々な目にあったからな3倍でも足りないくらいだが…」

「あら～？　シグナムは堪能したからもういいんじゃない？くすっ」

「…に、兄さん…がんばっ！」

「がんばって～♪」

「……クロスさんの三倍返し…／／／」

「あ、あはは…来月大変だな、こりゃ…」

女性陣の期待の眼差しの雨あられにクロスはただ笑うしかなかった。

「モテる男はつらいよねぇ～♪」

「エイミィ、その包みはなんだ？」

「ん？あとでこっそりクロス君に渡そうかと思って♪　クロノ君にはもう渡したでしょ？」

「…ま、まぁもらったけど／／／」

「私もあとで渡さないとね…クイント達に何か言われる前に」

「か、母さん！？」「リンディさん！？」

余談だが、その後クロスは桃子や美由希、はたまたすずか家のメイド達にまでチョコを貰う事になる。

「あ、そうそう。クロスくんに荷物が届いたわよ」

そう言ってシャマルが小さな包みをクロスへと渡した。

「ん、なんだろ…手紙も入ってるな差出人は…【川澄舞】【倉田佐祐理】…っ！？」

「えっ、舞さんに佐祐理さん！？」

「どれどれ～！？」

クロスの読み上げた名前になのはとノアが反応して駆け寄ってきた。そして、フェイト達も次々も駆け寄り、手紙を覗き込んだ。

「わっ、こ、こら～！　手紙読めないだろ、離れてくれ～！」

「誰？　誰なんや？…あ、北海道からなんて、クロスくんいつの間に知り合い出来たんや？」

「むっ…いつ北海道に行ったのよ、しかもなのはと一緒になんて」

「私も行きたかった…」
「仕方ないだろ、フェイトには別の用事あったんだし、って母さん達も一緒だったっての！」
賑やかな喧騒にふとクロスの手から手紙が飛んだ…その手紙には

『クロス君、なのはちゃんへ

はぁ～い、元気してるかなぁ～？　私も佐祐理も一弥も元気だよ！こっちは寒いけどそっちはどうかな？　雪がないならこっちの雪を空輸しちゃうぞ～！
って佐祐理が言ってました～！（笑）

さてはて、本題…ついこの前の出来ごとだけど、本当にありがとうね。
2人のおかげで今私達はこうして笑い合えてるよ。
うん、今度はゆっくりこっちに遊びにきてね。
もちろん可愛い妹やお友達もたっくさん連れて来てね。
みんな私より可愛いのかな？…ちょっとジェラシー☆
なーんて、それじゃ、バレンタインに届くように贈ったんだけど時期ずれたらごめんね、まったねぇ～♪』

そう手紙には書かれていた。

「あ、あはは…舞さん見違えちゃってるよ…」
「そ、そうだね…あ、まだ何か書かれてるよ」

それは手紙の裏側に書かれていた。

『P．S．　今度は小さい妖精さんも紹介してね☆』

「バレてたよノア…」
「や、やっぱり私の事気付いてましたか…流石は舞さん」
「あ、まだ何か書かれてるで」

さらにその下側には

『P．S．２　今度来る時は彼女さん連れて来るか、なのはちゃんと恋人になっててね、でないと…

私と佐祐理がクロス君を頂いちゃうぞ（はぁと）』

「「「「「「はあぁ～～～！？」」」」」」（フェイト達）
「「「なんでー！？」」」（クロス達）

それは…爆弾だった。
見知らぬ女の子２人からのバレンタインチョコに加えてこの手紙。
クロス達３人はフェイト達から詳しい事情聴取を受ける羽目になった。

・
・
・

補足　とある居酒屋

ゲンヤ

「ヒック…なんでぇ、地球の風習だかなんだかしらねぇけどよ…なんでクイントもギンガもスバルもノアも
俺にチョコなんてわたさねぇんだ！…いや、地球の風習なんて気にしちゃいえけねぇ（グビグビ）」

すでにゲンヤは出来あがっている状態だったが、さらにビールを一気に飲み干した。

ティーダ
「ま、まぁまぁ…もうその辺で飲むの止めた方が…（てかなんで俺が付き合わされるんだ！？）」

ティーダはなぜかゲンヤに捕まり居酒屋巡りに付き合わされていた。

ゲンヤ
「ティーダ！　お前もティアナちゃんからチョコもらえたか！？」

ティーダ
「えっ？…い、いえ…ティアナはクロスに渡すのに夢中だったようで…」

特に表情を変えずに言うティーダにゲンヤは大声で笑いあげ

ゲンヤ
「あっはっはっはっ、そうだろそうだろ。俺の息子にかかればティアナちゃんだってメロメロなんだぁ～
今にティアナも俺の娘になるんだぁ～！　あっはっはっはっ！」

機嫌が良くなったのかジョッキ片手に踊り始めてしまった。

ティーダ
「愚痴りたいのか親馬鹿なのかどっちだよこの分だと、先週早めに美由希から
　バレンタインチョコもらってついでにデートまでしたのは…黙っておいた方がいいな、うん」

ちゃっかりクロスより先にバレンタインを満喫していたティーダなのであった。

数時間後、駆け付けたクイントによってゲンヤは鉄拳制裁と説教を喰らった。

続く

第６８話　「バレンタイン決戦！（笑）　第４戦」（後書き）

カガヤ
「ゲンヤ…南無…」

クロス
「あ、あははは…って何気なく重要そうな名前がいくつか出てきたな」

ノア
「クラリス博士は以前も出たとして、あの２人は…まさか？」

カガヤ
「これはゼスト隊、クロス、なのは、ノアが１月にとある任務で北の大地を訪れた時の物語…近々書きます」

クロス
「本編進めろよ…」

ノア
「はぁ…」

カガヤ
「いいだろ！どうせ彼女達の本格登場は？部なんだから」

クロス
「今年中に？部すら終わらせられなかったくせに…いつ？部にいける？」

カガヤ
「このペースだと来年の夏かな…」
クロス、ノア
「「はぁ～～～～～（長いため息）」」

第６９話　「バレンタイン延長戦　＋　真冬の怪談　てけてけ」（前書き）

シリアスでギャグでほのぼのでまたシリアスな話。
今回登場する「てけてけ」のイメージＣＶは
能登麻美子さん（ＣＬＡＮＮＡＤの一ノ瀬ことみなど）です。

注意、一部グロテスクな表現あります…でもギャグです（爆）

【報告】作者は１２月２８日～来年１月３日は実家なため更新出来ません。感想返信や雑談とかには出れれば出ます。
なのでおそらくこれが年内最後の投稿です…４章行けなかった　ｏｒｚ

第69話　「バレンタイン延長戦　＋　真冬の怪談　てけてけ」

バレンタイン深夜　クロスの部屋

ノアは自分のベッドで熟睡中、そして、クロスはベッドに横になりながら
机の上に置かれたチョコの箱を眺めていた。

「……」

その表情は…暗がりの中で悲しみと苦しみが混ざったような今にも泣きそうだ。

「俺に……そんな資格はないのに」

小さく、そう呟いた、その時クロスの携帯が鳴った。

「誰だよ、ノアが起きちゃうじゃないか」

飛び付くように携帯を取ったクロスは相手も確かめる前に電話に出た。

「はい、もしもし?」
「わたし、メリーさん…「眠いから切るぞ?」ちょ、まち…（プツン）」
プーっプー…

「全く、真夜中になんの用事なんだか」

携帯の電源を切ろうとしたその時またもメリーさんからの電話がかかってきた。

「おかけになった電話番号は現在使いたくありません。１００年たってからおかけ直し下さい」

「…ってちょっと！　そこは使われておりませんでしょ！　と言うか１００年なんて待ってられないわ！」

そういう問題か？　と心で思ったクロス。

仕方なくメリーさんの相手をする事にした。

「ねぇ、クロスって私にはすごーく冷たくなってない？」

「そうかな？　メリーさん以外にもあまり変わってないけど？」

と言うより今更気付いたのか。

「あーこホン、ともかく！…わたし、メリーさん。今あなたの家の前にいるの！！」

「えらく今日はまた最初からクライマックスだな…」

クロスは自分の部屋の窓から玄関を見ようとしたが、暗くてよく分からなく

屋根に隠れて玄関もよく見えなかった。

「今日は野暮用で来たのよいいか……はぁ～い、クロスく～ん、元気～？」

突然電話の相手がメリーさんからどこか陽気な大人の女性の声に変わった。

「この声…口裂け女さん？」
「久しぶりね♪…それよりも～今日はもう1人いるわよ♪」

返して返して～。と小さくメリーさんの声も電話口から聞こえてきた。
恐らく背の高い口裂け女に電話を取られてメリーさんが取り戻そうと飛び跳ねているのだろう。

「もう1人？」
「ふふっ、代わるわね……もしもし、私です、てけてけです」
「てけてけ、さん？　あぁ～、久しぶりですね」

クロスの頭に浮かんだのはとある少女のちょっと変わった姿…
それは先月の話…

・
・
・

「てけてけに追いかけられた？」

いつものように登校途中でなのは達と合流したクロスはアリサからてけてけに襲われた話を聞いた。

「うん、あのね…」

アリサが言うには、先日一人で帰宅していた所。
電柱の陰から覗く中学生くらいの女の子に『足、いりますか？』と尋ねられ
『いらないわよ、足なんて』と答えると『じゃ、もらいますね』と

言い大きなハサミを持って
電柱から出てきたその体は下半身がなく、上半身だけで追いかけてきたのだそうだ。

「よ、よく逃げられたね…」

なのはが顔を真っ青にしながらも言った通り、この手の話は簡単には逃げられないというのが定石だ。
クロスの読んだ本にも、てけてけは足を切ろうと大きなハサミを持ち時速は１００～１５０キロで
追いかけてくるので逃げきれないと書かれていた。
しかし、アリサは不機嫌そうに頬を膨らませて

「……が…かったのよ」
「えっ？」

小さい声でよく聞き取れなかったのでフェイトが聞き返すと、アリサは更に不機嫌な顔になり

「てけてけの大きな胸が地面に擦れて動きが超とろかったから逃げられたの！」

と大声で叫んだ。それを聞いたクロス達は一瞬ぽかーんとしてしまった。

「そ、そんなに大きかったの？」
「そうよ！　服の上からでもわかったわ！　しかもほふく前進するたびに胸の谷間が強調されて
　傍から見ても、胸が邪魔して動きづらいって分かるほどだったわよ、憎たらしい！！」

「分かったから、少し落ちついて！」

クロスが止めるが隣ではなのはやフェイトもウンウンと頷いていた。

「…何なんだ？」

「えっと、クロス君にはちょっと分からないかなぁ」

苦笑いを浮かべたすずかに何の事か分からないクロス。

「クイントさんやメガーヌさん達みたいな大きな人の周りで育ったんだよね、クロス君…」

「ノアちゃんも大きくなったらすごく大きくなるみたいだし…」

「えっ？　そんなのわかっちゃうの！？」

「う、うん…まぁ、母さんも大きかったなぁ…」

女の子４人は何やら胸の事で深刻な表情を浮かべているが少し離れたクロスには会話の内容は聞こえず…いや、聞こえないふりをしていた。

『…いやはや、マスターも大変ですねぇ♪』

『念話でいちいち会話を盗み聞きするな、ノア』

そして、その日の放課後。

クロスは留守番をしているノアに頼まれたものを買いに１人商店街まで来ていた。

そして、買い物を終えて商店街から自宅へと戻る途中で

「…足、いりませんか？」

声をかけられ後ろを振り向くと、中学生くらいのセーラー服を着て黒長髪の少女が
電柱に隠れながらクロスに話しかけてきた。

「えっ？　なんの用ですか？」
「あの…足、いりませんか？」

さっきよりもはっきりと、しかし、どこか恥かしがってるような口調だ。

「足、ですか……あ、これですね、良かったらあげますよ♪」
「え、本当ですか！」

眼を輝かせる少女の元へクロスは歩み寄り…

「はい、これでいいですか？」

ノアに頼まれていた。ケ○タッキーフライドチキンの足の部分を手渡した。

「えっ？　あの…ど、どうも」

少女は戸惑いながらも受け取った。
それを見たクロスはにこりと微笑み

「食べ過ぎると、せっかくの綺麗な顔が台無しになるのでほどほどにしてくださいね、それじゃ」

とさわやかにその場を去った。

「あっ／／／…綺麗／／／……はっ！？　待ってぇ～！！」

その後、買い物に行く途中のはやて達とばったりと出会ったクロス。

「はやても結構歩けるようになったよな」
「うん、ほら、もう走れるようにもなったよ」

と、クロスやシグナム達の周りをグルグル走りまわるはやて。

「は、はやてまだ無茶しちゃダメだって！」

ヴィータが静止するが構わず走りまわる。

「はいはい、その辺にしましょうね」
「わっと、シャマル離して～おろして～……あれ？」

シャマルに抱きかかえられた、はやての視線がクロスの後ろでピタリと止まった。

「ん？　どうしました主はや…」
「なん……だ？」

シグナムやクロス達も後ろを振り返ると…

「はぁ、はぁ…やっと追い付きました…」

先ほどクロスが出会った少女がそこにいた。
しかし、先ほどと違って電柱に隠れてではなく、電柱に寄りかかっ

ていた。
そして、その少女は…腰から下が、なかった。

「あっ……あぁぁ…」
「は、はやはやて…さ、さがっててて…」

はやてやヴィータ達は少しパニックを起こしていた。
クロスも口を開け、少女を指さし

「さっき俺がケンタッ○ーあげた人だ！」
「「「いや、他に言う事あるでしょ！？」」」
「あ、さっきはありがとうございました。美味しかったです…あの、私はてけてけと言いまして」

少女は丁寧にお辞儀をし、匍匐前進で近寄って来た…が

「はぁはぁ…ふぅ…ダメ、まだ休みが足りない…です」

すぐに地面にへたりこんでしまった。

「あ、あの～大丈夫ですか？」

流石にはやてが心配して声をかけたが

「やっぱり、胸がこすれて…うまく動けません」
「…心配して損したわ」
「は、はやてちゃん…」

てけてけの胸が大きい事に気付いたはやてがあっと言う間に不機嫌になった。

「あ～俺がそっちに行けば…」

たまらずクロスが近寄ろうとしたがてけてけは片手を上げ、それを静止した。

「い、いえ、大丈夫です。新しい移動方法を今思いつきましたから」

そう言うと、てけてけは息を整え両手を地面に付き…

「よっと！」

その場で逆上がりをした。そして、バランスを悪くしながらも倒立体勢のままだ。

「あ、あの…」

「大丈夫です、私、こう見えて腕の筋力結構ありますから。電柱に捕まってた時もそうだったでしょう？」

そう言われるとてけてけに初めて会った時も、彼女は電柱の下ではなくちょうどいい高さに隠れていた。

それはつまり…

「…電柱にしがみついていたの？」

「え、えぇ…出ないと不自然じゃないですか」

「そりゃまぁ…」

下半身もあるように見せかける為にわざわざ電柱にしがみついていた。

それは腕の筋力がすごいと言う事だ。

「すごいすごい！」
「…え、えへへ、そうですか？／／／」
思わず拍手を送るクロスだが、ふとはやて達の様子がおかしい事に気付いた。
「……はやて？」
「……あ、わわ……」
怖くて顔を真っ青にしてるのかと思ったが違うようだ
ヴィータやシャマル、シグナムですら気持ち悪そうに顔を逸らしている。
「みんなどうしたんだ？」
「…あ、あれや…あれ…」
はやてが指さす先には…
「……あっ」
気付いた、はやて達がなぜ気持ち悪そうに顔を背けているのかを…
そして、その惨状に耐えきれなくなったヴィータが…
「てめぇ！！　切断面が丸見えでめちゃくちゃ気持ち悪いんだよぉ！！！！」
アイゼンで思いっきりてけてけを殴り飛ばした。
何回も言うが、てけてけは腰から下、下半身がちぎれてないのだ。
そして、今のてけてけは倒立姿勢…つまり、ちょん切れてる部分を

思いっきり見えるようにむき出し。
具体的に言うと、切断面から腸やら骨やらその他臓器がはっきりと見えているのだ…
血が出ていないのがせめてもの幸いだ。
うん、書いてて想像したら気持ち悪くなってきたぞ～

「あ～～れ～～～！！」

アイゼンにぶっ飛ばされたてけてけはそのまま空の彼方へ飛ばされ見えなくなってしまった。

・
・
・

回想終了

「あ～！！　いや、あれからどうなったかすんごく気になってて、大丈夫でした？」
「はい、ちょうど飛ばされた先に口裂け女さんがいて…助かりました、えへへ」

全く、あの時は死ぬかと思ったわ。と電話の向こうで口裂け女のぼやきが聞こえた。
ちなみにクロス達の方は気持ちが悪くなったはやて達を家に帰してはやての買い物はクロスと荷物持ちの応援で来たクロノやエイミィによって無事に終了。
そのせいで土産のフライドチキンが冷めてしまい、レンジで温めるまでノアが拗ねてしまったのは別の話だ。

「そう言えばあの時俺を追いかけてなんの用事だったの？」
「本当は足をもらうかと思ったんですけど、それより先にチキンの

お礼がしたくて…」

少し照れながら話すてけてけ、口裂け女はニヤニヤとメリーさんは少し不機嫌にそれを聞いていた。

「いや、そんな、お礼だなんて、たまたま俺が、足持っていただけですから」

「欲しかったのはその足じゃなかったんだけどね…あ、メリーさんに代わるね」

そう言って電話をメリーさんへと代わった。

「もしもし？　そう言うわけだから今すぐに玄関まで来なさい！」

「いや、話全然繋がってないから、なんで俺が行くんだよ？　普通そっちが俺の所まで来るんだろ？」

「い、いいから今日はそういうのはいいの！　分かった？　すぐによ！　それじゃね！」

と一方的に言い放って電話は切れてしまった。

「はぁ…こういうのってメリーさんの電話的にどうなんだろ？…ま、いっか」

仕方なく、ノアやフェイト達を起こさないようにゆっくりと玄関へと向かったクロス。

外へ出てみると、しかし誰もいなかった。

確かに誰かがそれも複数はその場にいた形跡はあるのにだ。

「んん？　なんだ、3人ともどこいったんだ？…あれ？」

玄関の脇に3つの小さな箱が置かれているのに気付いた。
それぞれ丁寧に包装されていて、メッセージカードが添えられていた。

『この前のお礼も含めてのバレンタインチョコです…あの、食べてもらえると恐縮です
美味しくなかったらごめんなさい…では　てけてけ』

「全く、あれくらいでホント律義なんだから」

苦笑しながら次のカードをめくった。

『私は素直じゃない誰かさんみたいには言わないわ、私からのバレンタインチョコよ
でも、安心して私のは義理チョコ、お世話になったお礼。でも…他の2人は知らないわよ?♪

追伸　なんで私やメリーさんよりてけてけの方が応対丁寧なの?
口裂け女より』

「はっきり、義理と言われると安心する気がするよ…でもなんで、と言われても…なんでだろう?」

そして、最後のメッセージカードには…

『チョコをあげるわ、言っとくけどバレンタインは関係ないわよ!?　勘違いしないでよ?
たまには贈り物したくなった気分なの!　ありがたく食べなさい!　メリーさんより』

「素直じゃないんだから相変わらず…」

そういうクロスの口元は緩んでいる。
良く見るともう1つ包み置かれていた。

「あれ、誰かもう1人いたのかな」

絶対クロス君が開ける事。と書かれたメッセージカードもあったので開けてみると

『やっほ～！　愛しいクロス君におねえさんからの愛のバレンタインチョコだよ～！
本当は直に渡そうと思ったんだけど…色々大変そうだったから置いておくわね。　氷女より』

雪女の氷女からのバレンタインだった、カードの裏にも何か書かれていて…

『…で、これをクロス君以外が開けた場合…呪いかかるから♪』

「かかるから♪　じゃないっての！　通りで変な力感じるなと思ったら、呪いかい！」

ちなみにクロスが開けた瞬間に呪いは消えるので後は問題ないらしい。

「やれやれ……バレンタインってのは結構疲れる行事なんだな…でも、いいかな」

さっきまでの悲しい表情はすでに消え、今のクロスは嬉しさでいっ

ぱいになっていた。

・　・　・

少し離れた場所でクロスの様子を窺っていたメリーさん達。

「ねぇ、本当に会わなくてよかったの？」

口裂け女の問いかけにもメリーさんはどこかさびしそうに

「うん…今会うと、私の場合、それで終わっちゃうから」

「でも、早く会わないと！」

てけてけも悲しそうな表情でメリーさんを見上げている。

「大丈夫大丈夫、まだ一カ月くらいはもちそうだから、それまで何回も電話してやるわ♪」

「そう…なら、もう何も言わないわ」

「私も、何も言いません…」

そうして、３人してクロスの方をじっと見つめ、消えていった。

続く

第69話　「バレンタイン延長戦　＋　真冬の怪談　てけてけ」（後書き）

カガヤ
「はい、バレンタイン編本当にこれで終了です！」

ノア
「引っ張りましたねぇ…」

クロス
「ってか幕間劇で何話使ってるんだよ！」

カガヤ
「予定では…今年中に？部終わらせるつもりが段々ずれていって…結局４章にも行けずと（爆）」

クロス
「せめて幕間劇終わらせろよ…」

カガヤ
「あと、２、３話で終わる予定だけど…明日中で書きあげるのは無理だな（汗）」

クロス
「行き当たりばったりにも程があるぞ…雑談してるからだ」

ノア
「でも、楽しいですけどねぇ♪」

カガヤ

「ネタやプロットはあるから書く気あれば書けるんだよ！」

クロス、ノア
「「だったら早くかけぇ！！！（殴」」

カガヤ
「ぐはっ！？…か、感想待ってます…ガクッ」

特別編　「多種多様な初夢パニック」（前書き）

皆さん、あけましておめでとうございます！ペコリ（ｏ＿　＿）ｏ）

こんな駄文に１年近くお付き合い下さいまして誠にありがとうございます。

今年は？部を終わらせ、なんとか？部も終わらせたいと思ってますのでどうぞよろしくお願いいたします。

なお、今回は正月用の特別編で元日にあった出来ごとを書きました。

声優ネタ多数ありますが…全部わかりますか？（笑）

特別編　「多種多様な初夢パニック」

元日　ハラオウン家

今、スバル、ギンガ、ティアナ、シグナム、ヴィータ、シャマルの前には
いつも着ている普段着が並べられている。
そして、クロスと美由希が3人に向かい合うように座っている。

「それじゃ、いくよ…イメージングアルケミー」

クロスがアルガス魔法を発動し両手を合わせ、スバル達へと向けると
淡い光が眼の前に置かれた服、美由希、そして、スバル達を包み込み、一瞬眩しい光を放った。
やがて、光が収まるとスバル達は綺麗な振袖に身を通していた。

「うっわぁ～！　綺麗！！」
「動きにくそうだけど、でも……いい、かな」
「でも、なんだか新鮮な気分かも」

スバルは青を基本に白字の模様が散りばめられている。
動きにくそうに自分の姿を鏡で確認するギンガはスバルよりも少し濃い青い振袖が
眼を輝かせているティアナは赤と橙が混ざった花柄の振袖になっている。

「うんうん、3人とも似合ってますよ、ねぇマスター？」
「あ、あぁ…」
「あれ～？　マスター……見惚れてます？（ニヤニヤ）」

「そ、そんなことないけど、新鮮だな…と、３人とも可愛いぞ」
「「「……／／／」」」

今日は元日、みんなで初詣に行くのだ、どうせなら着物や振袖を着てみようと言う事で
クイント、メガーヌ、プレシア、リンディ、エイミィの５人は先月に着物を購入し
シグナム達とスバル達はなかなかいい振袖が見つからずどうしようかと考えていた所に

「だったら…作ってみる？」

とクロスのひとことで６人は自分用の振袖を作る事になった。
流石に店に頼むと時間がかかるが、そこはアルガス魔法にちょうどいい魔法があったのだ。

イメージングアルケミー
頭に浮かんだイメージをそのまま現実に投影させる儀式魔法。
ただし、イメージを反映させる素が必要になる。
今回の場合、振袖を作る為に普段自分が来ている服を素にする必要があった。
手順としては振袖のカタログなどをしっかりと見て、自分が来てみたい色合をイメージして
さらに美由希が振袖の構造などを思い描く事で完成する。
つまり、振袖の構造は美由希のイメージを、細かい絵柄や色合はティアナ達のイメージを
クロスの儀式魔法を通じて、普段着に反映させ振袖を作るという作業だ。

「…クロス君の魔法って本当、魔法って感じやね」

とははやての言葉、なのはやはやて達も作ってもらおうかと考えたが自分のお気に入りがあるし、結構な魔力を消耗するらしいので今回は諦めた。
フェイトはなのはと色違いの同じ絵柄の振袖を借りて着る事にした。
なのはと同じ振袖と言う事で気にいったらしい。

「これはまた…」
「みた時から変わってると思ってたけど…」
「実際に着てみるとホント変わった服、ですよね」

シグナム、ヴィータ、シャマルはスバル達のよりは見た目が抑えめになっていて
模様や絵柄よりは色合を重視した振袖になっている。

「ふふっ、3人とも似合っとるで、なぁ、クロス君?」
「いや、そこで俺に振るなよ…あ~……なんて言うか和服も似合うんだな」
「お、お世辞はいらねぇぞ?」
「お世辞じゃないぞ? 3人共雑誌に出てるモデルさんみたいに綺麗だよ♪」
「「「……／／／」」」

シグナム、ヴィータ、シャマルまでもが撃沈。
その様子をノアとはやてはにやにやと眺め

「私達も作ってもらえば良かったわね…」
「まぁまぁ」
「次の機会があるわよ」

クロスに作ってもらったと言う事に拗ねているクイントをメガーヌとプレシアが慰めている。

「ありがとう、クロ兄！」
「お礼は俺じゃなくて美由希さんにいいなよ、俺だけじゃうまく作れなかったからね」
「ははっ、気にいってもらえてうれしいよ。それじゃ私は先に行ってるわね♪」

美由希はと言うと、振袖の出来に満足し、自分も着替えた後でティーダ、恭也、忍、クロノ、エイミィとトリプルデートに行ってしまった。
その時クロノがエイミィの振袖に顔を真っ赤にしてティーダにからかわれていたが。

「それじゃ、行きましょうか♪」
「「「おー！」」」

クイントの一声でクロス達は高町夫妻の案内で海鳴市の神社へと向かった。

八束神社

ここは海鳴市にある、八束神社。
今日は元日と言う事で初詣に訪れた参拝客で賑わっている。

「スバル、ギンガも離れるんじゃないぞ～？」

人混みをかき分けるようにクロス達の先頭を歩いてるゲンヤが声を

かけた。
ちゃっかりクイントより前を歩き、手を握っている。

「「は～い♪」」

クロスの右手にスバル、左手をギンガがしっかりと掴んでいる。
ティアナは両手を塞がれた事に不満顔だが、クロスの背中を掴んでぴったりとくっついている。
一番後ろを歩いていたゼストとメガーヌとリンディが微笑ましく見守っている。

『…物凄く動きにくい』
『我慢我慢ですよ、マスター♪』

なのは、フェイト、はやては士郎達とクロス達とは少し離れた場所を歩いていた。
桃子がなのはの、プレシアがフェイト、耳と尻尾を隠したザフィーラがはやての側に付き
しっかりと離れないようにしていた。

「「「う、羨ましい…」」」

そして、3人共羨ましそうな視線をクロスの方へと向けていた。

「……」

訂正、ヴィータを含めた4人だ。

「あらあら、クロス君。後で大変ね♪」

「お前はいいのか、シャマル」
「その言葉、そっくりそのまま返すわ、シグナム？」
「……やれやれ」

シグナムとシャマルは先ほど振袖を褒められて満足しているようだ。
そうして、無事に参拝をすませ、おみくじを引く事になった。

「あ、凶…」
「ど、どんまいやギンガちゃん…って私は末凶！？」
「２人共、おみくじだから、気にしない方が…」
「そういうテスタロッサは大吉か」
「し、シグナム！？」
「「…へぇ～？」」

運勢を気にするもの。

「旅行すると運気、さらに上昇…」
「私のはなのはお姉ちゃんと同じ事書かれてるよ」
「れ、恋愛運…大きく発展あり……／／／」
「ティアナは何が書かれてたんだ？」
「な、なんでもないです、ヴィータさん！！」

人知れず喜びを感じるもの。

「……大凶」
「ほ、ほら、気にする事ないぞ、クイント…俺は小吉だけど」
「私は凶、ゼスト、あなたは？」
「俺も凶だ、お揃いだな」
「そうね、なら凶でも構わないわね、ふふっ♪」

悪い運勢でも惚気に変えるもの。
みんなが末吉や吉や凶で一喜一憂している中…

「何々、初夢にご注意？…何の事だ？」
『初夢とは正月の間に初めて見る夢の事ですね、その年の運勢が現れるとか鷹や茄子が出ると
縁起がいいとかたくさん言われがある夢…と美由希さんに教わりましたよ』
「へぇ、それを注意しろだなんて、不吉だな」
（初夢…そうだ、アレを試してみよっと♪）

ノアの中でとある事が思い浮かんだ。

その後、アリサやすずか達とも合流しみんなで沢山遊び
夜、メリーさんからの電話や女性陣の風呂場乱入というイベントがあったが
平和に夜が過ぎて行った。
そして…皆寝静まり、それぞれ初夢を見るのであった…

・
・
・

●ティアナの場合

とある古い建物の一室で対峙する、クロスとティアナ。
ティアナは大きな鉈を構え、クロスへと振り降ろそうとしている。

「クロスさん、信じてたのに…酷いよ、クロスさん！」

クロスは迫る凶器に思わず眼をつぶった、その時。

「たあぁぁ～！！」

横から飛びこんできたなのはに突き飛ばされ、ティアナは倒れ込んだ。

「クロスさん、時限装置の場所がわかりましたわ！」

外から女の子の声が聞こえてきた。

なのはは素早く起き上がりティアナとクロスの間に割り込むように立ちふさがった。

「クロスくん、早く○○○の所に行くのです！」

「…すまん、なのは！」

なのはを心配したクロスだが、思いとどまり声がした方へと走って行った。

「あっはっはっはっは！　なのはさん殺されちゃうよ、怒ったティアにきっと殺されちゃうよ！」

「遊んであげるわ…ティアナ、少し、頭冷やそうか…」

なのはの声色が不気味なほど低くなり眼からハイライトが消えた。

「えっ？　な、何かそれちがっ……きゃあぁ～！？」

…ある意味予知夢？

●はやての場合

とある学校で授業をしているスバル、予鈴がなり授業は終了した。

「おい、普通すぎて存在感ないお前」

「えっ？　私！？」

「そうだ、地味なお前。黒板消しといてくれ」

「じ、地味！？……私って、地味なんだ…」

一番前の席にすわっていたはやてに黒板を消すのを頼んだが教室を出る前に眼鏡の女子学生に呼び止められ口論となり…

「ひぎぃ～！？」

不気味な眼玉が付いたシールで驚かされ、カーテンの陰に隠れてしまった。

「スバルー！？　もう、●ちゃんやりすぎだよ！」

心配したノアがスバルにかけよると…

「はうはうはう、せ、先生だぞー」

カーテンの陰から頭だけだして小動物のように涙目で訴えてくるスバルに

「スバル、オメガ可愛いかもぉ～！！」

と、眼を☆にしてスバルへと頬ずりするノア。

「わ、私って……地味、なんだ」

そして、存在ごと真っ白になり眼を点にしてうわごとを発する忘れられたはやての姿がそこにあった。

案外現実と変わらないかもしれない。

「ひ、ヒドい…」

●スバルの場合（アリサの場合）

宇宙空間で赤いロボットに載ったアリサと対峙するスバル。

だが、アリサの乗ったロボはスバルのロボに全く歯が立たずにボロボロにされた。

「こんな所で死ねるかぁ～！」

叫ぶアリサが見たモニターにはスバルのロボの爪が迫っていた。

「そうね、死にたくない…でも、クロ兄は、そんな言葉すら言えなかったぁ！！」

そして、爪がロボごとアリサを貫いた…

「っ！？…ゆ、夢？…なんて夢見るのよ…せっかくの初夢だったのにぃ～！！」

アリサの叫び声は虚しく朝日が照らす部屋に響き渡った。

・　・　・

翌日　1月2日

「おはようございます、兄さん♪　今日もいい天気だね」
「おはよう、クロス。うん、なんだかいい事ありそうな朝だよ！」
「お、おはよう。ギンガ、フェイト…」

やけにハイテンションなギンガとフェイトに驚くクロス。

「おはよ、スバル、ティアナ」

なかなか起きてこないスバルとティアナを起こしに行こうとしたクロスは
ようやく起きてきた2人に挨拶したが…

「お、おはようござい…ます」

ティアナに露骨に眼を逸らされ。

「ク、クロ兄、生きてるよね？　アリサお姉ちゃんに殺されてないよね！？」
「は、はぁ！？」

スバルには泣き付かれてしまった。
その後、遊びにきた、なのはやアリサ達だが…

「「……」」
「な、なんなんだこの状況は？」

アリサとスバルは怖がっているようなおびえているような複雑な視

線を交わし合い。

「ティ、ティア？…私、何かしたかな？」
「ヒィ！　な、なんでもないです、なのは…さん」

ティアナはなのはにおびえ…

「ギンガちゃん…私ってスバルちゃんに影薄いって思われてないかなぁ」
「えっ？」

はやてはスバルを見ながら何やら沈んでいた。

「ねぇ、クロス…皆どうしたの？」
「わかんない…」
「はやても朝から沈みっぱなしなんだよ」

フェイトやヴィータに聞かれたがさっぱり原因が分からないクロスであった。
なのはやすずかも最初はすごく機嫌が良かったが、この状況に戸惑っている。

「う～ん、昨日の夜には確かに全員に入れたはずなんですけどね…この夢見草で作った薬を」

実は昨日、なのは達が食べたお汁粉にこっそりとノアが特製の薬を入れたのだ。
それは夢見草と呼ばれる特殊な薬草から作りだした薬で、飲むとその夜見る夢に
想い人が現れ素敵な夢が見れると言う薬だ。

しかし、効き目には個人差があり…スバル、ティアナ、はやて、アリサの４人は
悪夢とも言える夢を見てしまったのだ。
ちなみに、ギンガやなのは達にはちゃんとクロスが出て、とても書き表せない夢を見たのでご機嫌だった。

「スバル達には悪い事しちゃいましたかねぇ…」

ぶつぶつと隠れて考え事をしていたノアだが…

「…な～にが悪い事したってんだノア？」

ばっちりクロスに聞かれ、全てを白状させられた後でお仕置きを受けた。
お仕置きの内容は…

「や、やめて下さい～マスター、なんですかその自由すぎる攻撃は!？　アリサちゃん？　その本何？
　怖い顔した女神さま召喚しないでぇ～！　はやてちゃん、その怪しげな割烹着に薬はなんですか!？
　シャマル、なんで眼が紅くて爪が伸びて鎖とか出してるの？…あなたはそれアニメじゃ違うでしょ!？」

クロスが作った悪夢を見せる薬を3日間飲まされると言うものだった…
今日もノアは夢の中で色々な悪夢を見せられている…

続く

特別編　「多種多様な初夢パニック」（後書き）

カガヤ、クロス、ノア
「「「あけましておめでとうございます！」」」

カガヤ
「いやぁ～これネタはあったけど3時間でどうにか書いたものなんですよね…」

クロス
「大丈夫なのかこんなネタで…」

ノア
「分かる人いるんですかね…って私がオチですか！？」

カガヤ
「一応作品繋がりの声優ネタばっかりなんで、ノアが見る悪夢もそうですよ…メジャーでマイナーなのもありますが。全部わかりましたか？（笑）次回は通常更新になります。」

カガヤ、クロス、ノア
「「「感想まってまーっす！」」」

第７０話　「妖狐・玉藻京介」（前書き）

平成ガメラシリーズの怪獣、ファイナルファンタジーＸの召喚獣…これまで本格クロスオーバーと言いながらキャラの一部しか出していませんでした、しかもどっちも人じゃない（笑）
ですが、今回は違います。正確には６３話が初めてですが…あの時でこの作品を想像出来た人は、うんいるでしょうね結構（笑）
と言う事で５章にてリリカルなのは異伝～Ｘ　ＤＥＳＴＩＮＹ～はこの作品とクロスオーバーします！
その作品名は…『地獄先生ぬ～べ～』！
この作品におけるぬ～べ～の設定はまた５章にて明かします。
今回は５章に先駆けてあのキャラが出ます…まぁタイトルでもろ分かりですけど（爆）
それではどうぞ！

第７０話　「妖狐・玉藻京介」

３月上旬日曜日　海鳴大学病院　廊下

その日ははやての最後の通院日だった。
最後と言っても数カ月に一回は定期検査に来る事にはなる。
命の危険とまで言われたはやての下半身麻痺は見事なまでに完治し、もう走りまわれる程だ。
そして、春からは４年生として学校に通う許可が出た。
１２月のあの一件以来の見事なまでの回復力には病院中の医師が驚き、ちょっとした騒ぎになった程だ。

「石田先生、ほんまに色々ありがとうございました」
「感謝の言葉もありません」
「今まではやてちゃんの事お世話になりました」
「いえいえ。これもはやてちゃんががんばったからですよ。医者はその手助けをしただけ…
今までよくがんばったわね、お疲れ様、はやてちゃん♪」
「はいっ！」

石田先生に言葉をかけられ改めて涙目で一礼をするはやて。
石田先生ははやての主治医であり、シグナム達が来る前のはやての世話もしてくれていた人だ。

「それで…はやてちゃん、あっちの子は彼氏さん？」

とにやにやしながら石田先生はロビーでヴィータと話しているクロスを指さした。

「ちょっ、ク、クククロロスくんはかかかれれしさんだなんて…なぁ、シグナム？」
「へっ？…あ、あぁそ、そうですよ！　彼はただのご学友という関係で…」
「なんでシグナムが動揺してるのよ…」
「あははっ、それにしても少し年上の彼氏さんなんて…はやてちゃんもやるわねぇ」

石田先生の何気ない言葉に固まり苦笑いを浮かべ合う3人。

「？？…どうしたかしら？」
「あ、あのですね石田先生…クロス君は、私と同い年なんですよ…」
「……えっ！？　そうなの！？　びっくりだわ…中学生くらいかと思っていたのに」

心底驚いた顔をしてクロスを見る石田先生。
当のクロスはその視線に気付いていないのかヴィータと談笑を続けている。
確かに今のクロスは9歳とは思えないほどに逞しい身体付きになってきている。
声変わりもしたようで少し大人っぽい声でしかも、あの落ち着いた口調。
最初シグナム達もはやてより年上に見ていたくらいだ。
そして、それは幼い頃から厳しい訓練を受けていたから身体の成長が普通とは少し異なる…
という解釈で今はいてほしいとクロスとクイントに言われた事がある。
その時、一瞬2人の瞳に深い哀しみが浮かんだような気がしたのではやて達はそれ以上何も言えなかった。

「石田先生、くれぐれもクロス君には内緒でお願いします」
「あら、こう見えても私は医者よ？　身体的特徴で傷付くような事は絶対に言わないわ」

小声で会話をする2人の元に1人の男が近付いてきた。

「こんにちは、八神はやてさん、ですか？」
「はい、そうですけど…あなたは？」

はやて達は男へと振り返ると、そこには腰まで長い金髪を束ねてどこか冷徹さすら感じるほどのクールな面持ちをした若い男性医師が立っていた。

「失礼、私は玉藻京介。童守町からやってきた外科医です」
「あら、玉藻先生。お久しぶりですね」
「えぇ、石田先生もお変わりなくまた綺麗になられたようで」
「またまた相変わらずね」

どうやら玉藻という医師と石田先生は知り合いのようだ。
はやてやシャマルはぽかーんとしていたが、シグナムだけは鋭い視線を送っていた。

「それで玉藻先生、私に何の用なんですか？」
「そうだったね、君の身体の事は私のいた病院にも届いて…私でも力になれるかと一度足を運ぼう…
と思っていたのだけど、なかなか手が空かなくて、気がつけばもう回復したと聞いてね
それでこの街に用事が出来たから少しお祝いを述べたいと思ったわけだよ」
「わ、わざわざありがとうございます。おかげさまですっかり元気

になりました」

玉藻に不思議な物を感じたはやてだが心底自分の事を心配してくれていたと分かり笑顔で答えた。
そこへ、クロスとヴィータがやってきた。

「はやて、診察終わった？」
「うん、今終わった所やでヴィータ」
「この人は？」
「あ、この人は玉藻先生。他の町のお医者さんなんやて」
「よろしく、えっと君は…」
「はじめまして、クロスロードといいます、クロスでいいですよ」

クロスは玉藻と軽く視線が合うと…お互い無表情でみつめあい、なんとも言えない空気が流れた。
はやてや石田先生はどうしたものかと両者を見ていたが、その空気を破ったのは玉藻だった。

「ふふっ…それじゃ私はこれで失礼しますよ。はやてさんや石田先生に挨拶も出来ましたしね」

そう言いながら玉藻は去って行った。

「クロス、あの男は…」
「あぁ…おそらく」

その背中をクロスとシグナムはじっと見つめていた。

その後、石田先生に挨拶をして病院を後にした。

ちなみになのはとフェイトは今訓練校で講習短期メニューを受けていて、ノアが迎えにいっている。
アリサとすずかも稽古が終わればはやての家に来る事になっている。

「…はやて、ちょっと用事を思い出したから先に戻っててくれる？」

突然、後ろを歩いていたクロスは林の方へ目を向けたかと思うと走りだした。

「あ、クロス君！…どうしたんやろ？」
「さぁな…ま、私達は先に戻って、何かありゃすぐに連絡してくるよ」
「クロス君なら大丈夫ですよ」
「…そうやね」

はやては少し心配そうにクロスの後姿を見ていたが、ヴィータとシャマルに言われ歩きだした。
ただシグナムだけはじっとクロスの行く先を見つめていた。

・
・
・

病院裏の林

林の奥深くまで入ったクロスは、鋭い目つきで辺りを見渡した。
手にはいつでも武器を出せるような体勢だ。

「……姿を現せ」

誰もいないはずの林にクロスの声が木霊する。

すると、応えるかのようにいくつかの影がクロスへ向かって飛んできた。
それは鋭い爪をした一本角の小鬼達だった。

「……」

しかし、クロスはその姿を見ても一切動じないどころか武器も構えずに無防備のままだ。
小鬼達がクロスの身体を引き裂く、だがクロスには傷一つ着いていない。
クロスは小鬼の一匹に右手を突っ込み何かを掴んだ。
すると、手を突っ込まれた小鬼は音もなく消え、クロスの手は小さな鉄球が握りしめられていた。
見ると他の子鬼達の姿はなく、代わりに小さな鉄球が木にめり込んだり地面を転がっていた。
そして、左手に銃、アグニを林のとある一角へと向けた。

「俺には幻術の類は効かないですよ…出てきたらどうですか、玉藻先生?」
「……流石だよ、クロス君。幻視の術を初見で見破られたのは初めてだ」

アグニを向けた方向から現れたのは外科医・玉藻京介だった。

「幻視の術、動く物を別の物に見せる幻術…ですね?」

先ほど襲ってきたのは本物の小鬼ではなく、小鬼に見せかけた玉藻が投げた鉄球だった。

「素晴らしい、流石はあの雪女が興味を引くだけの事はありますね」

「雪女…まさか、氷女の事？」
「ふっ、私がこの街に来た目的は３つ、１つは、八神はやて。彼女は医学的に原因不明の奇病にかかり
下半身不随から命に関わる危険な状態になりながら、わずか数カ月での完治…医者として気になった…
それだけで別に彼女をどうこうする気は全くない」

はやての名が出た事でクロスは身構えいつでも飛びだせる体勢に自然となっていた。
が、玉藻が心からはやての完治を祝福していると分かり多少警戒を解いた。

「…２つ目は私の所に雪女の氷女が訪ねてきて君の事を聞いたからですよ。氷女は我々妖怪の間でも
少し有名な雪女でね、非常に強力な雪女ですが、その彼女がわずか９歳の少年に負けたと聞かされては
興味がわかないわけがないでしょう？」
「妖怪…先生はなんの妖怪なんです？」

妖怪とはこの世界に住む人間とは全く異なる存在。
自然が生み出したもの、人の怨念から生み出したもの、人が何らかの影響で変化したもの。
多種多様な理由で生まれた存在、幽霊とはまた違った存在…それが妖怪。
クロスは都市伝説や怪談などを調べていた時に妖怪に関する本を見つけ、そこから興味がわき
色々調べた事があるのだ。

「私は妖狐、４００年以上も生きる妖怪ですよ…そして、３つ目の目的が一番重要です」

玉藻の目がこれまでにないほど真剣な物へと変わった。

「…この町の異常を調べに来た、これは氷女からの頼みでね」

その言葉に今度はクロスの表情が変わった。

「本当ならもっと早く来る予定だったが…とある事情でこの街には最近まで近寄れなくてね…

この力は私達妖怪にとってはある種の高揚剤みたいなもの、不用意に近付けば暴走する…」

あの大妖怪の氷女でさえ、この力に飲みこまれた程だ。と玉藻は付けくわえた。

「この力の事を知っているんですか…氷女から俺達や魔法の事も聞いてると思いますけど

今この街に起きている異変や謎の力に関しては、俺達魔導師じゃ専門外に近くて、情報が…」

「でしょうね、だから氷女も私にあなたへこの力の事を教えてほしいと頼んできたんですよ

彼女じゃうまく説明出来なかったみたいですし、私は彼女に借りがあり、彼女はあなたに借りがある

だから…私が分かる範囲の事は全てお話します、ですが、それ以上の事は」

「えぇ、こっちで調べます、だから…お願いします、玉藻先生」

頭を下げるクロスに、玉藻は少し戸惑ったがすぐに真剣な目つきになり…話を始めた。

・　・

・

それからしばらくした後、玉藻との話がほとんど終わった頃

「クロス！　大丈夫か！？」
「マスター！」
「クロス君！」
「クロス！」

突然シグナムやノア達の声が聞こえ、シグナム、ノア、なのは、フェイトがやってきた。

「ありゃ、邪魔入らないようにって人払いの結界張ってたんだけど…」
「えぇ、マスターの完璧な結界のおかげですっかりここを見つけるのが遅くなりましたよ！」

ノアが怒った顔でクロスへと詰め寄ってきた。
シグナムは玉藻に警戒して甲冑は纏ってはいないがレヴァンティンを構えている。
なのはやフェイトも待機モードのデバイスを持っている。

「貴様、やはり人間ではなかったな…」
「なるほど、確か君は氷女と戦ったもう1人の魔導師…私の正体に気付いていてもおかしくはないか」

シグナムは最初から玉藻がただの人間ではない事に気付いていた。
氷女と対峙した時に彼女から感じた不思議な力、妖力をこの男から感じたからだ。
しかし、特に主はやてに危害を加える様子もなかった為、様子をみていたが

クロスが玉藻と話をしてくると言う事になり、心配になってはやてを家に送り届けた後
単身クロスの後を追いかけてきたのだ。
ノアやなのは達は本局から戻ってきてクロスの張った結界に気付き駆け付けてきたのだ。

「それで、この人は？」

玉藻を警戒しながらもなのはがクロスに尋ねた。

「あぁ、大丈夫。この人は医者で妖狐の玉藻先生だよ」
「本当に、大丈夫なのクロス？」

異様で強大な力の持ち主である玉藻にフェイトは未だに警戒を解かない。

「ふっ、それじゃ私の用事は済んだので帰る事にします…気が向いたら遊びに来てもかまいませんよ
あそこはたくさんの妖怪がいますからね…アディオス、小さな勇者くん」

それを見た玉藻は不敵な笑みを浮かべその場を後にした。
去り際に名刺をクロスに手渡して。

「童守町…か、いつか行ってみるのもいいかもな」
「クロス、一体何を話していたんだ？」

なのは達の疑問を代表するかのようにシグナムが尋ねた。

「…それはまた明日話すよ、シグナム。なのは、フェイト…ごめん。

俺とノアはこれからアースラと
本局に行かなきゃならなくなったから明日は学校休むよ」
「えっ、ちょっとクロス君!?」
「一体何が…」

なのはとフェイトがクロスに駆け寄るがそれよりクロスはノアを肩に載せ…

「ごめん、本当に急ぎなんだ…でも、明日の放課後、はやてやヴィータ達も全員うちに集まって
全部そこで話すから!」

そう言い残してギアでどこかへと飛んで行ってしまった。
後に残されたのはわけがわからないなのは、フェイト、シグナムの3人。

「どういうことなんだろう?」
「シグナムは何か知らないんですか?」
「私にもさっぱりだ…だが」

シグナムは少し小高い林から夕日に照らされた街を見渡し

「ここ数カ月感じていた、不思議な感覚についての話だろう…」

同じく街並みを見渡す2人は静かに頷いた。
しかし、シグナム達もクロスや玉藻でさえ気付いていなかったがクロスと玉藻の話を木の陰でこっそりと聞いていた者がいた。
その者は小刻みに震えていたがやがて意を決したようにその場を静かに立ち去った。

・

・

自分の車を運転していた玉藻は自然と笑みを浮かべていた。

「ふふっ、クロス君、君は私が思っていた以上だったよ…八神はやてに会いに来たと言った時の
私を警戒した時のあの目、鵺野先生と同じ愛する者を守る為に無限の力を発揮する人間の目をしていた」

童守町の自宅マンションをいきなり訪れた氷女の口から氷女を破った魔法を操る少年たちの話を聞かされ
興味が沸き、いずれ会いたいと思っていた。そして、その時氷女から受けた忠告。

『クロスに変なちょっかいを出そうとは思わない方がいいわよ?
絶対に火傷じゃ済まないから♪』

「全くその通りだったか…彼と仲間達との絆は……絶対に敵にしたくはないな」

そう呟き玉藻は車を童守町へと走らせた。

続く

第７０話　「妖狐・玉藻京介」（後書き）

カガヤ
「やっと書けた！…玉藻の口調…おかしくないかな？」

クロス
「今からそんなの気にしてたら５章で色々なキャラ出てきた時どうするんだよ（汗）」

ノア
「そうですよ！…って５章では誰が出るんですか？」

カガヤ
「そこはまだ秘密…今回の玉藻は説明・助言キャラなポジションだし。でも一応気を付けたけどぬ～べ～知らないと分からないかも（汗）」

クロス
「…不安だな（汗）」

ノア
「ですね……こんなんで新しい作品書こうとしてるんですから、しかもこの作品よりも複雑なのを」

カガヤ
「い、いいでしょ！それは！…さて、次回を含めた２話でいよいよ幕間劇が終わります！次回は…メリーさん達の正体や海鳴市を覆う謎の力についての説明回になります。どうぞお楽しみに～♪」

クロス
「えっと、こんな駄作者の新作作品アンケートが1月10日の活動報告にあるのでどうかそっちもよろしくお願いします…」

ノア
「1月いっぱいまで受け付けるとの事です…って微妙に期間ながっ！」

【追記】
特別編の答え
◎ティアナの夢：ひぐらしのなく頃に第26話　「罪滅し編　其の伍　リテイク」より
ティアナ：竜宮レナ
クロス：前原圭一
なのは：古手梨花

◎はやての夢：ぱにぽにだっしゅ！第2話　「紅は園生に映えても隠れなし」より
はやて：桃瀬くるみ
スバル：レベッカ宮本
ノア：片桐姫子

◎アリサ、スバルの夢：機動戦士ガンダム00（セカンドシーズン）第21話　「革新の扉」より
アリサ：ネーナ・トリニティ
スバル：ルイス・ハレヴィ

◎ノアの悪夢
クロス：ガンダムSEED　DESTINYのキラ・ヤマト
アリサ：金色のガッシュのティオ

はやて：アニメ版月姫の琥珀（ちなみにノアの人はシエルしてた（笑））

シャマル：ＭＥＬＴＹ　ＢＬＯＯＤのアルクェイド・ブリュンスタッド

以上です。わかりましたか～？（笑）

ぱにぽにはマイナーなんでしょうか…

第７１話　「邪神と天使の残滓」（前書き）

説明回です。
メリーさん達の正体などが明かされてますが…
めっちゃ駄文ですね（汗）
言いたい事がうまく伝わればいいのですが…この話あとで大幅修正するかもしれません（汗）

第７１話　「邪神と天使の残滓」

玉藻との邂逅の翌日。

ハラウオン家にはクロス達いつものメンバーの他にゼスト隊やプレシアにユーノもいる。

何とも言えない重々しい空気の中口を開いたのはリンディだ。

「では、まず…海鳴市に一体何が起きているのか、から説明しましょう」

モニターに邪神イリスと輝光聖天クロスの姿が映し出された。

「去年の闇の書…邪神事件にてクロス君は輝光聖天となってイリスと戦い、多大な犠牲を払って…

勝ちました。しかし、その戦いで２つの膨大な魔力、仙気がぶつかり合いました」

管理局の調査で分かった事だが、あの時イリスが発していた魔力は実は仙気に非常に似た性質を持っていた。

そして、輝光聖天化したクロスも普段とは違う仙気を使い戦っていた。

両者の仙気は膨大にしてその性質は聖と邪、光と闇…正に対極。

その２つの力がぶつかり合った事で海鳴市にどのような影響が出るのかは全く分からなかった。

「俺やクロノ達がここにずっといたのもそのためさ」

「あっ…だから…」

クロスに言われてなのは達もずっと感じていた違和感に気付いた。
リンディはよくアースラや本局に行く事はあったが学校があるクロスはともかく
クロノやエイミィ達もしばらく海鳴市に滞在しているのは不自然だった。
アースラ隊は海鳴市には闇の書の事件で滞在していたが、すでに解決して後始末を早急に終え
本来ならば次の任務でここを離れるはずだった。

「そっか、春の時もすぐに行っちゃったもんね」

ジュエルシードの一件の時もプレシアとフェイトを護送してすぐにこの世界を離れた。
今回は3カ月も駐留している事になる。

「本当なら年明けすぐに別の任務に着くはずだったんだよ…俺は学校に通いながらって事でね」
「えっ？」
「事件の後すぐに私達は徹底的に海鳴市を中心に広範囲で影響の調査を行いました。
ですがその時は異常が見つかりませんでした、そこで調査は終了になるはず…でした」
「つまり、去年の段階での調査では何もなかった…と？」

シグナムの問いにリンディは静かに頷いた。

「でも、再調査の必要が出てきたんだ。それは…メリーさんがきっかけだった」
「っ！？」

思いもよらない名前が出てきてなのは達は驚いた。

「初めて電話が来た時にも少しこう、違和感と言えばいいのかな。何か引っかかる所があったんだよ
それで正月に2回目の電話を受けた時にはっきりと分かったんだ…なんで俺の名前を知ってるのかってね」
「？…そういうものだから、分かったんじゃないのか？」

ヴィータが言う通り、都市伝説や怪談の類は大抵名前などの個人情報を知っている。だが…

「確かに偶然かもしれない。けど、ちょうどその時期からなんだよ街に違和感を覚え始めたのは」

正月も過ぎたある頃からクロスは海鳴市に不思議な感覚を覚えた。それは言葉に言い表せない違和感、気のせいと言えばそれまでだったが
様々な世界を渡り歩き、様々な空気や魔力を感じてきたクロスでもそれは異質だった。
さらに時を同じくメリーさんや口裂け女という異質な存在がクロスの周りに現れ始めた。

「実はね、メリーさんや口裂け女さんだけじゃないんだよ…異質な存在と出会ったのは」

さらにモニターには口裂け女やてけてけの他に動く人体模型や人面犬などが映し出された。
全てクロスの前に現れラファールが記録していた都市伝説やおばけ達だ。

「……」

なのは達は言葉にならないという顔をしている。

シグナム達も知らなかった事なのかじっとモニターを眺めている。

「しかも…彼らに共通する事が1つある、それは…彼らは最近の記憶しか持っていない事」

「最近の記憶しかない？」

「なのは、覚えてる口裂け女さんに会った時にあの人去り際にこう言ったでしょ？」

『正直…今回初めて驚かせたから自信なかったのよ』

『そうよ、私今まで誰を驚かせた事が…あれ？　そういえば私は…いつから……』

口裂け女の口ぶりは確かに初めて驚かしたのがクロス達のような口ぶりだった。

「メリーさんや他のおばけ達にも聞いてみたんだけど、俺に会うまで何をしていたか覚えていなかったんだ」

「あぁ～もうまどろっこしいねぇ…つまり、どういう事さ？」

アルフがせかすように言うとクロスは苦笑しながら話の結論を言った。

「ま、そうだな…結論を言うとね、メリーさんや口裂け女さん達は…イリスとの戦いで生まれた…残滓」

「残滓？」

なのははその時、クロスの顔が一瞬だけ哀しみに歪んだように見えた。

「邪神イリスと輝光聖天の2つの異質な仙気が混ざり合い、そこに都市伝説という情報を元に具現化した存在
なんで都市伝説という形になったのかは推測の域を出ないけどね」
「つまり…メリーさん達は一種の魔導生物みたいなもの？」
「あぁ、ただの魔力がぶつかっただけじゃこんな現象は起きえないのだが…」

シャマルの問いにクロノが答えた。

ただ強い魔力がぶつかり合っただけではただそれで終わるはずだった。
しかし、今回は対極に位置する2つの力、それも世界を満たすほどの強大な力がぶつかり合った事で起きた。
いわば奇跡とも言える現象。

「クロス…あの氷女は違う、のだろう？」

シグナムの指摘にクロスはゆっくりと頷きモニターを操作し雪女・氷女の映像を出した。

「シグナムの言う通り氷女はメリーさん達とは違い、大自然が生み出した人間とは違う存在…妖怪だよ
でも、彼女がこの街に来たのも、暴走してあんな大吹雪を巻き起こしたのも…」
「まさか、この力が関係してると？」
「2つの仙気によって生み出された力…螺仙気と名付けたけど、それと氷女や玉藻先生達妖怪の力の源である

妖力と呼ばれる力が非常によく似てるんだこれは昨日出会った玉藻先生からの情報なんだけどね」

「ちょっと待っておくれよ。あの時はちゃんと結界が作用していたじゃないか！」

アルフの指摘になのはやフェイトは頷いた。

本来結界内部で何が起きようが外には何も影響がないはず、その為の結界だ。

あの時はイリスやエビルキメイラを外に出さないようにと結界スタッフ数十人で随時結界を維持していた。

…結果的にはアリサやすずかが結界内部に取り残されてはしまったが。

「結界を越えたか…結界が消えた後にも強く残っていたせいか、どちらにせよこちらの失態ね」

「仕方ないですよ、螺仙気は最初どんなセンサーにも引っかからなかったんですから」

イリスとの戦いが終わって数日間アースラスタッフは様々なセンサーで海鳴市をスキャンした。

結果、多少の残留魔力はあったが問題はないと判断された。

その後、螺仙気の存在が発覚してからも通常のセンサーでは探知出来ずにいて

ようやく螺仙気の探知が出来たのは、螺仙気が自然の力そのものと同化していて

普通に探しては恐らく探知出来ないだろうと氷女に指摘されて

世界の違和感を探知出来るクロスがフィルターの役割を果たしてようやく探知できるようになったのだ。

「それにしても、あの玉藻先生が妖怪やったなんて…」

自分を心配してわざわざ遠くから来てくれた先生が実は妖怪だった事に
はやては軽くショックを受けていた。

「妖怪と言っても別に有害な存在とは限らないさ。玉藻先生は俺達に妖力の事を教える為に来たんだしな」
「…そやな、ありがとクロス君♪」

クロスの言葉に少しはやては気持ちが楽になった。

「しかし、氷女が暴走したがその妖力が原因と言うのは？」
「螺仙気は妖怪にとってはある種の高揚剤みたいなもので、それでたまたま旅の途中だった氷女が
螺仙気に当てられて妖怪の本性が刺激されてああいう事になったみたいなんだ」

だから玉藻もうかつにこの街に近寄る事が出来ずに時間がかかったと言っていたわけだ。

「…確かに氷女ちゃん、力みなぎって酔っぱらって…って言ってたね」

エイミィも思い出して苦笑いを浮かべた。

「それで話をメリーさん達に戻すと…螺仙気は俺とイリスの気が元になってるようなものだから…」
「クロスに引かれて、集まって来た…と言うわけね」
「マスターから力を分け与えられた、とも言います」

クロスの言葉をクイントとノアが続ける。

「ここまでならあまり大きな問題はないんだけど…」

そう言ってクロスはリンディの顔を見るとリンディは少し頷いた。

「この螺仙気、実は普通の人間にも作用する。と言う事が分かったんだよ」

「人間にも!?」

驚きの声があがる。これはゼスト達には聞かされていたのか平然としている。

「螺仙気には人の潜在能力の覚醒を促す効果があるみたいなの。と言っても全員というわけではないわ
現になのはさん達やシグナムさん達にもデバイスにも影響はなかったわ」

シグナムは以前デバイスがオーバーホールにかけられた事を思い出した。

「あれはその為の検査だったのか…」

「あの時はまだ不確定要素が多すぎたから下手に言えなかったんだよ」

申し訳なさそうにクロスはシグナムに言った。

「話をつづけるわね…この少女、川澄舞さん」

次にモニターに映されたのは肩までかかる黒い髪をした少女の姿。

「ゼスト隊とクロス君…そして、なのはさんが出会った舞さんは、不思議な力に突然目覚めてしまい
　クロス君となのはさんが救った、そうですね？」
「はい…その舞さんの力が目覚めたのは螺仙気が原因だったんです」
「えっ、でも舞さんは北海道の人だよ？」

川澄舞とクロス達が出会ったのはここより遠い北の大地、北海道。
任務で赴いたクロスとゼスト隊、家族旅行でたまたま同じ場所だったなのは。
そこでとある戦いがあったのだが…それはまた別の機会で。

「なのはちゃん、忘れたの？　舞さん、邪神事件があった頃に海鳴市にいたじゃない」
「あ、そう言えば親戚の家に用事で来ていたって舞さん言ってました」
「その時に螺仙気を浴びて…潜在能力が覚醒したのね」

クイントやなのは達は舞の力について思い浮かべていた、あの不思議な力を…

「それじゃあ、螺仙気を浴びた人は何か超能力とかに目覚めるって事なんですか？」

不安げにシャマルが尋ねるがクロスとリンディ達は難しそうな顔をした。

「それが…覚醒する条件がさっぱり分からない…」
「螺仙気を沢山浴びれば覚醒する、と言うわけでもないみたいで」
「今わかるのは…螺仙気を浴びた人間の１０万人に１人くらいの割

合で目覚める可能性がある」
「っていうなんとも曖昧な結論しか出せないのよ…」

実際に螺仙気を浴びて能力が覚醒した例は川澄舞、ただ1人だ。
他にも何か能力に目覚めた人がいるかもしれないとクロノやエイミィやアースラスタッフは
探してはみたが、とうとう発見できなかった。
それでも螺仙気に潜在能力を覚醒させる作用がある事だけはわかっている。

「撲達がここ数カ月、滞在していた理由の一つがこれだ」
「だけどこっちの成果はさっぱり、お手上げだわ」

クロノとエイミィも疲れた顔をしている。
クロスとノアは具現化した都市伝説の類を見つけて相手をする必要があったので
あまり手伝えないでいたのだ。

「それともう1つ…問題と言えばいいのかは正直微妙な所なんだけど」

頬に手を当て、難しい顔をするリンディ。
クロスとノアは辛い顔を浮かべクイントが優しく2人の頭を撫でた。
見るとクロノやエイミィ、ゼスト隊も辛い顔をしていた。

「あの…一体何があるんです？」

何も分からないのはなのは達だ。

「俺から言うよ……メリーさん達は螺仙気で実体化してるけど、こ

こ数週間で一気に
螺仙気が薄れ始めているんだよ…つまり」

ここでクロスは天井を見上げ、深呼吸をして言葉をつづけた。

「…あと数日で、メリーさん達は……実体を維持できずに、消滅する」

そう言ったクロスの顔は…苦痛に満ちていた。

続く

第７１話　「邪神と天使の残滓」（後書き）

カガヤ
「うーん…難産だぁ」

クロス
「説明ばっかりだったな」

ノア
「うまく伝わるでしょうか（汗）」

カガヤ
「１０回以上は書きなおしたのですが…ひとまずここまで行きました！」

クロス
「えっと、何言ってるか分からないかもしれませんが…」

ノア
「…駄作者の限界ですのでまずはご理解を…」

カガヤ
「誰か考えてる事をうまく文章化出来る能力を下さい！！（涙）」

第７２話　「真冬の怪談　メリーさんの電話（終）」（前書き）

これで幕間劇は終了です。
それでは…ごらんください！

第７２話　「真冬の怪談　メリーさんの電話（終）」

メリーさん達、螺仙気から生み出された存在が…数日のうちに消える。
クロスの口から語られた事実になのは達は茫然となった。

「えっ、それって、どういう事なの？」
「メリーさん達が消滅するって…」
「言葉通りですよ。現在都市伝説達は海鳴市を覆っている螺仙気によって具現化しています。
しかし…先月末頃から螺仙気が薄れてきているんです」

モニターは螺仙気を観測出来るようになった１月下旬から現在までの螺仙気の濃度が表示された。
それをみると先月から急激に濃度が下がり始め、今月に入ってはもうほとんど０に近くなっていた。

「玉藻先生が海鳴市に近付けるようになったのは螺仙気が薄れて、影響を及ぼす事がなくなったからさ。
そして、最近メリーさんから電話が来ない事も関係してると思う」

確かに以前なら２、３日に１回、多い時で毎日電話が来ていたがここ数日メリーさんから電話は来ていない

「…多分だけど、メリーさん達はそれに気付いてると思う。これは本当に勘だけどな」

苦笑いを浮かべるクロスになのは達は何も言えなかった。

そして、静かに数日が過ぎた。あれからもメリーさんからの電話はなく、螺仙気もほぼなくなりかけていた。

そんな3月14日の早朝。

まだ日も昇らない時間にふとクロスは目が覚めた。

「……」

何かを感じ取ったクロスは寝ている皆を起こさないようにゆっくりと家を出て、丘へと向かった。

「…静かだなぁ…」

誰もいない丘に着いたクロスは…リインと別れた場所に立ち、まだ暗い街を見下ろして呟いた。

その時、クロスの携帯が鳴りだした。

クロスは着信相手も確かめずに通話ボタンを押した。

「もしもし、私……メリーさん、今あなたの後ろにいるの」

それは電話からとすぐ後ろから声が聞こえてきた。

「来ると思ったよ、でも今回は随分と近くにきたものだな…」

「ダメ！　振り向かないで！　…おねがい、私を見るとそれで終わっちゃうから…このままで…いて」

と、後ろを振り向こうとしたクロスをメリーさんの声が止める。

「…電話は切っても、いいだろ？」
「うん、今日はちゃんと生の声聞きたいから……最後くらい、ね？」
笑っているのか泣いているのかわからない声が背後から聞こえてくる。
「……口裂け女さんやてけてけさんは？」
クロスは後ろから感じるメリーさんの気配に違和感を感じて、聞いた。
「2人は、私の中だよ…でも2人だけじゃなくて、他の皆も全員、私の中」
「……どういう意味だ？」
言葉の意味を理解しつつもあえてクロスは聞いた。
「私達の事はもうあの狐さんと話してる時にわかったわよね？」
「あぁ…あの時話聞いてたのか」
気付かなかった。と苦笑するクロスにメリーさんのクスクスと笑う声が聞こえる。
「本当はもう会えないくらいまで、力が弱まってたんだけど…皆が私に力を分け与えてくれたの。
それで、皆は一足先に、消えちゃったわ」
「そっか、お別れも、これを渡す事も出来なかったか」
後ろを向いたままメリーさんの頭を撫で、クロスは3つの小さな包みを手渡した。

「？　これは？」
「今日は3月14日、ホワイトデーだろ？　昨日俺が作ったクッキーさ。メリーさんと口裂け女さんとてけてけさんの3人分。念の為もってきたんだけど…」
「そう、ならこれは私が預かっておくわね…私の中に2人もいるから」
「そっか…それで、いつもよりメリーさんから感じる力が変わっているんだ…」
「皆あなたにありがとうって言ってたわよ」
「俺に？　俺は何もしてないよ…何も出来なかった、かな」
悔しげに俯くクロスの背中をメリーさんが優しく抱きしめた。
「ううん、あなたと出会えたから皆自分の存在に意味を見いだせたのよ。本当なら私達は…
無差別に人を襲う都市伝説だったんだから…」
ここ数カ月の騒動でクロス達の周り以外にも口裂け女やてけてけ、それ以外の都市伝説達が出没している。
だが、どれも命に関わる被害はなく、怪我も驚いて転んですりむいた程度だ。
大抵は驚く姿に満足して消えるか、はたまた世間話でもして消えると言うほぼ無害。
ゆえにクロスやクロノ達も監視はすれど、排除すると言う事はしなかった。
「…イリスだけじゃなくて、あなたの力も混ざったから…こんな感じになっちゃったのかもね」
螺仙気にはイリスとクロスの仙気が混ざっている、当然そこから生

み出されたメリーさん達も影響を受ける。
邪悪なイリスの仙気の影響が強ければそれだけ邪悪な存在として生まれるはずだった。
しかし…実際は輝光聖天クロスの暖かな仙気の影響が強く出たので皆どこか愛らしい存在として生まれた。

「あれは俺だけじゃない、ノアや…レギナスの力も混ざっていたからな」

クロスは亡き、戦友を思い浮かべた。

「それでも…私達はあなたに救われた、生み出された事だけじゃなくてあなたに出会って…
最初は、本当になんで私を怖がってくれないのか～って激しくプライドが傷ついたけど
口裂け女には怖がらす方法教えたり、てけてけなんて餌付けされちゃったのよ？
もう、私達をなんだと思ってたのよ！？」

若干抱きしめる腕に力を込めるメリーさんにクロスは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「でも、でもね…私達を化け物じゃなくて…人間のように接してくれたのが、私だけじゃない
皆、嬉しかったんだから…だから、ありがとう」
「俺が一番化け物だからな、それに可愛い女の子を化け物扱いなんて出来ないよ」
「全く…誰にでも、そういう事言うから皆に好かれるんじゃないの？」

嬉しそうに頬笑みながらも背中を軽くつねった。

「いたたっ…最後だからな、はっきりと言った方がいいと思ってね」
「呆れた…だったらもっと早く言ってよね。最後の最後で素直になるなんて」
「俺は最初からずっと素直だったぞ？」
「はいはい、そうですよね。本っ当に色々な意味で素直だったわよあんたは！」

クロスの頭を叩いて、メリーさんは少し離れて深く深呼吸をした。

「……ねぇ、こっち…向いて」
「…いいのか？」
「いいの！　いいから早くこっち向きなさい！」

ゆっくりとクロスは後ろを振り向く。
そこには、白いワンピースを着て雪のような白銀の長い髪をなびかせた人形のような女の子が笑っていた。

「これが私、メリーさんの姿でしたぁ！…どう、感想は？」

メリーさんは片手ですくい上げたり、腰に手を艶めかしく当てたりとわざとらしくポーズを取る。

「あぁ……すごく、寒そうだ」
「…なっ！？」

ドテッ、と見事にずっこけた。

「いや、だってその格好は」

確かに3月とはいえまだ肌寒く雪もちらつく中でワンピースだけはどう見ても寒そうだった。

「い、いいのよ！　私はこれで！！　人前になんて早々出ないし、第一寒さとかなんともないわよ！
　全く、最後の最後まであんたって人はぁ…」
「でも、すごく似合ってるよ、神秘的で…すごく可愛い」

少し優しく微笑みながらクロスに言われ、見る見るうちに顔も身体も真っ赤になるメリーさん。

「〜〜っ！！…あぁ、もう、なんだってのよあんたは！　私が大事な事言おうとしたら先手先手で
　すごい事言ってくるし！　分かった、もう諦めた。あんたはそういう性格だもんね」

地団駄を踏んだかと思えばメリーさんは深呼吸して、真顔になり…

「だから、そんな性格だから…私はクロス、あなたが好きになったんだよ。私、あなたが大好き！
　もちろん、私は人間じゃないけど…けど、女の子として、あなたが大好きなの、クロス！」

頬を染めながら、告白した。
それを聞き、クロスは一瞬意味が分からず固まり、次の瞬間には激しく狼狽した。

「ちょ、ちょっと待て！　な、何だって！？」
「何度も言わせるなぁ！　そんなにうろたえる事ないじゃない！

なのは達に散々言われ慣れてるでしょ！」
「あ、いや…その、面と向かってはっきり…と言うか、好きと言われたの自体初めてだ」

顔をそらし困ったように話すクロスにメリーさんは少し罪悪感が湧き出てきた。
いつもクロスの周りには誰かしら女の子がいて、しかもほぼ全員クロスに好意を抱いているのは
電話越しでしかなかったメリーさんですら、女の勘して分かっていた。
だが、1人としてまだ告白もしてないとは夢にも思っていなかったのだ。
しかも、クロスの様子を見ると、クロス自身も好意を持たれている自覚はあったようだ。

「ど、鈍感で朴念仁だと思ってたけど…こう反応されるとは思ってなかったわ」
「朴念仁っぽく見えて悪かったな…俺には、誰かを好きになる資格も好かれる資格もないんだよ…」

そう寂しそうに呟くクロスの頭をゴツンと殴り

「バカッ！　そういう事言ったら告白した私やなのは達に失礼でしょ！…っていうか好かれたくないのに
あんな言葉をペラペラ言えるのって…はぁ、たらし…ともまた違うわね、あんたの場合」
「ははっ、これぱっかりは…何と言うかどうしようもないわけで…っ！？　メリーさん！？」

頭を抑えながら苦笑するクロスはメリーさんの異常に気付いた。

足元から消えて行っているのだ。

「あ、これ？　気付かなかった？　メリーさんの電話は目標とする人物の元にたどり着き、最後の電話をして驚かしたらそのまま消えて、次の目標を探しまわる！…みたいよ？　もっとも、これは…皆からもらった力もなくなってきて、存在自体が消えていってるせいだけどね」

あはは、と他人事のように笑うメリーさん、その目は…涙でぬれていた。

「…メリーさん、ありがとう」
「あら、何のお礼かしら？」
「いや、ただ…告白のお礼かな？　何か違う気がするけど。うまく言葉に出来ないや」
「ふふっ、クロスでもそういう事あるんだ…ちょっと得したわ」
「口裂け女さん達にも…よろしくな」
「えぇ、私達は消えたらどうなるかわからないけど…でも、もし天国か地獄で会えたら伝えておくわ」
「……あ、もう少しだけ待ってくれ！　ほら、あれを」

クロスが指さす先を見ると、ちょうど朝日が昇りだして街を陽の光が照らし始めていた。

「綺麗ね…こんなにきれいな朝日初めて」

街には薄く雪が積もっていて、それに日の光が反射してキラキラと輝いていた。

「ここはな、俺のお気に入りの場所なんだよ。朝日や夕日が綺麗なんだ」

リインと別れたこの丘をクロスはジョギングも兼ねてよく訪れていた。

時にはやてやシグナム達も一緒にここから街を見下ろしている。

「メリーさん【達】に見せれて良かったよ」

「本当、最後に…こんないい景色をあなたと見れて、私は幸せよ…

…ありがとう」

チュッ

頬に何かが当たった気がしたが、クロスはただ真っ直ぐに朝日に照らされる街を見下ろしていた。

隣には…もう、誰もいない。

「…ちくしょう…」

涙は出ない、いや、出さない。

「…ちくしょう、ちくしょう！」

４年前に、もう泣かないと決めたから…レギナスやリインの時も泣くのを我慢したのだから…

「…ちくしょう、ちくしょう…また、この場所でどうする事も出来なかった！」

それでも嘆きは止められない、涙を必死にこらえ…

「ちくしょう……ちくしょおぉぉ～！！！！」

クロスの悲しみの慟哭が虚しく空に響き渡った。

≪わたし、メリーさん…ずっと、あなたのそばにいるよ≫

続く

第７２話　「真冬の怪談　メリーさんの電話（終）」（後書き）

カガヤ
「終わったぁ～…」

クロス
「本編以上の長さの番外編ってどうさ？」

ノア
「元は４，５話の予定だったはずですけどねぇ」

カガヤ
「実はこの話は【魔法少女リリカルなのはＡ'ｓ　ＰＯＲＴＡＢＬＥ　－　ＴＨＥ　ＢＡＴＴＬＥ　ＯＦ　ＡＣＥＳ　－】の位置づけなんだよ」

クロス
「ＰＳＰないからってニコニコ動画とかで見てたってやつ？」

カガヤ
「あぁ、そういう話をやりたくてマテリアルズも出そうかと思ったんだけどどうしても手元にゲームない中で考えるのは無理だったんで代わりに…とね」

ノア
「マテリアルズは出ますかとか聞かれましたからね」

カガヤ
「そっ、俺がマテリアルズの口調とか性格も把握出来てなかったか

ら…この小説にマテリアルズは出ないときっぱりと言ったし（苦笑）
」

クロス
「その時にマテリアルズっぽいのは出るといったけど…メリーさん達？」

カガヤ
「いんや、立ち位置的にはそんな感じだけど。でもマテリアルズっぽいのは出ると言ったのはこれよりずーーっと後の展開での話だよ」

ノア
「じゃ、それを出す為にも早く話進めてくださいね」

カガヤ
「が、がんばります…次回からは新章突入、いよいよクロスとノアの過去が明かされますよ！」

第4章予告

始まりは数十年前、とある山中で見つけた一冊の魔導書だった。

その魔導書は自然の結界の中に守られていた。

そして、魔導書の解読の為に1つの巨大な研究所が建てられた。

魔導書を扱う為に必要な人間を生み出す計画も同時にスタートした。

名付けて【プロジェクトA（アルハザード）】

その中で生み出されたものは戦う為だけに存在する人造魔導師…いや、戦闘兵器。

その名は【エヴォリューダー】

何年にも渡り、非人道的な実験を繰り返し、とうとう完成した1人の赤子。

同時に、起動する古の魔導書とその魔導書に封じられた小さな妖精。

科学者達は狂喜乱舞した。

だが、この赤子が成長した少年と小さな妖精と1人の科学者によって…研究所は煉獄と化す。

無から生み出された少年が現した最初の感情…それは……

リリカルなのは異伝～X　ＤＥＳＴＩＮＹ～第?部　輝光戦記
第４章　～ゼロより始まり、無へと至る道～
始まります。

第４章予告（後書き）

カガヤ
「いよいよ、始まる過去編！」

クロス
「俺とノアの出会いなど…か」

ノア
「どれくらいやる予定ですか？」

カガヤ
「最初はバトルから始まってそれから過去の話だな…長さは短めの予定」

クロス
「うまく描き切れるのやら」

カガヤ
「それと、４章の過去話は視点がころころ変わるのでご注意を！」

第７３話　「執務官試験（前）」（前書き）

今回から新章突入！
クロスが一般的な魔導師相手ならどこまでいけるのかなーと思いつつ書いてます（笑）
クロス無双、はじまります。

第７３話　「執務官試験（前）」

４月初旬　とある管理外世界

森の一角を十数人の管理局員が集まっていた。

「ヘルザー隊長、配置完了しました」

隊員らしき男が隊長であるヘルザーへと包囲が完了したと報告した。

「御苦労、いつでも突入出来るように待機だ」

「了解…それで隊長、あそこにいるのが例の？」

「あぁ、そうだ、フォースストライカーズの弟子だ」

２人の視線の先には真っ黒なフード付きローブを纏い、目に紋章を浮かばせ図面ととある一角をみながらユニゾンデバイスと打ち合わせをしている少年の姿があった。

「ここを破壊するには、やっぱり狙撃しかないな」

「そうですね、強硬突破は可能ですけど、出来るだけ基地に侵入してからの方がいいですね」

「問題は、地上からじゃどのポイントからでも狙撃不能な位置にあって」

「空中からではすぐにレーダーに引っ掛かるって事ですね…結構高濃度のジャミングもあるから

ギアで至近距離まで転移も出来ませんし…どうします、マスター？」

「全く、厄介な場所を落とす事になったな、というか執務官試験っ

てこういうものだっけ？」

実は今、クロスは執務官試験の真っ最中。
筆記試験や体力・魔力試験はパスしたのだが、実務試験とい言う事で以前から管理局が壊滅させようとしていた巨大犯罪組織の一斉摘発の一端を任されたのだ。
ゼスト隊、メガーヌを抜かした3人はその組織の中心施設壊滅へ乗り出している。
同時に複数の管理局の部隊が組織の基地や研究所を一斉に攻撃をしかけるという計画。
クロスが担当するのは少し離れた丘にある、通称、コロニア基地だ。
この基地には高性能な迷彩バリアがあり、肉眼では姿が視認出来ず、艦船のモニターでも確認が難しい。
しかも、バリアの発生装置は研究所の外で地上からでは高さ的に狙撃できない場所にあり
全周囲型レーダーのおかげで半径数キロに渡って随時監視されている為
レーダーの有効範囲外の数キロから狙撃する必要がある。
しかし、クロスはアルガス魔法とエヴォリューダーの力でどんな迷彩を張ろうとも視認が出来る。
尚且つ、仙気と言う普通の魔力センサーでは引っかかりにくい力も持っている。

「やっぱ当初の計画で行くか」
「…ですね」

作戦会議は終わり、これからいよいよ突入となる。

「あの、本当に1人で行く…のですか？　クロス、空曹」

自分より年下とは言え、階級が段違いのクロスにたどたどしい敬語で話す1人の隊員。

「1人じゃないですよ、ノアと2人です」

「私達に任せてください♪」

それに対してクロスはローブに付いたフードを被り苦笑いを浮かべながら答えた。

「幸運を、クロス君」

「えぇ、そちらも包囲網頼みます、隊長」

クロスとヘルザーは敬礼をし合い、互いの無事を祈った。

「隊長…本当に良いのですか?」

「なんだ、お前はクロス君の事を知らないのか?…あの、紅い勇者(レッドブレイブ)を」

不安そうな表情を浮かべていた先ほどとはまた違う隊員がその名を聞いて表情を一変させた。

「あ、あのジュエルシード事件や邪神事件を解決したのがあの子達なんですか!?」

「正確にはゼスト隊やアースラ隊と一緒に、だがな…それでも実力は本物だ。俺でも勝てん」

「た、隊長でもですか…」

隊員たちの間にざわめきが広がる、この隊長の強さはよく知っていたからだ。

「…めっちゃやりにくい」
「し、仕方ないですよマスター…それより、行きましょう！」

様々な隊員達の視線を背後に感じながらもクロスはフードを被り、最終確認を行っていた。

「あぁ、今回はウイルスとか色々頼んだぜ、ノア、ミラノール」
「＜了解です♪＞」
「じゃあ…殲滅、開始（ミッション・スタート）」
「ユニゾン・イン！」
「『ギア！』」

そうして、クロスとノアはコロニア基地制圧作戦を開始した。

コロニア基地　上空数キロ

飛行機が通るような高度に転移したクロスは自由落下しながら銃士になり
スナイパーライフル“ユニコーン”を下に向けて構えた。

「ギリギリまで降下してからバリア発生装置を撃ち抜く…ラファール、仙気弾のチャージを」
＜了解しました＞

ユニコーンの銃口が薄く輝きだし高密度の仙気弾を精製し始めた。

「アーマーのおかげで寒さとかは大丈夫だけど…ちょっと無茶だったかな」
『今更言っても仕方ないですよ…』

レーダー範囲外から魔力を使わずに接近する為には
上空から自由落下で接近するしかなかったのだ。

＜……３０００…２５００…２０００！＞

「デルタファングシュートォー！！」

高密度の３つの仙気弾が一直線に放たれ、１発が迷彩バリア発生装置を
残り２発がレーダーを破壊した。

「隊長！　迷彩が解除されました！」

隊員が指さす先ではそれまで何もなかった空間に巨大な構造物が出現した。

「やったか！　だが、これからだぞクロス君」

クロスは続けて、屋外に設置されたカメラや監視スフィアを次々に撃ち落とす。

「おっし、次は…これだぁ！プリズムクラッカー！」

あらかじめ転移前に十発ほどのクラッカーを森の至る所に仕込ませておいたのだ。
それを一斉に基地へと放つ。

・
・
・

コロニア基地　総合指令室

いつもは静かな指令室が開設以来の大騒動が巻き起こっていた。

「ザム司令！　レーダーが2基ともダウン！　バリアも働きません、何者かに破壊されました！」

「基地の数か所で爆発！　監視スフィアが全て破壊されていて原因は不明！」

「侵入者かもしれん！　爆発箇所にただちに兵を送れ！」

先ほどから送られてくる情報の嵐。

施設の外の目を全て潰され、何が起きているのかも分からない。

侵入者だとしてもどこからどう侵入したのかも分からない。

分からない事だらけだった…だが、1つだけ分かる事は…

「敵は大人数で相当の実力者だろう、心してかかれ！」

だが、思いもよらないだろう、侵入者はわずか一名、それも9歳の少年だと言う事に

・

・

・

上空から落ちながら監視スフィアを全て破壊したクロスは屋上激突スレスレで急停止し着地していた。

「…予定通りか」

放った仙気弾が基地の各所に大穴を開けそこに基地内の兵が集まってきている事を確認し

クロスは通気ダクトから侵入した。

「隊長、俺達も突入しましょう！」
「これ以上はあの子1人じゃ危険すぎます！」

森で待機中の隊員達が次々とヘルザーへと詰め寄る。
だが、ヘルザーは平然とそれらを押し留めた。

「ダメだ。あそこは大人数で攻めては意味がない、ただ壊滅させれば済む事ではない」
「どうしてです…あの子だけ行かせる理由になるんです！　隊長より強いからと言っても…」
「…あの子が、クロス空曹はここにいる全員が束になっても叶わないからだ」

その言葉に隊員達はあ然として、ヘルザーと共に基地を見つめた。

狭いダクトの中を、音をさせずに進むクロス、ユニゾンを解いたノアが先導して目的の場所へと降り立った。
その場所は軽く埃が被った狭い部屋だった。

「ここが使用されていない通信室か…」
「はい、電力もここに回されてなく閉鎖されています。監視カメラも機能していません」
「…でも、目的はこの設備を利用する事じゃないから問題ないけどな」
「ですね、それじゃ早速行ってきます。ミラノール」
＜了解、電脳侵入、開始＞

クロスとノアのレアスキル『電脳支配』が、去年封印が1つ解けた事によって進化した『電脳侵入』

ノアしか使えないが、自分自身を粒子化させて端末へと侵入し施設内部の全ての機能を気付かれないように操作、停止させると言うものだ。
万能そうに見えるが、自身を粒子化させれるのは1時間が限界でそれまでに
基地を制圧しなければならない。

『侵入成功です。これから基地のデータや機能の掌握に移ります』
『分かった』

その間にクロスは、予め管理局情報部が仕入れた基地内部のデータをラファールの空間モニターで表示させた。

「…いくつか何の目的の部屋か分からないのがあるのが痛いな…」

総合指令室や兵士の待機場などの部屋の細かい情報も網羅されているが
いくつかの部屋は空欄…つまり、どのような部屋かはわらかない状態だ。

『マスター、掌握完了…基地内部の詳しい見取り図をラファールに転送しました』
『了解、ラファール。既存の見取り図に上書きして表示』
＜了解しました＞

表示されている見取り図が一瞬ブレたかと思うとさらに繊細な情報が記入された見
取り図へと変わった。

「なんだか構造が見た事あるような構造してるな、ん?」

そして、確認して行く中でとある一室のデータを確認したクロスの顔色が変わった。

「…なるほど、ここか」

そこは明らかに大きなスペースが取られていて、データにはこう表示されていた。

【第２研究室：人造魔導師作成場】
【第３研究室：人造魔導師実験場】

「……なんだよ、作成って…」

『……マスター』

怒りに満ちた声を発するクロスの目の色が紅くなっていた。
イリスとの一件以来、エヴォリューダーの力を制御する訓練を重ねてある程度は使えるようになった。
それでも、心の底からの怒りには無意識に反応してしまう。

「ごめん、大丈夫だ…次の段階行くぞ、消火設備は情報通りか？」
『はい、特別な消火剤を使用しているわけではなくほぼ真水です』
「変に薬品入っている消火剤より真水の方が凍結などの魔法が通りやすいからな」
＜私達にもその方が、都合がいいですからね＞

クロスは黒いローブを脱ぎ、生地を裏返して白い生地を表に出して着た。
リバーシブルローブというやつだ。

「その通りだ、ラファール。それじゃ、ノア、ミラノール…監視映像の切断タイミング、頼んだぞ」
『＜了解！＞』

2つの銃を構え、ゆっくりとドアを開け、誰もいない事を確認し天井の防災装置に向けて…

「行くぞ、ノア」
『いつでもどうぞ』

アグニから炎の魔力弾を放った。
たちまち、基地全体に火災警報が鳴り響き、天井のスプリンクラーから水が噴出した。

指令室では

「司令！Fブロックで火災発生です！　消火装置が作動しました！」
「なんだと！？　すぐにむかえ！…なぜFブロックで起きた火災で基地の
半数の消火装置が作動している！？」

モニターを見ると火災しているのは一区間だけだが、隣接する様々なブロックの消火装置が作動していた。

「どうやら、故障のようです！」
「すぐに直せ！」

実はこれはノアがわざと防災装置の故障に見せかけて。
基地内半数のスプリンクラーを作動させるためだ。

「さってと、どう？　こっちにどんどん集まってきてる？」
『陽動させすぎたみたいですね…集まっては来ておますが各ブロックに分散されすぎて…』
「ちっ、用心深すぎだっての…」

実は侵入する際にいくつものプリズムクラッカーで大穴を開け、そこに兵を向かわせたのは
万が一ノアが電脳侵入中に兵に見つかると面倒だったからだ。
しかし、今回は兵士をクロスのいるブロック近くに集めるのが目的だった為
少し裏目に出てしまった。

『マスター、もう結構な数集まって来ました！』
「分かった！…オール・スパーク！！」

クロスの全身が電気を纏ったかと思うと、一斉に放電し始めた。
電流はスプリンクラーで水浸しになった廊下や壁を伝い、Ｆブロックの兵と
近隣のブロックにいた兵もまとめて感電させた。

「な、なんだと！　しまった。敵はこれが狙いか！」

その様子を指令室で見ていたザム司令は歯軋りをした。
スプリンクラーの故障で、Ｆブロックだけでなく近隣ブロックにも被害が及んだため
敵に思っていた以上の効果を与えてしまったと思ったからだ。

「司令！　Ｆブロック、その他のブロックで監視モニターとセンサ

ーがダウン！」
「原因は感電によるものかと！」
「馬鹿な！　耐電処置が施されているんだぞ！　どれだけ高圧な電流だと言うのだあれは！」
実際は、全部ノア達がハッキングしているのをばらさない為の偽装だったが効果はあった。
「…これくらいでいいかな」
クロスは放電させながら廊下を進んでいたが、そろそろ良い頃だと放電を止めた。
すると、前方から杖や剣を構えた魔導兵が大勢来るのが見えた。
「なぁ、ここら辺のやつらってあらかたさっきので片付いたんだよな？」
『はい、研究室にいた研究者たちも全員気絶していますね…』
「それであの数か…しかも耐電魔法かけてるな…だったら次はこれだ！」
十字路で止まり、全ての通路から敵が来るのを見た、クロスの全身が赤く熱を帯び出した。
「な、侵入者は一人だと！？」
「熱い…なんだこの熱は！」
「はあぁぁ～！！…ヒートアップ！」
全身から高温の熱風が吹き荒れクロスに攻撃をしかけようとした兵士を吹き飛ばした。

しかも、吹き飛ばしただけではない。
未だにスプリンクラーからは水が放出されていて、その水が熱風によって
一気に蒸発し、濃い水蒸気に覆われ辺り一面が真っ白になった。

「わぷっ…く、くそっ！　何も見えん！　誰か視界強化スコープや魔法は使えないのか！」
「……そんなの使う暇与えるかよ」
「なにっ…うわあぁ～！？」

真っ白い空間の中で銃撃音と打撃音、そしてわずかながらの射撃音が聞こえた。
やがて、水蒸気が晴れるとそこには十字路を中心に倒れた十数人の兵士と

「…視界が悪くなっただけでこうも脆くなるなんて、訓練足りないなここの兵士は」

全身を覆った白いローブを脱ぎ、自分の次元空間へとしまった銃士・クロスの姿がそこにあった。

「……次は、どいつだ！」

続く

第７３話　「執務官試験（前）」（後書き）

カガヤ
「はい、軽い無双入りました！」

クロス
「いや、だって…雑魚相手だし」

ノア
「あの程度の相手ならこうなりますよ」

カガヤ
「ま、次回はもっと暴れさせるつもりだけどな…さて、ゲスト出演させたい人がいるんだけど…なかなか話が書けない！」

ノア
「プロットは出来てるんですよね？」

カガヤ
「話の構造は頭に浮かんでもそれをうまく文章化出来ない…というわけ、某無敵チートさん（仮名）もう少し待ってて下さい！」

クロス
「あと新作のアンケートも明日までだから、こんな駄作者のでよければお願いしますね」

第７４話　「執務官試験（後）」（前書き）

なのは「最近私達出番ないね」
フェイト「見せ場もない…」
はやて「…寂しいなぁ」
アリサ「私達日常パートしか出番ないのよ！あんまりじゃない！！」
すずか「…魔法少女になりたいなぁ…」
ティアナ「…兄さんの方がまだ出番が…フフフッ」
ギンガ「わ、私達まだ7歳だしそこまで見せ場あっても…ねぇ？（汗）」
スバル「？？…よくわからないけど…お兄ちゃんに、飽きられたの？」

スバル以外「「「「「「「どこでそんな言葉覚えたの！？（滝汗）」」」」」」」

これでもまだリリカルなのはの二次創作と言い張ります（笑）
はじまりまーっす！

第７４話　「執務官試験（後）」

コロニア基地　指令室

「な、なんだと…全滅！？」
「はい、侵入者の情報はまだ何もつかめないまま…」

ザム司令は信じられなかった、基地の半分を短時間で制圧され、兵も４割が倒された。
一体いくつの部隊が侵入したというのだ、何にせよこのままでは制圧も時間の問題だ。
しかし…ザム司令の一番の過ちは、これは１人の魔導師とその相棒が行った事で
ここまで大っぴらに騒動を起こしている目的の一つが次の自分の行動を招く為
と気付かなかった事だろう。

「よしっ、重要データを全て本部へ送れ、すぐにデータは破棄しろ！」
「は、はい…よろしいのですか？」
「構わん…早急にやれ！　それから…地下研究所の破棄もだ」

この基地は組織の様々な研究のデータが蓄積されており、万が一管理局などの襲撃を
受けたなどの場合は緊急処置として研究データの全てを本部に送信しデータや研究施設を破棄するという手段を取る。

その時、どこかで小さな妖精がニヤリと笑った。

「……司令、施設の自爆装置、働きません！」
「なんだと！？」
時限式の自爆装置が作動しないのでは施設の爆破は不可能だ。
「予備システムも作動しません！」
「くっ…急いで原因を探れ！　データ移管は！？」
「移管、破棄、完了しました！」
その報告に司令は僅かにほほ笑んだ
「ようし…これで最低限のデータは守られた…あとは施設を破壊するのみ」
（物理的な破壊であれば基地内にある爆弾を使えば簡単に終わるからな…）
「指令、研究室から通信です』
「…繋げ」
モニターに映し出された女性を見てザム司令はあからさまに嫌悪感を示した。
『あら、そうわかりやすい嫌悪感を毎回示す事はないんじゃないの？』
「下らん事を言いたいなら、お前の可愛いペット（・・・）にでも言うんだな。こっちは…」
『緊急事態、なんでしょ？　それくらい分かっているわよ。私の手を借りる？』
モニター上の女性は見る者を不快にさせるようにニコリと憎たらし

く微笑んだ。

「いらん！　緊急処置を取る。もしもの場合はすぐにアレを破棄して脱出しろ」

『その侵入者こっちまできそうじゃない？　なのに貴重な我が子を破棄してって言うの？』

「ふん、貴様に借りを作るくらいなら死んだ方がマシだ。それにあんなのは
いくらでも作れるだろう？」

その言葉に今度はモニターの女性の顔に嫌悪が浮かんだ。

『…あらそう、じゃあせいぜいがんばる事ね』

「貴様に言われるまでもない！！」

そう言って司令は強制的に通信を切った。

ザムはあの女が大嫌いだった、この基地には沢山の研究施設があるが指令室の地下にある研究施設は特別だった。

始まりは数年前に組織に入ったあの女が地下に研究施設を作り、この基地を作った事にある。

地下研究室はシステムも独立しており、尚且つ研究の報告は年単位でしか行わない。

出入り口も1つしかなく、緊急用脱出口が1つあるだけだ。

研究の為ではなく、研究員を軟禁する為の施設とも言えた。

そして、あの女は組織でも強い権限を持っていた、指令である自分よりもだ。

それが一番ザムを腹立たせていた。

「よ、よろしいのですか？　アレ（・・）を使えば…」

「それ以上は聞かんぞ？　アレの存在を奴らに知られない事が一番

だ、この基地が滅んでもな」

ザムがあの女に嫌悪感を抱くのは、地下の研究施設で行われている研究も原因の1つだ。
アレは止めるべき研究だが、組織は賛成している。
ならば、自分のやるべき事は1つ、あの研究を人目につかせずに完成させて
とっとと終わらせる事だ。

ザム司令は気付かない、何もかもを見透かされている事に…

・
・
・

『マスター、うまくいきました！　データと共に仕込んだウイルスが無事に本部に送られました』
「お、うまくいったな…あとは母さん達がうまくやってくれるだろ」
『はい、それと思った通り…質量兵器を使っていますね』
＜武器庫と書かれた区画がいくつかあり、保管リストにはミサイルなども…＞
「やっぱりか…」

倒した兵士を一か所に縛り上げながらノアの報告を聞くクロス。
今回の襲撃の目的には質量兵器の有無と本部襲撃のバックアップというのがある。
兵の精度は低いがここまで巨大な組織となり今まで管理局の捜査を力づくで退けてきた理由がこれだ。
どこからか仕入れた機関銃やガトリング、ミサイルに地雷など様々な質量兵器を用いている。
しかも自動迎撃装置として外壁に多数配置されているので近付く事も困難だった。

今回のクロスのように少数でレーダーを遮断し、素早く基地の機能を乗っ取る事が出来れば
後は互角以上の乱戦になる。だが、それが出来るような魔導師はごくわずか。
そこで今回の襲撃計画では重要な任務をクロス達が任された。
それはノアのレアスキル『電脳侵入』で、組織の最重要研究施設であるコロニア基地を乗っ取り
データを入手すると同時に、この基地がもしもの時に組織の本部へデータのバックアップを送る。
この緊急処置を逆手に取り、本部の機能全般を混乱・停止させるウイルスを仕込むのが目的。
故に、如何にしてコロニア基地の司令部にハッキングを知らせず、大部隊に攻められているという
誤解を与え、早く緊急処置に踏みいらせるかがクロス達の課題だった。
しかし、その役目も終わった事で敵にハッキングされているとバレても問題がなくなったわけで…

「じゃあ、ノア…もう派手に暴れても構わないよ、俺も小細工抜きで暴れるから」
『了解しました…けれど気を付けてくださいね、マスター。恐らく質量兵器を…』
「それくらいでやられたら、この先戦えないさ」

そう言った途端に前方から銃撃の雨、しかも魔力弾ではなく機関銃の弾だ。
とっさに近くの通路の角に身を隠し、様子を窺う。

＜敵は８人、全員魔力反応なし＞
「ありがと、ラファール。恐らく向こうにはろくに魔導師は残って

ないのだろう」

右手に構えたアグニを角から突きだし乱射する。
それだけでクロスの隠れた通路に突入しようとした3人が倒れる。

「…お前らに、そういうのは宝の持ち腐れだぜ！　プリズムクラッカー！」

5つのプリズムクラッカーを廊下の向こうに撃ち放つ。

「な、なんだこれは…壁に反射しているぞ、伏せろ！」

プリズムクラッカーの性能に気付いた1人が床に伏せたようだが、もう遅い。
クラッカーは床や天井を跳ね返り、不規則な軌道を描きながらもしっかりと標的を捉える。

「がっ！？」
「うわぁっ！？」
「避けきれ…ぐがっ！」
「こ、このっ！」
「ちぃっ！」

5人のうち4人が避けきれずにクラッカーが直撃、その場に倒れ込んだ。
残りの1人は魔導師だったらしくでバリアでどうにか堪えた。

「はい、よくできました」
「っ！？」

突然背後から少年の声が聞こえ、後頭部に固い物が押し当てられ、意識を刈り取られた。
プリズムクラッカーを放ったと同時にクロスは床を擦るほどの低姿勢で廊下から飛びだし。
背後に周り銃を押し当て、躊躇わずに引き金を引いたのだ。もちろん、全て非殺傷設定だ。
・
・
指令室
「ザム司令！　大変です、基地全体の防衛システムが勝手に起動して味方を攻撃しています！」
「なんだと！？　どういう事だ！？」
「兵舎では全ての施錠が降ろされ、待機中の兵が閉じ込められました！」
「侵入者の迎撃に向かった小隊が、突然降りた隔壁に閉じ込められ、睡眠ガスにより昏倒！」
「武器庫の扉も閉鎖され、半数の武器が使用不能！」
もはや指令室ではなく基地全体がパニックになっている。
侵入者迎撃用に設置されたトラップの数々が基地の人間に牙を向いているのだ。
しかも、侵入者のいる近辺のブロックは罠が一切作動していない。
「…どうなっているのだ！」
基地のセキュリティーシステムに絶対の自信を持っている司令室にハッキングの文字は浮かばなかった。
・
・

・

＜基地の残り半数ブロックの兵士達の足どめ、及び排除完了＞

「了解、ミラノール。ノア、死傷者は？」

『怪我人は多数ですが、いずれも軽傷です』

「うん、上々！　これであとは指令室を押さえるだけだ」

指令室への最短ルートを進み、味方のトラップにかかる兵士たちを横目で見ながら

クロスは一直線に司令室を目指す。

＜警告！　トラップを抜けた小隊がいます！…半数こちらに、残りは指令室前で待ち伏せています」

「…簡単には行かないよな…」

ラファールの警告に顔をしかめるクロス、そこへノアからも報告があがる。

『マスター、気を付けてください！　その小隊は精鋭部隊で魔術と質量兵器の重装備です！』

「だったら、こっちも新装備で行くぞ…ラファール！」

＜了解、ジェットローラー展開＞

銃士クロスの足にクイントのデュエルキャリバーのようなローラーが現れた。

これは室内など狭い場所での機動性を高める為にクロスとノアが開発した新装備だ。

本来高速飛行も可能で室内などでも飛行は可能だが、狭い場所では飛ぶよりも

ローラーで壁や天井を駆け回った方が戦術の幅が広がるのだ。

剣士、闘士、銃士でも使用可能でデュエルキャリバーのローラー同

様に自由に制動が利く。
本来、ローラー自体は去年からクロスが考案して、もっと早くに付けられる予定だったが
アルガスアーマーの構成はクロスとラファールの魔力を元に構成される為
普通のデバイス改造よりも作成と調整に多くの時間がかかってしまった。
そして、これが試運転となる。

「行くぜ、うおぉ～！！」

ローラーを全開にし、後部に付けられたローラー用の補助ノズルを吹かし、噴射する。
凄まじい加速にもかかわらずバランスを崩さずに一気に通路を突き進む。
途中に幾人か、こちらに銃を構えた敵と遭遇したが、こちらもアグニやヴァジュラで応戦
もしくは、ローラーの加速を利用した飛び蹴りでそのままノックアウトだ。

「母さんが癖になるって言っていた意味、分かったよ。これは結構気持ちいいな」
＜マスター、調子に乗らないように…先ほどの一団がすぐ先の倉庫に＞
「あぁ…分かっているさ！」

クロスは躊躇わずに、多数の敵が待ち構えているであろう広い倉庫に飛びこんだ。
無視して通路を進んでも良かったが、通路にはびっしりと待ち伏せている彼らが設置したのか

対人機雷やら罠がごっそりしかけられており、倉庫を横切るしか道がなかった。

「こ、子供!?　しかも一人だと!?」

待っていましたとばかりに銃やデバイスを構えた精鋭部隊だったが…飛びこんできたのが1人の少年だと言う事に驚きを隠せなかった。無理もない、基地内のカメラは全てノアに寄って使用不能にされており
警備中の兵士もクロスの姿を見て報告する前に即座に意識を刈り取られていたのだ。
故に侵入者が子供1人だという情報は誰も持っていなかったのだ。

「ひるむな!　子供だと思わずに油断せずに殺せ!」
「時空管理局、銃士、クロスロード・ナカジマ…殲滅する!」

まずドアの影に隠れていた2人を両手の銃で黙らせ、ローラーを更に加速させ
駆けてきた1人を蹴り飛ばす、おまけとばかりにもう1人の脳天にも魔力弾を撃ち込む。

「（この程度なら…仙気でなくてもいいな）」

必要以上には仙気を使わないようにしていたのでクロスは基地に侵入してからは
一切アルガス魔法は使っていない。
アルガスアーマーやプリズムクラッカーも仙気ではなく魔力を使っている。

「撃て、撃ち殺せぇ!」

敵も黙ってやられているわけではなく、冷静さを取り戻し、クロスへ銃弾と魔力弾を放った。

「（これは…防ぐより避けた方が良いな）」

アーマーの防御力を上げるよりも、目の周りと足に紋章を浮かび上がらせ
動体視力と瞬発力を上げた方がいいと判断した。
この紋章も以前は仙気でしか使えなかったが、今では魔力で使えるようになった。
もっとも効果も若干下がり、紋章の形も仙気で使用するよりは変わっている。

「うおりゃ！…せいっ！」

右の空中回し蹴りを、杖を構えた男の首筋に叩きこみ、そのまま返す左足の踵を
剣を突き出してきた男の胸元へと食いこませる。着地と同時に両手を上に向け
飛びかかって来た４人の槍使いを撃ち落とす。

「…くっ、あたらない！」

敵も杖やマシンガンでしきりに撃ってはいるが、目に紋章を浮かばせたクロスは
軽く顔や手足を動かすだけで全てかわして。元々高い動体視力や瞬発力などを持つクロスが
魔力の上乗せでさらに能力を上げている為、これくらいの銃撃の雨は簡単にかわせるのだ。

尤も、クロスの空間把握能力とラファールが周囲のデータから当たりそうな銃弾の軌道を読み
紋章を通してクロスの体を操作しずらしている事で可能となっている。

「だったら、これでどうだ！」
「っ！？」

とっさにその場を大きく飛びのいた、クロス。見ると床と壁が大きくえぐり取られていた。
すぐ上にはクロスのヒュドラのような細長い銃身のショットガンを構えた兵士が3人いた。

「あれはちょっとヤバいかな」

見ると、残った兵士が自分の隠れているコンテナを囲むように動いていた。
ショットガンで動きを止めて、全方位からマシンガンを放つ気だろう。

「そうは、いかないよ！」

いくつか魔力弾を形成し、コンテナの陰から兵に向かって投げつける。
兵は慌てずにショットガンで魔力弾を撃ち落としたが、ただの魔力弾ではなく煙幕弾だった。

「ぐっ…こざかしい！」
「どこだ！？」

コンテナの陰にはもういないと読み、周りを見渡す、だが…

「ここだよ、お兄さん達のと俺のショットガンとどっちが強いか試そうか？」

上から声が聞こえ、すぐさま上にショットガンを向けて乱射したが

「残念でした」

上に動いたと見せかけフェイントで3人の兵の足元へと近づいたクロスが
自分のショットガン・ヒュドラを撃ち、3人を倒した。

「あ、あいつは化け物か！」
「正解！」

すぐ近くにいて、まだ煙幕で咳こんでいた1人の兵士が蹴り飛ばされた。
本来、銃士は遠距離専門の形態だが、クロス自身の高い格闘センスとクイント譲りの格闘術
紋章による身体能力の強化、かつ、ジェットローラーによる加速を利用した蹴り技によって
闘士並の近距離攻撃力を発揮している。

『…本当すごいよね、マスター…』
＜…ノア様＞

クロスの戦いぶりを見ていたノアは悲しそうにそう呟いた。

「これであとは…んっ、これは」

2，３０人程いた兵士は全員床に伏せていた。
倉庫の出口に立ち残りの人数を確認していたクロスは
ふと地面に転がる銃の一丁を手にして何かを考え込んでいた。
その時、クロスの後頭部にレーザーサイトが当てられた。
最初から倉庫入り口上のタラップの物陰に隠れていたスナイパーの
仕業だ。
息を殺し、気配も消し、スナイパーはただ一瞬の好機を待っていた。
今まさにその時と引き金を引いた…

バシュッ！

だが、次に倒れていたのは自分だった。

「これで、終わりっと…残念だったけど、俺には相棒がいるんでね
…とっくにバレてんだよ」

肩越しで後ろ向きに構えたユニコーンをアグニとヴァジュラに戻し
たクロスが淡々と呟いた。

・
・
・

指令室

「ば、ばかな…たった１人の子供だと！？」
「はい…そう報告が、ちなみに報告直後に通信が全て途絶えました
…」
「そんな、この基地が立った１人の…ガキに全滅…だと」

敵は子供１人だと、指令室前を守っていた精鋭部隊からの最後の通

信で分かった。
そして、すぐに通信は途絶えた。今、指令室は静まり返っている。
脱出しようにも脱出口は全て使用不能になっていた。
基地システムのほとんどが使用不能になっており、かろうじて出来た事は
研究施設への道を閉ざす事、研究施設へは指令室内部のエレベーターを使うしかない
そこを爆破させ潰したのだ。研究員は脱出口から逃げる手はずなので問題はない。

「時空管理局だ、もうこの基地は制圧した…大人しく投降しろ」

突然、指令室に声が響いたかと思うと、ザムの後ろに銃を突きつけたクロスの姿があった。

「……ぐっ、分かった…降参だ…」
「そうそう、最初からそうしてくれれば…ってなんでそんなにあっさりと？」

クロスは指令室前の最後の部隊を撃破し、突入しようとしたのだが
指令室のドアは開き、中にいるのは司令官らしき人物と3人の管制官だけだった。
罠を警戒しながら司令の後ろに音もなく周り込んだと言うわけだ。

「ふっふっふっ…くらえ！」

ザムの手が妖しく輝きクロスの周囲が淡く輝きだし、四角い結界が張られ閉じ込めた。

「なっ！？　これは…」

「青いな小僧…俺は戦闘力ではなく結界師としての実力でここの司令官を務めているのだよ」

「……」

見ると2人の管制官が指令室の武器庫からマシンガンとショットガンを取りだし構えていた。

「……はぁ」

クロスは大げさすぎるほどの盛大な溜息を吐いた、一目で分かる失望感を示しながら。

「な、なんだその反応は！」

「いや、だってさ…こんな手しか残してないなんて…俺はてっきり勝負仕掛けてくるかとばっかり」

「…何？」

微かにこめかみを引き攣らせるザムに対して、さらにクロスは挑発的な笑みを浮かべ

「だって、俺みたいな9歳の子供相手にどんな手を使ってくるのかと少し期待していたんだよ？

こんな大層な基地で結構な装備と…質は低いけど大人数抱えちゃっている司令官がさー…はぁ」

「…なんだ？」

苛立ちを押さえながらもザムは懐から銃を取り出しクロスのこめかみへと押し当てた。

「こんな、相手の実力も分からないような罠をしかけてくるなんて

…がっかりだよ」

クロスの声色が変わり、目が青く輝いたかと思うと

「なっ…俺の手が！？」

ザムの両手が凍りついてしまった。

「し、司令！？…何！？」

駆け寄ろうとした管制官たちだったが、あっという間に首から下が凍りついてしまった。

「氷結跳躍魔法、フロストギア…目で見た場所を凍らせる魔法…あんたらよっぽど耐魔力低いんだね、一瞬で凍りついたよ」

クロスはいつの間にか自身を閉じ込めていた結界を解いていた。

「マスター…地下研究室のシステム掌握、完了しましたよ」

背後から聞き慣れない少女の声が聞こえ、ザム達3人が後ろを振り返るとそこには

指令室のコンソールに腰かけ、こちらをニコニコと見つめる小さな女の子の姿があった。

「その子の名前はノア。俺の相棒でさっきまでこの基地のシステムをハッキングして
色々やっていた犯人だよ」

「どうも～！　結構頑丈なセキュリティー使っていましたけど…やぶっちゃいました♪」

片手を上げにこやかに笑うノアにザムは呆気に取られていた。

「ば、バカな…システムを支配、だと？」

「そうだよ、まぁ全部話すと長いから、今俺達が何をやったかだけ話すかな」

「ここの地下研究施設へはどうやってもシステムに侵入出来なかったんですよ、そこで…」

　指令室なら地下研究施設へ侵入出来る通路があるのじゃないかと思って…」

「ノアが侵入して掌握するまでの時間稼ぎを俺がしたってわけ…」

最初にこの基地のシステムを掌握した時に重要な研究施設は地下にあり
研究データもその端末にしかなく侵入するには指令室に行き
そこから再度侵入する必要があった。
そこでノアは、クロスの近くにあったネットワーク端末から実体化しクロスがわざと捕まり時間を稼いでいる間にコンソールから地下研究施設に侵入し
データを抜き取っていた、というわけだ。ザムの戦闘力があまり高くなく
結界に関してはレアスキル並に高い力を持っているとデータで知り
指令室が無防備なのをみて、ザムの作戦を見抜きわざと捕まったのだ。

「……くっ、そっ！」

「お前の魔力じゃその氷は破れないよ…おやすみ」

無表情でザムを撃ち昏倒させ、バインドで縛り拘束する。
管制官の方もノアが気絶させ拘束していた。

「さてと、これで執務官試験は終わり…これからは、俺達の戦いだ」
「えぇ、マスター…行きましょう、マスター」

2人の顔に浮かぶのは静かな怒り。
ノアですら普段では見せない怒りの表情を浮かべている。
クロスに至っては憎悪や殺気も混ざっている。

それほどまでにこれから2人が向かう場所にいる人とは因縁があった。
基地のデータを解析する中で見つけた1人の人物名。
その名は決して2人が忘れてはならない名前であり、ずっと探していた人物だ。
その者は地下研究施設に今もいる、恐らく2人を待っているのだろう。

その名はレクイア・ラムディス…プロジェクトAの生き残りの1人。

続く

第７４話　「執務官試験（後）」（後書き）

カガヤ
「ザムは噛ませ犬っぽくしました～」

クロス
「噛ませにもほどがあるだろ（汗）」

ノア
「結界能力だけの存在？」

カガヤ
「そこらへんも理由があるんですけどね…次回を見てください！」

クロス
「またしょうもない理由じゃないだろうな？てか設定や描写に拘り過ぎてクドくなってないか？」

カガヤ
「だ、大丈夫だと…思います（汗）それでは、基地攻略は前座、次回、クロスの本当の戦いが始まります。」

第７５話　「エヴォリューダー？」（前書き）

この話は最初に考えてましたが…ここまでの描写になるとは…
グロ描写要注意です。

第７５話　「エヴォリューダー？」

コロニア基地　研究区画第３研究室：人造魔導師実験場

Ｓｉｄｅ　？？？

ふっ、ふふふっ…ついにこの日が来たわ。
最初はただの管理局の襲撃かと思ったけど、微かにみたカメラの映像…
間違いない…見間違えるはずもない、４年前あの女に追放された研究所で私が作り出したのだ。
プロジェクトＡの唯一の成功体『Ａ－０１５８３』。私の最高傑作のはずだったのに！
あの女さえいなければ…あんな事さえなければ私の手でもっともっと素晴らしい兵器になっただろうに。
でも、この基地をこれだけの短時間で陥落させれる事が出来るようになったのなら上出来ね。
ふふっ、早く来なさい、私とこの子達が待ってるわよ…
血に塗れた狂気が笑い上げる…狂宴が始まる。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

地上基地を制圧し、残すは地下の研究施設のみとなった執務官試験を兼ねたコロニア基地制圧戦。
だが、クロスにとってはもう試験は終了しているようなもの、残りは…完全な私闘。

「…ギア！」

クロス達はその場から消えた。

・

・

・

コロニア基地から離れた崖の近く

数名の管理局員が崖の一角を森に隠れて監視していた。

そのすぐ後ろにクロスが転移してきた。

「よっと、状況はどうですか？」

「わっ、ク、クロス捜査官！」

驚きとっさにデバイスを構えた局員だが、クロスだとわかるとほっと息を吐いた。

「驚かせてすみません、ちょっとこっちの様子を確認しようかと思いまして」

「人が出てきた形跡はありません、それとゼスト隊長から連絡が入り、本部の攻撃を開始したと」

「そっか…それじゃまた行ってくるよ」

「あっ、待って下さい！　行くと言っても出入り口の場所は分かってるんですか！？」

実は前もって基地の緊急脱出口の場所を知っていたクロスは部隊の一部にもしもの時の為に

脱出口を押さえてもらうように頼んでいたのだ。

そこはそのうちの１つ、地下の研究施設の脱出口だ。

唯一の連絡口であった、指令室のエレベーターが完全に崩落してい

て、侵入ルートがつぶされていたので
クロスは脱出口から逆送して侵入するつもりでここへ飛んできた。
しかし、大体の場所は分かっていても脱出口は偽装魔法で隠されていて局員には見つけられなかったのだ。

「これくらいの偽装なら…閃光裂破！」

クロスは剣士となり、崖の一角を切り裂くと、巨大な穴が現れ、そこへ飛びこんでいった。

「さ、流石…」
「俺達では見つけられなかった穴をあんなにあっさりと…」

残された局員は引き続き監視体制に入った。

「変だな…時間はあったから研究員達が脱出してると思ったんだけど」
『もしかして、脱出口はまだあったとかですかねぇ』

脱出口から誰も出てきていない事に不審に思うクロスとノア。
ザム司令は脱出命令を出していたはずなのに研究員達は脱出口からは出ていない。
何か理由があるのかわからないが、嫌な予感がぬぐえなかった。

「…わからない……っ！血のにおい…急ぐぞ！」
『はいっ』

薄暗い通路を進むと奥から血のにおいが漂ってきた。
クロスは更に加速して、奥へ奥へと突き進む。

地下研究施設　人造魔導師実験場

「…これは……」
『ひどい…』

通路を抜け、広いドームのような場所に出たクロスは思わず顔をゆがめた、そこにあったのは…
赤い血、ピンクの臓物、乱れ落ちる手足、無造作に捨てられた頭部。
かつて人の形をしていた何か。

「これは…研究員達か、でもなぜ？　一体誰が？」
「そいつらは研究を勝手に持ち逃げしようとしたの…だから殺したわ」

するとドームのスピーカーから声が流れてきた。
その声を聞き、クロスはすぐにある一角を睨みつけた。
そこには厚いガラスで仕切られてた制御室だった。
その中に、妖しい笑みを浮かべた1人の女性が立っていた。

「……レクイア・ラムディス」
「久しぶりね、Ａ－０１５８３」
「俺はクロスロード・ナカジマだ！」
「あっはっはっはっ、そうだったわね…じゃあ、クロス、早速だけど、私の元に戻ってもらうわよ？」
「っ…ふ、ざけるなぁ！！」

闘士になり、レクイアのいる部屋まで突撃したクロスだが…

『マスター、危ない！』
「っ！？」

突然現れた何かに蹴り飛ばされ、壁へと叩きつけられた。

「ぐっ…な、なんだ」

闘士の速度は、フェイトのソニックフォームのソニックムーブですら捉えられない程の速度がある。
だが、今は完全に動きを見切られて攻撃を当てられた。

「…あの女の最高傑作があなたなら、これが私の最高傑作ね」
「な、何を…」

壁からはい出たクロスが見たものは
両手に鋭い爪をはやし獣のような瞳をした2人の幼い男女の姿。
そして、2人から感じる気配は…

「…まだ続けてたのかよ、プロジェクトAを…」
「違うわ、確かに理論は似ているけど…それはあなたほどのものじゃないわ」

スピーカーからは相変わらず小馬鹿にしたような声が響く。

「どういう意味だ！」
「本当はエヴォリューダーを元にしたかったのだけど…失敗してね」
「……」
「あなたも知ってると思うけど、エヴォリューダーのＤＮＡにはクローン対策がされているのよ
だから、エヴォリューダーのクローンは作れない…ならばどうす

ればいいと思う？」
「……元から変える」
「正解…そして、問題…この子達は、何をどう変えてこうなったのでしょうか？」
その瞬間に眼の前の２人が消えた。
「がはっ！？」
同時に左右から衝撃をうけ、クロスの体が宙に浮く。
そして、壁を蹴る音が聞こえ、腹に衝撃が走った。
２人がクロスを蹴り上げ、壁を走り、クロスの腹に踵を落としたのだ。
『マスター！』
「ちっ、舐めるなぁ！」
さらに追撃を放とうとする２人の爪を掴み、地面へと叩き落とす。
手加減なく投げた為、地面が陥没に体がめり込む。
「プリズムノヴァ！」
間髪いれずにクロスの砲撃、殺傷設定の砲撃が放たれた。
だが、砲撃が届くよりも早く２人は起き上がり、クロスへと跳び上がった。
「くっ」
鋭い爪を剣士になり、どうにかいなす。
上下左右からの見事な２人のコンビネーションに、クロスは少しず

つ反応しきれなくなった。

ガキッ

そして、ついにクロスの両肩を捉えた。肩のアーマーごと切り裂き、鮮血が飛び散る。

「あ…ぐあぁ…あ、アーマーが…」

クロスはここに来る時にアルガスアーマーを魔力ではなく仙気に変えている。

しかも、防御力が一番高くなる剣士の姿でアーマーごと切り裂かれた。

それだけ相手の攻撃力が凄まじいと言う事だ。

「あがっ…ぐっ…こ、これは…」

＜マスター、傷口から猛毒が入り混んでいます！＞

見ると、2人の爪にクロスの血とは別に透明な液体が見える。

「ふふふっ…どう？　特別製の毒は？　普通の人間なら即死物よ、流石ね」

剣を杖代わりにして立ちあがろうとするが、体に力が入らず倒れてしまい、アーマーも解けてしまった。

「ぐぅ…さ、さっきからのこの動き…ただの獣化じゃないな…遺伝子レベルでの融合か…」

「そうよ、獣の力を使う魔法や獣になる魔法、そのどれも凌駕するわ！　各次元世界の獰猛な獣の遺伝子を

かき集めて、調整し、人の遺伝子と融合させたのよ。プロジェクトAの産物によって生み出された
強力なリンカーコアの魔力によって身体能力を数倍にも膨れ上げさせ、尚且つ主人の言葉には忠実…
あなたが保護したガラクタよりも戦闘力は上…そう戦闘獣人と名付けましょうか、あっはっはっはっ！」

勝ち誇った声がクロスの頭に響く…

「……じゃねぇ…」
「んん？」

体に駆けまわる震えは、毒によるものではない。

「ギン……ルも…ガラ…なん…じゃ…」

口に滲む血の味は吐いたものではない。

「ギンガも、スバルも…ガラクタなんかじゃねぇ、俺の大切な…家族だぁ！！！」

凄まじい烈風と共にクロスの体からは仙気が溢れ出てきた。

「ノア…アレやるぞ……この状態じゃ解毒する前にやられる」
『分かりました、もしもの時は私が全力で止めますよ』
「あぁ、その時は任せた…ここには母さん達もいないしな、でも、なのは達もいない…誰もいない…」

ドーム中に吹き荒れ、２人の獣人をも吹き飛ばした仙気の嵐はクロスの元へと急速に戻っていく。

「だから…思いっきり、エヴォリューダーの力が使える！」

そして…クロスの体に嵐が全て入り、見開いた目は…紅色。
体中の傷はふさがり、アーマーの損傷も直っている。

「な、何！？…馬鹿な、その力は計算ではまだそこまでは制御不能のはず！」

レクイアの声に初めて驚愕と焦りが混ざり始めた。

「確かに…この力は初期段階、一時的な感覚の増幅程度にしか使った事はねぇよ…暴走するからな」

感情の爆発で瞳が紅くなる事は多々あれど、それは内部的にはまだ初期段階だ。
エヴォリューダーの力の本質はクロスやノアにもまだ分かっていなかった、作りだした研究者達でさえ
予測不可能だった。シグナム達が殺された時に完全に暴走し、ゼスト達も最終段階だと思っていたが
実はあれすら最終段階ではない。ならば、今のクロスの状態は何か？

「実戦で使うのは初めてだけどな…これが、エヴォリューダーの…俺の力だぁ！！」

瞳の光度がマシ、体中に仙気が満ちる。だが、仙気は以前のように黒い仙気ではなく、紅いままだ。

「そうか…体内の獣人の毒の解毒を早める為に…か」

クロス、エヴォリューダーの身体特徴の1つに毒やウイルスの即時無効化がある。
並大抵の病原菌やウイルスや毒は体内の活性化した抗体が後遺症もなく排除するのだ。
ただし、これにも限界があり獣人から受けた毒はこの限界を超えていた為すぐに解毒は出来ず
クロスはエヴォリューダーの力を解放し、体内で抗体を作り上げ耐性を付けたのだ。

『30分、それ以上は…危険ですよ』
「あぁ…分かってる」

そして、この力の解放にはソウルチェンジユニゾンと同じく限界時間がある。
30分を越えると破壊衝動を理性で抑えきれなくなり、あの時の用に暴走してしまうのだ。

「……行きなさい！」

レクイアの声と同時に2つの影が高速でクロスの元へと襲いかかる。

「…遅い」

クロスは少し体をずらしただけで簡単にかわして、獣人の体にカウンターを決めた。
それでもすぐさま獣人は体勢を立て直しクロスに爪を突きたてようと死角から襲いかかる。

「だから…遅いって言ってんだよ!!」

前方と背後の死角、両面からの同時攻撃、それをクロスはまた止めた。
両手に握った鋭く長い爪はあっという間にヒビが入り、砕け散る。

「ごめんな…お前ら、助けるにはこれしかないんだ…」

一瞬、クロスは元の瞳に戻り悲しい表情で獣人に話しかける。
しかし、次の瞬間にはまた紅い瞳の険しい表情となり無表情な獣人の腹に向けて左右の手を向け

「フレイム…ノヴァ」

放たれた炎の砲撃は紙のように簡単に腹を突き破り…2人の獣人は燃えあがりながらその場に崩れ落ちた。

「…はっ、ははっ…あはははははっ！　素晴らしい、素晴らしいわＡ－０１５８３！　その力、その残酷さ…
いとも簡単に躊躇いもなく命を奪う残虐性と冷酷さ…まさに、破壊衝動の塊！」

自分を守る獣人が殺されたというのに、レクイアは狂った笑いを止めずに手元のコンソールを弄った。
その時、制御室内のコンピューターが一斉に雷が走り爆発を起こした。

「きゃっ！？　…な、何が…っ！？」

遠く離れたドームの反対側にいるクロスの眼がそこからでも見えた。
殺気…まさに殺気しか籠められていないその眼はうっすらと黄色に輝いていた。

「ボルトギア（雷撃跳躍）…これ以上余計な真似はするな、クソゴミが…」

しかし、一歩遅かったらしくドームの一角が開き、その奥から多数の獣人が飛び出してきた。

「あ、あはは…やりなさい！　私の子供達！　お兄さんに遊んでもらいなさい！！」

「兄弟って事を否定はしないさ…けど、俺を兄と呼んでいいのは…ギンガとスバルだけだ！」

クロスの周りに普段よりも数量の多い仙気弾が浮かび上がる」

「プリズムスフィア、展開……プリズムアロー・ジェノサイドシフト！！」

２０個以上もの白い仙気弾…仙気スフィアは迫りくる数十体の獣人に向けて射撃を繰り出す。

沢山の閃光の合間を縫うようにクロスが駆ける。

「…４５２…４５４……４６０…」

スフィアが獣人の頭を打ち抜く度に、自身の拳が獣人の心臓を貫く度に…カウントは進む。

「４７９……４８５」

最後の一体の首を手刀で切り落とした、直後。

「ユニゾン状態のまま倒れなさい、Ａ－０１５８３」

すぐ近くでレクイアの声がしたかと思うと、クロスの体は糸の切れた人形のように崩れ落ちた。
制限時間までにはまだ１０分近く残っている、時間切れによる副作用ではない。

「……」
『マ、マスター！？　どうしたんですか！？』

無言で紅い瞳ではなく、赤橙色の瞳で自分に近寄るレクイアを睨みつけた。

「油断したわね、Ａ－０１５８３！　まだまだ子供ねぇ…」

優越感に溢れた醜い表情を浮かべ、レクイアはクロスを見下ろす。

「実はね、私にも…あなたの制御認証スペル、持ってるのよ？　意外？　あの女は私を追放する前に解除した
みたいだけど、残念、私の認証は解かれないまま…わかる？　あなたは私の前に現れた瞬間にこうなるのが
決まっていた…私の元にひれ伏すのが決まっていたのよ」

制御認証スペル、それはクロスを生み出した研究員達がエヴォリューダーを制御する為に組み込んだ鎖。
特定の人物の魔力で編み込まれた言葉に、例え意思が抗おうとも体が従う絶対命令権。
リンカーコア、脳髄、あらゆる器官に魔術的にも医術的にも染み込ませてある為、手術などでは排除できない。

「獣人はあなたがどれくらい強くなったかを試すいい判断材料になってくれたわ、でも2人でケリが付くと
思ったのに…全滅させられるとは思わなかったわ…全く、これの損失はあなたと太極の書と
小さなおチビさんで補うしかないじゃない…ねぇ、Ａ－０１５８３？」

レクイアは口まで裂ける程の笑みを浮かべ、クロスの顔を掴み、持ち上げた。

「さーって、まずは…外にいるゴミ共の始末をつけて、本部に行ってあなたを拾った偽善者達を殺してから
ゆっくりと実験を再開しましょうか…ねぇ、クロス？　きゃははははっ！！」
「断る」

ザシュと、何かを斬る音が手元から聞こえ、レクイアはクロスを掴んだ手に目を向けると…手はなかった。
さらに良く見ると、クロスの手に握られた剣が自分の手首を斬り、腹を一突きにしているのが見えた。

「あ、あぁ…ぎぃやあぁ～～～！！」
「それ以上奇声を発するな…気持ち悪いんだよ、クソアマ」

再び瞳を紅くしたクロスの拳が顔面へと突き刺さった。

「あっ…あがっ……」
「お前も頭悪いんだな…制御認証スペルがあるならなんであんな事が起きたと思う？…なんで俺が
あそこのゴミ野郎共を皆殺しに出来たと思う？」

その言葉に痛みも忘れてレクイアの頭は恐怖でいっぱいになった。

「母さん達は偽善者なんかじゃない…本当の偽善ってやつを見せてやるよ…」

クロスは右手に紅い仙気を、左手には蒼い仙気を溜める。

「ひ…ひどごぼし……」

「人殺し？…お前らが俺をそうやって作ったんだろ？」

ゆっくりと両手を合わせ、集束させる。

「1つ言っておくとな、俺は人殺しが嫌いだ、でもな」

そして、レクイアとその後ろに見える【第2研究室：人造魔導師作成場】と書かれた空間へと向けた。

「お前らだけは…絶対に俺がこの手で殺す、って決めてるんだよ！！」

＜ハイブリットシャインブレイカー＞

感情のないラファールの声と共に、クロスの手から集束砲が解放された。

「う・・・あっ……ぐぎゃあぁぁ～～！！」

殺傷設定で放たれた巨大な光はレクイアの体を蒸発させ、そのまま第2研究室を吹き飛ばした。

「これで…４８６人目だ」

地響きと共にドームの天井が崩れ落ちてくる。
それを気にも留めずにクロスは周りに散らばる獣人達の遺体を見渡し

「ごめん…ごめんな……フレイム…ギア」

全ての遺体が燃えあがる、埋葬は出来なくても…せめて…

「マスター…泣いているんですか？」
「返り血だ…」

クロスの全身は赤く染まっていた。アーマーの色よりも赤い、獣人とレクイアの返り血だ。
そして、両目には涙なのか返り血なのかそれとも両方が流れ落ちているのか…赤い筋が出来ている。

「戻るぞ、ノア…ひっつくなよ…お前も汚れるぞ」
「汚れても構いませんよ…あとで一緒にお風呂に入れば問題なしです…」

言葉こそ明るく言っているが肩に座ったノアは涙で濡れた顔のまま…血まみれのクロスへと寄りかかった。

最後にクロスは炎で赤く照らし出されたドームを振り返し…脱出口から飛び去った。
直後、コロニア基地第２研究室：人造魔導師作成場、第３研究室：人造魔導師実験場は瓦礫に埋もれた。

「……壊滅、完了（ミッション・コンプリート）」

続く

第75話　「エヴォリューダー？」（後書き）

カガヤ
「…どうしてこうなった？」

クロス
「しらねぇよ…」

ノア
「……」

カガヤ
「今回はクロスの闇の話です…こんな姿なのは達には絶対見せられませんからね…」

クロス
「……それでもあいつらは俺を…」

ノア
「だから、明かすんですよね…私達の過去を」

クロス
「あぁ……」

カガヤ
「め、めちゃくちゃ重い空気なので今回はここまで…あ、バレンタイン企画として書いたのが次にあるので…お口直しになれば…では、また次回！」

バレンタイン特別編「バレンタインデーにちょこもらったー／バレンタインデーにちょこもらったー！」

今回は雑談形式の特別編なので台本形式になっていますがご了承ください。

バレンタイン小説は前書いたので今回は趣向を変えました！

バレンタイン特別編「バレンタインデーにちょこもらったー／バレンタインデーにちょこもらったー」

カガヤ
「はい、皆さんおはこんばんちわ…本日はバレンタインと言う事で特別企画！ツイッター診断メーカーの『バレンタインデーにちょこもらったー（男性向け）』『バレンタインデーにチョコあげたー（女性向け）』をうちのキャラでやればどうなるかーを雑談形式でやっていきたいと思います。参加メンバーは～！」

クロス
「クロスロード・ナカジマ…前回あんなシリアス書いておきながらこれかい（汗）」

ノア
「ノア・ナカジマです！　まぁ…カガヤですから」

なのは
「高町なのはです。にゃはは、久々の出番がこんな形なんだ（苦笑）」

フェイト
「フェイト・テスタロッサです。雑談で…しかも、なんだか不安なタイトルが…」

はやて
「八神はやてです。気分転換に付き合わされとるだけな気がするなぁ…」

すずか
「月村すずかです。まぁまぁ、たまには面白いじゃありませんか？」

アリサ
「アリサ・バニングスよ。それにしても多すぎじゃない？」

ヴィータ
「ヴィータだ、わざわざ小説に書くまでもないじゃん」

シグナム
「シグナムです。言うな、ヴィータ…カガヤも最近色々溜まっているのだろう」

シャマル
「シャマルです♪そうねぇ…シリアス展開しか浮かばない病だし…これは不治の病よ」

ザフィーラ
「ザフィーラだ…なぜに俺まで？」

ギンガ
「ギンガ・ナカジマです。バ、バレンタイン…／／／」

スバル
「スバル・ナカジマです！　ところで、バレンタインって何？」

一同
「「「「「ミ（ノ＿＿｜）ノ＝３　ドテッ！！」」」」」

ティアナ

「ス、スバル！　あんたこの前クロスさんに渡したでしょうがぁ！
あ、ティアナ・ランスターです」

スバル
「あ～！　あれがバレンタインかぁ！！」

カガヤ
「ス、スバルめ……天然にも程があるぞ（汗）さ、さて気を取り直しまして以上のメンバーで行います」

クロス
「母さん達は？」

なのは
「ユーノ君やアルフさん達もいないよ？」

カガヤ
「人数多すぎるな、需要があればやるかもだけど…ちなみに、ゼストさんはメガーヌさんの所で…
ってこれはまだ秘密だった！　ナカジマ夫妻とティーダ、美由希ペア、ユーノ、アルフペアは
それぞれデート中…プレシアはオーリスに付き合わされてます…南無」

アリサ
「て、手抜きにも程があるじゃない！」

フェイト
「っていつの間にアルフはユーノとそんな関係に！？」

カガヤ
「うるさいうるさいうるさいうるさいうるちゃい！　いいの！　とっととやるよ！」

アリサ
「ちょ、それ私が言うべきセリフでしょ！」

はやて
「アリサちゃん、怒る所、違うで？（汗）」

ティアナ
「……見事なツッコミ」

ギンガ
「…ティア？」

カガヤ
「まずはこの診断メーカーについて…ここにＵＲＬ載せていいのかな？…『ツイッター診断メーカー』で検索してくれ！　そして、今回行う診断は…」

シグナム
「その説明は何か最初と被ってないか？」

カガヤ
「い、いいんだよ…続けるぞ、今回の診断は…

『もし、○○にチョコをあげた（もらった）時になんと言われるか？』

だ！…早速いくぞー！まずは……クロスにチョコを上げたらなんと言われるか！」

女性陣（スバル以外）
「「「「「「えぇ～～！！？」」」」」」

カガヤ
「お、落ち着けお前ら…もしだもし！　あげる相手は架空だから大丈夫だって！」

ザフィーラ
「シグナム、シャマル…お前達まで反応するとは思わなかったぞ？」

シグナム
「わ、私はただ…その、内容に驚いただけだ／／／」

シャマル
「私だって…シグナムと同じです／／／」

はやて
「2人共…素直になろか♪」

ノア
「マスター…大変ですね♪」

クロス
「知らない知らない、俺は何も聞いてない！」

カガヤ
「あーもう進まない！…勝手にいくぞぉ！あ、最初に言っとくけど

『バレンタインデーにちょこもらったー（男性向け）』では女性の名前を
『バレンタインデーにチョコあげたー（女性向け）』では男性の名前で診断してるからな？」

◆クロスロード・ナカジマの場合◆
「（チョコを受け取りあなたの指に指を絡めて）俺、チョコ大好きなんだよね。ありがとう。
…まあ、お前のことはもっと好きなんだけど。」

・
・

女性陣
「「「「「……（／／・＿・／／）カァ～ッ…（／／／ω／／／）テレテレ♪」」」」」

ザフィーラ
「ついに言ったか、漢だな、クロス」
クロスの肩に手を置く。

クロス
「違うだろ！　俺の名前で診断したらこうなっただけで俺が言ってるわけじゃないって！！」

カガヤ
「…よしっ、1人目にインパクト大のキャラを出したおかげで皆フリーズしたな…この隙に」

◆ノア・ナカジマの場合◆

「（チョコを差し出して潤んだ目で頬を染めて）はい、今年もあげる…え？いや、今年から手作りにしたの
何でって…その…だからっ…ばか、察してよ…」

ノア
「……こ、これは／／／」

ギンガ
「姉さんなら、ありえそうですね…」

シグナム
「不思議と頭の中で再生されたぞ」

ヴィータ
「あぁ、姉ちゃんにはぴったりかもしんねぇ…」

シャマル
「あらあら、姉さんにも春が…ってもう訪れてるますよね♪」

ノア
「ちょっ、そこの妹‘ズ！　何肯定しちゃってるの！？…それとシャマル、後で覚えてなさい！／／／」

クロス
「これは…うん、ノアらしいな」

ノア
「マスター！　忘れてくださ～い／／／／」

はやて

「こ、これはごっつ恐ろしい企画かもしれん…」

ティアナ
「そ、そうですね…」

カガヤ
「ではつぎ～！

◆高町なのはの場合◆
「（チョコを差し出して顔を真赤にして）美味しいといいんだけどなあ。ちょっと形悪いけどごめんね。
食べてくれると嬉しいな」

なのは
「にゃ、にゃ～～！！？／／／」

フェイト
「これも…なのはが言ってるみたいだね…」

すずか
「うんうん、なのはちゃんならいいそう」

アリサ
「なのははお菓子作りうまいけど、たまに少し形崩しそうな所がポイントね」

なのは
「冷静に分析しないでぇ～！！／／／」

クロス
「…なんだろう、Ｓｔｓのなのはが頭に浮かんだ…」

カガヤ
「今回はメタもなんでもありなんで発言は自由！…ではつぎ～」

◆フェイト・テスタロッサの場合◆
「（チョコを差し出してそっぽを向いて）美味しいといいんだけどなあ。ちょっと形悪いけど、ごめんね。
　食べてくれると嬉しいな」

フェイト
「あ、あれ？…なのはと変わってない？？」

シグナム
「あえて言うなら…」

スバル
「つんでれ～♪」

ノア
「そうですね～シュチュレーション…というより仕草が変わってますけど…」

シャマル
「こうも連続でなると…少し間おいてあれば…」

フェイト
「……ｏｒｚ」

クロス
「ま、まぁまぁ…フェイトらしさも出てるんだからさ（汗）」

カガヤ
「はい～次いってみよー！」

◆八神はやての場合◆
「（チョコを差し出して小さく唇を開いて）これあげる。…あーんしてあげようか？ほら、口開けて。」

はやて
「こ、これは…自分の番になると…恥かしいもんやな／／／」

ヴィータ
「これは…デート中か？」

ザフィーラ
「主…大胆な事を…」

なのは
「でも…これもありだよ…はやてちゃんっぽいもん！」

フェイト
「う、羨ましい…」

ティアナ
「フェ、フェイトさんもそれっぽかったんですから（汗）」

クロス
「……これ、実際やられたら、倒れそう…色々な意味で（汗）」

カガヤ
「リア充死ね！　はい、次！」

◆月村すずかの場合◆
「（チョコを差し出してあなたを見上げ）はい、約束してたチョコレート。で、このあとどこ行くの？
ずっと今日のデート楽しみにしてたんだから！」

一同（スバル、すずか以外）
「「「「「…すごい、ありえないと思うのに十二分にありえる！」」」」」

すずか
「そ、そうかな？／／／」

アリサ
「うんうん、すずかって意外と抜け目ないのよねぇ…侮れないわ」

なのは
「言われてる場景が思い浮かぶよね♪」

フェイト
「眩しい笑顔と一緒にね」

ギンガ
「大人な感じもしますね…」

クロス
「…商店街で待ち合わせして…なのかな？」

カガヤ
「なんか体中かゆくなってきた…はい、次！」

◆アリサ・バニングスの場合◆
「（チョコを差し出して照れ笑いして）これあげる。…あーんしてあげようか？ほら、口開けて。」

なのは、ノア、すずか
「「「きゃ～、アリサちゃん大胆すぎぃ～♪」」」

アリサ
「う、うるちゃいうるちゃいうるちゃい！／／／」

はやて
「これは、また…インパクト大やなぁ…流石はくぎゅボイスやわ。私とセリフ一緒なのに」

ヴィータ
「…セリフは同じでも声によっては変わるのか…」

フェイト
「私もなのはと一緒だったのに…この差は一体？」

カガヤ
「…好きな声優のランクの差だな、高町とテスタロッサの声優は好感度ランクで同一だからな」

フェイト
「そ、そんな理由…ｏｒｚ」

スバル
「これ、お兄ちゃんにたまに言われるよ～」

女性陣一同（ギンガ、ノア以外）
「「「「「「……えっ!?」」」」」」

クロス
「ち、違う！　ニュアンスが違うって!!」

ノア
「マスターの名誉の為に言いますが…スバルの好き嫌いを直すため、ですよ？　ブロッコリーとかよく残すから
マスターやお母さんが食べさせてるんです」

ギンガ
「私も嫌いな物…作ろうかな、って思ったくらいだから…」

カガヤ
「はぁ・・・はぁ・・・くぎゅマジすごっ、はい次！」

◆ヴィータの場合◆
「（チョコを差し出して少し泣きそうな声で）どう、美味しい？私も一口食べたーい！……
って!?違、そんなこと考えたんじゃなくて、間接キスとか…！？もう馬鹿！」

一同
「「「「「……（ □ ；）」」」」」

ヴィータ
「な、なんだよ…言いたい事あるなら…言えよ！／／／」

はやて
「あのな、ヴィータがフリフリのドレス着た姿が頭に浮かんだんや」

シャマル
「で、でもヴィータちゃんの甲冑はドレスっぽいし…」

なのは
「こ、これもありだよ！…ギャ、ギャップ萌え？（汗）」

スバル
「いつもよりヴィータお姉ちゃん女の子っぽーい♪」

一同
「「「「……（；。ロ。）あっ！？」」」」

ヴィータ
「。・。。。‘ 。（＊／□／＊）‘ 。。。・。 ウワァーン！！
…・・・へ（。≧Ｏ≦）ノ コンチクショー」

はやて
「ヴィ、ヴィーター！！！」

クロス

「ちょっ！お、俺はありだと思うぞ！ってか可愛いだろ！！」

ザフィーラ
「クロス…今はそっとしておいてやれ（汗）」

カガヤ
「……次も怖いな…でもいってみよー！！」

◆シグナムの場合◆
「（チョコを差し出して恥ずかしそうに）…甘いもの好きだった？
苦手でも食べれるように
甘さ控えめにしたんだけど」

シグナム
「な…なんだ、これは／／／」

ザフィーラ
「これは…いいのではないか？」

シャマル
「そうねぇ、口調の問題は別にしても…ありよあり！」

ノア
「シグナムらしさが出てます！」

シグナム
「そ、そうか…／／／」

アリサ

「これが大人ってやつなのね…」

すずか
「アリサちゃん、ちょっと違うと思うな（汗）」

クロス
「シグナムの意外な一面…好きな人の前でしか見せない…か、うん、いいな♪」

カガヤ
「割と平和にすんで良かった…それじゃ、次！」

◆シャマルの場合◆
「（チョコを差し出してそっぽを向いて）…ずっとチョコあげてきたけど、今年はちゃんと言うね。
……好き。付き合ってください。」

シャマル
「え、えっと～…ど、どうかしら？／／／」

一同
「「「「「逃げて～！チョコの相手逃げてぇ～～！！（汗）」」」」」

シャマル
「えぇ～～！？」

はやて
「とまぁ冗談は置いといて…ストレートやなぁ」

ノア
「シャマルらしいといえばらしいですねぇ」

すずか
「なんだか青春ですね」

ティアナ
「これ言うのある意味一番勇気がいりそうですね…」

クロス
「屋上で言われてる風景が浮かんだよ、なぜか夕日に照らされて」

カガヤ
「ちなみに柚姉ボイスも俺は好きだぞ！…じゃ次！」

◆ザフィーラの場合◆
「（チョコを受け取り動揺して）君から貰えるとかすごく嬉しい。…来年も、貰えたりする？」

一同
「「「「「…（大爆笑中）…」」」」」

はやて
「あはは！！あ、あかん…これはあかん！」

シャマル
「ぷっ……ふふふっ…ザ、ザフィーラ想像出来ないわ…ははは っ」

ザフィーラ
「……どうしてこうなった　ｏｒｚ」

なのは
「で、でもでも…なんだかザフィーラさんすごく子供っぽくていいかもしれませんよ？…ふふっ」

アリサ
「あはははは…だめ、もうダメ、私お腹痛い～」

ノア
「ヴィ、ヴィータちゃん以上ですねこれ…ぷっ…あはは」

スバル
「ザッフィー可愛い♪」

ザフィーラ
「解せぬ　ｏｒｚ」

クロス
「ザフィーラが小学生になったら…こうなるのかもしれない…くっ、しばらくザフィーラの顔見れないや」

カガヤ
「一番ツボにはまったんだよなザフィーラのは…じゃ次！次からは俺的には本命の連続！（笑）」

◆ギンガ・ナカジマの場合◆
「（チョコを差し出して照れ笑いして）どう、美味しい？…そんな

に急いで食べなくても。来年もつくってあげるから、ね？」

ギンガ
「ど、どうでしょうか？／／／」

すずか
「ギンガちゃんがすごく大人に見える…」

シグナム
「うーん、なかなかのものだな…」

ノア
「余裕があって破壊力抜群ですねぇ…」

スバル
「お姉ちゃん、すご～い！」

はやて
「…好きって言葉はないのに甘甘モード全開や」

クロス
「なんだか年上の人に言われてる感じが…先輩から後輩へ、かな？」

カガヤ
「流石はギンガ…半端ない…次！」

◆スバル・ナカジマ◆
「（チョコを差し出して緊張して震える声で）…ずっとチョコあげ

てきたけど、今年はちゃんと言うね。
……好き。付き合ってください。」

スバル
「わっはぁ～…私緊張してる～♪」

シャマル
「私と同じセリフだけど…」

ギンガ
「緊張して震えるって所がスバルらしい、ですね…」

ノア
「俯いて顔を真っ赤にしてそうですね」

なのは
「スバルちゃん、可愛いの～♪」

ザフィーラ
「学生時代の青春…だな」

クロス
「…これは逆に後輩から先輩へ向けて、に思えてくるなぁ…勇気振り絞りました、な所がスバルらしい」

カガヤ
「はいはい、次が俺の大本命！…ラストいってみよー！」

◆ティアナ・ランスターの場合◆
「（チョコを差し出して緊張して震える声で）はい、チョコ。…こ

こだと寒いね。…あ、あの
私の家すぐ近くなんだけど。…お部屋、来る？」

カガヤ
「いきます！いきますとも！！」

クロス
「少し黙れ（殴）」

ティアナ
「……／／／／／／」

なのは、ノア、シャマル、はやて、すずか
「「「「「きゃ～♪ティアちゃんがお持ち帰り～♪」」」」」

ティアナ
「……（ボンッ）／／／／」

スバル
「ティ、ティアが顔から煙吹いて倒れた～！？」

ギンガ
「恥かしさでいっぱいになったんだね（汗）」

クロス
「確かに寒い時期だからね…クラスメートを初めて部屋に誘う、風景かな…見てるだけで照れるね」

カガヤ
「おっもちかえりぃ～☆（ V（ V（ ゞ（（、・∀・´）ノ　ヒャッ

ホーィ♪）」

クロス
「だからお前は黙ってろ！！」

・
・
・

カガヤ
「以上で終了！…うん、すごく照れくさいのばっかりだった、一部除き」

ザフィーラ
「それは誰の事だ？」

ヴィータ
「きまってんだろ…私だよ」

シャマル
「ヴィータちゃんのはギャップが良くてかわいらしかったわよ？」

シグナム
「ザフィーラにはフォローなしなのか？（汗）」

ティアナ
「……／／／／」

ギンガ
「ティアはまだフリーズ中（汗）」

スバル

「体中から煙出てるよ！」

フェイト

「刺激、強すぎたみたいだね（汗）」

はやて

「あ、あははは…カガヤにもね（汗）」

なのは

「なんだか自分の名前のみなのにみてるだけなのに緊張したよぉ…」

ノア

「診断メーカー恐るべし、です」

クロス

「俺はもういい…穴があったら入りたいから（汗）」

カガヤ

「たまにこういうのやってみようかな～…次はホワイトデーに…あ、この診断結果は日替わりみたいだから
毎回同じのが出るとは限りませんので…ではでは、リリカルなのは異伝、次回もお楽しみに！！」

一同

「「「「「…これからもよろしくお願いします♪」」」」」

第７６話　「過去への道」（前書き）

月曜より日曜に更新したい今日この頃！（笑）

第７６話　「過去への道」

第７６話　「過去への道」

時空管理局地上本部

コロニア基地陥落から1日後。
あれから組織の本部もすぐにゼスト隊率いる部隊が制圧、各地の基地も同様だ。
ここは地上本部にある、レジアスの部屋。
今この部屋は重々しい空気ではちきれそうになっている。
原因はこの部屋の主である、レジアスを睨む3つの視線だ。

「……何か、言い分はありますか？」
「…ない」

口火を切ったのはクイント、それに答えるレジアスの声は小さい。

「私は最初から反対だったのよ、質量兵器満載のあの基地をクロスとノアだけで落とすだなんて！」
「そうですよ、クロスはああ見えてもまだ9歳なんですよ！　いくら執務官試験だからって！」
「…すまん」

声を荒げるクイントとティーダに、ただただ頭を下げるレジアス。
口をつぐみ黙っていたゼストが徐に眼を開き、話出した。

「俺は…あのレベルの基地ならばクロスとノアで落とせると思っていた。いかに質量兵器があってもだ」
「ゼスト隊長…」
「最年少の執務官資格保有者になるのだ、それくらいの力を見せなければこれから先クロスには
　他の隊員達からの嫉妬や嫌悪の視線にさらされるだろう…俺やレジアスのコネを使ったとな」

クロスの評判は管理局内でも高い。ただし、ゼスト隊やレジアスという強力なバックがいるからだ
そう言いクロスやゼスト達に不信感を募らせる輩もいる。

「だからこそ、クロスとノアだけで…コロニア基地を完全に制圧し、尚且つ本部襲撃の手助けをし
　組織壊滅の陰の功労者になった。という事実が必要だ」
「……」

ゼストの言葉にクイントやティーダは黙る。
しかし、次のゼストの言葉には半ば殺気すらまじっていた。

「だが…これに関しては納得いかないな、レジアス…どこまで知っていた？」

ゼストがモニターに出したのはノアとミラノールが収集した人造魔導師計画『戦闘獣人』についてだ。

「戦闘機人とは違い人と獣、それも各次元世界で伝説級にもなっている魔獣の遺伝子を合わせた
　プロジェクトＡの影響を一番強く受けている計画と言ってもいい…しかもだ」

次に現れたのは、レクイアの映像。

「レクイア・ラムディス…プロジェクトAからの初期メンバーの娘にして…クロスを作り上げた1人
そして、プロジェクトAの唯一の生き残り…こいつがコロニア基地にいると知っていたのか？」
「…不確定情報の中に名前があった…だけだ」
「っ！…レジアス！　あんた、そんな所にクロスを1人で行かせたらどうなるか分かってるでしょ！」

突然クイントがレジアスの襟首を持ち上げた。
慌ててティーダとゼストが止めに入る。

「よせっ、クイント！」
「分かってて…あの子がどうなるかも分かっていて…あなたは！」
「…わ、分かっていた。だが…」

「俺が頼んだんだよ…母さん」
「クロス！」

緊張感漂う部屋に、静かにクロスとノアが入って来た。
オーリスも一緒にいる。

「クロス…体は大丈夫？」
「毒の影響は？」

クイントとティーダが駆け寄る。クロスとノアは戦闘獣人との戦いで受けた毒の精密検査を行っていた。

「平気だよ、後遺症もウイルスの変異もなし、立派な抗体が出来たからこれで新しい治療薬も作れるってさ」
「そんな…そんな実験動物みたいな言い方…医療班の連中は…」
「お、落ち着いて母さん。俺が自分から言った事であの人達だって申し訳なさそうにしてたんだから」

エヴォリューダーの能力の一つに体内に侵入した毒素や病原菌、ウイルスなどを瞬時に抗体を作成し
無効化するというものがある。クロスは戦闘で毒やウイルスに侵されたら即座に管理局の医療班に
自身の体内で作成された抗体を提出している。
それによって全く新しい抗生物質やワクチンの開発を行っているのだ。
もちろん、最初にこの申し出をクロスがした時はレジアスやクイント達は激怒し
医療スタッフも申し出を断った。だが、クロスは笑いながら

「役に立てるのなら、俺はそれを惜しみたくないよ…別に好き好んで毒受ける訳じゃないんだし…
たまたま毒やウイルスにかかったら～♪…の話だよ。誰かを救える可能性が俺の中で生まれるんだ
人殺しとして生まれた俺にとってこんなにうれしい事はないよ」

その言葉に誰も何も言えなくなり、医療スタッフもレジアス直々に説得し、人体実験のようには扱わず
あくまでも提供によるものだと言う事で渋々納得した。
この一件がノアの研究者嫌いが直っていくきっかけの1つになるのだが、それはまた別の話。

「それで、クロス…知っていたと言うのは？」

「うん、最初、基地にあいつがいるのを知った時は…また人造魔導師を生み出してるって知った時は
相当危なくなったけどね、ノアもいたし…それに、もうあんな暴走はしたくないって強く思ったら
大丈夫だった。それで俺から頼んだんだよ…俺とノアだけでケリを付けたいから、母さん達には内緒でと」
「あれは私達が始まりでした、だから私達だけで決着付けなきゃいけないんです…」

そう言うクロスとノアをクイントは目に涙を浮かべ優しく抱きしめた。

「……分かったわ、けど…今回だけよ、次は…絶対に私もいくわ」

そして、ティーダがクロスの頭に手を乗せ

「俺も行くぜ、だから…2人だけで背負おうとするな」
「お前はもっと、俺達を頼れ…あの時もそう言ったはずだぞ?」
「ティーダさん、ゼストさん……ありがとう、ございます」

クロスとノアの眼から涙が零れ落ちた。

しばらくして、落ち着いたクロスとノアから大切な報告があった、

「何っ!?…あいつらの武器の一部が地球製だと!?」
「間違いありません、少なくともコロニア基地に配備されていた機関銃やミサイルはそうでした」
「本部の方には地球製ではなく、他の次元世界からの武器が多種多様にあったな…」

コロニア基地に配備されていた機関銃や散弾銃、ミサイルは実は地球からの密輸品だった。
基地の兵士達を倒して使用していた銃の形状に見覚えがあったクロスはスキャンを行い
地球製の武器であると確信したのだ。
そして、ノアが収集したデータの中から武器の密売ルートを探った結果。
地球の、それも日本から流れた物である事が分かった。

「問題は、その日本の組織がこちらの世界の事を知っているか、だな」
「そうだな…ただのテロリストだと思っていてくれればいいが」

一番の問題はそこだった。
もしも日本の密売組織の取引相手先が別世界の組織だと知っていて尚且つこちらの世界の兵器の情報を売買しているとすれば地球そのものの危機にもなる。

「情報の解析中ですが…恐らくは、ただ複数の組織から購入してその中で質が良ければ…という話かと」

オーリスが逮捕者の尋問で得た情報から推測した。
それならば複数の世界の質量兵器が基地や本部に大量にあってもおかしくはない。

「継続して尋問と調査の継続を頼む…さてと、来たようだな」

レジアスがドアの方へ目を向けると同時にノックが聞こえてきた」

「失礼します、アースラ隊リンディ・ハラオウン以下12名…特命の為、到着しました」
「あぁ、入ってくれ…」

そこへ入って来たのは、リンディ、なのは、フェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、ザフィーラ
シャマル、プレシア、クロノ、アルフ、ユーノ、エイミィにゲンヤだ。
ただし、いつもと違い、なのは、フェイト、はやて、それに守護騎士達は私服ではなく制服を来ている。
プレシアやユーノにアルフも独特の服を来ていた。

「よく、似合っているぞ高町士官候補生、テスタロッサ執務官候補生、八神特別捜査官候補生」
「うん、いつもと違って見えて新鮮だね」
「そ、そうかな?／／」
「良かったわね、フェイト」
「あ、ありがとうございます／／／」
「ふふっ、お世辞でも嬉しいわぁ♪」

レジアスとクロスの言葉に頬を赤くするなのは達。

「シグナム達も似合ってるわよ」
「うぅー…そうかな?」

ヴィータはまんざらではなさそうだが若干制服に戸惑っているようだ。

「まーすぐに慣れるわよ」

クイントの言葉に苦笑するシグナム達。

なのは、フェイト、はやては仮配属期間を終えこの４月から正式に時空管理局員付けになった。

もっとも本局付けなので本来は地上本部に来ることは異例なのだが…それは特命と言う事にしてある。

「クロスそして、ノア…」

「「はい」」

レジアス真面目な顔でクロスとノアに向き合った。

「…おめでとう、今日から2人は執務官と執務官補佐だ。それと同時に2人の階級やランクもあがったぞ。

クロスはＳ＋ランクの准空尉、ノアはＡＡＡ＋ランクの空曹長になったぞ…大出世だな」

「拝命します！…えっ？」

「ありがとうございました！……はい？」

敬礼で応える、クロスとノアがすぐにポカーンと口を開ける。

それと同時にゼストやなのは達が拍手で祝福する。

「ちょ、ちょっと待って下さい！　なんですかそのランクと階級は！」

「いくらなんでも上がりすぎじゃないですか！？」

少し前までクロスはＡＡＡ＋ランクの空曹、ノアはＡＡＡランクの一等空士。

それがわずか1年にもみたず2人とも二階級あがり、ランクも上がってしまった。

本来ＡＡＡランクからＳランクに上がるには試験のみではなく様々な戦績や評価も関わってくる。

「何も不思議がる事じゃないぞ、２人ともそれくらい強くなったんだ」

「そうだな、２人とも俺達とも互角以上に戦えるようになったし」

「私、ノアちゃんにも勝てる気しない…」

「ふっ、２人の力からすれば当然だな…」

「昇級したのに…クロスに追いつかれたわ…」

当の本人は納得していないが、みんなは口々に納得しているようだ。ちなみに上から、ゼスト、ティーダ、なのは、シグナム、クイントの順だ。

「本局の方で盛大な式を行って…と言う話もあったのだが」

「い、いや…それは勘弁して下さい」

「だと思ってな、辞令は本局から出るには出るが…これは儂から渡したくてな」

そう言って、辞令が書かれた書類を取りだし、クロスとノアに手渡した。

地上本部のゼスト隊やレジアスの指示で動く事が多い、クロスとノアだが

２人共今も昔も所属は本局、よって辞令も本局のお偉いさんから渡されたりするのだが…

「…また、無理言ったのね、レジアス中将」

「オーリス、後で飲みに行きましょうね…」

「分かってくれる、クイント、リンディ！！」

後ろの方で女の友情が展開されていた。

「あれ、そう言えば…メガーヌさんは？」

「本当だ、いないね」

「いつもならおるのに、どこにおるんやろ？」

なのはの言葉にフェイトやはやても周りを見渡す、シグナム達も不思議がるが

プレシアはその様子をくすくすと笑って見ていた。

「クロス、クイント…2人ともまだこの子達に言ってないの？」

「あ～！　忘れてた！！」

「って、プレシア…あなたもフェイトちゃんに言ってないんじゃない！」

頭に？を浮かべるフェイトを指さすクイント。

その時、再びドアがノックされ

「失礼します、遅くなりましたが、メガーヌです」

「うん、ちょうどいい所に来たな…入ってくれ」

そうして入って来たメガーヌの姿になのは達は声をあげた。

「こんにちは、メガーヌさん…えっ」

「そ、そのお腹もしかして…」

「あら、皆こんにちは、そうなの…私、赤ちゃん、出来るの」

メガーヌは少し膨らんだお腹を優しく、撫で顔を赤くしながら呟くように言った。

「「「「「えぇ～～～！？」」」」」

目が飛び出るのではないかというくらいになのは達は、シグナムやザフィーラですら目が見開いている。

「えっ、もうお腹に赤ちゃんいるんですか！？」

「もう4カ月になるわね」

「つわりとかは大丈夫なんですか？」

「少し前まではひどかったけど、最近は落ち着いてきたわね…ごめんなさいね、妊娠が分かったのは2月で
それからずっとこっちの病院と家で安静にしていたから…」

「それでしばらく見かけなかったんですね…てっきり任務かと」

「ったく、クロスや姉ちゃんも知ってたなら言ってくれればよかったのに」

ヴィータの言葉にクロスとノアは頬をかいてそっぽを向いている。

「いや、ごめん…ギンガやティア達には教えたからてっきり…」

「リンディさんから話すのかなー…と、ごめんね」

「僕たちも知ったのはつい最近だけどな…」

「うーん、私は気付いてたけど、クロすけは鈍いなぁ♪」

溜息を零すクロノの頭をぽんぽんと叩くエイミィ

「僕とアルフはプレシアさんから教えてもらいましたけど」

「てっきりフェイト達も知ってると思ってたよ」

ユーノにアルフも苦笑いを浮かべている。

「あれ、と言う事は…この子のお父さんは…」

そして、気になるのはメガーヌのお腹の子の父親だが…
とある1人に全員の視線が集中する。

「……／／／／」
「な～に黙ってるんですかおとうさんは～♪」
「がっはっはっ、この甲斐性なしめが、やっと勇気がでおったか！」

ティーダとレジアスに冷やかされて珍しく湯気が出そうなほど真っ赤になっていた。

「さてと…今日私達がここに来たのは大事な用事があります」

和やかムードを引き締めるようにリンディが口を開いた。
全員の顔が一瞬にして強張る…みんななぜ集まったのか知っているからだ。

「メガーヌ、お前は家で休んでいていいのだぞ？」
「そうよ、私達だけで十分なのよ？」
「心配しないで、ゼスト、クイント…私も当事者の1人。この話には加わらないと」

ゼストやクイントが心配そうにメガーヌに言うが、ゆっくりと首を横に振り毅然とした表情になる。

「それじゃあ…俺から言います。今日ここに皆さんを集めたのは俺が言いだした事です」

念の為に何重にも結界を張り、室内の様子が一切外部に漏れないようにする。

レジアスへの緊急の用件は別室のオーリスが受ける事になっている。
本来中将がそれほど時間を取るのは厳しい事だったがそれでも大切な時間なので空けたのだ。

「プロジェクトAの真実と…この俺が生み出された経緯と…ノアとの出会いを…」

そうクロスが言った途端の事だった。
突如、クロスとノアの胸元が眩い光を放ちだした。

「きゃっ!?」
「なっ、なんだ!?」
「クロスくんとノアちゃんの胸元から本が!!」
「あれは…太極の書と光天の書だ!」
「それにこの光は…あの時の!」
「くっ、レギナスと俺が戦ってイリスの映像を見た時と一緒のひか…」

クロスとノアの胸元から現れた太極の書、光天の書。
2冊の魔導書から溢れた光が全員を包み込み、意識を刈り取った。

「…っ…こ、ここは…ノア、母さん、なのは…みんな!」
「マスター?」
「ここにおるで…」
「なんだこの空間は…真っ黒じゃないか」
「と、父さん?」
「オーリス!?…お前は別室にいたはずじゃ!」
「分からないわ…いきなり意識が飛んで、気が付いたらここにいたのよ」
「これは、魔法?」

クロス、ノア、なのは…あの部屋にいた全員とオーリスまでもが真っ暗な空間に浮かんでいた。
やがて、光が満ちて眩しさに目を瞑り、次に目を開けた時には全員が真っ黒な森の上にいた。

「あ、あれ、富士山!?」
「と言う事は…ここは日本?」
「なんでこんな所に…あれみて!」

はやてが指さした先には森の中に隠れるようにひっそりとたたずむ小屋が見えた。
クロスやゼスト達の顔色が変わった…特にクロスとノアの顔色は悪い。

「大丈夫か、クロス?」
「姉さんも顔が真っ青よ、どうしたの?」

アルフとシャマルの声も聞こえていないのか2人は口を震わせ、ようやく言葉を紡いだ。

「ま、間違いない…ここは……富士の樹海…」
「あれは…エタンダール研究所…」
「えっ、えたんだーる?」
「ここは…過去の、10年前の日本、エタンダール研究所…俺が生まれた場所だ…」
「全ての始まりの…場所」

クロスとノアの呟きに全員が驚いた。
ここは10年ほど前の日本富士の樹海、そして見える建物の名は『

エタンダール研究所』
太極の書が封印されていた場所に、研究者達がプロジェクトAの為に立てた地下秘密研究所。
その入り口だった。

「太極と光天の書が俺達の過去へと導いたんだ…」
「私達が全てを話す気になったから…」

そして、クロスとノアは全員にふり返った。

「俺が話すよりも直接見てもらった方が、いいって思ったのを太極の書が導いたみたいです」
「じゃあ、ここは本当に過去の？」
「前にレギナスの槍が我らにイリスの存在を思い出させようとしたのと同じく…か」
「…それじゃあ、聞いて、見て下さい…俺達の過去を」

無表情で語るクロスの言葉と同時に、全員が研究所内へと吸い込まれるように入っていった。

続く

第７６話　「過去への道」（後書き）

カガヤ
「はい、ついに次回から過去編スタート！」

クロス
「こう言う手で行くんだな」

カガヤ
「うーん、クロスやノアに話してもらうよりも実際に何があったか見てもらった方がいいでしょ？」

ノア
「過去の映像を見せるのは以前やりましたからね…」

カガヤ
「というわけで次回からはとある研究者の一人称と三人称が中心になる過去編スタートです！」

第７７話　「過去編？　クラリス・フォロンの日記？」（前書き）

過去編その１…始まります。

第77話　「過去編？　クラリス・フォロンの日記？」

富士樹海　エタンダール研究所

〇月〇日

私、クラリス・フォロンがこの日記を書き始めてもう数年になる。
研究記録は書いているのにさらに日記まで書く理由は自分でも忘れてしまった。
生まれては実験によって消えて行くあの子達を忘れない為の罪悪感からか
または、自分の罪を忘れない為の懺悔か…いや、その両方だろうな。

今日もまた新たな実験体が生み出され、測定され…用無しと判断されて処分された。
私達が研究しているものは3つに分かれている。
1つ、戦闘用遺伝子改造進化型人造魔導師、エヴォリューダー。
1つ、アルハザードの遺産、太極の書。
1つ、アルハザードで使用されていた、古代魔法。
これら3つを合わせて『プロジェクトA（アルハザード）』と読んでいる。

始まりは十数年前、ここ管理外世界地球の富士の樹海にて、管理局の眼を逃れて自由に研究をする為に
組織『ＤＥＬＶＥＲ』が適地を探していた時に偶然発見された魔導書『太極の書』だ。
厳重に封印されていて書の開封は行えなかったが、書の表紙に書かれていた文字を解読し
解除に必要な情報を無限書庫のデータベースから引き出した結果、
特別な魔力しか解除できないらしい。

先代のの研究者達はその特別な魔力を『魔光力』と名付けた、安直な名前だ。
そして、組織がここに地下研究所『エタンダール』を作り、太極の書の解析が始まった。
この世界に魔法は認知されていない、潜在魔力の高い人間はいるようだがそれだけだ。
管理局も特にこの世界に目を向けてはいないし、隠匿は簡単だった。
その後、組織が別の研究所で行っていた研究もこのエタンダール研究所に移した。
なぜなら、太極の書を封印していた力が魔光力と分かり、普通の人間には扱えないと言う事が分かったからだ。
なので、魔光力を扱える人間を生み出す為に、組織が進めていた人造魔導師計画に組み込む事にした。
その名は『エヴォリューダー』人間が普段使用していない脳の７０%や肉体のリミッターを意図的に解除し
未知の戦闘力や特殊能力を開花させる進化した人類の事。
もちろん、ただリミッターを解除すればすぐに肉体や脳がもたなくなる。
ならリミッターが解除されると同時に魔力が肉体や脳の崩壊を防ぐ役割を果たせばいい。
普通の肉体強化と違い緻密な魔力制御が必要になる為、訓練で身に付けるのは難しい。
そこで研究者達はリミッターが解除される度に肉体がそれに順応し、魔力なしでもエヴォリューダーの力が
使いこなせるような成長型遺伝子を組み込ませる事にした。
この遺伝子は身体にかかる負担を覚え、それに対抗する為に身体の内部を細かく変化させるという特徴がある。
これにより、エヴォリューダーの負荷に関わる問題は解決できた。
更にうれしい誤算がある、エヴォリューダーの試作型で様々な実験を行った時に

強敵と戦えば戦う程学習し即座に対処法を見つけ出すと言う能力が備わる事が分かった。
普段使用していない脳の７０％を使用する事で予知能力などの超能力に目覚める可能性は分かってはいたがまさに、『進化する者』と言う名にふさわしい能力と言える、ただし…デメリットもある。
それは本能の解放とも言うべきもの…エヴォリューダーの力を使えば使う程に
破壊衝動に目覚め、暴走する危険が増すと言うものだった。
これを知った一部の研究者は戦闘兵器としては申し分ない。と言っていたが、私には賛同しかねる。
とは言え、これも研究を進めれば十分に抑止出来るだろう。
そして、エヴォリューダーにはいくつか安全装置がある。
１つにクローン防止の為の遺伝子プロテクトだ。
クローン技術もプロジェクトＡの副産物として進歩を遂げているが、肝心のエヴォリューダーのコピーが出回っては希少価値がなくなる、と言う事で組み込まれた特殊な遺伝子のおかげでエヴォリューダーとして生み出された存在は一切クローンが作れなくなった。
最も、生殖機能にも弊害が出る可能性があったが…この子達が子供を作る事はないだろうからあまり意味はないな。
もう１つの安全装置は『制御認証スペル』
これは特定の魔力を持った相手からの命令には絶対に即座に服従するというもの。
言わば首輪だ。エヴォリューダー独自の遺伝子パターンに反応するように出来た魔法のようなもの。
これさえあれば、どれだけ暴走しても即座に抑える事が出来る、これは私の成果だ。

遺伝子研究者でもあり魔導師でもある私がこのスペルを完成させた事がここでの地位に関係している。
私はただ…暴走する子供達が強制排除される様を見ていられなくなったから作った…のだと思いたい。
・
・
・
○月×日

今日もまた実験は失敗した、これで何人目だっただろう。
数年前からエヴォリューダーの作成基盤が大きく変わった。
それまでは有能な魔導師のコピーにエヴォリューダーの遺伝子を組み込むという手法を使った。
だが、これでは元の魔導師以上の存在は生み出せず、魔光力の発生も確認できなかった。
他の魔導生物の遺伝子を組み込むという手法をレクイア博士が提案したが
これは制御の問題で廃案になった。
更に、機械との融合で強い戦闘力を発揮させる案も出て、実用化のメドも立っていたがこれは
他の研究所に回される事になった。尋常ではない戦闘力と魔力とは違う力を発揮する事が分かったが
肝心の魔光力の発動には至らなかった為、よそに回されたのだ。
ならばいっそ人工子宮にも頼らず、遺伝子コピーでもない全くの無から作りだせばという結論になった。
言葉にすれば簡単だが実際はほぼ不可能な事、どんな生物でも無からは生み出せない。
だが、もし無から生み出せたら…真っ白な状態で生み出せたら、そこには遺伝的な束縛はなく
拒絶反応もなく遺伝子を自由に組み合わせる事が可能になる。

しかし、無と言っても基盤になる遺伝データは必要だ。
これは太極の書に残されていた遺伝データを元にしている。
この遺伝データを使って、魔光力を持つ人間を生み出せ、というものだろう。
時間はかかったが他の研究所からのデータをも使いついにその技術は完成した。
レクイア博士と2人で完成させた新技術だ。
あの時の興奮は今でも忘れられない。

しかし、そこからがまた難しかった。
感情のない人形のようなものばかりが生み出されたからだ。
感情は必要ないと一部の者は言っていたが、それは違う。
感情によって大きな力を発揮する事がある、だから戦闘兵器には感情が必要だ。

×月×日

これで作った人数は１０００人以上になる。
大概は新たに作りだされた実験体の相手をさせられて死亡するか、生まれてすぐに死亡する。
かろうじて生き残った個体も実験データ採取の為に無理やり生かされている状態だ。
エヴォリューダーについて新たに1つの副産物を得る事が出来た。
それは、精神年齢や肉体年齢の成長速度の速さだ。
ある日、魔光力は発動しなかったが、健康状態も理想に近い個体が生まれた。
その個体は生後1年で3歳児並の知能と身体能力を発揮した。
そして、2歳で5歳、3歳で１０歳程になった…だが、それで終わり。

成長と言う名の老化が始まり、５歳にもならずに老衰で死んだ。
精神や肉体年齢の成長速度が速いのは良いが速すぎてもダメだ。
あの個体からだエヴォリューダー完成体のコンセプトに成長速度の安定が加わったのは…
早く成長し、尚且つ青年期を長く保つ事も戦闘兵器としては必要な事だとか…
自然に生み出される存在ではないものに寿命も何も関係ないとは思うが。

・
・
・

□月◎日

「今日で作成した実験体は１５８２人になった…もうすぐ１５８３人目が生まれる…」

そこまで日誌を書いた私はコンソールから指を離し、コーヒーを手に取った。
趣味で始めた日記もここまで来ると研究日誌と変わらなくなるな、と苦笑いを浮かべながら。

『博士、もうすぐ完成します…至急お戻りください』

はいはい、今行きますよ～っと…
通信モニターに生返事をして自室を出る。
一応最高責任者にされてしまったので誕生には立ち会わなければならないらしい…面倒だ。

「やっほ～…来たわよ～」
「あらクラリス、随分とのんびりね」

研究室に入ると同僚のレクイアに声をかけられた。
ここの研究所の初代所長の一人娘であるレクイア・ラムディス。
私と同期で優秀だが、性格に難あり、嫉妬もされている。
最高責任者の座が欲しかったらしいが…自分の性格見直してから夢見てほしいものだ。

「何か…よからぬ事考えなかった？」
「べっつにぃ～」

そうして適当にあしらい、お目当ての巨大シリンダーの前に行く。
最終工程に入ったシリンダーは強化シールドで保護されていて中は分からない。
興味ない態度でここに来たが、実は私自身今回の個体には自信があった、確証はないが。

「…全行程完了、シールドを解除します」
「……さてはて、何が出ますやら」

シールドがゆっくりと引き上がり、私は生まれたばかりの赤ん坊『Ｎｏ．Ａ－０１５８３』とご対面。
流石に５００人以上もこういう場面に立ちあっていれば感動も何もない…が
何か今回は違った、胸騒ぎが、動悸が激しくなった。

「……」

赤ん坊がゆっくりと目を開ける…その瞳は、紅かった。
と、同時に『ブーブーッ』と警報ブザーが激しく鳴り響いた。

「…なんだ一体何事だ!?」
「そ、それが…特級保管室の……太極の書が！」
「っ!?」

緊迫した所員からの通信モニターを見た私とレクイア達は目を疑った。
何重にも渡り結界を張られ、厳重に保管された太極の書が眩い光を放っていた。
結界は内側から簡単に破られ、太極の書は…消えた。

「えっ…い、いつの間に!?」

かと思えば、私達のすぐ後ろ、正確には生まれたばかりの１５８３号の前に書は現れた。

「きゃっきゃっ♪」

１５８３号は書に手を伸ばし、はしゃいでいる。
まるで、母親にでも抱かれているかのような笑顔だ。

「は、博士…」
「しっ、黙って。何もしたらダメよ…ついに、私達は…作りだしたのよ」
「クラリス、まさかこの子が…」

私の胸騒ぎは良い方向で当たったようだ。

「この子、Ａ－０１５８３はエヴォリューダーの成功体にして、太極の書の主に選ばれたのよ!」

シリンダー脇のモニターにはこれまで観測した事のない魔力を検知していた。
そして、太極の書のこの反応…間違いない、これが『魔光力』！
その時、何か小さな人影が現れ１５８３号に微笑みかけた気がしたが…気のせいだろうか？

――――――――――――――――――――――――――――――――

「…これがクロス君の誕生…」
「あの人がクロスの生みの親…」
「……」

――――――――――――――――――――――――――――――――

なのはにフェイトが驚きの声をあげる、はやては何も言葉に出せないようだ。
他の皆も同様で、クロスやノアは険しい表情でじっと自らの誕生を見つめている。

「これは太極と光天の書が見せている映像で触る事も何もできませんけど…」
「出来る事なら…止めたい光景だな…」

ノアとクロスが辛そうに呟く。

「エヴォリューダーの完成までに１５００人以上も作りだされていたなんて…」

オーリスの呟きに全員が更に表情を暗くする。

「クラリス博士が日記に書きとめていた事、実はいくつか誤りがあ

ります」
「それは博士が間違った情報を与えられていたから…それは仕方がない事だったんですけどね」

クロスとノアが語る、その表情からは悲しみと憂いしかない。
クイントが2人に手を伸ばそうとしたその時、またも全員を光が包み込んだ。

どうやら、クロス誕生の瞬間から少し月日が流れるようだ。

続く

第77話　「過去編？　クラリス・フォロンの日記？」（後書き）

カガヤ
「はい、過去編です、日記形式なので会話文やらが少ないですが…
エヴォリューダーについての確定情報をいくつか紹介しました」

クロス
「これでもまだ全部じゃないけどな…」

ノア
「クラリス博士が知る『全て』ではありますけどね…」

カガヤ
「次回は少しだけ時間が進みます。今だに名前がない2人と博士の
触れ合いの日々と少しずつ動く闇…」

第７８話　「過去編？　クラリス・フォロンの日記？」（前書き）

過去編２回目、ちょっと短い…かな？

第７８話　「過去編？　クラリス・フォロンの日記？」

富士樹海　エタンダール研究所

■月〇日

Ａ－１５８３号が生まれて2年程が経過した、あれから研究所全体が慌ただしい日々を送っている。
太極の書はあの後すぐにまた元の封印状態になり、1年ほどして代わりに1人の小さな少女と共に現れた。
全長は１５センチほどしかないが、言葉をしっかりと話し自分をユニゾンデバイスと名乗った。
ユニゾンデバイス、古代ベルカで開発されたデバイスのはずだが、アルハザードでは既に存在していたのか。
当初は私達に全く口を聞かずにただただ１５８３号を見守っているだけだった少女だが
１５８３が2歳になり、身体が成長し言葉も話すようになるとますます必死に話しかけるようになった。
話しかける内容は日常会話的なもので特に記録する事はないが…日常会話こそ重要だと思う。
１５８３の方はと言うと、成長速度も早く言葉もすぐに饒舌になり、色々な本を読んで知識を蓄えている。
私が趣味で集めていた地球の神話に関する本が特に好みのようで真剣に読んでいる。
そんなある日、ユニゾンデバイスの少女は自分の名前を『ノア』と名乗った。
実は、太極の書は１５８３の手で再度封印解除されて、少女もその時に名前をもらったとの事。
これには驚いた、太極の書がまた封印状態に戻ったのは１５８３が

まだ幼すぎて早すぎたからだと思っていた。
しかし、１５８３が自分で歩けるようになってすぐに太極の書の封印を自分で解除して
その時に少女に名前を付ける事で契約を行っていたとは…
太極の書はある一室に監視カメラや警備員で厳重に２４時間監視体制だったのだが
ある日、急に監視カメラが作動しなくなり、警備員も気付かないうちに太極の書が消えていたのだ。
慌てた私達だったが、１５８３のいる部屋から話し声が聞こえ、見ると１５８３の前に太極の書があり
小さな少女が１５８３に色々話しかけていたのだ。
私はなぜその時に教えてくれなかったのか、なぜ今頃自分の名前を明かすのかと尋ねた。

「ここの人達は…好きになれません。けどあなたなら…話しても大丈夫だ、とマスターが言いました」

１５８３にそのように思われている事に少し感動を覚えた。
この事は私達の秘密にし、ノアと言う名前も私が付けた事にした。
でなければレクイア辺りがうるさくなりそうだったからだ
それにしても…ノア。ノアの箱舟から取ったと思われるが…まさか、方舟のように
自分をここから連れ出してほしいというサイン……いや、考えすぎ、と思っておこう。
１５８３が地球の神話に興味を持ったのはノアが現れる後の事なのだから。

・
・
・

■月◎日

今日で１５８３が生まれてちょうど2年になるが、１５８３は未だに表情を表に出す事はない。
生まれて過ぐに太極の書に触れた時に出した歓喜の表情、あれが最後だ。
最初の数年は経過観察のみに留める事にしていたので特に実験は行っていなかったが
そろそろ様々な実験に取りかかる頃だ。世話役として見ていた少女、ノアも実験対象になる。
だが…ノアは実験を拒み、無理やり実験に連れ出そうとすると全身から冷気を出し威嚇してくる。
それでもなお強引にしようとすると、１５８３が邪魔をするように研究員とノアの間に立った。
相変わらずの無表情だが、何か瞳の中に怒りと拒絶の意思を僅かに感じた。

「俺がノアの代わりになる…だからいいだろ」

まるで機械のように話した言葉に、私達は衝撃を覚えた。
それ以降もノアを密かに連れ出そうとしたり、検査と称して実験薬を注射しようとする度に
１５８３がそれを阻み、攻撃まで仕掛けてくるようになった。
レクイアはそれでも制御認証スペルを使い強引に行こうとしたが私が止めた。
また安定していない中で強引なスペル行使は負荷だけを与えるだけで何もならないと思ったからだ。
……本当にそうなのだろうか？　私がスペル行使を止めたのは…

・　・　・

□月▽日

１５８３はいつの間にかショートソード並の剣を生み出せるようになっていた。
頭の中に剣が浮かんで力を籠めたら出せるようになった。と本人が言っていたが
太極の書のデバイスなのだろうか？
それを見たノアは珍しく解説をしてくれた。ノアは過去の記憶をほとんど失っていたらしく
太極の書や自分自身の事もあまり覚えていなかったのだ。
ノアが言うにはアルハザードでは『魔導師』や『騎士』という職業（クラス）が多数存在していたらしく
太極の書にはクラスの力が宿っていて、マスターとなった者はその中から３つのクラスになれるらしい。
しかし、最初から全てを使える訳ではなく最初は初級クラスである『剣士（ファイター）』から始まり
徐々に３つの上位クラスの力が使えるようになるらしい。
どちらにせよ、エヴォリューダーの力と古代アルハザードの力を使う１５８３は強力な存在になるだろう。
そう、それが私達の研究の成果なのだ…

・
・
・

■月◎日

１５８３の魔導師としての適性や強さを測る実験を初めて数週間が経った…

エタンダール研究所　実験闘技場

「…ユニゾンイン！」

ノアが１５８３にユニゾンし、１５８３の髪が赤く逆立ち、瞳が赤橙色に変わった。
魔光力の籠めた左手で右手の剣を撫であげ、刀身を強化する。

対するはＢ～Ａランク級の魔導師数人ほど、元はプロジェクトＡの失敗作として実験体の扱いを受けている
言わば１５８３の兄・姉と呼べる者達だ。
研究結果が下手に漏れないようにする為に失敗作は全て研究所内で処分している。
これも再利用の一環、１５８３の完成度を測るにはうってつけの相手…と割り切るしかない。

「……」
「……」

無表情な者達の戦いが始まる、先に動いたのは…１５８３。
すぐに実験体が杖を構え、魔力弾を連射した。誘導性はないがその分弾速がかなり速い。
１５８３は避ける仕草も見せずに剣を顔面に構え、魔力弾の雨の中に突撃する。
直撃する、そう思った時には剣によってすべて弾は弾き飛ばされていた。
攻撃を防がれたのに動揺一つ見せずに剣や槍を構えた実験体が突撃する。
あっという間に１５８３の背後に回り込み、後頭部へ武器を振り降ろす。
それを振り返りもせずに１５８３頭を少し下げただけで交わした、
そしてバックステップで

一瞬にして2人の実験体の背後へと更に周り込み、回し蹴りで蹴り飛ばした。
さらに空中で姿勢を整え、剣を構えた実験体の懐に接近し、魔光力を籠めた拳を叩きこむ。
次に先程から魔力弾を放っている実験体に向けて剣を投げた。
身体を少しずらしただけで難なく剣を交わしたが、その間に１５８３は実験体の頭上に飛び
重力と自身の重さを踵に乗せ、両足で踵落としを放ち、実験体の両肩を砕いた。

「無駄がまだあるけど、それでも効率的な攻撃ね」
「……そうね」

レクイアやその他の研究員は満足そうに眺めているが、私の気持ちは晴れない。
確かに１５８３はわずか3歳でＡランク魔導師を手玉に取っている。
エヴォリューダー特有の気配察知などの能力を使いながら、適切に潰して回ってる。
それが尚更、気に入らなかった。兄や姉と言える実験体に容赦せずに一撃一撃を撃ちこんでいる。

「終わったわね」

レクイアの言う通り、最後の一体の顎に１５８３がアッパーを決めて倒した所だ。
だが…1つ気になった。この実験を始めるにあたり、１５８３に出された指示は

『向かってくる敵を排除し、殺せ』

だ。なのに…実験体は全員重傷こそ負っていても、死んだものはいない。

『A－1583号、全員殺せと言う指示よ？　どうしたの？　身体の不調？』

レクイアの質問に耳も傾けず1583は実験場から出てこちらに向かってきた。

「彼らを治療すれば、まだ戦える…その方が効率的だ」

「……分かったわ、確かにこれ以上実験体を浪費するわけにはいかないものね」

「治療班！」

効率的、確かにそうだが…何か、別の理由があるように思えた、そう…何か別の…

その時、2つの視線が1583の背中に突き刺さっているのに気付いた。

まるで失敗作のように1583とノアを忌々しげに見る2つの視線。

1人は…レクイアだ、彼女からすれば気にくわないのだろう。

そして、もう1人はエタンダール研究所所長、ロクモ・オルタイン。

2人はいつまでも自室に戻る1583とノアの背中を睨んでいた。

「この2人を殺しておけば……」

「マスター」

クロスが忌まわしげにロクモとレクイアに殴りかかる、が過去の映

像なのですり抜けるだけだ。

「…クロス、過去は…どんなに目を背けても過去だ」

拳を震わせるクロスの肩にゼストが優しく、力強く手を置く。

「…はい」

「それにしてもクロス君、この頃はまだ名前なかったんやな…」

「あっ！」

「…名前」

はやてが呟いた言葉になのはやフェイト達が反応した。

「私がノアと言う名前もらった時に逆にマスターに名前を付けたいと言ったんですけど…」

「あの時は、１５８３というのが名前だっていう事にあまり抵抗感なかったから」

とクロスは苦笑する。

「…ちょうどいいので、私の事も今話しますね…」

意を決したようにノアが自分とクロスとの始まりについて静かに語りだした。

それに合わせるかのように辺りを景色が包み、また風景が変わりだした。

続く

第７８話　「過去編？　クラリス・フォロンの日記？」（後書き）

カガヤ
「…昔から強かったんだな、クロス」

クロス
「あんまり思い出したくない事だから…」

ノア
「次回は私の独白ですね…」

カガヤ
「はい、今回はここまで！…早く過去編終わらせたい！」

第７９話　「過去編？　ノアの独白」（前書き）

久々に更新です！
今回はシリアスよりもほのぼのさを出そうとしましたがどうでしょう？

第７９話　「過去編？　ノアの独白」

最初に見たのは私に笑いかけてくる赤ちゃんの笑顔でした。
自分の使命とか封印が解けたのかとか、そんな事はどうでもよくてただただこの子が私のマスターなんだと思うと、すごく安心出来たんです。

『はじめまして…マイマスター』

そして、また眠りに付きました。まだ完全に目が覚めるには早いと思ったから
次に目が覚めた時は…もっと、お話出来るといいな。と夢見ながら。

次に意識が目覚めると声が、聞こえました。私を呼ぶ声が…自然と私も呼び返していました。

『…どこにいるの？』
『私は、ここに…いますよ…』

私はマスターと離れた場所にいる事に気付きました。
周りにはいくつもの結界やバリアが張られたとある一室。
そして、防護服に身を包んだ人達が私に向けて色々な装置を付けていました。
いえ、正確には私が眠る『太極の書』にでしたが、書で眠る私には気付いていないようでした。

「こいつが１５８３に反応して、もう1年か…あれからの進展はないな」

「だが、１５８３がマスターとして選ばれたのは間違いない」
「そうだな、あれから書自体にも魔力とは違う力が微弱ながら観測されるようになったしな」
「クラリス博士が言うには、１５８３が成長するまでの待機状態だろうと言う事だが」
「確かに、いくらエヴォリューダーの成功体とは言え、まだ１歳だからな」
「それまでに少しでも待機状態のデータを集めるんだとさ」

周りの人達の話し声から私はマスターと出会って１年が経っている事がわかりました。
そして、この人達が何をしようとしているのかも。
次々に新しい機械が書に繋がるのが感覚で分かりました。

『やめて、気持ち悪いです…やめてください！』

私は必死に叫びました、でも私の声は外には聞こえていないようで実験は続きました。
体中を見られて、電撃や何か得体のしれないものが流れる感覚…今でも忘れられません。

『だ、誰か…たすけて下さい……マスター…』

自然に私はマスターの名を呼びました。
届くかどうかも分からないのに、届いたとしてもわずか１歳では何も出来ないでしょう…
それでも私は、呼ばずには居られませんでした。
私には封印される前の記憶が全くありませんでした。
家族と呼べる人がいた、のだけは覚えていますが、それ以外が全くダメでした。

なので私が頼れるのが…私はマスター以外は知らなかったんです。
だから、マスターしか、助けを求める事が出来なかったんです。

『でも…来てくれるわけが…』

その時、厳重にロックされたはずのドアが、吹き飛ばされました。

「だ、誰だ！…お前は１５８３号！？　なんの用だ！？」
「そのこから、はなれて」

この子があの赤ん坊だったマスターですか！？
１歳のはずなのに見た目は４、５歳と言われても違和感がありません。
ですが、まるで仮面を被っているかのような無表情なのが、なぜか悲しくて…

「その子？　お前は何を言ってるんだ？　いいから、自分の部屋に戻れ」

そう言って、研究員の１人がまた別の装置を私に付けようとしましたが…

「……はなれろ」
「っ！？　ぐあっ！？」

マスターの眼が紅く輝いたかと思うと研究員が装置ごと壁に叩きつけられました。

「な、何をするんだ！」
「警備の者は…全員伸びているだと！？」

壊れたドアの外では2人の人間が倒れているのが見えました。
そして、マスターはゆっくりと私に近付いてきました、誰もマスターを止めようとはしません。

「…こえ、きこえた…だから」

そう言って、マスターが伸ばした手は書の中に吸い込まれるように入っていき

「むかえに、きたよ」

書の中にいる私を優しく抱きしめ、外へと導いてくれました。
その時の笑顔は1年前と変わらずに優しくて暖かくて…私は救われたんだと実感出来ました。

・
・
・

その後、私はマスターの生みの親だという研究者のクラリス博士と出会いました。
あの時、マスターが来た時には監視カメラが全て破壊されており、クラリス博士達外部の人には
何が起きたのかは分からなかったみたいで、私も最初は警戒しました。
ですが、マスターがこの人は他の人よりも大丈夫だから。と言ってくれたので
自分の事を少しずつ話すようにしました。
マスターは私以外には全くの無表情であまり言葉も話しませんでしたので
私が代わるに話す事が多かったですね。

「では、マスターこの太極の書に手を翳して下さい」
「…こう？」

あれから1日が経ち、私はマスターと正式な契約を結ぶ事にしました。
今までは仮契約と言う事で念話が出来る程度でしたが、これでもっとマスターの力になれます。
契約と言っても特別な儀式や呪文を使うのではなく、マスターと太極の書を直接つなぎ
マスターのリンカーコア内部に書を取りこむ、という作業です。

「マスター、太極の書と契約すると『クラス』というマスターにあったアルハザードの力が
手に入ります。何のクラスが手に入るかはイメージとして浮かびます…いいですか？」

マスターは静かに目を閉じ、書に手を伸ばすと光がマスターを包み込みました。

『2人共、大丈夫？』
「大丈夫ですよ、クラリスさん」

部屋の外ではクラリスさん1人が私達の様子を見守っています。
他の研究員達は全員退避させられました。
一応記録は取るそうですが、カメラなどで録画するわけではなく、
クラリスさんが記録するそうです。
クラリスさん以外にはあまり見られたくないのでマスターと私がお願いすると
クラリスさんは笑顔で了承してくれました。

やはりあの人は他の人とは違うみたいでした。

「うん……あ、なにか、あたまにうかんでくるよ」
「それがマスターに適したクラス…力なんです…何が浮かんでいますか？」
「…つるぎ、そしてなまえが…ふぁいたー……」

どうやらマスターには武器は剣、クラスは剣士（ファイター）が適合しているようでした。
マスターが眼を閉じたまま手を伸ばすと、手から光が伸び段々と剣の形に変わりました。
そして、マスターの手には少し短い剣が現れました。

「マスター、出来ました！　それがマスターのデバイスです！…マスター？」

見ると剣を握りしめ、マスターは目を閉じたままです。

「まだ…なにか、みえるよ。３つ…ながいつるぎに、じゅうに、こぶしがみえるよ…」

どうやらマスターは剣士の先にある３つのクラスを感じ取っているようでした。

「マスター、それはまだマスターには早すぎる力ですね」

契約した時に気付きましたが、太極の書と私にはいくつか封印がされていました。
太極の書には５つ、私には４つ…ですが、それは誤りでした。
私にではなく正確には私のデバイス『光天の書』に封印がされてい

たのです。
ですが、光天の書は私とマスター以外には存在が気付かれていないらしく
もしもの時の為に私達は光天の書の事は誰にも言わずに2人だけのひみつにしました。
話を戻しますが、太極の書に施された封印のうち最初の1つはマスターが解除していて
光天の書も私が目覚める時に1つ解除されていました。
だから私はマスターの脳裏に浮かんだ、3つの光…剣、銃、拳は、いずれ封印が解除された時に
マスターが新しく見つける力だと思いました。

「それでは、その剣に名前を付けましょうか、マスター」
「ううん…これはあと、さきになまえをつけるのは…きみ」
「えっ、わ、私ですか!?」

そう言えば私には名前はありませんでした…
確か名前はマスターとなる人に付けてもらいなさい、と誰かに言われた記憶がありました。

「わ、わかりました…マスター…おねがいします!」

恥ずかしくて照れくさく感じましたが、私はマスターに名前を付けてもらう事にしました。

『…ノア』
「えっ?　マ、マスター?」
『ノア、それがきみのなまえ…なぜかあたまにうかんだ』
『マスター…なんで念話、なんですか?』
『きみのなまえ…まだ、ないしょにしたいから』

『…はい、わかりました。私の名前はノアですね。これからもよろしくお願いします、マスター』
『うん、よろしく…ノア』

私の名を念話で呼ぶマスターが、微かにほほ笑んだ気がしました。
どうもマスターはクラリスさんにですら秘密にしたい事がいくつかあるみたいでした。
剣を生み出せた事もクラリスさんからは見えないようにこっそりと出していましたし。
理由はわかりませんでしたが…そのうち話すと言いました。
そして、剣の名前はいいのが浮かばないから考える、ともマスターは言いました。

「いずれ、その剣と書の管制デバイスも作らないといけませんね」

私はそう呟きましたが、それは先の話になるだろうと思いました。
書の封印を解いて、武器となる剣を具現化させる事が出来ただけでもすごい事でした。
しかも、それをまだ1歳のマスターがです。
なので私は書を使いこなす為の下準備は焦らずゆっくりとすればいい…そう思ったのです。

ですが…そう思っていたのは私とクラリスさんだけでした。

・
・
・

正式な契約をして1年が経った頃、私達の環境に大きな変化が起きました。
1つは私の名前をクラリスさんに教えた事です。
ほんの些細な事かもしれませんが、クラリスさんは涙を浮かべて喜

んだのが印象的でした。

もう1つは、今までは観察だけだった、私やマスターを何かと実験にかけるようになってきた事。
私は封印されていた時にされた事が脳裏にこびりついていたので必死に抵抗しました。
クラリスさんも必死に反対していましたが、研究員達は強引に私を実験室に連れ出そうとしていました。

「やめて…下さい…もう、実験はいや、です！！」
「済まないが、これは決定事…ぐはっ！…な、何をする１５８３！」

その時、私を掴んで連れて行こうとした研究員の1人をマスターが殴り飛ばしました。
そして、そのまま私を護るように前に立ち研究員達を睨みつけていました。

「俺がノアの代わりになる…だからいいだろ」

いつもは私以外には無表情で機械的な喋りになるマスターですがその時は更に機械的でそれでいて冷たさを感じる喋り方でした。
ですが、その声に言葉に…私は安心感を覚えたんです。

それから私には実験が行われる事はありませんでした。
マスターが実験中に私をこっそり連れ出そうとした研究員がいましたが、マスターはすぐに気付き
その研究員を半殺しにした事がありました…流石にあの時は必死に止めましたよ。

そして、もう1つはマスターが剣に名前を付けた事です。

マスターと私はよくクラリスさんの部屋で色々な本を読ませてもらいました。
きっかけは以前部屋に連れられた時に、マスターが何気なく本棚の本を手にした事でした。

「まだあなたには早いわよ、１５８３？」
「いい、読めるから…借りていい？」
「え、えぇ良いわよ？」

その時のクラリスさんは目を丸くして驚いてました。
クラリスさんは地球の神話に興味があるらしく、沢山の本が置いてありました。
スターが最初に読んだ本が『アーサー王の伝説』でした。
国の為に軍を率いてあらゆる敵と戦った騎士達の王、アーサー王。
そのシンボルとなった剣が『エクスカリバー』…マスターは自分の剣にその名前を付けました。

「俺も…この人みたく、誰かを殺す事より、誰かを守れるようになりたいから」

その言葉にクラリスさんは今まで一番の衝撃を受けたようでした。

「あなたは…戦闘用人造人間エヴォリューダーとして生まれたのよ？…そのあなたが、誰かを守りたい
唯一の成功体であるはずのあなたが殺しを否定するなんて…」
「…それでも俺は…殺しは嫌い」

エヴォリューダーの事はクラリスさんから聞いていました。
戦う為だけの存在、破壊衝動の塊…ですが、マスターからはそんな感じは一切感じませんでした。

ですが、私は納得していたんです。戦いや殺戮を好むような人なら太極の書の主にはなれませんから。

そして、実験は続き、戦闘実験も始まりました。
マスターと同じく人工的に生み出された戦闘人間との実戦形式の戦闘。
相手を殺すまでは決して終わらない…はずが、マスターは一度も相手を殺しませんでした。
クラリスさんの口添えで周りが、深くそれについてどうこう言う事はありませんでしたが
私は思い切ってマスターに聞いてみました。
どうして、研究員達の命令を無視してまで殺さないのかを、返って来た答えは…

「俺の兄さんや姉さんだから…尚更、殺したくない」

その言葉を聞いて、マスターは心底優しい人間だと思いました。
例え戦う為に生み出された存在だとしても…マスターは心に優しさを秘めていると…

そんなある日、マスターがクラリスさんの定期検査を受けている時でした。

「１５８３…今日はあなたの感受性を測りたいの…これを見て、どう思う？」

そう言ってクラリスさんがマスターに見せたのは一輪の植木鉢に咲く花でした。

「花……綺麗？」
「うん、そうね。それじゃあ、この写真をみてちょうだい」
次にクラリスさんが見せたのは子猫の写真、とてもかわいらしかったです。
「子猫、可愛い？」
「はい、よくできました…やっぱりあなたは成功体、なのね」
マスターの言葉にクラリスさんは満足そうに結果を書き込んでいました。
「クラリスさん、今のはどういう実験だったんです？」
「エヴォリューダーはね…心が、感情が、なければダメなのよ」
クラリスさんは今まで生み出された子達のデータを見せてくれました。
見た目はマスターと同じく感情もなくただの機械のような仕草をしていました。
動作に無駄がなく、何をしても何をされても表情を変えない、人形のような子達
マスターと同じくエヴォリューダーとして生み出されたはずなのに…
「そう、１５８３には明らかにこの子達とは違う、感情があるはずなの。現にあなたを無理やり
　実験しようとした時も１５８３は見るからに怒りの表情を浮かべていたわ」
そう言われて私は幾度も、私を庇うマスターの姿を思い出しました。
私からははっきりとマスターの表情は見えませんでしたが…

その小さくも頼もしい背中からは怒りが伝わってきていました。

「でも、感情は感情でも怒りしか見せないのが不安になってね…もっと色々な感情が
　１５８３の中にはある！　そう思ってこう言うのを集めてみたのよ」

クラリスさんは見るからに可愛らしい動物や綺麗な植物や風景の写真を取りだしました。

「これを綺麗や可愛いって思うと言う事は…ただ単に感情が無いんじゃなくて…表に出さないだけね」

溜息１つ吐いたクラリスさんは突然私を掴み、マスターの眼前に突き出してきて

「１５８３…ノアの事、どう思う？」

などとトンでもない事を聞いてきました。

「どう？」

「あ、あのですね、クラリスさん！　マ、マスターはマスターであってですね…えっと…／／／」

なぜか私は全身が真っ赤になって行きました。
それを知ってかしらずはマスターとクラリスさんは話を続けました。

「ノアを見て、あなたがどう感じるか…でいいのよ。あれを見た時のような感じでいいわ」

さっきの鉢植えの花を指さしてマスターに再度尋ねると、マスターは全く表情を変えずに

「ノアは…可愛い」

「ほえっ!?」

「うんうん、そうそう。それでいいわ♪」

無表情でしたが、声に僅かに温かみを感じた私は更に体が熱くなりました。

「クラリスさんは、綺麗…」

「うんうん…えっ？　私も!?…そ、そうなの…私の事はきいてないのだけどね…」

と、頬を少し赤くしてぽりぽりかくクラリスさんを、私は睨みつけました。

「コホン!…それでね、１５８３。これからは綺麗とか可愛いって思った女の子には素直に伝えるのよ?」

「どうして?」

「どうしてって…そうすると相手が喜ぶからよ」

「……分かった」

マスターは納得したように頷き、それを見たクラリスさんはマスターの頭を優しく撫でて

「いい子ね。それじゃあ私はノアとお話あるから先に部屋に戻っていなさい?」

「はい」

マスターが部屋を出ると、急にクラリスさんは真顔になり私に向き直りました。

「それで、クラリスさん。わざわざ私になんの話ですか？」
「その様子だと、最初からあなたに話があるって気付いていたみたいね」
「えぇ、いつもは他に助手とかいるのに今日はクラリスさんだけの検査でしたから」

普段マスターの検査をする時には、クラリスさんの助手や時には私が嫌いなレクイアもいるのですが
今日は特別な検査だからとクラリスさん1人で検査を行ったので私は何かあると思ったんです。

「…ねぇ、ノア。1つあなたに協力して欲しい事があるの…」
「それは、マスターにあんな事を聞いたりした事と関係あるのですか？」

急にマスターに花を見せたり、私の事をどう思うか聞いてくるのはおかしいと感じていました。
たまにクラリスさんは悪ふざけをしてくるので今日もその一環かと思いましたが
それにしては何か違和感のようなものを感じていたんです。

「あら、流石ね。今日あの子にああいう事を聞いたのにはわけがあるのよ…そして、今日あの子を見て
私はある事を決意したの。でもそれには私だけじゃ到底、実現は無理な事、失敗は目に見えているの
それをあなたに協力して欲しいのよ」
「どんな事、ですか？」

私はクラリスさんの決意に満ちた瞳をじっと見上げて尋ねました。
するとクラリスさんの瞳に少しだけ哀しみが浮かび上がり…

「あの子を…１５８３とあなたをこの研究所から解放して、この研究所を潰す計画よ」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――

「あれが私とマスター、そして、クラリスさんの大きな転機でした…って皆さんどうしました？」

ノアの長い話がひと段落して、風景も一時停止を押された映画のように止まった。
そして、ノアがなのは達の反応を見ようと辺りを見渡すと、なぜか皆ニヤニヤと笑みを浮かべたり
苦笑いをしてノアの後ろを指さしていた。

「…後ろ、ですか？……あ、アレ？　マスター？…顔を真っ赤にしてどーしたんですかぁ？」
「ノ～～ア～～～！！」

そこには顔どころか全身をトマトよりも赤くして、羞恥心と怒りが混ざったような顔をしたクロスが…

「お前はよくもあんな恥ずかしい事ペラペラと喋ったなぁ！」
「きゃ～～！！　な、なんでですか！　私はただマスターとの思い出を語っただけで…」
「明らかに余計な部分が多すぎだぁ！！／／／／」

「い、いいじゃないですか！　本当の事なんですから…ってマスター怖いです、怖いですって！」

クロスは無言でエクスカリバーを振りかざしながらノアを追いかけ始めた。
その様子をなのは達子供組は苦笑いを浮かべ止めようとしてリンディ達大人組はニヤニヤと笑みを浮かべながら静かに見守っていた。
ゼストやクイント達はこれから見るものが、更に過酷な地獄だろうと気付いていながらも…

続く

第７９話　「過去編？　ノアの独白」（後書き）

カガヤ
「やっとかけたぁ！！」

ノア
「…かなり間空きましたね」

カガヤ
「仕方ないだろ、この時期は年度末とかで忙しくて…」

ノア
「来月半ばまでは修羅場ですしね…」

カガヤ
「それでもなんとか更新出来るようにがんばる！…さて、今回はクロスとノアの出会いやらを中心にしましたが」

ノア
「あっちでマスター撃沈してますね…」

クロス
「／／／

「マスターは素直なんです。特に女性には…そこがまた良い所なんですよ♪」

クロス
「うおぉ～～！！黒歴史だぁ～！！！」

カガヤ
「少なくとも昔よりは羞恥心が身についてるようで…ではまた次回！過去編も半ばになっていよいよ、核心部分に近付いてきますよ！」

第８０話　「過去編？　始まりの終わり、の始まり」（前書き）

お待たせしました！
と言っても待ってる人がいたのかは疑問ですが（笑）
少し短めです。

第８０話　「過去編？　始まりの終わり、の始まり」

Ｓｉｄｅ　クラリス

【Ａ－１５８３号が誕生して5年が、ノアに１５８３をこの研究所から解放して…

同時に壊滅させる計画を話してからは1年以上が経った。

その間にも１５８３はもう、ＡＡランクでも適わなくなってきている程に、力を付けて来ている。

が、まだ1人も殺してはいない、毎回の如く相手を戦闘不能にしたら自分の部屋へと戻ってしまう。

最初の頃、レクイアやロクモ所長はそんな１５８３を忌まわしげに見つめていた。

特に、レクイアは制御認証スペルを使う事を進言していたが

あのスペルはまだ一度も使用していないが、何度も使用するとエヴォリューダーの特性で

抵抗が付く可能があると進言した為、スペル使用は見送られた。

もちろん、それはとっさに浮かんだ嘘だけど…本当にそうなるかは分からないけど、試す気はないわ。

しかし、最近はそんな事もなく2人とも何も言わず、ただ相手役の実験体を回収して治療するだけだ。

『彼らを治療すれば、まだ戦える…その方が効率的だ』

その言葉に、納得する人達とは思えない…現に、レクイアにはある思惑があった。

負けた実験相手は再調整など若干の強化をされて、再度１５８３の訓練相手となる。

しかし、元々プロジェクトＡの失敗作の烙印を押された子達だ。

短い寿命で死んだり、能力不十分で処分されたり…もう半分以上が死んでいた、その度に…】

「はぁ…分かってはいたんだけどね」

自分の部屋で、日記を付けて、今までの研究成果を見ながら溜息をつく。

成果は上々、１５８３はエヴォリューダーの素質を存分に引き出せている。

一番のリスクだった殺人・破壊衝動も今のところ抑え込んでいる。

でも…その裏でたくさんの子達が理不尽に生み出されて、死んでいく。

「私、なんでこの仕事引き受けたんだっけ…ねぇ、リット、ソラン…」

その呟きに答えれる者は誰もいない、なぜなら私以外にその答えを知る者がいないから。

唯一答えられる２人の人間は…もうこの世にいないから…

私は机の引き出しからある写真を取りだした。

と、同時に花の形をしたクリスタルが落ちた。

「……ライカフラワー」

太極の書の封印が解かれた日に、書があった部屋の隅に落ちていた花のクリスタル。

書と一緒に封印されていた物で、封印が解かれた時に零れ落ちたらしい。

詳しくは調べても分からなかったけど、後にノアが解析してくれた。

ライカフラワー、これは太極の書の主が、認めた相手に花弁型のク

リスタルを渡すと
渡された相手と主は見えない糸で繋がっている状態になり
主や相手に何か異変が起きた時には瞬時に伝わるらしい。
また、花弁はお守り代わりにもなり、微々たるものだがバリアや自然治癒など
ちょっとした自動防衛装置も兼ねているらしい。
本当なら１５８３に渡すべきものだけど…それは、まだ少し後の話。
あの計画が無事に成功した時に…あの子に渡すと決めている、もう１つの贈り物と一緒に。
その時私はどんな顔をして、どんな事を言って渡せばいいのだろう…
こんなにひどい事をしているのに…そして、最も残酷な事をさせるかもしれないのに…

ノアに話した計画…それはこの研究所の存在を、信頼出来る時空管理局の人に明かす事。
管理局の欲の張った連中に、ここの存在を話せばどうなるかは想像が出来る。
でも…あの人達なら、私の親友、リンディ・ハラオウンとゼスト・グランガイツ
そして、私の教え子のクイント・ナカジマ…
私は今でこそ科学者だが、昔は格闘技の選手だった。
昔から科学者志望だったが、何を思ったか格闘技に興味を持って、軽く覚える程度だったものが
素質があったのか、インターミドルでも本戦まで勝ち残るまでの力を身に付けた。
だが、とある事故で格闘技を続けられる体ではなくなり、ちょうどこの研究所からスカウトされた事もあり
科学者の道一本に絞るようになった、そんな時だった。
私のファンだという子が、私に格闘技を教えてほしいと尋ねてきた。

『あなたの大ファンでした、でもあなたが格闘技を続けられなくなったと聞いて…それで…
私にあなたの格闘技を継がせて下さい！』

突然の事に私は戸惑い、研究所からはあまり自由行動が出来なくなると聞かされていたので一度は断ったが
その子は何度も私を訪ねてきた。私は結局折れて、彼女…クイント・ナカジマに格闘技を教える事にした。
とは言っても、手本を示す事が出来ない為、基礎や体の動かし方や鍛え方をメールで教える程度だったが
研究の合間の短い時間で、クイントから送られる修練を映像データで見て
私が動きをチェックし、またメールで送る…その程度の指導だった。
もちろん、組織は外部との直接連絡を怪しまれない程度に制限をかけていて
メールや通話記録などは全部厳重にチェックされた。
でも、私は苦痛ではなかった。情報漏洩に警戒するのは当たり前だし、こう厳重にチェックをされていれば
クイントにあらぬ疑いが及び、迷惑をかける事にはならないからだ。
それよりも、クイントには私が何をしているか、この研究所で何を研究しているか
そして、組織の事も誤魔化しながら指導しているという事実の方が辛かった。
だが…あの時の私は、格闘技を続けられない苦しみを癒す為に彼女を利用していたのかもしれない。
もし、今の私だったら、彼女に危険が及ばないように、絶対に私に関わらせようとはしなかったはずだ。
クイントはよほど熱心に私の事を勉強していたのか、私の過去の試合のデータを見て
私の動きや技を覚え、私に見せてくるようにもなった。

そして、ついには私の格闘技を自分流にアレンジしていった。
それが…『シューティングアーツ』
まだまだ荒削りだったが、初めて見た時は衝撃を受けた。
しかし、１５８３が誕生してからは外部との接触は全て禁止された為私はクイントに最後の通信で別れを告げた。その時彼女は、笑顔で別れを言ってくれた。

『先生、もし何かあったら私に言ってください。私、あのゼスト隊に入隊出来たんですよ』

と、嬉しそうに言ってくれた彼女の笑顔が眩しすぎて目がくらんだのを今でも覚えている…
その彼女がゼストの部下になったというのは、運命だと思う。
この研究所と組織の全貌をゼストとリンディ達に伝え、１５８３とノアを保護してもらう。
言葉にすれば簡単だが、実際には数多くの問題がある。
まず第一に、ゼスト達にどうやって伝えるか…通信も何もかも規制されている。
万が一研究所から外部に通信なりデータを送れば、ただちに組織に感知されてしまう。
だが、この問題はノアにとある能力があると分かった事で解決した。
ノアには『電脳支配』という通常より数倍効率的で痕跡を残さないハッキング能力がある。
端末から一度侵入すると不可視のラインが構築されノアがどこにいても自由にハッキングが出来ると言う力。
この能力がノアにあると分かったからこそ、計画を行う決意が出来たと言える。
しかも、電脳支配を持つ事は私しか知らない。ノアがこっそりと教えてくれたのだ。
その力で、探知不能な通話ラインを作り、ゼスト達への連絡手段を

確保出来た。
同時に研究所のあらゆるデータを秘密裏にコピーして保存して
研究所のメインコンピューターとノアのデバイスにリンクさせた。
これで新しいデータがメインコンピューター入力されると
ノアのデバイスに自動的にデータがコピーされるばかりではなく、
不審な動きがあれば
すぐにノアが察知する事が出来るようになった。

第一の問題はクリア…次に第二の問題。
それは、レクイアの存在。
他の研究員ならば私やノアの動きを気取られる事はないだろうけど、
彼女は違う。
ただでさえ、最近の私は彼女に監視されている。
おかげで１５８３やノアとの接触には細心の注意を払わなければいけなくなった。
だが、それもノアのおかげでクリア出来そうになった。
なぜなら、ノアがメインコンピューターから色々情報を探っていた
時に偶然見つけたとある痕跡。
それは、レクイアが外部の別の組織に密かにコンタクトを取っていたという事。
レクイアはここの研究の成果を他の組織に売る計画を立てていた。
流石にデータの転送の痕跡はなかったが。
ここのセキュリティーでデータの外部送信が可能なのはノアくらいだろう。
エタンダール研究所ではプロジェクトＡの他にも様々な研究が行われていた。
それを外部の組織…それも『ＤＥＬＶＥＲ』の敵対組織に売り渡す事は立派な裏切りだ。
この事を所長に伝える事で、レクイアは終わりになるだろう。
もちろん、しっかりとしたハッキングで入手した以外の証拠を提示

する必要があるが。
これは、この世界の言葉で「棚から牡丹餅」というものだろうか？

『クラリスさん…準備出来ました』

ノアからの秘匿通信が入り、私は…ノアから送られてきたデータを手に所長の部屋へと向かう。
このデータが証拠…レクイアが不正に研究データをコピーしていたという証拠だ。

「……これは、本当なのか？」

私が提示した証拠を見ながら、ロクモ所長は驚愕の声をあげた。
無理もない。彼女の性格はアレだが、私以上に組織に忠実と見られていたからだ。

「なるほど、早急に手を打とう。ありがとう、クラリス君。君のおかげで裏切りを防げるよ」
「いえ…それでは、失礼します」

所長の言葉に無難な言葉で返事をして、その場を去る。
下手に何か言って自分の身にまで飛び火しては適わない。

「君は、裏切らないだろうね？」
「…まさか、私はここ以外に居場所はないですよ」

部屋を出る直前の所長の言葉に背筋が凍るような衝撃を受けたが、悟られないように慎重に答えた。
その返事に満足そうに頷く所長に少し違和感を感じたが、特に気に止めなかった。

…その日のうちにレクイアが追放され、密かに処分された事を聞いた。

それから、数日後の８月２０日…ついに計画を実行に移す時が来た。
レクイアの裏切りが発覚した事で組織が研究所のセキュリティーの見直しをすぐに行うだろう。
そうなれば計画にも支障が出てくる。
しかし、対策を打ち出している間は、付け入る隙が出来る。
ゼスト達に連絡した時、最初は半信半疑だったが、１５８３やノアのデータを送ると信用しこう聞いてきた。

『クラリス、お前も裁かれる覚悟はあるのか？』

私の返事は決まっている。

『…もちろん』

でも、もし叶うのならば…裁かれる相手は…選びたいけどね。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

８月２０日…それは、様々な運命を決める長い１日。
悲しい別れと出会いの日、全てが始まる日。
そして、クロスロード・ナカジマとノア・ナカジマが真に誕生した日。

続く

第８０話　「過去編？　始まりの終わり、の始まり」（後書き）

カガヤ
「ふぅ…やっとできた」

ノア
「随分かかりましたねぇ」

クロス
「しかも短い…」

カガヤ
「うーん、いい区切りがなかなか浮かばなくて…多分次回も短いかな…」

ノア
「しかも、今回はマスター出番全くなしですか！？」

クロス
「いつも回想…というか現代の俺らのシーンいれてるだろ」

カガヤ
「あれ、今回…というかしばらくパス。過去編にいい区切り付けたら…」

クロス、ノア
「「いい加減な（汗）」」

カガヤ

「ではでは、今回はこれにて失礼します！」

第８１話　「過去編？　８月２０日」（前書き）

連日更新！…でも短め、なのかな？
うーん、長いのか短いのか分かりませんけど…

第８１話　「過去編？　８月２０日」

時空管理局　地上本部

Ｓｉｄｅ　ゼスト

５年前にメガーヌと共に配属されたクイント・ナガシマ。
彼女は管理局では珍しい格闘技を主体にした魔導師だった。
だが、その戦い方を見るうちに俺は学生時代の同期で親友のクラリス・フォロンを思い出した。
昔から科学者の才を発揮していた彼女が始めた、趣味の格闘技。
いつしか格闘家としても有名になり、とある事故で格闘家の道を断念し
遺伝子科学者としての道に専念したクラリス…
クイントと彼女の戦い方に違いはあれど、基本となる型には共通点がいくつかあった。
なので、俺はクイントに彼女の名前を出すと驚いた様子で

「隊長、先生と知り合いだったんですか？」

と目を輝かせてきた。それだけでどれだけクイントがクラリスを慕っているか理解出来た。
クイントによると彼女は、今とある研究所にいて機密保持の為に外部と連絡を禁じられているらしい。
それを聞いて、俺は最後に会った彼女の顔が頭に浮かんだ…
愛する者を失くした…彼女の悲しみに沈んだ顔を。
そして、同時に嫌な予感もした。

その予感は的中した…クラリスからの突然の秘匿通信、それも通常

のやり方ではない通信の仕方でだ。
通信の内容は、今の自分が置かれている状況と所属する組織、行っている非道な研究の全て
そして、保護して欲しい子がいるという事。
クラリスの名を語る偽者だと、クイントは激昂した。

「先生が…こんな研究に力を貸すはずがありません！！」

しかし、クイントよりも長い付き合いをしていた俺と、同じく昔からの付き合いがある
次元航行部隊所属のリンディ提督も彼女の心境を半ば理解できていた。
リンディにはわざわざ地上本部に来てもらい直接通信やデータを見てもらった。
それは俺と同じくクラリスとの付き合いが長い事も、彼女に起きた出来事も知っているからだが
他に、クラリスが現在いる研究所の場所が第９７管理外世界の地球であり
管理外の世界ではあるが、リンディの管轄の近くに会ったので、彼女の力を借りる為でもあった。

「…クラリス、しばらく見ないと思ったら…それで、これを上には？」
「いや、まだ俺達しか知らない事だ。これからレジアスには教えるがな」
「そう、分かったわ。こっちも色々手配を回してあなた達をうまく送れるようにするわ」
「頼む」

本来陸の部隊の俺達が管理外世界へ行く事自体難しい。

レジアスとリンディ、２人の力を借りれば出来るだろう。
俺は、クイントと共に上司でもあり親友でもあるレジアスにも通信とデータを見せた。

「……むむっ」
「頼む、レジアス。俺を…俺達を地球へ」
「私からもお願いします。行かせてください…地球に！」
「分かった、念の為この件は極秘とする…行くのはお前達４人だけだぞ」

こうして、俺とクイント、メガーヌ、ティーダと数人の武装局員のみで研究所へ行く事になった。
研究所の状況を確認してから、リンディのアースラより大部隊を投入する手はずになった。
作戦人数としては少ないが、下手に最初から大人数で行くよりは安全と言う事だ。
レジアスの言う事は一理あったが、その時のレジアスの表情がただそれだけではないようだった。
その事が分かるのは、全てが終わった後の事だったが。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

エタンダール研究所

その日は早朝から研究所はパニックに陥っていた。
外部から何者かに侵入され、強力なコンピューターウイルスをばら撒かれたのだ。
次々に研究データが消去、もしくは勝手にブロックされ、手が出せない状況になった。

幸いセキュリティーの被害は少なかったので外部から侵入される恐れは低かったが
レクイアの一件からまだ日が浅かったので、所員は彼女の置き土産と思っていた。
しかし、レクイアの仕業ではなく…クラリスとノアの仕業だった。
ノアの『電脳支配』で外部から侵入され、ウイルスをばら撒かれたと思いこませた。
同時にセキュリティーを表向きは切っていないようにみせかけてたが実際は、クラリスやノアのみセキュリティーが反応しないように設定を書きかえられている。

「ノア、こっちは成功よ…そっちの準備はどう?」
『問題ありません。ロックもいつでも解除できます』
「それじゃあ…2時間後に」
『えぇ、気を付けてくださいね』

今、クラリスは研究所のメインルームでウイルスの除去作業中。
１５８３とノアは外部からの攻撃に備えて、研究所奥にあるエリアに隔離中だ。
緊急時における、各戦闘員達の配備図を入手していたクラリスはあと2時間後のゼスト隊の到着に合わせて、研究所の各エリアの隔壁を閉じ、戦闘員達を閉じ込めセキュリティーを完全に停止させ、安全にゼスト隊の突入を援護する。
同時に、ノアと１５８３が予めエリアのロックを解除させている隔離エリアから脱出し
クラリスやゼスト隊と合流する。
１５８３にはすでに…クラリスは不本意ではあったが、『制御認証スペル』を使用している。

『８月２０日はノアとクラリスの指示に従い、クラリスと共にこの研究所より脱出せよ。
　他の所員は全て敵と思い行動を阻害しようとするならば突破、ただし、殺害するな』

と、クラリス自身初のスペル使用だった。
同時に認証スペルの設定変更を行い、他のスペル使用権限所持者が１５８３にスペルを使用しても
クラリスの指示を最優先させるように、再調整をした。これでクラリス以外の指示では動かない。
これが、クラリスが立てた脱出計画だ。大雑把な計画だとクラリスは思ったが
逆に緻密過ぎると感づかれる恐れがあった。

「クラリスさん！」
「（っ！？念話に気付かれた？）…どうしたのかしら？」

ノアと念話している所に、別の所員に突然話しかけられた。

「いえ…所長の姿が先程から見えないのですが、何かご存知かと」
「所長？　知らないわ。通信にも出ないの？」
「はい、申し訳ありませんでした。作業を続けてください」

そう言ってその所員は部屋から出て行った。

（所長の姿は見てないわね…指示を出すのを見たけどモニター越しだったし）

嫌な予感がしたが、既にゼスト隊がこちらに向かってきているので計画の変更が出来ず、ただただ何もない事を祈りながらみせかけの

作業に戻った。
そして、計画実行の時間が来た。

『警告！　各エリア隔壁閉鎖！』
『全システムダウン！　セキュリティーも停止！』
『外部との通信も遮断！』

ノアがシステムの根元にまで仕込んだウイルスが本格的に活動を開始した。

「落ち着きなさい。各セクションのリーダーはただちにシステムチェックを！」
「閉鎖エリアとも連絡がつきません！　１５８３の所在不明！」
「なんですって！？　いいわ、私が行きます。各戦闘員は速やかに所定の位置へ！」

矢継ぎ早に飛びかう報告の中で、クラリスは少しパニックに落ちている演技をしていたが
１つだけ、クラリスにとって本当に深刻な事態が起きていた。

（ゼスト達から連絡がない…近くに来ているはずなのに）

ゼストから研究所の近くに付いたら、なんならかのサインや連絡が来る事になっている。
それが全くなかった。今外に出ても…ゼスト隊がいないとなれば脱出が困難になり
計画そのものが崩れてしまう。

（ともかく…１５８３だけでも確保しないと！）

混乱するメインルームを後にして、クラリスは１５８３とノアとの合流地点へと急いだ。
その姿を…切られたはずのセキュリティーモニターで眺める１人の男の姿があった。

同じ頃、地球にたどり着き研究所まで近づいていたゼスト隊は…危機にひんしていた。

「これは…罠か」

周りに結界を張られ、十数名の謎の集団に囲まれていた。

「隊長、クイント…２人だけでも突破して下さい！」
「そうですよ。これが罠だとしたら…クラリスさんが危ない！」

ゼスト隊のフルバックのメガーヌと、センターガードを務めるティーダが敵を牽制しながら言った。
集団を睨みながらもクイントの不安そうな顔を見て、ゼストは静かに頷き返した。

「分かった。頼んだぞ…いくぞ、クイント！」
「はい！」
「２人とも、これに乗って天隼召喚！」

メガーヌが召喚した隼に乗ったゼストとクイント。
その動きを止めようとする魔導師達にティーダの狙撃が撃ち込まれていく。

「クイント、クラリスとは通信出来るか？」

「ダメです。何も通じません！」

今までゼスト達とクラリスはノアを中継して秘匿通信を行っていた。
それが出来ないと言う事は…

「まずい…この計画、かなり前から奴らに筒抜けだ！」

ゼストとクイントが乗った天隼は2人の焦りを感じ取ったように更に速度をあげた。

エタンダール研究所

研究所の混乱の中をクラリスは走った。
所内各所に仕掛けられていたセキュリティーは全て切られている。
少なくともクラリスはそう思っていた、だからなるべく他の所員に見つからない事だけを考え
隠れながらも全速力で合流地点に向かっていた。

（ウイルスはちゃんど働いている…計画が漏れているとは考えにくいけど…）

ようやく合流ポイントにたどり着いたクラリスはそこで隠れるようにいる１５８３を発見した。

「良かった…無事にここまで来れたみたいね」

周りに誰もいない事を確認して、慎重に、しかし安堵の息を吐きながら近づいた。
そして、ゆっくりと１５８３を抱きしめた。

「これで…あなたを解放出来るわ…１５８３、いえ…クロ『それはどうかな？』…えっ？」

突然、ロクモ所長の声がどこからか聞こえ、クラリスはハッと辺りを見渡した。

―ザシュッ

と、同時に抱きしめる１５８３から何かを貫く音が聞こえ…静かに１５８３の方に顔を向けると

今まで見た事もないような赤い瞳をした１５８３が何かで真っ赤に染まった顔で自分を見上げていた。

そして、よく見るとそれは返り血で…１５８３の両手には同じく腕ごと真っ赤に染まった剣が

自分を突き刺しているのが見えた。

第８１話　「過去編？　８月２０日」（後書き）

カガヤ
「急展開～かな？」

クロス
「いやもっと自信もっていいなよ（汗）」

ノア
「いよいよ、この時が来たんですね…」

クロス
「クラリスさん…」

カガヤ
「さて、今回も割と短めですが…大きく動きました。次回…今までにない地獄が始まります。ちゃんと書けるか不安ですけど（汗）」

第８２話　「過去編？　エヴォリューダー？」（前書き）

明るい話が書きたい～ギャグが書きたい～
でも、暗い話です。

第８２話　「過去編？　エヴォリューダー？」

Ｓｉｄｅ　？？？

みんなが俺を見る目はずっと冷たかった。
俺は生れてからずっとそんな目に囲まれて過ごしてきた。
少し体が大きくなって、変な装置にかけられたり、色々な武器を持たされたり、映像を見せられたり
そして、体がさらに大きくなると今度は他の人…自分と似た感じの人達を殺せと言ってきた。
でも、俺は殺すのは嫌いだ…レクイアという人や所長や他のみんなは厳しい事を言ってきたけど
それでも、俺は誰かを殺すのが嫌いだ、なぜなら、悲しませたくない人がいたから。
みんなが冷たくて、何か怖い物を見る目を向ける中で、俺に優しく温かい目を向けてくれた人…
俺が普通と違う生まれ方をして普通じゃないのは、何となく分かっていた。
普通の子供よりも…成長が速くて、並大抵の大人よりも強いって事が…
でも、あの２人がいるから、俺は…『人』でいられたんだと思う。

１人目はノア、ある日、誰かに助けを求められて声が聞こえるままに入った部屋で出会った小さな女の子。
名前がないと聞いて、頭に浮かんだ『ノア』という名前を付けたら、とても喜んでくれた。
その時の笑顔を見てこの子は俺が守らなきゃいけない、と心の底から思った子
いつも俺の側にいて、色々教えてくれて他愛無い話も沢山話してく

れた。
最初はよく研究所の人達がノアを実験に連れて行こうとしていたけどその時、いつもノアは嫌そうな悲しそうな顔をする、俺は時には力づくでその人達を追っ払った。
俺はノアの悲しむ顔は絶対に見たくなかったから。

そして、悲しむ顔が見たくない人がもう1人、クラリスさん。
この人も最初は少し変な目で俺を見ていたが、すぐに優しい目で見てくれた。
他の人達と違ってクラリスさんは俺やノアの嫌がる事をしなかった。
逆に色々な本を見せてくれたり、趣味だと言う美味しいマフィンをよく作って食べさせてくれた。
俺には親と呼べる人がいないと、直感で分かっていたけど…
クラリスさんはまるで自分の息子のように俺を見てくれていた気がする。
一度クラリスさんをクラリス博士と呼んだら、少し寂しそうな表情を浮かべた事があった。
それ以来はクラリスさんと呼んでいる、一度母さんと呼べばいいのかな？

最近、クラリスさんとノアがこっそりと何かをしている事が多くなった。
別に気にも止めてなかったけど、クラリスさんが俺を見る目が変わった気がする。
優しくて、そして、少し哀しく感じる決意に満ちた目をするようになった。
そんなある日、その日は何も実験はなかったはずだが、クラリスさんが俺の元にやってきた。
その目は、俺が今まで見た事もない程真剣な目つきだった。
クラリスさんは、部屋で待機していた俺の前でしゃがんで、黙って

俺を見たかと思うと

「…ごめんね…スペルＮｏ．Ｋ－００３発動…

『８月２０日はノアとクラリスの指示に従い、クラリスと共にこの研究所より脱出せよ。
　他の所員は全て敵と思い行動を阻害しようとするならば突破、ただし、殺害するな』

…以上、スペル認証終了」

自分に何が起きたのか最初は分からなかった。
突然、頭に電撃が走ったような感覚になり、体の自由が聞かなくなっが、それはすぐに解けた。
何が起きたのかと目をぱちぱちさせる俺を、クラリスさんは優しく抱きしめ

「ごめんなさい…これが最初で最後だから…」

それを聞いて、俺はこれが『制御認証スペル』だと知った。
俺のような、作られた存在…エヴォリューダーには制御用として見えない鎖がある事は
クラリスさんから聞いていた。でも、それを俺に使う事はないだろうとも言っていた。
実際、俺はスペルを使われた事はなかった。何度か使われそうに放ったが
その度にクラリスさんが止めてくれた…そのクラリスさんにスペルを使われた事に
少なからずショックを受けたが、クラリスさんの泣きそうな顔を見てクラリスさんも不本意で、どうしようもない事なんだと理解した。

「大丈夫…だから、泣かないで、クラリスさん…」
「あっ…ありがとう、ありがとう…ごめんね」
俺を抱きしめ撫でるクラリスさんを見て、このスペル（約束）は絶対に守ろうと誓った。

そうして、数日が過ぎ、８月２０日になった。
その日になった途端、俺の体に何か電撃が走ったように重くなった。
一緒にいたノアがその様子を見て、不安そうな顔をしたので
「大丈夫、クラリスさんを信じてるから…あの人の約束だから。さぁ、指示を」
「…はいっ！　それでがマスター、しばらくすると研究所は大混乱に陥ります。
　そして、隔離エリアに行くように指示されますので、そのエリアでじっとしましょう」
「了解だ」

ノアの言った通り、早朝に研究所の至る所で警報やブザーが鳴り響き警備の人間が来て、俺とノアを研究所奥にある隔離エリアへと連れ出した。
そこで、しばらく待機していたが…外から声が聞こえてきた。

「ロクモ所長！」
「御苦労、異常はないかな？」
「はい、１５８３とユニゾンデバイスもこの中です」
「結構」

どうやらロクモ所長が来たらしい…何の用だろう。

「では、君らの仕事は終わりだ」

「はっ？」

―ザシュッ…ブシャー

突然、何かを斬り落とす音と何かが噴き出す音が聞こえた。

俺はそれが首を斬り落として、血が噴出した音だとすぐに分かった。

ノアも何の音か分かったようで、青い顔をしてしがみついてきた。

扉が開く、そこには赤い血で真っ赤にそまった剣を両手に持ったロクモ所長がいた。

「……」

「ロクモ所長、一体…っ!?」

「マスター？　どうしま…しっ……な、なにを…」

無言で俺を見下ろすロクモ所長の口が開き、何か言葉を発したかと思うと

意識が朦朧とし、気が付いたら背中にしがみついていたノアを捕まえて

バインドで縛っていた…そして、意識は闇に落ちた。

そして、次に気が付いた時、俺はクラリスさんを刺していた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『ご苦労だった、１５８３…』

「ロ、ロクモ…所長…」

刺されたお腹をおさえ、弱弱しい声を出しながらも、クラリスは近くの空間モニターを睨んだ。
そこには満足そうな笑みを浮かべるロクモが映っていた。

「な、なぜ…」

『そうだな、冥土の土産に君の疑問に答えるとしようか…まず、君の間違いを指摘しよう
エヴォリューダーの殺人・破壊衝動を君は、デメリットと思っているようだが
あれはデメリットではなく、あれこそがエヴォリューダーの本質なのだよ』

「なんで、すって…」

『元々エヴォリューダーは…『管理局最高評議会』のオーダーでね…最強の人型殺人兵器を
生み出すのが目的で、そして、プロジェクトAに併合されたものだ』

「……最高評議会、管理局のトップが…そんな」

次々に明かされる真実に、クラリスは傷の痛みすら忘れていた。
管理局最高評議会、管理局の最高意思決定機関…事実上トップに位置する組織。
その評議会がエヴォリューダーを殺戮兵器とするように、最初から仕組んでいた。

『今までの結果は、数多くの失敗作を生み出すだけになった…しかし、１５８３は違った。
プロジェクトAの魔光力を身につけ、太極の書の主に選ばれ、エヴォリューダーとしての能力を

併せ持った、まさに最高傑作！……だが』

歓喜に満ちた表情を浮かべていたロクモは、急に冷たい視線を１５８３に向けた。

『肝心の殺害・破壊衝動については全く見受けられなかった…エヴォリューダーとしては完璧なのにだ！

そこで、私とレクイア君とである事を考えた…それが、今のこの状況だ』

クラリスの体から力が抜けて行く。しかし、クラリスは自身の魔力でどうにか意識を保っていた。

『クラリス君、君は必要以上に１５８３に感情注入をしていからね。

そして、逆に１５８３．も

君を母親のように慕っていた。感情を表に出さなくても我々にはすぐに分かった事だがね。

それを利用させてもらった。つまり…自分に一番親しい人間を自分の手で殺させる。

それによって、良心という枷を壊し、純粋な殺人・破壊衝動に目覚めさせる！』

その言葉を聞いてクラリスは衝撃を受けた。

自分を１５８３に殺される…しかも、裏切り者の抹殺という理由だけではなく…

親のような存在を殺させる事で精神を破綻させ、奥底に眠る感情を呼び覚ます為。

「あ、あなた達はぁ～！…ぐうぅ」

激昂するクラリスだったが、傷口が広がり、痛みに倒れ込んだ。
それを１５８３．はただただ無表情に眺めている。

『無理をするな、どうせその傷ではもたん。残りわずかな時間を種明かしに付き合いたまえ
何せ君の存在だけではなく、今回の計画をも利用させてもらったのだからな…
この研究所はね、１５８３の完成で用済みとなっていたのだよ。もちろん、所員と失敗作もだ。
所員は言わずともがな色々と知り過ぎているため、失敗作はもう１５８３の実験相手には役不足だからね
だから…君が死んだあとで１５８３に全員始末してもらう事にしたんだよ』

「そ…んな、事…させ…ないっ！」

『あははは っ、頑張るね君も。あ、そうだ君の『制御認証スペル』は私が無効化したよ。
君は知らないだろうが、レクイア君が新たなスペルを開発してね。君は自分以外のスペル操作を
無効化にしたつもりだろうが、それ以上に強力なスペルが既に１５８３にかかっているのだよ。
だからこうして、君を躊躇いもなく刺しただろう？』

そこでロクモはふぅっと深いため息を吐き、やれやれと首を振った。

『しかし、何事にも計画には支障が出る。それは君も分かっているだろう？
私の計画もそうだ…レクイア君がまさか、私すら裏切ろうとしていたのだからね
もっとも、君のおかげで露呈して、処分する事にはなったが…組織の手から逃走したようだ。

まぁ、この一件が終われば１５８３に殺させるつもりだがね』
「ま、まだこの子に…人殺しをさせる気なの！！」

口から血を吐き出しながらもロクモを睨みつけるクラリス。
しかし、ハッと無表情な１５８３を見て、残り僅かな時間をどうするか決めた。

「１５８３…ごめんね、ごめんなさいね…最後にあなたにこんな事させるなんて…」

自分が生きていられる時間を憎むべき怨敵への怒りではなく…愛する子への別れの為に…
もう立ちあがる気力はない。
右手でお腹を押さえ、左手ではいつくばるように１５８３に近付く。
そして、血に濡れた手で優しく１５８３の頬を撫でた。
１５８３は瞬き１つせずに無表情のままだ。

『ふふふっ…』

そんなクラリスをあざ笑いながらも、ロクモは止めようとはしなかった。

『君のおかげで研究所は大混乱だ。私が手を回す必要もなく、この研究所とゴミ共の始末が出来る…
これはその礼だ。ゆっくりと今生の別れをすますといい』

ロクモの声はクラリスの耳には入っていなかった。
いや、もう誰の声すらも聞こえなくなっていた。
視界もぼやけて、目の前にいる１５８３の顔すらまともに見えていない。

「…こんな結末、私は望んでいたのよ…あなたに殺される結末をね…だって、法に裁かれるより…
あなたに裁いてほしかったから…ひどいわよね、私。人殺しをさせたくないだなんて言っておきながら」

クラリスは涙を流しながら自虐的な笑みを浮かべる。
人間、死ぬ直前には思考がすっきりする事があると言うが、今のクラリスはまさにそうだった。
ただただ、自分の懺悔を、後悔を…謝罪を１５８３に伝えようとしている。

「私から贈り物があるの…受け取って…あなたに…名前をあげたい、１５８３じゃ人間らしくないから。
本当はもっと早く渡したかったのだけど…無事にあなたを連れ出してからと思っていたの。
いい…あなたの名前は…『クロスロード』…あなたとノアの行く先で多くの人と出会いふれあって
道を交えて欲しい…そう願いを籠めた名前、変…かしらね…」

今のクラリスは自身の強化魔法で辛うじて声を絞り出している。
ロクモには小さすぎて聞こえていない、だが、ロクモにはどうでもよかった。
それでも、１５８３の…クロスロードの耳にはしっかりと届いていた。
朦朧とする意識はクラリスの声で、涙で、血で、鮮明になっていく。

―なぜ、この人は悲しげに涙を流している？

「もう…げんかい、みたいね、クロス…ノアを…たいせつに…ね…」

―なぜ、この人は苦しそうに血を流している？

俺が刺したから。

「ありがとう…わたしの、ふたりめの…こ…クロス」

―なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ…この人は死んだ？

俺が…殺したから。

「うあああああぁぁぁぁぁぁぁ～～！！」

クラリスの瞳から光が消えた瞬間。
辺り一面に叫びが木霊した。

「な、なんだこの叫びは！？」
「くそっ、ウイルスの除去もまだなのに所長とクラリスさんはどこに行った！？」

それは研究所内だけでなく

「はっ！？　ゼスト隊長！」
「なんだ…この苦しみは…」

悲しみと苦しみと怒りを帯びた叫びは痛みとなり

「やっと片付いたわね…さぁ、２人を追うわよ、ティーダ…っ！？」
「メ、メガーヌさん……これは、この胸の痛みは…」

様々な人へと伝染した。

「あああぁぁぁ～～！！！」

Ａ－１５８３、クロスロードが生まれて２度目に現した感情は
深い悲しみと、怒りと、憎しみだった。

続く

第８２話　「過去編？　エヴォリューダー？」（後書き）

カガヤ
「うーん、すごーく書きたくない話だけど、書きたい話でした」

クロス、ノア
「「……」」

カガヤ
「本当はもっと先まで行く予定だったけど、書いてたら区切りが…
…今回はここまで！また次回！」

第８３話　「過去編？　黒い煉獄」（前書き）

えー…今回も難産でした（汗）

第８３話　「過去編？　黒い煉獄」

次元空間航行艦船アースラ

Ｓｉｄｅ　リンディ

「すぐにゼスト隊の援護に向かって！　それと結界班、準備して！」

衛星軌道上にてステルスモードで待機中のアースラ、その艦内で私は慌ただしく指示を出す。

モニター上では謎の部隊と戦闘するティーダ君とメガーヌ…

そして、メガーヌの召喚獣に乗り研究所に急行するゼストとクイントの姿が映し出されている。

「研究所周辺の映像はまだ出せないの？」

「ダメです、強力なジャミングが発生しています！」

エタンダール研究所周辺には強力な結界が張られている。

そのせいで直接部隊を送り込む事も映像を移す事も難しい…

けれども、つい先程から発せられている謎のジャミングはその比ではない。

おかげでゼスト達も、研究所から遠く離れた場所にしか転送出来なかった。

そして、ゼスト隊には罠が張られていた…嫌な予感がする。

あの人を亡くした時にも感じた、あの喪失感…

「クラリス、無事でいて…」

「艦長！　研究所のジャミングの他に魔力…いえ、観測した事のない膨大な力が！」

「なんですって！？」

モニターには先程まで走っていたノイズが消え、代わりにエタンダール研究所の様子が映し出されていた。
研究所周囲には雷鳴が轟き、黒い稲妻が降り注いでいた。
そして、すぐにまたノイズが走り、モニターには何も映し出されなくなった。

「一体、何が起きているというの？…私も結界班と共に現場に行きます！」

すぐに私は、転送の準備をした。
胸に湧く、このざわめきを沈める為に。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

エタンダール研究所

それは、研究所の至る所で起きた。
突然、ウイルスに侵されていたコンピューターが一斉に黒い火を吹いた。
ウイルス駆除に追われていた所員たちは消火作業にも追われる事になり、右往左往していた。
それが、地獄の始まりとも知らずに…

「ああぁ～！！　うわあぁぁ～！！！」

Ａ－１５８３…クロスロードの慟哭は続く。
ロクモとレクイアは、クロスを育ての親同然であるクラリスを殺す事で
エヴォリューダーの殺人・破壊衝動を抑え込んでいる良心の枷を解きはなさせようとした。
結果的に、その目論見は成功した。感情を表に出さなかったクロスは、クラリスを殺した事で
今までにないほどに、様々な感情が籠った叫びをあげている。
だが、それだけでは収まらなかった。
クロスの体から黒い炎が巻き起こり、両手足に絡みついていき、巨大な鋭い爪を形作った。

『むっ、その姿は…一体なんだ？』

ロクモにも予想していなかった事態が起きていた。
予想では、殺人や破壊を好む殺人鬼として狂人化するだけだと思っていた。
しかし、結果は全く予想外。認証スペルが解けてしまったのは予想範囲内としても
まるで悪魔が乗り移ったかのようにクロスの体は大きく変貌した。

『…興味深いな』

それでもロクモは落ち着いていた。
新型の制御認証スペルは完璧で、再度かけ直せばいい。
ユニゾンデバイスであるノアも押さえてある。
仮に暴走したクロスが自分へ刃向って来た場合の事も、ちゃんと考えてあった。
ロクモ自身は根っからの研究者だが、魔導師としての腕も研究所ではトップクラスだ。

今のロクモはクロスがいる区画と正反対の場所にいる。
この場所はロクモの秘密の部屋で、他の所員、レクイアやクラリスすら知らない。
そして、何重にも渡り結界や封印魔法が施されており、侵入はほぼ不可能。
以上の事から、ロクモは慢心こそしてはいないが、冷静に次の手を考える事が出来た。
自分の判断が根本から間違えていた事に気付くはずもなく…

「…俺ガ……殺シ…タ…俺ニ、殺…サセタ」

もはや、身体に似合わない程の大きさになった燃え盛る黒い炎の爪を振い
クロスはモニターのロクモを睨みつける。

「絶対ニ…殺ス！！」
「…はっ！？…な、なんだ今のは」

クロスの目を見たロクモは…恐怖した。
クロスの今の目は、エヴォリューダーの特徴でもある、紅い瞳をしている。
しかし、ただ紅いだけではない。
血を連想させる紅い瞳、それを見た瞬間に
ロクモはその色がまるで、自分の体から噴き出た血の色に見えた。
いや、実際ロクモは自分がバラバラに引き裂かれ、血を噴き出す幻覚を見た。
それほどまでに…今のクロスの瞳は紅かった。
あるいは……ロクモは数秒後の自分の姿を予知したのかもしれない。

―ドシュ、ブシャー

「…がはっ…な…何が…」

ロクモは何が起きたのか分からなかった、何も反応出来なかった。
モニターの向こうにいたクロスが、一瞬にして自分の眼の前にいた。
距離も離れ、何重にもある扉が、結界がまるでなかったかのように
一瞬にだ。
そして、クロスが現れた瞬間、刹那にも満たない一瞬で…ロクモの
手足は切り刻まれていた。
両手足から噴き出す血は、さっき見た幻覚の再現だった。

「…ガ、ぎっ…あああぁぁ〜！！」
「ウルサイ、喚クナ」

―ドグッ

「……っ！！？」

ダルマのように椅子から転がり落ちそうになったロクモは
クロスの右手から伸びた爪により、椅子ごと壁に貼り付けにされた。

「…マダ、死ヌナ…喋レルダロウ？…ノアハ、ドコダ？」
「……あぅ、あぁ……」

腹に突き刺さった黒い爪から、無理やり魔光力を注ぎこまれ
ロクモはかろうじて意識を保って、いや、クロスに保たされていた。
クロスはノアの行方を知ろうとしていた。
最後に見たのは、ロクモのスペルによって自分に拘束され、どこか
へ連れ出された姿。

「ドコダ、トキイテイル…」
「…アガガガガッ！」

爪から電撃が流し込まれ、全身を痙攣させながらもロクモの意識は落ちない。
そして、涙と鼻水だらけで恐怖に歪んだロクモの顔を、クロスはただ睨みつける。

「…ノアハ、ドコダ？」
「だ、だづげ…デ」

怒りと憎しみしかないクロスの瞳がふっと細くなった。

「…モウイイ、死ネ」
「ギャッ、バッ…」

―ズシュ　ババッ！

お腹に刺さった右の爪が抜かれ、身体がずり落ちる前にロクモの身体は、クロスの両手の爪で…文字通り八つ裂きにされた。
数秒前までロクモだった肉片が、辺り一面にばら撒かれる。
壁は鋭い爪痕が、何重にも走っていた。
それを眺め、クロスは…床に散らばる肉片を睨みつけた。
すると、肉片が壁や天井ごと黒い炎に包まれた。

クロスが今使った魔法は…次元跳躍魔法・ギア、そして、業火跳躍魔法・フレイムギア。
どちらも今まで使った事のない、魔法…アルガス魔法。
まだ、その名前すらクロスには分からず、そして、使えないはずの力。

太極の書の封印の2段階目が解放される時に、アルガス魔法も使用可能になるはずだった。
しかし、ロクモ達の策略によって、今のクロスは無理やりその力を引き出している。

エヴォリューダーとしての殺人・破壊衝動。
そして、ロクモ達を殺したいという、クロス自身の意思。
衝動と意思の利害が一致し、クロスの潜在能力が十二分に引き出された結果だ。
色々な意味で、目論見通りになったロクモの失敗は、たったひとつ…
たった1つの単純（シンプル）な答え。

クロスに殺しを…それもクラリスを殺させた事だ。

クロスにとってのクラリスの存在を、ロクモ達は読み切れなかった。
もう、今のクロスには新型の制御認証スペルすら効かない。
クラリスが以前、その時は虚言だったが…忠告したようにクロスはエヴォリューダーの力で
制御認証スペルを完全に克服し、無効化したのだ。
もちろん、エヴォリューダーの力が増幅されたせいでもあったが。
そんなクロスが、次に行う事はどこかに捕らわれたノアを探す事と、もう1つ。

「研究所…全員……皆殺シ…」

収まらない殺人衝動と止まらない破壊衝動と…果てしない憎しみの感情の暴走。

その頃、とある一角では所員たちが、突然発火したコンピューター

の懸命の消火活動を行っていた。
しかし、炎は魔法で出した水も、消火設備の消火剤でも消えない。
それはクロスの深い怒りと憎しみが、研究所内を駆け回り具現化した炎だった。

「くそっ…なんなんだ、この炎は」
「あぁ、せめて障壁が上がれば逃げれるのに！」

1人の男が睨む先では、隣のブロックとの連絡通路を塞ぐ障壁がまだ降りていて
どうにか開けようと、数人が群がっていた。
その時、突然障壁が上がった。
しかし、上がった障壁はそこだけではなく、研究所内の障壁、全てが上がっていた。
ただ1つしかない、外への出口の研究所内で一番頑丈な障壁以外は。

「助かったぁ…これで、避難を……ヒィッ！！！」

障壁があがった事に安堵した、所員達はすぐにその表情を恐怖でいっぱいになった。
上がった障壁の向こうから…これまで感じた事のない深く、ドス黒い殺気を感じたからだ。

「逃ゲタイ?…逃ガシテアゲルヨ……地獄ヘネ」

障壁の向こうにいたのは、真っ黒い炎を両手足に纏い、紅い死神だった。

「お、お前は…158…ぎゃあぁぁ！」
「ソノ名デ、俺ヲ…呼ブナァ！！」

男の顔を、伸びた爪が貫く。

「ぼ、暴走した……１５８３が暴走したぞぉ！！！」

クロスの殺気に怯えながらも、咄嗟に警報のスイッチを押したその男は
他の者に比べ比較的冷静だっただろう。
それでも、クロスによってスイッチごと手を切り裂かれはしたが。

―ビィーン　ビィーン

研究所内に警報が響き渡る。
しかし、その大音量をも遮る、悲鳴が至る所で起きた。

「く、来るなぁ～！…ウグッ！」

ある者は首を撥ねられ

「ばけものばけもの…ばけものだぁ！！」
「オ前ラガ、造ッタンダロ？」

炎で全身を黒コゲにされ

「死ね、ばけものぉ！！」
「オ前ラガ…望ンダ、バケモノガ俺ダゾ？」

魔法で反撃しようとした者は、デバイスごとバラバラになった。
同時に死体は黒い炎で焼かれていく。
また、ある時は切り刻まれはしなくても、黒い炎で焼き殺される者

もいた。

「ぐっ…おい、実験体を全部出せ！」
「だ、ダメです…みんな殺されています！！」
「なっ！？」

エヴォリューダーの失敗作…クロスの訓練用に生かされいた実験体達は…

「オ前ラガ、来イヨ」

クロスによって皆殺しにされ、遺体も全て燃やしつくされていた。
クロスは、ノアが使用していた電脳支配を自分も使える事を本能で悟り
その能力でまずは実験体がいるフロアへの隔壁を開け、皆殺しにした。
勿論、実験体はその場にいた所員たちの命令で、クロスに襲いかかったが
今のクロスの敵ではなく、今までの訓練同様の結果となった。
ただ1つ違うのは…負けた実験体が殺された事だろう。
しかし、それはロクモの命令から来るものではない。

『クラリスを殺した後、所員と失敗作を皆殺しにしろ』

クロスはスペルによってロクモにそう命じられていた。
そのスペルは既に、クロス自身が無効化している。
今、所員を皆殺しにしているのはあくまでクロス自身の意思だ。
もう自分のような存在を…育ての親を殺すような存在を生み出したくないという
クロスの心に僅かに秘めた殺意以外の意思だ。

そして、実験体を皆殺しにするのもクロスの意思。

『あの実験体達はね……もう、戻れないの…』

数日前にクラリスがクロスとノアに言った事。
あの実験体達は…自分と違い、もう人間としては生きられてないという事。
短い寿命もそうだが、度重なる調整や実験の聖で思考が完全に狂わされており
クロスやノアと違い、外に連れ出しても…よくて、すぐに処分されるか
新たな人造魔導師計画の実験材料にされるか…
それならば…人目に付く前に……と、クラリスは苦悶の表情でクロス達にそう話した。
でも、クラリス自身の手ではそれは出来ない事だった。
クラリスには…実験体を処分できないのはクロスには分かっていた。

だったら…俺が…殺す。もう2度と…俺見たいな存在を生み出さない為に！…

結局は殺す理由は所員と変わらないが…それでも、クロスは実験体を躊躇わず、殺した。
所員たちと違うのは…実験体を殺す度にクロスの瞳から赤い涙が…
血の涙が出る事…

―心が…痛い…

―殺したくない…けど…

―殺さなければ…

憎しみと怒りの最大の矛先であったロクモを惨殺した事で
クロスに憎しみと怒りと殺意以外の感情が浮かび上がっていた、それは…哀しみ。
実験体を殺す度に…クロスの胸に哀しみが満ちて行く。
それは、自身の唯一の繋がりがある存在を殺して行くという哀しみ。
クロスが訓練中に実験体達を殺さなかった本当の理由…
生み出された自分と同じく生み出された…兄や姉達、唯一の肉親を失いたくなかった。
血のつながりはなくとも、同じ実験で、同じ製造法で、同じ施設で生み出された存在。
そんな彼らを、クロスはどうしても殺したくなかった。
例え、化け物と自覚していても…感情を表に出していなくてもクロスは、実験体達を全員兄や姉として見ていた。
兄、姉を殺す哀しみは血の涙となって、クロスの目から止めどなく流れ出す。

それでも、所員を見ると、哀しみより怒りが勝り、殺し方が残忍になる。

―ザシュ

「ぐぎゃっ!?」
「オ前モ…」

―グシャ

「ぎゃあぁ!」
「オ前モ…俺ヲ冷タイ目デ…見テイタ…」

―ボシュ

「ぐふっ…」

「俺ヲ…暖カク…見テクレタノハ…アノ人…ト、ノアダケ…」

未来のない兄や姉達を殺す哀しみは、実験体達と同じくクロスが母と密かに思っていたクラリスを失った
自身が殺した哀しみへと変わり、また…果てしない殺意へと変わっていた。

「オ前ラガ…俺ニ、…兄サンヲ…姉サンヲ……母サンヲ…殺サセタンダァ！！」

それは自分勝手な理屈かもしれない…
クラリスを殺させたのはロクモで、所員達は…直接では関係ない。
実験体達もクロス自身の意思で殺した。
だが…それでも…それでも、クロスはそう叫んだ。
叫ばなければ…自分がもっと壊れるからだ。
まだ、クロスは…憎しみと怒りとエヴォリューダーの衝動に突き動かされても
完全には壊れていなかった。
全ては自分の意思で行った事だからだ。

それから…少し経ち、クロスは黒い煙に包まれた研究所の外にいた。
外はもう日が暮れて、雨が降っていた。
瞳の色は元に戻り、手足には炎は纏っていない。
研究所内を所員や実験体の死体ごと焼き尽くした炎も全て消えている。

あれから、研究所内をくまなく飛び回り、どこかに捕らわれているノアを探しながら
逃げ惑う所員たちを皆殺しにした。
クロスの全身は傷だらけだった、自分の血と所員たちの返り血で真っ赤になっていた。
所員たちもただ黙って殺されただけではなく、ある者は魔法で、ある者はデバイスの剣で
またある者は、この世界…地球で入手した機関銃などの質量兵器でクロスに対抗し
少なからず傷を負わせていた。エヴォリューダーの力で傷口はすぐに塞がっていたが…
身体の至る所には様々な傷跡が残った。

「……ノア…どこにいるんだ」

雨に打たれて、全身の血を洗い流しながらクロスはノアの行方を探った。
無事なのは分かる。ユニゾンデバイスであるノアとの繋がりで分かる。
肝心の場所は分からなかった、念話も通じない…
研究所内を燃やしつくしている間にも、気配を探り、ノアまで殺さないようにはしていた。
冷たい雨のおかげで、頭を冷ましたクロスは、自身が引き起こした惨劇の跡へと足を向けた。
さっきよりは冷静になったのでもう一度くまなく探してみようと思ったからだ。
その時…ここへ近付く魔力反応を探知した。
クロスは咄嗟に自分の魔力を消し、近くの茂みへと身を伏せた。

「やっと見つけた…これは!?」

「うっ…この匂いは……」

そこに到着したのは、ゼストとクイントだった。
ゼストは黒く焼け焦げた研究所に驚き、クイントは研究所から漂う死臭に顔をしかめた。
実は、2人はロクモが張ったジャミング結界で研究所にたどり着けずにいた。
クラリスから研究所の座標を確認していたが、その結界のせいで方向感覚と距離感覚を狂わされていた。
しかし、クロスが研究所内で暴れまわりありとあらゆるものを破壊し、焼き尽くしたせいで
結界は解け、やっと2人は研究所に辿りつけたのだった。

「確か…反応はすぐ近くだったな?」
「はい、先程までここに微かな魔力反応がありました。恐らく誰か隠れているのでは?」

結界が壊れ、ジャミングが解けた事で、アースラはすぐさま研究所を探査した。
詳しい映像などは回復していなかったが、僅かに研究所の外で魔力反応を探知したのだ。

「誰か、いないか!?」
「私達は時空管理局です!…生存者はいませんか!?」
「管理…局!」

クラリスは大きなミスをおかしていた。
それは、計画がロクモにばれていた事ではなく…
計画にあった、救助に来るゼスト隊の事をクロスに詳しく教えていない事だった。

ノアには詳しく、写真も見せて名前も教えていたがクロスには教えていなかった。
それは、クロスの方から計画が露見する恐れがあった為の処置だったが…ここに来て裏目に出た。
プロジェクトAの元凶、自分を生み出した元凶…管理局最高評議会。
そんなものがトップに立つ管理局も、クロスはロクモ並に憎んでいた。

雨に打たれて冷えた頭が瞬時に怒りに満ちる。
クロスは、目の前に現れた怨敵に完全に冷静さを失い、ロクモを殺した時と同じく
殺人衝動と殺害意思だけがクロスの心を満たした。
瞳は血の瞳に、手足に憎悪の塊を纏い、ゼストとクイントへと襲いかかった。

「管理局…皆殺シ…ダアァ！！」
「っ！！　クイント、後ろだ！」
「くっ？」
クイントがふり返る先では、小さな死神が振う巨大な鎌が自分へと迫っていた。

とある場所に囚われた小さな少女がいた。

『また、マスターの心に憎しみが…私の…せいで…誰か……マスターを…助けて、下さい』

小さな少女はただひたすら、自分の主の為に祈り続けた。
自分のせいで、大切な人を大切な人の手で殺された事に悲しみ
自分以上の憎しみと怒りと悲しみに苦しむ主を想い、今の自分には

祈る事しか出来ない悔しさで
涙で頬を濡らしながら……

続く

第８３話　「過去編？　黒い煉獄」（後書き）

カガヤ
「…猟奇的表現、大丈夫かな（汗）」

クロス
「最初はもっとグロテスクだったけど…これでもどうだろうな？」

ノア
「心理描写に矛盾ないか心配ですけど…皆さんの判断次第ですね」

カガヤ
「うーん…クロスは殺意だけに支配されていたのはロクモを殺すまでで、それ以降はちゃんと目的をもって行動して、一度クールダウンして、でもクイント達を見かけてまた最初に戻る…そんな感じにしたんだけど…皆さんの感想待ってます（汗）」

第８４話　「過去編？　クロスロード　ＶＳ　ゼスト隊」（前書き）

この時のクイントとメガーヌは２０前後、ティーダは１５前後です。
公式と矛盾するかもしれませんが、独自設定と思ってくれれば…
年齢分かってるキャラ少なすぎ…でもティアナが公式より１歳上なのはわざとだったりする（笑）

第８４話　「過去編？　クロスロード　ＶＳ　ゼスト隊」

Ｓｉｄｅ　ティーダ

管理局に入局して、射撃の腕を買われてゼスト隊に入隊して数年…
何回か凶悪事件の捜査や、強い魔導師とも戦った事もあり、命の危険を感じた事もある。
けれども、俺は絶対に死ぬわけにはいかなかった。
両親が死んで、俺に残されたただ１人の家族、ティアナの為にも…
けど、今回の一件は今までとは比べ物にならないほど困難な事件だという予感があった。
ゼスト隊長と姐さん…クイントさんの親友からのＳＯＳで明らかになった違法研究所の制圧。
そして、実験体にされている子供達の救出。
でもまさか…助けるはずの子供に殺されかけるなんて…

奇襲を仕掛けてきた謎の集団をどうにか撃退して
メガーヌさんの召喚した牙狼で、先行したゼスト隊長達を追った俺達だけど
そこで目にしたのは、所々黒コゲになった研究所の前に立つ、クイント姉さんに迫る…
小さい身体に似付かない、巨大な黒い炎の爪を手足に纏った男の子の姿。
俺は魔力補助なしの視力もいいので、早く気付けたけどクイント姉さんは反応が遅く
防御も回避も間に合わない！

「間に合え！」

―シュンッ！

「っ！？」

威力よりも弾速を重視した銃弾を放つ。
それを男の子はこちらに見向きもせずに首を捻って軽くかわし、後ろに飛び跳ねた。

「大丈夫か、クイント？」
「は、はい…ありがとう、ティーダ。油断したわ」
「いやいや、俺もたまたま気付けただけですから」
「…これは、一体」

俺とメガーヌさんは牙狼から降り、隊長達と合流した。
あの男の子は、再び森に溶け込んだように消えた。

『こちら、アースラ。ただ今研究所内、スキャン完了…生体反応…
…ありません』
「「「「っ！？」」」」

その時、アースラから通信が入り、内容に俺達は驚いた。
確か、あの研究所には２，３００人近いスタッフがいたはず…
生体反応はなく、建物は火事があったように黒コゲ、強烈な死臭、
そして、あの謎の男の子。

「まさかと思うが…あの子が？」
「そのようだな…しかも、どうやらあの子がクラリスの言っていた
子らしい」

森の中からまたさっきの男の子が飛び出してきた。

隊長と姐さんが止めようと槍と拳で迎撃したが…弾き飛ばされてしまった。

「ぐっ…なんて力だ…」

「クラリスの話だと、まだ5歳のはずよ…でもあの子は」

「えぇ、１０歳程に見えるわね…これがエヴォリューダーの成果ってわけね」

事前にクラリスさんからの資料を読んでいた俺達は、改めてエヴォリューダーの力に驚いた。

人造魔導師とは言え、1から生み出されて5歳の子ではまだまだだと思っていたけど、甘かった。

「グウゥゥ～！…管理局……コロス！！」

ずっと俯き加減だった男の子…確か、クラリスさんはクロスロードと名付けたはず…

そのクロスがやっと顔を上げこちらを睨んできた。

―ズバッ、ザシュ…

「な、何…今の」

「……うぅ」

クロスの紅い目を見た俺達は一様にある幻覚、ビジョンが思い浮かんだ。

黒い風にあっという間に身体が切り刻まれ、血の海を作り出すビジョンを…

たまらず、メガーヌさんとクイントさんは地面に膝を付く。

隊長も構えを崩さないが、額には汗がびっしょりと浮かんでいた。

あの隊長でさえも気後れさせるほどの殺気を、あの血のように紅い目が放っていた。

「死ネェ！」

「ティーダ！　ティーダ！　早く迎撃しろ！」

「……あっ、あぁ…」

クロスは次の標的を俺に定めたようだ。

ゼスト隊長に言われて初めて気付いたが、俺の全身は丸で金縛りにあったかのように固まっていた。

―ガチガチガチ

どこからか変な音が聞こえてくる。

でも、それが自分の口から出た歯が鳴っている音だとすぐに気付いた。

その間にもクロスの爪が、俺へと迫っていた。

だけど、俺は動かなければ死ぬと分かっていても指一本動かせないでいた。

「ティーダ！！」

「姐さん！」

姐さんのリボルバーナックルが、俺に振り降ろされた爪を受け止める。

「あ、ありがとう…ござ・・」

「さっきのお返しよ、それより…早く離れて！」

転がるように地面を滑り、その場から離れる。

同時に姐さんのローラーブーツが、クロスの腹を捉えた。
でも、少し飛び跳ねただけですぐに体勢を戻した…なんて…

「なんて、化け物…」

思わず口からこぼれた言葉に全員が顔をしかめた。

「いいか…相手を5歳の子供と思うな！」
「しかし、隊長！」
「メガーヌ、本気でいかないと私達全滅するわよ」
「クイント…それでも…いくら強くても相手はまだ子供なのよ！」
「だからよ！　早く止めてあげないと！　あの子の、クロスロードの目を良く見て！」

姐さんに言われて、改めてクロスの目を見た俺とメガーヌ姉さんは、アッと声をあげた。

「目から…赤い涙が」

そう、クロスロードは赤い涙を、血の涙を流していた。
血のように紅い目にばかり気がいっていたが、よくよくクロスロードを見ると
両手足から全身を薄く覆う黒い魔力、僅かに見えるボロボロの衣服。
身体の至る所に見える、細かい傷…そして、クロスロードの表情は

「…怒ったり憎んだり、してるだけじゃない…」
「悲しんでる…のか…？」

クロスロードはその殺気と黒い塊を覗けば、ただただ理不尽な怒りと悲しみで我を忘れてるだけに見える。

その姿に、俺は妹…ティアナが思い浮かんだ。
両親が事故で死んだ時、葬式の場で突然、ティアナが泣き叫んだ。
俺がどうあやしても泣きやまなかった。まだ幼いティアナには両親の死は理解できないが
それでも…大切な人が、父さんと母さんがもう自分に笑いかけてくれないと分かっているようだった。
俺自身、まだ父さん達の死が受け入れられずに、泣き叫ぶティアナをあやしながら、涙がこぼれおちた。
あの時も…

「ティーダ…無理しないで、ね？」

仕事上、両親と親しかったクイント姐さんが…自分より少し、年上にしか見えない姐さんが
優しくほほ笑みながら、俺の肩に手を置いてくれた。
そして、ティアナと共に抱きしめてくれて…一緒に泣いてくれた。
何も言わずにただ、落ち着くまで俺とティアナの頭を撫でてくれた。

「もう大丈夫ですよ、姐さん…クロスロードを止めましょう！」
「…もちろんよ」
「やりましょう…みんな！」
「あぁ、行くぞ！」

クロスロードに何が起きたのか、ここで何があったのかは分からない。
それでも、今のあの子はあの時の俺やティアナと同じく、ただ悲しいんだ、寂しいんだ。
だったら、あの時の姐さんのようにうまくできるか分からないけど、今の俺に、俺達に出来る事。

「絶対に…あの子を助けてみせる！」

さっきまで震えていた銃口が、今はしっかりとクロスロードに突きつける。

今のクロスロードには言葉は届かないかもしれない、だから…少し手荒でもまずは落ち着ける。

全力で、全開で！　あの子に勝つ為でも、倒す為でもなく…救う為に！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

クロスが駆けだす。両手を大きく広げ、ゼスト達全員を一気に突き刺すように爪を広げた。

「はぁぁ！！」

「止まり、なさい！」

ゼストの槍と、クイントの拳がその爪を止める為にまた左右から突き出された。

今度はすぐには弾き飛ばされずに、食い止める事が出来た。

しかし、クロスは爪でしっかりと槍と拳を受け止めており、引く事も押す事も出来ない。

「ぐぐっ…」

「すごい…力、ねっ！」

クイントは空いているもう片方のナックルのスピナーを回し、クロスの脇へと殴りかかる。

零距離のほぼ密接状態でも、リボルバーナックルのスピナーの回転

力で威力をあげた拳を打てる。

「ガァッ！」

「この体勢で！？」

しかし、クロスはまるでその動きを読んでいたかのように膝を上げ、足で拳を受け止めた。

『…け…さい！…マスター…止…』

「えっ？…今の何！？」

突然クイントの頭に、誰かの声が聞こえてきた。

一瞬、クイントの拳から力が抜け、クロスが爪を押しこんでくる。

「牙狼召喚！」

メガーヌが再度召喚した2匹の銀狼が、クロスの背後に素早く回り込み飛びかかった。

「なに！？」

「うわっ！」

それも、クロスはそっちをみずに、クイントとゼストを掴んだまま後ろに振り回した。

そのまま牙狼にぶつかり激しく2人と2匹は吹き飛び、牙狼は消えてしまった。

「クロスファイアー…シュート！」

動揺する暇もなく、ティーダの魔力弾が複数発射された。

ゼストとクイントもすぐに体勢を立て直し、射撃に合わせるようにクロスに攻撃をしかける。
その時、全員が目を疑った。

―バシッ、バシュッ

クロスは両手の爪で、クロスファイアの銃弾を全てゼスト達の方へと弾き飛ばしたのだ。
その軌道は正確、直撃した。

「ゼスト隊長！」
「姐さん！」

2人の名を叫ぶメガーヌのティーダに向けて、クロスは手を翳すと…

―ビュンッ！

「きゃっ！」
「爪が伸びた！？」

ティーダは咄嗟にメガーヌを突き飛ばし、自分も地面に転がりこみ、どうにかかわす。

「こんのぉ～！…少し、大人しくしてなさいよ、ウイングロード！」

クロスファイアのダメージをどうにか堪えながら、クイントは地面に拳を突き下ろす。
すると地面から紫色をした帯状の光の道が、クロスの上空へと螺旋状に生えた。
クイントはふらふらと立ちあがり、ウイングロードに乗り、クロス

の頭上へと走った。
頭上に到着すると、クイントはスピナーを全力で回転させ真下にいるクロスへと舞い降りた。

「はぁ！」

ゼストも槍に炎を纏い、地面を駆け走りクロスへと突撃した。
先程の同時攻撃とはまた違う角度、上空と地上からの同時攻撃。
本当はこれにティーダとメガーヌの援護射撃も加わるのが、ゼスト隊の連携なのだが
さっきクロスに魔力弾を、跳ね返されて利用されたので2人はうかつに撃てない。

「……」

クロスは頭上のクイントを一瞥し、飛び上がった。

「…えっ？」

そのままクイントの側に止まり、ゼストの方へと蹴り飛ばした。

「なっ、クイント！」

両腕でガードしていたので、ダメージはそれほどなかったが何分威力がありすぎた。
陸戦魔導師のクイントは空中で満足に体勢も立て直せず、一直線にゼストへと吹き飛ぶ。
だが、そう何度もクロスにしてやられるばかりではない。

「クイント！」

「了解！」

ゼストは全身からほとばしる炎を槍へと集め、クイントを受け止めるように構える。
どうにか両足を下に向け、バランスを取ったクイントが槍の上に乗った。

「「はあぁぁ～！」」

クイントは槍に乗ったまま、右のスピナーを全力で回転させた。
すると、槍の炎がまるでスピナーに吸い込まれるようにナックルへと移動した。
ゼストの炎を、リボルバーナックルのスピナーの回転力でナックルへと纏わせ攻撃する。
クイントのシューティングアーツの１つであるコンビネーション技…

「いけ、クイント！」
「…ファイアーナックル！」

槍が大きく振り抜かれる。遠心力をそのまま利用し、上空のクロスへと炎の拳で殴りかかる。

「ガウアァ！」

クロスも右手の爪を、拳ごとクイントを引き裂こうと振り降ろした。

―ガキンッ！

黒い炎と赤い炎、炎の爪と炎の拳。
２つの力が激突した。

「ガアアァァ～！」
「いっけぇ～！……っ！？」

リボルバーナックルにヒビが入った。
だが、クロスの爪にも同じくヒビが入る。
拮抗する2つの力…その時、クイントの頭にまたしても声が聞こえてきた。

『タス…けて、マスターを…助けて！』
「だ、誰…誰なの！？」

それも、今度ははっきりと…そして、クイントの意識はどこかへと飛ばされた。

『…こえま…か？』
「誰…私を呼ぶのは…」

クイントが次に目を開けると真っ黒い空間に、淡い青い光を放つ何かが浮かんでいた。

『管理局の、方…クイントさん、ですね？』
「えぇ…私の名前はクイントよ。あなたは一体…ここは？」
『私の名前は、ノア…マスターのユニゾンデバイスです。そして、ここは私の意識空間…
あなたにお願いがあってここに来てもらいました』
「あなたがノア、先生の話にあった…ノア、教えて。ここで何があったの？」

クイントの問いに青い光、ノアは点滅を繰り返した。
その点滅が悲しみを表しているようにクイントは思った。

『…私のせい、なんです…私がロクモの、レクイアがした事に気付いていれば…
マスターが…クラリスさんを殺す事なんかなかったのに！』
「っ！？　せ、先生が…殺された！？　あのクロスロードに！？」

そして、ノアは顛末を語った。
ロクモとレクイアがノアに誰にも気付かれないように、密かに発信機を取り付けていた事。
そのせいでクラリスの計画は筒抜けとなり、罠にはまりクロスがクラリスを殺してしまった事。
また、その事でエヴォリューダーの殺人衝動が暴走し、研究所の人間を実験体ごと全滅させた事。
気丈に話してはいたが、無理をしてる事はクイントにはすぐにわかったが
今は、全てを話して終わらせる事が一番だと思い、何も言わずにだまって聞いていた。
気付かないうちにクイントは拳を強く握りしめ、唇を噛んでいた。

「それで、私にお願いというのは？」
『マスターを助けて欲しいんです…これ以上、マスターに傷付いて欲しくないんです！』
「私も同じ気持ちよ、でもどうすれば止められるの？」
『実は、クラリスさんから預かっている物があるんです…それをマスターに届ける事が出来れば』
「先生からの？」
『はい…クイントさん。私は研究所の隠れ部屋にいます。ロクモが

密かに作った部屋で
探知などでは見つけられない場所です』

ロクモが何かあった時の為に密かに建造していた秘密部屋にノアは閉じ込められていた。
例えクロスやノアでも、よほど集中して探査しなければ見つけられないような場所。
アースラですら見つけられない場所だったが、ノアが必死に自分の仙気を全開にしてクロスと、外へメッセージを飛ばしていた。
クイントがクロスと直接接触した事で、クロスを通じてノアと繋がる事が出来たらしい。

「分かったわ。研究所の隠し部屋の場所はあなたが教えてくれるのね？」
『クイントさんとのラインは確保出来ました…これで私からの念話も届くはずです』
「待っていなさい、ノア。必ず助け出して、一緒にクロスを助けましょう」
『…はい！』

そして、クイントの意識は現実世界へと戻って行った。

「…助けて見せる、先生の為にも…ノアも、クロスも絶対に！」

更に強い決意を秘めて…

続く

第８４話　「過去編？　クロスロード　ＶＳ　ゼスト隊」（後書き）

カガヤ
「さーって過去編もクライマックスが近付いてきました！」

ノア
「マスターを止めれるのでしょうか…」

クロス
「止めなきゃ今の俺はいないだろ（汗）」

カガヤ
「ティーダの９割はオリジナルで出来ています」

ノア
「原作キャラなのに（汗）」

クロス
「せめて回想とかで出れば…口調も何もかも分からずじまい（汗）」

カガヤ
「カリムとシャッハの年齢、どれくらいか誰か知りませんか～！？」

ノア
「…Ｗｉｋｉにもなかったですよね…では、次回もお楽しみに！」

第８５話　「過去編？　クロスロード・ナカジマ」（前書き）

うん…かけた！
今回はいつもと違う意味で難産…

第８５話　「過去編？　クロスロード・ナカジマ」

Ｓｉｄｅ　クイント

「クイント、クイント！　しっかりして！」
「んっ…メ、メガーヌ？」

誰かに呼ばれた気がして目を開けると、そこには相棒のメガーヌの顔があった。
どうやら地面に寝かされているらしい。

「あ、あれ私…どうしたんだっけ」
「もう寝ぼけてる場合じゃないでしょ。あなたはクロスと打ち合って気絶していたのよ？」

そうだ…私は、クロスと…

「っ！　クロス、クロスはどうなっ…あぐっ！？」

起き上がろうとした途端に右手に激痛が走った。
右手にはリボルバーナックルが外され包帯が巻かれていた。
そして、そばには全体に罅が入ったリボルバーナックルの右手が置いてあった。

「落ち着いて、右手は骨に異常はなさそうだけど、しばらくは使えないわ」
「左手だけで十分よ…ありがとう、メガーヌ。それよりも」
「クロスなら安心して…あの時向こうも無傷じゃなくて、ダメージを負って怯んだ隙に駆けつけてきた

リンディ提督達が封印結界で動きを封じた所よ」

メガーヌの視線の先には、何人もの管理局魔導師とリンディ提督に囲まれて
いくつものバインドをかけられたクロスの姿があった。
気絶しているのか、俯いたまま身動きひとつしない。
近くにはその様子を注意深く見詰めるゼスト隊長とティーダもいた。

「リンディ提督！」
「あらクイント、目が覚めたのね。もう大丈夫、今研究所内にも部隊を送り込んだ所よ」
「その事なんですが…ゼスト隊長、私を研究所内に行かせてください」
「…どういう事だ？」

私はゼスト隊長達に、夢の中に出てきたノアの事などを話した。
ゼスト隊長とティーダはそれを聞き、強く拳を握りしめた。
リンディ提督とメガーヌは辛そうに顔を歪め、提督は涙を浮かべていたが
すぐに首を振り、涙を拭いて私達へと目を向けた。

「分かりました…ノアを救出すればクロスの暴走を止められるかもしれませんね」

現在、クロスはリンディ提督達の何重にも渡って張られたバインドと結界内にいるが
いつまでも長くはもたない、とリンディ提督は考えているようだ。
事実、すでにいくつかのバインドは破壊され、ゼスト隊長と局員達が油断なく構えている。
結界と封印魔法が得意のリンディ提督と、アースラの結界班が張っ

た結界ですら
クロスはたやすく破ろうとしている。

「それじゃあ、研究所内の局員数名に連絡を取って…」
「待って下さい！　私が行きます…私でなければダメなんです！」
「クイント…」
「…右手が使えないのに無理はいけないわ。ここでノアの場所を中に教え…」
「お願いします！　私に行かせて下さい。ノアは私を待っているんです！」

中の局員達に任せよう、と言うリンディ提督を私は必死に説得した。
確かに研究所内は、クロスの手で壊滅しているとは言え、まだ隠された何かがないとは言い切れない。
けれども…私はノアと約束した、必ず助けると。

「分かった。ティーダ、クイントと一緒に行け。あいつに射撃は効かないらしいからな」
「ゼスト隊長！」
「ノアの声はクイントにしか聞こえないみたいだ、それに時は一刻を争う…確実な手段でな」
「…分かりました。行きましょう、姐さん！」
「隊長、ティーダ…ありがとう」

2人の言葉に私は感謝した、その時だった。

「ガアァァ～～！！！」
「ぎゃあぁ～！」
「も…燃える！？」

それまで黙っていたクロスが、急に目を見開き囲んでいた局員を睨んだかと思うと
局員達が突然激しく燃えだした。
残った局員で必死にクロスの拘束を維持しようとしているが、すぐに解かれてしまいそうだった。

「今のは…早く火を消して！」
「メガーヌ、全魔力で俺に補助魔法を！　２人は早く行け！」
「「了解！」」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ゼスト

「我が謳うは、烈風の翼、勇猛の剣、白銀の盾、貫徹の刃…天帝の加護（プロビデンス）！」

メガーヌの補助魔法で攻撃力、防御力、機動力が上がりフィールド貫通能力も付いた。
全身を赤、青、緑、黄の光が包み込む、これで俺１人でもクロスと渡り合えるはずだ。

「もういい、クロスの拘束を解け…俺が相手をする、全員離れろ！」
「りょ、了解！」
「リンディ！　隙を作る…だから」
「任せて、特大の結界魔法の準備をするわ！」

今のクロス相手では並の魔導師では瞬殺されかねない。
拘束が解かれたクロスは、逃げる局員ではなく俺を狙った。

「ウワァ～！！」
「ふんっ！」

迫る爪を槍で捌き、柄でクロスの顎を打ちあげる。
クロスはその一撃にたじろぐだけだったが、すかさず蹴り飛ばす。
相手はまだ5歳の子供だったが、今の俺にはそんな事は頭に入ってはいなかった。
この子は必ず助けだす、その為にも手を抜いたらこちらがやられてしまう。
クイントから話を聞いて、俺はクロスとクラリスに何があったか…
あの赤い涙の意味を知った。
もうクロスにこれ以上人殺しを、誰かを傷つける真似はさせない、
その為にも！

「全力で行くぞ、クロス！！」

体勢を崩したクロスに、振った槍は頭上を確実に捕えた。

「舐メルナ！」

クロスは両手の黒い爪で受け止める。
この黒い爪は魔力ではなく、魔光力と呼ばれる異質な力で出来ている事は
クラリスの資料から推測出来た。そして、攻防一体のフィールド魔法の一種であるならば…あるいは
俺の読みは的中し、フィールド貫通能力が付いた槍は黒い爪に食い込んでいく
このまま力押しで攻め込ませてもらう！

「っ！？…あぁぁ～！！」

―ピキーン

「なにっ！？…ぐあっ！」

突然クロスの両手に何か紋章のようなものが浮かび上がったかと思うと
急に槍を押し戻す力が倍増し、弾き飛ばされてしまった。

「ゼスト隊長！」
「あの紋章、さっき局員達を焼いた時にも現れたわ！」

リンディの言う通り、先程視線を向けただけで局員達を火達磨にした時にも
うっすらとクロスの眼の周りにも紋章が浮かんでいた。

「恐らく、強化刻印魔法の一種ね…厄介だわ」

―シュンッ！

「っ！？」

目の前にいたクロスが一瞬にして、俺の背後へと回った。
足にもうっすらと紋章が浮かびあがっている、機動力を上げたか！

―ザシュッ、ザンッ

「…ぐっ、がっ…！」

目にも止まらぬとはまさにこの事だった。
高速移動を繰り返しながらも、着実に俺に攻撃を当ててくる。
ここまで早い攻撃は初めてかもしれない。

「ならば、これはどうだ！」

―ボンッ、ゴォー

地面に槍を突き、地面から炎を巻き上げる。
俺は炎の魔力変換素質を持っている。その力で周囲に炎の結界を張ったのだ。

「グアァァ～！」
「そこだ！」

炎でクロスの動きが一瞬鈍った。
すぐさま俺は槍を振い、クロスの腹を斬り付けた、もちろん非殺傷設定だ。
だが…

―ガキンッ！

「くっ、身体にも紋章を！」

クロスは身体にも紋章を浮かび上がらせ、防御力を上げ攻撃を防いだ。
再び距離を置き、槍を構える。
向こうも今度はうかつに飛び込んで来ようとしない。

「メガーヌの補助があってもきつい、とはな…」

メガーヌの方をちらりと見る。
額に汗を浮かび上がらせ、息も上がってきている。
リンディが連れてきた治療班がメガーヌに回復魔法をかけ続けているが、長くは持たない。
メガーヌが俺にかけたこの補助魔法だが、欠点もある。
４つの補助を行う為には常にメガーヌが魔力を送り続けなければならない。
そして、メガーヌの体力と魔力が尽きれば、あっと言う間に魔法が解けてしまう。

「頼んだぞ、クイント、ティーダ」

頼みの綱は、クイントとティーダがノアを助け出す事…それしかなかった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

エタンダール研究所

人の焼け焦げた匂い、死臭など様々な悪臭が漂う中を僅かに点滅する非常灯を頼りに
クイントとティーダは進んでいた。

「まさか…防御システムが生きていたなんて…」
「ノアの話によれば、これは元からある防御システムじゃないようそうよ」

そう、今クイントとティーダは多数の侵入者迎撃用スフィアに攻撃

されている。
しかも、元からあった迎撃システムではなく、ロクモが自分に何かあった時の為に作ったものでクロスが暴走していた時も作動していたが、クロスはそれに気付かない…というよりもスフィアの攻撃では傷一つ付かないと知ったので、研究員達を皆殺しにするのを優先させた。

「ティーダ、私も迎撃を…」
「姐さんはこれから大事な仕事があるんですよ。ここは俺に任せてください！」

今クイントではなく、いつものポジションとは別にティーダが先行している。
ティーダは本来、センターガードのポジションでゼストやクイントの後方に位置している。
そして、センターガードは足を止めて視野を広くする事が大事なのだが…

「それにしてもティーダ…あなたいつの間にそんな無茶な戦法を？」
「へへっ、まぁ…教科書通りに戦うのが苦手なもんで」

現在、ティーダは…全速力で走りながら弾を避けたり、二丁拳銃を流れるように動かし迎撃している。
しかも、死角からの攻撃もちゃんとかわしている。

「全身をフルに使っての迎撃、ねぇ」
「俺、執務官目指してますから、単独任務で時間との勝負な任務が合った時に止まっていたら
間に合わなくなるかも、って考えて、元から身体は鍛えてたんで

こんな事出来るようになりました」
「……射撃型魔導師が見たら驚くわね、その動き…」
体を少しずらすだけで弾が顔をかすめ、上からの攻撃も走りながら対処している。
それも全力疾走、だがこの場に限っては、それは有効に作用していた。
「…そこで止まって！」
ノアに言われたポイントに到着した。
そこは他の壁同様にヒビが走っているが、それ以外は普通の壁だった。
「うーん、見た所何の変哲もない壁ですけど？」
ティーダとクイントは壁を触ったりして確認したが、それらしいものは見つからなかった。
しかし、クイントはとある部分を触った所で右手を止めた。
「ここよ！　この亀裂の向こうから風を感じるわ」
クイントの言う通りクロスが付けたと思われる亀裂に手をかざすと、僅かに隙間風がふいている。
「これだけヒビが入っていれば……」
「えっ、ちょっと…姐さん？」
「はあぁ～…はっ！！」
軽く距離を取り、クイントは左手のナックルスピナーを高速回転さ

せ拳を突き出した。

ーピキッ…ピキピキ、ガラガラガラっ！

リボルバーナックルが開けた穴からヒビが壁全体に広がり…一気に崩れ落ちた。

「ははははっ…相変わらずすごい力」

冷や汗を流すティーダを置いといてクイントは中へと飛び込んだ。中は電気が来ているようで薄暗かったが、外の廊下よりはマシだった。

「…あれね」

奥の部屋には厳重にロックされたシリンダーの様なケースがあるだけだった。

「これですね、どうやってロックを…」

「ゼスト隊長達が待ってるのよ、早くしないと！」

―バキッ！

近くのコンソールを操作しようとするティーダを押しのけ、クイントはコンソールを打ち砕いた。

―ブオンッ

「あ、開いちゃった…」

「…待っていました、クイントさん」

口を開けるティーダを無視して、シリンダーの中から青い光を放ちながらノアが出てきた。

「さっきぶりね、ノア…自由になってすぐに悪いんだけど」
「はい、マスターを、止めるのに力を貸して下さい！」
「もちろん♪　ほら、行くわよティーダ！」

まだあ然としているティーダの首根っこを掴み、クイントは出口を目指した。

Ｓｉｄｅ　ノア

良かった、クラリスさんの言った通り…良い人達で。
隣を走るクイントさんとティーダさんを横目で見ながら、私は心の中で呟きました。
私のミスで、データ型の発信機を付けられたせいでこんな事になってしまった。
恐らく、研究所の健康診断を受けた時に付けられたのだろう…
でも、気付けなかった…こんな時の為に私専用のデバイスを作った方がいいかもしれない。
その前に、マスターを助けるのが先だけど…

まだ残っていた迎撃システムを突破して、研究所を抜け出た、すると…

「ぐはっ！」
「ゼスト隊長！？」

大きな男性が私達の側に吹き飛ばされてきました。
その男性はクラリスさんに前に写真で見せてもらったゼストさんでした。
そして、飛ばされた方向には…黒い魔光力を両手足に纏ったマスターの姿…
ロクモのせいで未だにリンクに阻害があり、マスターの気持ちがさっきよりは伝わって来ませんが
マスターの全身から怒りと憎しみ、紅い瞳から深い悲しみが伝わって来ました。

「うっ、ぐぅ…クイント、ようやくノアを救出したようだな」
「はい、はじめまして、ゼストさん…私がノアです」
「挨拶は後だ。まずは…クロスを止め……動きが止まった？」

ゼスト隊長の言う通り、マスターはどうやら私に気付いたらしく、じっと私を見つめています。

「あうっ…グッ…の、ノア？」
「私です、ノアですよ、マスター！」
「来るナッ！」

急いでかけよった私を、マスターが止めました。
全身を更に黒い魔光力が覆い始め、苦痛で頭を抱え込んでいます。

「な、なぜですマスター！？」
「来ルな…オ前は…そコの管理局と逃ゲろ…」

クイントさんに聞かされていた通り、マスターは暴走してゼスト隊長達を襲っていましたが
私がクイントさんとティーダさんに救出されたのを見て、敵じゃな

いと分かったみたいでした。
目の色も少しずつ元に戻ってきているようです。

「…嫌です！　クラリスさんの他にマスターまで失いたくありません！」

気が付くと私の頬は涙で濡れていました。

「ダメだ…俺ジャ止めラれ…ない！　危険だ…俺ハお前達を…殺ソウと…」

マスターが必死に身体を食い留めていますが、もう限界のようでした。
さっきまで両手足と全身に薄く渦巻いていた黒い魔光力が今は全身を包み込もうとしています。

「あの黒い魔光力…あれがマスターの負の感情の象徴であると同時に、増幅させているんです！
あれさえなければ私がマスターにユニゾンして制御できます！」

そして、私の隣に立つ４つの人影が見えました。

「私はノアと…先生とも約束したわ、絶対にあなた達を助けるって！」

クイントさん…

「どうやら、あの黒いのをどうにかして、ノアに道を作ればいいんだな」

ゼストさん…

「だったら、話は簡単になりますね…」

ティーダさん…

「お姉さん達に任せなさい」

メガーヌさん…

「皆さん、あの黒い魔光力を吹き飛ばして下さい！　強い魔力ならば…可能なはずです！」

「魔光力…ね。分かったわ！」

「クイント…俺はもうまともには一撃を繰り出せない。お前に任せた」

「…了解！」

「…ティーダにメガーヌ…まだいけるか？」

「勿論です！」

「俺は今回全然魔力使ってないですから、余裕っすよ！」

ゼスト隊の皆さん…

「もう…限界ダァ！！！」

マスターの眼が再び紅く染まり、私達の方へと向かってきました。

皆が構える前に、突如マスターの地面に巨大な魔法陣が現れ

白い光の渦がマスターの体を縛りあげてしまいました。

「そっちだけで盛り上がってる所悪いんだけど…私の事忘れないでね？」

「リンディ提督！」

どうやら、あのリンディ提督という人が他の局員さん達と大々的な魔法を発動しているようでした。

「本当なら、魔法陣で封印する魔法なんだけど…あなたには拘束する程度の効果しかないみたいね」

「いや、それで…十分だ、行くぞ！　カスタムシフトAだ！」

「「「了解！」」」

ゼストさんの掛け声と共に、４人が散らばりました。

私はいつでもマスターにユニゾン出来るように準備を整えます。

必ず皆さんが道を作ってくれると信じて。

「疾空突覇・絶！（しっくうとっぱ・ぜつ）」

―ザシュッ、ズガガガガッ

ゼストさんの槍が淡く輝きだしたかと思うと、激しい突きのラッシュがマスターに叩きこまれました。

「ガガッ…アガガガッ！！」

幾重にも渡る連続攻撃、ですがそれは全て一点に集中されていました。

それは、マスターの体を覆う魔光力を徐々に削いで行き、ヒビが走りだしました。

「クイント、私の魔力…これが全てよ…天帝の加護（プロビデンス）！」

腰を深く沈め、前かがみになりながらも左手を後ろに突き出したクイントさんに
メガーヌさんの多重補助魔法がかかり、クイントさんの身体が四色に輝き始めました。

「はぁぁ～！…いきますよ、姐さん……クロスファイアー・シュートォ！！

更に、その後ろに構えたティーダさんの二丁拳銃の周りに膨大な魔力が籠められた
スフィアがいくつも形成され、一気にクイントさんへ向けて放たれました。

「えっ、ティーダさん!?　クイントさんになんで!?」

誤射と驚く私でしたが、クイントさんはにっこりと微笑むだけで
魔力弾はクイントさんの横をかすめて、全てマスターの方へ

「ガウッ！」

マスターはどうにか右手だけ拘束を外し、ティーダさんのシュートを弾き落とそうとしますが

「捕えられるか、この動き！」

ティーダさんの放った魔力弾は丸で一つ一つが意思を持ったかのように蛇行し
マスターの爪を交わすと、ゼストさんが付けたヒビに全て吸い込まれ、大爆発。

「ガアアァ！」

マスターの悲鳴に目を背けそうになりましたが、それでも私はマスターを見続けました。
自分の役目を果たす為に…

「見てなさいノア、これが先生から教わった全てを注ぎこんで開発した…」

クイントさんは、足に付けたローラーブーツから火花が飛び散るほど回転させ
マスターへと全力で駆けて行きました、まるで一発の砲弾のように…

「シューティングアーツ…ナックル・バンカー！！」

―バキッ！……ピキッ、バキーン！

鋭い音が辺り一面に響き渡り…何かが割れるような音。
マスターの胸に突き刺さったクイントさんの左手のデバイスが砕ける音。
でも、その音はそれだけではありませんでした。

「アガッ…ガガッ……アアァァ～！！」

クイントさんが拳を抜くと、そこからマスターの全身にヒビが入り、眩しい光が漏れ出しました。
そして、音もなくマスターの全身を覆っていた魔光力が全て吹き飛ばされていき…

「おっと…これでもう、大丈夫ね」

崩れ落ちるマスターの体をクイントさんの右手がしっかりと支えました。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　クロス

……暖かい。
さっきまで冷たかったのがうそのようだ…
そうだ、俺は…クラリスさんを殺して、ロクモを殺して…みんなを、殺して…
ノアを探して…管理局の人を見つけて……襲いかか、って…

「目が覚めた？」

重たい瞼を開けると、目の前には傷だらけの顔をした女性がニコリと微笑んでいた。
どうやらこの人に膝枕をされているようだ。

「……あ、あぁ…」
「ん？　私？　えっと、自己紹介していなかったわね。私の名前はクイント・ナカジマよ♪」
「な、なんで…」
「顔を上げなくていいけど、私の上司のゼスト隊長や他のみんなも後で紹介するわ」
「なんで、そんな顔を俺に、する？」

理解出来なかった。

この人にさっきまで俺は襲いかかっていた。
顔の傷も俺が付けた物…なのに、なんで…なんでこの人は笑顔なんだろう？

「なんでって…嬉しいからよ？」
「うれ…しい？」
「そうよ、だって…あなたをこうして助ける事が出来たんだもん」

なぜだ、なんで俺を助けようとした。
なんで俺なんかを助けて嬉しいんだ？
わからない、わからない…わからないけど、俺がまずしなければいけないのは…

「……動かないで」
「えっ？　あ、傷が…痛みが引いて行く…」

この人の顔だけでも綺麗にする事だった。
力を籠めて、この人の顔に手を伸ばし、回復魔法をかけ、傷を治していった。

「これで、綺麗になった…」
「あ、あはは～…ありがとう、クロス…先生に聞いてた通り、優しいのね」
「俺は…優しくない…だって、クラリスさんや、みんなを…殺した」

それを聞いて、クイントさんの顔が悲しみに満ちていった。

「そう、ね…でも、それであなたが優しくない。なんて事にはならないわよ？」
「どうして…」

ほぼ初対面の俺をどうしてそこまで言えるのか分からなかった。

「う～ん、乙女の勘？」
「ぷっ…姐さん、乙女って…」
「ティーダ～！」
「い、いてて、メガーヌさん痛い！」

何か騒がしいようだけど、俺は顔を動かす事が出来ないでいた。
クイントさんが笑っていたから、その笑顔がクラリスさんに見えた。
その事がとてつもなく辛く感じて、胸が痛くなった…

「クロス？　あなた、大丈夫？」
「……大丈夫」
「嘘言わないの…あ、さっきの話の続きだけどね。勘だけじゃないわよ？」
「えっ？」
「だってあなた、泣いてるじゃない…クラリスさんや皆の事想って、泣いてるじゃない」
「あっ…」

言われて初めて気付いた。
俺は、涙を流していた…それも血の涙ではなく、普通の涙。

「誰かの為に泣ける人は、とても心が優しい人よ」
「うそっ…だ！」
「嘘なんかじゃないわ…だから、遠慮しないで我慢しないで」
「マスター…もう、いいんですよ」

声をする方を見ると、ノアがいた。

涙で頬を濡らしていたが、それでも研究所でいつも俺に向けてくれる笑顔だった。

「もう、我慢しないでいいんですよ。泣きたい時に泣いて…笑いたい時に笑って下さい」

「…ノア…」

「うん、もう大丈夫…あなた達はもう、自由よ」

クイントさんに抱きしめられ、ノアが俺の胸に飛びついて来た。

「…くいんと、さん…」

「クイントさん、なんて他人行儀で呼ばなくていいわよ？　私はあなた達のお母さんになるんだから」

「えっ……」

「…お母さん？」

その言葉の意味が分からず、ノアと二人で顔を見合わせる。

「そう、あなた達二人は今日この時から私の可愛い子供達よ…拒否権は認めません♪」

「で、でも…俺は…プロジェクトAの…」

「それもクラリスさんに…頼まれて？」

「そんなの関係ないの！　先生にも頼むと言われたけど…」

クイントさんはそこで言葉を切り、今まで以上の眩しい笑顔を俺とノアに向け

「それ以上に、私があなた達の母親になりたいの…ダメ、かしら？」

「……マスター…」

「……いい……さん」

「えっ？　クロス、今なんて？」
「…それで、いいよ…母さん」

恥ずかしいと思ったのも生まれて初めてだった。
顔が真っ赤だという自覚を持ったのも初めてで、それでも俺は言葉を最後まで言った。

「っ！　クロス…クロス、ノアッ！」

力強く、そして、優しく抱きしめられ…俺とノアはもう限界だった。

「お母さん…おかあさん、おかあさん！　クラリス…さんがっ、うっ、わあぁぁぁ～！！」
「ひぐっ、うぅ…うえぇ～ん…おかぁさぁ～ん！！」

二人して、泣いた。

「うん…うん、クロス、ノア…今日から私が守ってあげる…だから、泣いてもいいのよ」

クイントさん…母さんも泣いていた、泣きながら俺とノアを抱きしめ撫でてくれた。
周りのみんな、メガーヌさんとティーダさん、リンディさん。
そして、ゼストさんも目を伏せて涙をぬぐっていた。
みんな、泣いていた、いや、泣いてくれた…
俺とノアの為に泣いてくれた。
亡くなったクラリスさんの為に…泣いてくれた。

この日、俺の名前はＡ－１５８３からクロスロード・ナカジマにノアはノア・ナカジマに変わった。

続く

第８５話　「過去編？　クロスロード・ナカジマ」（後書き）

カガヤ
「やっとかけた―…って毎回これ言ってる気が（汗）」

ノア
「今回は…いつもと違ったんですよね？」

カガヤ
「まぁね…リアルと重ねて、ちょっとね（苦笑）」

クロス
「これで過去編残すはあと１話か」

カガヤ
「次回は管理局入りする経緯を書いて…現実世界に戻ります」

ノア
「久々になのはちゃん達が登場、ですか？」

クロス
「長かったなぁ…でもこれでなのは達も出番が…」

カガヤ
「あ、これから先も必然的になのは達の出番長期的に少ない話結構あるよ？」

なのは、フェイト、はやて…ｅｔｃ
「「「「「えぇ～～！！！？」」」」」

クロス
「どういう事だよ（汗）」

カガヤ
「それはあとのお楽しみ～…いつになるか分からないけど（遠い目）」

ノア
「はぁ…こんな駄作者ですが、これからもよろしくお願いしますペコリ（ｏ＿＿）ｏ）」

第８６話　「過去編？　最後の言葉」（前書き）

過去最長かも（笑）

そして、ようやく過去編終了です！

第８６話　「過去編？　最後の言葉」

アースラ艦内

Ｓｉｄｅ　リンディ

「それで、クロスくんはどう？」
「……それが、まだ」
「そう…」

エタンダール研究所を経ってから５時間。
今私達は地上本部へ向けて航行中。
クロスくんは未だに眠り続けていて、ノアちゃんとクイントとメガーヌが側に付いている。
こうなった原因は、クロスくんの暴走が収まった直後に遡る…

・
・
・

数時間前

『リンディ提督…大変です！』
「どうしたの？」

クロスとノアを一旦アースラへ移動させよう。とゼスト達と話していると
研究所内を捜索していた、局員の１人から緊急で通信が入って来た。

『研究所の各地に時限爆弾がしかけられています！　全員に退避命令を！』
「な、なんですって！？…すぐに退避して下さい」

「時限爆弾…そんなものなんて知らない！」

その報告を聞いて私もゼスト達もクロスくん達も驚いていた。

「まさか、ロクモが…」

『どうやら、そのようです…そして、残り時間は、５分…艦長達だけでも退避して下さい』

まるで何か吹っ切れたように話す、武装局員に思わず私は声を荒げた。

「ダメよ！　アースラ、応答して、すぐに研究所内の局員を全員転送を…」

『ダメです、艦長…所内未だにジャミングが激しく…転送出来ません』

モニター向こうのアースラのスタッフ達も悔しさでいっぱいだった…研究所内はジャミングがさっきよりも薄れて、通信は可能だが転送可能とまではいかない…

『艦長！…ダメです、艦長達も戻せません！　何度試したんですが…』

「なんですって！？」

「ぐっ…手はないのか」

「そんな、せっかくこの子達を助けたのに…」

最悪の展開だった。研究所の広い範囲に渡ってのジャミングはまだ解けていなかった。

私と局員達もここから離れた場所に転送して、この場所へと飛んできた事を失念していた。

研究所内はおろか、この場にいる全員も無事に戻る余裕は…ない。
幸いなのは爆発の影響で結界が壊れる事はない、と言う事だろうか。
沈黙が辺りを支配した…だけど

「…ノア」
「終わりました、マスター…魔力データは揃えました」
「流石だな、ノア。ぶっつけ本番だけど」
「私とマスターなら、きっとうまくいきますと」

その時、クイントとメガーヌに付き添われて倒れ込んでいたクロスくんとノアちゃんが起き上がった。
何をしても手遅れ、ここの全員を救う事は無理…と心のどこかで諦めていたのもあり…
私達は2人が何をしようとしているのかもさっぱりわからずにただ見つめていた。

「データ来ました！」
「よしっ、やるぞ…ノア、俺達の…」
「はい、私達の本当の…」

「「【初仕事！】…ユニゾン・イン！」」

2人の体が光を放った次の瞬間、そこには紅い髪を浮かび上がらせたクロスくんの姿が…
これが、2人のユニゾンした姿！

「時間がない…ゼスト隊長、リンディ提督…みんなを一か所に集めていてください、いいですね？」
「…わかった」
「クロス、あなた何を？」

クイントが不安げな顔でクロスくんに声をかけるが、クロスくんはただ微笑んで

「行ってきます、母さん……ギア！」

と、どこかへと消えてしまった。

残った私達は何事かと思ったが、一先ずこの場の全員を一か所に集めて、クロスくんの帰りを待った。
残り時間は1分…もう逃げても逃げきれない…せめて、クロスくん達を待とうと言ったからだ。
そして、しばらくするとクロスくんは突然戻って来た…研究所に突入した数人の局員達と一緒に

「クロス！？」
「時間がない…みんな、隣の人につかまって……行くよ、ギア！！」

どうやって所員を集めてきたのか、何をしたのか聞く暇もなくクロスくんは私と横にいたティーダくんの手を取った。
すると、空間が歪んだような感覚に襲われ思わず目を瞑った。
そして、次の瞬間に目を開けると…そこはアースラのブリッジにいた。

「えっ、か、艦長！？…い、今のまさか…次元転送！？　この人数を一度に！？　キャッ！？」

―ゴゴゴオォー

突然ブリッジが白い光が走った、光の元を見てみると研究所を移し

ていたモニターが
研究所の時限爆弾が爆発した事を示すように白く輝いていた。

「…なんとか、無事にみんな帰って来れ（ドサッ）…っ！？」
「クロス！？」
「お、おい。大丈夫か！？」

ホッと一息付いた所で、何かが倒れる音がして…振り返るとクロスくんとノアが倒れていた。

「クロス！　ノア！…早く医療スタッフを！！」

その後、１時間ほどで目覚めたノアに倒れたわけと何をしたのか聞くと…

「…研究所内の全員の生体データを元にして、次元跳躍魔法を連続して繰り返して
　外にいるリンディ艦長達も纏めてアースラに転送したんですよ…
あと数人多かったらダメでしたけど」

と、すごい事をあっさりと言ってくれたのは。正直全員空いた口がふさがらなかった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ノア

「マスター…早く、起きてください…」

私はベッドですやすやと眠るマスターの枕元に座ってその寝顔を見つめていました。
側ではクイ…お母さんとメガーヌさんが心配そうに見守ってくれています。
正直、まだお母さんと言うのはすごく恥かしいですけど、マスターはすんなりと言っていました。
それほどに…この人はマスターにとって暖かい人、だったんでしょうね。
もちろん、私にとっても…お母さんは太陽のように暖かい人ですけど。

「ノア…クロスの容体はあなたから見てどうなの？」
「分かりません…私もマスターも既存とは別の術式の次元転移魔法を使えます、が…
実際に使ったのは、実は初めてなんです」
「なんですって！？」

メガーヌさんが驚いた声をあげます。

「ロクモやクラリスさんですら知らない事でした。私もそれを知ったのは爆弾があると聞いた時
…マスターから聞きました。マスターは暴走状態で一度使ったらしく、太極の書に記録されていて
ノアも使えるんじゃないかって…それで、自分自身を検索したら…」
「呆れた、それじゃあ本番ぶっつけであんなに大勢を転移させたのね？」

私はあの時は成功するかよりも、この方法でしかみんなを助けられないと思い、半ば無我夢中でした。

でも、そのせいで過負荷がかかり私とマスターは倒れてしまいました。
しかも…マスターはずっと戦い続けていたせいもあり、なかなか目が覚めません。

「はぁ…その事についてはクロスが目を覚ましてから、というリンディ提督の意見に従いましょう」

深く溜息をつくメガーヌさんを苦笑しながら慰める、お母さん。
本当にこの2人はいいコンビなんですね…

「そう言えば、ノア…あなたクロスに渡すものがあると言ったわね？」

思い出したかのように言ったお母さんの言葉に、私は魔法でしまっていた物を取りだしました。
それは私の掌サイズに収まった、小さなクリスタルのペンダント。

「…綺麗なペンダントね、これは？」
「名前はライカフラワーと言います、これは…」

そう言って私は2人にクラリスさんに計画が始まる直前に渡された事と
このクリスタルがどんな力を持っているか話しました。

「離れた相手と繋がるクリスタル、まるで簡易デバイスね」
「これも、太極の書と関係するなら…立派なロストロギアね」

そうだ、これは管理局で言うロストロギアにあたる。没収される恐れがある。

でも2人は没収する気は全くないようだ。

「だって、これは最初からクロスのものでしょ？」
「所有者が決められてるのなら…問題ないわ。クロス以外には使えないものみたいだし」

……なんだろう。本来言ってはならない立場の人のはずなのに…

「うっ…ぅ…ぐっ……こ、ここは？」
「マスター！」
「「クロス！」」

マスターの目が覚めました…良かった、本当に良かったです！
知らせを聞いた、リンディ提督、ゼスト隊長、ティーダさんも駆けつけてくれました。

「クロス…もう、無茶しないで…」
「…く、苦しいよ…母さん」
「っ！！…」

自然にマスターからお母さんと呼ばれて嬉しいのかぎゅーっと思いっきり抱きしめてます。
羨ましいです…でも…

「クイント、嬉しいのは分かるけど…窒息させる気？」
「……あっ、あははは…ごめんなさい、クロス／／／」
「だ、大丈夫、だよ…ケホッ」

少しむせちゃってますけど、でも嬉しかったのはお母さんだけじゃないみたいですね♪

「それで、クロスくん…色々話を聞きたいのだけど、今後の事も含めて」
「……」
「……」
「……」

一瞬にして重苦しい空気になっちゃいました。
リンディ提督が真剣な顔を浮かべていますが、それでも自分の仕事を果たそうとしているだけなのは
私もマスターも分かっていました。
わずか5歳の子供に話しかけるようにではなく、1人の重要参考人に話しかけるようにしているのも

「何があったかは、大体はクイントとノアちゃんから聞きました…」
「はい、どんな言い訳もしません、俺がみんなを殺したのには変わりないのですから…」
「それは罪を償う、クラリスのように…と言う意味か、クロス？」
「……はい」

ゼストさんの言葉にはっきりと頷くマスター
重い空気が一層重くなります…

「…ゼスト、リンディ…入るぞ」
「こ、この声は！？」

突然、スピーカーから聞いた事のない声がして、みんながびっくりしていると
扉があき、がっしりとした身形に明らかに上層部の人間と思う制服を着込んだ男の人と

秘書の人でしょうか、お母さんやメガーヌさん達よりも少し大人っぽい女性が入って来ました。

「レ、レレレジアス・ゲイズ少将!?」
「それに…オーリスまで!?」
「なぜ、ここにる?」

ティーダさんは口をあんぐりと開けて、ぱにくっています。
メガーヌさんも目を見開いて、入って来た女性を見ていました。
そして、ゼストさんは…少し警戒した声を出して男性を睨んでいました。
対する男性、レジアス・ゲイズ少将は最初マスターを見て、驚いた顔を浮かべましたが
すぐにじっと黙ってマスターを見つめていました。

「……少将、だと?」

入って来た男性が少将だと言う事を知り、自然とマスターの目に殺気がやどっていきました。
私も…マスターほどではないですが、嫌悪感を隠そうとはしませんでした。
少将…つまり、管理局の上層部。

「クロス、待って!　…落ち着いて?」
「……分かったよ、母さん…」
「ノアも、ひとまず…ね?」
「はい…」

お母さんに肩を抱かれて、マスターは殺気を沈め、私はメガーヌさんの声に気持ちを落ち着かせました。

「うむ…ここは少し狭いな…だが、この方が都合がいいだろう」
「答えろ、レジアス！」

見ると、ゼストさんだけでなく今は全員が突然の訪問者を睨んでいます。

「……ふっ、警戒されているな」
「…悪いが、このタイミングでお前が来ると言う事だけで疑念を抱くには十分なのでな…」
「何の疑念だ？」

重い口調と鋭い眼光のゼストさんを前にしても、男性…レジアスさんは固い表情を変えません。

「…お前が、クロスの…エタンダール研究所での一連の出来事に関わってるんじゃないかという疑念だ」
「……」
「思えば、あの時…研究所の事を言った時のお前の表情には何か後ろめたい事を隠しているようだったな」
「……」
「さらに…あの研究所には『管理局最高評議会』の命令で動いていた事…そして…」
「ゼストさん、待ってそれは…」

女性が止めるが、構わずゼストさんは続けた。

「レジアス、お前が『評議会』の命令で特殊な任務を命じられた噂があるという事…
正直、俺はこの噂は否定したい…だが、今この場に不自然に現れ

た…どういう事だレジアス？」
「申し訳ありませんが、この一件については捜査権は未だ我々にあります…確かに、地上本部のゼスト隊をお借りしていますが、それでもまだ捜査途中にてこのように次元航行中の艦にまで事前通知もなしに来られるのは、少し越権行為ではありませんか？」

ゼストさんに続けてリンディ艦長も厳しい口調でレジアス少将に迫る。

「2人共落ち着いて下さい！…クロスの前なんですよ？」

黙って聞いていて、マスターを落ち着かせていたお母さんが、少し声を荒げてゼストさん達を止めた。
今にもマスターはレジアス少将に飛びかかりそうだ。

「そ、そうだった…わね、ごめんなさい」
「…すまない」

それに気付いた2人はハッと我に返り、マスターへと振り返り、謝りました。

「……その子が、エヴォリューダー、か？」
「違います、この子はクロスロード・ナカジマ…私の息子です！」
「母さん……」
「姐さん」

今までの話を聞く限り、レジアス少将はお母さんやゼストさんの上司に当たるはず。

その上司に向けて、お母さんはきっぱりと厳しい口調で訂正を求めた。
マスターも母さんの言葉に心を落ち着かせたのか、紅くなりかけた目が元に戻っていました。

「ひとまず私達の話を聞いて下さい、ゼストさん、リンディ艦長…」
「そうだな、さっきはすまない、レジアス、オーリス」
「オーリス一尉…お願いします」

場が落ち着いたところでレジアス少将はマスターを、そして、私をもう一度見てから…口を開きました。

「ここへ来た理由を話す前に、さっきゼストが言った事について説明しよう…
俺は確かに、評議会からある話を持ちかけられた…それも、人造魔導師についてだ」
「な、なんだと！」
「最後まで聞いてくれ、ゼスト…確かに俺はお前にも話した通り、脆弱な地上の戦力を欲していた。
だが！　そんな非合法で不安定な力に頼るつもりはない。とあの時は断った」
「……」
「しかしだ、それでも地上本部の戦力不足は一向に解消へと向かわなかった…俺は焦りを感じていた。
このままでは手遅れになるのではないかと…あの時断ったのは間違いじゃなかったのかと…」

そこで、レジアス少将は深く溜息をつき、マスターの方を向きました。
マスターは落ち着いていました…いえ、おちつくどころか無表情で

した。

「そこに、お前達からこの計画の事を聞き、もしやと思い…オーリスにすぐに極秘に調べさせた」

「…時間がなかったけど、クラリス博士からのデータと以前に父さ…少将に持ちかけられた時のデータを急いで照合させて…一致する部分が沢山ある事に気付いたのよ」

どうやらオーリスという女性はレジアス少将の娘みたいです。

「俺は自分の目で確かめようと…まだアースラにいるうちに秘密裏に接触したかった

そこで、こうやって無茶をしたが…管理局へ移送中のアースラにやってきたわけだ」

「ここなら、盗聴などの危険性は薄い、そう私が判断したのよ」

「……教えてくれ、あそこで…エタンダール研究所で何があったのかを…」

まるで懇願するかのように…いや、実際にレジアス少将はマスターに頭を下げお願いした。

「なっ、レジアス！　お前は…」

「いいんだ、ゼスト…大まかな予想はつく、この場にクラリス博士がいない時点でな…

それでも、俺は真実を知りたいのだ…まだ5歳の幼いこの子が…こんな顔をするようになった理由を…」

マスターは動きません、無表情に何も感情を浮かべずに…レジアス少将を見ているだけです。

「ですが、それは…あまりにクロスにとって…」
「残酷でも、卑劣でも……俺はなんと思われようとも、知らねばらない…地上の平和を守る者として…
1人の子を持つ親としてもだ！」
「……いいよ、俺とノアに何があったか…あそこで何があったか…話すよ」
「クロス、でも…辛い事をわざわざ話さなくても…あとでレジアス少将には報告を…」
「そうだぞ…お前の口から話す事はないんだ」
「いいんだよ、俺も自分の口から話さないと…でないと、自分が起こしたって実感が薄れていくんだ
実感は薄れても感覚は色濃く残るんだ…クラリスさんを刺し、皆を切刻んだ感覚が！」

誰も何も言えません…
母さんがそっとマスターの涙をぬぐいました…そして、私の涙も…
それを見て、レジアス少将は辛い顔を、オーリスさんも涙ぐんでいるようでした。
だから、私も、この2人になら話しても大丈夫だと…思いました。

そして、全てがマスターと私の口から語られました…
エヴォリューダー…プロジェクトA、太極の書について…
クラリスさんとの出会いと、クラリスさんが立てた計画が私のせいでロクモに漏れていた事も
ロクモのせいで…マスターが、クラリスさんを殺し…研究所の『人間』を皆殺しにした事も。
無表情に話すマスター…その目は涙で濡れていましたが、構わず話し続けました。

「な、何と言う事だ！！」

―ガンッ！

話を聞き終えたレジアス少将は近くの机を、血がにじむ程に強く握りしめた手で叩きました。

「そんな…うそ、みたいなことが…」

「俺達も、ある程度は想像していたが、まさかそれ以上とは…それにしても、評議会め！！」

自分が所属する組織の罰、人とは思えぬ所業の数々、卑劣な罠に翻弄され苦しんだマスター…

それらに対する、怒り、憎しみ…同情を超えた悲しみ。

心の底からの様々感情の爆発。

２人のそれを見たマスターの目が、少し柔らかくなりました。

そして、リンディ艦長や母さん、ティーダさん達も改めて私達の話を聞いて

涙を流し、怒り、言いようのない苦痛を浮かべてくれました…

「…ありがとう、ございます…」

「？　なぜ、謝る？　謝るのは俺達の方だ！」

「そう…無関係だなんて言えない…私達の所属する管理局が仕組んだ事だもの…」

「それでも、俺は…礼を言いたいんです。そこまで…心の底から想ってくれる皆さんに…」

優しく微笑んだマスターを私は…見る事が出来ませんでした。

涙で滲んで、マスターの顔がよく見えなかったんです。

「…実は、クラリス博士のデータを調べて、ある事が分かったんです」

涙を拭いて、真剣な表情を浮かべたオーリスさんが壁のモニターにデータを表示させました。

「これ…は、研究所の職員の名簿！」

「クラリスさんも…ロクモもいます！　しかも…その横にある文字は…」

ＤＥＡＴＨ…つまり、死亡。それも、昨日今日の日付ではありませんでした。

「どういう事だ…なぜ、全員が数年前に死亡した事になっているんだ！？」

「データの改竄、表立っては気付かれないように…データ上、所員全員は死んだ事になっています」

「…つまりだ、クロス…お前に殺人の罪は…」

「そんなの詭弁だ！　俺は…俺の罪は、消えない！！」

突然立ちあがったマスターはモニターを…映った壁を殴り付けました。

「こんな誤魔化しで…俺の罪がないから…俺にお咎めなしって事なのか！？」

「……そうだ、お前が殺した実験体も…データ上、存在してはいない…研究所もだ」

「っ！　データ上！　…俺が殺したのはただの死人で作りものだとでも言うのか！！」

「落ち着け、クロス！」

レジアス少将に飛びかかったマスターをゼストさんとティーダさんが止めました。

「…ふっざけるなぁ～！！！」

「お前は…何もしていない……だから、管理局はお前を、犯罪者としては追えない」

「っ！？」

突然、マスターの力が抜けたように崩れ落ちました。

私もレジアス少将の言葉の意味が…なんとなく分かって来ました。

「クロス、お前はただゼスト隊が保護した、クイントの養子だ…それ以上は、ない。勿論、ノアもだ」

「つまり…クロスはプロジェクトＡとしても太極の書の主としても…」

「管理局は表だって追う事は出来ない、と言う事よ…裏でこそこそ動きそうだけど…それは

こっちでどうにでも出来るわ。非合法の手段に対しては、ね」

マスターは……認めたくないですけど、プロジェクトＡの成功体でアルハザードの太極の書の主です。

本来ならば喉から手が出ても手に入れたい存在。

ですが、ただの孤児として保護されたマスターには…管理局は確保できない。

ユニゾンデバイスである私は…

「でも、ユニゾンデバイスであるノアの主であるのだから、管理局はそこで手を伸ばしてくるだろう…」

「だからいっそのこと、レジアス少将の保護下の元で、管理局に入らないか、ね」
「わざと自分達の足元に置く事で…余計な手出しを防ぐ、か」
「勿論、懐に入れば入る程、手が届きやすくなる。黙って放浪したり、誰かの保護下で隠すよりも…」
「向こうの出方が分かりやすい…」

ゼスト隊のみんなもレジアス少将の言葉の真意がわかったようです。
ですが、肝心のマスターが…

「俺は…管理局に入らない…俺はエヴォリューダー…殺人衝動の塊だ。いつ誰に迷惑をかけるか…」
「はい、ストーップ！　そういう話は私の息子になった時点で無意味よ？」
「うっ…ぐっ」

確かに、マスターはお母さんの息子である事を受け入れました。
今更撤回…はする気ないようですし、私もその時は止めます。

「いや、でも……俺は…管理局では…」

ここで…アレの出番でしょうか

「マスター…実はお渡しするものがあります。クラリスさんから預かったものです…」
「クラリスさんから！？」

そう言って私は小さなライカフラワーをマスターに手渡しました。
すると、フラワーは見る見る大きくなり、マスターの手に収まりました。

元々この大きさだったものを私が魔法で小さくしたんです。

「……クラリスさん…」

―ピカッ！

「わっ！？」

「ま、眩しい…なんだこの光は！？」

「ペンダントからよ…」

マスターがライカフラワーを握りしめた途端に、フラワーは眩しく輝きだしました。

そして、ある映像が浮かんできました、それに映っているのは…

「クラリスさん！」

「先生！！」

「この人が…クラリス博士」

これが、クラリスさんが言っていた…メッセージ。

・

・

・

クロスへ

この映像を見ているって事は…私の計画は半分失敗したみたいね。

多分、計画は露見して、私は死んだけど、無事にクイント達に保護されている…っていう所かしら？

当たってると嬉しいなぁ、私預言者！？…なーんて、湿っぽいのは私らしくないから軽く言ってみたわ♪

ふふっ、どう驚いたかしら？　本当はこういう性格なのよ、私は。

知らなかったでしょうけどね。
でも、こうなるなら…もっと、あなた達に見せればよかったわね…
あーもう、湿っぽいのはダメって言ったばかりよね、うん…気を取り直して、大事な話をするわ。
私はね、昔有名な格闘技の魔導師で、遺伝子科学者でもあって……
家族もいたわ
夫の名は『リット』　息子の名前は『ソラン』…
素敵な人だったわ、息子も可愛かったし…って惚気はやめておくわ、ゼストやリンディ達に散々言ったし。
……最高の家庭だったんだけど、ある日、皆纏めて事故にあって、私1人だけ助かったのよ。
それ以来、私は格闘技の道を捨てる事になったの…後遺症で続ける事が出来なくなったの。
そして、魔導師としても実戦型じゃなく研究者としての魔導師としての道にしか残されてなくて…
だからそれからの私は遺伝子科学者と魔法の研究に明け暮れたわ…
それかすぐの事、私は『ＤＥＬＶＥＲ』に誘われたわ。

『あなたの手で最高の魔導師を生み出しませんか…あなたの息子を！』

最初は何の事言ってるか分からなくて、息子とか言うから、ブッ飛ばしたんだけど
だけど、何回もしつこく勧誘してくるから、一先ず話だけは聞く事にしたの。
そして、興味が沸いて…研究に参加したわ。
人造だろうと何だろうと、私はせめて、息子と呼べる存在が欲しかった…それだけだった。
その頃にクイントに出会ったの、こっちもしつこく逆勧誘されたわね…

あなたの弟子にしてください！…って、でも…良い思い出よ。
今にして思えば、研究に乗ったのが間違いなのか正しかったのかは…微妙よね。
だって…断ってたらあなたやノアに出会えなかったのだから。

後の事はあなたも知っての通り…そして、挙句の果てがこの始末、最低ね私。
もうあまり時間がないから…最後に言うだけ言っておくわね。
…あ～そうそう！　もし可能ならばゼストとクイントとリンディを呼んで！
可能だったらでいいから、ほら一時停止押しても…ってそんなのあるわけないわよねぇ
それじゃ、みんないるって前提で話をするわ。

まず…ゼスト。私の我儘と罪の尻ぬぐいを頼んで、ごめんなさい。
でも、あなた達にしか頼めなかったの…
この研究所や組織の裏に…管理局とかそれに近い存在がいるような気がして…勘でしかないけどね。
尻ぬぐいついでに…あなたとクロスにその気があるなら、クロスを鍛えて欲しい。
クロスは人殺しを嫌い、誰かを傷つける事も本当は嫌ってる優しい子。
でも、その優しさを利用しようとする輩が絶対に出てくる…その為に、この子を鍛えて欲しい。
勿論…私はクロスとノアには戦いとか管理局とか無縁でいてほしいわ。
だから、クロスの意思で決めて欲しいの…本当にわがままでごめんなさい。
ってそうそう、言い忘れてたわ！　あなたいい加減に恋人作りなさいよ？

もういい歳なんだから、年下でも年上でも、あなたにお似合いの奥さん…見つかるといいわね。
でも…なんだかあなたの側に素敵な人いるような気がするのは、気のせいかしら？♪
じゃ、私は地獄にいるだろうけど、あの世にはあと６０年くらい来るんじゃないわよ？
早く来たりしたら、容赦なく現世へ蹴り落とすんだから♪
今までありがとう…さようなら……またね。

次、リンディね…
あなたとはよくお酒を飲んだわねぇ、最近はいけないのがすごく残念だったけど。
あの人も交えて３人で…将来はもっと大人数で飲むぞー！　だなんて、よく言ったわ。
でも、それも適わないわね…色々な意味で。
ま、一足お先にこっちで大宴会開こう…って思っても私は地獄行き確定だから無理か。
うん、こうなったら蜘蛛の糸でも掴んでクライドやリット達と無理やり宴会開いてやるわ！
だからあなたは…現世で、良い男見つけなさい…そして、幸せになりなさい。
クライドが悔しがる姿、私がしっかり見てあげるから…クロノの為にもね。
とはいっても、やっぱりあなたの意思次第よねぇ…あ、クロスはダメよ！？
私、義理でもあなたの母親になるなんて嫌よ！？
っとと、あの子を勝手に息子呼ばわりはよくないわね…うん、反省。
と・に・か・く…あなたは生きて、幸せを掴んで…それから、老いてこっちに来なさい。

こっちに来たら、ゼストも合わせて惚気話をたーっぷり聞かせてもらうわ…
それじゃ、今まで親友でいてくれてありがとう、さようなら。また会いましょ♪

次は、クイント！
まずは…あなたには欲を言えば…クロスとノアのお母さんになってほしいなぁ。
なーんて、既に他の誰かが母親になってるかもだけど。
って、それより先に言う事あったわね。ありがとう、こんな私の後を継いでくれて
私の弟子になってくれて…生きがいを与えてくれてありがとう…
あなたのおかげで私は芯まで腐る事なく生きる事が出来たわ…表面はボロボロに腐り落ちてるけどね。
私なんかに学びたいと真剣に言ってくれたあなたの瞳、絶対に忘れないわ。
その綺麗な瞳で、もっと色々な世界を見て回って頂戴、素敵な旦那さんと一緒にね♪
それと、実はクロスにもあなた同様に私の技の基礎や格闘術の体の動かし方を教えているの。
あなたにとっては、弟弟子ね。だから、いつか対戦して見るのもいいんじゃないかしら？
私は地獄…いや、無理やり天国に這い上がって素敵な兄弟弟子対決を見守る事にするわ。
でも、クロスが大きくなってからよ？　いくらクロスでも…小さい身なりではハンデありすぎだもの。
酒の肴になってもらうんだから、もっと2人とも強くなって、最高の格闘技の使い手になって
私を満足させなさい！…それが最高の師匠孝行よ♪

それじゃあ…元気でね。さようなら、私の最高の愛弟子、クイント・ナカジマ…またね。

最後に…クロスとノア、2人まとめてでごめんなさい。
2人との時間、その一秒一秒が私にとって最高の時間だったわ。
あなた達にとって、どんな時間だったか分からないけど…私には最高だったわ。
ごめんなさい、とありがとう…2人にはこの言葉を何千回送っても送り足りない…
本当は生きて償いたかった…側にて守りたかった…っ…
でも、もう無理なのよね……もう、私はあなた達を見守る事しか…ぐっ、出来ないのよね。
2人共、他の誰かに任せるしかないのが…とても悔しいわ。
あなた達は私にとって…子供同然、いえ…あなた達だけじゃないわね。
クロスの兄や姉…その全てが私にとっての子供…
その事に気付かせてくれた…それもあなた達への感謝の1つ…
……っ…うっぐ…あ、アレ…ごめんなさい……何言おうとしたんだっけ…
…い、いやね…年取ると…っ、涙、もろくて…
泣きたいのは…あなた達なのに……私たち、の勝手で生み出されて…封印解かれて…
無理やり…ひぐっ、研究させられて…それで、勝手に母親づらしても…じぶんかって、よね。
わたし、おやとしても…ひととしても、なににし…ても、最低よね。
ごめんなさい…ごめん、なさい……こんなことになって、ごめん…
…なさい
ズズッ…もう、時間ないけど……ぐっ、ぅ…言わなきゃいけないことがあるわ。

……生きなさい、クロス、ノア。
何がなんでも生きなさい…例え、辛い事悲しい事があっても…最後の最後まで諦めずに生きなさい。
あなた達は人を殺す為に生れて来たんじゃない、誰かを傷つける為に生れて来たんじゃない。
それを…あなたの人生で証明しなさい…あなた達は、あなた達の意思で生きる為に生れてきたんだと。
願わくば…戦いとは無縁のどこか平和な星で、出来れば地球でひっそりと生きてほしい…
あなた達が生まれた惑星で…でも、あなた達が管理局の、自ら戦いの中に生きると言うならば…
止めないわ、あなたの生きる道を他人が決める事はおこがましいものね。
でも、道を示す事は出来るわ、あなた達が進む道は…人殺しの道だけじゃないという事をね。
素敵な人の事と恋におちて、子を生み、孫に囲まれて生きるのもいい…
どこかの世界で王様になって、国民と一緒に繁栄するのも…これはおおげさかしら?
それでも、あなた達が戦いの道を選んだのなら…1つ、お願いしたいの。
道を選ぶのは自分だ、って言っておきながら変な事だけど。
……もうこれ以上、クロス、あなたみたいな子が生まれないように戦ってほしい。
生まれつき、他人に勝手に生み出されて、勝手に運命を押しつけられて…
自分の意思を殺したまま生きる子を、誰かの操り人形にされた子を…解放して。
そんな子を生み出そうとしている人を…止めて。
もう、こんな事を繰り返させたくない…それが私の願い…

そして、生み出されてしまった子達に教えて…
自分の道は自分で決めて歩むものだと。
誰にも道は決められない、と運命なんてないと…自分で切り開けるとあなたの人生でそれを教えてあげて…
誰かの手を引くだけじゃなく、そっと肩を叩いて視野を広げてあげる存在になってほしい。

それが…クロスロード（交わる道）とあなたに名付けた意味。

ごめんなさい……こんな事言うとあなたの人生、私が決めつけちゃうみたいだけど…
全部含めて、闇魔さまに叱られてくるわね。
ノア…あなたの記憶、戻るといいわね…そして、あなたの探し物も見つかるといいわね。
あなたが何かを探しているのは感づいてたわ…それはマスターだけじゃないのでしょ？
2人で焦らずに、じっくり…見つけて…

それじゃあ…また１００年後くらいに会いましょう。
あなた達が来たら、私は無限地獄の果てからでも迎えに行くわ。
って、全部…すごく縁起でもない事で締めてるわね。
訂正！！ゼストもクイントもリンディも…他の来れを見ているみんなも。
全員、精一杯生きて、簡単にこっちに来ない事！

……ばいばい、さようなら…愛しい私の子供達…

・　・　・

誰も、何も言わなかった。
言えなかった…みんな泣いていた。
ゼストにティーダやレジアスすらも、目に涙を浮かべて男泣きしていた。

「……ありがとう、お母さん」
「マスターと…一生懸命に生きるよ、お母さん」

クロスとノアはいつまでもクラリスの映像を見つめていた。
やがて、ライカフラワーの光は弱くなり…映像は途絶えた。

「俺、管理局に入るよ」
「当然、私もです！」
「クロス…ノア」
「…いいんだな？」

真剣な顔でゼストがクロスとノアを見る。
もう後戻りは出来なくなると目が言っていた。

「管理局に入って…あいつらに復讐してやるんだ」
「…クロス」
「俺は、人殺しの為に生れて来たんじゃないと、大切な皆を守りながら生きていく事が俺の復讐！」
「よく、言ったな、クロス」

ティーダが涙目でクロスの肩を叩く。

「でも、それだけじゃないよ…管理局が人造魔導師に関わってると言うなら……」

・

・　・　・

暗転…

太極の書によって過去の世界を見せられていたクロスやなのは、はやて達の視界がまた黒く染まった。

そして、光が戻ると…そこは地上本部、レジアスの部屋だった。

過去のレジアス達と同じように、なのは達全員が泣いていた。

なのははやて、シグナムやザフィーラ達守護騎士もフェイトはプレシアに抱きついて、アルフと一緒に3人で泣いていた。

ゼスト隊も…過去を思い出し、泣いていた…

クロスとノアも涙を流していた…クイントとゲンヤが後ろから優しく抱きしめている。

クロノやユーノも顔をふせていたが…涙が滴り落ちている。

しばらくの間、レジアスの部屋からはすすり泣く声が止まる事はなかった。

続く

第８６話　「過去編？　最後の言葉」（後書き）

カガヤ
「気が付いたら、こんな時間になってたー！？」

クロス
「昼寝したんだからいいでしょ」

ノア
「それにしても今午前3時半ですけど、微妙に空明るくなってますけど…」

カガヤ
「んじゃ後書きこれくらいでいいね、おやすみなさい～」

クロス、ノア
「「うぉい！！（汗）」」

第87話　「強く、深く、悲しい決意」（前書き）

この小説のメインヒロインは誰だろう？
ヒロインならホント沢山いるし、これからも増えるんだけどね。

ノア
「……σ（゜ー＾＊）」

あ、ちなみにノアはメインヒロインじゃなくメインマスコットだから（笑）

ノア
「ガ━━（＝｜ 口｜ ＝）━━ン！！」

第87話　「強く、深く、悲しい決意」

時空管理局地上本部　レジアス中将の部屋

部屋には未だになのは達のすすり泣く声だけが小さく聞こえた。
ゼストやレジアス、大人達も黙って泣いている子の頭を黙って撫でている。
クロスは…1人窓辺に経ち、空に浮かんだ満月をただただ眺めていた。

「……クロス。あなたに謝りたい事があるの」
「プレシアさん、何をですか？」

抱きしめていたフェイトを脇へと座らせ、プレシアがクロスの側へと寄って来た。
そして、そのまま地面に手をつき、何度も頭を下げた。
クロスは窓を向いたままだ。

「私は以前…あなたの事をよくも知らないで…ひどい事を言ってしまったわ…本当にごめんなさい！」
「……」

『他の実験体の子供達や研究所員を皆殺しにして生き残った。地獄から生み出された子なのよ！』

以前、プレシアに言われた言葉を思い出したクロスはあぁと声を上げたが
すぐに口元に笑みまで浮かべて、プレシアへと向きかえった。

「なんで謝るんですか、別に嘘ついたわけでもない…俺は、プレシアさんの言う通りなのは
今見た映像でわかったじゃないですか…もっとも、映像で見せる事になるとは思いませんでしたけど」
「それでも、あんな事があったのに、私は無意味にあなたの傷を広げてしまったわ…」
「お母さん…」
「プレシア…」
「…う～ん、別にあの時も今もなんとも思ってなかったんだけどなぁ。それは、今は置いといて…」

クロスはプレシアだけでなく、涙にぬれた顔でこちらを見るなのはや、はやて達も見渡した。

「あの後、俺とオーリスは徹底的にあの研究所を調べ上げた。もちろん秘密裏にな」
「でも…評議会までたどり着ける証拠は何も出てこなかった…」

オーリスは悔しそうに拳を握った。
実際に関与されたと思われる数名の上層部の逮捕には成功したが、とかげのしっぽ切りだった。

「クラリスさんがノアに託したデータを解析した結果、プロジェクトAの研究データの一部が
様々な研究者に流れている事も分かった…その中の一人が」
「…私ね。フェイトが生まれる数年前に私はとあるルートから人造魔導師のデータを手にしたわ。
理論上は完璧だった、だからその理論を応用して私はフェイトを…生み出した。

そして、数年後にプロジェクトAの顛末を知ったのよ…」

悔やむように俯くプレシアの手をフェイトが優しく握った。

「フェイトを初めて見て、プロジェクトFで生み出されたって事に気付いたのも、そのせいだよ

俺は、そういうのに昔から敏感だったからね。そして、フェイトの裏にプレシアがいると気付いた」

「俺達も別件でプレシアの捜査をしていたから、合流出来たというわけだ」

ジュエルシードの一件で地上管轄のゼスト達が介入してきた理由。秘密裏に捜査していた、プロジェクトAから派生したいくつもの人造魔導師計画の剣があったからだ。

「正直言って俺は、プロジェクトAの研究データを受け取った科学者達を…全員殺す気でいた」

「っ！」

真顔で話すクロスの言葉にフェイトは顔を青ざめ、プレシアを見上げた。

対するプレシアはどこか納得したかように黙っている。

「あの研究所で起こったような事はもう絶対に起こさせない、とクラリスさんと約束したから

だから、４年間はゼスト隊長達に鍛えてもらって少しずつ知識も覚えて、捜査官の資格も取った

でも…」

そこでクロスはまたプレシアとフェイトに目を向けた。

「どんな経緯でも生み出した親に代わりはない…そして、生み出された子は生んだ人を
親と慕い、愛情を求めて…特に命をかけても役に立とうとする…俺も同じだったから
プレシアさんも最初はフェイトを駒のように扱ってたけど、それでもフェイトは
期待にこたえようと、願いをかなえようと必死になった。プレシアさんも最後には
一人の母親に戻った…それを見て、全部が全部根っからの悪人だと思えなくなったんだ」
「クロス…」
「だからと言って、人造魔導師を生み出す研究者達を無条件で許す気はないけど。
でも、少しはどんな想いで新しい命を生み出そうとしているか…知るのもいいとね」

黙ってクロスの話を聞いていたレジアスはそこで深く溜息をついた。

「全くお前という奴は…おかげで俺やオーリスがどれだけ苦労した事か」
「あら、お父さん喜んでプレシアの一件に色々根回ししていたじゃないですか？」
「あ、あれはだな…色々事情を聞いた上での決定だ」

そんな、レジアスをオーリスは笑いながら冷やかし、クイントとメガーヌがニコニコと見ていた。

「ま、まぁ、それで人造魔導師計画の事を色々調べてるうちに、戦闘機人の事をプレシアさんから聞いて

ギンガやスバルもその過程で見つけて保護した…のは、もうはやて達にも言ったよな？」

「…う、うん…せやけど、裏でこんな事情があったんやな」

はやてやシグナム達も暗い表情を浮かべた。

「ごめん、みんな…こんな話を聞かせるだけじゃなく、見せる事になって…でも知ってほしかったんだ」

俺の過去を、何があったのかを…そして、俺がどんな罪を犯したかを…」

そう言って、クロスは胸元に両手をかざした。

すると、光が漏れだし、クロスの手に1冊の黄金の書が現れた。

「でも、まさか実際に過去の映像を見せる事になるとは思わなかったよ…」

「なのはちゃん達に口で説明するよりも見せた方がいい。とは思ってたんですけどね」

「それをこの太極の書が…気を利かせたというか何と言うか…ともかくこのタイミングで教えた理由…

それは、今からみんなが入る管理局の裏の顔を知ってほしかったから」

クロスの表情が硬くなり、目には怒りが浮かび上がって来た

「俺は…全ての元凶である評議会を絶対に許さない。いくつもの命を弄んだあいつらを…

殺戮兵器を生み出したあいつらを必ず…潰す。でも、今評議会を潰すと同時にいくつもの

上層部を逮捕する事にもなる。そうすれば管理局は崩壊し、いく

つもの世界に混乱が巻き起こる…」
「それほどに…評議会の張った根は深い、と言う事だよ」
「でも、それだと何も出来ないって事じゃ…」
なのはの問いにクロスは笑みを浮かべて

「簡単な事だよ…物理的に潰すだけじゃなくて、管理局ごと変えるんだよ」

とさも簡単そうにとんでもない事を言った。

「管理局を…」
「変える？　どういう事？」
「…今はまだその時じゃないから、その時になったら話すよ」

肝心な部分をはぐらかした。
そんなクロスに不満の声をあげるなのは達の前にクロノが進み出た。
クロノとエイミィは過去に何があったかを断片的にしか知らされていなかったので
評議会が黒幕だと知らされてなのは達以上にショックを受けていたのだ。

「クロス…評議会の依頼でエヴォリューダーが作られたと言ったが…大丈夫なのか？」
「大丈夫、とは？」
「評議会が研究所の顛末を知っていて、お前が評議会を憎んでいる事を…奴らは知っているんじゃないか？」
「……」
「そ、そうだよ！　そんな不穏分子を自分の足元に何もせずに置いとくわけない…」
「大丈夫だよ、エイミィさん。切り札は…ここにあるから」

そう言ってクロスは自分の胸元を指さした。

「太極の…書？」

「あいつらはこの書の力を全て使いこなせる事を望んでいる…だから、それまでは俺に手は出せない

もう1つ、俺自身があいつらが違法で外道な行為をしていたっていう証拠とも言えるんだ。

そして、色々俺に経験を積ませる為に、色々な特権を俺に与えようとしているんだよ。

ま、首輪は…付けてるつもりみたいだけどね」

クロスの視線の先にはフェイトやプレシア、それになのはやはやてのの姿…

「まさか……」

「そっ、レジアスのおっちゃんの力もあるけど、色々な一件が比較的に穏便に済んでるのは」

「クロス君への…いざという時の人質にするため…」

「それじゃあ、お前は…まさかなのはとユーノを協力者としようとする時から…」

「こうなる事は…半分は予測できたよ…人質の中になのはやフェイト達が組み込まれる事にもね」

―バキッ！

表情を変えずに話すクロスをクロノが思いっきり殴った。

そして、クロノにしては珍しく激昂してクロスの襟元を掴み上げた。

「貴様…自分の言ってる事が分かってるのか！　お前はなのは達が

人質になると分かってて
こっちの世界に引きずり込んだんだぞ！」
「クロノ君！」
「やめなさい、クロ……クイント？」
「いいから、黙って見ていて、リンディ」

クロノを止めようとしたリンディとエイミィを止めたのはゼスト達だった。
シグナム達もノアが止めた。

「……あぁ、分かってるさ。こっちの世界に関わるどころか、俺と関わった時点で…なのはもフェイトも、プレシアさんも…そして、今ははやて達もそれに組み込まれるって事はしかも、その原因が自分でわざと招いているって事もな」
「クロス！…「守って見せるさ！」っ！？」

さらに殴りかかろうとしたクロノは、ふとクロスの瞳に宿る強い意志の光に一瞬戸惑った。

「俺には…やらなきゃいけない事がある。管理局のくそったれ共をぶっ潰すって事がな！
でも、俺やノアだけじゃ何も出来ない！　ただ闇雲に壊すだけで済む事なら…とっくにしている！
でも、それじゃダメなんだ！　俺は証明する…俺は人を殺し、何かを壊す為だけに生まれたんじゃないって！
そのために…なのは達が、１人でも多くの仲間が必要なんだ！」

胸の奥に溜めこんだものを吐きだすかのようにクロスは強く叫んだ。

「矛盾してるんだよ、俺は！　大切な人を傷つけたくないと思っても…その人達を巻き込んでるんだから！
だから、俺は…守るんだ！　なのはもフェイトもはやてもシグナムもヴィータもシャマルもザフィーラも
ユーノにアルフにプレシアさんに母さん達だって…俺の大切な人は絶対に守って見せるんだ！
俺はエヴォリューダー、これは変わらない事実…でもこの力を俺は人殺しじゃない…
大切な人を守る為に使う…そして、俺は俺の目的の為ならなんでもする！　どんなに遠回りでも
どんなに険しい道でも、みんなで笑っていけるような道を選んで…突き進んで見せる！
だから！」

突然、クロスはなのはやフェイト達に向かって土下座をした。

「なのは、フェイト、はやて…みんな、力を貸してくれ…管理局を変える為に…俺の目的の為に！
俺は卑怯で勝手だ。自分の過去を話して、同情を引くような真似をして…退路を断って…
それでも、俺は…俺は、絶対に皆を守る…どんなに俺を憎んでも嫌っても構わない…だから」

クロスは必死だった。
思えばジュエルシードの事件でなのはとユーノを自分達に協力するように遠まわしに仕向けたり
フェイトやプレシア、シグナム達のように次元犯罪者とも呼ばれる扱いの者達を利用して…
そして、自分の目的の為に協力して欲しい…それも管理局という巨大な組織を変える為に。

その為に、人質になるとしても、それすらクロスは利用しようとしていた。
なのは達はお互いに顔を合わせ、ユーノやシグナム達共小さく頷き合った。

「クロスくん、顔をあげて？　クロスばかり話したんだから…今度は私達の話も聞いて欲しいな」
「フェイト…」
「色々言われても私ら、まだ子供だから何の事かさっぱりわからんで？」
「はやて…」
「でもね、これだけは分かるよ…クロス君がどれだけ私達の事を考えてくれていたか」
「なのは…違う、俺はなのは達を利用…」
「別に僕たちはクロスに利用された覚えはないよ？」
「…ユーノ」
「あたしらは今までずっとあたしらの意思で行動してたんだ。勝手に自分の意思と思われたくないね」
「アルフ…」
「常にお前は私達の為に、戦い傷付き守ろうとしてくれた…」
「シグナム…」
「そこに下心を少しでも感じてたら、あたしらはここにはいねぇよ」
「ヴィータ…」
「だから、そんなに自分を卑下しないで…あなたはとても優しいのは私達全員が知ってるわ」
「シャマル…でも俺の両手は…血塗られている、親や兄や姉の血で。そんな俺が…」
「我らも過去に主の命だと何千人も手にかけてきた、お前の比ではない…」
「ザフィーラ…」

「お前の覚悟は確かに聞いた…でもお前1人に全員の命預けるのは不安だから…僕も力を貸すよ」
「クロノ…」
「そうそう、クロス君がどう思っていようとも、なのはちゃん達が言った事が全てだよ♪」
「エイミィさん…」
「今この場にいる全員、誰もあなたに利用されたと思っていないし…あなたの力になりたいと思ってる
それだけで十分でしょ？」
「リンディさん…」
「少しはここの者を信用しろ。そして、守ると言ったのだ、最後まで守ってみせろ」
「ゼスト隊長…」
「戦って、皆と共に生きなさいクロス。それがクラリスさんが願って、あなたが決めた道でしょ？」
「メガーヌさん…」
「ってかクロス、お前はまだ子供なんだ。だから、今からそんなに難しく構えるなよ、禿げるぞ？」
「ティーダさん…」
「そうだ、汚い仕事は俺達大人に任せて、お前は子供らしくゆっくりと前に進め」
「おっちゃん…」
「あなたはエヴォリューダークロスロード…様々な人と道を交え、守り、生きていく子…でしょ？」
「オーリスさん…」
「そして、私達の自慢の息子…胸を張りなさい…何かあっても私達が守るわ」
「お母さん…」
「もう少し肩の力を抜け、クロス…お前には今、何が見える？　ただ利用するだけの道具か？」

「お父さん…ううん、見えるよ…大切な人が、友達が…俺の大好きなみんなが！」

「マスター、始めましょう…ここから、みんなで…」

「そうだな、ノア…うん、始めよう！」

ここから始まる、クロス達の困難な、大きな道が…

続く

第87話　「強く、深く、悲しい決意」（後書き）

カガヤ
「はい、現代に戻ってからの決意表明でした！」

クロス
「うっわぁ～…なんか俺めっちゃ頭痛い子だな…」

ノア
「いいじゃないですか、熱血で♪」

カガヤ
「管理局を変える…道のりは長いなぁ」

クロス
「それでも、みんながいれば…出来ると思う」

ノア
「そうですね♪」

カガヤ
「ではでは～そろそろ贖罪の記録も更新したいところですが…次回は日常とこれからのクロス達についてを半々くらいでやっていく予定です」

第８８話　「誕生日（前）」（前書き）

シリアス終わってほのぼのイベント～前後編！
今回はなのは達のターン…になればいいなぁ（遠い目）

第８８話　「誕生日（前）」

４月下旬

海鳴市　アースラ隊　臨時作戦本部　改め　第９７管理外世界観測隊　観測本部

「こっちセッティング終わりました、エイミィさん」
「はいは～い、私の方はあと少しかな、レーダーの方はどう？　クロス君」
「海鳴市中心に日本全域をカバー…完了！」

今まで臨時作戦本部と一時的なクロスやフェイト達の駐屯地として使用していた一軒家。
これからはここが正式にクロス、ノア、フェイト、クイントの滞在場所になった。
と言うのもクロス達の今後の配属先に関係してくる。

まずは、なのは。
その高い魔力値と教導官の適性を買われて、時空管理局武装隊の士官候補生となった。
基本的には様々部隊に帯同し、実地訓練の傍ら教導研修も行う予定。

次に、フェイト。
執務官候補生となったフェイトは、基本的にアースラ隊に所属し、クロスの代わりに
クロノの補佐をしながら執務官を目指して勉強をする事になった。

そして、クロス、ノア、はやて、それに守護騎士達

彼らは新たに新設された部隊『第９７管理外世界観測隊』に配属された。
この部隊はリンディを最高司令官とする観測部隊だ。
先のイリスとの戦いでの螺仙気の影響で海鳴市、及び日本各地に何らかの影響が出る可能性があり
予兆を察し、いち早く対処する必要がある為に、イリス事件での功績が認められリンディを最高司令とし
仙気を持つクロスとノア、それに現地に詳しく特別捜査官補佐となったはやてが守護騎士と共に配属された。
そして、地球近隣の次元世界での事件もアースラを旗艦にして、操作に加わる事にもなった。
現場の隊長としてクロス、副隊長にノア、その下にはやて達が付き、武装局員も借りる権限も与えられた。
いくらリンディ提督の元でとはいえ、幼いクロス達にここまでの権限が付いたのには理由があった。

それは…今冬に【太極の書】【光天の書】の正式登録、及びそれに伴うレアスキルを追加した事だ。
今までクロスとノアのデバイスはラファールとミラノールを普通のデバイスとして登録していたが
太極の書と光天の書をリンカーコアと完全に融合する太古のデバイス、インヴァールデバイス
として登録した。また、２冊とはやての持つ夜天の書はアルハザードの遺産であり
ノアやシグナム達はアルハザードが作り出したユニゾンデバイスだという事も明かした。
流石に、クロスやノアの生い立ちやエヴォリューダーについては隠匿されているが
それでもこれまでよりも多くの重大情報が公開された事で管理局内では大騒動となった。

すぐに管理局が完全保管しろ、だの研究材料にしろだの言う輩がいたが…
それこそがレジアス達の思う壺だった。

わざとクロス達の事を公開し、それを付け狙う管理局の膿を一部でも一層する。
それがなのは達を正式に管理局に入局する時に決めた事だった。
案の定、情報を公開した途端にクロス達を狙って動き出す者達が現れオーリスやゼスト達が秘密裏に捜査して彼らの裏を徹底的に暴き、逮捕してしまった。
最も、目立った動きをしていたのは下っ端のみで
本当に彼らに指示を出していたのはもっと上の人間だったがその証拠に、彼らに疑いの視線が行くとまるでトカゲのしっぽ切りのように
様々な証拠がすぐに見つかり、あっという間に逮捕されてしまったからだ。

「本当の悪党は尻尾を見せない、切ってもいい尻尾は簡単に切らせるけどな…」

クロスもこれで上層部が摘発出来るとは思っていなかったようだ。
目的は、使える手足を減らす事。これにより、クロス達を狙う黒幕は派手に動かせる手札を失い
すぐにはクロスやなのは達に手を出せなくなった…いわば時間稼ぎだった。

「手駒ってのはすぐに増やせそうに見えて、なかなか増やせないもんだよ…これで少しは稼げたね」
「おまけに地上本部が人手不足になって、本局の使える人間を堂々と引きぬく事が出来たぞ」

「「あっはっはっはっ」」

と、笑い合うクロスとレジアスを見てオーリスが頭を抱え、クイントやリンディ達と飲みに行った。
しかし、誤算もあった。本来はクロスとノアのみの情報を公開するはずだったが…

「そんなのダメや！　どうしても囮にするなら私らの情報も使って！」

「夜天の書も太極や光天の書と同じくアルハザードの遺産だという事はすぐに分かる事だ」

「だったら、一緒に公開した方が効果大だろ。姉ちゃん達ばっか危険な橋渡らせるかよ」

「これがイリス事件の時のせめても罪滅ぼしに…」

「我らの事は我らで守る、いらぬ気遣いは無用だ」

と、クロス達の動きを察知したはやて達が夜天の書の情報公開を進言してたのだ。
確かに、太極、光天、夜天は3冊で1つの遺産…と言うのは事実でそれを公開する事で
より効果的に敵を誘える…が、リスクも大きい。
だが、それを逆手に取った手段に出た。
それが…『第97管理外世界観測隊』通称『97隊』
クロス、ノア、はやて、守護騎士達を1つの部隊に纏め、尚且つ管理外世界に置く事で
下手に手出しできないようにしたのだ。
なのはやフェイトも表向きは別の部隊だが、中学卒業までは海鳴市在住になるので
観測隊の補助要員として、いつでもクロス達と一緒に行動できるように取り計らった。

ＡＡＡランク以上が何人も同じ部隊に所属する事に不満の声はあがったが
なのはやフェイト、はやてがまだ幼い事と海鳴市の学校に通いながら務める事
螺仙気の影響が管理外世界に及ぼす危険性が未知である事
そして、９７隊が、基本的に少数で運用される事など様々な理由によって了承された。
それでもまだ不満の声を上げる連中はいたが…

最後にアースラ隊とゼスト隊について。
アースラ隊は捜査官として所属していたクロスが抜けて、尚且つリンディも抜ける事になったが
フェイトが執務官補佐として入り、クロノが将来の艦長になる事で落ち着いた。
最も、クロノが艦長資格を取りまではリンディが艦長を兼任する事になった。
これは９７隊が有事の際にアースラを旗艦にする条件でもあり、持ちつ持たれつの関係になった。

ゼスト隊はメガーヌが産休に入り、代わりにプレシアが加入した。
部隊の保有魔力ランクに引っ掛かる事ではあるが…
『執行猶予中のプレシアの監視』という名目での加入でもあった。

「なんであれ構わないわ、私の罪は絶対に消えない…むしろこっちからお願いするわ」

と、フェイトやアルフは難色を示したこの要請もプレシアは自分から了承した。
代わりにプレシアが抜けた事で無限書庫の仕事量が増えて、司書のユーノがてんてこ舞いになり

アースラ隊に配属予定だったアルフや数名のスタッフを緊急配属した時には過労死寸前になっていたとか。

「っ～終わったぁ～！」
「終わりましたねぇ…」
「流石に疲れた…」

もう時間は昼過ぎ、朝早くから始めて5時間ほどかかりようやく準備が終わり
リビングのソファーで腕を伸ばす、エイミィとノア、クロス。
必要な部屋の改造や荷物の搬入は本局から専門のスタッフが来て昨日までに済ませていたが
システム的なチェックなどはクロス達の仕事だった。
特にノアは一番大仕事だ。今までエイミィが駐在して色々管制などを行っていたが
これからはノアが中心となって行う事になっているからだ。
ユニゾンなしでもクロスが十二分に戦闘や捜査を行えるようになったので
管理局でもトップクラスの情報処理能力を持つノアが
よほどの非常時以外ではこの基地で情報統制を行う事により
今までよりも裏方スタッフになり、部隊を運営できるようになった。
ついでにノアは通信士資格など必要な資格をいくつか受ける予定だ。

「3人共お疲れ様。エイミィも引き継ぎは大丈夫？」
「はい、これでもう私がいなくてもノアちゃん1人でばっちり大丈夫です！」
「ま、その分責任重大だけど」
「むむっ…なんだかプレッシャーがぁ…」

リンディが持ってきた飲み物で一息付く、そんな中エイミィがぐるっと室内を見渡した。

「ほんの数カ月だけど…なんだか愛着わいちゃったから、少し寂しいな…」

エイミィは明日からクロノとアースラ駐在に戻る事になっている。
フェイトは今まで通りこの家から学校やアースラへ通うのでエイミィとクロノのみがここから去るのだ。
少し、重い空気がリビングに張りつめた。

「そうね…でも2人ともいつでもここにいらっしゃいな。ここもあなた達の家よ」
「そう、ですね…クロス君とフェイトちゃんやはやてちゃん達との進展も気になるし♪」
「ブッ!?　な、何を言ってるんですか！　普通に遊びに来るだけにしてください！」

にこにこと見つめるエイミィに思わずジュースを噴き出しそうになったクロス。

「大丈夫ですよ、エイミィさん…私が報告欠かせませんから♪」
「おぉ～君の働きに期待してるよノア隊員！」

びしっと敬礼をしあうエイミィとノア、頭を抱えるクロス。
そんなやりとりを優しく見守るリンディ…さっきまでの寂しい空気はどこかへ行ってしまった。

「こんにちは～！　遅くなりましたぁ！」
「お邪魔しま～っす」

「あ、はやてちゃん達が来ましたね♪」

本局での用事を済ませてはやて達が戻って来た。
シグナムは別件の事で本局に残っている。

「お、はやて。新型のシュベルトクロイツ、出来はどうだった？」
「うん、もう最高や！　試し撃ちしてきたんやけど私の魔力でも全く問題なかってで」

はやて達の用事とははやて専用のデバイスの受け取りだ。
リインフォースが残した十字型の紋章のペンダントを元に、造り出した杖。
最初ははやての膨大な魔力に耐えきれずに何回も自損していたが、思考錯誤の末に作り出した最終形態。
世界に1つだけのはやての魔力を全開にして使える杖…それがシュベルトクロイツ。

「うまく出来たじゃないか、材質とかも問題ないみたい」
「ふふっ、クロス君達のデータのおかげで想定以上の杖が出来たで、ありがとう」
「いえいえ♪　これで、あとは…あの子だけですね」
「そうや、杖も出来た…残りは1つ、リインフォース？や！」

祝福の風、リインフォースの名を継ぐ者…リインフォース？（ツヴァイ）
はやてがクロイツを作り出して、次に生み出そうと決めていたユニゾンデバイス。
初代リインがアルハザード製なので、通常とは違った構成になっているらしく
夜天の書には改訂の影響で元データがほとんど残っていなかったが

太極と光天の書、そして、リインフォースが残してくれたデータを元にして
どうにか目処が立った所だった。

「早く会いたいわね～どんな子になるのかなぁ、楽しみよねヴィータ？」
「あ、あたしは…別に」
「ヴィータも、すっごく楽しみにしてたもんねぇ？」
「ね、姉ちゃん！　それは違うっつーの！」

シャマルとノアにからかわれて真っ赤になって反論しようとするヴィータ。
はやてはその中にいずれ加わる予定のもう1人を想像して、優しく微笑んだ。

「あ、クロス君。シグナムが待ってるから…行ってもらえるかな？」
「うん、分かったよシャマル」

実はクロスはデバイスの新調を終えたシグナムと、これから本局にて模擬戦を行う約束をしてた。
外見はほとんど変わらないが、中の性能は数段アップしたレヴァンティンを試してみたいというシグナムからのお願いだった。今日に限ってフェイトもゼスト達はみんな用事があるらしく
設備の設営を終えた後は丸々空いていたクロスは快く承諾したわけだ。

「それじゃマスター、気を付けて行ってらっしゃいね」
「たかが本局行くだけなのに気を付けても何もないよ、でも珍しいな、誰も来ないなんて」

「あ、あはは～たまにはそう言う日もあるわよ」
「？？…まぁ、シグナム待ってるから行ってくるよ。夕食までには戻ってくるから」
「「「は～い」」」

いつもクロスが誰かしらと模擬戦する時は、少なくともノアが見学をするのが普通だった。
だけど、今回は誰も見学に来なく皆それぞれ予定が入っているとの事で
若干物足りなさを感じ、やけに笑顔で見送るリンディ達に？？を浮かべながらも
クロスはギアを使って本局へと向かった。

残されたはやてやノア達はというと…

「…もう、行ったかな？」
「はい、ちゃんと行きましたよ、はやてちゃん」
「よっしゃ、それじゃ早速準備に取り掛かろうか♪」
「ゼストとティーダ君はもう買い物終えて近くまでいるみたいよ」

エイミィやリンディも加わり全員で何やら飾り付けや調理を行い始めた…

一方、翠屋では…

「フェイトちゃん、これ味見してもらっていいかな？」
「うん……少し、甘いすぎるかな？」
「うぅ～なんだかクリスマスの時よりも緊張するよぉ～！」

「やっぱり、今回はクロス君の為だけに作るから、じゃないかしら？」

「す、すずか！　あんたは不意打ちでよく恥かしい事言うわね！」

「あら、アリサちゃんはクロス君の為に作ってるんじゃないの？私はそうだよ♪」

「わ、私は……クロス君のために（チラ」

「……私も、そうだよ（チラ」

「な、なのはにフェイトまで…うぅ～、分かったわよ！　って何このデジャヴ！？」

なのは、フェイト、アリサ、すずかが何やらケーキやお菓子を作っていた。

その光景はバレンタインの時の再現であった…

「ちょっ、手抜きじゃないのこれ！　久々の出番なのにあんまりじゃない！！」

「誰に怒ってるの、アリサちゃん？」

そしてナカジマ家…

「お母さん、出来たよ！」

「こっちもできたぁ～！」

「ふぅ…」

「3人共がんばったわね、それじゃあ…あなた、味見お願い！」

台所で料理を作り終えた、ギンガ、スバル、ティア。

クイントはまだ別の料理を作っていて手が離せないのでゲンヤが彼女達の味見をした。

「おっ、スバルもギンガ、ティアも出来たのか、どれどれ……うん、美味しいぞ！」
「「「良かったぁ～」」」
「もうクロスの好みの味が分かるなんて…愛の力は流石ね♪」
クイントに言われて、すぐに顔を真っ赤にするギンガにティア。
「「…あ、愛！？／／／」」
「……あい～？」
スバル1人だけが言葉の意味を理解していなかった…
「あはは、スバルにはまだ早い…ってかギンガやティアですらまだ早いと思うんだなぁ」
「それだけ今の子は進んでるって事よ、ゲンヤ。あ、お邪魔するわね、クイント
呼び鈴鳴らしても誰も来ないから入って来ちゃったわ」
そこへ荷物を抱えたプレシアがやってきた。
「いらっしゃい、プレシア。　仕事お疲れ様。もういいの？」
「えぇ、ちゃんと買ってきたわよ、私の分」
そう言ってプレシアは右手にもった袋を掲げた。
それを見て嬉しそうなゲンヤとクイント。
「私も出来たわ。それじゃ…冷めないうちにノアを呼んで料理運びましょうか」
「「「お～！」」」

元気いっぱいに掛け声をあげるちびっこ3人娘。
もう全ての準備は整った。

続く

第８８話　「誕生日（前）」（後書き）

クロス
「なんか途中で手抜きない？」

カガヤ
「気のせい気のせい♪…久々にほのぼのだから腕がなまった（笑）」

ノア
「なまる腕なんてないじゃないですか？」

カガヤ
「＝（´□｀）⇒グサッ！！」

クロス
「誕生日…クリスマスの時の悪夢が再来しないといいなぁ…」

カガヤ
「大丈夫大丈夫…多分（＾▽＾；）」

第８９話　「誕生日（後）」（前書き）

多人数イベントは難しい…

第89話　「誕生日（後）」

数日前

きっかけはクロスとノアの過去を見た後の、とある会話でだった。
少し話があると地上本部に残ったクロス、レジアス、オーリス、ゼスト以外の面々は
どうしようかという話になり、せっかくの休みなのでと皆は翠屋へと移動した。
ティーダとゲンヤはノアに送ってもらい、家にと帰った。
リンディ、クロノ、エイミィやユーノ達は仕事があると戻り、身重のメガーヌは家に戻った。
店の人手が足りないとの事で、クイント、ヴィータ、シャマルが店の手伝いを
シグナムとザフィーラが買いだしに行く事になった。
そして、なのは達3人と遊びに来たアリサとすずかが部屋で談話をしていた時だった。

「そういえば…クロスくんって、もうすぐ誕生日なんやね」
「そう…だね。うん、そうだよ！　クロス君の誕生日！」

何気なくカレンダーを見たはやてがふと呟いた。
なのはやフェイトもつられてカレンダーを見上げる。
クロスの誕生日は知らなかったが、過去を見た事でクロスの誕生日がもうすぐだと言う事を知った。

「じゃあ、お祝いしてあげなきゃ」
「賛成！　盛大にお祝いしてあげましょ♪」

アリサとすずかの提案にみんなも乗り、誕生日パーティーの段取りは進んでいった。

「ケーキ持ってきたわよ♪」

そこへケーキを持ってクイントがやってきた。

「あ、クイントさん。ケーキありがとうございます！」

「美味しそう！」

「すみません、私がお手伝いしなきゃいけないのに…」

「いいのよ、これくらい。それにしても随分と賑やかじゃない。何の話で盛り上がっていたの？」

なのは達は微笑み合いながら、クイントにクロスの誕生日パーティーの事を話した。

当然クイントも喜ぶと思ったなのは達だったが、クイントは難しい顔をして黙りこんでしまった。

「…どうしたんですか、クイントさん？」

「誕生日会…ダメ、ですか？」

「ううん、そんな事はないわ。むしろ大賛成よ……うん、やりましょう。誕生日パーティー！」

不安げに自分を見上げるなのはとはやての頭を優しく撫でながら、クイントは微笑んだ。

「ただいま戻りましたよぉ～！」

するとそこへノアが戻って来た。

なのは達はノアにも誕生日会の事を話したが、クイント同様の反応で

若干悲しげな表情も浮かべたが、クイントがノアに頷くと、笑顔を浮かべた。

「はい、それは大賛成です！」

「じゃあ、ノアちゃん、クイントさん。クロス君の好みとか教えてもらっていいですか？

今回はクロスくんの好きな料理沢山作りたいんです！」

「えぇ、いいわよ。なのはちゃん♪」

そうしてクイントが混ざり誕生日パーティーの計画は進んでいった。

ノアはせっかくなのでと、ギンガやティアナ達を呼ぶ為にまたミッドへと戻って行った。

『なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん…このまま念話で答えて』

『はい？』

『どうしたんですか、クイントさん？』

『わざわざ念話で話すなんて、仕事の話ですか？』

突然のクイントからの念話に驚くなのは達。

だけど、アリサ達には勘付かれないように普通に会話を続けた。

『ううん、仕事以上に大事な話よ…あのね、クロスは自分の誕生日を嫌っているの』

『『『えっ！？』』』

『前にも一度クロスの誕生日にプレゼントを贈ろうとしたわ…でも…あの子は受け取らなかった…』

念話を悟られずにアリサ達と話すクイントにも少し哀しみが浮かんだが、すぐに元の笑顔に戻った。

『あの子は言ったわ…「自分の誕生日なんて祝う事ない。祝われたくないんだ」…ってね』
『クロス君…』
『そんなの、そんなのダメだよ！』
『フェイトちゃん…』

フェイトが手を強く握り、表情が硬くなったのを見たなのはがそっと手を握った。
彼女はアリシアのクローンであり、本来なら生まれなかった存在。
一時は母・プレシアに拒絶され、利用され、自分の存在意義や生まれた事にすら後悔した事もある。
でも、今は違う…生まれた事を生み出してくれた事を感謝している。
それを教えてくれたのは他ならぬクロスであった。
そのクロスが、自分が生まれたのを祝われる事を拒む、その事が悲しかった。

「どうしたのフェイト？」
「大丈夫？」

そんなフェイトに気付き、心配そうに声をかけてきたアリサとすずか。

「…なんでもないよ。ちょっと考え事していただけだから」
「あっ、ひょっとして自分だけクロスくんにいいプレゼント贈ろうと考えてたんやろ？」
「むぅ～フェイト、抜け駆けは禁止！」
「そ、そんなんじゃないよ、アリサ！　もう、はやてもでたらめ言わないで？」

しかし、頬を染めて抗議するあたり、少しは考えていた事だったのかもしれない？

『ありがとう、はやて』
『ええよ、何考えとるかも察しがつくし』

以前にはやてはなのはやフェイトの出会いの経緯も聞いていたので何となくフェイトが考えている事が分かったようだ。
なのはやクイントも同じで、２人共黙ってフェイトに微笑んでいた。

『みんな、クロスの為にありがとう』
『これくらいなんでもないですよ！』
『はい、私達もクロスの事お祝いしてあげたいから…』
『今までのお礼が、これで少しは出来る気がしますから』

今までは何かしらでクロスに恩を返せないかと思っていた３人だったが
ようかく、はっきりとした形で返せると思うと同時にクロスの過去を知った今では、今まで以上にクロスを近くに感じてその誕生を祝える事に３人とも喜びを感じていた。
例えそれが、本人が望んでいない事だとしても……

・
・
・

現在　時空管理局　空中戦闘空間

一面の青空の下、宙に浮かぶコロセウムのような闘技場。
ここでクロスとシグナムは実戦形式の模擬戦を行っていた。

地面を左右に跳びながら、シグナムへと迫りクロスはエクスカリバ

ーを振るう。
対するシグナムは腰を深く構え、腰から抜いた鞘におさめたレヴァンティンを強く握りしめる。

「はあぁ！」
「たぁ！」

左から斬りこまれたクロスの斬撃を鞘で防御し、そのまま抜刀しカウンター気味に一閃を決める。

―ガキンッ

だが、鞘に阻まれた斬撃は、そのまま反動を利用したかのように逆方向へと向けられた。
同時にクロスの体が左回転から右回転となり、そのまま身体が深く沈んでいく。

「シッ！」

シグナムの抜刀も神速の如く速かったが、その剣閃がクロスの体を捉えるより速く
クロスの身体が地面に付くのではないかと言うほどに沈み込み、レヴァンティンは空を切った。
そして、クロスは右手に持ったエクスカリバーを…空中で回転しながら左逆手に持ち替える。
狙うは抜刀したままがら空きとなったシグナムの右わき腹。
それはシグナムから見ればゆっくりとまるでスローモーションのように見えた。
しかし…それでも数百年を戦いぬいた烈火の将には通用しない。

「甘い！」

左手に握ったままの鞘を素早く抜き、その一撃を受け止める。

「……シグナム、今の動き。アノ漫画の影響でしょ？」

「……ば、ばれたか？／／／」

「…バレバレ」

それは某不殺の侍漫画に出てくる二段抜刀術に似ていた…

「だぁ…やっぱりまだ剣技だけならシグナムには勝てないか」

「これでも数百年の間主を護り、戦い抜いてきたんだ。生身で負けるわけにはいかない」

「だよなー…」

「それでも、最初に会った頃に比べたら格段に強くなったぞ？　魔法ありなら勝てないかもな」

クロスとシグナムは今まで魔法抜き、互いの剣のみの生身の模擬戦を行っていた。

本来、中身を新調したレヴァンティンの調子を確かめる為…だったのだが…

「魔法抜きだと意味ないんじゃないか？」

「一度、魔法抜きの純粋な剣技のみでクロスと仕合がしたかったんだ」

「ふぅん…まぁ、俺もたまにはそういうのもいいかな」

と、念の為甲冑とアーマーは纏い、互いの剣も非殺傷設定にする以外は飛行魔法すら使用しない。

ただ純粋に互いの剣のみの模擬戦。
結果は…シグナムの勝ち。
いかにクロスとて基礎体力や筋力のみではシグナムには及ばない。
エヴォリューダーのクロスは常人に比べたら魔法抜きでも戦闘力は高いが
守護騎士として長年戦い続けてきたシグナムには経験不足だった。
最も、シグナムの言う通り魔法込みだったなら、エヴォリューダーの力とアルガス魔法による
基礎戦闘力の底上げでシグナムを上回る事にはなるが…

「あーもうこんな時間だ…ごめんなレヴァンティン、腕試しはまた次回でいいか？」
＜問題ありません。お付き合い頂いてありがとうございます＞
「相変わらず固いなレヴァンティン…うちのラファールとは偉い違いだ」
＜マスター…それはどういう意味でしょうか？＞
「あっ、聞こえたかラファール？…いや、ナンデモナイゾ？」
＜むっ…どうせ俺は軽いですよ…というかマスターの影響でしょう！＞
「俺は軽くない！」
＜2人とも、喧嘩をしないでください＞

自分のデバイスと喧嘩を始めてしまったクロス。
それを見たシグナムは苦笑しながらも、どこかほっとした表情を浮かべている。

（前より、どこか肩の力が抜けたようだな…やはり過去を私達に話したからか…）

まるで弟を見るような視線を送るシグナム。

賑やかでも緩やかな時間が流れて行った…

『2人共？　模擬戦終わったのならここ空けてほしいのだけど？』
「あ、すみませんレティさん」
「すぐに出ます」

通信モニターで話しかけてきた女性の名はレティ・ロウラン。
時空管理局の提督で人事関係の仕事をしている、リンディの友人だ。

「それじゃあ、戻ろうかシグナム」
「あぁ、主はやてや皆が待ちかねているぞ」
「？？？」

どこかシグナムの言い回しに違和感を覚えたが、特に気にも留めずにクロスはこの場を後にした。
そして、更衣室で私服に着替えシグナムと共に、海鳴市の自宅へとギアで飛んだ。

（さっきシャマルから準備が終わったと連絡が来たが…さて、クロスはどんな反応を示すだろうな）

この模擬戦もクロスの誕生日パーティーの準備を兼ねて仕組んだシグナムは、1人微笑むのだった。

・
・
・

海鳴市　ハラオウン邸

「ただい…」

―パンッパパンッ

「「「「「クロスくん、誕生日おめでとう！！」」」」」

「おわぁ～！？　な、なんだなんだ？」

ハラオウン邸に戻ったクロスはドアを開けた途端に沢山クラッカーで出迎えられた。

「クロスくん、こっちこっち」

「主役はこっちよ」

「あ、なのは、アリサ…っととそんなに引っ張る…ってなんだこの料理の数々！？」

訳も分からぬままなのはとアリサに手を引かれ、奥へと入ったクロスの眼には

『クロス君、１０歳の誕生日おめでとう』

と書かれた横断幕が張られ、数多くの料理が載せられたテーブルが目に入った。

そして、なのはやフェイト達はもちろん、ゼスト達やティアナ達も拍手で出迎えた。

「クロス…さん、たったた・・誕生日おめでとうございましゅ……っ！！？」

「あぁ…ありがとう…？」

まずはティアナがクロスの前に来て、真っ赤になりながらも小箱を手渡し……また噛んだ。

「か、かんじゃった…また噛んじゃったぁ～！！」
「ティア、落ち着け！」
「でもでもお兄ちゃん、バレンタインの時も噛んじゃったし！」
「あはは～ティア、顔真っ赤～♪　クロ兄、これ受け取って♪」
「大丈夫だよ、ティアちゃん。伝えたい事は伝わったはずだから」

ティーダやすずかがティアナを慰める中、スバルからも小箱を受け取ったが
未だにクロスは状況が読めていなかった。バレンタインと全く同じ状況だが
噛んだティアナが気絶しなかったのは成長した…とも言える？

「ノア…これは、一体？」
「話はあとです、マスター。はい、次々♪」

側にいたノアに何事か尋ねようとしたが、それより先にノアに後押しされてアリサがやってきた。

「…クロス、何も言わずにこれ、受け取りなさい！！」
「は、はい！！……これは？」

俯きながらも物凄い剣幕でアリサに迫られ、思わず敬礼までしそうになったクロス。
そんな様子に気付かずに、俯いたままアリサはティアナと同じような小箱を胸に押し当て、下がった。

「あの…？」
「はいはい、続いてすずかちゃん！」
「はぁ～い、あのなクロスくん…誕生日おめでとう、これ受けとって？」

「……はやて、うん…ありがとう」

ようやく自分の誕生日を祝われていると気付いたクロスは、ぎこちない笑みを浮かべながらも
しっかりとはやてが差し出した小箱を手に取り、柔らかく微笑んだ。
その様子に安堵の笑みを浮かべたノアは、手に持ったマイク（玩具）を掲げた。

「さぁ～はりきって次に行きましょう！　ギンガ～！」
「…はい！」

勢いよく立ちあがったギンガの手には、ティアやアリサと同じ色違いの小箱。

「ギンガ…」
「兄さん、誕生日おめでとう」

静かにでもゆっくりとギンガはクロスへと小箱を差し出し、クロスも笑みを浮かべて受け取った。

「…すまなかったなクロス、実は…」
「この準備の為に俺を呼びだした、でしょ？　いいよ、驚きはしたけど、それ以上に嬉しいから」
「そうか、ならば私のプレゼントだ、受け取ってほしい」
「あたしのもついでにシグナムと一緒に受け取れ…」
「もう、ヴィータったら…素直じゃないんだから、それじゃ私もついでに♪」

シグナム、ヴィータ、シャマルと次々に色違いの小箱を手渡して行く。

大きさはほぼ一緒だが、それぞれの色は魔力光や髪の色と同じだった。

「クロスくん……」
「なのは…フェイト…はやて…」
「クロスくんは嫌がるかも、って思ったけど…でも、それでも…私達…」
「クロスと出会えて本当に良かったと思っている、だからクロスが生まれてきた日を祝いたかった」
「せやから、クロス君。生まれた事を祝われたくないだなんて、悲しい事言わんで…
私らみんな…クロス君がいたから、ここにこうやって集まれるんやから…」

クロスの事情をまだ知らないアリサやすずか達に聞こえないように…小声で、涙目で訴えるはやて。
なのはやフェイトも目に涙を浮かべている、そんな三人の頭を優しく撫で、クロスは顔を上げた。
そこには…クイントやゲンヤ、リンディにゼスト、クロノやエイミィ…両親や恩師達が
自分を見つめていた。そのどれもが自分の誕生日を心から祝っている目立った。

「あぁ……そう、だよな…生まれたから、俺はこうやってなのは達に出会えたんだよな…」

―ポタリ

クロスの目から涙が零れ落ちた。
自らの過去を見たときも、罪を告白し許された時も流さなかった涙。

…何年ぶりかの涙。生みの親を、兄弟を殺したあの日以来、ずっと流さないと決めていた涙。
それが今、クロスの目から止めどなく溢れ落ちる。
ただ無言のままに、涙が零れ落ちていた…

「クロス、まずはその子達のプレゼント…開けてみろよ」
「……うん」

ゲンヤに促され、クロスは丁寧にプレゼントの小箱を1つづる開けていった。

「これ…は」
「何にしようか迷ったんだけど」
「ある程度小さい方が、困らないかな―と思って」

それは…色違いの小さなブローチ、色も形もそれぞれ違う11個のブローチ。

「で、最後に…私からマスターへのプレゼントを♪」

ノアが取り出した青いブローチを重ね、何やら弄り始めた。
少しすると、ノアが何をやっているのか分かった。

「じゃじゃ～ん！　マスター、　誕生日おめでとうございます！」
「すごい…綺麗だ…」
「わぁ～可愛いし綺麗！」
「ふふっ、あの子達やるじゃない」

クロノやエイミィ、リンディがそれをみてあまりの出来栄えに称賛の声をあげる。

なのは達のプレゼントのブローチ。
1つ1つのはとても小さいが、12個全てを合わせると1つの大きなブローチへと変わった。
それは、ライカフラワーにどこかにた形をした、様々な色に輝く花の形をした綺麗な宝石のようだった。

「これ、まさか作ったのか？」
「仕上げはしましたけど、全部違いますよ？」

今回、なのは達はクロスの誕生日パーティーを開くにあたって、クイントから聞いた事を考えていた。
クロスは自分が生まれた事を祝われたくはない…
でも、なのは達はプレゼントあげて、料理を作って、ちゃんと祝いたかった。
そこで普通にパーティーを開いただけではダメだと思い、シグナムにそれらしい理由で誘い出してもらい
その間にそれぞれ手料理やケーキの準備をし、驚かそうとしたのだ。
勿論、プレゼントも用意したが、これは…渡す人数が多いのでかさばらないように
同じものの色違いを渡す事になり、シグナム達やギンガ達と一緒にミッドと海鳴市で何か良い物はないかと探しあてた結果…良いのが見つからず…
そこで、ふと思いついたのがこのブローチ。
実はミッド、海鳴市で見つけた小さなブローチを1つの大きなブローチにしようとしたのだ。
クロスに似合うと思った色や形のブローチを集めて、ノアがアルガス魔法でちょっとした加工をして完成。
最初はうまく1つに纏まるか不安だったが、完成してみればそれは立派な装飾品になった。

「クロスくんからもらったライカフラワー、そのお返しの意味も籠めているんだよ？」
「全く、苦労したのよ、それ」
「苦労したのはノアちゃんでしょ、アリサちゃん」
「主はやてだけではなく、私達にもライカフラワーを渡してくれたからな」
「ちなみにそれの名は【ダイヤフラワー】…永遠の絆の花、って意味よ、クロスくん」
「ダイヤ、フワラー…永遠の絆の花」

シグナム、ヴィータ、シャマルの3人も実はライカフラワーを持っている。
はやてに渡した事でフラワーの枚数がかなり減ったが…
いつの間にか元の１０枚に戻っていた。太極の書と光天の書で詳しく調べたところ
ライカフラワーは枚数が一定以下になると自動的に元に戻るらしい事が分かった。
なので、シグナム達にもとクロスが渡したのだ。
ザフィーラにも渡す予定だったが、断固として受け取らなかった。

「それは俺が受け取るものではない…」

との事だったが、その時シャマルが意味ありげな視線を2人に送っていたのは別の話。

「おーっと、しんみりするのはまだ早いぜ、クロス！　まだ大事な続きがあるんだから」
「えっ？　なんですか、ティーダさん？」
「ちょっと、ティーダ…タイミング外してない？」
「うっ、そ、そうですかねぇ姐さん？」

「もう、いいから…降ろしなさいよ、それ」

ティーダやクイントとメガーヌの会話にきょとんとなるクロス。
見るとなのは達はにこにこと笑みを浮かべているが、ノアは何が始まるのか分かっていないようだった。
「それじゃ…」
「待った、それはシグナム達にやらせてもらえませんか、ティーダさん？」
「あ…そうだな、それじゃシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ…あとは任せた！」

横断幕に近付いたティーダは、はやての言葉にあっと声を上げシグナム達の方へと向きかえった。

「あ、あたしたちが！？」
「いいの、ですか？」
「いいから、あなた達の方が適任よ」
「ありがとうございます、クイントさん、ゲンヤさん」
「…すまない」

戸惑うシグナム達をクイントがせかし、４人は横断幕の側に近寄り、垂れ下った紐を引いた。
すると、横断幕の後ろからもう１枚何かが垂れ下がって来た。

『ノアちゃん、誕生日おめでとう！』

「姉上…誕生日おめでとうございます」
「おめでとう、姉ちゃん…」
「なんだかすごく感慨深いわね…おめでとう、姉さん」
「久しく言えなかった言葉を…やっと言えた気がします、姉上」

「「「「「「おめでとう！」」」」」」

「えっ…えええぇ～！！？」

突然の横断幕とシグナム達からの祝福の言葉にノアは目を白黒させていた。

「ノア、今日はあなたの誕生日でもあるじゃない」

「でもでも、私はデバイスで…」

「関係ないよ、今日ノアは深い眠りから目覚めて、クロスと出会った…なら」

「今日はノア姉とクロ兄、２人の誕生日～！」

「フェイトちゃん、スバル…」

「私達はそこらへんよく知らないけど、ノアだって今日生まれてきたようなものなんでしょ？」

「だったら、その日が誕生日じゃない♪」

「アリサちゃん、すずかちゃん…」

見る見るノアの目に涙が溜まりだした、クロスはそっとノアの体に手をあて…

ノアの体を大きくした。

「…あっ、マスター！？」

「せっかくの誕生日なんだ、思いっきり祝われた方がいい…だろ？」

「はいっ、思いっきり祝われちゃいます！　マスターも一緒に！」

ウインクするクロスにノアは思いっきり抱きついた。

クロスもノアも２人共涙を浮かべながらも、最高の笑顔だった。

それに釣られてなのはやフェイト達も目尻の涙をふいている。

「あっ、いいなぁ～」
「スバル、あんたはいつもよくクロスさんに抱きついているじゃない」
「今日は…ノアちゃんに、ね？」
「…うん！」

それを少し羨ましそうに見ていたスバルだったが、ティアナとギンガに言われ、すぐに笑顔になった。
代わりにスバルとギンガをクイントが優しく抱きしめ、頭を撫でている。

「ふふっ、ティアにギンガもなんだか大人っぽく見えるなぁ」
「えぇ…」
「きっと、クロス君の影響かも…好きな人のようになりたい、って思う事もあるし」
「そうに違いないわね♪」
「はい…って、エイミィさんにシャマルは何を言うてんですか！？」

あっちではやてがエイミィとシャマルにからかわれていた。

「あ、私達からもプレゼントあるから後で渡すわ」
「えっ？　リンディさん達も…ですか？」
「当然だよ？　でもまずは、なのはちゃん達のを一番に渡さないと、ってね」
「でも、俺達のプレゼントもダイヤフラワーに負けないくらいすっごいの用意してるからな」
「楽しみにしてるといい…だが、それよりも…」

ゼストが目配せすると、ティーダとリンディがゲンヤとクイントの背中をおした。

「えっ、ちょっと…私達は」
「後でいいって、先にお前らが」
「２人共、ずっと渡したかったんですよね？」
「両親が遠慮してどうするんですか、ただでさえなのはちゃん達に順番譲ったのに」

クロノとティーダに言われ、渋々としかし、若干緊張したように２人はクロスの側に近寄りそれぞれプレゼントを渡した。

「クロス、誕生日おめでとう」
「…１０歳。本当に早いものだな、おめでとう、クロス」
「母さん…父さん……」
「ありがどう、ございまず…」

クロスは俯き、ノアはもう涙声になっていた。
そして、２人をゲンヤとクイントが抱きしめると周りから拍手と祝福が再度沸き上がった。
２人デバイスもそれぞれ祝福の言葉をかけてくれた。

＜マスター、おめでとうございます。ノア様も！＞
＜２人共…良かったですね＞
「ラファール、ミラノール…」
「おめでとう、クロス、ノア！」
「…今日くらい素直になりなさいよ、クロス！」
「姉ちゃん、おめでとう！」

そして、そんな輪のすぐそばのソファーに座るメガーヌの元にゼストとリンディが近寄って来た。

「この子ももうすぐあの輪の中に加わるのかしら？」
「さあな…出来れば、加わってほしい気もするな」
「色々な意味で大変な事になりそうよ？」

自分の膨らんだお腹をさするメガーヌ。
同じく優しく見守るゼストと苦笑しながら見るリンディ。
皆が見る先では、クロスがゲンヤに、大きくなったノアはクイントに肩車をされていた。
2人共手にはしっかりと両親に渡されたプレゼントを大事そうに握りしめていた。

「マスター」
「ん？　どうしたノア？」
「私はマスターにプレゼントあげましたけど…マスターからのプレゼントは…？」
「……うっ、そ、それは…」
「ふふっ、冗談です。私へのプレゼントは…これでいいですよ♪」

―チュッ

「っ！？ノ、ノア！？」
「へへっ…これじゃ私からのプレゼントになっちゃいますね？」

続く

第89話　「誕生日（後）」（後書き）

カガヤ
「やっとかけたぁ！」

クロス
「なんか最近似たような路線多くない？」

ノア
「そうですねぇ、ギャグやネタがあまりないです」

カガヤ
「ギャグ路線も考えたし期待もされたんだけど…今回までこれでいきました。なぜならクロスの過去もずっと抱え込んでいた気持ちもこれでほとんど出ましたから！」

ノア
「ってことは…次回からはギャグ？」

カガヤ
「ほのぼの～でギャグ…でカオスなの書きたい！」

クロス
「まぁ…その前にコラボがんばれ～」

カガヤ
「ですよね～（＾▽＾；）」

第９０話　「リインフォース？」（前書き）

久々に投稿…そして、節目の９０話でとうとうあの子登場！

第９０話　「リインフォース？」

私立聖祥大学付属小学校

「あれ、今日はクロスとはやては朝からお休み？」

少し朝寝坊して遅れてきたアリサは教室を見渡した後、なのはに尋ねた。

「うん、マリーさんが都合付けてくれて予定より早くしてもらったの」

「私となのはも昼に学校終わったら行くよ。だから２人は…」

「アレの準備ね、ＯＫ、まっかせなさい！」

「お姉ちゃんも張り切ってたよ」

なのは達は正式に管理局に勤める事になったが、学校のある時間帯は学校優先にしている。

時には、緊急の用事で早退したり休んだりもする事はあるが。

成績や出席日数云々の調整は、学校側と裏で何か取引してるのかは教えてもらっていないけど

出ている間の授業やテストを真面目にしているので、先生達は何も言わない。

「はやてちゃんとノアちゃん、どう？」

「うん、ノアは昨日、眠れなかったみたい。朝眠たそうだったから」

「はやてちゃんも同じみたいだよ」

はやてとノアは去年の冬に大切な家族を失った。

詳しい経緯は知らないが、その事実だけはアリサ達も聞いていて

表面上は楽しく笑っていたはやて達も、自分達を気遣っての笑顔だと分かっていた。
結果的には、クロスやなのは達のおかげで心の底から笑顔を取り戻したが
それでもずっと気にかけていた事ではあった。

「午前中いっぱいはその準備で、私達には手伝える事ないから」
「だから、昼にクロスが迎えに来て、それで管理局へ」
「いいなぁ～、なのは達ばっかり。私もいきたぁ～い！！」
「まぁまぁ後で会えるんだし、私達は私達の準備もあるんだから」
「…分かってるわよ」

そこへ先生が来て、午前の授業が始まった。

・
・
・

時空管理局　本局　デバイスメンテナンスルーム

ここは管理局の本局にあるデバイスのメンテナンスルーム。
ゼストやなのは達のデバイスの改良もここで行った。
クロスとはやてが学校を休み、何をしに本局まで来ているかと言うとはやての新しいユニゾンデバイスが今日完成するという事で、最終調整を行う為だった。
ユニゾンデバイスの作成に関しては、管理局にもあまり資料がなく無限書庫から大量の資料を探しながらの作業になるのでは
はやての足が完治し、魔力が安定するまで時間がかかってしまったのだ。
最終的には太極の書と光天の書にあった夜天の書のバックアッププシステム
そして、リインフォースが遺してくれた『カケラ』を元にはやての

魔力をコピーし
試行錯誤した結果ようやく形となった。
作成にははやてだけでなく、クロスやノアのサポートも必要な為、
朝からこうして作業をしているのだ。

「……」
「はやて、ちゃん？」
「……」
「ダメだ、めちゃくちゃ緊張してる」

昼過ぎまで作業した結果が、今はやて達の目の前のポットの中に収まっている。
が、当のはやてが緊張の為か固まってしまい、シャマルやヴィータの呼びかけにも反応なしだ。
クロスとノアがそれぞれ書を使い、慎重にポット内に最終データを打ちこんでいる。

「はい、全データ入力完了です。お疲れ様でしたクロスくん、ノアちゃん」
「後は、この子の目が覚めるのを待つだけよ」

白服を着こんだマリーとプレシアが2人の側へとやってきた。
プレシアはデバイスの独自開発技術を持っているので呼ばれたのだ。

「ふぅ…これで、全部終わったな」
「そうですね。後は…プレシアさんの言う通り待つだけです」

ノアが心底疲れ切った顔をしてクロスの肩へと座り込む。
その頭を優しく撫でながら、クロスはポットへと視線を向けた。
ポットの中にはノアより少し小さい程度の少女が、自らの身を抱き

かかえるように佇んでいた。

「この子が…新しいリインフォース」

「5人目の守護騎士…あたしらの妹、か」

眠っているだけのように見える安らかな寝顔に、はやてとヴィータの視線は釘付けだ。

シグナム達もポットの周りに集まって来た。

「それじゃ俺は今のうちになのはとフェイト連れてくるよ」

「行ってらっしゃい、マスター」

そう言ってクロスはノアを置いて、海鳴市へと跳んだ。

2人にも新しい家族誕生の瞬間に立ち合ってほしいと、はやてとノアが頼んだからだ。

そして、すぐにクロスはなのはとフェイトを連れて戻って来た。

「いらっしゃい、なのは、フェイト」

「こんにちは、マリーさん、プレシアさん」

「それで、母さん…どんな感じなの？」

「順調ですよ、バグもないですし」

フェイトの問いに肩まである長い黒髪を束ねた、２０歳ほどの女性がコンソールから顔を上げた。

「あ、こんにちはアステルさん」

「こんにちは」

「はい、2人共こんにちは」

なのはとフェイトに挨拶を返したこの女性の名は『アステル・エス

ター』
管理局の本局から第９７管理外世界観測隊の常駐スタッフとして、つい最近配属された。
アースラ隊でのエイミィのポジションで、随時観測本部に常勤し海鳴市を中心した日本各地の『螺仙気』の影響を観測する役目とリンディがいない時の家事全般を受け持つのが彼女の任務だ。
少数精鋭部隊とは言え、管制や通信などの裏方を担当するスタッフはどうしても必要で
ノアがその役割を務めるが、戦闘要員でもある為、エイミィのように裏方専門のスタッフを
管理局の本局が用意したのだ。もっとも、これはリンディやクロスが本局に要望する前に
配属が決まっていたので、何か裏があるのではないか、とオーリスは警戒している。
だが、いざ本人が来てみると、クロスやノア、はやて達の事情を全て知っていて
尚且つ、偏見も何も持たずに弟や妹のように接してくれる彼女に後ろめたい所は感じても、悪人ではない。とクロス達は思い、たった数週間ですっかり馴染んでしまった。
また、歳が近い事もあってエイミィや美由希共仲が良く、よく料理を教わったりしている。

「この子が、そうなんだね」
「リインフォースそっくり」

生体ポットに穴があくほどじっと見つめるなのはとフェイト。
新しいユニゾンデバイスは夜天の書のバックアップシステムと、初代のカケラから作られている事もあり
ノア曰く

『昔のリインフォースとほとんど一緒だよ！』

と、言っていた。初代リインフォースはイリスを封印した影響で、昔とは容姿などに変化があったらしく今ポットの中で眠っているの姿が、イリスを封印する前のリインフォースそのままだ。

シグナム達はまだ記憶がはっきりとは戻っていないのか、昔の姿はほとんど覚えていないらしい。

「魔力、その他バイタル安定…『リインフォース？』目覚めます」

リインフォース？…それがこの子の名前。

はやてが新しいユニゾンデバイスを作ると決めた時から考えていた名前だ。

祝福の風を受け継ぐ少女、それがリインフォース？.

―ゴボボッ

ポットから培養液が吸い出される音が聞こえる。

―プシュー

続いて、重いポットが開く音。

その音が響く度に、はやての、ノアの、ヴィータの目が輝きを増して行った。

シグナムやザフィーラ達も微笑みながらじっと見守っている。

そして…

「ふわあぁ～……おふぁようございましゅ…」

ついに、リインフォース?は目覚めた。

「…は、はれ?　みなさん…どうかしましたか?」

リインフォース?が眠気眼で辺りを見渡す。

はやてやノアの顔が見えた、形容しがたい顔で固まっている。

「マイスター?　お姉ちゃん??」

「わ、私らの事分かるんか?」

「はい、もちろんです!　私のマイスターで…私のお姉ちゃんです!」

満面の笑顔ではやてとノアを交互に指さすリインフォース?。

「そや、そうや…私が、マイスターの…八神はやてや!」

「私が…ノア、ナカジマ…ですよ、リインフォースゥ!!」

そこで感極まったのか、はやてとノアが涙を浮かべながらリインフォース?に飛び付いた。

「わふっ!?　ふ、二人とも苦しいです、リイン潰されちゃいますぅ～!」

それでも、リインの顔は笑顔で満ち溢れていた。

まるで、久々に会えた家族と再会したかのように。

「リインフォース!」

ヴィータやシグナム達もリインへと駆け寄って来た。
ヴィータに頭をなでられ、シグナムに微笑みかけられたり、シャマルに頬ずりされたり
獣型のザフィーラのドアップに驚き、軽くザフィーラが凹んでしまったり、と表情豊かだ。
クロスやなのは、フェイトはそれを少し離れて暖かく見ている。
なのはとフェイトも嬉しさと感動で涙を流して、アステルに優しく頭を撫でられていた。

「すごい…生まれたてのユニゾンデバイスなのに」
「これが、アルハザードの技術の一端」

モニターとリインを眺めながら、観測していたマリーとプレシアは驚きの表情を浮かべていた。
ユニゾンデバイスは誕生しても、すぐには感情データがうまく機能せずに機械的な受け答えになる。
少なくともこれまで管理局が誕生にかかわった事例では、全てがそうだった。
だが、目の前ではやてやノア、そして、守護騎士達と誕生の喜びを分かち合っているリインは違う。
生まれたばかりなのに、マイスターであるはやてだけではなく、姉としてのノアも認識し
出会えた喜びを体全体で表現していた。シグナムやヴィータ達にも家族として分かっているようだ。

「あ、えっと…そっちにいるのが…」

やがて、少し離れた所にいたクロス達に気付いたリインが近寄って来た。

「はじめまして、リインフォースちゃん。私は高町なのは」
「フェイト・テスタロッサだよ、よろしく、リインフォース」
「はい、よろしくお願いします、なのはちゃん、フェイトちゃん！
２人の事はばっちりと
リインにもわかるですよ♪　そして、あなたが…」

次にリインは興味深そうにクロスを見上げた。

「あぁ、俺がクロスロード・ナカジマだ。これからよろしくなリイ…」
「はい、よろしくお願いします、『お父さん』！」
「「「……はっ？」」」

リインの言葉に部屋全体が凍りついた

「えっと、リイン？　俺の聞き間違えだと思うけど、今俺の事を…」
「？？　お父さんじゃダメでしたか？　やっぱり…パパと呼べばいいですか？」

盛大に誤解したリインがキョトンと首をかしげて言い直した。
その瞬間、部屋にはさっきとは別の意味で冷たい空気が流れた。

「ネェ、クロスクン？」
「イマノハ…ドウイウイミ？」
「オマエ、イツノマニアタシノイモウトにヘンナコトシタンダ？」
「ま、まてまて、なのは、フェイト…それにヴィータまで！　俺は何もしてないしふきこんでないぞ！？」

光よりも早くクロスの元へと迫って来たなのはやフェイト、ヴィー

タの迫力に
自然と足が後ろへと動き、かつてないプレッシャーに襲われてた。
そして、背中には何か壁とは違う柔らかい物があたり
嫌な予感がしたクロスが恐る恐る振り返ると…
そこには甲冑に身を包み、デバイス達を構えたシグナム、シャマルの姿が
ちなみにリインはザフィーラによって目と耳を閉じられている。

「クロスロード、ドウイウコトカ…」
「セツメイ、オネガイネ？　コトトシダイニヨッテハ…」
「は、ははっ…なんでみんな片言なんだ!?　俺は何も知ら……はやて？　ノア？」

そこである事に気付いたクロスは、この騒ぎに加わらず輪の外へ自然に逃げた2人へと目を向けた。
はやてとノアは冷や汗を全身から垂れ流しながら、口笛を吹いてどこしらぬ顔をしていた。

「な、なんやクロスくん？」
「お、お父さんと呼ばれて、嬉しいですねぇマスター？」
「なぁ…お前ら……リインに何をふきこんだ？」

抑制された低い声になっているクロスに、顔を青ざめながらもはやてとノアは首を横に振った。

「し、ししらない、何も私らは知らへんで!?」
「そそそそそーですよ、私達が何をしたっていうんですか!?」
「ふーん…リイン？」

そこで、何事か分からずにポカーンとしているリインを見たクロスは

打って変わって優しい笑みを浮かべながらこう尋ねた。

「リイン、はやてとノアに俺の事なんて言われたんだ？　正確には、データ入力の時になんて？」

「えっとですね…リインはマイスターのリンカーコアからコピーされた魔力を元に作られましたけど

　パパの仙気も太極の書を通じて分け与えてもらったので…マイスターがママなら…

　クロスくんがパパになるね、とマイスターが言っていて、お姉ちゃんもそれに同意して

　生まれたら、一度でもパパと呼ばせたいね。と言っていました」

「「あの会話聞こえていたの！？」」

実はリインの調整中、はやてとノアが2人で作業していた時に…

「この子…私の魔力を元にしてるけど、クロスくんの仙気も使ってるんやよね」

「そうですね、夜天の書のバックアップシステムの起動やらでマスターの仙気が必要でしたから

　私の場合はバックアップ部分が太極の書と違うので、不用でしたけど」

「そっかぁ～…ほんなら、私がこの子のお母さんでクロスくんがお父さんになるんやな」

「それだと私もお母さんのようなものになりますけど…私はお姉ちゃんですからねぇ…」

「ほんならほんなら、一度いつかこの子にクロスくんの事、お父さんって呼ばせてみいへん？」

「あ、それいいですねぇ♪　でもなのはちゃん達に聞かれると嫌な予感しますから…」

「そやなぁ、後が怖いもんなぁ…アリサちゃんやティア達がいない

時にせえへんとなぁ」
「どうせなら、パパとか、おとうたまとか呼ばせてみませんか？」
「おぉ～それはナイスアイディアや！」
「なんだか、楽しみになってきましたね、はやてちゃん！」
「ふっふっふっ、越後屋、お主も悪よのう…」
「いえいえ、お代官様ほどでは…」
「「……ぷっ、あははははは…」」

モニターに映し出された映像は、ここで終わっていた。

＜以上が、はやてさんとマスターとの会話です＞
「ミ、ミラノール！？　あなたなんてもの録画してるのよ！！！」
「趣味悪すぎや！」
＜いえ、私は１０歳で父親と呼ばれるクロス様の心情を思ったまでです＞
「ありがとうな、ミラノール…お前は本当に良い子だな」
＜おほめにあずかり光栄です、クロス様＞

クロスに礼を言われて、ノアの腕輪のクリスタルが普段より若干赤く瞬いた。

「「う、裏切り者～～～！！」」

まさか、自分のデバイスに録画されていたとは思っていなかったノアとはやては
顔面蒼白になりながらも、こっそりと部屋から逃げようとしたが…

「ハヤテチャン？」
「ドコニ、イクノ？」

赤と白と金の悪魔っ子3人が2人の退路を阻んでいた。
脇を固める守護騎士達もだが、3人共バリアジャケットとアルガスアーマーに身を包んでいる。
ちなみにリインフォース?はプレシアやマリー達と共に退室し、別部屋で再教育を受けている。

「え、えっと…マスター?」
「なのはちゃん、フェイトちゃん…こ、これはやな…一種のジョークで…ってシグナム達まで!」

部屋の隅に追いやられた2人に、総勢7名の修羅達が迫っていた。

「みみみんな、穏便に穏便に…」
「そ、そうやで? なんやみんなして…まるで、鬼か悪魔みたいな顔しとるで」

「「悪魔でいいよ…」」(なのは、フェイト)

「「「悪魔らしいやり方で…」」」(シグナム、ヴィータ、シャマル)

「少し、頭冷やそうか」(クロス)

「ちょ、それ、違う! 色々違うやろ! それはなのはちゃんのセリフで…」
「しかも、なんだか結構未来のセリフも混ざって…」
「「キャアアァァァ〜!!!」」

チーン

「それじゃあ、時間もいいようだし。そろそろ行こうか」
「そうだね。もう準備出来てるだろうし」
何事もなかったかのように爽やかな笑顔のクロスとなのは達
「リンディに連絡したら、もう大丈夫と言ってたわよ、クロス」
プレシアもこの部屋で何があったかを詮索すらせずにいつも通りだ。
「あ、あはは…皆さん切り換え早いですね」
「アステルさん、これからがんばってくださいね…色々と」
「うん、ありがとうマリーさん…」
まだこの空気に慣れていないアステルはマリーから謎の励ましを受けていた。
ちなみにそんなアステルも部屋の隅で蹲ってる大きさの違う2つの物体には見向きもしなかった。
「って、いつまで私ら放置やねん!!」
「そうですそうです!!」
変な物体は抗議の声を上げるが…
「何か…イッタ?」
「「いえ、なんでもありません!!」」
赤い悪魔の絶対零度の笑みで沈黙。
「主はやても姉上もふざけていないで、そろそろ行きますよ」

「別にふざけてるわけやない…ってどこにいくんや？」

何も聞かされていないはやては、これから何があるのか知らずに首をかしげた。

「何って、はやてとリインの誕生日パーティーに決まってるだろ？」

「「誕生日パーティー！？」」

あっけなく話すクロスにはやてだけでなく、リインも驚いた。

「忘れたのはやてちゃん？　今日が何の日か♪」

シャマルに言われ、今日が何日か思い出したはやてはハッとした。

「今日は…私の誕生日や」

「はやて、ずっとリインの事ばっか考えてたから忘れたんだね」

「い、いやぁ～すっかり忘れてたわぁ」

くすっと笑うフェイトに、頬を赤くしてかくはやて。

「はやてが夜天の書を起動させてからちょうど一年で、魔力が最も安定する日だし
　リインと一緒の誕生日を祝いたいんだ、って言ったのははやてだろ？」

「アリサちゃんやすずかちゃん、それにクイントさん達が色々準備してくれてるよ」

「クロスくん、なのはちゃん…ほんま、ありがとう」

涙目でお礼を言うはやて。

隣に浮かんでいるリインも最初は意味が分からなかったようだが、

すぐに理解して目を輝かせた。

「ありがとうございます、クロスくん、なのはちゃん！」

ちなみに、リインはクロスの事をパパなどと呼ばないようにと、プレシア達に説得された。

「ははっ、礼を言うのはまだ早いさ。行こうぜ、はやて、リイン」
「…うん！」
「はいです！」
「この前は俺が盛大に祝われたんだ、十倍返しくらいに盛大にお祝いするから、覚悟しておくように」
「ふふっ、楽しみやね、リイン」
「そうですね、はやてちゃん」

こうして、一同はリインの申請云々などの処理をマリーにお願いし、海鳴市へと戻った。
そして、クロスとノアの誕生日と勝るとも劣らない盛大なパーティーが開かれたのだった。

ところで…気分が高まったリインがうっかりクロスの事を『パパ』と言って抱きついた事でアリサやすずか、ティアナやギンガに、はやてとノアがＯＨＡＮＡＳＨＩされる事になるのは…
また別の話。

続く

第９０話　「リインフォース？」（後書き）

カガヤ
「と、言うわけでリインフォース？とアステルが今回から本編に参戦です！」

ノア
「‥＊‥；”・＊・；・＾；・‥／（＊＾▽＾＊）／‥・；＾・；・＊‥”；‥＊‥　ワーイ♪」

リインフォース？
「‥＊‥；”・＊・；・＾；・‥／（＊＾▽＾＊）／‥・；＾・；・＊‥”；‥＊‥　ワーイ、ですぅ♪」

クロス
「なんだか賑やかになりそうだな…もうすでに賑やかだけど」

ノア
「そう言えばマスター…リインにお父さんと言われてどうでしたか？」

クロス
「お前はまだそれを言うか…」

リイン
「お望みならば…お父様、もご主人様も…ＯＫですよぉ／／／モジモジ（。＿。＊））」

クロス

「ノア！またお前はなに吹き込んだぁ～！？」

ノア
「こ、今回はまだ何もしてませんよぉ、リイン！？」

リイン
「はい、リインは学習したのです（「 ^-）　エッヘン」

ノア
「い、いやぁ～！？私の妹がどんどん変な道に走っていく予感がします！？」

カガヤ、クロス
「「お前のせいだろ（汗）」」

カガヤ
「まー…それは置いといて、次回は少し変わった話を…時期としてはもうずれかけてますけど、夏らしい…アレの話でいきたいと思います、では！」

第９１話　「ある夏の一夜」（前書き）

おかしいな…あっさり終わる話のはずだったのに…
こんなに大掛かりに…しかも、超シリアス（汗）
一部重い表現使っていますのでご注意を…

第９１話　「ある夏の一夜」

ある日の深夜、クロスはゆっくりと目が覚めた。
その顔はまるで懐かしい友人に会えたかのような、暖かい笑みが浮かんでいた。

「…全く、久々に会いに来たかと思えば…面倒事押し付けにきたのか…」

笑みを崩さないまま、クロスは傍らに眠るノアの寝顔を覗き、頭を優しく撫でて
寝室をゆっくりと音を立てずに出て行った…

遠見市

Ｓｉｄｅ　？？？

「ぅ、う～ん……あれ、ここは…どこ？」

いつもより少し涼しい真夏の深夜。
私は目を覚ますとどこかの公園のベンチで眠いっていました。

「こう、えん？　なんで私こんな所にいるのでしょう？」
「本当にねぇ、こんな時間にこんな所にいて危ないよ？」
「えっ？」

はっきりしない頭をに手をあてて、考え込んでいると後ろから声を

かけられました。
ふり返るとそこには、私と同じくらいの歳をした男の子がこっちを見ています。

「あの、あなたは？」
「僕？　僕はユウキ。眠れなくて散歩してたら君を見かけたんだよ」

君は？、と言うユウキ君に私も自分の名前を言おうとしましたが…

「私は…えっと、マヤ？」
「いや、僕に聞かれても…」

まだ寝ぼけているのか、頭に霞がかかったかのようにうまく名前が出てきません。

「多分…マヤ、です」
「多分って、まぁマヤと呼ぶ事にするよ、それでマヤはどうしてこんな時間にここに？」

公園の時計を見ると、もう夜中の0時を回っています。
私はこんな時間にこんな場所で何をしていたのか…行かなきゃいけない所があるのに……あれ？

「私、行かなきゃ…」
「えっ、何？」
「私行かなきゃいけない所があるんです！」

そう、私には行かなきゃいけない場所があって、やらなきゃいけない事が…
それが虚ろな思考の中で、唯一はっきりと思いだした事でした。

「行かなきゃ……」
「あ、待って！」

ふらふらと立ちあがり、公園から出ようとした私の肩をユウキ君が優しく掴みました。

「どこに行くのか知らないけど、僕も一緒に行くよ。こんな時間に女の子1人は危ないから」
「はい…ありがとうございます！」

正直、会ったばかりの男の子だけど、一緒に来てくれるのはありがたいです。
なぜか、誰かと一緒じゃないとダメな気がしましたので。

「それで、どこに向かおうとしてるの？」
「ええっと…あっち？」

どこに行くのかと聞かれて、とっさに指を刺した方角に目を向けてみました。
その途端に、何か身体に電気が流れたような感覚に襲われて…

「私…行かなくちゃ、あっちに、だって…」

自分でも何と言っているのかが少し分かりませんが、でも行かなきゃいけないのは分かります。

「ふぅーん、あっちにあるモノと言えば『幽霊ホテル』だね」
「幽霊…ホテル？」

ユウキ君が幽霊ホテルと言った瞬間に、パズルのピースが合わさっていく感じがしました。
まるで、自分が言いたかったけど口から先に出なかった言葉が出てきたかのような…

「そう、幽霊ホテル。気になる？」
「はい、なんだか…心にひっかかるというか」
「だったら行ってみようか？」
「えっ？　こんな時間に、ですか？」

もう真夜中です。幽霊とかはあまり苦手と言うほどではないですけど、それでも…

「こんな真っ暗な時間に行くのは、少し怖いですよ」
「大丈夫、大丈夫。俺も一緒に行くからさ。善は急げって言うでしょう？」

なぜかは知りませんが、ユウキ君にそう言われると少し心強くなりました。
それに、こんな時間にそんな場所に行くのは怖いですが、なぜか一刻も早くいかなきゃいけない…
なんて思ってしまったんです。

「それじゃあ、よろしくお願いします」
「うん、こちらこそよろしく」

差し出されたユウキ君の手はとても温かく、心地よかったです。

・　・　・

そして、やってきました幽霊ホテル。
このホテルは遠見市郊外の山奥にあって、数年前に火事で廃業する前は人気のホテルだったそうです。

「流石に夜中に来ると…不気味ですね」

ユウキ君がどこからか持ってきた懐中電灯の明かりが、ホテルの外観をなぞるように照らし出しています。
火事の跡、ホテルの半分が焼け焦げたと言うのに未だに取り壊し工事が始まっていません。

「ここ、取り壊ししようとしたんだけどさ…工事の人が次々に何かしらの事故にあってるんだよ」
「ユ、ユウキ君!?　なんで今そんな話をするんですか!?」

真顔で話すユウキ君に背筋がぞわぞわっとなりました。

「いやぁ、マヤがなんでこのホテル壊さないのか知りたそうな顔してたから」
「知りたいですけど…でも、知りたくなかったです!」
「ははっ、それじゃあ行こうか…あれ?」

先頭を切ってホテルに向かおうとしたユウキ君の足がピタリと止まりました。
何があったのかと、困った顔をするユウキ君の視線の先には

「あちゃー入口崩壊してるよ…」

ホテルの入り口は屋根が崩落していて、半分以上が埋まっていました。

元々老朽化も進んでいたらしいので、火事の影響でもろくなっていたのかもしれません。

「左半分は空いてるけど…どうしたの？」

心配そうなユウキ君の声が聞こえますが、私は返事をする事が出来ません。

私は崩落した入口を見た途端に、金縛りにあったようにしゃがみこみ、震えていました。

「怖い怖いコワイこわい…怖い？
違う…怖いんじゃない…怖いだけじゃない……
あぁ！　ちがうちがう…いやだいやだいやだあぁぁ～！！」

「マヤ！！」

「あっ……ユウキ、君？」

狂ったように涙を流しながら叫び、頭を抱え震えだした私はユウキ君の声に目が覚めました。

ユウキ君は私を抱きしめ、ゆっくりと頭を撫でてくれていました。

「マヤ、大丈夫？　引き返した方がいいんじゃない？　すごい汗と涙だよ？」

「大丈夫…です、ありがとうユウキ君」

差し出されたティッシュで汗と涙をぬぐい、私はもう一度幽霊ホテルを見上げました。

まだ身体の震えは完全には止まっていませんでしたが、私はもう怖がってはいられませんでした。

「…マヤ?」
「ユウキ君、やっぱり私、ここに来たかったんだと思うの…だから、私行くわ」
「行くって、でも入口は危険だよ?」
「大丈夫よ、確かこっちにまだ入り口があったはずだから。だから…ユウキ君はここまで」

私は、ユウキ君へと振り返り手を振って別れを言いだしました。
だって、このまま行けば、ユウキ君も危ないと思ったので

「えっ?」
「ここからは私1人で行きます。大丈夫、さっきユウキ君から、勇気たくさんもらいましたから」

本当は、1人で行くのは怖いです。
でも、こんな危ない場所に優しいユウキ君を連れていくのはダメだと思ったんです。

「それじゃあ、ここまでありがとうございました。気を付けて帰って下さいね」

そう言って、私はさっきよりも強い足取りでホテルのもう1つの入り口へと向かいました。
背後で立つユウキ君……の、冷たい笑みに気付かないまま。

「ここがこのホテルのもう一つの入り口」
「へぇ、よく知ってるね。うっ…すごい匂い」

裏の入口から入った私達は…奥から流れ込む風の匂いに思わず鼻と口を押さえました。
火事があったのは数年前だと言うのに、まるでつい先日起こったかのような焦げくさい匂い。

「って、そうじゃなくて、なんで付いてきてるんですか、ユウキ君!?」
「なんで、って…マヤを1人で行かせるわけには行かないと思ったからだけど?」

何でもないという顔で私を見るユウキ君に、私はありがたいと思いつつもやはり気が引けました。

「私は、1人でも大丈夫です!」
「僕もここに用事があるからね。ついでだよついで」
「……分かりました、一緒に行きましょう」

私にはそれが彼なりに気を使ってくれたのだと思いました…本当は全く逆なのでしたが

「すごい、匂い…これは、なんの匂いでしょうか?」
「これは、死臭だね」
「死臭!? そんな火事は数年も前なんですよ。今もそんな匂いがするはずは…」
「だからさ。数年前じゃなくて…最近も、人が死んでるって事だよ」

暗くてユウキ君の表情が読めませんが、それが尚更不気味さを増していました。

「…ねぇ、マヤ? こんな廃墟に一体何の用があるの?」

黒コゲになったお土産売り場らしき場所や、比較的綺麗な受付を通り過ぎ…長い廊下へ。

「分かりません、ですが…ここに入って思い出した事があります」

「思い出した事？」

「それは……私、ここに来た事あります」

そう、私はここを知っている。ここに来た事がある…〇〇んと…〇〇ん？

「あれ…私、誰と一緒だったのでしょう？」

思い出してきたのに肝心な所が思いだせません。

そうこうしてるうちに、不意にどこからか明かりが差しこんできました。

「あ、なんだか明るくなったと思ったら…ほら、月が出てきたよ」

割れた窓ガラスから外を見上げると、綺麗な満月が見えました。

雲一つない空にぽっかりと浮かんだ満月、廃墟で見上げるその光景に私はユウキ君と見惚れていました。

「……そろそろ、かな」

腕時計を見たユウキ君が突然、私の手を取り歩きだしました。

「ど、どうしたのユウキ君？」

その手が少し、冷たく感じたので私は反射的に足に力が入り

それを見たユウキ君は深く溜息を吐きながらも、立ち止まってくれました。

「どうしたの、ってこっちのセリフだけど？　行かないの？」
「？　行くって…」
「マヤの行きたい所だよ。もうすぐだっていうのに…さっきから進んでないからさ」

淡々と話すユウキ君の言葉が、深く私の心に突き刺さって来ました。
私の行きたい所が…この先にある。けど、私が進んでいない？
言われてみて気付いた事、それは……私の足が前へと進もうとしない事。
自然に、ほとんど無意識に私は後戻りをしていました。
まるで、そこから先には行きたくないかのように…

「ほら、すぐそこだよ…マヤの行きたい所は」
「わた、し…行きたい…行きた・・く、ない？」

またです。
表の崩落した入り口を見た時と同様、いえ、それ以上でした。
私の身体は震えが止まらなくなり、その場にしゃがみ込んでしまいました。

「はぁ…ここまでスムーズに来たと思ったのになぁ…」

ユウキ君はさっきよりも深く溜息をつき、頭をかいています。

「最後まで自分の意思で行ってくれたら…『俺』も楽だったのにさぁ」

頭意識が朦朧としながらも震えていた私には、ユウキ君の口調が変わった事には気付きませんでした。
そして、いつの間にか私とユウキ君の周りに淡く光る、青白い光の玉が無数に浮かんでいる事にも…

「仕方ないか、まぁ…入口でダメになるよりはマシだし～？　やる気の出る話でもしようか…
これは、少し昔の話…と言ってもほんの2，3カ月前の話だよ？
ある所に仲の良い双子の姉妹がいました。両親は海外にいて、双子は祖父祖母達の家に居ました」
「……えっ？」

なぜか、どこかで聞いた事があるような話…私は震えながらもユウキ君の話に耳を傾けました。

「その双子には生まれつき少し変わった力がありました、その力とは…見えない相手と話が出来る事。
見えない相手と言っても、それはその姉妹以外にだけ見えないと言う事です。
たまに姉妹と同じものが見える人もいましたが、それでも姉妹の身近にはいませんでした。
幸い、その事を知った両親は姉妹に見えない相手と話せるのを、周りに言う事を硬く禁じたおかげで
学校などで気味悪がられる事はありませんでした。
しかし…気の強かった姉は次第にその事に不満を持ち始め、周りに自慢したくなりました…」

あ…この話…どこかで聞いた事がある…その姉の名は…阿夜、私の姉…
でも、違う…阿夜は、姉さんは、自慢したかったんじゃない…姉さ

んはただ…
・
・
・
あれは…季節外れの心霊番組を見ていた時でした。
心霊番組には珍しく、生放送で有名な心霊スポットに侵入すると言う企画で
私達の住んでる近くにある幽霊ホテルも、その企画の1つでした。

「ねぇ、ここ行ってみない？」
「幽霊ホテル？…なんでここに？」
「それはね…ここに私達と話せる人、沢山いそうじゃない？」
「…えっ？　ごめん、姉さん。話が全く分からない」

私達は生まれつきなのかは分かりませんが、普通の人には見えないナニカ、幽霊と話せる力がありました。
昔はただ話せるだけだったのですが、今年の冬からは触れるようにもなりました。
おかげで、幽霊話とか聞いても怖がる事はないですけど、それでも私は少し不気味でした。
けれども、姉の阿夜は好奇心が旺盛で、よく近所の幽霊話を友達から聞きだしては

『よしっ、実際にその場所に行ってみましょう！』

と、私を幽霊の目撃された場所に連れていったりしていました。
大抵は根も葉もないうわさで、幽霊のゆの字もありませんでしたが、たまに当たりもあり
ちゃんとした幽霊と話せる事が出来たりしました。

そして、触れるようになってからは私達と話した幽霊はなぜかそのまま消えてしまう事が多くなりました。
ある幽霊曰く

『君達と話すと、なんだか…安らいでいくんだよ』

と、満足そうな笑顔で消えていって行きました。
お父さんとお母さんにはその話をした時、2人共とてもおどろいた顔をして

『いいかい、阿夜、真夜…あまりそういう人とは話したらダメだよ？』
『そうよ、その人達はね。生きているあなた達とは話して行けない人達なのよ』

お父さん達は私達には『幽霊と会話して浄化させる力』があると言っていました。
ですが、まだ子供の私達にはその力をうまく使えないから、と言って力を使う事を禁じました。
同時に、この力の事は誰にも秘密にするようにと硬く約束させられました。
元々、幽霊と話せる力に関しても、誰にも話していませんでした。
それから私達は、この力を使う事がありませんでしたが…正確には私だけ、使う事がなかったのですが…

「だから、ここに行って、幽霊達を浄化するの！」
「えっ、浄化って…まさか」
「そうよ、そのまさか！　だって…ここ、まだ沢山成仏してない人沢山いるのよ？」

あ、やっぱり姉さんにも見えたんだ。と私は思いました。
実はこの番組で幽霊ホテルが出てきた時、私には沢山の幽霊が見えたんです。
テレビには映らなかったようで、他の人にも見えてなかったようですが
ちょうど、ホテルの奥にリポーターと芸人さんが入ろうとしていて、同行していた霊能力者さんが

『ダメ、ここから先は絶対に行ったらダメよ。沢山…いるわ』

とすごい剣幕で止めていました。
その人曰く、数年前の大火事で亡くなった人に吸い込まれるように事故や事件で亡くなった地縛霊が集まってきていて、とても危険な場所になっているそうです。

「ほら、沢山いるって本職の人も言ってるんだし」
「でも、本職の人が危険って言っているんだよ?…私達見たいな素人が行っても…」
「大丈夫よ、私もうあれから何人も幽霊さんと話して浄化しているんだから」
「えぇぇ〜!?　姉さん、お父さん達にダメって言われてたのに!?」

姉は昔から聞きわけが良い方ではなかったですが、それでもダメと言われた事は素直に従っていました。
それでも、この力に関しては、素直に従うわけにはいかなかったみたいで

「だって…可哀相じゃない、死んでもずっと苦しんだり悲しんだり

してるなんて…

私が少し話すだけで、気持ちが安らいでちゃんとあの世に行けるのよ？」

「姉さん…」

姉さんらしい…私はそう思いました。

気は強くても根が優しく…妹の私が言うのもあれですが、姐御肌な姉さん。

幽霊とは言え苦しんでる人がいて、自分に癒す力があると知って黙っている事などできなかったんです。

「だから、あそこに居る人達も助けたいの、みんな悲しんだり苦しんでたのよ、ほっとけないわ。

でも、今回は数がとても多いから…だから、真夜の力も貸してほしいの！」

真剣な姉さんの表情、これはいつも姉さんが本当に誰かを助けたいと思ってる時にする顔でした。

なので、私もそんな姉さんの力になりたくて

「私、姉さんみたいに力使った事は、全然ないけど…それでも…」

「大丈夫！　私もいるんだもの。２人なら、きっとうまくいくわよ。ね、真夜？」

「ふふっ…うん、そうだね、姉さん」

こうして、私と姉さんはまだ日が高いうちに幽霊ホテルへと向かいました。

話す相手の人数が多くて、時間がかかるだろうし、それに、昼間なら幽霊さん達も大人しいからそれが理由でした。

きっと、私と姉さんとならうまくいく…そう、思っていました。
それが…誤りとは思っていませんでした。

『ヨコセ、ソノ力…寄コセ』
「な、なんなのこいつ、全く話聞いてくれないし！　それに…昼間なのにすごい力!?」
「姉さん、逃げよう！」

幽霊ホテルに入って、幽霊さん達と話して行こうとした…その時。
私達の前に、怨念の塊のような黒い幽霊が現れ、私達に襲いかかって来ました。
今までの幽霊さんは少し凶暴そうに見えても、こちからは何もせずにただ話しかけていればすぐに仲良くなれたのに…

「真夜…急いで！…」

―ガラガラッ

「きゃあぁ!?」
「姉さん!?」

開けたホールから外へと向かおうとしていた時、突然柱が崩れ、姉さんへと倒れ込みました。

「姉さん、姉さん!!」
「うっ…うぅ…足が……いたいよ」

幸い私は無事でしたが、姉さんは下半身が崩れた柱に埋もれていま

した。

「姉さん、しっかり、今瓦礫を…」
「真夜、いいから…早く逃げ、て！…」
「そんな、姉さんを置いて逃げるなんて！」

瓦礫はどれも重く、私の細い腕では持ち上げる事は出来ません。
携帯も電波が届いていないのか、圏外表示です。
姉さんは、瓦礫を持ち上げようとする私の手を力強く握りしめて、
優しく私に言いました。

「いいのよ…可愛い妹をこんな所に連れて来た私が悪いんだから…」
「姉さん…」
「ほら、泣いてる暇はないわよ…行って、そして…生きなね、真夜」

下半身が押しつぶされて痛いはずなのに、姉さんはそんなそぶりを見せずに
いつも私を窘めるような優しい笑顔で、私を押しやりました。

「ねえ、さん……待ってて！　すぐに助けを呼んでくるから！　諦めないで！」
「全く…分かったわ、気長に待ってるから…早く行きなよ」
「……うん！」

姉さんに後ろ髪を引かれましたが、それよりも早く外に行って助けを呼びに行かないと…

「必ず、助けに戻って来ます、姉さん！」

そう、叫んで私は外へと…飛び出して……

・・・

「私…そうだ、助けを呼びに行って……なんで、あんな公園に？」

「どう、思いだした？」

ニコニコと微笑みかけてくるユウキ君の顔を、私はなぜか見る事が出来ませんでした。

絶対に見てはいけない…そう思い、顔を背けた先には…砕けた壁。

「あ、それ。俺が今さっき砕いたんだよ…感動の姉妹のご対～面♪」

壁の向こうには…天井がない、大きなホール。

ホールの真上には満月。

その満月の光が差し込んだホールの端には…瓦礫の山。

そして…瓦礫に埋もれているように見える…白い手、黒い髪……

阿夜。

「あっ…あぁぁぁぁ～！」

間に合わなかった…

「残念無念、お姉さん…間に合わなかったみたいだね？　もう白骨化してるよ」

きっと助けに戻ると言ったのに…

「あああぁ～！！」

…姉さんは…もう……死んでいました。

「せっかく生前は綺麗な顔だったのに…あの顔のまま取りこみたかったな…『君』もね」

そのユウキ君の声を聞いて、私は…更に思い出しました。
あの時、私達を襲った悪霊は…こんな声じゃなかったか、と。

「……ユウ…キ、君……まさか、あなたは……」
「せいか～～い、不思議な力を持った姉妹が来ると知って、取りこめるチャンスと思ったんだけど…
姉妹共々逃げられちゃってね。お姉さんはあの後更に崩れた瓦礫に潰されて死んじゃうし
魂を取りこもうとしたのに、すぐにいなくなっちゃってさ～…で、妹の君だけでも
取りこもうと色々探したんだけど、君うろうろししすぎ、なかなか見つからなかったよ～」
「…公園で、私に話しかけたのは…」
「そ、君をここに連れてくるため。記憶があいまいみたいだったからね、思い出してもらおうと思って」

嬉しそうにニコニコと話すユウキ君…悪霊。

「……なんで、ここに？　公園で取りこめば良かったじゃないですか！！」

思いださないまま殺されていれば…いえ、それだともっと後悔…したでしょうね。

「何も思いださないままの君を取りこんでも、力は取りこめないからね…それに」

話している悪霊がユウキ君の姿から、あの日見た巨大でおぞましい姿へと変わって行きました。
大きな黒いマントを全身に被った紫の悪魔…まるで死神のようでした。

「絶望に染まった魂の方が…うまいからなぁ！」
「きゃあぁ～～！！」

悪霊は紫色に輝く腕に握りしめた大きな鎌を、私へと振り降ろしてきました。

もう、逃げられない…逃げる気もありませんでした。
私は姉との約束を守れずに、見殺しにしたんです。
生きていても…それなら、いっそ姉さんと同じ場所に…
ごめんなさい、お父さん、お母さん…言いつけを破った罰ですよね…
ごめんなさい、姉さん……今、姉さんの所に…

『あのねぇ～…あいつに食べられて私の所に来れるわけないでしょう！』

…えっ？

＜ハーケンスラッシュ＞

「ぐあぁぁ～！！」

目を瞑った私の耳に、懐かしい姉さんの声が聞こえたかと思うと
機械のような音声が聞こえ、目を開いた私の眼に映ったのは

「な、なんだ…お前はぁ！」

鎌を持った腕を切り落とされた悪霊と

「通りすがりの…魔導師だ！」

黄色に輝く光の鎌を手にした、金色の髪をした小さな可愛い死神のような女の子でした。

―ドガガガガッ

次に聞こえてきたのは、銃撃音。

ですが、テレビや映画で聞く銃声とは何か違っていました。

見ると、悪霊に向けて次々に赤い銃弾が撃ち込まれていっています。

「がっ…がが…き、きさまら～」

「んで、俺が通りすがりの魔導師その2、な」

次に私の前に現れたのは、薄い茶色の髪と額に紋章のような模様が浮かび、赤い瞳をした男の子でした。

そして、私の肩をそっと抱きしめるこの手は…

「大丈夫、真夜？」

姉さんの幽霊でした。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

２丁拳銃を構えた銃士クロス、そして、ハーケンフォームのバルデ

ィッシュを構えたフェイト。
2人の魔導師が悪霊を睨みつける。

「…魔導師、だと？」
「そ、本来お前のような奴の相手は、俺らみたいなのがするんじゃないだろうけど…」
「でも、あなたは…見過ごすわけにはいかないから…」
「舐める、なあぁ～！！」

悪霊が吠えると、辺り一面が大きく揺れ出し、次々と青い玉が浮かび上がって来ました。

「ね、姉さん…これは？」
「あの悪霊、随分と色々な幽霊取りこんだ見たいね…真夜、私達は邪魔になるわ、こっちへ」

真夜は阿夜に連れられ、離れた場所へと避難した。
それを片目で確認したクロスはフェイトと頷き会い、左右へと散った。
と、同時に青い玉が銃弾のように、2人がいた場所へと突き刺さった。

「この玉は…まさか！？　よせ、フェイト！」
「はぁ～！…っ、どうしたの、クロス！？」

銃口を青い玉へと向けたクロスは急に何かに気付き、焦ったような表情を浮かべ
青い玉をハーケンで切り裂こうとしたフェイトを呼びとめた。

「ダメだ、フェイト。この玉を攻撃したら…」

「ほう、気付いたか…」

余裕の表情を浮かべ、宙に浮かんだ悪霊がにやりと笑った。

「なんで？　この玉が邪魔してあれに攻撃が…」

「それでも、ダメだ！　この玉…これはあいつが取りこんだ人達の魂だ！　攻撃したら…魂が消える！」

「えっ！？」

そう叫ぶ間にも青い玉は追尾弾のように、前後左右からクロスとフェイトを襲う。

2人は迎撃せずに、身体を捻って玉をかわしていく。

ホールの反対側に降り立ち、クロスとフェイトは背中合わせになる。

その周囲を取り囲みながら、青い玉は数を増やしていく。

「…ふっふっふっ、そう、これは俺が今まで取りこんだ奴らの魂そのものだ。これをお前らが壊せるのかは
　知らないが、もし破壊しようものなら…こいつらは魂ごと消えるだろうな、あっはっはっ！」

「……そんな、ひどい！」

「くそったれ…これじゃ、攻撃出来ない」

歯軋りするクロス達の周りを囲む人魂の数は、ますます増えて行った。

「姉さん…あの子達は？」

「あの子達は…魔導師って言うの。霊能力者達と一緒みたいなものよ、私達の味方」

真夜は目の前の光景に阿夜と再会できた喜びも忘れ、ただ見つめて

いた。

「クロス…このままじゃ」

「あぁ、攻撃出来ないな…なら、隙を見て奴だけを直接叩く！」

「さぁ、お前達も強い力を持っているようだな…そいつも頂こうか！」

悪霊が手をかざすと、無数の人魂は一斉にクロス達へと襲いかかった。

「ガード・シェル！」

クロスは両手をかざし、仙気のバリアを貼りこれを防いだ。

だが、人魂はバリアに触れると、破裂して飛び散って行った。

「なっ！？」

「…はじけ、飛んだ？」

驚く2人に悪霊は高らかに笑い声を上げ、人魂の攻撃を止めた。

「言い忘れていたがな…こいつらはとても脆い。撃ち落とそうが防ごうが…簡単に消えるよ？」

「「っ！？」」

言い終えると、悪霊は人魂の攻撃を再開させた。

ただし、さっきのように一斉にではなく、囲んでいる人魂を次々と時間差をつけて攻撃させていった。

迎撃も防御も出来ないクロスとフェイトが取れる行動は…回避のみ。

「ちぃ…避けるしかない、フェイト！」

「…バルディッシュ！」
＜ソニックフォーム＞

クロスは一番早く動ける闘士に、フェイトはソニックフォームへと姿を変え、人魂を回避した。
だが、避けるしかできないので、最初は避け続ける事が出来たが…

「がっ！？」
「クロス！？…キャア！」

無数に近い人魂を避け続けるのは、不可能に近い。
一発掠ると僅かに動きが鈍り、その隙を悪霊が逃すはずがない。
的確に避けにくい角度からの攻撃が2人に突き刺さっていく。
悪霊自身はただ黙って人魂を操るだけで、クロスとフェイトは傷付いて行った。
人魂とは言え、当たれば魔力ダメージに似たダメージが2人に襲いかかる。
幾度かクロスもフェイトも、悪霊本体に攻撃しようとしたが
斬撃も射撃も悪霊の側に常に浮かぶ人魂達が、その身を犠牲にして防いでいく。
フレイムギアで悪霊のみを攻撃しようとしても、人魂が密着していてうまく、悪霊本体のみに当てられない。
砲撃や範囲魔法は人魂も巻き込むので、2人共使えない…
正確には砲撃や範囲魔法を使わない理由は別にあるが…

「…あの子達やられちゃう…」
「あぁもう、あの子達ったら、死人を気にして自分達が傷付いてどうするのよ！」

阿夜や真夜はそんなクロス達を黙って見ているしかできない。

元々、悪霊は2人が目当てなので、下手に動けば悪霊の目がクロス達から自分達へと移ってしまう。
そうなれば、せっかく悪霊を引きつけている2人の足を引っ張ってしまう。

「私達よりあんなに幼い子達が…あんなに傷付いて戦ってるのに、私には何も出来ないの…」

真夜は泣いていた。
詳しい事情は知らないが、あの子達は自分達の為に戦ってくれているのはよくわかった。
姉を半ば見殺しにし、今もまた自分を助けに来た子達に何もできない自分が悔しかった。
両親の言った通り、自分達にはまだ力を使いこなせていなかった…だから何もできない。

「真夜、泣いてる暇はないわよ…2人を助けないと」
「でも…どうやって？」
「……それは、こうやるのよ！」

突然、阿夜は近くに飛んできた人魂に飛びかかり取り押さえた。

「同じ幽霊の私なら、壊す事なく捕まえられるってわけよ！」

当然、その動きは悪霊の目にとまった。

「……んっ？　何をしているんだ？」
「よそ見するなよ！」

だが、真夜達が何をしているか考える前に、クロスがギアを使って

奇襲をかけた。

「くらえ…シェル…」

「無駄！」

悪霊に肉薄し、シェルブリットで殴りかかったクロスの周りに人魂が集まってきた。

人魂を殴らないように拳を止めたが、そのせいで逆にクロスに隙が出来た。

「しまっ！？」

「ハーケンセイバー！」

人魂が一斉にクロスに攻撃を仕掛けたが、それよりも先にフェイトの射撃魔法が人魂を切り裂いた。

「…ぐっ、助かった…フェイト」

「クロス…もう、ダメだよ。こっちも…攻撃しなきゃ……」

悪霊から距離を取り、側に降りたクロスの顔を見てフェイトは苦しげにそう言った。

人魂の数は十や百ではなく…数百はある。

【彼女】　が言った通り、あの悪霊はここで多くの幽霊を取りこみ、自分の力にしていったようだ。

「でも、それじゃあ…あの　【人】　達が！」

「くっ…」

クロスの声に、フェイトは悲しげに俯いた。

クロスも、それにフェイトもあの人魂達を死んでるとはいえ…　【

人】　として扱っていた。
それは…　【有り得ない生まれをした命】　を持つ、2人だから尚更…割り切る事が出来なかった。

「クロス君、フェイトちゃん…反撃して、あの人達を救ってあげて！！」

突如、真夜がホールに飛び込みならが叫んできた。
腕の中にはさっき　【阿夜が捕まえた人魂を抱えている】。

「真夜さん？…でも、救うって？」
「聞いてください！　もうあの人達は…成仏できないんです！」
「えっ…」
「…それは、どういう！？」

涙ながらに真夜は叫んだ、心の底から悲しく…でも、強く叫んだ。

「あいつに…あの悪霊に取りこまれたら…成仏できないんです！
攻撃されても、防がれても…そして、悪霊を倒したとしても…もう、消えるしかないんです！！
…だから…だから、あんな奴に利用されるくらいなら、あなた達に消してほしいって！
もう利用されたくない…解放して欲しいって！……この人達…言って……います」
「ちっ、余計な事を……」

泣き崩れる真夜を苦々しく一瞥した悪霊を見て、クロスとフェイトはそれが本当の事と悟った。
真夜の腕に抱かれた人魂…
阿夜が捕まえ抑え込んでいる間に、真夜が力を使って話を聞いた。

そして、人魂の真実を知った…もう、消す事でしか、助けられない事を…
悪霊を倒せば解放出来る、そう思い。人魂から弱点を聞きだそうとしたが
それがかえって…残酷な真実を聞きだす事になってしまった。

「……そ、んな…」

フェイトも同様だった。
あの悪霊を倒せば、救えると。
例え身体は死んでしまっても、魂は救えると…天国に行けると、そう思っていた。

『ありがとう、お兄ちゃん。お姉ちゃん…もう、十分だよ、他の皆も…助けてあげて』
「ごめんね…ごめんね……ごめんねぇ…」

真夜の腕に抱きかかえられた人魂の声なき声は
最後に、クロスやフェイトにも届いた。
阿夜は泣きじゃくる妹の背中を抱きしめ…一緒に泣いていた。

「……」

クロスはさっきから黙ってそれを見つめていた。

「……ちぃ、いいんだよ、そいつらは…お前ら双子の力が手に入れば！」
「……」
「それに加えて、そこのガキどもの力も手に入れば…雑魚の魂一万体分にも勝るんだからなぁ！」

「…ひどい…」

フェイトは涙をぬぐい、悪霊を睨みつけた。
クロスは…ただ無言。

「だから…そいつら哀れに思うのなら…大人しく、俺に取りこまれろぉ！！」

数十個の人魂が一斉に阿夜と真夜に襲いかかった。

「逃げて！」

助けに向かおうとしたフェイトだが、人魂が壁となって立ちふさがった。

「……嫌だよね…死んでも利用され続けるのは…でも、大丈夫…」

真夜は優しく語りかけたるが、人魂は止まらない。

「この子達が…きっちりケリも仇もきっと付けてくれるから…」

阿夜も人魂達に話しかけた、生前と変わらず…涙ながらにも笑顔を浮かべながら。
そうして、姉妹達に襲いかかった人魂達は…

「……ギア」

目の前に現れた剣士クロスによって、一閃された。

「もう…迷わない…」

フェイトの壁となった人魂達も、光の鎌で1つ残さず切り裂かれていた。

「…フェイト」

ゆっくりとクロスの横に並び、剣を持った手を握りしめた。

「大丈夫だよ。私も一緒にやるから…クロス1人に背負わせないよ」

フェイトの眼に涙はない。代わりにあるのは…強い意志。
人魂を消す悲しみと痛みをクロス1人に背負わせないという、強い意志。

「ありがとう…行こう、フェイト」
「うん！」
＜俺達も忘れないように、マスター＞
＜…マスターの意思と共にありますよ＞
「そうだな…ラファール」
「バルディッシュ…」

2人はそれぞれの相棒をひと撫でし…悪霊を見上げる。

「覚悟しろ…お前は……絶対に…許さない！」
＜ライジング・ギア＞
「っ！？…ぐぎゃぁ！」

クロスの顔に紋章が浮かび、眼が黄色く輝き、悪霊に雷が降りそそいだ。
雷はそのまま悪霊にまとわりつき、動きを封じていった。

＜ザンバーフォーム＞
「はあぁぁ！！」

巨大な光の剣へと変わったバルディッシュをフェイトが振り回し、近くにいた人魂を一気に切り裂いた。

「フェイト！　分かってると思うけど！」
「うん、砲撃や範囲攻撃はなしだね！」
「このホテルを　【まだ】　崩壊させるわけにはいかないからな！」

クロスの蹴りや拳打を混ぜた雷の剣が、フェイトの光の大剣が人魂を切り裂く。
その光景を双子の姉妹は…場違いだが、美しいと感じていた。

「……綺麗、だね」
「そうだね…でも、悲しいね…」

悪霊は自分を縛る雷を弾き飛ばし、ホールから外へ飛び出して眼下のクロス達を見降ろした。

「はぁ…はぁ…おのれ、おのれぇ～！！！」

そして、両手を掲げ、残った全ての人魂を一か所に集めた。

「これで……つぶれろぉ！！」

巨大な青い球体と化した人魂が、ホテルごとクロス達を潰す勢いで落ちてくる。
それを見たフェイトとクロスは笑みを浮かべた。

「…それを」
「待っていた！！」
と向けた。
2人は肩を並べ、クロスは右手を、フェイトは左手を真上の悪霊へ

「ライジング…」
「プラズマ…」
「「ノヴァ・スマッシャー」」

それぞれの雷を纏った砲撃が、一直線に放たれた。
このホールに天井はない、そして、今悪霊がいるのは屋外の上空。
つまり、真下から放てば砲撃はホテルを傷つけずに、悪霊へと向かって行く。

「なっ…にぃ！？」

2つの雷撃は巨大な人魂に直撃し、音もなく消滅させた。

「くそっ……この借りは必ず…」

飛んでこの場を離れようとした悪霊の耳に、死神の声が聞こえた。

「借りなんて作るわけないだろ…」
「ここで、終わらせる」
「あっ…あぁ～…」

恐る恐る顔を上げた悪霊の眼に映ったのは

「「雷帝十文斬！！」」

満月を背に、自分へと向けられた2つの雷の剣。
それが十文字を描き、自身の身体を引き裂いたのが、悪霊の眼に映った最後の光景だった。

「…すごいんだね、魔導師って」
「……うん」

クロスとフェイトが手から光を放ったかと思えば、すぐに消えて次の瞬間には上空に浮かんだ悪霊を十文字に引き裂いていた。
そんな数秒の出来事が、真夜達には数時間にも長い時間に思えていた。

「…終わった、ね」
「うん…そうだね」

裏口から外に出た2人は、ゆっくりと外を歩いていた。
虫の声が微かに聞こえ出した。
もうこの場には悪霊も、迷える人魂はいない…
双子の姉妹と、空から舞い降りた2人の魔導師だけ。

「……真夜」
「何、姉さん？」
「迎えに、来たわ」
「……やっぱり、そうなんだね」

辛そうに話す、阿夜…真夜は笑って答えた。

「まさか…気付いていたの!?」
「さっき、思いだしたの……【私も死んでいる】って」

真夜はゆっくりと正面の入口へと歩いた。
阿夜は黙って後を付いて行く。
クロスとフェイトも少し離れて歩いている。

そうして、正面入口に付いた。
真夜はしゃがみこみ、瓦礫の間から僅かに出ている白い棒のようなものを愛おしく撫でた。

「…これが、私…」
「真夜…あんたはあの時、助けを呼ぼうとして入口の崩落に巻き込まれたのよ…
崩落させたのは勿論、あの悪霊ね。あいつ、私達を殺して魂を奪い取るつもりだったのよ。
狙いは私達の力、これで今まで以上に幽霊を操る気だった…」

阿夜の言葉をクロスが続けた。

「でも、誤算が3つ生まれた、1つは…阿夜さんと真夜さんの魂が死んですぐに肉体から消えた事。
普通、魂はすぐには身体から離れない…突発的な事故とかなら尚更ね。
自分の身に何が起きてるか把握してないから、肉体の側にしばらく佇んでいるんだよ」

阿夜が苦笑しながら、それに続いた。

「私の場合は、死んで魂は肉体に宿っていたけど、悪霊が真夜の方

に気が向いている間に
あの時、私達が成仏させた魂に助けられて、すぐに肉体から離れ逃げだす事が出来たのさ。
真夜、あんたが死ぬ前にね、私はもう死んでたのよ…」
「そんな…私、姉さんを助けられなかった…何の役にも…」
驚いた顔を浮かべ、見上げた妹の顔を姉は優しく抱きしめた。

「あんたの方に意識が言ったおかげで私は逃げだす事が出来たのよ。
あんたのおかげ……っていう言い方は変よね。それで、2つの目の誤算、それは…」
「…私?」

阿夜は真夜の胸を指さした。

「あんた、死んだの気付かないで、まるで転んで起き上がっただけのように、肉体から走りだしたのよ?
それもすごい速さで…同時に私も悪霊から逃げだしたから、どっちを追いかけようか
悪霊は一瞬迷ったの、で、2人共見失った…と言うわけ」
「それじゃあ、私の記憶があやふやだったのは…」
「そう、死んで肉体から離れすぎたものだから記憶とかが曖昧になったのよ。それに…
あんた、自分でも気付いてないだろうけど、隠れるのうまかったのね~
誰も街中をさ迷うあんたに気付かなかったのよ、今まで3カ月くらいもの間」
「えぇ~!?　私そんなに!?」

真夜はその力をおかげか、幽霊となって街中をさ迷ってはいたが、

誰にも目撃されなかったのだ。
もし、目撃されていたら…もう少し変わった展開になっていたかもしれない。

「それで、私もあんたを探してたんだけど…なかなか見つからなくてね。
やっと見つけたと思ったら、あんたあの悪霊に先に見つかってたから焦ったわよ。
しかも、取りこむ為にホテルに連れ込んで、真夜の記憶を取り戻させようとしてたから
尚更慌てたわよ。でも私が行っても取りこまれるだけだしね…」

阿夜の方も真夜を探す為に成仏せずにこの街に留まっていたそうだ。
でも、悪霊や霊能力者やその類から逃げ続けていた為に、まともに探索出来なかったらしい。

「それで、どうしようかって思ってたら…助けてあげようか、って子が現れたのよ」
「…クロス君達の事？」

話を聞いていて、急に指を差されたクロスは静かに首を振った。

「いや、俺はそいつから真夜さん達の事を聞いたんだよ。ちなみにそいつは幽霊の親戚みたいなものだよ」
「あの子からクロスくん達の事聞いて、すぐに助けを求めようと思ったんだけど…私は行けなかったの」
「えっ、どうして？」

自分で伝えた方が早いはずだが、阿夜にそれは出来なかった。

「私、この街、遠見市から出られなかったのよ、広範囲な地縛霊ってやつ？　クロス君が住んでるのは
　ここから離れた海鳴市。困ったな―と思ったら、その子がクロス君を連れて来ると言ってくれてね」
「そいつ、急に俺の夢に出てきたかと『可愛い双子がピンチよ、ほら、あんたの出番出番！』とか
　言いやがって…大まかな話をされて、俺とフェイトがこの街に来たってわけ」
「そうなんだ…本当にありがとう、クロス君、フェイトちゃん」
「私からもお礼言うわ、２人のおかげでこうして無事に再会出来たし、２人して成仏できるわけだし」

双子の幽霊に揃って頭を下げられ、クロスとフェイトは照れくささそうに顔を見合わせた。

「いやぁ～…今回のは本当に偶然、と言うか運が良かったんだし、そんなに礼を言われる事じゃ…」
「２人が無事…とは言えないけど、再会出来てよかったです。姉妹が離れ離れ…なのは悲しいですから」

実はクロスは最初１人で行く予定だったが、たまたま起きていたアステルに事情を説明している間にフェイトが目を覚ましていて、話を聞いて飛び出して同行すると言いだしたのだ。
昼間にちょっとした任務があったので、クロスは反対し、フェイトに待っていてと言ったがアステルの【説得】と起きてきたリンディの【命令】で渋々フェイトと一緒に来たのだ。
結果として、疲労で眠りこんでいたノアの代わりにフェイトが付いてきたのが多いに助かったのだが。

「…そう言えば…2人って…ひょっとして恋人？」
「は、はいぃ～！？」
「…な、なないきなりなにを！？」

突然の真夜の質問にフェイトは一瞬で真っ赤になり、クロスも少し顔を赤くして慌てた。

「あ～真夜、それは違うわ…フェイトちゃんはね、クロス君のお嫁さん候補の1人なのよ♪」
「おおおお、お嫁さん～～！？」
「わぁ～そうなんだ、2人共とってもお似合いですよ♪」
「ちょ、ちょっと！　そんな話どこから聞いたんですか、阿夜さん！」

さっきまでのしんみり空気はどこへやら、年上のお姉さん方にクロスとフェイトはてんやわんやだ。

「もちろん、あの子よ？　『クロスには沢山のお嫁さん候補いるから手を出さないでね』って
念を押されたわね、私も、それから真夜にも伝えてほしいって」
「まぁ、それはそれは、残念ですね…せっかく芽生えたこの気持ちの行き場所はどこへ～」
「あ、あのやろぉ！！　今度夢に出てきたら一〇〇〇〇回ぶっとばす！！　って2人共そんな顔しないで！
特に真夜さん、そんな思いつめた目で俺を見ないでくださいよ！」
「…およめ…さん…私が、クロスの…」

会ってすぐの人にM、クロスと恋人に見られた事だけでも嬉しいのにお似合いと言われ、さらにお嫁さんとまで言われて、フェイトの乙

女回路は臨界突破だ。

「フェイトもフェイトで、何トリップしてるんだよ！　もどってこーい！」

「あははは、うんうん。2人は本当にお似合いだね。他のお嫁さん候補も見たいけど…」

「えぇ、そろそろ時間のようですね」

見ると、もう空が明るくなり始め、太陽が昇りだしそうになっていた。

と、同時に姉妹の身体はうっすらと透け始めていた。

クロスとフェイトは…それが初代リインフォースとの別れの場面を思い出していた。

「阿夜さん、真夜さん……その、今回の元々の原因は…」

何かを言いだしそうなクロスの口を、阿夜の指が押さえた。

「それは聞いたわ、でも…気にする事じゃないわよ、クロス君、フェイトちゃん…ありがとう」

「2人共、お元気で…」

「……真夜さんも」

「さようなら…」

最後にクロスは真夜と、フェイトは阿夜と握手を交わし…2人は消えた。

「……行っちゃった」

「リインフォースさんと同じ場所に行ったのかな」

「そうだな…きっと天国に決まってるさ」

クロスとフェイトはホテルへと振り返り、そのままその場所を後にした。

「…クロス、まだ気にしてるの？…2人の力があがった原因が…螺仙気だと言う事に」

「俺が、もっと早く気付けていれば…【メリーさん】　がいなければ今回の事も気付かなかったかも」

実は今回の影の功労者は…冬に消滅したはずのメリーさんだ。

そして、阿夜と真夜の力があがった原因は、螺仙気。

2人共、クロス達が危惧したように、螺仙気によって能力を開花された人達だった。

だが、時期と場所が悪く、その兆候すら探知できなかったのだ。

今回の一件で、更に詳しく探査出来るように設備の改良をする、とリンディは言っていた。

螺仙気の影響で力が増大し、そのせいであんな悪霊に目を付けられた…それは事実。

その事が尚更、クロスを悩ませた。

だが、おかげで魂となった阿夜は、螺仙気から生み出されたメリーさんの残留思念と接触出来

僅かに残った螺仙気を使い、クロスの夢にどうにか現れ、ここへと導いたのだ。

「……クロス、また1人で思いつめてる、悪い癖だよ？」

「いたっ！？　フェイト…」

「悪い方にしか考えたらダメだよ？」

考え込むクロスの額をフェイトがデコピンした。

上目遣いでむくれるフェイトの頭に手をあて、クロスは深く息を吐

いた。

「だな……いい事も悪い事も、どっちもあった…」
「うん、そうだよ。悪い事だけじゃないよ…だから、ね？」
「あぁ、分かった…さてと、帰ろうか、アステルさん迎えに来るみたいだし」
「うん…私、ちょっと限界、かも」

ふらふらと倒れ込みそうなフェイトをクロスが背中におぶさった。

「クロス、君！？」
「迎えが来るまででも寝てていいよ、今日はフェイトがいて助かったし」
「……少し、背中借りるね、おやすみ、クロス…」
「おやすみ、フェイト…いい夢を…フェイトにまでメリーさん出てこないといいな…」

フェイトの寝息を背中で感じ、昇る朝日を見つめながらクロスはふと思った。
それが気鬱に終わるのかどうかは…また、別の話。

その日、数か月前から行方不明だった双子の姉妹が遺体で発見されたニュースと
幽霊ホテルが、大々的に御払いをした後に取り壊す事になった。
というニュースが流れた。

続く

第９１話　「ある夏の一夜」（後書き）

カガヤ
「…ながっ！」

クロス
「カガヤのにしては文字数多いな…１８０００近い」

ノア
「話の内容的にはあまりいつもと変わってないですけどねぇ…私出番全くなかったし…」

カガヤ
「ノアの出番全くなし…珍しい」

クロス
「でも、いい加減…重いシリアスをやるのは…」

カガヤ
「あ、それ無理、半ば開き直った♪（キッパリ）」

クロス、ノア
「「はぁ……」」

カガヤ
「今回もこんな感じですが、次回は…なんと初コラボ！とある先生とのコラボ予定で…カオスな話になる予定です、お楽しみに！」

クロス、ノア

「「…ものすっごく不安（汗）」」

第９２話　「とあるチートと黒歴史　前編」（前書き）

今回は　ＨＡＧＡＮＥ　ＴＯＭＯＨＩＳＡ先生　の作品と初コラボしちゃってます！
残念ながら事故で昔の作品が消えてしまった為に紹介がしにくいものですが（汗）
しかも…出番はまだ最後しかないという（滝汗）
前後編に分けたので、本格コラボの活躍は後編をお楽しみに！

第９２話　「とあるチートと黒歴史　前編」

第９２話　「とあるチートと黒歴史　前編」

「紫電一閃！」
「雷天剣！」

シグナムとクロスの必殺の一撃が決まる。
だが、それでもヒビ一つ入ってはいない。

「ちっ、効いてない！」
「どけぇ！　ギガントシュラーク！」

そこへヴィータの最大の技が叩きこまれ、続いて

「シェルブリット！」

反対側からクロスが拳を叩きこむ…それでも少ししか揺るがない。

「…ぐっ」
「クロス！」

力が抜けたようによろめくクロスをザフィーラがすばやく抱え、その場を離脱。
だが、まるでクロス達が目に入らないかのように、ただひたすら前進をつづけていた。
しかも…その巨体は先ほどよりも大きくなったようだ。

「なんて奴…とんでもない硬さやで」

上空から様子を窺い、隙あらば魔法を放とうとしていたはやては驚きの声をあげた。

・
・
・

今クロス達、第９７管理外観測隊は緊急要請を受け【管理外世界：フルージュ】に来ている。

実はこの世界にはある特殊な生物が存在していて、名を【ゴルドラ】犬のような外見に全身が鈍く輝く青色の特殊な鉱物で覆われていて体長は人より少し大きめの大人しい生物だ。

ゴルドラは?年に１度、体中の鉱物を落とす時期がある。

このゴルドラから落ちた鉱物は【ゴルス】と言う名で、魔力で簡単に加工が出来るだけではなく

柔軟性と耐久性に優れていて、ミッドや他の次元世界では生活用品の原材料として使用されているので

フルージュにとっては無くてはならない外交資源として、大規模な牧場で飼い慣らされている。

しかし、ゴルゴラには数千年に一度、特殊な変異体が生まれるという伝承がある。

それは他の個体と見た目は変わらない、ただし全身を覆う鉱物の鎧は赤く、宝石のように輝いている。

そして、大人しい通常個体と違い、この変異体は凶暴かつ暴食…おまけに強い。

数日前に突然現れ、この世界の動植物を食い荒らして回り、街や村にも甚大な被害が出ているのだ。

管理局も黙ってみていたわけではなく、この世界に駐屯する部隊が

退治しようとしたが
この変異体の鉱物は、従来の個体のとは性質がかなり違うらしく、
魔法による攻撃はすべて吸収してしまう。
砲撃、射撃など、ありとあらゆる魔力攻撃が効かず、負傷者ばかりが増えていく。
しかも、魔力を吸収するたびに巨大化するようで、最初は普通の個体同様、人くらいの大きさなのが
管理局の攻撃によって１０ｍの大きさに成長してしまった。
そこで、魔力とは違う仙気を扱うクロスと、魔力付与攻撃が得意のヴォルケンリッター達がいる
第９７管理外世界観測隊に救援要請がかかった。
ミッド式近接魔法の魔力刃などは鉱物に触れただけで吸収され消滅するが、ベルカ式の魔力付与攻撃や
アルガス魔法ならば、ある程度のダメージは与えられるかもしれない、とは
無限書庫にてゴルドラについて調べているプレシアやユーノの考えだ。
だが、クロス達が到着した時にはゴルゴラ変異体…ミュータント・ゴルドラ、【ミューラ】は
１０ｍどころでは済まず、４０ｍほどの巨体に成長してしまっていた。

勿論、それで怯むクロス達ではなく、早速攻撃が開始された。
が、いざ攻撃して見ると結果は最悪だった。
シグナムやヴィータの攻撃は悉く魔力を吸収され、クロスの仙気すらほとんど通用しない。
それればかりか、クロスの仙気ですら徐々に吸収するようになってしまった。
はやても鉱物が覆っていない個所ごと攻撃しようと、広域攻撃魔法を放ったが、全て吸収されてしまった。

そして…等々、ミューラの巨体は５０ｍを超えてしまった。

「…どうする、クロス。我らの攻撃は奴に力を与えるだけだぞ」

ザフィーラが悔しそうに拳を握る。
その拳にはいつもの手甲はなく、素手だ。
実はミューラの甲羅は巨体になるにつれ、ますます硬さを増し、ザフィーラの手甲は既に砕け
レヴァンティンやグラーフアイゼンは先程の攻撃で、全身にヒビが入っていしまっていた。

「こうなったら…みんな、離れて！　仙気がまだ完全に吸収されない今のうちに…」
「私達のブレイカーで一気に倒します！」

クロスとノアは頷き合い、ミューラへと向かおうとしたが、はやてがそれを止めた。

「そんなの危険や！　仙気が完全に効かないようになってたらどうするん！？」

仙気ですら完全に吸収するようになったら…
クロスとノアのハイブリットブレイカーはただの集束砲よりも数倍の威力があり
それを吸収されてしまえば、どれほどミューラが成長するかわからない…だが
自分の隣に降り立ったはやての言葉に、クロスは静かに首を振り、
ミューラの進行方向を指さす。
その先には大きな街があった。

「これ以上先に進ませたら、街に被害が出てしまう。だから…今すぐここで叩くしかない」

確かに、これ以上進ませたら、戦闘の余波が街に被害を及ぼしてしまう。
広域結界を張れればいいが、ミューラの鉱物は結界を阻害する力があるらしく
クロスですら広域結界を張れずにいた。

「せやったら…私もラグナロクで一緒に！」
「それこそ危険だ、はやての魔法はさっき吸収……いや、まてよ…俺のブレイカーと合わせれば」

仙気と魔力、２つの集束砲を混ぜれば、全く違った性質の集束砲になる事は
闇の書の闇を破壊した時に、なのは、フェイト、はやて、クロス、ノアの５人の力を合わせた
巨大集束砲で確認されている。
魔力だけの集束砲も仙気が合わさる事で相乗効果を生み出すのだ。
また、ラグナロクは本来は集束砲ではないが、クロスとノアが２人の仙気を両手に集束させて
強大な砲撃を生み出すように、はやてのリインの魔力を１か所に集束させて解き放つ砲撃に
改良したのだ。

「……分かった。やってみよう」
「うん、みんなは辺りに被害が出えへんように結界で防御を」
「「「「了解！」」」」

広域結界は無理でも、ブレイカーの余波を防御結界で防ぐ事は出来

るはず。

「リイン、初めての集束砲だけど…落ち着いて、はやてちゃんの補助をしてね」

「任せてください、お姉様！」

2人のユニゾンデバイス姉妹はそれぞれのマスターへとユニゾンをし守護騎士達は、防御のみに特化した結界の構築に専念した。

そして…クロスは頷くはやての手を取り、ギアでミューラの前へと転移した。

「……正面からみると、これまた凶暴そうな顔だなぁ」

『本当、あの愛くるしいゴルドラの変異体とは思えませんね』

「ノア…あれが愛くるしいのか？」

『お姉様…あれは…さすがに可愛くないかと』

「えぇ～めっちゃ可愛いやん！」

「はやてもかい！」

ゴルドラは、見た目は人並みの大きさの犬で、顔は猫に近い。

だが…全体を鉱物で覆われているせいで、不気味に見えるのだ。

はやてとノアはそれが可愛らしいと思っているようだが、クロスとリインにはそうは見えない。

「さーって、俺の方はいいけど、はやてはどうだ？」

「私もばっちりやで、そうやろ、リイン？」

『はい、ばっちりしっかり準備オーケーです！』

『さっすがは私の妹だね』

軽口を言い合いながらも、それぞれ仙気や魔力を高め、集束砲の準備は整っていた。

はやてとノアは、その軽口は大規模魔法行使が始めてなリインを和ませる為に
クロスがわざと言ったものだと言う事にはすぐに気付いていた。
リインは何度か任務には同行していたが、本格的な戦闘行為はまだ1、2回しか経験しておらず
しかも、ラグナロクなどの大規模魔法を使うのは、これが初めてなのだ。

「…じゃ、行くぜ！……極光爆烈、ハイブリット！」
『シャイン！』

さっきまでとは打って変わって真剣な表情でブレイカーの発射態勢に入るクロスとノア。

「…行くで、リイン！……響け終焉の笛！」
『ラグナロク！』

こちらも真剣な顔つきで、前面に展開され、はやてとリインの魔力が集束された魔法陣に杖を掲げる。

「「『『ブレイカー！！』』」」

4人の力と声が1つとなり、ミューラの巨体すら包み込むほどの巨大な砲撃が放たれた。

「やった！」

思わず笑顔で声を張り上げるはやてだが、クロスは違った。

「っ！？　みんな、逃げろ！！」

「えっ…嘘！？」

なんと、ブレイカーは…ミューラの全身を包み込まず、そのまま鏡に当たったかのようにクロスとはやてへと反射してしまった。

「ちぃ！」

「うわっ、クロスくん！？」

咄嗟にはやてを抱きかかえ、横へと跳び回避する。

ギアで回避する余裕はなかった。

ミューラによって反射されたブレイカーは、街へこそ直撃しなかったから幸いだったが

街の近くにある山を貫き、そのまま空へと消えて行った。

今までクロス達の攻撃を無視し続けたミューラもこれには怒ったらしく

巨大な岩山のような腕をクロスの元へと振りかぶった。

ブレイカーをよけるだけで精一杯だったクロスは、避けた先への追撃に対応しきれず。

「…ヴィータ、はやてを！！」

「きゃあぁ～～！」

「マスター！？」

「はやて、　姉ちゃん！…クロス、何を！？」

駆け寄ろうとしていたヴィータへと、全力でユニゾンを解いたノアとはやてを放り投げ

両腕に紋章を浮かばせ、全力で防御結界を貼った。

＜カルテット・プロテクション！＞

質量・衝撃・魔力、この3つの力に対して鉄壁の守りを敷き、尚且つそれらを全て強化する
計4つの防御術式を複合させた、アルガス式大防御魔法。
しかも、クロスの両腕に浮かんだ紋章の効果で、防御力を極限まで高めた。
が…

―パキーン

「……ガッ!?」

―バキバキッ、ドカーン

ミューラの巨大な拳はその守りすら紙のように貫き、クロスの体をゴムボールのように殴り飛ばした。

「マスター!」
「クロスくん!!」
「クロスっ!　…どけぇ!」
「ダメよ、シグナム!」

地面に叩きつけられたクロスの元へ向かおうとしたシグナムとシャマルの前を、ミューラの巨体が遮った。

―ペキッ

「なっ…に……」

倒すのではなく、ただ単にその巨体をどけて、クロスの元へと向か

おうと振ったその炎の剣は
ミューラの体にヒビも付けることが出来ずに…砕けた。
自分の得物が砕けた。普段の冷静なシグナムならばすぐに頭を切り替えただろうが
今のシグナムは冷静ではなく、逆上していた。
そして、皮肉にもレヴァンティンが砕けた事で、一瞬で思考が冷やされ…停止した。

「いかん、シグナム！　そこから離れろ！」

ザフィーラの言葉よりも早く、シグナムの隙を見逃さなかったミューラの拳が
無防備なシグナムの頭上へと振り降ろされた。

「シ、シグナムッ！！」

―ギュイーン、バシュッ！

その時、形容しがたい音が辺りに鳴り響いき、ミューラの拳が止まった。

「…えっ？」

やっとそこで自分の頭上に拳が迫っていた事を、知ったシグナムは
何事かと頭を上に向けた。
そこには…

「いってぇなぁ…いきなり、何するんだこのゲテモノ」

ロボットのような青と白い左手と、赤と白い右手。

腰に携えているのは日本刀。
青いアンテナを付けた白いカブト
まるで等身大のガンダムのような男（？）がミューラの腕を持ち上げていた。

続く

第９２話　「とあるチートと黒歴史　前編」（後書き）

カガヤ
「カオスと言ったのに…なぜかシリアスで終わってしまった??」

クロス、ノア
「「いつものことといつものこと…」」

カガヤ
「今回コラボ予定はかーなり前からあったんだけど、リイン?がいないとダメなんで、こんなに長くかかってしまいました」

ノア
「半年以上も待たせてしまいましたね…ＨＡＧＡＮＥ　ＴＯＭＯＨＩＳＡ先生ごめんなさい」

クロス
「一応他先生様のキャラ書くのは2回目だっけ?」

カガヤ
「1回目は某神先生のロリハーレム大?……ゴホンゴホン、ともかく、あの時はコラボじゃないから、今回が初コラボだねぇ」

クロス
「思いっきり何を言いかけた!!（汗）」

カガヤ
「ともあれ、本格的なコラボは後編からになりますが…がんばります!」

第９３話　「とあるチートと黒歴史　中編」（前書き）

うわぁ～い、投稿場所間違えちゃった（汗）

再度投稿し直しますペコリ（ｏ＿＿）ｏ）（汗）

第９３話　「とあるチートと黒歴史　中編」

管理外世界：フルージュ

この世界では、巨大な特殊変異生物【ミューラ】が数千年ぶりに姿を現し
動植物を荒らし、甚大な被害をもたらしていた。
クロス達、第９７管理外観測隊は救援要請を受け、ミューラを対峙する事になったが
ミューラの全身を覆う特殊な鉱物に、魔力も仙気も全く通じず、逆に大ダメージを負ってしまう。
が、そこへ現れた等身大ガンダムに危機を救われる…その名は…

「…（シグナム？　ここはリリカルなのはの世界？　でも、地球でもミッドでもないな）…
　そこの人、１つ聞きたいんだけど、ここはどこで…この化け物は何だ？」
「…ここはフルージュ、そして、そいつは…」

ミューラの巨大な腕から自分を守ってくれた目の前の人物。
どうやら彼は自分がどこにいるのかあまり分かっていないようで、
シグナムが説明しようとすると
ミューラの怒声が響き渡った。

「フシャーー！！」

突然現れた訳の分からない存在に、邪魔をされミューラは怒っているのかのようだ。

「なんだ、コイツ？　獲物を仕留められずに怒ってるのか？　短気な奴だな」
「お前、何してんだ。早く逃げろ！」
「俺は鋼（はがね）　知恭（ともひさ）…お前って名前じゃないんだけど、なっ！」

ミューラは受け止められた腕とは逆の腕に鋭い爪を生やし、男…知恭に振りかざした。
駆け寄ってきたヴィータはそこで動きを止めた。
知恭は左腰に備えられた、日本刀から刃を抜き放ち、片手で爪を受け止めてしまった。
右手の刀でミューラの爪を、左手で腕を受け止めながらも、知恭は余裕そうだ。

「どうした、その程度か？　でかい図体で随分ひ弱なんだな」
「ギシャーー！！」

挑発するような知恭の言葉に、ミューラはさらに怒ったような叫びをあげ、顔を近づけ
噛み砕こうと巨大な口を開けた。

「バスターブルーレッド……汚い口を……俺に見せるなっ！」
「なっ、肩に…キャノン砲？」

知恭の両肩に緑色の砲塔が装着され、一斉に火を吹いた。
放たれた砲弾はまっすぐにミューラの口へと吸い込まれ…大爆発。

「フビャーーー！！」
「おらおらぁ！！」

更に続けざまに全身へと、砲撃を浴びせ続けた。

すると、魔法では傷一つ付かなかったミューラの体に徐々に亀裂が入り、血飛沫が舞う。
知恭から離した両腕で口と喉を押さえながら、ミューラは地面に倒れ込んでしまった。
４０メートルもの巨体が倒れ込んだので、軽い地震のように辺りが揺れた。
それを横目で見たクロスは、やっとミューラを退治したと深く息を吐く。

「すごい…それよりも、クロス君！」
「クロス、大丈夫か！？」
「私もお手伝いします！」

地面に横たわるクロスにザフィーラとはやてが駆け寄った。
既にノアとシャマルが回復魔法をかけ続けている。
すぐに、リインも加わり治療を続ける。

「だ、大丈夫…生きてる…よ」

２人の心配そうな声に、クロスは薄ら笑いすら浮かべて、大地に倒れたまま力なく答えた。

「生きてるよ…じゃないですよ、マスター！　大ケガじゃないですか！」
「そうです！　両腕複雑骨折してるんですよ、千切れてもおかしくないんですよ！」
「いやぁ、ここまで防御抜かれると思わなかったから…」

回復魔法をかけながら怒るノアとシャマルの言葉通り、クロスは重傷だ。

バリアジャケットや甲冑よりも数倍防御の厚い仙気の鎧、アルガスアーマー
それも一番防御力が強い騎士状態のアーマーが見るも無残にボロボロになっていた。
地面への激突の衝撃は、紋章強化と地面に張り巡らせた衝撃吸収用の魔法ネットでほぼゼロにしたが
ミューラの腕を受け止めた時の衝撃は完全には防御できず、両腕の複雑骨折…
いかにエヴォリューダーの超自然治癒力とノアのアルガス魔法、シャマルの回復魔法を用いても
完全回復に時間を要する重傷だった。

「クロス君…お願いやから、無茶せんといてな…クロス君に何かあったら、私は…」

クロスに駆け寄るはやての目から、涙がこぼれ落ちた。
なんとか手を動かして、クロスははやての涙をぬぐおうとしたが、
ノアのキツイ視線に断念。
代わりに、回復魔法をかけ終えたノアがはやての涙を拭って優しく頭を撫でた。

「大丈夫だって、俺は死なない…そう言ったろ？」
「死ななかったらどんな無茶してもいい事にはならへん！！！」
「…はい、すみませんでした」
「は、はやてちゃん…」

今まで見せた事ないはやての怒り顔にクロスだけでなく、シャマルやリインすら驚いていた。
1人、ノアだけは嬉しそうに微笑んでいえう。

「ところで…彼、何者なんでしょう」

リインの言葉に忘れていたかのようにハッとするクロス達。

「俺…あれだけ目立ってたのに、放置されて、惚気を見せられるとは…」

見ると、知恭がすぐそばまで来ていた。

さっきまでの鎧ではなく、ちゃんとした服を着た男性の姿だ。

しかし、明らかにあきれ顔でどこか凹んでいる。

さらに隣にいるヴィータやシグナムは少し不満顔だ…

「あ、あはは…助けて頂いてありがとうございます。俺の名はクロスロード・ナカジマです」

「八神はやてです。シグナムを助けて頂いてありがとうございます」

「鋼　知恭だ…」

ザフィーラに手を貸してもらい、ゆっくりと起き上がりながらクロスが挨拶をした。

はやても気まずそうな顔で挨拶したが、知恭は特にもう気にしてはいないようだ。

「それで、ミューラはあれで倒せたんですか？」

「ミューラ？　あぁ、あの化け物なら……ん？」

後ろに倒れているはずのミューラを指さそうとした、知恭の動きがそこで止まった。

クロスやシグナム達の顔も険しくなる。

はやても何事かと、ミューラの方を見ると…

「なっ、ミューラが…消えた！？」

先程まで横たわっていたミューラがまるで空気に溶け込むかのように、萎んで消えてしまった。

「ど、どういう事や…さっきまで確かにここに」

すると知恭がミューラのいた場所に行き、地面を触ったり上空へ飛びあがり辺りを見渡し始めやがて首を振りながら降りてきた。

「どうやら転送とか、透明になって逃げたとかじゃなくて、本当に消えたようだな」

「そうですか……ひとまず、基地へ行きましょう。ユーノ達が何か掴んだかもしれない」

ミューラの痕跡が掴めないまま、クロスの治療や知恭から詳しい事情も聞く必要もあったのでこの世界の管理局駐屯基地へ戻る事になった。

時空管理局【フルージュ】駐屯基地

ミューラが暴れていた現場より、少し離れた高台に置かれている管理局の駐屯基地。

ひとまず、知恭は治療を終えたクロス、シグナムとノア、それにこの基地の隊長が事情聴取する事になった。

そして、残りのメンバーで本局の無限書庫でミューラについて調べているユーノと

海鳴市で待機中のリンディとアステルに通信で今後について会議を行っている。

「それじゃあ、知恭さんは色々な世界を旅しているんですか？」
「あぁ、気まぐれな旅人って奴だな」
「……俺にも出来ない事を、すごい」
「そうですねぇ」

あっけなく、自分が世界を渡る旅人と明かした知恭にクロスやは素直に驚いている。
そんなクロスを少し疑問に思ったシグナムが尋ねた。

「クロスや姉上もギアで次元跳躍が出来るのでは？」
「ギアは確かに他の空間や次元に跳ぶ事出来るけど…知恭さんのは全くの別物だよ、シグナム」

あまり言葉の意味は分からないシグナムだったが、今はそれどころではないので
それ以上は何も追求しなかった。

「そんな事よりも…クロス、お前の腕は大丈夫なのか？」

クロスは基地で治療を受けたが、現場でノア、シャマル、リイン３人がかりでの治癒魔法のおかげで
体の傷はほぼ完全に塞がっている。
しかし、両手の骨折は魔法で治すよりも、エヴォリューダーの超自然回復力で治す方がいいと
クロスが言った為、両手は包帯を巻いて、特に重傷の右手はギブスで吊っている。

「大丈夫ですよ、俺鍛えてますから」
「…ふーん、やっぱり特殊な肉体ってわけか」

何気なく知恭が呟いた瞬間、部屋の空気が変わった。
シグナムとノアは即座に臨戦態勢に入り、知恭の方も黙ってはいるがいつでも飛びだせる体勢だ。

「落ち着きなさい、シグナムくん、ノアくん」

2人に声をかけたゼストくらいの年齢の男性はこの基地の管理局員、トール・ミギレット。
彼はクロスの体の事を知っていて、知恭の言葉にも僅かに目を動かしただけだった。

「トールさん…」
「彼はナカジマくんの事情はよく知らないんだ。まだ、そう身構える事ではないと思うがね？」
「…すみません、知恭さん。取り乱しました…」
「いや、俺の方こそ軽率な事言ったようだな、悪かった」

トールに言われ、2人共椅子に座り知恭に謝ったが、知恭の方も何かを察して頭を下げた。

「知恭さんは悪くないですよ、察しの通り俺は普通の人間じゃありません。ですが詳しい話も…」
「それ以上はいいさ。普通の人間じゃないってのは俺もそうだしな…」

軽く笑いながらそう言ってくれる知恭にクロスは悪い人ではないと感じ、頬を緩ませる。

「見た目が大人っぽい子供は大勢いるけど、それにしてもクロスは見た目がかなり大人に見えたのは…
なるほど、そう言うわけか。中身は…はやてと同い年くらいかな」
「い、今なんて言いました!?」

うんうん、と独り言のように呟いた知恭の言葉に思わず身を乗り出すクロス。
まるで何かに喜んでいるかのようで、クロスらしくないなとシグナムは思ったが
隣を見るとノアも驚いているような喜んでいるような、そんな表情で知恭を見ている。

「さっきの言葉は本当ですか?」
「知恭さん!　本当にマスターははやてちゃんと同い年くらいにみえましたか!?」
「えっ?　ちょ、ちょっと…おい」
「落ち着きなさい2人共、知恭くんが困っているぞ」

ただならぬ興奮ぶりに知恭もドン引きしたが、トールが収め、2人は冷静さを取り戻した。

「「ごめんなさい」」

2人揃って頭を下げられ、今日は謝られてばかりだ。と知恭が苦笑まじりにつぶやく。

「どうしたんだ、クロス、姉上…何か気になる事でも?」
「いやぁ…実は……初対面の人に年相応に見られたの初めてだから…」

「マスターは昔から年齢以上に見られる事多いですから…」

あはは、と笑う2人にシグナムはなるほどと頷いた。
エヴォリューダーの影響もあり、クロスの体と精神は年齢以上に成長している。
今クロスは10歳だが、内面の落ち着き具合も重なって、下手をすれば14、5に見られる事もある。
それが生まれて初めて初対面の人に、年相応に見られた事が嬉しかったのだろう。

「…私も最初クロスロード君は15歳くらいかと思ったな…」

さり気なくトールもクロスの第一印象を呟き、あっという間にクロスは凹んでしまったが…

「なんか…苦労してるみたいだな、クロス」
「はい…ありがとうございます、知恭さん」

知らぬ間に男の友情のような物が芽生えた2人。
ノアもニコニコ顔でそれをみているが、シグナムだけは知恭を怪しむような目で見ていた。

「（…彼は、私達を知っているのではないか？）」

知恭がシグナムを見た時の顔、それが初対面の人会うような顔ではなく
なんでお前がここにいる？　と言う見知った人を見つけたような顔をしていたからだ。
それはシグナムだけにではなく、ヴィータやはやて達に対してもそうだった。

クロスとノアに対しては逆に、誰だ？　と少し困惑したような視線を向けていたが
これはシグナムの推測でしかなく、今は様子を見る事にした。何かあればすぐに斬れるようにしながら…
そんな視線に気付いているのか、知恭もまたシグナムに対して妖しい視線を送っていたのだが
考えに集中していたシグナムは気付く事はなかった。

『クロスくん、シグナム。少しこっちに来てるかな？』

突然、クロスとシグナムにはやてから会議室に来てほしいと念話が入り
知恭からの事情聴取はノアとトールに任せ、2人は会議室へやってくると
無限書庫にいるユーノの通信モニターが開かれていて、この基地の管理局員達とはやて達の間に
重苦しく緊迫した空気に包まれていた。
リンディとアステルのモニターがなかったが、どうやら急いでやる事があるようだ。

「クロスくんごめん…腕は大丈夫？」
「俺の方は大丈夫だ。それより一体どうしたんだ、はやて？」
「そっか…実は大変な事がわかったんや！」
『はやて、僕が説明するよ』

はやての口調に自然にクロス達にも緊張が走る。
そして、ユーノがいくつかの空間モニターをクロスの周りに展開して説明を始めた。

『ミューラと名付けたあのゴルドラの変異個体について、恐るべき

生態が分かったんだ』

正面スクリーンに映し出されたのは、とある古文書だ。
そこには2体のミューラとゴルドラらしき絵が描かれている。

『まず、最初に…ミューラは雌雄一対の2体。そして、クロス達が遭遇したのは…
雄の方で、どこかに産卵間近の雌がいる事も分かったんだ』
「あ、あんなのがもう一体いるというのか！？」
「しかも、産卵間近と言うのはどういう事なんだ、ユーノ？」

クロスやシグナム達でさえ完敗したミューラがもう1体。
さらには…産卵間近の個体…驚愕と言う言葉すら生ぬるい程の事実。
続けてモニターに映し出された映像は、複数のミューラが描かれた古文書の？ページ。

『これはこの地方に伝わる古文書のコピーなんだけど、およそ数千年前。
原因は不明だけど、ゴルドラからミューラが産まれた。そして、ミューラはその個体を増やしていった』

最初は2体だったミューラが3体、4体と増えて行く姿が描かれている。

『ミューラの特徴はクロス達も知っての通り、魔力や仙気すら通さない特殊な鉱物で
全身を覆われている事ともう1つ、その産卵方法なんだ。ミューラの雌は時期が来ると
地面深くで眠りについて、雄がエネルギー源を探し求めてあらゆる有機体をその身にとりこむ…

そして、ある程度エネルギーを溜めこむか、命の危機に瀕した時…
雌にそのエネルギーを自分の生命力ごと与えるんだ』

そこへ映し出されたのは、先程知恭が仕留めたミューラが地面に溶け込んでいく映像。
この基地の観測班が一部始終を撮っていた為、今度は溶け込む様子が鮮明に映し出されている。

『この時、雄は自分の命が尽きかけていると悟って、自分の力を全部地面に居る雌に伝えていたんだ。
そして、これが…地中深くに眠っているミューラの雌の映像』

次にモニターに出たのは、ミューラの雄が消えた地点の地中深くの断面映像。
それを見ると、確かにミューラらしき影が見えた。
しかも、この個体は雄よりもはるかに巨大な大きさだった。

「これが…ミューラの雌」
「なんて巨体だ…２００メートル以上はあるぞ」

さっきの会議でこの映像を見ていたはずの局員達だが、改めて映像を見て
その巨体に驚き、恐怖すら浮かべている。

「ユーノ、さっき産卵方法が特殊と言っていたが…どういう意味だ？」
『…ここから先ははやて達もまだみてない映像なんだけど。これは古文書に描かれていた内容を
シミュレーションで映像化したミューラの産卵方法』

ずっとモニターに釘づけだった一同の目が大きく開かれた。

モニター内のミューラが大きな卵を産んでしばらくすると、急に大爆発を起こしたからだ。

その爆発の規模は半径１０キロにも及んだ…だが、爆炎は大きく膨らんだか思えば

まるで、中心部に爆発のエネルギー吸い込まれるように萎んでいった。

エネルギーを吸い取っていく犯人、それは先程生み出されたミューラの卵。

そして、見る見るうちに卵がエネルギーを吸収し、大きく膨らんだかと思えば…

『フシャーーー！！』

また、新しいミュラーが誕生した。

しかも、さっきまで映し出されていた親ミューラよりも巨大な姿になっている。

『…これが、ミューラの産卵方法…』

起こりうる壮絶な現実を見せられ、誰も何も言葉も出せずにただ茫然とモニターを見つめている。

「ちょ、ちょっと待てよ！　こんなでたらめな化け物を昔の奴らはどうやって退治したんだ！？」

確かに、今の時代の魔法技術を用いても対処のしようがない化け物相手に

数千年前の魔法文明がどう対処したのか、ヴィータの言葉にこの部

屋の数名が頷いた。

『それが……退治したわけじゃないんだ。ミューラは自然に滅んだんだ…』

「…なんだって？」

『かつて、この大陸はいくつもの活動中の火山があって、そのうちの１つに巨大な隕石が落下
　次々と火山が連動して大爆発を起こして…大陸ごとマグマに飲まれたんだ』

モニターには大陸に巨大な隕石が火山に衝突、大噴火を起こし、それに連動するかのように
大陸中の火山が大噴火を起こし、大地に亀裂とマグマが流れ込み、
ミューラ達を飲みこむ様子が
生々しく再現されていた。

『これは推測なんだけど…たまたまこの時の卵がずっとマグマの中で眠っていたんだと思う。
　ちょうど数週間前にこの近くの火山が噴火した記録があるから、その時に目を覚ましたんだよ。
　ミューラは代を重ねるごとに大きさや硬さを増していくけど、この時代のミューラは大きさも
　鉱物の硬さも今回現れた個体よりも数段衰えていたと思うよ。
　数千年前のこの世界は魔法文明がないから。今回みたいに巨大化するような
　エネルギー源がなかったはずだし』

確かに、今回現れた個体の大きさは最初人より少し大きい程度だった。

だが、管理局やクロス達の攻撃を吸収して行くうちにどんどん巨大

になっていき
ついには仙気すら跳ね返す程の硬度になった。

「…私達のせい、なの…」

初めてミューラと遭遇した女性局員が力なくうなだれた。
周りの局員達も同様だ、そのうちの1人は強く拳を壁に叩きつけた。

「俺達が余計な手出しをしなきゃ…まだ対処のしようがあったってのかよ!!」
「……」

はやて達は何も声をかける事が出来なかった。
ただ、シャマルは壁に打ち付け血がにじんだ拳に手を添え、治癒魔法をかけている。

「誰が、悪いわけじゃありませんよ…だから、こんな事しないでください」

力ない声だったが、それしかうまく伝える言葉が浮かばなかった。

「そうです。誰が悪いわけじゃない…むしろ皆さんは正しい事をしたんです」

クロスはゆっくりと局員達へと歩み寄った。
しかし、両手に包帯とギブスを巻いた痛々しい姿に、罪悪感は更に募る。

「しかし、我々の行いが結果的にまだ幼い君に…そんな大けがを負わせてしまった」

「ごめん、ね…ごめんなさい…」

額に包帯を巻いた女性局員が涙ながらにクロスの頭を撫で、ただひたすら謝る。

クロスはニコリと微笑み、まだ痛みが残る腕をゆっくりと動かし…局員の涙をぬぐった。

「ほら、もう俺はここまで回復しましたから…だから気にしないでください。それにあなた達は

ミューラが現れたすぐそばにあった村を護る為に仕方なく攻撃したのでしょう？

報告は聞きましたし、その時の映像も見ました…皆さんが威嚇射撃をしながら村人を避難させて

それでもミューラが止まらず、逃げ遅れた子供に襲いかかろうとした時に

やむを得ず攻撃した…ですよね？」

管理外世界には不干渉、これが昔からの管理局の方針だったが、今は少し見直されている。

レジアスが中心となり、管理外への不干渉に特例を設けていったのだ。

『力があるのならば、少しでも多くの力なきものに手を差し伸べる…それが力ある我々の責任だ！』

災害救助などや凶悪生物の排除など、様々な事例において管理局は必要最低限の干渉をする事になった。

おかげで、管理外世界にも管理局の存在が大きくなった。

これを売名行為と罵る輩もいたが、本来ミッドを護る事のみに専念していた地上本部からの提言。

これにより、少しずつつだが、自発的に管理外世界を護ろうと動きだす局員が増えた。

「皆さんは自分の力で多くの人を護ろうとしたんです。こんな結果になるなんて誰も予想できませんよ…
だから、自分の信念から行った行為を、護ろうとした想いを後悔しないでください」
「ナカジマ執務官…」
「そうだな…今は後悔してる時じゃないな…」
「えぇ、私達は自分の意思で行動したのだもの、最後までこの世界の人達を護り抜きましょう」

その言葉に少しずつ、項垂れて行った局員達は顔を上げる。
もう、後悔の念は見られない…ただ、次をどうするか、どうすれば守れるか…それだけを考え出した。

その様子を会議室のドア越しに見ていた知恭は

「へぇ、本当に変わった子供なんだなクロスってのは」

そう呟き、口元に笑みを浮かべて見守っていた。
そして、クロスを頼もしく見つめるシグナムの姿を見て…

「……（ニヤリ）」

と、さっきよりも更に妖しい目つきで見ていた。

「なぁ、ユーノ…分かった事ってまさかこれだけじゃないよな？」
『勿論だよ、クロス…対処法もプレシアさん達が考え付いたからそ

れを報告するね』

そして、モニターにはユーノの代わりにプレシアが映し出された。

『プレシア・テスタロッサです。時間がないので手短に説明するわ。
現段階でミューラに有効な手段…
それは…体内からの破壊よ』

「体内から？」

『えぇ、これを見て』

モニターには古代の人が調べ上げたと思われるミューラの解剖図と、地中に眠るミューラを細かくスキャンした映像が映し出された。

『ミューラのちょうど腰の辺り、ここにエネルギーがすごく集中している個所があるの
恐らくミューラはここにエネルギーを溜めこんで卵をうみ、起爆剤として使用するのだと思うわ』

確かに、ミューラの腰の辺りに高密度の魔力でも仙気でもないエネルギーを溜めこんだ部分が見える。
その部分は全体に比べて異様に小さく、恐らく人くらいの大きさしかない。

『ミューラの体内に潜り込んで、この臓器を切り取り、外に運び…
大気圏外まで転送。
そして、アルカンシェルで撃破…色々問題はあるけど、これが打開策ね』

そこへ、アースラと海鳴基地からの通信が入り、アステルとエイミ

ィの姿が映った。

『皆さん遅くなりました。ミューラの活動開始時刻、計算終わりました！』

『ミューラが目覚め地上で産卵に入るまで残り5時間です、作戦準備はどうですか？』

アステルとエイミィが計算した結果、もうあまり残された時間がない事がわかった。

アルカンシェルはすでに搭載したアースラは宇宙空間で待機中、後は内部に入り込み

ミューラのエネルギー集中部を切り離すのを誰が行うか…と急いで決める事になったが

「恐らく、外に運ぶ時間はないと考えて行動した方がいいぜ」

突然会議室の外から声が聞こえ、知恭がトールと共に入りこんできた。

「知恭！　お前、聞いていたのか！？」

知恭に詰め寄ろうとしたシグナムをはやてが手で制した。

「知恭さん、それはどういう意味ですか？」

「爆弾と同じだ。コードを切れば爆発する…しかも、この部分。エネルギーコアと名付けておこうか

これはミューラの奥深くにある。途中どうなっているかまではスキャン出来ていないだろう？」

『……えぇ、そうね』

「途中に溶解液の溜まり場がないとも限らない状況の中、爆弾を持って移動するのは危険すぎる」
「知恭さんの言う通りだ」
クロスがその言葉を続けた。
「だから、外へ運び出すのではなく…直接、アースラの射程まで転送する必要がある」
「それは…まさか」
「私が、内部突入に同行します」
「姉ちゃん、それは危険すぎる！」
「そうよ！　ただでさえ切り離す人が危険だと言うのに」
ノアの提案にヴィータやシャマル、他の局員達が一斉に反対したが、ノアは頑として譲らなかった。
「これは私が一番向いているんです。私のギアなら普通の転送魔法よりも短時間で飛ばせますし
私自身小さいですから、例え内部が狭くても同行出来ます」
「…ノアが一番の適任だと思います」
「クロス！　お前、姉ちゃんを危険な目に合わせて平気なのかよ！」
思わずクロスの襟を掴み上げるヴィータだが、クロスの悔しそうに歯を食いしばる姿を見てハッとなった。
「…俺が満足に戦えれば、切り離して強制転送する役を引き受けるさ…でも、他に適任者はいない！
シャマルやユーノ達では演算に時間がかかる。それに内部がどうなっているか分からないからこそ

ギアが使えて即座に脱出出来るノアが一番適任なんだ！」
「……ごめん、クロス」

ヴィータはクロスの辛い心中を察し、手を離した。
はやてやリインも何かを言いたそうだが、クロスの言う通りと思ったので誰も何も言えなくなった。

「大丈夫ですよ、ヴィータ。私もマスター同様不死身なんだから、何があっても生きて帰って来るよ」

心配ありがとう、とノアに頭を撫でられ、まだ納得いかないながらもヴィータは俯き小さく頷いた。

「それじゃあ…誰が内部に突入して、切り離すか…だが」

今までずっと黙っていたこの基地の司令が重い口を開けた。
この基地の局員はほとんど標準型の射撃・砲撃タイプで、接近戦に特化した局員はいなく
クロス達も、クロスは言わずともがな、シグナムはレヴァンティンが大きく破損していて
ヴィータのアイゼンは切り離しには向いてはいない。

「これは俺の出番…と言うか、最初から俺をアテにした作戦だろ？」

少し睨むようにモニターを睨む知恭。
すると、モニターにリンディが現れ、少し悪びれた顔をしたが、すぐに顔を引き締めた。

『そうです。ミューラの内部も魔力、仙気が効かない構造になっていると考えます。

そこで…知恭さんの武装はそれらを使用しなく、また質量兵器に近い力と聞きました。

……あなたの力、私達に貸して下さい』

「認めるんだな…出会って間が無い、外部協力者ですらない俺を現場に出して、それも最前線…

命の危険が伴う任務を任せる。すごくムシのいい話だと」

はやてや局員達が何か言おうとしたが、クロスとノアがそれを止めた。

それは、虫がいいどころではなく、ただの管理局の身勝手な願い。分かっていても、他にどうしようもない無力さを…認めた事になる。

『…認めるわ。それ以外に手はない…私達は無力です。だから、お願いします』

その言葉とリンディの土下座にクロスとノア以外の全員が、プレシアやアステル達ですら

驚いていたが一番驚いていたのは知恭だった。

「（リンディがここまで言うとは…俺がいた世界とかなり違うみたいだな…それも、全て…）」

知恭の視線は自然とクロスへと向いた。

「（あいつの影響か…クロスロード・ナカジマ。スバルやギンガの兄のようだが…

本当に面白い事になりそうな世界だな、ここは）」

そして、次にシグナムの方に向き、知恭はそっと耳打ちをした。

「ん、どうした、知恭？」
「1つ、【お願い】があるんだが…どうだ？」
「なっ！？　お願い、だと！？」

知恭のお願い、と言う言葉の意味を理解しようとして、シグナムは顔を赤く染めた。

「ば、ばかっもの！　貴様は人の弱みにつけこっ…ムグッ！？」

知恭は大声を張り上げたシグナムの口を塞ぎ、抱きかかえて

「悪い、ほんの少し、シグナム借りるぞ。数分で戻る！」

と廊下に飛び出して行った。

「な、なんなんだぁ？」
「シグナムが誘拐されちゃいましたぁ」
「なんだか分からないが…シグナムにとって今日は厄日になりそうだな」

ヴィータとリインはわけがわからないと言った顔だが、ザフィーラは何かを納得したようだった。

「ク、クロスくん…大丈夫やろうか、色々な意味で」
「……多分、大丈夫だと思うよ。知恭さん、悪い人じゃないから」
「確かに悪い人じゃなさそうですけど…なんがか色々不安になってきましたよ、マスター…」

そして、少しの間ドアの向こうからは

「なぁ～にぃ～！？」
「できるかぁ！！！」
「叩き斬る、レヴァ…って壊れたままだったあぁぁぁ！！！」

などとシグナムとは思えない絶叫が聞こえてきたが、クロス達は聞こえないフリをして
知恭がやってくれると信じ、その他の準備を進めて行った。
ミューラの雌が地面に出て産卵に入るまで残り5時間しかない。
更に、地面に出てきて産卵に入るまでの時間は短時間しかないと予想された為
時間があるようで全くない…そんな状況で鍵を握る知恭は…

「おっし、とりあえず引きうける事にしたから…あ、あと1時間だけシグナム借りるぞ？
　時間はまだ大丈夫だよな？」
『え、えぇ…知恭さんには作戦開始まで休んでもらう予定でしたし…レヴァンティンのない
　シグナムには待機の予定でしたけど…何をしているのですか？』

とても爽やかな笑顔で戻ってきた、そんな知恭にモニターごしに冷や汗を流しながら話すリンディ。

「あ、あの…変な事しない…ですよね？」

溜まらず、恐る恐るシャマルが聞くと…

「大丈夫だ、問題ない…シグナムには指一本触れないから安心しろ」

と、これまた知恭は爽やかなサムズアップで答えた。

「マスター…」
「知恭さんを、信じよう…」

言葉とは裏腹に全身から嫌な汗しか流れないクロス達と

「シグナムには、何があったか聞かないでおきましょう…」
「…分かった」
「了解ですぅ…」
「心得た…」
「シグナム、今日はシグナムの好きな物なんでも作って食べさせてあげるから…ごめんな、おやすみな」

作戦開始前の緊張感はそこにはなく、ただお通夜のような空気の中作戦準備は進んでいった。

続く

第９３話　「とあるチートと黒歴史　中編」（後書き）

カガヤ
「うーんと、もっとカオスな話になるつもりだったのに・・・」

クロス
「またシリアス病？」

ノア
「ギャグが足りないですよギャグが！」

カガヤ
「まぁ…シグナムが壊れてくれたからいいか♪」

シグナム
「か～が～～や～～～～～～（ｍ－＿－）ｍ」

カガヤ
「うんぎゃー！？なんかオチ武者っぽいのが来た！？」

クロス
「うまい事言ったつもり？（汗）」

ノア
「次回でコラボは終わり…の予定ですぅ！」

※
カガヤ

「うん、寝ぼけたのかな俺…」

ノア
「何やってるんですか！（汗）」

カガヤ
「えっと、本当にもうしわけありませんでした！」

第９４話　「とあるチートと黒歴史　後編」（前書き）

やっと出来たー！

なんとかギャグ入れる事が出来て満足満足（笑）

あ、今回とあるキャラ崩壊があります…ご注意を。

「そんな事より、最近私の出番が全くない、なの！（＊（・∀・＃）＊（　」

ヒイィ～!?白い魔王様が降臨!!?

第９４話　「とあるチートと黒歴史　後編」

管理外世界：フルージュ

巨大ミューラが産卵のため地上に出て来るまで、残り2時間。
基地内は作戦準備に追われていた。
魔法が一切効かない怪獣相手とは言え、付近の住民の避難や広域結界の準備など
本局から応援を呼んでもまだ人数が足りない。
なのはやゼスト達は他の任務で手が離せなく、ここには来ていない。
それでも今回の作戦で重要なカギを握る2人が到着した。

「プレシア・テスタロッサ…到着したわ」
「ユーノ・スクライアです、よろしくお願いします！」

無限書庫でミューラについての事を調べ上げたプレシアとユーノ。
今回の作戦に必要と言う事で、ノアがギアで連れて来たのだ。

「（まさか、プレシアがいるとは思わなかったな…この世界は本当に変わっている）」

離れた場所でプレシアを眺める知恭。
その視線に気付いたのか、プレシアが知恭の元まで歩いてきた。

「あなたが鋼知恭ね、よろしく」
「あぁ、こちらこそよろしく」

念話すらせずにただ無言で、意味ありげな視線を送り合う2人だったが

プレシアは含み笑いを浮かべて、クロス達の所へと言った。

「（知恭…やはり彼は、私達を知っているようね）」

「（……バレたか、ま、いいか。だからどうだってことでもないみたいだし）」

鋼知恭は様々な世界を旅している。

しかも、世界は世界でも次元世界ではなく、クロスにも出来ない様々な『ＩＦ』がある、並列世界。

それを聞いたプレシアは、１つの仮説を立てていた。

鋼知恭は、ここことは違うＩＦの世界ではやて達と出会っている。

最初、モニター越しで出会った時に知恭はプレシアを見てかなり驚いていた。

そして、知恭ははやて達をまるで知り合いのような接し方をしている。

クロスやシグナムはその事に気付いていたようだが、プレシアもまたそれに気付いていたのだ。

「どうやら、クロス、ノアは彼の知る世界にはいないみたいね…そして、私は…死んでいる」

―私の姿を見た知恭の顔、平静を装っていたがまるで死人を見たような目つき…

無理もないか。クロスがいないのならば…私は死んでいただろう―

ふっ、と息を吐いたプレシアに、クロスが声をかけてきた。

「はやて達がいても俺やノアがいない時点で、その世界は根本から色々変わってそうですけどね」

「クロス…あなたも気付いていたのね。そんな事より両腕大丈夫な

の？」

クロスの両腕には未だに包帯が巻かれていて、右腕にはギブスで肩から吊るされている。
それでも左手は少し動かせるらしく、指を少しだけ動かした。

「今まで色々な出来事に俺や太極の書が関わっている…なら、もし俺がいなければ…」
「自分がいなければ、世界はもっと平和だった…とでも思っているの？」
「そんな事、はやてや姉ちゃんの前で言ってみろ、ぶっとばすぞ」
「シャマル、ヴィータ…」

シャマルやヴィータが少し怒った顔をしながらやってきた。
プレシアも2人の言葉に頷く。
プロジェクトAからプロジェクトFや戦闘機人が完成し、太極の書と共に戦う為に夜天の書が生まれた。
プレシアやフェイト、はやて達をつないでいるのは確かにクロスの存在ではある。
もし、クロスがいなければ…フェイトは生まれず、夜天の書そのものが存在しなかったかもしれない。
そう思う事はクロスには何度もあった。

「クロス、私もフェイトもあなたのおかげで救われたのよ。それを、忘れないで」
「知恭さんのいた世界で私達がどうして生まれるのか、多少興味はあるけど…」
「別に知りたいとは思わねえな、姉ちゃんや……クロスのいない世界なんてよ」

そう言ってヴィータは照れくさいのか顔を背けたが、赤く染まった頬が尚更目立っていた。

「だ、大体お前は自分を過小評価しすぎなんだっつうの！」

「ははっ、そうだな…ありがとう、ヴィータ」

クロスの言葉に更に顔を赤くするヴィータ。

シャマルはその様子を見て、クスクス笑い、プレシアは物陰に目を向け

「そう言うわけよ、鋼知恭」

「クロスや姉ちゃん達がいない世界の事は話してもらなわなくて、結構だ」

「はいはい、わかりましたっと…てか隠れていたの気付いてたのか」

深く溜息をつきながらも、どこか嬉しそうな知恭がゆっくりと出てきた。

覗き見するつもりはなかったが、どうにも出るタイミングを逃してしまった。

「俺としては別に話しても話さなくても…どっちでもよかったんだけどな」

「……」

知恭はそこで視線をクロスに向け、クロスもまた知恭を見ている。

２人の視線には何も感情はない、ただ見つめ合っているだけ。

プレシアやヴィータ達もただ黙って見守っているだけ、何とも言えない空気が流れる。

そこへ…

「クロス、プレシアさん。アースラの配置が完了しました…ってどうしたの？」

と知らせにきたユーノは、クロスと知恭に流れる珍妙な空気に目を白黒させる。

「お、ユーノ。いや、なんでもないよ」

「ちょうどいいタイミングね♪」

「？？」

クロスとシャマルの言葉の意味はユーノには分からなかったが、深くは聞かない事にした。

「クロス、安心しろ。お前の小さい相棒はしっかり護ってやるよ…」

「知恭さん…」

「それなりの代価はしっかりもらったからな」

まるで玩具をもらった子供のような笑みを浮かべる知恭に、そう言えばとユーノは辺りを見渡し

「あれ、シグナムはどこに？　ここ来てから見てないけど」

「そう言えば、そうね」

プレシアもシグナムがいない事に気付いた。

クロスやヴィータ達は苦笑いを浮かべるだけで、何も言えなかった。

ただ、知恭だけはニヤニヤと意味深な笑顔を受けべている。

「シグナムは、そっとしておいてあげて…今回シグナムは待機だし、作戦に支障はないわ」

「アイゼンと違ってレヴァンティンはちゃんとした修理が必要なほ

ど損傷受けているからな。
今回はクロスと一緒に留守番だし」
「？　ひょっとして、それで拗ねてる…の？」

シグナムは今回自分には何も出来ないと凹んでいる。と勘違いしたユーノ。
そんな理由で…と思った一同だが、今回に限ってはそっちの方が良かったかもしれない。
そして、シグナムを凹ませた元凶は、笑いを堪えねがらも

「いやいや、すまんすまん、まさかあそこまで凹むなんて思わなかった」
「…ホント、シグナムに何をしたんだよ？」

ジト目で睨むヴィータに知恭は懐に手を伸ばし、何かを取り出そうとしていた。

「約束通り指一本触ってないんだけど…あ、良ければ見るか？」
「何を？？」

が、その時…

「や～～め～～～ろぉ～～～！！！」
「シグナム！？」

ついさっきまで凹んでいた人間とは思えない形相をしたシグナムが、まるで大切な宝物を
奪われるのを阻止するかのように飛んできて、目にも止まらなぬ速さで知恭の胸倉をつかんだ。
その動き、クロスや知恭ですら全く反応出来ないほどだった。

「知恭～！！　貴様、約束を破るつもりか！！！」
「わ、わわわかってる、冗談だ、じょーだん」

シグナムの剣幕に知恭は冷や汗を流しながら、首を縦に振るしかなかった。
そして、ユーノとプレシアはあまりのシグナムの豹変にポカーンとしている。

「シ、シグナム…一体何があったの？」
「というか、本当にあなたシグナム、なの？」
「……はっ！？　プレシアにユーノ、来ていたのか……すまない、取り乱してしまった」

顔を赤くしながらも知恭から手を離したシグナムは何事もなかったかのように咳払いした。
そんなシグナムにプレシアとユーノは…

（（忘れよう…））

と、今までの数分間を見なかった事にしよう……としたが

「ふーん、そこまでしてクロスに知られたくないんだ、へぇ～？」
「っ～～！？　き、貴様～！！」

やっぱり無理でした。

「マスター、みんな～？　最終確認しますから…って、どうしたんですか？」

ノアがクロス達を呼びに来たが、そこには真っ白になって　ｏｒｚ
　になっているシグナムと
シグナムを慰める、ユーノやシャマル。腹を抱えて笑っている知恭。
必死になってさっきの光景を忘れようとしているクロス、プレシア、
ヴィータの姿があった。

「……なんですか、これ…」

・
・
・

そして、ついに作戦決行時間となった。

「予定時刻通りにミューラが活動を始めました！　地表へ向け移動
中！」
「各員配備完了しています！」
「よろしい、では…知恭くん、ノアくん、プレシアくん、トールく
ん、クロノくん頼んだぞ」
「「「「了解！」」」」

既に付近住民の避難は完了しており、またミューラ出現予想ポイン
トは広い高原の為
森や木々を不用意に傷付ける事もない。故に…これまでにない大々
的な魔法作戦が行える。
クロスは未だ戦闘を行えるほどに回復していないので、今回は基地
で待機となった。
シグナムはデバイスが使用不能な為に待機。
ヴィータもアイゼンの自己修復が間に合わなかった為に同様の待機。
その他ザフィーラ達も今回の作戦上、巻き添えを避ける為に基地に
留まっている。
今現場に出動しているのは、知恭、ノア、プレシア、クロノ、トー

ルの計5名。
ちなみに、知恭は作戦開始からこの世界にきた当初の姿になっている。
この姿の名前は【ブルーレッド】と言うらしい。
そして、雄のミューラの鉱物を破壊した肩にキャノンを装備した姿は【バスターブルーレッド】だ。

「天候操作（ウェザーコントロール）…積乱雲、大豪雨！」

まずはトールの儀式魔法によって、巨大な積乱雲が発生し辺り一面が暗くなる。
そして、雷を伴った大雨が降り注いだ。
トールは攻撃魔法そこまでではないが、ある希少なレアスキルがあった。
天候操作、文字通り天候を操る魔法。ただの風や雷なら扱える魔導師は大勢いるが
天候操作で巻き起こされる風や雷は魔法ではなく、自然エネルギーで起こされた事象になる。
魔法で起こした雷と自然エネルギーで起こした雷は性質が異なる。
ただの防御魔法では防ぎにくくなり、威力や発射速度も段違いになる。
なぜこのような事をするのかと言えば、ミューラにある弱点がある事が分かったのだ。

―ミューラでは魔法は反射出来ても、自然に巻き起こった雷や竜巻には弱い―

これは、ユーノが発見した古文書に書かれていた一文。
それによると、古代この地に出没したミューラは突如巻き起こった自然の竜巻で身を覆う鉱物に

ヒビが入り、雷によって破壊されたらしい。
魔法で起こした雷や炎ならばクロスやシグナムが試したが、全く効果はなかった。
しかし、自然に起こった雷ならばミューラには有効とは夢にも思っていなかった。
トールも最初遭遇した時に天候操作は行おうとしたが、仲間がやられていく中で救助を優先した為に使ってはいなかったのだ。

「ミューラ、地上に出ます！」
「しゃぁ～～！！」

蛇のような叫び声を上げ、先ほどとは比べ物にならないほど巨大なミューラが出現した。
その姿は、遠く離れた基地からでもはっきりと確認出来るほどで、モニターにも映り切れない。

「…ぁ……」
「お、大きい…」
「大きさだけならイリス以上かも…な」

あまりの巨体にモニターを眺める局員達はあ然とし、クロス達も驚いている。

そして、その姿は衛星軌道上のアースラのモニターでも映し出されていた。

「こ、これほどなんて…」
「こんなものが爆発したら、被害は計り知れないわね」

アースラ内のエイミィやリンディも、改めて自体の深刻さを認識した。

「うろたえるな！　これほどの巨体だと言う事は分かっていただろう！」

基地司令である、ワイス・ドートンの怒声によって正気を取り戻したオペレーターが指示をだす。

「っ！？　はい、テスタロッサ博士、トールさん！」

現場上空で雨の中シールドを張って、ミューラを見降ろしていたトールとプレシアが頷き合う。

「行くわよ、ケラウノス！」
＜サンダーレイジＯＬＧ＞
「天候操作・大界雷！」

―バリバリリッ

トールが作りだした巨大な積乱雲全体が青白く光ったかと思えば、雲がそのまま落ちてきたかのような
今だ振り続ける大雨を飲みこむ巨大な雷がミューラに向けて放たれた。
大地を揺るがす程の大落雷、予めミューラの出現地域を囲う様に周囲には何重にも渡って
結界が張られたが、それすら破るかのような衝撃が走った。
一見、魔法で発生させた雷に見えるが、２人が放った魔法は自然の雷を落とすと言う物。
積乱雲が上空にある事が発動条件、それはトールのおかげでこれ以

上ない好条件がそろった。

この攻撃がミューラに効くかどうか、爆撃のような音に耳を塞ぎながらも全員がモニターを注視している。

「ミュ…ミャー……」

「効いてる、効いてます！　２人の攻撃が反射されずに通りました！」

「おおおぉぉ～～！！」

初めて攻撃が通じた。知恭以外でミューラにダメージを与えるどころか攻撃が通る事すらなかったが
これで、ミューラに対して有効な攻撃手段が見つかった。

「しかし…これほどの雷でもまだ動くとは」

ミューラは体中から煙を噴き上げ、雷撃傷が鉱物についてはいるが、ヒビが入っているわけではなく
まだ息もしていて、気絶しているようだった。

「ですが、動きは完全に止まっています…ノア曹長、クロノ執務官、続けてお願いします！」

『了解です。マスター、はやてちゃん、リイン…魔力もらいますよ』

「あぁ、どんどんもってけ！」

「私らの分まで、お願いやノアちゃん！」

「お姉様、私達の魔力受け取って下さい！」

「知恭！　姉ちゃんに怪我させたら承知しないからな！」

『任せろ』

クロスやはやては現場に出れない代わりに、基地からノアに向けて

自分の全魔力を送りこんだ。
クロス、ノア、はやて、リインはそれぞれのアルハザードの書を通じて、魔力を共有する事が出来る。
これは夜天の書が加わった事で可能になった技能で、４人が同じ部隊に配属された理由の１つだ。
今、ノアはクロス達３人分の魔力供給を受けて、外見は戦闘用の大きい姿になっている。
姿は年相応の大きさしかないが、髪や瞳はソウルチェンジユニゾンの時のように蒼くなり
ソウルチェンジユニゾン並の仙気を発揮している。

「フロスト…アロー、クラッカー…ノヴァ！」
「ホワイトエリア！」

ノアは氷の矢、追尾弾、砲撃を次々とミューラの足元や顔の周囲に向けて発射させた。
クロノはミューラの周囲に向けて凍結魔法を放つ。
ミューラに直接当てては反射される、だけど、豪雨によって冷やされた空気や地面ならば…

読みはずばりと当たった。
地面は足ごと凍りつき、身体の周辺の空気は凍りつき、徐々にミューラの体は氷に覆われて行った。

「トドメだ、ダウンバースト！」

トールが高く掲げた両腕を勢いよく振り降ろすと、巨大積乱雲は竜巻のように渦巻き
そのままミューラを包みこむように落下した。
猛烈な冷気を纏った烈風が吹き荒れ、上空にいるノア達も激しく揺

さぶられそうになったが
知恭がバリアを張ってくれたおかげで、それほど衝撃を受けなかった。

「あ、ありがとうございます」
「すまない、助かったよ」
「すごい力の持ち主ね、あなたは」

知恭はノア達から礼に軽く首を振ったが、すぐにミューラのいた場所を見降ろした。

「クロスと約束したからな、護ると…」

知恭の視線の先には、巨大な氷山のようなものが出来あがりミューラは完全に閉じ込められてしまった。

『ミューラの生命反応低下、ですが…まだ健在です！』

基地内はミューラの様子を見て、一瞬歓喜に包まれたが、アステルからの通信で、緊張が走る。

「これほどまでしてもまだ仕留め切れないか…」

ワイスは顔をしかめた、これで仕留め切れるかもしれないと言う僅かな期待があったからだ。
しかし、仕留め切れないと言うのがワイスの計算なので、これは計画内の事。

『ですが、軽い冬眠状態に入っているです。エネルギーコアも停止しています』

エネルギーコアの停止、卵へのエネルギー供給は完全に止まってしまったと言う事。
それは、今ならば体内に侵入し、コアを切り離す事が可能になった。

「ユーノくん、シャマルくん。急いでコアの正確な座標を算出してくれ」
「はい！」
「分かりました！」

基地のセンサーと各々の探査魔法で、ミューラ体内にあるコアの正確な位置を割り出そうとする2人。
【沈黙の智将】と言われるワイス司令。
初老な彼が今までの数多の経験と知識を元に作り上げた、数々の作戦の精度は
管理局内でも優秀と評判だった。
彼が沈黙する時は、情報を分析している時、だが一たびその口が開かれた時、全ての計算が完了し
完璧な作戦が練り上がっていると言われるのが、沈黙の智将の所以だ。
だから、プレシア達の報告会の時も、ただ黙って情報を整理していたのだ。

そんな彼の計画は以下の通りだ。

まず、天候操作で巨大な積乱雲を作り出す。
そして、大雨を降らせ、ミューラ周辺の空気と地面を冷やす。
さらに積乱雲を利用した自然の落雷でミューラの動きを止め、凍結魔法で完全に動きを封じる。
その後、体内のエネルギーコアの位置を確認し、空間転移で直接体

内に侵入し
コアを切り離し、宇宙でアースラのアルカンシェルで爆発エネルギーごと空間消滅させる。
これが計画の全てだ。

この作戦はトールの天候を操る技能、プレシアの技能による自然エネルギーによる落雷。
ノアの仙気による高出力凍結魔法、クロノの空間凍結魔法。
そして、ユーノとシャマルによるエネルギーコアの正確な探知…など様々な技能によって
初めて成功させる事が出来る。

「…管理局にも優秀な司令官と言うのはいるものだな」
「ん、何か言いましたか？」
「いや、ただの独り言だ…それより、突入準備、いいか？」
「あっ、そうでした…はい、これで大丈夫です」

ノアは先程までの姿ではなく、普段の小さい姿に戻っている。
この姿で知恭と同伴し、ミューラ体内に転移する事になっている。

『エネルギーコアの位置確認！』
『姉さん、今から座標データ送ります…2人共、気を付けて』
＜座標データ受領確認、ギアの調整完了。跳べます、マスター！＞
「ありがとう、シャマル。行ってくるね…ギア！」

ミラノールに送られた座標データを元に、ノアと知恭はミューラの体内へと侵入した。

ミューラ体内

そこは、生物の体内とは思えない広大な空間が広がっていた。
まるでガラスばりの神殿みたく白く輝く肉の壁。
ノアと知恭は一瞬場所を間違えたかと思ったが、すぐ目の前に赤く輝く巨大な物体が見えた。

「あれが、エネルギーコア…」
「すごい圧力だ…ノア、しっかりしがみついていろよ」
「はい！」

その時、壁の一部が剥がれ落ち、円盤のように回転しながら知恭達へと襲いかかってきた。

「ちっ、氷山に閉じ込められているってのに、体内の異物を感知したか！」
「抗体、ってところでしょうね…」

自分の体内であるにも関わらず、円盤は勢いよく知恭へと向かってくる。
知恭は背中のバーニアを吹かし、空間内を移動しながらなんとかコアへたどり着こうする。
しかし、まるで円盤は知恭の狙いが分かるかのように、コアへと進むのを阻んでいく。

「面倒だ、一気に吹き飛ばす！」

右手にライフルを出現させ、円盤へと向けたが、ノアがそれを止めた。

「ダメです、コアに当たったらそれだけで大爆発ですよ！」

「そうだったな…だったら、これだ、ブルーレッド2T！」

そう叫ぶと、右手に蒼い刀身に白い刃の巨大な剣を持った姿に変わった。

「タクティカルアームズブレードに…ガーベラストレートの二刀流だ！」

「知恭さん、一体どれくらい変身出来るんですか！？」

「正確には換装だけどな、暇があれば色々…って今はそんな話してる場合じゃない！」

右手の巨大剣、タクティカルアームズブレードと
左手には腰に差していた日本刀、ガーベラストレートを逆手で振っている。

「おらおら、邪魔だどけぇ～！！」

避けるの止め、一直線にエネルギーコアへと突っ切る。
行く手を阻む円盤は両手の剣で一刀両断していく。
あっという間に知恭とノアは、コアに繋がっている管にたどり着いた。

「これだ…一気にいくぜ！」

―ズバババッ

まるで、野菜を切るかのような手軽さでブレードを操り、管を切り裂いていく。
合間に襲いかかる円盤は、ガーベラストレートで斬り、あるいは蹴り飛ばしている。

「これで…ラストォ！」

すれ違いざまに、ブレードが最後の管を切り裂き、管から液体が漏れだす。
コアが地面に落ちる前にすぐに知恭がもちあげた。
すると、円盤の動きが鈍くなり、次々と落下し始めた。
と、同時に体内が立ってはいられないほど、激しく揺れ出した。

「こう言う時は早めに出るのがセオリーだよな…」
「ですね、では…ギア！…あれ？　ギア、ギア！！…転移…出来ない？」

ノアは何度もギアを発動させようとしたが、知恭の周りを薄い光が包みこんだかと思えば
すぐに霧散してしまい、何にも起こらず仕舞いだ。

「これは…ＡＭＦみたいなものか、不味いな」
「え、えぇ～！？　そんな仙気での転移を防がれる事なんてめったにないのに…」

ノアが不安な声をあげる。今まで魔力切れ以外でギアの発動が全く出来ない事など滅多になかったからだ。
シャマルやクロスとの通信も出来ない為、外部からの転移も出来ない状態だ。

「しょうがない…ノア、装甲の間に入ってろ」
「？　…一体何を？」
「このままじゃこれ爆発するからな…その前に強引にぶち抜いてやる！」

「えええぇ～～！！？　そんな無茶ですよ、超巨体な上にデッカイ氷山があるんですよ！？」

ノア達は知らなかったが、この時、ミューラが暴れ出したため氷山の至る所に亀裂が走っていた。

「俺に…不可能はない！　流星爆裂王　！！」

知恭の体が白く輝き、その姿をまたも変化させた。
それまでとは違う輝きにノアは目をつぶりながら、知恭から離れた。
ノアが恐る恐る目を開けると、そこには今まで見た事のない姿をした知恭がいた。
背中に機械の翼を生やし、右手の巨大な砲身が淡く光り、左手にはクローが着いたシールドもある。

「な、なんですかその姿！　今までと全然違いますよ！」
「この姿の名は…流星爆裂王　。時間がない一気にぶち破る…トランザム！」

知恭の叫びに応じるかのように、全身がルビーのように光を放ち、上を向き
右手に装備された銃口を頭上へと向けた。

「いっけえぇ～！！」

知恭よりも一回り太いビームが銃口から放たれ、ミューラの肉体に穴を開けて行く。
まるでそこに何もないかのように突き進んでいく巨大なビーム。
すぐにミューラの肉体を貫き、さらに氷山をも瞬時に溶かし穴を開けて行った。

「ミュ、ミューラ体内に高エネルギー反応！　すごい数値です！」
「何、まさか…間に合わなかったのか！？」

基地では、ノア達との通信を試みていたが、急にミューラが暴れ出し体内で異常な程の数値を秘めたエネルギーが観測された。

「いえ、多分…あれ、知恭さんです」
「そうみたいやね…全く、常識はずれにも程があるわ」

阿鼻叫喚の中、クロスとはやては冷静にミューラの体から真っ直ぐ天に伸びた光の柱を見つめていた。

「リンディ艦長…アルカンシェルの準備は？」
『いつでも撃てます、ワイス司令』

現場に来ているクロノに代わり、アースラへと入っているリンディ。知恭達がミューラに突入したと同時に、アルカンシェルの発射準備に入っていた。
そして、光の柱の中から飛び出て来る、何かを担いだ赤い光の球体。

「ミューラ内から飛び出してくる物体が…これは、まさか知恭さん！？」
「うん、見た事ない姿をしてるけど、知恭さんに間違いない」
「お姉様も一緒です！」

ミューラから飛び出た球体から、投げだされたかのように小さな光が落ちてきた。
クロノが慌てて光を受け止めると、それはノアだった。

「ノア、一体どうしたんだ!?」
「知恭さんが…知恭さんが!!」
「知恭がどうかしたの?」

ノアは涙を流しながら、天に昇っていく赤い球体に向かおうとしている。

「知恭が持っているのは…コア、なんで転移させなかったんだ、ノア?」

クロノの問いに、ノアは俯きながら静かに答えた。

「あのコアの周りでは…一切の魔法が使えなくて、転移出来ないんです」
「「「っ!?」」」

その言葉に、プレシア、クロノ、トールの顔色が青くなった。
同時に、基地内のクロス達にも動揺が走る。

「そんな…コアの周りで魔法が使えないなら…転移出来ない…」
「アルガス魔法ですら無効化するなんて…」
「って、まさか知恭さん!?」

知恭がコアを手放さずにミューラの体を突き破っても、一直線に宇宙へと向かう理由。
その理由に思い当たった時、真っ先に反応したのははやてとシグナム達だ。

「そんな…あかん、知恭さん! すぐに離脱して!!」
「馬鹿野郎! アルカンシェルの射程まで持っていく気か!!」

「すぐに離れろ、鋼知恭！！」
「ダメよ、やめて！」
「鋼知恭！」

転移出来ないのなら、アースラ前にまで自力で運んで行くしかない。
それしかないと思ったからこそ、知恭は体内から脱出すると、何も言わずに
ノアを近くにいたクロノの方へと投げたのだ。

「ダメや…ダメやダメや！！　また…あんときみたいな思いするのは嫌や！」

邪神イリスを倒した時、かつての守護騎士レギナスが自分の体ごとイリスのコアを海鳴市から
大気圏外のアースラまで運び、アルカンシェルでコアもろとも消滅した事があった。
その光景がまざまざと頭に浮かんだはやてと守護騎士達は、どうにか知恭に通信しようとしたが
コアの影響か全く知恭と連絡が取れなかった。
そして、コアを持った知恭は赤い光を一層強くしながら、天高く舞い上がって行った…
クロスはその光に負けない程の紅い目で、じっとただ見つめていた。

大気圏外

「さーって…アースラはどこだ～？　見つけた！」

コアを担いだまま大気圏外まで出た知恭は、そのままアースラの姿を見つけた。

もう時間は数秒もない事は知恭には分かっていた。
通信は使えない、手を話して離脱する時間もない。
バリアで身を護っているとは言え、宇宙空間で叫んでも意味はない、届かない…
それでも、知恭はアースラを睨み、心の底から叫んだ。

「撃て！　リンディ・ハラオウン！！」

叫びが聞こえたはずはなかったが、それでもアースラは答えた。
アルカンシェルの発射という形で。

・
・
・

青い空が白い光で一面に染まった。
アルカンシェルの砲撃は間一髪間に合い、ミューラのコアは爆発直前に消滅した。
ミューラは氷山の中でその光景を見守ると、力なくうなだれ動かなくなった。
やがて、まるで石にでもなったかのように、ミューラの体は灰色になり、氷山の中で粉々に崩れ落ちた。

基地内では、全員が棒立ちしてその光景を見つめていた。
ワイスだけは、帽子を深くかぶり直し

「…ミューラとエネルギーコアの反応を確認だ、目標は完全に沈黙したか？」

普段よりもほんの少し沈んだような声で、まだ茫然とする部下達に指示を出した。
部下より先に、ユーノがすぐにそれに答え、周辺をスキャンし始め

た。

「ミューラの生体反応、なし…大気圏外、生体反応もエネルギー反応もありません」

それは、ミューラの死、コアの完全消滅、そして…鋼知恭の死をも意味していた。

はやて達は涙を浮かべながらも、ぐっと堪え…まだ白く輝く空へ向け敬礼をした。

シグナムは馬鹿者、と小さく呟きながら…

しかし、その場に居るべき1人が消えている事に誰も気づいてはいなかった…

現場にいたプレシア達は基地とは違い、すがすがしい表情を浮かべていた。

「終わったわね…」

「えぇ、流石に疲れましたよ。あそこまでの天候操作は初めてでしたから」

「お疲れ様でした、トールさん…あなたのおかげですよ」

「あなたのおかげで私も思う存分、雷を降らせる事が出来ましたわ」

2人の労いの言葉にトールは頬をかきながら

「いやいや、私1人では雲を浮かべるだけで精一杯でしたよ…あとは彼のおかげです」

「そうね、鋼知恭…不思議な男だったけど、彼がいなければ…」

「最初の個体でクロス達は全滅していたでしょう。全く理解不能な力でしたが」

額に手をあて、もう自分にはお手上げとばかりなクロノにプレシアとトールは声をあげて笑った。
本来、もう1人そこにいたはずだが、今その人物がどこで何をしているかを3人は知っていた。
だからこそ笑っていられた。

犠牲者が1人も出なかった事に。

・
・
・

基地からかなり離れた森の中、そこに横たわる2人の男と1人の小さな女の子。
大きな1人の男は頭に巨大なタンコブを浮かべていたが、それ以外は目立った外傷はない。
比較的小さな男の子は、右手に巻かれたギブスを、包帯が解けかけた左手で痛そうに押さえている。
そして、小さな女の子は大きい男に謝りつつ、男の子に説教をするという、器用な事をしていた。

「ごめんなさいごめんなさい、知恭さん！　慌ててたから集中出来なくて地面に激突しちゃって…
　ってマスター！　聞いてますか!?　私1人だけでもよかったのに、なんで重傷なマスターが
　飛び出していくんですか！　おかげで、知恭さん助けられましたけど!!」

実は知恭がコアごとアースラに向かっていると知ったクロスは、急いでノアの元へ転移し

反対するノアを半ば強引にユニゾンさせて、アルカンシェルの射程範囲に入り
ミューラのコアから手を離した一瞬の隙に知恭の元へと跳び、また地上へと転移すると言う
連続転移を行っていた。しかも、その際左手で力強く知恭を掴んだため
左手の治りかかった骨折が更にひどくなってしまったのだ。

「ノ、ノアもうそこまでにしておいてやれよ…クロスのおかげで助かったんだし」
「知恭さん…でも、知恭さんも知恭さんです！　何も言わずに1人で犠牲になろうだなんて！」
「それしか手はなかったのでしょうけど、無茶しすぎですよ…」
「「クロス（マスター）にそれ言う資格はない！（ありません！）」」
「…はい、ごめんなさい」

知恭とノアの2人に怒られ、しょんぼりとするクロスであった。

「それじゃ、戻りますか」

両手を回復魔法で痛みが引く程度に回復させ、クロス達は基地へと戻る事にした。
知恭の生存は、ノアを連れ出すクロスを間近で見ていたクロノが基地へと報告してある。

「いや、俺はここでお別れだ…基地へ帰るとなんだか怖い目にあいそうだからな」
「あ、あはは…はやてやシグナム、すごく怒ってましたからね」

クロノが基地に報告した直後にはやて達から通信が入り、あまりの怒りの形相に
思わず知恭も汗をダラダラながしながら、逃げ腰になった程だ。

「半分はマスターに怒ってたんですよ？」
「うぐっ…俺もこのまま帰ろうかな…」
「帰ってもフェイトちゃんとなのはちゃんの説教が追加されますよ？…もう手遅れですけど」
「……まぁ、がんばれ、クロス」

ムンクの叫び状態になったクロスを慰めるように知恭は頭を撫でた、同情一色の目をしながら。

「知恭さん、本当にありがとうございました。このご恩は一生忘れません」
「知恭さんのおかげでこの世界の平和が戻りました、まさに英雄ですよ♪」
「英雄だなんて、ガラじゃない。俺は気ままな通りすがりの旅人…それだけだ」

苦笑いを浮かべながらもどこか嬉しそうな知恭。
そんな知恭に笑顔を浮かべ、そして、寂しそうな顔をするクロスとノアの頭を知恭はもう一度撫でて
懐から1枚の封筒を取り出した。

「これは？」
「シグナムに渡してくれ、中見てもいいぞ？」
「…遠慮しときます、シグナムに斬られそうなんで」

悪戯っぽい笑みを浮かべる知恭に、苦笑いで答えるクロス。

そんなクロスに更に小悪魔な笑みを浮かべ

「お前に見られたら、シグナムの奴…目覚めるかもな」
「…何に目覚めるのかは聞かないでおきます」
「ん、お前勘良すぎだろ…それじゃあ、またな2人共」

名残惜しそうに知恭はこの世界に来た姿、ブルーレッドへと変わった。

「ありがとうございました、知恭さん！」
「また遊びに来てくださいね！」
「2人共……運命に、負けるなよ！！」

跳び立ちながら知恭は最後に、敬礼をしながら、この世界から消えた。
最後に意味深な言葉を残しながら…

「運命に…か」
「負けませんよね、私達は」
「あぁ、俺にノア、なのはにフェイト、はやてにシグナム達…そして、母さんやゼストさん達もいるんだ
そう簡単には運命だろうと負けはしないさ！」

そう言って基地へと飛びだったクロスとノアの顔には、不安など1つもなく
天に輝く太陽のように、眩しい笑顔を浮かべていた。

おまけ

「シグナム、これ知恭さんから預かってたよ」
「私に？　嫌な予感しかしないが、一応受け取っておこう」

封筒を受け取り、中を見たシグナム、が…石のように固まった。
クロスとノアは見ないように後ろを向き、はやて達もそれにならった。

「どうしたんですか、シグナム？　…わっ！？」

そこへ、リインがシグナムの背後から近付き、封筒の中身を覗き、同じく固まった。

「リ、リイイン！？　まさか…見たのか！？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ゴメンナサイ」
「リインフォース、謝る時は人の顔をみて謝るものだぞ？…あっ！！」

リインへと極上の天使のような悪魔の笑顔を浮かべ、詰め寄るシグナムだったが
懐へしまおうとした封筒をうっかり落としてしまい、運悪く中身が飛び出して
後ろを向いていたクロスとノアの間に滑り込むように落ちてしまい…

「…ん？…えっ！？」
「シグ…ナ、ム？」

ちょうど2人の視線に止まり、同時にはやて達も注目した結果…

シグナムのコスプレ写真。
もっと具体的に言えばラ○ア・ラヴレスのコスチュームとカツラを被り
顔を林檎のように赤くしながら、胸元を見せるようなポーズを撮った写真。
…だけではなく

『俺的に一番似合っていたコスプレ写真を贈る。今のクロスにはまだ早いだろうけど
いずれ、こういう恰好をクロスにも見せるように！ｄ（@＾∇＾。）／ファイトッ♪
必要なら他のも贈るぞ☆（ゝω・）ｖキャピ
ｂｙ　鋼知恭』

と書かれたカードも一緒に、クロス達の眼にばっちりと映ってしまった。
瞬間、邪神イリスも真っ青になりそうな程の凄まじいプレッシャーがクロス達に襲いかかった。

「（う、後ろを向くのが怖い…）」
「（は、はやてちゃん、お願いします！）」
「（なななんで私なんや！　ここは大人なシャマルで！！）」
「（いやいや、こういうのは頼りになるザフィーラが……っていない！？）」
「（……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい）」
「（ヴィ、ヴィータ！？）」

「なぁ、ヴィータ」

それは長年共に生きてきたヴィータ達でさえ、聞いた事がないようなシグナムの声だった。

「ご、ごごごごめん、シグナム…」

「何、謝る事はない…ただ1つ頼みを聞いて欲しい、いや、聞け」

「は、はい!?　なななんでしょうか!?」

今のシグナムには逆らったら即死ぬ。

本能でそう感じたヴィータは今までの主にすらした事なほどの、かしこまりようだ。

誰も後ろにいるはずのシグナムの方を向く事さえ出来なかった。

「アイゼンを貸してくれないか、出来ればツェアシュテールングスフォルムで頼む…」

「ア、アイゼンにそんなフォルムはないぜ…いえ、ありません!!!」

「心配するな、命は取らない…ただ、みんなの記憶を1日分ほど消すだけだ」

「いやいや、シグナム!?　どうせならギガントの方がまだ、だってアレドリルだよ!?　死ぬよ!?」

「何を言ってるんですか、マスター!　ギガントでもダメですよ!　ここはピコピコハンマーで!」

「ノアちゃんこそ何言ってるんや、やっぱりハリセンフォルムが一番やろ!」

「姉さんもはやてちゃんも落ち着いて、そんなフォルムはアイゼンにはないわよ!」

ある意味でイリス以上の恐怖を味わっているせいか、全員大混乱を起こしている。

幸いなのは、ここには他の局員達がいないと言う事だろうか。

「…みんな」
「「「「「は、はい、ごめんなさい！！」」」」」
さっきまでと違い、暗く、沈んだ声のシグナムに。
マッハを超える勢いでふり返ったクロス達、きっとシグナムは怒りの形相だと想像していたが
そこで目にしたのは…
「……」
羞恥心やらで顔を真っ赤にして、蒸気まで吹きあがっている涙目のシグナムと
どこからか持ってきたのか、簀巻きにされ口から魂が抜けかかっているリインフォースの姿。
「……こんなシグナムも可愛くてええかもなぁ」
「同意」
「流石は私の妹ですねぇ」
「はやてちゃんもクロスくんも姉さんも現実逃避しないで！　ヴィータちゃんは気絶しないで！！
　って私がオチなんですかーー！？」
珍しく最後にシャマルが目立った。
そして、このコスプレ写真に関しては黒歴史として、満場一致で記憶の封印が決定された。
続く

第９４話　「とあるチートと黒歴史　後編」（後書き）

クロス
「なんとか完成か…無駄に長い」

ノア
「何回も書き直してようやくこれですからね…犠牲になったシグナム、南無三…」

クロス
「カガヤは？」

ノア
「なの…白い魔王様に追いかけられてますよ？」

クロス
「わざわざ言い直さなくてもいい！（汗）」

シグナム
「カ～ガ～ヤ～はどこだぁ～！！」

ノア
「わっ、シグナム！？…前回以上にすごい顔…」

クロス
「え、えっと…カガヤならあっちに…」

カガヤ
「ぎゃあああ～！桜色の砲撃がぁ！！」

（＊（・∀・＃）＊（
「待て～、なの！」

シグナム
「カガヤ～～～！！貴様ぶった斬ってやる！！」

カガヤ
「オチ武者までやってキター！？；；（ロ｜）！！」

クロス
「何やってるんだ（汗）」

ノア
「…ほおっておきましょう、次回はなのはちゃんの話なのに（汗）」

クロス
「では、ＨＡＧＡＮＥ　ＴＯＭＯＨＩＳＡ先生、コラボありがとうございました！」

ノア
「次回もお楽しみに～！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5822k/

リリカルなのは異伝～Ｘ　ＤＥＳＴＩＮＹ～第?部 輝光戦記

2011年10月11日08時56分発行